THE CENTRAL REVIEW

中央公論

2-1924

二月號

第三十九年　第二號　第四百三十一號

大正十三年二月一日發行（每月一回一日發行）


春装に
純品質主義
鷹印中折帽子
新帝都の輝き
新人の頭上に
流行の精
品質の實
東京
大阪
株式會社
高橋製帽所

▲說苑



抱甕　　小川芋錢筆

大正十三年

中央公論

二月一日發行

二月號

第卅九年第二號

第四百三十一號

清浦内閣を迎へて

大變な難産の揚句、とに角清浦内閣は出來た。世間はひとしく之を許して時代錯誤といふ。清浦子に嫌らず殊に其の閣僚の顔觸れにがつかりする點に於て、吾人は決して人後に落ちないが、之を時代錯誤と視るには必しも贊成しない。時代錯誤的なるは獨り清浦内閣に限らない。政界一般の狀態皆然らざるなしではないか。清浦内閣は寧ろ時代錯誤的な時の産んだ當然の嫡出子と謂ふべきものである。

清浦内閣は特權階級内閣だといふ。國民の意向を毫も代表しないから之を排斥すべきだと力む。併し今日の政界の何處に、國民の意向を正しく代表する政團があるか。有田晉松が忠君愛國家の代表でない様に、今日の政黨を其の名に拘泥して國民の代表と思つたら大變な間違だ。國民の本當の代表でない點に於て、研究會と政友會とは五十歩百歩の差に過ぎぬ。本來なら貴族院の團體だつて國民の代表でなくてはならぬ。國民代表の名を僭稱する者まで國民の意向に無頓着で居れる處に時代錯誤の特徴がある。特に清浦内閣のみを責めるのは公平でない。

眞に國民の意向を代表する政團がない限り、所謂憲政常道論の文字通りに適用し難いのは、本誌の屢主張した所である。故に吾人は政黨内閣でよし、超然内閣でよし、今日の時勢に在ては形貌に依て輕々別を立て難しとする立場を取る。要は只其の顔觸れの如何に在るのみだ。詳しく云へば、首相始め閣僚の人格力倆誠意經綸に由て期待の大小を決せんとするのだ。此點に於て吾人は前の山本内閣には相當の敬意を拂つたのである。が、今度の内閣に至つては、如何にひいき目に見ても失望の念を禁ずることが出來ぬ。思ひ切つての御粗末な内閣だ。特權階級内閣たる點に寛大であつた吾人も、此點に於ては極度に峻嚴なる批評家とならぬわけには往かぬ様な氣がする。

そこで吾人は一轉して、所謂國事多難の今日何故あんなお粗末な連中が臆面なくも廟閣に列することを許さるゝの[illegible]を考へて見る。之は要するに研究會に屬し或は少くとも之と何等かの連絡を有するからではないか。乃ち觀る、此度大臣の任命をうけた連中は、其の獨自の力倆に因るよりも寧ろ貴族院に於ける有力なる政團を

背景とするものなるぞ。人の力ではない、集團の力だ。詳しくいへば金や名譽やで縛り固めた集團の力なのだ。斯う考へると、研究會内閣の出來たのは政友會内閣と全然異曲同巧の往き方を辿つたと謂つて可い。

政友會にしても研究會にしても、利權や虚名やを餌にして多數を集め、其多數を擁して傲然政界の一方に蟠居する點に變りはない。かくして彼等が自ら政界を勝手に切り盛りするの實權を握るに至るは怪むに足らないが、獨り怪訝に堪へざるは之を默認して平氣で居る國民の態度である。國民が其の利害と相容れぬ連中に國政の料理を託さねばならぬといふ點に、吾人はもつと〳〵鋭い批評を加ふる必要を認めるものである。

尤も政友會にしろ研究會にしろ、夫れ〳〵の議院を獨力で左右し、其意に反しては何事も出來ぬといふまでに政界に於ける議會の勢力を强めた點だけに就ては、吾人と雖も之を我國政界の一進步と承認するに吝でない。人は曰ふ、政界に於ける最終的中心勢力は國民に在らねばならぬと。併し所謂國民的勢力は制度上議會を通してゞなければ發動せない。それには議會そのものが形式上政界に於て優勝の地位を占めて居なければならない然るに從來は閥族多年の勢力が强くして、議會は動もすれば之に押され勝であつた。貴族院が閥族の傀儡たりしは久しい話だが、衆議院とて今日全く其の影響より自由であるかどうかは判らない。併し兎も角、昨今上下兩院、勢力を全く無視しては政界に何事も爲し得ずといふまでに漕ぎ付けたのは、確に一進步たるを失はぬと思ふのである。

斯く觀れば之れから先きはもう一步の奮發だとも云へる。そは議會は今や政治勢力の形式的關係に於て已に優勝の地步を占め得たから、之からは議會と國民との内面的關係を正しくし充實する段取りに進むべきだからである。議會の優勢は實は一つには制度のお蔭でもある。而して現代立憲制度が議會に特別の重點を置きしは畢竟之が國民の代表たるの内容を有すと期待したからではないか。我國の議會は不幸にして未だ國民代表たるの實を具へて居ない。之れが整はぬ限り、今日の議會の優勢は、其の器に非る者が過分の權力を振り廻すの僭越を冒すものにして、現に我々は十二分に之に基く幾多の禍に苦んで來たではないか。

吾人は清浦内閣を是非する前、先づ現代政界の異常の變態に讀者の注意を乞ひたい。清浦内閣はお粗末を極むと雖も尙忍び得る。忍び難きは國民と利害相容れざる斗筲の政客が日に日に不當の勢力を加ふることゝであるからである。

中央公論



第卅九年第二號
二月號
第四百三十一號

社會進步の純粹原則

杉森孝次郎

一、社會進步の定義

社會進步の定義は二たつの豫備知識を持つ人によつてはきわめて容易に構成される。その豫備知識の一とつは社會はなにかといふ問ひに對する明確な、完全な答へであり、それのもう一とつは進步とはなにかといふ問ひに對する同じく明確な、完全な答へだ。

けれども、この二たつの答へをば、ここでは、讀者もわたくしもすでに持ち合はせてゐると假定して、ただちにこの二たつの答への結合した一體としての社會進步そのものの原則の思索と考究と主張とにわたくしは着手する。この一文の或る部分が、わたくしがここに於いてするよりも一層適當にその二たつの答へを開陳する機會として自然に到來するならば、わたくしの滿足はさらに深いだらう。わたくしが、その二たつの答へをここで開陳しない唯だ一とつの理由は方法上の必要だ。

二、社會進步の内容的二特徵

社會進步には、それの内容的二特徵と見るべきものがある。その一は社會改良だ。英語でいふソーシャル、リフォームだ。他の一は社會進步の全内容からいはゆる社會改良を除き去つた殘りのすべてだ。すなはち、社會進步は、社會改良としての社會進步と、社會改良以外の社會進步としての社會進步との二要素から成り立つ。勿論この二要素は劃然たる二要素として存在するものでは決してない。原則に於いては兩者の間に根柢的共通がある。ただ或る程度に於ける派生別、現象別、特徵別としての殊差が、全一の社會進步のかたちと質にわれらが注意するとき、有意義に識別される。

道德的社會不正が支配的意識として存在し、作用してゐる場合の、または種類の社會進步は、わたくしが、世間の從來の慣用を條件として意識しつつ、この一文に於いて社會改良といふことばに意味させる内容だ。殘餘の社會進步、たとへば藝術に於ける、科學に於ける、哲學に於ける、また技術に於ける、あるひは教育に於ける、單なる理說的道德に於ける、乃至風俗や慣習や、あるひは制度でさへもの比較的に末梢的な、微小的な位置に於ける多少の進步の如きは、たとひそれが道德的社會不正の意識を缺いてゐないとしても、その意識が支配的でない限り、われらは、これを社會進

歩に於ける社會改良以外のものとして扱ふべき理由を持つ。たとへば過去に於いて文藝上のクラシシズムがローマンチシズムに移り、それが自然主義に移り、さらにまたそれが新理想主義に移つたといふ事實があつたが、われらは、その推移の各一をも全體をも社會改良とは適當に呼びえない。哲學にしても、知識本位説が情意本位説に改移したといふ過去の事實があるが、われらはこれを社會改良とは呼ばない。勿論、この文藝及び哲學に於ける歴史的二事件の如きは、たしかに或る社會進步、人生進步、文化進步ではあつたが、そこに道德的社會不正の意識は支配的でなかつたばかりか、ほとんど絶無に近かつたとさへもいへる。けれども、社會改良以外の社會進步は、通則的、概般的にこの性質を帶んでゐる。

勿論、たとへば近代初期のヨーロッパに於ける科學者と哲學者の或るものが、一面から見れば科學や哲學の進步の創始者、催助者であつたと同時に、他面から見ればかれらの科學的または哲學的眞理愛の言語的及び多少行動的發表が、かれらの社會の或ひは政治的、或ひは宗教的制度、慣習、觀念に深烈なる不快と憤怒と嫉妬と苦痛と恐怖とを與へて、その結果としての迫害が、かれら及びかれらの正解者と友援者と同見者に一種の道德的社會不正の意識を反生したといふたぐひの事實は、過去に澤山あつたし、現在にすくなからずあるし、そして將來にも多少の程度別と樣式別と及び性質別を保つて絶えず多少あるにちがひない。

コパーニカス、ブルーノー、ガリレオ、スピノーザの場合の如きは、科學的または科學的及び哲學的形式に於ける純なる眞理愛が、主としては宗教的形式に於ける社會的權威のために迫害されて、かれらの事業と生活そのものが、部分的及び一側面的には道德的社會不正の意識を、したがつてすくなくともその限りに於いては社會改良の意義を派生的に帶び來たつた數例だ。

かくの如くにして、道德的社會不正の意識としての社會改良を最初から最後までほとんど唯一の內容とする性質の社會進歩があると同時に、本質的及び發端的には主としてあるひは專ら社會改良以外の社會進歩、いはば平和的社會進歩であるものが、現象的及び發展的には多少社會改良としての社會進歩を兼ねて帶有する場合は甚だ多い。けれども、かかる場合についてさへも、なほかつわれらは社會改良としての社會進歩とそれ以外の社會進歩とを多少原則的に識別しうる。

コパーニカス流の新天體觀がたま〳〵その社會の教權や政權に不合理的不安を與へ、やがてその新天體觀の保持者の上に加へられた迫害を中心として或る社會不正の意識が觸發され、反起されても、それは文字通りにたま〳〵すなはち偶然であつて、いひかへれば事情的であつて、新天體觀そのものの本質的、內在的興味でもなければ組織でもない。新天體觀そのものゝ本質的、內在的興味及び組織は純乎として純に知的だ。それは知的眞理愛の或る衝動と發表と自己主張とのほかのなにものでもない。もしもコパーニカス、ブルーノーらがもつと聰明な、自由な社會に生まれ合はせ、生きながらへてかれらが事實發表した通りの思想を發表したならば、かれらの思想の學說的、理論的內容はあの通りであつても、迫害といふ社會的事實はありえなかつたにきまつてゐる。

いはゆる社會改良は、前述にすでに多少含意された如くに、主としては行的だ。およそ行には私的と公的との二特徵または二種類が識別されまたは區別される。私的の代はりに個人的といひ、公的の代はりに社會的といつてもいい。私的行の一例はわたくしの散歩だ。あるひは就寢だ。公的行の最も代表的な位置にあるものは制度だ。制度は公的または社會的行爲の最代表形であるのだ。制度を行以外のなにものかであると考へるならば、それは一とつの粗大なる不明と無知だ。

社會改良は、制度としての行を、第一に道徳的改正の意識によつて變へることをそれの代表的一特徴とする。それが行しかも當代の全數的または大多數的社會民が自明的、不問的、不可問的及び不能問的眞理として行證しつつある性質の行に對する或る最深義の否定としての道徳的否定と、それを眞實の理由としての有形的否定、すなはち制度上の多少の改廢を意味するものであるがゆえに、その改廢を直接の目的とする全的努力であるがゆゑに、社會改良は、先づ當代の、勿論その社會のその時代としての當代の、權力的及び民意的形式に於ける保守本能または習性(ヘビット)に對する挑戰を必然的に意味する。社會改良が、時あつてか流血を伴ふ革命のかたちを帶び、または内亂のかたちを帶びることは、社會改良の目的に屬する必然では決してないが、方法または過程にはほとんど必然的、不可避的に屬し來たる不幸なる一性質だ。ここで時あつてかといふたのは、或る事情のもとに於いてはといふことだ。その或る事情は、質的には、その社會改良の意識内容の聰明に於ける或る程度と、それに挑戰される社會部分の意識内容の聰明に於ける或る程度を意味し、量的には、その兩方の間なる數的、一層精確には力的または强度的比較關係に於ける或るかたちを意味する。

制度としての行の改正が、または進化が、社會改良以外の社會進歩に於けるが如き知的、自發的、平和的方法と過程によつてなされることとは社會改良の、及び社會の一本願でなくてはならん。一目的、一理想でなくてはならん。されば、社會改良以外の社會進歩すらも、たとへば科學、哲學、藝術、教育に、それの本質的興味及び組織に於いては全然屬する種類の進歩すらも、行的、强制的、戰鬪的方法と過程によつてでなくてはならないことは、社會進歩の意識及び本能にとつての最深痛苦、絶烈悲哀の一とつであることをまぬかれない。

三、社會改良に於ける煽動思想家の位置

ア、最初の注意

煽動思想家の代はりに知的煽動家というてもいい。知的先導者といひかへればさらに純全だ。しかし、そのあたりの用語別はしばらくこれを不問に附してさしつかへない。

社會改造を可能にし、現實にするために必要な條件と方法と原因はもとより種々だ。けれども、なかんづく最も必要な位置を占むる一とつのものは煽動思想家だ。

イ、一準備知識としての習性論

人性に於ける保守的傾向は、これを人類以外の生物の性質と生活に於けるそれにくらべてこそ支配的でないが、人性分内に於ける保守的傾向のいはば數量的位置は、同じ人性分内に於ける進步的傾向のそれにくらべて、ほとんど支配的に近い優越位を形成してゐる。獸禽魚蟲の類が全然保守主義の奴隸だといふならば、人類は辛うじて保守主義の全然的奴隸たることをえまぬかれてゐるといへるだけだ。

保守的傾向を他面から觀察し且つ言表するならば、それは習性だ。人性に於ける習性の位置は前述の如く實に專制的、全權的に近い强大なものであるが、それがさうあることは、決して無根柢または淺根柢の單なる現象的意義を有する事柄でないばかりでなしに、決して無目的または短目的あるひは反目的たるべき必然性を有する事柄でもない、

人性に於けるいはば習性本能は、それの基礎を深く全實在の一本質的組織に持つてゐる。物理的または化學的世界とその世界の萬有とにすでに習性的傾向がある。名手が扱ひならした樂器、各人が着つけたきもの、やや住みふるした家

の戸、障子のすべりかた、乃至質のしたなる石群の自成的位置及び形態、不斷の流水によつて自然に形成された河床と河壁の在りかた、江の島の巖窟、銚子の濱のいさご、これらはこの通則の數例にすぎない。

人は大自然中の一自然にほかならない。生命そのもの、意識そのものが自然の或る種類、或る形態以外のなにものでもない。普通にいふ自然は自然の全部ではなく一部だ。それは無生命的自然の通り名であつたり、無意識的または微意識的自然の便宜稱であるにすぎない。質的關係から見て、最も完全な自然が人であるだけのことだ。人には、科學質も、物理質も、生物質も、人に特殊の高級心理質と共に一全的組織を形成して存在することがその一證だ。

宇宙に習性が遍在しなかつたならば、萬有の個體的存在は不可能にされるにきまつてゐる。個體保存の一原則は習性だ。萬有としての各個體間には絕えまなき作用の交換がある。もしも一個體に習性が固有されてゐなかつたならば、その個體は、外來作用のまに〳〵自己保存を浸蝕され、變革され、破壞されるばかりだ。一個體の習性が、一個體に内存する習性的傾向または習性力が、すくなくともその個體をして外來作用の絕對的支配を許容せしめない程度に強大でないならば、その個體の自己保存能率はその限度以内だと明確に判斷される。生物界に於いて、環境に對する適應力としての發明力の方が、單なる鬪爭力よりも生殘、永存の條件を形成してゐることは、われらをして、發明力そのものさへもが、習性の聰明なもの、優越なもの、一層完全なものにほかならないといふ一結論にさへも無理なしに到達せしめる。

自然科學の直接的内容を形成するいはゆる自然律または自然の法則は、發明的機能をいまだ持たざる、あるひは缺乏した習性にほかならず、理想生活や目的生活の特徵である規範意識、價値意識、當爲または當在の意識は、われらが、發明的機能を注意の焦點に置き据ゑて、それの全身としての習性を認識し、評價するかたちにほかならない。

習性がそれ自身の本質と組織と關係と傾向と位置と意義とに忠實である代表的方法が、必然的に、發明であるのだ。

この基礎的關係あるがゆゑに、人生に於いては、すなはち個人生活と人間の社會生活とに於いては、習性は、それの一可能として、及び結論的可能としては、深義に於ける倫理的、經濟的、目的主義的、理想主義的意義を帶んでゐる、

個人生活に於ける習性の結論的位置は、それが個人生活にむかつて省勞的奉仕をなすところにある。各人に習性あるがゆゑに、かれはかれの生活力をそれだけ餘計に解放することができる。本質的意義に於いての藝術的活動が、藝術創作的活動が、これこそが、これのみが、人生の最深、最高、最大、最全、眞善美至極の原則であるのだが、各人に於ける習性は、かれをして、この原則の發動にそれだけ餘計に機會を與へる被選擇的可能を有するのだ。自己に習性あるがゆゑに、各人は、たとへば、いかにして箸を持ち扱ふべきか、いかにして歩るくべきか、いかにして着物をきべきかといふやうな比較的に簡單な、及びもつと複雜な、要するに易い及びむつかしい千萬限りもなき種類の行爲を、或る程度以上に繰りかへすにしたがつて、繰りかへしさへすれば、それらのおの／＼の行爲の第一回が、かれの注意したがつて生活力または精力を甚大に必要とした關係はその行爲自身によつて事實的に忘れられて、かれは、その行爲を實現し、完成するためには、その行爲を選擇する最初の注意を要するだけとなり、あとは、歌ガルタの最初の一二音を聽けば全歌が自動的に識現され來たるが如き無努力的動作のかたちに於いて自然實現し、自然完成する。もしも各人に習性がなかつたならば、本質的習性力がなかつたならば、かれは、箸の持ち扱ひかた、歩きかた、着物のきかたが例示するが如き生存のための低級的必要に屬する行爲によつて、實に毎食の一と口ごとに、すくなくとも毎朝、またおの／＼の一歩に、それの第一回努力を繰りかへさざるをえないことになつて、完全にかれの生活力または精力を消費しつくし、使用し果て、とても科學の研究だの、藝術の創作及び鑑賞だの、哲學的思索だの、立法だの、行政だの、産業だの、教育だのいふ高級生存必要を滿足させる時間と機會とを、環境ゆゑにでなく、無力ゆゑに持つことも、見いだすこともできな

くされるだらう。いな實にかれはそれら高級生存必要を現に持つかたちに於いて意識することさへもできないだらう。かれは深く考へるべく、遠く想ふべくあまりに眼前卑近の用事と要務とに忙殺されるだらう。

世の婦女子を見よ、かれらは編み物をしながら自由に友人との歡談もでき、音樂に聴きふけることもできるでないか。或る老俯は流暢に讀經しながら利息と配當を精算し、或る將官は疾驅しながら入閣や組閣の夢想を安全に享樂したり、その實想を確實に構成したりするでないか。かれらに習性あればこそだ。

進歩は有意義の贅澤だ。贅澤は、それが有意義質のものである場合であらうが、單なる遊食ブルのそれである場合であらうが、それをする人に多少の餘剩力なしで出來る藝ではない。各人に於ける習性は、かれをしてそれが負擔するだけの額に相當する餘剩力を他面に於いて自由に持たしめる。各人に於ける習性は、實に、現代の經濟組織に於ける資本の性質を、それの道德的不正形を帶びる必然性なしに、固有し、內具し、帶有してゐる。われらに習性あるがゆゑに、習性を形成する本質力あるがゆゑに、われらは、われらの生活力の創業時に於ける甚大量の支出を、自動的行爲の發達のかたちに於いて次第に甚小量の支出に節減し、その餘剩量を基金化し、資本化し、それの利子と地代と收益によつて、不道德的には遊逸することもできようが、眞正方法としては新たに企業したり、擴業したりすることができる身上となるのだ。

各人に於ける進歩力をかれに於ける習性または保守力以外の或るものだと見るならば、その進歩力の最善友はその保守力でなくてはならん。各人の最も理想的な生きかたは、かれの進歩力をしてかれの保守力と協力せしめるにある。進歩力と協力することによつて保守力は自達し、保守力と協力することによつて進歩力は自全する。各人にとつて有用な、必要な、すなはち有價なすべての行爲を、かれはなるべく早く、なるべく完全に習性の手に移托すべきだ。習性は、そ

れがそれの持ちぬしたる人によつて聰明に、正當に使用され、位置づけられ、機會づけられさへすれば、かれの事業の貴重なる大部分の最も忠實な、信用の置ける、そして行き屆いた保管者だ。代理店だ。出張所だ。各人に於ける習性の發達は、それの眞正なる方角にむかつての發達は人格といふ統一王國に於ける偉大なる自治體の發達だ。或るかたちの集權が意味する幼稚なる統一が、或るかたちの分權が意味する進化した統一に移り變はる全過程及び全光景の一大部分と一大側面とは、必然的に習性の發達だ。

習性と協力しない單なる進歩主義は、分業制を原則的に否定する、あるひは不信用する各人企業主義にも似てゐる。各人は、自分が消費する限りのすべての農作物や、工作品や、醫術や、司法や、行政や、學説や、藝術や、敎育や、運搬や、配達や、火夫職や、水夫職や、消防や、撒水や、公園掃除や、汚穢取りや、思想やをば、ことごとく完全に自分の手一とつ、あたま一とつで生産し、供給すべきだと考へることゝ、各人は、かれにとつて有價なすべての行爲をば、すなはちかれがすべきすべての行爲をば、ことごとく完全に注意と努力と明確なる意識とをもつてすべきだと考へることゝの間には、一枚のさらし木綿の一面と反面との間にあるほどの距離もないが、その兩者の間に見つかる本質的差別ほどの本質的差別も見つからない。その二たつの考へは同樣に愚な考へだ。

人間の社會はある複數の人を、それ自身の基礎的實在としてのかたちに於いて、また究極的目的としてのかたちに於いて、構成單位とする組織にほかならないがゆゑに、すでに論證した通り、各人に於ける習性または保守力が深義の倫理的、經濟的、目的主義的、理想主義的意義を帶んでゐるならば、社會に於ける習性または保守力が、たゞ派生的に同樣質の意義を帶んでゐることは、樹の地上部がそれの地下部と似かよつた味はひとにほひを持つてゐるほどにも不思議でない。社會に於ける習性の結論的位置は、特に考へて見るまでもない系的、演繹的自明さに於いて、その社會にむか

つて一とつの最も有力な、有功な省勞的奉仕をなすところにある。

社會は制度、慣習、組合、無組織的個人際協力の四要素から、もしくは一層精確には實質別的であるよりも特徴別的であるそれら四要素から、成る組織的一全體にほかならないが、そのうちの慣習は、その社會の全員または大多數員に通有の、共通機能として作用しつゝある、習性すなはち保守力をそれの全内容とする。たとへば或る社會に於ける一夫一婦、財產や子供の私有、葬儀、祭式、作法、禮、衣、食、住のきまり等は、乃至實に既成的普通道德や既成的普通宗教の觀念的内容でさへもがそれの過半程度、全部的大部分までは、その社會の習性的特徴、習性的現象、習性的實在にほかならない。クリスト教信者としての父母を持ち、兄姉を持ち、校師を持ち、新聞を持ち、雜誌を持ち、新古滿店の著述を、またその他の社會内容としてのなにもかもを、先在的環境のかたちに於いて、いはゞ生まれながらにして持ち來たる人々の大概が、クリスト教徒として成長するが如くに、マホメット教徒も、佛教徒も、忄教熱育ちの儒教徒も、封建時代の武士道信者も、維新以後の忠君愛國主義者も、大抵は、眞理に對する獨自の思索と判斷とを原因とし、方法としてそれになつてゐるのではなく、社會的習性に同化され、すなはち作用され、はたらきかけられてそれになつてゐるのだ。

自然的氣候が人種や民族や地方族の特殊の性格と氣質を染めだし、織り立てるが如くに、文化的氣候の一大内容としての慣習は、すなはち社會的習性は、その社會民の考へかた、思ひかた、想像しかた、意志しかた、感覺しかた等のおのおのを、かれら自身が意識しえないほど深いかれら自身の中心的生存部にまでも、時計の針の進み動くにも似て、騷がずしかしたがら休まずに說き、なつけ、浸徹することによつて、その慣習がすくく方向、その慣習に固有の方向に、いはゞ船尾からかぢをあやつり、馬上からたづなをとり、車前から綱を曳く各種の手をつくし、方法を採用して決定しうるだ

け決定する。生得の個性のすぐれて强い人でない限り、また生得の個性はかなりにすぐれて强い人でも、あまりに早くあまりに不自由な、制限された環境を持つた人である限り、人はおほむねかれの社會的習性の捕囚となる。かれは、かれのすべての經驗をかれの思索力、判斷力の發動の機會、かれの思索力、判斷力にそとから與へられた問題として扱ふ自由を健全に保有するかも知れん。しかしかれは、かれの社會の習性をば、その習性によつて薫習され、陶冶され、化成されたかれ自身の習性をば、考へて見たり、批判したりする能力と自由をしば〳〵、ほとんど全然的に持ち合はせない、また持ちえない人となる。そしてこれはすこしも不可思議現象ではない。かれの社會的習性が、いつとはなしに、かれ自身も知らぬまに、かれの思索力、判斷力、批評力そのもの、本質的一要素、一成分となつてしまつたのだから、かれが、かれの社會の習性を認識し、評價するときに、その認識、評價の能力そのもの、興味そのものは、實は、かれの社會の習性の一派生的延長としてのかれ自身の組織内の、たゞ數量的意義に於いてのかれ特有の、すなはち質的意義に於いてはかれの隣人と通有のあはれむべき個人的習性以外のものではないことが、それが一とつの可思議現象であることの説明だ。

社會的習性がそんなにしつツこく、ねばりづよく、浸蝕的、滲透的であることは、これまた驚くべき現象でない。それは實に習性の天才である自己保存の必要から生まれる現象であるのだ。

さらにいはんや、人には、殊に普通人には、大量または無限量を知覺しまたは經驗してたゞちに優質または絶對質を想像し、錯覺し、われ知らずそれを創造して禮拜し迷信する知的無能あるに於いてをや。數千年、數百年、いな實に數十年もの時間にわたつてかず知れぬ男女が、そのなかには大政治家や名將や碩學や崇貴なる品性の持ちぬしたる人格者もすくなからず發見されるかたちに於いて、文句なしに信奉し來たつた觀念であり、制度であるとさへ意識しう

れば、その觀念なり、制度なりは、大抵の人によつては、かれに黄明質盲的遺傳症あるがゆゑに、一度も問題されずに信奉される。かれはそれに對質的めくら版を躊躇なしに押す。

社會的習性としての慣習がその社會の人々に對して一見驚くべきほどに我執であり、專橫であるとしても、それは、習性自身の代表的本質たる保守本能と、社會的といふ形容詞が意味する數量的強大が客觀的及び主觀的に權威、不可抗的權威のかたちを帶んでその保守本能に加勢し、結合してはたらくことを知れば、一更に驚くに足らない現象でもあれば事柄でもある。

勿論、社會的權威は、それが特徴的には慣習としてでない性質を帶びる可能もある。單なる尙古主義から識別される單なる崇外主義はそれの一例だ。單なる崇外主義の場合に於いては、單なる尙古主義の場合が時間的距離のかたちに於ける量の大または絶大が、勿論その意識が人の判斷力及び思索力を、すなはち批評力を壓倒し去り、ヒプノタイズし了するといふ意味を多少の程度に於いて有するが如くに、空間的距離のかたちに於けるといふだけの差を保つて、大體の原則と本質に於いては同様の意味が多少の程度に於いてかならず發見される。そのいづれもが理性の作用であるよりも本能の作用だ。

ついでながらに想起したまま言及するが、わが貝原益軒の思想の如きは、殊にかれが婦女子に對して抱持した思想の如きは、慣習ばなれのしない觀念の一例であり、わが福澤諭吉氏の思想の如きは、かれが婦女子に對して抱持した思想に於いても、實に希有な程度に慣習ばなれのした獨立思索、獨立判斷の一例だ。

社會的習性は、しかしながら、それの最深、最全の存在意義に於いては、すなはちそれの當在態、當然的被使用態に於いては、個人的習性が個人にとつて、方法に於いて單純であり、結果に於いて豐富である省勞的一大原則力であるが

如くに、社會にとつて、勞力に於いて少小であり、奏功に於いて多大である省勞的一大原則だ。もしも社會に習性がなかつたならば、文化の成長は、事實それがあつたよりも遙かに、遙かに低微であつたにきまつてゐる。いな、文化などいふ榮稱をあたひするものは、最初から一度も存在をえなかつたにきまつてゐる。文化はそも〳〵始まらなかつたにきまつてゐる。社會は複數個人の集成にほかならないがゆえに、習性なき個人が、かれが文化的活動に從事するために必要な時間と、その時間の內容としての精力使用を、かれに習性なきがゆえに不可能にされるならば、そのやうな個人がいかなる多數に於いて合働しようとも、質的成長はかれらから到底期待されない。しかるに、文化は、それの第一特徵を人類の質的成長として有する。發明、創作、生產、製造、技術、工藝、認識、意志、想像、およそこの種のものが文化の全內容を構成する。そして、これらのものは、最も代表的に質の世界の事實だ。

社會は複數人の集成だから、それの間口としての空間量に於いても、それの奧行としての時間量に於いても、またしたがつてその空間量及び時間量の內包としての質的所有に於いても、個人とはくらべにならぬほど大きい。社會が大であるほど、その大きい程度はいよ〳〵高い。

人類の現在の總數を十五億と見、人類の過去の全年齡を五十萬年と見、その十五億の現在の人口が、それの人種別や、民族別や、部族別が證示するが如くに、多少限られたる人數が、多少限られたる年數の經驗を多少各別的に有するに過ぎないといふ一面の制限的事實の存在はあきらかだが、しかし、五十萬年以前にも人類の過去生の經驗があつたにきまつてゐるし、地上全人類の多少內別的な經驗も、交通の發達につれて、次第に集大成する可能も確實だ。されば、過去及び將來の傾向から判斷して、全人類の全生涯が、形式と本質に於いて、一人の一生涯に類似してゐる。かくして、たとへば個人にとつての昨是今非的經驗の成長は、社會にとつては、天動說時代が地動說時代に進み移る經驗の長足の進

歩にも比すべきか。それはまた、封建制時代が責任自治制としての立憲代議制時代に變はるそれにも比すべきか。

全人類の全生涯を一人の一生涯と原則的に等觀するならば、社會的習性としての慣習が、いかに豐富なる經驗の蓄積であるかは、その蓄積としての智慧であるかは、すなはちそれがいかに賢明なものであるかは、ほぼ推想される。それは無論精確には測知されないが、普通の想像にはあまるほどの甚大なものであることだけは不可疑だ。

世代をかさね、且つ世代をかさねて、生まれては活き、活きては死に、そしてまた新たに生まれては新たに活きして今日に及んだ人類は、いはば今日以前に活きたすべての男女の經驗を完全に所有してゐる。量を質に變化させたかたちに於いて所有してゐる。そして、そのかたちが、そのかたちの一大側面が現存の慣習だ。

人類の經驗には目的がある。傾向がある。純眞と完全と豐富とがそれだ。この目的にむかひ、この傾向にしたがうて過去に活きた無數の男女は、數知れぬばかりの大數の男女は、感覺し、知覺し、判斷し、想像し、思索し、意欲し、實驗し、そして、しば〳〵失敗してしば〳〵失望したが、なほかつ、再起しえざるほどに致命敗して總結論的に絶望することはなかつたほどに、かれらの實驗は成功した。その失敗の原則と方法と結果とを否定命令のかたちに於いて次ぎから次ぎへと時間的、世代的に引きわたし、受けついで、これに新時代の社會の經驗を加算した最後の結果が現存の慣習に於ける否定命令的部分であり、これに反して、その成功の原則と方法と結果とが、肯定命令のかたちに於いて同樣に待遇された最後の結果としての最近の成績が現存の慣習に於ける肯定命令的部分だ。ただ從來の人生觀がいまだ文化主義または本質的藝術主義に對する認識及び評價に比較的に缺乏してゐたがために、現存の慣習に於いては、比較的に「すな」的特徴が目だち、「せよ」的特徴が隱れてゐる。しかし、現存の慣習に於いてすら、「すな」は手段であつて「せよ」が目的にはあやまたずなつてゐる。たとへば「盜むな」は、「餓死せよ」をば意味せず、「稼ぎ働らいて活きよ」を暗

に、しかしながら確實に意味するが如くにだ。

いふところの成功の原則と方法と結果とのうちには、比較的に深く根を張り、したがつて比較的に永くさかえた制度も含まる。一とつの制度が熟し、いはばその社會に於いて慣熟した瞬間に於いて、その制度は慣習の世界に轉籍する。制度新設の際には革命的强制と努力と奮鬪と深烈意識と絕大注意とさへもが必要とされるが、また制度新設の前夜には研究と批判と思索と想像と熱情と意志とが必要とされるが、制度の創業時代がいよ〳〵遠い過去に回顧されるにしたがつて、外來の抵抗や壓迫が觸發する意識的要素は薄減し、つひには絕滅し去つて、往年の例外が現在の通則となる。しかも、その通則の內容が觀念であるよりも感情、感情であるよりも本能となる。それが本能化する過程が、制度が慣習化する過程だ。

かくして慣習には緊張意識が伴なはない。慣習のみに活きる個人と社會とは、退化する必然性があることは、慣習は過去人の努力をば意味するが、現在人の努力をばほとんどすこしも意味しないことによつて完全に說明される。全人的に、全社會的に緊張を省除するために、人と社會とは慣習を所有すべきではなく、反對に、未成の目的と新生の目的とにむかつて出來るだけ十分に緊張しうるための一條件として、無用に、不必要に、無價値的に、可避的に、不經濟的に、すなはち不發明的、不創作的、不生產的に緊張することを、聰明なる慣習を聰明に所有することによつて、人と社會とは省除すべきであるのだ。人及び人の社會は慣習主義者であつてはならん。慣習主義者であるよりも常に早く、常に先きに制度主義者でなくてはならん。徹底的にいへば、慣習主義は無意識主義だ。自然界の法則は、すなはち物理的存在の在りかたと動きかたは、最も忠實なる慣習主義でないか。勿論、主義といふことばの或る正しき適用にしたがふ限り、無意識主義としての慣習主義は成り立ちえない。主義には、意識が一要件として、その場合には理解されてゐるがゆゑ

にだ。

ウ、社會改良に於ける煽動思想家の當在理由

社會改良に於ける廣義煽動思想家の位置は不可拔だ。それを不可拔にする一事情は習性だ。なほ一とつの事情は利己性だ。兩性ともに深くそれの根柢を人性の最深處もしくはそれのまぢかあたりの層に托してゐる。廣い、全い意義に於いての習性と利己性とをば、なに人も曾て超脱しえなかつた。今後に於いてもさうであるにきまつてゐる。たとへばヤソに利己性がなかつたと考へる人があるならば、かれはヤソ盲であると同時に人性盲だ。古來の最も大膽な、最も徹底した革命思想家や革命實行者に習性がなかつたと考へる人があるとするならば、かれもまた革命盲であると同時に人性盲だ。ただ利己性にも習性にも、深、淺、高級文化、低級文化等の諸性質によつて特徵づけられる無限の程度別、やがてまた質別や種類別があることは言をまたない。

社會改良は、一面に於いて、廣義の奴隷の存在を條件または原因とし、他面に於いて、廣義の奴隷所有者の存在を條件または原因とする。敢て廣義のといふ。なぜかといふに、たとへば現代の日本の家庭と、それを取り卷く社會とに於ける婦女子の位置、同じ社會に於ける或る大數の參政權未得者の位置、工場及びそれを取り卷く社會に於ける筋肉勞働者の位置、小作人の位置、世界の或る種類の政治組織に於けるいはゆる國民または臣民の位置、大概の家庭に於ける下女または女中の位置、多くの家庭に於ける、またそれの周圍の社會に於ける幼少年者の位置、無責任な父母を持つた孩兒、小兒、自治未能者の位置、これらはすべて廣義の奴隷に屬する。そして、かれらの對側面に廣義の奴隷所有者があることは縷叙するまでもない

いはゆる廣義の奴隷は、殊にかれが、もしくはかれらが、かれらの社會の習性としての慣習の一部を形成する位置にあるときには、すなはちかれらがかれらの社會の慣習の一部としてかれらが現に在る通りの奴隷であるときには、かれらは、永い、廣い、そして力强いその社會的習性によつて、かれらの生活史に於けるあまりに早い時期から、またかれらの生活史に於けるあまりに常住不斷的な恒在質のかたちに於いて、あまりに深く、余くいためつけられてゐる。かれらは、實に、それによつて、かれらの生得性をいためつけられてしまつてゐる。かれらの批判と思索と意志と想像とは、その社會的習性を、もはや外在的でない、かれら自身に內生する、內存する本質的權威として、原理的支配力として持つかたちに於いて、それによつて操縦され、決定される。かれらは、その社會的習性の目がねをかけてかれらの社會を視、世界を視、かれら自身をも視る。かれら自身の奴隷的位置が、かれらによつて問題とされる可能が、かくして甚だ微弱だ。かられは、かれらの內心深いところに於いて、かれらの本能的深處に於いて、局外者に理解されない、味識されない慰安と滿足とを確實に所有してゐる。人性に通有の榮辱意識も、利害意識も、愛憎意識も、肉體的快苦意識も、美醜意識も、いな實に眞僞意識そのもの、正邪意識そのもの、善悪意識そのものまでもが、かれらにあつては、その奴隷的位置が內包し且つ外占する一個特絕の世界の範圍內に於いて、發動し、作用し、終熄する。

大江丸の「つながるゝ三尺の世やさるまはし」を誦んで、涙のこみ上ぐるを禁じえない人は恐らくあるまい。けれども、猿自身は、主人の命のままに踊り、舞ひ、そして多少の溫情主義や、功利主義にもとづく投資的投餌やをかれから恩施されることによつて、無上の感激や歡喜や幸福を意識しうるやうになつてゐるのかも知れん。いはゆる廣義奴隷の心事はおほむねこの猿の心事と同質のものになつてゐる。

人は、そして多少の程度に於いて生物一般は、習性づけられることもしばしば實に迅速だが、かれらが一つの習性を

忘れて新たなる習性をおぼえるはやさといふかたちに於いて、この現象は通例實現される。その場合に、人または廣く生物をして、かれらの舊習性を健忘せしめ、かれらの新習性を速得せしめるための一必要條件は、或る環境の絶對的變革だ。

廣義奴隷の或るものとして生まれ、育ち、そして活きつづけて來た人々にあつては、いふところの或る環境の絶對的變革は、問題にならぬほど早くから、いはばかれらの生前に於いて、もしもそれがいつか行はれたとするならば、行はれたのであるか、あるひはそれは曾て一度も行はれずに、かれらはかれらの祖先以來、傳統的にその奴隷的位置にあつたのであるか、その二途のうちの一途が事實だから、事實として現はれる機會をえたものであるから、この種の人人が自己を受働的中心、被害者として現に存する社會的不正義に氣づかないことは、自發的に、率先してそれに氣づくことは出來ないことは、多く考へて見ないでも理解される。しかしながら、廣義奴隷の或るものとしてでなく生まれ、また或る年代まで育つた人々でさへもが、かれらの生活史の或る時期に於いて、廣義奴隷の或るものとしての身分、環境、位置、境遇に、いはば運命の手によつて拉し移され、その後、毛剃の海賊團に身抜きならず生活した惣七のやうに、その新環境に生活の選擇を強く、永く條づけられ、限定されれば、本質的聰明が非常に卓越した個性の持ちぬしでない限り、住めば都の心狀をいつとはなしに形成してしまふ。支那や日本に、いまなほ多少ありと聞く、あのさらはれて娼婦の生活を永く強制される最もあはれむべき子女のなかなどにも、かうした心理的徑路をたどつて、次第に悲歎を忘じゆく、或る意味に於いてさらに一層悲しむべき同胞人類が多少はかならずあらうと想察される。

イギリスあたりでも常に見られる現象だが、いはゆる勞働階級の、人生の春をむかへる年ごろの女子らが、たとひ、たとへば戰時中の或る時期に於いてのやうに、ブル式の帽子や服飾を買ふ錢にはかならずしも乏を告げてゐない場合で

も、やはり、かれらの品や柄の選擇は一定の範疇をいでない。美醜意識そのものが、かれらにあつては、すでに久しく平時に於いて、かれらの世界に特有の發達と成長を遂げてしまつてゐるのだ。かれらのほこりは、かれらの朋輩との大同的基礎の上に立つて、朋輩が理解し、鑑賞しうる範圍内に於て、超凡と卓越とを誇示することによつて完全に滿足され、かれらの愛は、同じ階級のわかき男子の本能と想像に全燃的點火を與へることを目的とする。そのわかき男子は、しかるに、かれの階級に特有の美醜意識の持ちぬしだ。

自然氣候の空間的異別に伴ふ異別が、恐らくは一根であつたかも知れない人類の子々孫々を、人種別、民族別のかたちに織りだし、染め拔いた。人にとつて、環境の原始的代表形は自然であり、環境の發達的代表形は社會だ。社會組織だ。制度だ。慣習だ。人の性格と氣質に、あるひは心質と心状に、いかなる感化力を自然氣候が持つかは、驚ろくべく深い、大きなものだとして答へられるが、人間氣候、文化氣候、社會氣候、人爲氣候が、同じそれらに對して有する薫染力、着色力、化成力に至つては、さらに遙かに深大なものだとして結論的には答へられる。いはゆる廣義奴隷の各態者は、かれらに最も直接な、近距離な、親縁な氣候としての人間氣候、社會氣候、文化氣候、そして最も選擇的には慣習氣候、制度氣候、及び交友間氣候によつて、自身の奴隷態を客觀する人格力を、すなはち生活力、精神力を、さらにいひかへるならばそれを客觀的に認識し、評價する能力を、甚だしば〳〵、ほとんど絕望的殘額をだけ殘留する程度に、奪はれ且つ蝕まれてゐる。

人に於ける習性は、それを加護する社會的環境によつて、それを營養食として限りもなく肥大する法則を内具する。他面に於いて、普通程度の個性力の持ちぬしたる人々は、かれらの信仰上、道德上の原則をまでも、ほとんど全然かれらの社會的習性の延長として有するにすぎないがゆゑに、かれらは、たとひかれら自身の內生活の深いところに、反奴

隷質の人生觀や、社會觀や、人生や社會の原則たるべき目的意識や、理想意識を最初のあひだは持つてゐてさへも、それらのものは、かれらが一とたび廣義奴隷の或る位置に生をいとなむ身の上となつてからは、環境的營養を全然缺くがゆゑに、ほそりにほそり、瘠せに瘠せて、衰滅しをはる。それは、あだかも、いかなる痼疾的なタバコずき、酒ずきも、絶對にタバコなき、酒なき環境に久しく生活をつづけさせられれば、さるもの日にうとしの例にもれず、タバコをも、酒をも思はず、想はず、それらなくして結構滿足が出來るやうになるのと似てゐる。

また上說の心理と關聯した一心則として、ヘレン・ケラーの場合がそれの一例として見られる如く、人は本來聰明だから、發明力の持ちぬしだから、自己保存の必要意識に强制されれば、苦中に快を發見し、不自由の環境內に自由の天地を創作する。視、聽機能が破壞されれば、人は、かれの身體及び人格の他の部分に於いて、新たに視、聽機能を、それに代はる作用を、開始する。山陰の浦富海岸の松を見ると、それこそ鳥の巢をも、水蒸氣をも必要にして且つ十分なる貴重營養として自己保存を幸福に主張しつゝゐるかに想像されるほどだ。廣義奴隷者のおの〳〵には、すくなくともそれの多數者には、かれらならでは乞知られぬ光りも、熱も、色彩も、香馨も、音樂も、詩も頗る完全に所有されてゐて、かれらは「好んで平地に波瀾を起こす」やうな氣には先づなれない。

眞僞意識そのもの、善惡意識そのもの、正邪意識そのものまでもが、廣義奴隷者にあつては、それがかれら自身の奴隷態を發見するかたちに於いては、すくなくとも先導的資格あるものではなく、わづかに從動的資格を保留する性質及び分量のものになつてゐることは、社會進步殊に社會改良の可能を問題とする人によつては、くれ〴〵も明察され、完全注意を拂はれべき事がらだ。

わが維新の革命を見よ。封建制を廢棄して民族主義的國家制、四民平等的、立憲的、代議的國家制に躍進すること

は、直接には、百姓、町人の階級にとつて最もありがたい變化であらねばならなかつた。百姓、町人の階級も、從來のいはゆる支配者階級と共に、平等に教育を權利づけられ、平等に徴兵を義務づけられる二事だけでさへもが、その被支配者階級にとつての甚大の福音であつたといはねばならん。それだのに、廢藩置縣的制度改造は、百姓、町人自身から要求しはじめられはしなかつた。山陽とか、象山とか松陰とか、たとへばかういつた部類の人々、學者的志士の人々が、新日本創作の前夜に、いはば神集ひに集ひ、神議りに議つた少數の先覺社會人の代表的位置に立つた。學者、思想家、志士的理想主義者といつたたぐひの人々は、直接には、そして外的には、廢藩置縣なり、廢封建立民權なりの制度的變改によつて、格別になんらの新たにうるところも、失なふところもない環境及び心志の人々だ。その制度的變化によつて先づ救はれるものは百姓、町人であり、先づ葬られるものは武士、大名だ。しかるに、肝腎の百姓、町人は、「下にをれ」にも、土下座にも、切りすて御免にも、慣れ切つてしまつて、慣らされ切つてしまつて、みづから忖度する聰明を、その聰明にもとづく氣力を持ち合はせてゐない。他面に於いて、武士、大名の階級は、第一には、百姓、町人に對して威張り散らすことに慣れ、第二には、既得の特權を失墜したり、放棄したりすることをば、通情としては、無論深刻にいやがる人性に通有の利己性に支配され、すなはち習性に加ふるに利己性といふ二重の人性的要素のしもべとなつて生活してゐるものにほかならないから、率先して、自發的に廢封建制、立民權制などを社會のため、すなはち當時の[illegible]情にしたがつていへば國家のために唱道し、運動し、主張することなどには想ひも寄らない。

フランス革命を見ても、それの第一聲はルーソーその他の社會思想家によつて放たれた。アメリカの奴隷廢止を見ても、それはボストンその他に居住してゐた、そして自身は奴隷でもなければ、奴隷所有者でもない多少の純眞思想[illegible]及び思想業者、知識營業者によつてそれの最初の衝激を與へられた。英國の婦人參政權獲得運動史を見ても、それの最有

力な曉鐘は一男性者たる、そして一純眞思想家、一純眞文明批評家たるミルによつてつかれた。最近のロシヤの革命を見ても、それは純眞なる一詩人的社會思想家たるバクニンや、純眞なる一學者的社會思想家たるマールクスや、純眞なる一學徒的社會實行者たるレーニン等によつて、それの初期及び中期を代表された。レーニンその人でさへもが、曾つて農勞階級の一人ではなかつた。

同樣の通則は、現代の諸國家的社會及び全人類的國際的社會に於けるいく多の社會改良的運動を見ても、依然として通則として設示されてゐる。

廣義奴隷の所有者自身は、前にも簡單にいひ及んだ通り、かれら自身に特有の習性と、かれらにも勿論例外をなさない、むしろしばしば、かれらにあつて、あるひは先天的に、あるひは獲得的に、餘計に、多大に存在する利己性との、複成力に支配され、決定され、必然制され、勢援されて、かれらを直接の一中心として形成されてゐる種類の社會不正を意識する能力に於いては、かれらの對側に立つ廣義奴隷者以上に缺乏してゐる。

廣義奴隷者自身は習性といふ一因を全因とし、廣義奴隷の所有者自身は習性及び利己性といふ二因を全因として、かれら自身が、直接の被害者及び加害者といふ位置に立つてゐる社會不正を先づ意識し、先づそれに挑戰し、反逆し、それを革正する資格を内的に缺いてゐるのだ。

かくの如くにして、通則としては、社會改良は、それの發動、進展の時間順に於いては、純眞思想家を第一とし、追隨的思想家及び職業的、營利的、營名的、習性的、輕信的、妄動的思想家及び思想業者、知識業者、本質的意義に於いてよりも、むしろ現象的意義に於いての文人、演壇人等を第二とし、廣義奴隷者自身を第三とし、そして、廣義奴隷の所有者自身を第四すなはち最後とする。

いふところの純眞思想家に附隨し、阿和し、雷同してたつ群雜思想家をば、純眞思想家の直接の勢力圏と見ることも出來るから、その兩者を一括して一期と看なせば、社會改良の發生及び發達の順序は、第一、思想家、第二、奴隷、第三、奴隷所有者といふ三期別によつて特徴づけられる。

また一面の事實及び可能としては、いふところの群雜思想家が蜂起し、跳飛し、蚊舞し、蛙鳴し、蟬騷するところには、廣義奴隷者自身の內に、自覺がかなりに根をおろし、幹枝やら、葉花やらを自成し始めもする。群雜思想家に對する批判意識、不聽從行動さへもが、そのころには次第にかれらの間に形成されてくる。群雜思想家不用の時期が、その事情の成熟と共に顯著になつてくる。誠意ある、もしくは誠意と聰明とある、要するに責任ある煽動でなければ、廣義奴隷者は、それをそのことばの惡意義に於ける煽動、外來的、干涉的、利用的煽動とのみ解釋し、そのことばの善意義に於ける本質的、分業的、先導的とは解釋しなくなる。

また他面に於いて、廣義奴隷の所有者も、いはゆる群雜思想家が、自覺奴隷者と共に、筆、舌、及び手の動かしかたのかたちに於いて、かれらに壓力と刺戟とを、社會的現象といふ名をあたひするほどの規模に於いて加へ與ふるに及んでは、その壓力、刺戟が增すにしたがつて、多少反省しはじめる。

その反省を動機づけ、原因づける勢力は種々だが、恐怖心、一種の淺い名譽心としての知的、社會的、及び道德的虛榮心、純眞なる正義意識等がその內の代表形だ。勿論、數量的には、恐怖心によつて反省する人が第一であり、虛榮心によつてさうしたかの如く見える人が第二であり、純眞なる正義意識によつてさうする人は第三だ。

日本民族の性格と氣質は、西洋の或る民族のそれにくらべては、比較的に、革命をまたずして敵も降參するやうに出來てゐる。ほめていへば恬淡であり、無執着であり、わかりが早いのであるが、嚴正に批判すれば、その恬淡の裏面に

は生活力の薄弱があり、その無執着の奥には原則意識の缺乏があり、そのわかりが早い現象の實體としては、かれらにあつては、現象意識が全意識となつてゐるといふ最も深い客觀的悲哀がある。なにもかもいい加減にすまし、眼前口頭の解決をもつて事足るとする輕易主義、淺近主義、尙古的または崇外的模倣主義、すなはち要するに無發明主義、非本質的藝術主義が、われらをして革命の不必要と、無實現と、したがつて根本的、また時あつてか明白に常在的である飛躍的進化の索莫として荒寥たる過去及び現在とを、社會組織的にも、個人生活的にも、特徵づけられしめてゐるといふ原則的不安が、われらの現象的不安及び安の一大原因をなしてゐるのだと明確に判斷される。

　われらの歷史に於いては、最大級の不安と不幸とは常に天災として來たり、最大級の安と幸とは常に天祐として來たつたといふ事實は、われらに本質的藝術主義すなはち獨創主義、發明主義、生產主義が缺乏してゐたことの表面的一現象にほかならない。

　純眞思想家は創造の人だ。社會は一創造體だが、宇宙に於ける創造的最大中心は、われらの經驗知の達する範圍內に於いては人間の社會だが、その社會に於いて、創造の最大中心を形成するものは純眞思想家だ。純眞思想家は、眞理愛の本能と衝動と達成力とに於いて、かれの社會に於ける殘餘の人人にすぐれてゐる。かれはかれの社會に於ける眞理愛の最深層であり、根であり、泉であり、中心である。その社會に於けるかれ以外の人人は、眞理愛の興味と方法とをかれから學ぶ。かれらは、かれを眞理愛の源泉池として、それに汲み、それによつてつひに灌漑される田野の如き位置にある。かれは、太陽系に於ける自照體としての太陽の如く、かれの社會に於ける殘部はそれに於ける被照體の如し。その殘部としての各被照體にも、多少の光りと熱が內保されてはゐるが、太陽をまつて、かれらの或るものはあるひは反照し、他の或るものはあるひは生物や精神を生育しうる。

いかなる一人にも、なに人にも、すなはち各人に、純眞思想家は潛生してゐる。ただいはゆる社會に於ける純眞思想家、すなはち社會に於ける純眞思想家にあつては、それが潛生し且つ顯動してゐる。しかも、いはゆる純眞思想家にあつては、それが、第一にそれの質に於いて、第二にはそれの量に於いても、餘人に於けるそれ以上に優であり、大である。そして、それはすこしも神秘な現象でもなければ、ア・プリオリ式な定着的な、硬化した、その意味に於いての機械的な想像の結果でもない。獨斷ではない。なぜかといふに、現にある、曾つてあつた、また將來もあるにきまつてゐる純眞思想家的本質の個々人間に於ける多少の厚薄別、大小別、深淺別、純雜別をありのままに觀察し、そして、その比較的に厚、大、深、純な部分を その部分を人格的に代表する人または人々を、識別して特に呼び名づけたかたちが、いはゆる純眞思想家にほかならないからだ。社會に於けるいはゆる純眞思想家にほかならないからだ。

純眞思想家としての各人のうちの或る個人または個々人が、社會に於ける純眞思想家と呼ばれるだけの事だ。

純眞思想家は、習性の支配を最もすくなく受ける。いな、かれは習性の支配を殘餘の人々以上に受ける。しかし、かれは、習性を支配するかれ自身の本質力をさらに遙かに高い程度に於いて、殘餘の人々以上に持つてゐる。結果に於いては、あだかも、かれは習性の支配を比較的にすくなく受ける人であるかの如く見える可能があるのだ。

かれは習性の支配を普通人以上に受ける。すなはちかれは習性に對する感受性、理解力に於いて卓越してゐる。かれは習性の底に徹し、底を撤して習性よりも深い人性と實在性に突き拔ける。確實に到達する。しかるに普通の人々は、習性の天地内に於いて思索し、想像し、判斷し、決意し、行動する。普通の人々は習性の舟に安居し、あるひは不安居して人性及び實在性の潮流の上に泛かぶ。純眞思想家の名を適當にあたひするほどの人は、比較的に、その潮流に泝して舟の改造と新作とを敢てするだけの智能を欲求し、所有し、保護する。

純眞思想家は直接に眞理を愛する。殘餘の人々は純眞思想家を愛する。かれを權威として、すなはち間接に眞理を愛する。ヤソが「われこそは唯一完全の道なれ、また唯一完全の眞理なれ、また唯一完全の生命なれ、なに人もわれに依つてのほか天父神に到達せず」と果たしていうたとするならば、そして、もしもかれが、或る限られたる事情下に、或る限られたる人々だけを眼中に置いて、かれらのみにむかつてさういうたのだとするならば、かれは全然反眞理的な物いひをしたのではなかつたのだ。そこには或る方法的聰明があつたのだといへる。

理想的意義に解したる純眞思想家を除けば、殘餘の思想家は多少模倣的であり、多少功利的であり、すなはち眞理愛のための眞理愛者ではなく、或る手段意識に於いて眞理を愛するものであり、また多少習性的だ。ショー自身が告白した通り、劇作を職とする人々は、劇の材料として、筋すなはち脚色として、構成形式としておもしろい、おもしろくないといふ見地から、人生及び社會のいかなる實際的意義の切實な事件をも、現象をも意識しはじめ、意識し進み、意識し終はる傾向を自成する。かれらの鞅掌的、作業的、仕事的環境によつてかれらはそれを內に形成される。いはゆる思想家も、それを職とするに及んでは、次第に批判癖、思辯癖を多少かれの性格と行動に、批判と思辯の本質的目的から多少抽象された、遊離した、孤立した、いはば邪路に踏み込んだ自己目的質のかたちに於いて、長生させる自然の傾向がある。初めて筆を執る人でも、初めて演壇に立つ人でも、すでに多少、本職的執筆人や、本業的演壇人の氣習を模倣する。そして、かれらが內實に獨りで考へる事、かれらが打ち明けばなしの出來る親友との私交的雜談に於いて發表する事とは、多少別な、ちがつた、みづからを僞はつた、世間を欺むかうとする、あるひはあまりにズウ〳〵しい、あるひはあまりに氣の弱い輸出向きの事、よそ行き仕立ての事を、かれらは公表する。

思想家に於ける習性は、廣義奴隸に於けるそれ、廣義奴隸の所有者に於けるそれと同樣に、眞理愛の態度に多少はづ

れた、眞理愛の目的に多少そむいた雜草、害蟲であることはいふまでもない。それは眞理愛を殘賊するそれだけの不存在理由物だ。殊に思想家たる自覺に於いては、その自覺と自任と自信と目的意識とに對しては、悚然として戒愼すべき本質的一犯罪行爲だ。

しかしながら、他面に於いて、廣義奴隸がかれら自身の習性に深く術魂され、廣義奴隸の所有者自身がまたかれら自身の習性と利己性に堅牢に城かづけられてゐるといふ事情下に於いては、眞理愛の公正位置を代表する思想家階級が、多少またかれら自身の習性と個的專制主義に奔逸し、流蕩しても、それは必らずしも不思議ではないと同時に、一方への偏傾力を矯正すべく他方への偏傾力をそれに加へることがすくなくとも先づ現實的に多少有効であるといふ通則的意義を、社會進步の經濟の總原則の見地からしては、そこにも多少看取しないわけにはゆかん。なほかつしかしながら、社會に於ける眞理愛者の態度は、個人に於ける眞理愛意識または意志の態度と同じく、純乎として純に、飽くまで無雜に眞理愛そのものでなくてはいかんことは多く再說するまでもない。またそれでなくては、ついに力ある、發展力ある、成長性ある「改宗」をかれがかれの隣人に原因づけ、機會づけることは期待されない。社會に於ける思想家の職責は、爭鬪者や謀叛者のそれではなく、遂行力ある、執行力ある明判官のそれでなくてはならん。

廣義奴隸者自身は社會不正に於ける被害者たる位置を、それがあまりに近距離にあるがゆゑに觀る目と、したがつて知るあたまとがない實情にあり、かれらの加害者たるかれらの所有者自身は、まれにそれを知りえてさへも、さらに一層、無數居まれにしかそれの改正を欲しない深い事情を持つ。廣義煽動思想家の社會的存在理由は、かくして明確に映眼し來たる。

もしも社會に眞理愛專門の、及び職業の廣義煽動思想家がないならば、その社會は、進步のために必要な一大機能を

缺いてゐるものだといはねばならん。フランス革命が、全民衆の理想主義的狂炎風のかたちに於いて舊式階級制を灰にし終はつたかと想へば、それもなかくに表面の現象であつて、まもなく封建熱が再發したり、同じ民衆及びそれの新代がナポレオン一世の專制主義と帝國主義を崇信して護成したり、ナポレオン三世の時代になつてさへもかなりにそれらが成立したり、大戰後の今日に於いてさへも、それらの潛在量は少小でない。廣義奴隷者に於ける習性と、廣義奴隷の所有者に於ける習性及び利己性とは、實に深根柢の實在だと考へられる。されば、社會は、廣義煽動思想家の絕えまもなき存在を、それの進歩のために一とつの大きな不可缺的必要件とする。個々獨立の社會思想家としての廣義煽動思想家と、多少團體的な、階級的なかたちに於ける社會思想家の群存とがないならば、社會に於ける習性と利己性とは、すきをうかがつて再び蹶りだし、ひまをぬすんで再びありしいにしへを懷郷、思母のかたちに於いて、やる瀨もなく、自制しえずに想ひこがれ、懷ひなつかしむ。人は、多くの人は、かくの如くにして懷舊から同舊へと移る。新たに生まれ、初めて世に立つ思想專門、批判專門の人及び人々をまつて、社會は辛うじてそれの老朽を防ぎ、極めて遲々ながらも繰り返へし、且つ繰り返へして多少づつ新形式に於いて、新内容を具してわかがへる。

しかしながら、一とつの社會が、それの進歩を目的とする一機能として、廣義煽動思想家の存在を、それの原則に於いて認容し、いな進んで欲求し、創造し、保成し、加護するといふことは、その社會の制度と慣習を、また一般觀念を、すなはちその社會の常識及び學說を、言論の自由、出版の自由を尊敬するかたちに於いて持つことを、それの一必要條件とする。自由に考へさせはするが、自由に言はせたり、書かせたりはしないといふことは、社會的になんらの意味をもなさない。社會とは、そもく、廣義の交通以外のなにものをも意味しないものだからだ。また、言はさず、書かさずに、ただ考へさすといふことは、心理的に、徹底的意義に於いては、不可能だ。かくして、わたくしがいま從事しつ

つある論理は、必然的に、當然的に、言論の自由を問題とする思索及び判斷にそれの新進路を先づ發開する。

エ、煽動思想家の常在理由に對する公認形式としての出版及び講演の自由

いはゆる言論の自由は、現代の事質としては、及びすくなくともわれらが豫想しうるかぎりの將來の事實としては、廣義に於ける出版の自由と、同じく廣義に於ける講演の自由とによつて代表される。

いふところの出版及び講演は、ここでは、勿論、各人が、かれの社會にむかつて、かれの思想を發表し、通達する最直接の方法であることを、本質的、當在的には、意味する。そして、この場合に、その社會に對して、なんらの範圍的制限も、目的としては、附與されない。出版及び講演は、各社會人が、かれの社會に於けるかれ以外のすべての社會人にむかつて思想的交通を實現する代表的形式または樣式として、その社會の制度及び一般的慣習によつて評價されべき社會的一大機能であるのだ。いはゆる秘密出版及び秘密講演は、それが存する限り、存しうる限り、それの讀者及び聽者が、それの發表者と共に、その社會の制度、慣習の認許なきにかかはらず、かれらの間に思想の交通を試みる形式に屬するものであつて、したがつて、これを完全なる意義に於いての社會的、すなはち公的一機能と呼ぶことは出來ない。

純眞なる眞理愛の動機にもとづく秘密出版及び秘密講演の存在が可能にされ、またすくなくともその當事者によつて必要とされることは、その社會の或る不完全を意味する現象だ。その秘密出版及び秘密講演は、その社會の現存の制度には、また或る程度に於いて慣習にも、違背する性質の行爲だ。すでに秘密といふ以上、これはことさらにいふまでもない。すなはち、それは、現象的には、或る犯罪を構成する。しかしながら、原則的には、それは犯罪を構成しない。

かへつて、それを犯罪とみとめる制度及び慣習が、もつと深い層に於いて、社會理想及びそれの基準的、全身的立證にある人生理想の公判廷に於いて、眞の理性の王國に於いて、犯罪としてみとめられる。なぜかといふに、純眞なる眞理愛の動機にもとづく思想の發表、交通を制度、慣習によつて、すなはち人爲的に、さらにすなはち人間自身が、制限したり、壓迫したり、抑絶したり、犯罪扱ひしたりして惡でないといふ理由は、正當には決して成り立たないからだ。眞理愛は、純眞なる、また豐全なるかたちに於いてのそれは、實に、人生及びしたがつてまた人間社會の目的の目的だ。それは人類にとつて至高、至深、至大にして且つ至聖なる目的だ。眞理愛をさへも犧牲にして、なほ且つ生くべき理由が人類にあらうか。それは斷じていなをもつて答へられる。比較的に實質的な經濟のいとなみも、また比較的に形式的な政治のそれも、有意義の人的行爲は、ただの一とつの例外もなしに、もつと深い、全い眞理愛のための方法的現象であり、深全なる眞理愛生活の派生質、派生量であるにすぎない。それ以外のなにものでもない。もしも、たとへば政治が、それの自覺に於いて、それ以外の或るものだと考へられてゐるならば、それは不徹底な、不眞實な自覺だ。それは一とつの錯覺的自覺だ。一とつの不聰明な自覺だ。それはついに客觀的意義に於いての自覺ではない。社會的には、それは、思想に對し、それの發表、交通の直接方法として、一機能たる位置を當然有する出版及び講演に對して、無責任を構成する行爲だ。

思想は、社會的には、それの直接の發表形式を、代表的には出版及び講演のかたちに於いて持つ。そして、もしもその思想が、純粹物質科學や純粹數學が例示するやうな種類、性質のものである場合には、それは、それの社會的發表形式を、出版及び講演のかたちに於いて持つことを、進步的社會に於ける、もしくは或る程度以上に進步した社會に於ける通則的可能としては、それの社會的發表形式の完成態として持ち、また、もしもその思想が當代の制度や、慣習や、ま

たその制度や慣習の內容、基礎、條件、背景としての觀念に、すなはち常識や學說に活關係を有するものである場合には、それの間接の、しかしながら究極の發表形式を、それらの制度、慣習、常識、學說に、その思想自身の感化、影響を及ぼすかたちに於いて持つ。前者をば、純全的に知的な思想と呼び、後者をば、結果的及び究極的に行的な思想と呼ぶことが出來る。社會改良を目的とする意識に於いて先づ問題とされる思想は、この行的思想だ。ついでながらに記憶を喚び起こすかたちに於いて注意するが、行には、私的または個人的のものと、公的または社會的のものとが、それの多少の特徵別にしたがつて識別される。そして、制度と慣習とは、社會的行爲の代表的二要素だ。

いふところの行的思想、なかんづく特に社會行的思想について考へるに、それの發表は、それ自身の興味のため、またそれが人性と人生とに深く、全く占めてゐる關係と位置を保護するため、及び勿論それと關聯して社會進步を可能にし、改善可能にするために、必要だ。しかしながら、その社會行的思想を、思想的形式から直ちに制度的形式に發表させることは、原則としては、完全には不可能であると同時に、不完全ながらにこれを企て、敢てすることは有害だ。なぜかといふに、それは、その社會行的思想にとつて、最も自然な、また最も當然な發表の順序を選ばずして、もしくは外來强制的に選ばしめられずして、多少不自然な、多少不當然な順序を選ぶこと、もしくは外來强制的に選ばしめられることを意味する行爲だからだ。

なぜそれが不自然な、また不當然な順序であるかといふに、その思想の言論的形式に於ける發表が、本質的に可能だからだ。本質的に不能である段階を履まず、經由せず、通過しない實現、到達、成長、獲得には、それだけ內容が不充足であり、準備が缺乏してゐるからだ。小供の時代から、子供同志の遊び友だちを持たずに、おとなとのみ交伍して育つた青年者や壯年者が、性格の發達に於いて或る損失と缺陷を示す如くにだ。また、徹底的意識に於いては、本質的

に可能である段階を省いた成長は不可能でもある。それは、たまごをただちに親鳥にし、萌芽をただちに果實にすることが不可能であるが如くにだ。本質的に可能である事と、ものとは、現象的に機會を與へられることが理想的に必要であるのだ。

社會行的思想の場合に於いては、それの言論的發表は、それの社會行的發表に比しては豫備的位置を占めるが、それの全然未發表的な、純思想的な在狀に比してはすでに一歩を目的達成の方向に投じたかたちだ。言は、實に、社會行的思想の場合に於いては、明白に思と行との中間に介位する。言論の自由が道德的條件を完全に保つて公保されてゐる社會に於いては、その社會の各人は、したがつて社會行的思想の懷抱者自身も、またその思想のまととされてゐる制度、慣習の當局的責任者も、その思想の眞價を知悉する機會を、かれらがその思想の言論的發表を研究しうることによつて、それが公保されてゐない社會に於いてとくらべては、それだけ餘計に開設されて持ち、自由に享受し、使用しうべく所有してゐるのだ。

社會行的思想は、他の種類の思想と共に、また甚だしば〳〵他の種類の思想以上に、實驗をまつてはじめてそれの眞價を知悉されるといふ性質を勿論帶んでゐる。しかしながら、社會行的思想を實驗することは、物質科學の實驗室に於いて、物質科學の世界に屬する新思想を實驗することが困難であるよりも、さらに遙かに困難だ。實驗される材料または客體が、社會行的思想の場合に於いては、物質でなく人格だからだ。殊に少數の人格でなく、多數の人格だからだ。それが人格であるがゆゑに、新思想を適用する前に、意志の承認をもなるべく完全にえることがすくなくとも道德的に必要であり、またそれが人格であるがゆゑに、その實驗の結果が多少失敗として發見されたときには、その失敗が意味する慘禍も比較的に、あるひは比較にならず大きい。

一とつの社會に於ける一人または或る人々が、その社會のための公有制度として、現存の制度よりも或る別な制度の方が善制度だと判斷して、その新制度案を實施することが、この場合に於けるいはゆる新思想の適用であるから、その新制度案に對してそれの懐抱者、信者と同様の判斷をば持たず、あるひは正反對の判斷をさへも持つてゐるその社會内の人々は、その實施によつて多少强制される。制度は行爲の一大部類であるがゆゑに、その未信者、不信者、反信者はかれらの行爲の一大部類を、すなはちかれらの社會人的行爲の或るものを、かれらの思想と意志とにもとづかず、あるひはそれにそむいて、その場合には、外力のために形成される。

一人の思想が、他人の思想によつて强制されることは、その意味に於いて外力的に形成されることは、實は、決してありえない。眞の啓蒙、眞の教育は、機會に於いてこそ、事情因、條件的作用としてこそ、多少强制的な、外力的な現象を帶び、作なうことはありうるが、本質的には啓蒙される當人、教育される當人の自發的現象だ。强制といふことばは、それの最も嚴格な用法にしたがへば、行爲にだけ當てはまる。それは思想には決して當てはまらない。たとへば、反地動説を試驗の答案として書くべく校則または國憲によつて强制されることはありうるが、反地動説を考へるべく、信ずべく外的構成によつて强制されることは、人性の、もしくは心理の本質上、絶對にありえない。一人または多人の行爲が他の一人または多人の行爲を强制し、その强制された行爲がその行爲者自身の思想を强制する可能があるといへば、一人の行爲が他人の思想を强制しうるといふに比しては、精確に妥當だ。地動、反地動の問題について意見を發表する必要のあつたおの／＼の機會に、反地動説を發表すべく强制された人が、甚だしば／＼、反地動説を本氣に懐抱したり、信奉したりする人に、習性的に成り了するといふ場合が例示するやうにだ。

要するに、しかしながら、社會行的思想の實驗は多少の人々の社會的行爲を、すなはち制度人としての多少の人々を

多少強制することを、それの一側面に於いて、通例意味するがゆゑに、しかるに、人を強制するといふことは、それ自身としては、本質的一道徳犯であるがゆゑに、有意義に、合理的に、積極的に、すなはちその強制を一手段部として獲得される善なる結果を犠牲とすることなしに、その強制といふ手段部を省除しうる可能が存するかぎり、社會人としては、社會としては、その可能に機會を與ふる道徳的必要がある。言論の自由は、しかるに、その機會だ。社會行的思想の言論的發表が、その可能だからだ。

言論の自由は、かくして、社會行的思想自身にとつて、それの研究、反省、批判、純化、悔悛、改善のための最も無害にして有益なる機會であると同時に、社會組織にとつて、それの合理的保存としての合理的進步を、最も有効に、最も効果多く、そして最も浪費すくなく、濫用なしに、達成する方法だ。それは、實に、制度改進の最も經濟的な方法であるのだ。また、それは、最も有意義な社會進步の緩和機だ。一とつの社會に於ける保守派と進步派との間なる、また種々の進步派のおの〳〵の間なるきしりが、それにもとづく破壞が、言論の自由によつて油滑にされて省除される。社會不安の最も緊張した形式であり、また最悪形式でもある手段的革命は、すなはち暴力または直接行動を手段とする飛躍的制度改善は、最も發達した言論の自由によつてのみ救はれる。その不安は、手段としての革命を必要とせずに、結果としての革命を成し遂げる可能を、言論の自由によつて確實に呈供される。無目的の革命、まちがつた目的の革命、すべての不正不善の目的の革命は、言論の自由の發達によつて早くそれの存在を不可能にされ、有目的の革命、道徳的、合理的制度改造としての革命は、言論の自由の發達によつて、平和的に、全社會民の自發的認識及び評價によつて、かれらの意志によつて、すなはちいはば流血の慘禍なくして、最も幸福に可能にされる。不正善革命の不實現と、正善革命の實現とは、實に、その社會に於ける言論の自由の發達と不發達とによつて決定される。

革命といふことばを誤解してはならん。すべての制度改造を、殊にそれの比較的に飛躍式、根本的、原則的、顯著的な、のを、ここでは概般的に革命と呼んだのだ。

言論の自由が原因づけ、機會づける社會不安があるとしても、それは、直接には、知的不安であつて、行的不安ではない。言論の不自由が原因づけ、機會づける社會安定があるとしても、それは、直接には、行的安定であつて、知的安定ではない。けれども、知的安定に原因しない行的安定は無根柢または淺根柢だ。その行的安定は、最も深い意義に於いて最も不安定だ。それは、實に、無智を條件とする安定だからだ。しかるに、無智は人性の深要求に、したがつて社會の細目的にも、そむく。これに反して、知的不安に原因する行的不安は、その知的不安に研究、論議の機會を十分に與へさすれば、根柢ある、最も深い根柢ある行的安として、その行的不安が破壞的性質と形態をいまだ帶びない内に、すなはちそれが險惡化しない内に、早く進化的に行的安に歸着する必然可能がある。

近代の諸國家的社會のうち、比較的に言論の自由の發達した社會はイギリスだ。それの比較的に幼稚な社會の一はロシヤだ。手段としての革命が最近代の英國にはほとんど絶無であり、これに反して、十九世紀の早期以來のロシヤが、手段としての革命の氣分に常に滿ち、それが時々に不成功の爆發を試み、最近ついにそれの猛蕩的爆發を見たことは、言論の自由の發達が、その社會に於いて、いかに社會行的思想の安全瓣たる位置と職責と機能とを代表するかを例示する。

社會行的思想にとつてさへも、言論的發表は、不完全ながら、未達成ながら、すでに發表たる性質を帶んでゐるがゆゑに、それすら外制的に拒否されてゐる場合とくらべては、その言論的發表によつて、その思想は、いはばそれの抑塞せる鬱落の奇才を多少抜かれる。それは、それによつて、いくらかたりともすくなくいらだたしいたちのものにされる。

それは、それによつて、いくらかたりとも餘計にアット、ホームの氣分をあぢははせられる。ゐごこちよくされる。

勿論、一つの社會行的思想が、わづかに言論的發表の機會を享樂した位の事でをさまるやうでは、それは社會行的思想といふ名をあたひしない浮薄な、他愛もないものだが、それは、あだかも、わが國の昨今のいはゆる議會の新人が、博辯宏辭を滿場にひびかせ、都鄙の新聞に揭載されることによつて、社會改良問題をも、國家、天下の存亡興廢のわかる決定的危急の問題をも、實質的に解決しえたかの如くに忘れ去るといふ一部の惡意評及び無惡意評を、妥當評だと假定して見た場合にも似た罪のなさすぎる、すなはちみのなさすぎる話だが、しかしながら、その種の場合に於いてさへも、なほかつ發表はきはめて無害にして多少有益だ。發表は、實に、その發表された思想の眞價を、社會によつて知られると同時に、發表者自身が知るための一準備、一機會、一方法たる價値をも有するからだ。發表は、教育であると同時に被教育だ。啓蒙であると同時に被啓蒙だ。反省を與へることであると同時に反省を與へられることだ。

全有を選ぶか、しからざれば絶無を選ぶといふ方法は、完全に人性に忠實な方法ではない。それは、殊に、社會行、たとへば政治の原則的理想的方法ではありえない。比較的主義を方法とする絶對的主義が最も人性に、またそれと實在との關係に忠實な態度だ。言論的發表は、社會行的思想にとつては、全有と絶無との中間に立つ有限的有だ。すなはち有限的無だ。

社會行的思想が、言論的發表の機會をえ持たない場合には、その思想の懷抱者自身の想像が、その機會の缺乏としての空隙と餘地をほしいままにうめて、その思想を、それの眞價以上に賦彩して宗教的、迷信的、絶對的、全價的にそれを讃仰し、それに纏着し、それに惑溺する。かれは自己催眠の病態におち入る。かれは、その思想のいはゆる狂信者となる。たとへば革命前のレーニン氏にその症徴はなかつたか。

他面に於いて、外部の社會は、異端者の思想の言論的形式に於ける全的發表を禁ずる機會を持たないがゆゑに、その異端者をば、あらゆる惡の可能體と想定してしまふ。その異端者の思想についての、また行爲についての、また人格についてのいかなる無根の、または故意造の風説をも、それに尾ひれを附してまでして、その外部の社會は、ただちに信採する。それは、それの先入思想と僻見とを原則力として、にくむべき異端者を錯覺的、幻覺的に創造してしまふ。

かくの如くにして、異端者の外部社會に對する心狀はいよいよますます絶望的になる。これは絶對絶命の窮地に追ひせばめられる。デスペレートになる。現代社會に對する全的反逆、いはゆるオーソドクスなすべての制度と慣習と觀念すなはち常識及び學説とを總破壊するほかに、それを先着手段とするほかに、自己保存の最小限としての一身または同志の安全も、それの積極的發現としての制度改造も、望まれなくなる。いはゆる手段としての革命の悲しむべき機會がかくの如くにして醸成される。

一とつの社會行的思想が、それの言論的發表の機會を持たずに、ただちに行動的發表を敢てするならば、その思想に多少の豫期せざりし不完全が發見されても、ツー、レートだ。言論的發表を比較的獨立の一時期として、一段階として、それによつてはじめてえられる經驗を善用することによつて、異端者も、外部社會も、思想的に自己をなほし、でなほすことが出來る。

言論の自由が幼稚または薄絶な社會からも、絶大思想家でさへもが出現する可能性は決して絶無でない、福澤諭吉氏はそれの或る程度の一例だ。しかしながら、言論の自由が非薄である社會からしては、聰明なる氣力の持ちぬしであり、知的活動の潑溂たる民衆、國民、社會民をば決して期待しえない。徳川時代、殊にも幕府全盛時代のわが國民、明治以來、殊にも新秩序確立以來のわが國民は、すなはちそれの一例だ。幕末と明治初期とには、比較的に言論自由の緊關係が

自然に破礙して、したがつて應用發明に屬する多少の現象も見られた。しかし、要するに近代及び最近代のわが日本國の社會は、いまだ言論の自由を眞に評價する能力には甚だ缺けてゐる。ここに於いてか、その社會民すなはち國民の知的生活と知的活動を見れば、單なる模倣によつて特徵づけられてゐる。それは尙古的模倣か、崇外的模倣かのいづれかに分類されるだけの內容を持つてゐるにすぎない。多少の獨自的な內容、創造的な內容が近代の日本國民一般の知的生活に見つかるとしても、それはすべて原則的なものではなく、きはめて派生的な、末梢的な、現象深的なもののみだ。たとへば、インヴネスとか、その他の和服用外套とか、フェルト裏の草履とか、牛鍋とか、人力車とか、文化式住宅とかいふたぐひの發明が、それの全部であつて、人生觀の原則としての哲學とか、宗教とか、政治、經濟、教育の原則といふたぐひの、すこしでも根本的な、總統的なものをば、模倣ですましてゐるか、さもなければ過去模倣の一態と見られる原始狀態に對する滿足的維持、むかしながらの生活に於ける無批判的安住ですましてゐる。

けれども、すくなくとも日本國民自身にとつて、また取り分け日本民族自身にとつて、なにが最も深い憂恐をあたひする問題であるかと考へるに、日本民族に於ける、日本國の社會民一般に於ける原則心の缺乏が、たしかにその第一位にある。原則心なき民族、そして現象意識だけに鋭敏な、利發な、聰明な民族、これが、現在の事實としては、わが民族の一適稱だ。これよりも悲慘な民族的、國民的現狀がまたとあらうか。

知的生活と知的活動とは、原則意識の明確と、深烈と、精細と、强健と、偉大とによつて代表される。單なる現象的範圍に始まり、且つ行きつきる思想、感情、意志の如きは、知的生活、知的活動の名をほとんどあたひしない。

現代及び近代のわが國民には、原則意識未發達のゆゑに、哲學もないが藝術もない。本質的意義に於いての哲學と、本質的意義に於いての藝術がない。科學に於ける無發明とか、技術に於ける不精巧とか、不練達とか、不熟成とか普通

に呼び去られる現象も、わが國民の場合に於いては、實は、一層深いところに於いて、眞の意義の哲學意識と、眞の意義の藝術意識が缺乏してゐることに、それの一大原因を持つてゐるとさへ考斷される。哲學なき科學、藝術なき技術、それらのものは發明らしい發明をも、精巧らしい精巧をも現はさないにきまつてゐる。日本に於いて、醫學は比較的に發明的だとしば〳〵説かれるが、いはゆる留學生が、かれらの多くが、碌に出來もしないドイツ語で、人の力を過半程度にさへも借りて、いはゆる論文なるものをともかくも作成して發表することに腐心した事などに察して見ても、わが醫學界の特殊の少數者をばしばらく別の問題として、平均多數の人々が、いかに淺弱なる知的生活、知的活動の例内者であるかは、疑はれない。

アジア諸民族のうちでも、印度はすくなくとも佛教を發明した。アラビヤはすくなくともマホメット教を發明した。極西アジアはすくなくともクリスト教を發明した。支那はすくなくとも儒教を發明した。日本はなにを發明したか。

言論の自由を評價する必要は、現代の諸國家的社會に於いて、例外なしに高い。しかし、それは、わが國の社會に於いて殊に高いと判斷される明確なる、尨大なる理由がある。日本の前途は、それの國民一般の知的生活と知的活動を保護することの完全と不完全とによつて總體的に決定される。日本人は發明しないとは久しい話だが、新日本も半世紀餘の成長を遂げた今日、この話を、單なる話として聞き流したり、安易な氣分でいひ放つたりすることの出來ない筈の年齢者となつた。

國民生活の原則の問題となれば、箝口令が呼のきぎわ、筆の穗さきに無限絶大の制裁力を鮮やかに帶んで權威臨してゐる日本の現狀でないか。かくの如き現狀下に、なほかつ純眞なる眞理愛の意識に燃え、それに衝動づけられてともかくも音聲や文字を通ほして眞理に對する忠愛を公行する人は、よほどの聰明者に限つてのみ見られる。大抵の人は、事

たかれ主義の行者となつて、原則問題にはいひ觸れない。徹底的に、恒常的にいひ觸れないがゆゑに、かれらはそれを考へる興味をも、能力をも次第に衰滅させてしまふ。かれらの原則意識は、環境的營養不良のゆゑに育たずして早く凋萎する。かれらの間には、生れつき膽力や勇氣や正義熱には不足してゐないものもある。これらの人々も、しかるに、肝腎の智力を開發されずに、至つて愚昧なかたちに於いて所有してゐるがゆゑに、恐怖によつてではなく、無智によつて、有智なれども臆病なる人々と、結果に於いては同樣の原則問題敬遠の態度を取る。いな、かれらは貴重なるかれらの膽力と勇氣と正義熱とを、かれらの社會の反進步的な、反道德的な制度的、慣習的權威の爪牙のかたちに於いて使用する。これよりも惜たらしいことはない。

純眞なる眞理愛の意識に燃えて、すなはち最も神聖なる內的必要の意識に於いて、現存の制度や慣習を、それの原則について思索し、批判し、そして發表する少數者も、いふが如き現狀下に於いては、あるひは臆病ゆゑに、あるひは臆病ならずとも遠大なる志望ゆゑに、その言論的發表の形式を極度に用心深くする。もしも言論の自由が社會的に確保されてゐる環境下に於いてなら、なんらの注意を要しない筈の發表形式上の或る點や、角や、線や、賦色や調聲の上にまで、かれらは愼慮に愼慮をかさねる。しかしながら、大抵の人は、顯に察して微に察することが出來ないから、その少數者の意義的または論理的に顯著であり、現象的または言語的に微杳である眞理愛を評價することが出來ない。その眞理愛の對象であり、內容であり、目的である眞理そのものを認識することが出來ない。

原則問題については、原則意識に於いては、奴隸であり、單なる現象問題についてのみ、單なる現象意識に於いてのみ自治者である人々から成り立つ社會が、それの文化に於いて、文明に於いて、なんらの深徹した、したがつて遠達する活動をも、成績をもえ示さないことは、必然をきはめてゐる。

一とつの社會の文化は現代を終點としてはならん。それは進化的、成長的、發達的に永く保存されなくてはいかんことと勿論だ。けれども、これを勿論だとみとめる意識は、その社會の新人格階級としての幼少年者を善く教育することを一必要條件として主張する。わかい、したがつてやはらかい、白紙同然の幼少年者の頭腦と心胸とを、早くすでに原則問題拔き、原則意識禁遏の方法によつて、環境によつて、單なる現象式の死型に習性づけることは、明確にその社會の文化の進化的保存、すなはち唯一の眞の保存を可能にする第一要件を缺くことだ。

言論不自由の社會に於いては、人は僞善と、陰險と、兇亂と、そしてそれらの多く乃至すべてを通じて淺薄とに傾むく必然關係がある。卑屈主義と專制主義とに傾むく必然性が同時にそこにあることは、特にいふまでもない自明な論理であり、事理であり、心理である。

すべての發明は快活だ。公明だ。言論不自由の社會には、原則的快活兒、原則的公明人は、生まれない。生まれてもかれは育たない。なぜすべての發明は快活であり、公明であるかといふに、發明は發明する人の本質の開發であり、かれの社會に普遍的に妥當する原則の觸發だからだ。本質が機會をえるかたちが快活であり、原則が公認されるかたちが公明だ。快活は自由の、そのことばの一意義にしたがうての自由の、一常識名にほかならず、公明は價値意識としての普遍妥當の一通俗稱にほかならない。

いくたび繰り返へしてもなほ繰り返へし足らなく感ぜられる一事は、すくなくとも一日本人としては、日本民族が發明力を示さないことだ。日本人には獨創力こそ缺けてゐるかも知れんが、他の獨創を發見する能力は缺けてゐないと考へる人もあらうか。もしもさう考へる人があるならば、かれは考へちがへてゐる。考へ足らない。發明力なき日本人には發見力もない。その證據には、日本人は、かれが發見したらしいおの／＼の機會に於いて、實は、かれが信頼する他

の發見に追隨して發見する。けれども、他の發見に追隨して發見することはかれの眞の發見ではない。それは模倣だ。もしも眞に先づ發見するだけの能力を有する人ならば、すくなくとも民族ならば、たまには、いなしば〱、みづから發明することもありえなくてはならん。發見と發明との間には、本質的にきはめて近い距離しかない。兩者はほとんど同一能力、同一作用、同一性質、同一實在だ。

　これを最近代の日本についていふならば、西洋がだれかをかつぎ、騷ぎ、崇拜し、嘆美し、天才呼ばはりし、獨創あしらひする、しかるにのちに、それを見、聞きして、しかも一とたびそれを見、聞きした以上は、刻を移さずに筆を執り、唇を動かし、胸を躍らせまでして、兎をかけてそのだれかをかつぎ、騷ぎ、崇拜し、嘆美し、天才呼ばはりし、獨創あしらひする。日本人の發見なるものは、たゞこれだけの事だ。たゞこれだけのものだ。たゞこれだけの藝だ。人にむかつてさうである通りに、いかなる物にむかつても、事にむかつても、それが發明的、獨創的特徴によつて意識されるものである限り、それに對する日本人の發見なるものは、ことごとくさうだ。

　考へて見ればこれも不思議ではない。みづからに獨創力なきものが、他の獨創を、獨創的に發見しえようわけがない。獨創的に發見することは、實に、それみづからが一とつの獨創だからだ。他人や他民族や他國民や他社會民の發見をまたずして、われとわが力で發見することは、たとひその發見されるものが或る獨創や發明であらうとも、いな或る關係に於いてはそれであればあるほど、立派に一とつの發明だ。獨創だ。

　たまに、もしくはしば〱、日本人が一見獨創的に他の獨創を發見したらしく見える場合があつても、いな、さうしたと自思し、自言したり、第三者からもさう思はれたり、言はれたりする場合があつても、それは、先づもつて例外なしといひえられる程度に、まちがつた發見だ。獨創的でないものを獨創的だと判斷してゐるだけのものだ。そして、こ

の種の場合のほとんどすべてに、どうしてそんな誤判斷をしたのか、するに至つたのかとしらべて見ると、その判斷者が、その判斷以前にゝすでに外的權威、自己の眞の理性または知力以外のなんらかの權威によつて崇信してゐる或る獨創的人物、事業、作品、思想等に、その誤判斷の對象たるものが、表面的、外觀的、形式的に、似てゐるといふ事實が發見される。獨創的でないものを獨創的だと邦人が獨創的に認識し、評價し、すなはち判斷する場合すら、かくして、實は、獨創的にではないのだ。

權威によつて信ずる、すなはち自分の知力、思考力、評價力、判斷力以外のなにものかによつて信ずるといふ、また信ずるに先きだつて、權威によつてほとんど見さへするといふ、觀察をさへするといふ、かなしむべきわれら日本人の心體は、權威を信ずるといふかれらの一見他側面の心體と同根であり、同脈であり、實は、同體である。外在力によつて考へ、感じ、斷定するといふことは、心體の作用の方法を本質的に、原則的にまちがへてゐるのだから、適用し、顚倒使してゐるのだから、發明といふが如き有意義の知的成績がそこに現はれやうがない。

目下の日本は、日本内の社會は、いはゆる右傾群といはゆる左傾群との確執のために救ひがたく行きづまらんとしてゐると一般に觀察される。けれども、いはゆる右傾は時間的權威を一特徴とする過去模倣であり、いはゆる左傾は空間的權威を一特徴とする遠隣模倣であることを知れば、その兩傾向の間に、暴力によるほかに解決が見つからないことは、世に奇蹟がありえないことを信じうるだけのあたまにとつては、あまりに自然だ。必然だ。一とつの模倣と、他の模倣とが、その模倣の對象を異にしてゐるときに、しかもその對象がそれの本質と原則とによつて理解されず、ただそれの時、處、位の制限相によつてのみ理解されてゐるときに、根本的相互理解に到達しえやう理はない。よそまれとむかしまれとのいがみあひが、鉢あはせが、現代の日本の思想界の本質的特徴だ。

かくの如き國民の心狀を眼前に炳視しながら、なほかつ言論の自由を、不聰明をきはめ、反道德をきはめた理由によつて、現在の如く束縛すべき愛國の理由が人力によつて發見され、また發明される可能は絕對的に無い。しかるに、人類が關する限りに於いて、すなはち、人間の知力が有責任的に、有意義的に達しうる限りに於いては、人力以外の力は多少かならず人力以下だ。世に、質に於いて人以上の實在は無い。それは、確實に、現實に天下地上に無いのみならず、人性の本質的自覺に於いて、結論的に、地下にも天上にも無い。

他國の社會、よその社會が、言論をいかに自由に保護してゐるか、いかに不自由に束縛してゐるかといふやうな事は、一顧する必要だにない。言論の自由は、わが國の必要であり、また人類の本質的必要だといふことが、理性と道德の眼には、先づ完全に明白をきはめてゐるからだ。

しかるに、わが國に於ける言論の自由の發達は、その發達の必要についての意識と實行とは、現に、多くの他國に於けるそれに比してさへ、遙かに低位にある。その多くの他國のうちには、たとへばイギリスもある。

善を爲すの一事に於いては、人は、個人としても國人としても、常に現實及び過去の自己を凌がなくてはいけない如くに、他のいかなる個人をも、國人をも凌がなくてはいかん。言論の自由の發達は、勿論眞の意味に於けるそれは、一とつの大いなる善だ。

オ、煽動思想家の定義

わたくしが、煽動思想といふことばを、いかなる內容の表現として用ゐたかは、上說のうちに、おのづからあきらかにされる機會をほぼ十分に持つた。わたくしは、いま、いはゆる煽動思想家の全內容のうち、わたくしがいまだ特に注

意する機會を持たなかつた部分に注意すると同時に、それを、すでに注意された部分との關係のもとに認識し、評價するかたちに於いて、いはゆる煽動思想家の完全概念を構成して見ようと思ふ。

敢ていふまでもない事ではあるが、意識的に煽動を目的とする思想家などいふものは、かれが眞に思想家の名をあたひするものである限り、事物の本質的關係上、決してありえない。煽動は結果の外觀に屬する一特徴にすぎないのであつて、眞の意味に於ける煽動思想家が、煽動思想家であることは、たとへば野の百合花、山中の華樹が、人に觀られる可能があらうとなからうと、そんな事には關係なく、野の百合花ならば、極榮時のソロモンさへ着飾りえなかつたほどの盛裝を凝らし、山中の華樹ならば、陽明の一行者の一人のいはゆる「深山中に在りて、みづから開らき、みづから落ちる」內的必然を持つが如くに、かれの內的、自足的必要であるのだ。かれの思想の發表が、かれ以外の世界にいかなる印象を與へ、感動を與へ、行動を機會づけるかは、かれにとつて、眞に偶然事に屬するのだ。松陰のであつたか、だれのであつたか、はつきり記憶しないが「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬやまとだましひ」とかいふ述懐なども、眞の煽動思想家の心理の一例解として、すくなくとも譬喩的に、役立つ。一度も人の足あとをつけたことのない野の末、山の奧にも、嚴冬去つて陽春來たり、酷暑逝いて清秋到れば、花は滿地をうづみ、鳥は滿山に歌ひ、月夜には蟲吟くさむらに滿つ。だれに見せう、だれに聽かさうといふ低級功利主義の作慮も貪吝もかれらにはいささかもない。眞の煽動思想家の胸奧はまさしくこれらの本能生活者のそれだ。たゞそれの遙かに、遙かに進化した形式及び內容のものであるにすぎない。

ニーチェは山ごもりのツァラツーストラについていふた。「こゝでかれはかれの精神とかれの孤寂とを享怡しつゝ十年間をあかず過ごした」と。そのツァラツーストラは「一と朝、曉紅と共に起き上がり、太陽の前へ進みいでゝ太陽にむか

つてはなしかくろやう「なんぢ偉大なる星よ、もしもなんぢがなんぢの光明を享受するものどもを持たなかつたなら、なんぢの幸福は成り立たなかつたらう。十年間なんぢはこゝへ余の洞窟へとやつて來た。もしも余と、余の鷲及び余の蛇とがなかつたら、なんぢはなんぢの光りとこの途とにあき〳〵したことだつたらう。けれども余らは朝な、朝なになんぢを待ち、なんぢからなんぢの有りあまりを取り、そしてそれの返禮としてなんぢに感謝と祝福の意をさゝげた。見よ、余はいまや余の賢明を持ちあぐむ身となつた。余は、いまや、蜜をあつめ、ためすぎた蜂のやうになつた。余は四方から取る手がさし伸んでくることを余自身の必要とする。余は贈り與へ、頒かち與へたくてならん。世間の賢者たちがも一度かれらの愚をよろこび、そしてまづしき人たちがも一度かれらの富足をよろこぶ身の上となるに至るまで」と。

消費者を見いださぬ、または豫想しない生産者のさびしさは深いにきまつてゐる。しかしながら、コパーニカス以前にも、地は依然として天のまはりを自彊不息に健行した。需要が生産を刺戟する關係よりも、生産が需要を教育する關係の方が一層根本的だ。生産の社會化は生産の私己價の一派生質だ。すべての公價は、全たき意味に於いての私價以内だ。見物がゐなくては踊る氣になれないといふのは名人になれない人の心事であるにきまつてゐる。知己を千載に待つといふけれども、知己はすでに現在の自己にある。士は己れを知る者のために死し、女は己れをよろこぶ者のためにかたちづくると刺客傳の作者はいふたが、そしてこゝに悲壯なる眞理が若干存することをばなに人も疑ひえないが、その場合に於いてさへも、他人としての知己は、實は、自分としての知己の、いな實に自分そのものの、創造的衝動を機會づける或る外在事緣にほかならない。それは一とつの偶然價にほかならない。それは一とつの手段價以上のものでさへもない。

人性の原則は、したがつて人生の原則は、性慾及び戀愛にもよく現はれてゐる。普通には、普通の無思索の判斷に於

いては、性慾及び戀愛は、殊にも戀愛は、相手次第、相手本位のもので、本質的にあるやうにさへしばしば考へられてゐるが、それは一とつの錯覺だ。戀愛は戀愛する人の本質的、內在的一性能だ。人殊にわかい人々は、戀愛せずには自己が成り立たないのだ。それは、ちやうど、多少錯覺的にカントによつてみとめられた認識の根本概念のやうなものだ。カントは、時、空的直觀形式と、因果、實體等の思考形式とは、客觀實在の屬性であるよりも、認識主觀の固有窓だと考へたが、性慾及び戀愛は、わかい男女に於ける一とつの固有窓だ。されば、かれらは、大ほぜいの選擇されうる相手を持つ環境に置かれれば、そのうちの或る一人だけに戀着するかも知れないが、大ほぜいが小ぜいになつても、かれらの戀愛は依然として發動の對象をその小ぜいのなかに發見する。その小ぜいが極小限の一人になつても、やはりかれの社會に於ける異性者の戀愛本能はその一人にむかつて、大ほぜいのうちの或る一人にむかつての場合に劣らぬ熱烈さと、純眞さと、深强さとを完全に具備して發動する。一人の異性者をも持たない境遇に置かれてさへ、すなはちいはゆる失戀してしまつたり、現實的形式に於ける對異性的戀愛を絕望し、または斷念してしまつてさへ、人は第二の戀ひ人をかならず求め、そして見いだす。或る人はこれを自然に見いだして愛自然の詩人となり、或る人はこれを思想に見いだして愛思想の哲人となり、各種科學に、各種藝術に、教育に、宗教に、政治に、商賣に、産業に、多少有意義なに事にでも、なに物にでも、あるひは社會的、文化的に無意義、有害な事や物にさへも、人はかれの再婚を必始し且つ必遂する。選擇の自由が多大であれば、鼻が低いとか、聲が太いとか、教育がどうとか、財産がないとか、系統が問題だとか、相當に氣むづかしく、貴族主義にも、贅澤ごゝろにもたるけれども、選擇の自由が少小だとあれば、戀愛本能は、それの本來の積極性を露骨に發揮して來て、低い鼻をばこちらの想像を投資していくらでも、すきなだけに高く築き上げ、太い聲をば、同じくこちらの想像の、當人自身が意識しうるよりも、ずつと深いかれの生命成立の層々くぐり拔け

る奔放自恣によつて、どんなにでもやさしい、甘い粹につくり變へる。戀愛はわかい男女の本質的一性能であり、創造または生產がその本質的一性能の一本性であるがゆゑに、かうしたたぐひの現象が必然的に可能にされるのだ。

眞の意味に於いての煽動思想家に於ける煽動的現象は、實に、戀ひする人にとつての相手の異性以上の基礎をも、根柢をも有するものではない。こゝに於いてか、眞の意味に於いての煽動思想家をば、最も適當には、また最も精確には、單に思想家と呼べば、內容に對する表現、實在に對する名稱として十分に全たく、完全に足りる。

內的に自足してゐる思想が、外的すなはち社會的に煽動といふほどの現象を或る程度以上の深さと、廣さと、永さとに於いて早晚持つとすれば、その思想には、本質的に相當の社會價があるにほゞ定まつてゐる。この社會價といふ特徵を、特に、あるひは純一に、全部的に注意の對象とするときに、さうする人によつて、あるひは煽動思想家が意識され、あるひは先導思想家が意識される。この場合に、その人は、その煽動思想家または先導思想家自身でもありうる。かれ以外の人でありうることはいふまでもない。正しき意味に於いての社會價ある、すなはち正しき意味に於いての社會的當在理由ある煽動思想家は、かくして、眞理愛の純眞能力者であると同時に、かれの能力と、かれの社會の能力との間なる高低別、大小別、優劣別に機會づけられ、條件づけられて、相當の程度に於ける先導思想家たる一特徵を早晚かならず顯著にし來たる。

カーライルは、かれのクロムヱル論に於いても、眞摯、眞誠、眞實の一德を諸德の最高頂、最深底に認識し、評價することを怠らなかつた。そしてかれがさうした事には、或る大いなる眞價が確認される。カーライルにもいく多の不聰明があつたとわたくしは意識してゐるが、かれが眞摯の一德に深く惚れ込んだことは、公人としてのかれの資格を永久に擔保する、かれに於ける至寶であつた。いはゆる煽動思想家の資格を構成する本質的一要素、一要件は、實に、正し

き意味、聰明なる意味に於いてのシンセリチに存する。ツルースフルネスに存する。

眞に聰明な人が、インシンシヤであるといふこと、シンシヤでないといふことは、實は、ありえない。資格ある思想家のかならず具備すべき一質は、無僞意識だ。愛眞意識だ。一とつの譬喩的意義に於いて、かれは、寶石を、勿論天然の寶石を愛する人、またかれ自身が寶石質の人であらねばならん。寶石の價値は、それが塗飾を無用とすること、いな有害とすることに第一的及び結論的にある。ナポレオンは、カーライルも注意した通り、眞摯の一德に於いては決して英雄ではなかつた。マホメットには、その一德が絶大に、かれの人格諸要素のうちに於いて殆んど絶大的に、また社會の多くの人々との比較に於いても同樣に絶大的に、生得され且つ獲得されたがゆゑに、かれは煽動思想家たる位置をも大きく人類進化の全景内に當然要請しうる。

愛眞意識と共に、あるひは愛眞本能、愛眞衝動と共に愛眞能力の卓越した人は、周圍の社會の不眞、反眞、非眞、虛僞、迷信、偶像崇拜を目擊して、內心の不安を感ずることが必然的に絶烈だ。『大學』に「いはゆるその意を誠にすとは、みづから欺くことなきなり、惡臭をにくむが如く、好色を好むが如し、これをこれみづからこころよくすとはいふ、ゆゑに、君子はかならずその獨りを愼むなり」とあるが、純眞思想家にとつては、非眞は惡臭よりもにくく、眞は好色よりも好ましい。ヤソがかれの時代の僞善をたまらなく不快に思つたこと、ルーテルがかれの聰明に相當した程度に於いて同樣の憤激に矢も楯も恐れてゐられないほどに燃え立つたこと、あるひはルーソーが「自然復歸」を熱唱したことなどにも、かれらの多少とも當代に卓越した愛眞能愛眞熱とが、かれらをして、たとへば濃厚な空氣が周圍の稀薄な空氣へ擴がり、あるひは眞空に接觸してそれを盈たすべく移動するが如き內的不可抗性に驅りうながされて、さうせしめたのだと判斷される部分が大きく確認される。

純眞思想家は愛眞者だ。眞理愛者だ。眞理に忠義であることがかれの原則だ。されば、かれが、かれの隣人すなはち社會を意識する限りに於いて、かれは、その隣人すなはち社會に於ける眞理不忠を、それがかれの意識內容となるやいなや、すなはちそれがかれによつて意識されるやいなや、假借し、寛恕し、看過し、默認し去ることをば、かれ自身の原則によつて到底不可能にされる。かれはかれの隣人を愛する。しかしながら、かれにとつては、かれの隣人は、多少不完全なる、すなはち多少完全なる眞理及び眞理愛の現象にほかならない。かれはかれの隣人を、その隣人の表面相や淺層意識にしたがつてのみは愛しない。かれはかれの隣人を、その隣人の本質と原則とにしたがつて愛する。その隣人を最も全體的に愛する。しかるに、本質と原則に於いては、すなはち各個生の全體的存在に於いては、萬人の間に、萬有の間にさへも、確實なる一致がある。いはゆる普遍妥當則がある。それが十分に意識されたと豫想し、または假定したかたちに於いての普遍妥當價がある。絕對遍通の理想がある。いはゆる眞、善、美、正の意識の如きは、それが或る程度に模索されたかたちだ。

純眞思想家の對社會意識は、すこしも利己的でない。いはゆる利己主義としての個人主義では決してない。それは、しかしながら、いはゆる利他主義や愛隣主義でもない。かれは、かれの隣人を最廣義に於ける善の或る可能體及び現實體だと正觀する。かれの利他主義と愛隣主義とは、全義の眞を犧牲にする要素をばすこしも帶ばない。もしもそれがすこしでも帶ばれてゐれば、それは、かれの利他主義または愛隣主義に於けるそれだけの不完全だ。それだけの不純だ。かれがかれの利他主義または愛隣主義に忠である限り、その要素は、それゆゑに、早晚、かれの聰明と經驗の成長につれて、かれ自身によつて排去し、驅除される位置にある。

純眞思想家の目的意識に於いては專ら眞がある。完全眞がある。科學的眞理、道德的眞理、藝術的眞理、政治的眞理、

經濟的眞理等のすべてをそれの內容とする完全眞がある。自己とか、隣人とか、他人とか、社會とかいふ差別は、かれにとつては、いささかも根本的な差別ではない。單一にして純全なる眞理意識、これがかれの意識內容のすべてだ。かれの意識內容の本能的要素であると同時に反省的原則だ。時々に、不斷にかれがかれの過失と不完全から退きすがる矯正柱だ。それがかれの支柱だ。

純眞思想家は、眞理愛を犧牲にしてまでかれの社會に奉公するやうなことをば決してしないが、したがつてそんなかたちに於いての愛國家をも、愛國際的社會をも、愛主をも、愛奴をも、愛友をも決してしないが、單なる一個の自己の感情や、利害のために、したがつてまた功名心などのためにも、かれの筆や舌を動かすことをばしない。かれは、淺觀者には、利己主義者、またその意味を帶んだ個人主義者と見えるかも知れん。深察者には、かれは、しかしながら、愛社會者と見えるだらう。けれども、最も深く、全たくかれを觀うる人には、かれは、自己もなく、他人もない、したがつて社會もない、表裏透徹した一個の愛眞者として正認される。

純眞思想家は、要するに原則意識の人であるのだ。現象意識の人としてのかれは、それが愛のかたちを取つてゐようとも、またそれが憎のかたちを取つてゐようとも、かれの原則意識からの演繹的解釋の結果にほかならず、あるひはかれの原則意識への歸納的解釋の材料にほかならない。

いはゆる煽動思想家が、それの純眞形に於いては、本質的意義に於いての文明批評家でもあり、また本質的意義に於いての哲學者でもあり、さらにまた本質的意義に於いての社會改良者でもあるといふことは、勿論かれが本質的意義に於いての道德家、藝術家でもあるといふことと共に、既成の敍述と論理のうちにほぼ完全に意味された。

深見力、全觀力が純眞煽動思想家の一要件だ。しかし、かれに加へて、その深見の結果を完全に論理づけ、その全觀

の結果を完全に組織づける力がかれには同時に必要だ。この論理力と知的組織力とがないならば、かれは、かれの深見の結果と全觀の結果とを、かれ以外の人々に通達することが出來ない。深見だけでは獨斷と誤解され、全觀だけでは尨雜と錯認される可能がある。判斷の理由を、すなはち英語のいはゆるグラウンドを明示する能力及び努力を待つて、純眞思想家の提說と唱導は、かれの社會に於けるかれ以外のすべての人々から、その提說なり、唱導なりが眞價あるものである限り、贊同される必然可能を持つ

かくして、原則意識が、そのことばのあらゆる正しき内容と特徵と適用可能とにしたがつて、純眞的、道德的、合理的意義に於いての煽動思想家の全資格だ。

わたくしは、最近にこの作の第一字を書いて以來、ほとんど一氣に驅筆してこゝまで來た。そして、早くも二月號の締切に迎へられた。しかしこの作の前途は多少なほ遼遠だ。來べき數日間に書き上げて、號を更めて本作全體を發表することを期する。既成部は、それだけで部分的一全體を構成してゐるから、先づそれだけを發表する。未完稿の申し譯として斯く附記する。（一月十四日）

遞信鐵道等の官營事業に於ける怠慢を難ず

法學博士 堀江歸一

國家と運輸交通事業

運輸交通に關する諸種の事業は其社會公共の利益に關係することの多く、又密接である故を以つて、之を國家の所有とし、又國家をして其經營に當らしめるのが、諸外國に行はれる一般の事例である。英國の如き國家自ら官業を經營することを好まず、自由放任主義の下に、民業に對して所謂禁戒（アブステンション）の政策を取つて居る國であつても、郵便は當初政府が官廳間の文書を交換する爲めに、郵便馬車を運轉させて居つた來歷が殘つて、始めから國家事業であつたし、又當初は民有民營であつた電信電話の諸事業も亦時勢の推移と共に、國有國營と爲り、以つて今日に及んで居る次第であり、鐵道に對する方針は今も昔も、民有民營で一貫して居るものの、歐洲戰時に於ては、鐵道會社は國家の管理に移されたし、戰後、民營に復歸した後に於ても、國有論の隨時隨所に起りつつあることは、吾人の看過す可からざる所である。英國にして既に斯の如くである。國有國營主義の行はれることの英國に比較して、盛なる歐洲諸國に於て、運輸交通の諸事業に民間の營利的關係の干與することを絕對に不可なりとする政策の行はれるのは、固より異とするに足らないのである。

何故に國家は斯く自ら進んで運輸交通事業の經營を擔當し、私人の之に干與することを許さないのであるかと云へば、其根本の理由は實に斯業の社會公共の利益に密接の關係を有し、廣く國民に向つて、其便宜を普及することを必要とする一事に外ならない。運輸交通事業の便宜を廣く國民に普及するに就ては斯業が(一)都鄙到る所に擴張されて居ること、(二)其便宜を國

民に供へるに當り、其代償として國民に課する料金は之を低廉にし、又均一にすること、（三）國民に對して料金の形態を以つて、負擔を加へる場合には、實費回收の主義に據り、其負擔を通じて、國庫に增收を謀るが如き手段に出でざることの諸條件を確立しなければならない。若しも私人の營利事業として、運輸交通に關する諸業を經營させたならば、或は私人の利益に對する欲求は能く經濟社會の好景氣なる場合に當つて、事業に意外の發展を遂げしめるが如きこともあるかも知れない。斯の如きは英米兩國の私設鐵道に對して、放膽なる自由競爭の認められた時代に、世人の實驗した所であるが、然らば是れが果して能く運輸交通事業の便宜を世人に普及する所以と爲つたかと云ふに、決して其然るを得なかつた。資本家が營利の欲求を基礎として、事業を經營する以上は、之を經營して、收利の目的を擧げるを得る方面に向つては、二重三重に資本の投下を促し、過度の競爭を惹起して、料金の低廉と爲ることもあるが、經濟發達の幼稚なる方面に向つては、事業の普及遲々として進まず、時に其行はれることありとしても、當業者は獨占の地位を擁して、一般人民に其負擔し得る最高限度の料金を課しようとする。經濟學に所謂最多額純益の學說（マキシマム・ネット・プロフヰット・セオリー）と稱せられるもの、即ち是れであつて、此學說に據つて定められた料金の行はれる場合に、當業者の收める利益は其最高限に上るが、國民の負擔する所の重く、其重き爲めに、斯業の國民に與へる便宜の制限されることは、論を俟たないのである。

國家の經營方針如何

運輸交通事業にして、其經營に伴ふ利益の國民に及ぶことが制限されて居り、或る國民は高率の料金を負擔し得る故を以つて、自由に斯業の與へる便宜を享有し、利用するを得るが、他の國民は負擔能力に缺くる所ある爲めに、何等の便宜をも享有し、利用するを得ないとしたならば、國民の全體に對して、經濟生活上に發展す可き機會を不平等ならしめるものであつて、經濟的不公正をして其甚だしきに至らしめるの嫌を免かれない。而して斯る不公正を除却する目的を以つて、運輸交通事業に於ける國有制度が承認されるに至つたものである以上は、國家が斯業を經營するに當つては、私人の經營する所と全然方針を異にし、第一料金は之を低廉にし、其標準は斯業の經營費を償ひ且つ事業に投下された資本の元利金を回收するを得る程度に限り、第二尙ほ人口稠密と爲り、物資移動の繁劇である爲めに、右の標準に依つて、定められた料金を以つてして、純益を生じた場合には、其純益を以つて、更に事業の改良擴張を工風する

こと、第三事業の經營に就ては、其對手とする個人なり、地方なりに對して、何等の差別を爲さゞることを以つて、根本の趣意としなければならない。

更に近時歐米諸國に於ては、國有主義の主張されるに當つて、二個の新しき根據が認められ來つたのである。其一は國有事業に於て、國家自ら其使役する勞働者に對して、優良なる勞働條件を承認し、勞働時間に於て、賃銀に於て、將た又勞働に關する保護規定に於て、總て一般社會に率先して、國家の爲す可き所を爲し、斯くて民間事業に行はれる勞働條件を向上せしめる一助とすることであり、他の一は國有制度の行はれることを機會とし、其事業の經營に就て、國家自ら勞働者團體の參加を認め、國家の力に依つて、所謂産業的民主々義の實現を謀らうとするものである。蓋し國有事業は今日多くの國に於て、隨分廣い領域を通じて、行はれて居り、隨つて官業に使役される職工勞働者の數の夥しきことも亦爭う可からざる事實である。現に我國に於て海軍工廠の所在する地方の一都會が何時の間にか發達して、一個の市制施行地と爲るを得る事實に徴しても、之を知るに難しとしない。然らば今、國家が斯く官業に於て使役される多數の勞働者に向つて、公正なる勞働條件を認めたならば、啻に彼等に取つて有利なるのみならず、一般勞働者に對して、勞働條件の進む可き標準を示すに至る道理である。例へば勞働組合の如きは、其重要なる使命の一として、標準賃銀の制度を立て、工場法に規定される勞働時間、勞働者保健の諸條項と相俟つて、勞働條件の改善を謀り、向上を期する點に於て、懸命の努力を致しつゝあるのであるが、尙ほ經濟社會の不景氣に陷つた際に悪辣なる資本家の乘ずる所と爲つて、折角多年の苦心に依つて、維持し來つた勞働條件を切崩される場合は少なしとしない。然も斯る際に多數の勞働者を使役する官業に於て、勞働組合に對する態度の公明なるを得て、公正なる勞働條件を取つて、動かなかつたならば、如何なる資本家と雖も、之に牽制されて、濫に勞働者を壓迫し勞働條件を自己に有利ならしめる手段を試みるを得ざるに至るであらう。勞働問題から、國有國營事業に對して、望みの囑される所以である。

國有事業に於ける産業自治

資本家と勞働者とは多くの場合に於て、利害の相反撥する關係に居り、前者の利益とする所は必ずしも後者に取つて、然るを得ない。殊に兩者互に階級的反感を持つて、相對峙する場合に於ては、其關係を調和することの困難なるは論を俟たない。然しながら國家は資本家なり、勞働者なりの階級に對して、超

適した地位に居る可きものであり、其國有國營事業を經營する場合に於て、假令ひ其形式から云へば、國家自ら資本家と同一の地位に立つものであるとしても、決して資本家たるの權勢を利用して、勞働者を壓迫す可きものでなく、何處までも國民の全體に對して、公正の取扱を與へる見地に據り、其使役する勞働者の團體に產業自治の權能を認め、斯業經營に關する重要問題は總て資本雇用者たる國家と勞働者團體との合議に依つて、之を決定せしめるの方針に出でたければならない。一旦國家にして其經營する國有事業に於て、斯る產業自治の制度を誘導したならば、獨り官業に於ける從業者の地位を高め、其能率を大ならしめるに止まらず諸種の民間事業に於ても、必ず其風の行はれるに至ることは、期して待つ可き所である。北米合衆國に於て數年前グレン・イー・プラムなる人、產業民主政治の主義を鐵道業其他の公共事業に適用す可きことを主張し、一時プラム案として世人の注目を惹くもの少なしとしなかつた。氏の案たる、要するに國家に於て現在の民有鐵道を買收した後、之を經營する爲めに、國家、鐵道業並に鐵道從業者を代表する各三名宛の人を以つて、一の法人を組織し、此法人は鐵道業を經營するに就て、營利を目的とせず、經營の費用並に鐵道買收の爲めに始め投ぜられた資本に對する利子を償うに足る程度に、賃率を決定し、從業者の能率增進又は費用の節約に依つて、右の程度を以つて決定された賃率の下に、尙ほ收入剩餘の生じた場合には、其半額を以つて從業者の所得とし、彼等の賃銀又は給料に據つて之を分配し、他の半額は之を公衆の所得に歸せしめるの主旨に外ならなかつたのである。此案は近頃プラム氏に依つて公けにされた著書產業民主政治（Industrial Democracy）に於て、詳細に說明されて居る。固より斯る計畫が實行されたならば、其資本主義を根柢とする經濟組織に大なる動搖を惹起す次第であるから、從來資本主義を金科玉條として、經濟組織を設けた合衆國に於て、直に其全部を容れることの出來ないのは、已むを得ざる所であるかも知れないが、經濟社會に於ける發展は國有主義の實際的方面をして斯る邊まで進ましめなければ、已まざることと考へられる。

我國に於ける國有主義の適用

以上論述した諸點を取つて、我國現時の鐵道、郵便、電信、電話の諸事業に就て、考へたならば、吾人は如何なる感想を懷くに至るであらうか。鐵道は日露戰爭後國有主義の勢力に支配されて、遂に全國の幹線鐵道を舉げて、國有とし、國營とすることゝ爲つた。鐵道の國有國營に供される重なる理由は之に依

つて運輸の便宜を廣く全國に普及すること、軍事上の必要に應ずるに遺漏なからしめること、運賃を整理し、國有の下に事業に統一を保ち、無用の競爭を除却し、冗費の節約されるに乘じて、賃率を低廉にすることの諸點に外ならない。然らば我國の國有鐵道は此等の諸點に就て、能く其目的を達し、流行に國有に為つたゞけの效果あることの證據を舉げるに至つたとす可きであらうか。日露戰爭以來國運を賭する程の戰爭の行はれた經驗を持たない為め、以前の官私鐵道併行時代と今日の幹線鐵道國有時代とを比較して、軍事上の輸送を行ふに就て、幾何の相違があるかは、之を立證するを得ない。隨つて此點に關する議論は姑く他日に讓るの外はない。次に國有の下に於て、運輸の便宜の地方に普及されたことは、明瞭の事實であつて、政黨殊に政友會が黨勢を地方に張る為めに行ふ所謂我田引鐵流儀の如きも、鐵道を地方に普及すると云ふ簡單なる見地から論ずれば、多少の效果を奏したと云へるかも知れないが、斯く擴張された鐵道が果して地方經濟に於ける實際の必要に適應したものであるかどうか、山間の僻地に鐵道を敷設し、僅小なる荷客を運搬して、以つて運輸の效を舉げたりとするが如きは、大なる間違であつて、寧ろ其費用を投じて、運輸機關を必要とすることの大なる都會若しくは其附近に於ける設備を全うするを以つて、當れるものとしないであらうかどうか、且つ從來鐵道建設に要する財源は專ら鐵道公債の發行に依つて、調達されることを常とするが、金融緩慢の場合には兎に角、市場に金融緊縮の傾向ある際に、鐵道の改良擴張に要する一億數千萬圓の公債を發行することは甚だ困難であつて、此難事を敢行する為めに、常に財政を通じて、金融市場を壓迫するの弊は之を免かれるを得なかつた。而して鐵道會計に於ては、常に若干の純益を會計上に存しながら、國有制度の實行されて以來賃金に、運賃に頻繁なる引上、行はれて已まず、斯くて國有鐵道は鐵道會計を通じて、國庫に收益を與へる為めに、運賃や賃金の形を以つて、國民に苛重の負擔を加へ、其負擔の大なる為めに、國民に與へる運輸上の便宜を制限するものに非ざるやの觀なきを得ない。固より近年に於ける物價騰貴の勢の盛なることを以つてしたならば、鐵道が假に民有民營であつたとしても、賃金運賃の引上げは、免かれ難き所であつたらう。是れ營利を目的とする事業に於て、利益金の分配される計畫の下に、資金の募集された以上は、當然の歸結とす可き所であるが、斯く民間營利事業に於て行はれると同一の事柄が國有國營事業に行はれて、後者の面目は如何なる點に於て、發揮されたとす可きであらうか。鐵道國有當時聲明された運賃低減と云ふが如き事は一場の空言に歸

し、國有鐵道が依然として國民に負擔を加へて、國庫の收入を謀るの具に供されるものとしなければならない。

郵便電信電話諸事業の經營も亦我國に於ては鐵道と同じく、國家の下に在りながら、國庫に收入を謀るの具たることは、私の遺憾とする所である。郵便の如きは其管掌する行政の種類甚だ多く、現に近年簡易保險にまで及んで居るが、其孰れを以つてしても、社會公益を舉げるの趣意に基くものである。保險の如き民間營利會社に於て、經營しようと欲すれば、經營するを得るものであるのに、特に小額の保險に限り、郵便局を通じて、國家自ら之に當ると云ふのは、要するに費用の低廉、手續の簡便に加ふるに、機關の確實を以つてして、契約者を安全有利の地位に置かうと云ふ社會政策的意義の加味された結果であることは、論を俟たない。然しながら郵便、電信、電話の如き通信事業に於ても、社會公益を舉げることを以つて、經營の第一義とす可きは勿論である。即ち是等諸事業の與へる便宜を廣く世間に普及する、其之を普及するに就ては、料金を低廉にして、國庫の收入を期圖しない、低廉なる料金を以つてして、尚ほ若干の純益を生ずる場合には、其利益金を投じて事業の改良を謀ることを眼目とす可きであつて、此一事を閑却したならば、通信事業を國有とし、國營とする意義は沒却されるものと認められる。

國庫支出主義と運輸交通事業

或は鐵道、郵便、電信、電話の如きは、總て之を無料として、廣く其便宜を一般公衆に及ぼすことを要すると云ふ說もある。即ち從來多年に亙つて是等の事業が課稅主義を以つて、或は手數料主義を以つて、經營され來つたものを一變して、國庫支出主義の下に、經營方針を置かんとする次第である。即ち運輸交通事業に對する料金が全然廢止され、何人も無料で、是等事業の與へる便宜を利用すると云ふことは、經營の費用全體を國家に於て負擔すると同一の道理である。國家は如何なる財源に依賴して、其負擔に當るかと云へば、多くの場合を通じて、租稅の收入を以つてするの外に、道なき次第であるから、結局國民全體に負擔を加へて、運輸交通事業に依つて、便宜を受ける一部の國民に恩惠を施すに至る。斯くて國費を以つて、一部の國民に偏重した利益を與へ、負擔の分配に就て、不公正の關係を生ずると云ふ非難を免かれない。是れが運輸交通事業の經營に於て、國庫支出主義の行はれることを不可能ならしめる理由に充てられるのであるが、斯業に依つて利益を受ける者は果して今日の實際に於て、一部の國民に限られると見る可きであらう

か、文明の程度進歩し、社會生活の複雜と爲るに隨ひ、運輸交通事業を通じて、國民の得る利益は決して一部の人々に止まるものではない。如何なる人も直接間接に諸般の利益を頒つ地位に居る以上は、一方に其利用を無料として、他の一方に經營の費用を國家に於て、負擔するとしても、何等不可なりとするものはない。恰も以前道路に通行料の制度があり、料金の收入に依つて、道路の維持修繕を辨じ來つたものが、道路の國民なり、市民なりに及ぼす利益の一般的に爲るに隨ひ、國稅なり、地方稅なりの收入を以つて、道路を維持する財源を調達し、一方に通行料其ものを廢止するの合理的であると、擇ぶ所なしと考へられるが如きである。隨つて此點から見れば、郵便電信の如きは之を無料として、人々の利用するに任せる、電話に於ても、今日架設に多額の費用を要し、然も加入希望者の需要に應ずるだけの設備を爲すを得ない爲めに、既設電話に權利金を生じて居るが如きは間違の甚だしきものであつて、電話を一の文明的施設と見るからには、一都市に於ける戸々の世帶には必ず一個の電話を國費の下に備へ付けしめ、國民をして其利用を盛ならしめ、個人間の對談に何等の料金の課せられざるが如く、電話に依る談話も亦無料で行はれることゝしなければならない。今日國有鐵道が國庫支出主義に據つて、經營される實例は濠洲聯邦に之を見るのであつて、千九百二十二年六月に終る一年間の統計に徵すると、總收入三千八百十九萬五千磅に對する營業費は二千九百八十一萬八千磅であつて、若干の收入剩餘を示すようであるが、更に建設并に設備の費用二億四千七百九十三萬六千磅に對する利子并に銷却步率を五分として計算した金額千二百三十九萬六千八百磅を右の營業費に加算すると、四千二百二十一萬四千磅と爲り、結局收入に對して經費の超過すること、四百一萬九千八百磅の多きに及ぶのである。斯の如きは要するに濠洲全體を通じて、民主政治の行はれること甚だ盛であつて、賃率運賃の極度に引下げられ、勞働者に對する待遇改善され、鐵道事故の起れる際に、支拂はれる損害賠償金の多額に上る結果に外ならないのである。

國庫收入主義の行はれる我國

然るに國庫支出主義の經營法から見れば、我國現在の運輸交通事業は全然之と異なつた國庫收入主義に依つて、經營されて居るのであり、鐵道にせよ、電信電話にせよ、將た又郵便にせよ、年々多額の純益を國庫に與へ、然も一方に料金の高い爲めに、國民をして負擔の重きに苦ましめつゝある。時に財政困難に際會して、國庫に增收を得る必要に接すると、租稅の增徵の

期し難き場合には、動もすれば政府は鐵道の運賃、郵便其他交通事業の料金に着目し、其れ等の引上げを行はんとすること、一再に止まらない。郵便料金中、信書の料金が重量四匁以下三錢に限定されて、久しき間、引上げの行はれないが如き、郵便事業から生ずる純益の大なる今日に於ては、當然の事實であつて、私の如き寧ろ引下げの行はれるを合理的處置とするものであるが、財政上增收を必要とするに當つては、一般物價の騰貴した程度と均衡を保たしめる爲めに、郵便料金引上げの說の行はれて、已まざるが如き、又事實電信料金や、度數制に據る電話料金の引上げの行はれたことに徵すれば、政府が社會公益事業の經營に就て、公益の擴充を念とせず、國庫增收の方便を得ることに於て、貪慾、飽くなきものである一事が明瞭と爲るのである。

國有事業に於ける勞働條件

我國の運輸交通事業に於て、其國庫に與へる純益の多いのは、料金の高きことを以つて、有力なる原因とするのは勿論であるが、同時に之に勝るとも劣らざる他の原因がある。即ち國家が是等の事業を經營するに當り、其勞働者に對する待遇は時間の點に於ても、賃銀の點に於ても、一般民間諸事業に行はれるものに比較して群を拔いたとす可きものでない。殊に官憲の勞働問題に對する理解は殆ど絕無であつて、政府は官業に從事する勞働者に對しては、團結權を認めないし、彼等の內で、勞働組合に加入する者があれば、其脫退を求め、又機會あれば、組合加入者を特に虐待するが如き、珍しき沙汰であるとしない。現に先年鐵道業に從事する機關手其他の現業員が團體を組織した所、未だ團體として何等の行動に出でない間に、官憲は之を邪魔物扱ひにして、百方壓迫を試み、遂に自滅解散の已むを得ざるに至らしめた事例すらある。何が爲めに官憲は斯く官業勞働者の間に、勞働運動の行はれることを阻止するに熱心であるかと云へば、成る可く低廉なる賃銀を以つて、劣等なる勞働條件の下に、勞働者を酷使し、然も彼等の不平不滿足に依つて、勞働爭議の惹起されることを防遏しようとする。鐵道現業員の既に然るが如く、郵便、電信、電信の配達夫、工夫、交換手其他の雜役人夫亦同樣である。世界何れの國が曉天から深夜に至るまで、日曜日又は祝祭日であると、平常の日であるとを問はず、郵便物の配達に酷使される配達夫が居るであらうか。勞働運動の發達した國に於ては、郵便配達夫の間に團結の存するのは勿論、鐵道現業員の如きは、其從事する仕事の危險であることとの爲めに、特に團結堅固であり、斯くて組合員の利益を

擁護するに遺漏なきを期するのである。我國の官業に從事する勞働者の間に、勞働運動を目的とする團結の存しない、團結はあつても、共濟組合類似のものに止まると云ふのは、要するに政府をして官業の經營上、勞働者を虐遇するに便ならしめ、彼等の苦役に依つて、事業の利益を增進するに資する所以であつて、私が國有國營事業に缺く可からざる所とする理想に背馳するの甚だしとするものである。

右の如く鐵道、電信、電話の諸事業に於ては、其純益如何に巨額であるとしても、經營の衝に當る者は嚴重なる任用令に依つて任命された官吏であつて、其行動には官吏としての制限があり、其俸給亦他の官職に於ける權衡に依つて、限度の存するものがある。一方に近年民業の發達甚だ盛なるに加へて、聊か規模の大なる事業であれば、大資本を擁する大會社に依つて、經營される爲めに、其資本金から生み出される利益金も亦莫大なる金額に上り、隨つて事業經營の首腦者の收める賞與金の如きは、官吏の俸給と比例を保つ能はざる位、巨大なることを例とする。近來我國民の間に官尊民卑の風の消失したと共に、人心著しく物質的に偏倚するに至つたことは、世人の一樣に認める所であるが、右の如く、官吏の給與の菲薄なるに對して、民間事業家の報酬の高額なることは、朝野の間に於ける人才の分布に如何なる影響を及ぼすであらうか。民間事業の經營者の內には、下級より出身した者もあり、又斯く下級者中から適材を擧げて、漸次上級に進ましめなければならないと云ふ說も行はれるが、實際に就て之を見れば、官吏の內で、少しく世才に長じたとか、事務の處理以外に、相當の識見を備へたとか云ふやうな人々は機會ある毎に、厚俸を以つて、民間事業に迎へられて、官界を辭する場合少なしとしない。斯くて年處を經る間に、官界は官吏の賣れ殘りを以つて、充されるの傾きを免がれないのであつて、我國の官界に對して、或は吏務の處理、捗々しきを得ないとか、或は執務が繁文縟禮に流れるとか、或は非常識に失して、彼等の相手方と爲る民間當業者を苦しめるとか云ふやうな非難の喧しいのも、畢竟斯る賣れ殘りの連中が器械的に吏務に執掌しつゝある一方に、補充す可き後進の人才の乏しい結果であらうと思はれる。

復舊の遲々たる運輸交通

大正十二年の震火災は我國の諸方面に於ける機關に損傷を與へ、打擊を及ぼし、今に至つて恢復を見ざるもの少なしとしないが、運輸交通事業が其鐵道であると、郵便、電信、電話であるとを問はず、其恢復せざるもの〻隨一であることは、吾人の

驚嘆せざる能はざる所である。運輸交通事業の社會に於ける關係の重大であることから、斯業に取つて必要缺く可からざる所を以つて目されるは、其活動の如何なる時期に於ても、斷絶するを許さゞる一事である。勞働者に同盟罷業の權利を認めることは、勞働に關する法制の發達した國に於ける定例であつて、同盟罷業に暴行脅迫が伴はざる以上は、合法的に之を行して憚らざる位に勞働立法も進んで居るのである。然も社會公益に關係ある事業に於ては、此罷業權の適用の制限されることが必要と認められる。換言すれば是等の事業に於ては、假令勞働爭議が起つても、事業其ものを斷絶せしめずして、之を解決する工風を凝すことゝ爲つて居るが如き、即ち公益事業に於ける常時不斷の繼續を必要とする證左とす可きである。

右の趣意を尊重して公益事業の總ての場合に之を適用したならば、如何なる結論に達するであらうか。勞働爭議を回避し、勞働者の權利と目される同盟罷業の自由さへ禁止して、事業の繼續を必要とするからには、例へば意外の災厄が起つて、事業に大なる損傷が生じたとしても、之に對して事業其ものゝ蒙る損傷を回避し、輕減し、或は急速に復舊するだけの準備が平生から講じられて居らなければならない道理である。殊に我國の如き平生國家が運輸交通事業を通じて、純收益を貪ることの少なからざる國であつて見れば、斯る非常時に對する準備の講ぜられて居ることは、當然とす可きである。我國の鐵道が暴雨に依つて、運轉を中斷されたり、電信電話が暴風の爲めに、不通に爲つたり、郵便物の安全亦必ずしも保障されなかつたりすることは、吾人の平生から遺憾とする所であつたが、今回の震災火難の後を承けては、總ての運輸交通機關は如何なる狀態に陷つたであらうか。其或る程度の破壞を受けるのは、彼の如き不可抗力に際して、已むを得なかつたとしても、破壞の程度の徹底的に及んだもの少なくなく、災後暫らくの間は殆ど事業休止の狀態であり、數箇月を經た今日に於て、尚ほ恢復の充分でないと云ふに至つては、何としても國有國營の制度に於ける本來の趣意に適したものとするを得ない。震災後今日に至るまで、對外的關係は頗る圓滿であつたし、今後に於ても亦同樣であると思はれるから、聊か意を安んずるを得るやうなものゝ、萬一外國と不和を醸し、之に對する軍事上の準備を講じなければならない場合に、運輸交通機關の狀態が最近數個月に於けるが如きであることを考へたならば、吾人は國家生活の上に於て、大なる不安を覺へることを禁ずる能はざるものである。而して啻に斯る國家非常の必要に處する點ばかりでなく、平生の國民生活に就て見ても、運輸交通機關が何時までも半身不隨の狀態に

居つては、物資の地方的移動も、通信の國內的交換も、勞力の全國に亙る分布も常に妨害され、物價の調節も困難と爲るし、生產地に供給過剩である物資は消費地に赴いて、其緊切なる需要に應ずるを得ないし、勞働者亦賃銀率の最も高い所に行つて、勞働に就くを難しとするし、一秒時を爭ふ位に、機敏を要する取引も電話電信の不如意である爲めに、需要供給の投合を得ざる場合少なしとしないであらう。運輸交通の復興は經濟復興の要素と爲るものであつて、運輸交通の狀態、今日の如くであつて、果して經濟復興の實を擧げ得るであらうか、大なる疑問と爲らざるを得ない。

將來の改善法如何

斯の如く運輸交通機關の復興の遲々たることに對しては、政府は其不可抗力に因る一事を擧げて、辯疏する次第であらうが、私を以つて見れば、之を以つて決して全部の辯疏とするを得ない。地震國たる日本に於て、地震並に之に基く火事の及ぼす損傷に對して、運輸交通機關の設備を保護しなかつたことは、一の失策である。又此種の失策は萬人の齊しく陷つた所であつて、獨り鐵道並に遞信當局者を非難するを得ないとしても、彼等にして平生設備や材料の貯藏に多少の用意を施したならば假令ひ彼の如き損傷を受けた場合に於ても、尙ほ其の復興復舊を急速にして、社會に與へる不便や、迷惑を或る點に縮小することを得たであらう。隨つて此點に於て、當局者に第二の失策ありとしなければならない。而して第一、第二の失策たる、要するに鐵道遞信等の行政に執掌する吏僚に相當の見識を備へた者がなく、歷代の鐵道大臣や遞信大臣も幾ら其人を更へたとしても、常に張三李四の徒であつて、其率ゆる吏僚と共に、一時凌ぎの行政で、辻褄を合せて居つたことの證據である。斯る運輸交通事業にして、其社會公益に關係することの甚大である性質上、今更ら之を民有とするが如き不可能の話であつて、何處までも國有國營を以つて、徹底せしめなければならないものである以上は、其行政組織に於て、根本的改革を必要とすることは、論を俟たざる所であらう。即ち鐵道、郵便、電信、電話の事業を其事業別に據り、又一の事業であつても、其行はれる地方別に據り、幾多の區劃に分割し、一區劃に於ける行政は國家從業者並に勤勞の受益者を代表する委員をして擔任せしめ、經濟上の事情に依つて、始めに定められた料金に依つて收納された純益は或る割合を定めて、其一部分を國家に對する納付金並に從業者に對する賞與金とし、他の一部分は料金低減の財源に供やることゝしたならば、如何なるものであらうか。勤勞受益者

の代表者にして、多少將來に備へて識見を持つ人々であり、又彼等の背後に居る公衆が彼等の任務に對して、理解を持つて居るとしたならば、此制度は現在の如き純然たる官僚の手に支配されつゝある國有國營の制度に比較して、運輸交通機關をして社會公益を舉げる使命を果さしめるに足りはしないであらうか。要するに國有に屬する財産は國民全體の所有であつて、經營亦國民的利害に訴へて、行はれなければならない。此思想の我國の國有國營事業に缺けて居ることが此種事業に幾多の弊害の生ずる根源と爲るのである。

清浦内閣の批判

文學博士　三宅雪嶺

□

偶然ながら何等か因果關係あると見えるのは、山本權兵衛伯と清浦奎吾子との間柄である。大正二年山本内閣が瓦解した時、清浦が内閣組織の大命を拜して、果さず、大正十二年の末に山本内閣が總辭職し、翌十三年の初めに清浦内閣が代りて成立した。前に　即位及び大嘗會の大典ある筈であつて、偶、皇太后の崩御あつて延引になり、後には皇太子殿下の御慶事を催さるべき筈で、大震火災の爲めに延引された。山本内閣で盛典に與かる心得であり、それを清浦内閣で引き繼がうとしたところも、前後相似て居る。前に清浦が所謂鰻の蒲燒の匂を嗅いだのみにて終り、後に蒲燒を味つた譯になり、只、十分に味ひ得るかが疑はれる。

□

山本が内閣を組織するや、當時一流とすべき者を閣員に据え付けようとする。前に政友會と共にした結果、原内相、高橋藏相、山本農相等とし、原氏も高橋氏も後に首相となり、山本男は政友會改革派で高橋と取換へようとしたりした。外相は後の牧野宮相であつた。後には特に政友會と提携せず、得べくんば

各黨首を入れようとし、それが出來ぬとて後藤、犬養、田等、世間にて首相級の人物とする所を集め、外相は伊集院男である。清浦子が前に組閣を企てた時、宗像壇の浦と云はれた者を内相に据え他は之に準じて居り、後に組閣する時も、二三流と視られる所の者を以てしてゐる。一流なる者が眞に力ある乎、二三流なる者が力ない乎疑問であつて、山本内閣が出來榮え悪く、清浦内閣が案外出來榮え善いかも知れぬと云へぬでない。第一流と目指される時は、最早や絶頂を越えようとし、力の衰へる嫌ひがあり、現に山本は數年前に較べて氣力が衰へたと認められた。談論風發しても、何處か力を缺いて居るとせられた。清浦は評判で人を集めるよりも、實際の能力で人を選ぶと云へば、それもさうと云はれさうであつて、自ら人を選ぶよりも、他で献立てするのを待つて居る形あるを何と稱すべき乎。

□

山本伯の集めた所は、評判倒れにせよ、兎も角も力を認められて居るのがある。一流どころは今でも一流たるを失はぬ。看板が宛てにならぬにしても、看板として掲げられて居る。その存命中、少くとも隠退するまで政界に波紋を描くに足りさうである。清浦内閣に加はつた者は、今後或は發展し、中に首相となるのがあるかも知れぬけれど、前清浦内閣員に擬せられた者を以つて推せば、餘り希望を囑し難いとせねばならぬ。前には不正事件で首を吊つた者があつたでないか。清浦子は用意周到、水も洩さぬ手際らしく思はれつつ、内閣組織に臨み、不手際の數々を示すのは何の爲め乎。原氏の組閣な 誰一人啄を差し挾むのがなく、明言した時は即ち決定した時である。他の内閣は種々様々ながら、清浦内閣ほど紛紜の多いのはない。五十幾年官吏生活し、政府關係の事は隅から隅まで知り抜き、凡ての手心を心得て居る譯であつて、組閣の一段になつて不手際なのは何の意味か、其處が他年官僚に育ち、現在の位置を贏ち得た所である。

□

明治維新、薩長土肥の出身者が政府の中堅となり、次いで薩長となり、更に長となつたが、他の地方の出身者に、之に附隨したのが多く、その中で、薩長又は長の爲めに重寶がられたのが少くない。薩長化と云はうか、長州化と云はうか、無くてならぬ人物とされ、無くてならぬと思はせて出世したのがある。新陳代謝があり、之を列擧し、官僚史を作つたならば、今更らのやうに思ひ當る事がいろいろある。井上毅とか渡邊洪基とかが幅を利かせた事があり、芳川顯正とか、渡邊千秋とかが羽振の

好かつた時があり、之に似たのがいろいろある。種々の淘汰を經、前に藩閥ならで登り得ないと看らゝた位置に登つたのは、平田伯及び清浦子である。桂公が内大臣になつて不思議がられた時、誰が平田の内大臣を豫期した乎。山縣公が樞相として大御所に擬せられた時、誰がその位置を清浦が占めるのを考へた乎。普通に望み難いとする官職を得たのは、權力ある所に同化するの巧みなのに由でて居る。藩長に好く、長で伊藤山縣が對立すれば、その雙方に好くして居る。元老の隨一なる伊藤の旨を奉ずるは勿論とし、根を張つて居るのは山縣、之に隨行して居るのが松方　立身出世するにその系統に外れてならず、その側で伊藤を悪し樣に云へば、之に相槌を打ち、山縣松方をして最も信用すべき者と思はしめ、群り集ふ官僚連の中軸を形造るに及んだ。それだけの才能及び知識あつての事ながら、何者かに依賴する癖が固り、上からの命令にてテキパキ事を裁きつつ、自ら決斷する場合に惑ひ、後入齋たるを免かれぬ。松方公が後入齋の本元たるのも、いくらかその關係よりして居る。西郷、大久保、伊知地等、幾人も頭を抑へるのがあつた。官僚は上官の命令で立派に働き、單獨でさう行かず、何うした事かと怪しまれる事がある。平田伯と清浦子と性格を異にし、一は自ら内閣を統率するの不適當なるべきを知り、一は半信半疑何程か政治家としての虚名慾に驅られる所がある。平田は放ても措いても食へず、清浦は煽てれば宜いとなつてゐる。藩閥なくて登り得ない位置に登つたものの、何處か藩閥出身者と違ひ、浮き腰になつて居り、實子と養子との違ひとも云へる。平田は已の能不能を知り下手して失敗しようとせぬが、清浦は樞相のみで果つべきでないとの己惚れ心がある。副議長から議長になつた時、或はそれを公生涯の打止めとしようとしたらう。何にしても元老の占めた最上の官職、勿體ない程に感じたらう。

〔〕

然し日を經て馴れれば餘り面白味もなく、今少しく派手で愉快な仕事をして見たいやうな氣がする。平田と違ひ縱横に應待し得ないでなく、世間で我が眞の能力を知るまいとし、取卷き連で、その打てば響く應待振りの巧みなのを賞め上げて已まぬ。世間に知合が多く、政黨者流と話合つたのも澤山あり、誰と話てもひけを取らず、樞相のみで終るのは昔ながら惜しいやうに思ふだらう。十年前に失敗したのは、自らの無能の爲めでなく、勢の已むを得ぬのであつたと思はれる。當時山本内閣が瓦解したものの、政友會と結托して居り、清浦の方で政友會と共にするの意あつても、政友會の方で餘り氣乘がせず、何か他に仕樣があると考へた。政友會はシーメンス事件の後添へにな

るを欲せず、體よく脱派と分れたけれど、新に清浦と結び付くの利益を危ぶみ、二の足を踏んだ。大隈内閣が出來る位ならば清浦内閣の成立するがよかつたと悔んだのもあるけれど、大隈内閣の爲め總選擧で二百名を一百名に叩き落されるとは思はず、我黨の結束を以てせば内閣を倒す事が何でもないとし、意外の結果で迫かの原氏も顏色を變へた程である。後の山本内閣は政友會と提携せず、政友會で是々非々と云ひつつ、何處ぞで打擊を與へようと待ち構へて居つた。清浦子は兼ねて政友會員と渕合ひがあり、その諒解を得るを可いとし、政友會員で謀議に與つたのがある。既に研究會の賛成を得、寧ろ懇望して已まぬのであり、貴族院内閣としては他の派もも惡感を催さず、話し付ければいくらでも付きさうであつて、それで政友會と諒解を得れば、御慶事を無事に濟まし得るは云ふ迄もなく、貴衆兩院を平穩に經過し、復興問題の片をつけ、思ふ儘に總選擧に望み得るとした。若し清浦子が今少し獨自の判斷を恃んだならば、いくらか態度を異にしたらうが、既に最上の位置に据り、前のやゝに輕々しく元老の意を迎へ難く、さりとて一了簡で心許なく感じては、彼にも聞き、之にも聞き、その間に種々のもつれを生ずるを免かれぬ。初め樞密院にあつて有松氏と謀り、之を内相とするの意あつて、反有松運動に驚き、考へ直す事にした。清浦が官僚の中軸となり、勢力の廣さに及ぶのは、他の一面から觀れば官僚が擔ぎ上げるに都合よいからであつて、献立して見せれば承知すべきものとした。山縣公ならば刄も立たぬが、清浦子ならばと云ふ事になる。

□

貴族院議員は主として華族及び官僚より成り、二者に共通なるは正邪曲直よりも利害得失を重んじ、好んで策略を廻らし、際どい藝當を演じて得意になる事である。圍棊指南者で華族に出入する者の云ふやう、殿様の狡いのには驚く、折角定石で教へても、人が氣付かぬつもりでだめを埋めたり何かして騙さうとし、騙し得れば大いに喜ぶと。圍棊のみでなく、總じてその傾向があり、平生鷹揚に育つただけ、人を窘めて無性に喜んだりする。宴會で葉卷烟草が無代價とて何本もポツケツトに入れる。何程のものでないが、得したつもりで喜ぶのである。特別に好い事するの習慣なく、何事かを爲せば徒らの嵩じた者のやうになる。それが年齢が長じても、何時までも付き纏ふて行く。官僚は之と違ふけれど、上官の命で事を爲すに慣れ、必要に臨んで何を爲しても好いとして居る。共に一個の人格として根柢より是非を判斷するに慣れて居らぬ。

□

英國の貴族も種々の缺點ありながら、政治を道樂とする跡形があり、その考へ方が日本より優つて居るのは、幾代の經驗で鍛錬し來つたによる。牛津、劍橋二大學は紳士養成所として知られ、その養成にタワイもない事があつても、比較的立派になる見込がある。チエスターフイルド卿の子息への教訓は頗る亂次ないものであつて、それを紳士の模範らしく心得るのは間違つて居るとするが、日本ではそれ程の心得方をする者も少いでないか。廢藩置縣まで殿様は甘やかして育てられ、その後とても事實上に變化が少く、性格を鍛錬すべき機會に乏しい。公卿は甘やかされる所でなく、窮して育つたといふが、酸いも甘いも覺えたとし、悪賢くなり、一個の人格とし正邪を決し、正義を以て勝たうとするやうな事は、殆ど全く見出し得ないでないか。學習院で何程教育されるか。單に貴族のみの問題でなく、一般世間に性格の鍛錬が足らず、紳士の形を裝ひ、紳士の心を備へぬとし、貴族院の人目に立つだけ、その著るしきを覺えるでないか。思想險悪と云ふのはある、正義を以つて爭ひ起つのがある乎。何處でも政界に權略の行はれるの常であつても、我が貴族院で權略の外に何事があるか。多數の團體なる研究會で内閣員の役割を議するが如き、國政を玩弄し、その非を知らぬ者とせねばならぬ。研究會は割合によく纏るが、その纏るのは利害關係であつて、他に悪影響を及ぼすを問はず、權力を擅にして自ら得たりとして居る。それが政治家の任であつて、政黨者流に何が出來るものかと嘯くを憚らぬ。貴族院に解散なく、頑張られては仕方がないので政黨が讓るなど、政黨の力ないが爲めとは云へ、これに最後の制裁を與へるの何者であるかを考へるのが可い。考へても分るまい乎。分らぬ筈はないと思はれるが如何にや。

□

清浦子は獨自の判斷を恃ます、人任せにして無事を期し、國務が如何になるかを慮らぬとして言ひ過ぎでない。藤村男を外相に据えようとしたのは、適不適は兎も角、外交問に對して一種の勇斷たるを失はぬが、反對を受けて直に遞相に移して了ふた。役割よりも一人餘り、誰を罷めさせやうか、自ら罷めようとするのがなく、そこで大木伯が自ら罷めやうと云ひ出し、感心な事と言はれるが、大木が眞に國政を以て任じたならば、自ら罷めぬ方が善いでないか。罷めるのが善い事になつて居るのは、大臣職を以て國家の難局に當るべきものとせず、榮譽を人に示して羨まれようとするからでない乎。話は古いがウヰリアム・ピツトの如き、首相職を榮譽とも何とも思はず、唯國家の重きに任じ、難局に膺らうとし、鞠躬盡力し、過度の神經衰弱で仆れ

た。研究會で內閣の役割りを學校の餘興の如く心得て居るのと雲泥の差ひである。藤村は末節に拘泥せず、外相だらうが遞相だらうが、時の宜しきに應じて何でも爲ると高を括るにしても、往々天皇の直屬と稱する陸相及び海相が、豫定を變ずるの餘儀なきに至つたのは何事乎。その爲めに牧野宮相まで引合に出で、上流者なる者の利權爭ひを遺憾なく暴露した事、之を尋常事とせば、何事を憚るべき乎。

□

清浦子の爲めに圖れば、樞相で終つたのが可けれど、樞相に安んぜず、首相として打て出で、有難味のついた樞相職の如何なものであるかを示すの利益あつたとする。貴族院の細工で出來上つた官僚內閣として、何の策略をも厭はず、普選問題が面倒さうで早くも提出しさうに仄めかし、十三年總選擧以後と言ひ振らす。今の所、嚴正公平に總選擧を行ひ、多數黨に明渡しさうであるが、水野內相及び鈴木法相は政友會改革派の色彩を帶び、或は總選擧に便宜を與へ、交換問題にするかも知れぬ。若し普選案を通過し、今議會又は次ぎの議會に多數黨と衝突し、普選にて現政府が公平に總選擧を行へば、區制の改正なき以上、目醒しい變化ないとし、幾許か政界を刷新し得ると思はれるが、そこまでの事を踏込んで爲し得るの勇氣があるまい區制の改正を避けるのも、現勢力との衝突を避けるに過ぎない。貴族院內閣として自ら貴族院に院令の改正を特出すなど、天晴れの離れ業と云へるが、そこまでの事は夢にも見る事が出來ぬ。何でも面倒を避け、利益を得たいのであつて、要するに殿樣の道樂の念入つたものに止まり、官僚は之に智惠を貸すのである。到底希望を囑すべきでなけれど、世界列國の趨勢を觀來り、特に太平洋の兩岸を觀れば、日本帝國の政府の無能を見るに忍びず、出來ぬまでも善い事を爲すを望まずに居れぬ。窮して通ずるの習ひ、今窮するのドン底に墮ちるものにせよ、墮ちて昇るよりも、速かに社會に處するの途を得るやうに望みたい。今の如くんば、尋常の方法で物足らず、非常の方法を挑發する恐れあると云ふが、之れ果して全く杞憂に屬する乎。

極端思想教化問題

教化に於ける具體的聰明の缺乏

土田杏村

一

大震災以來、わたくし達の周圍には、若しくはわたくし達をも含んで、所謂思想問題に關係の深さうな、少くも其れの當事者の心的動機は思想の問題であるに相違ない、幾つかの事件が起きた。龜戸事件、鮮人事件、大杉事件などを其の最も大いなるものとして、なほ其れの餘波とも見られる小事件を幾つか起し、最近には攝政宮殿下に對する不敬事件をも起した。勿論其れの當事者の思想的理解には幾多の缺陷があらう。最後の不敬事件の如きは、まつたくの狂人の所作であるかも知れないと新聞の評論などでは論じて居る位である。しかしわたくし達はわたくし達が等しく關與し、ともに其れを構成して居る社會の中に起きたどの事柄に就ても社會として持つ其れの責任を回避するとは出來ないのである。よし一人の狂人の爲した行爲であつてさへも、其の上には確かに明かに、社會の持つて居る意識の何かを反映する。竊盜の無い社會の狂人は、狂的行爲の中でも竊盜をなす爲方を知らないし、社會もまた彼の竊盜に類する行爲を一切取締らうとせず、また實際其れを取締る必要が無いであらうと思ふのである。此の意味に於てわたくしは、以上に擧げたすべての事件に就て當然に負はなければならないわたくし達の社

會の、また同時にわたくし達の、わたくしの責任を、十分に重いものと考へて居る、殊に最後の不敬事件は、當事者の人格もしくは心理如何に拘らず、とにかく事件の外觀としては、日本の二千餘年の歴史に決して起きたことの無い特異のものであり、從來の日本人としては、其れを考へることさへ、想像を超越したものでなければならないし、また歴史の事實として一度も其れが起きなかつた以上、事實として日本人は曾つて其れを考へることの無かつた事件であると思ふ。然るにわたくし達の社會は、さうした不敬心を懷くものの少くとも絶無ではないことの事實を現前に見せつけられた。わたくしが此の小論を社會へ公開しようと志して居た動機の由來は古いが、今たゞちに其れを文章の形につくらうと欲するに至つた直接の刺戟は、其の不敬事件の側聞により與へられたのである、ナトルプは資本主義の精神的意義を論じた彼の著の或る場所で、「よし資本主義は意義として一つの誤つた途を進んだものであらうとも、其れは反精神の國から來た、わたくし達にまつたく外的な盲目の運命では無い、精神自身が其れに責任を持たなければならない、精神固有の實行であつた」といふ趣旨のことを論じて居るが、わたくしはさらに其の意味を擴張して、わたくし達の社會の中に起きた如上幾多の事件を、ことごとく偶然に受けねばならなかつたわたくし達の社會の運命と見ないで、自由なる人格としての、嚴格の自責を其等　中に痛感したいと思ふのである。

わたくしは現在、社會を、とにかく自滅頽廢の方面に進まず、進歩の、生長の道程に於てあるものと考へて居る、言ひ換へればわたくし達の人格は、次第に自律し、照明しつゝあることの自覺をわたくし達は端的に自證するのである。人格が此く自照の積極道を進みつゝある限りには、社會には相互の人格によつての教化が行はれて居るに相違ない。わたくしは何の疑惑も無しに、其の斷定を受け取ることの出來るものである。人格の照明は、ことに社會としての人格の其れは、我れが彼れにより侵略せられないとか、我れの權利は彼れにより承認せられたとかいふことだけの孤立的、消極的の其れに止まらず、我の實行の餘剰を生じ、もしくは我の自照の映光をつくり、積極的に人格相互のあいだの愛となり　教化となつて働くものであるが、其れの結果は當然に人格の、社會の、進歩生長である。わたくし達が如上の幾多の出來事に遭遇しても、たゞ其れを狂人の所作と見過ごすことが出來、社會として殆ど何等の反響をも聞くことが無いといふのは、すなはちわたくし達の人格が、社會が、其れの自責を痛感しつゝも、なほ且つ豐富に雄ゝにしかも十分なる希望に於て、其等の出來事を超越し得、またじつに其れを超越

し了つたことの何よりもの證據といふものである。

歷史の出來事は、意味としていかに小なものであつたにせよ、其の正しいもの誤つたもの、すべて自我の實行の自責を擔ふものとして、同時に其れを自我の眞實なる足跡として、たゞ其の一つをも其れ、實在の前へ還元することは出來ない。歷史の改悟は、此れを舊へ戻すことには無くて、まつたく此れを超越するにある。すなはち復舊では無くて復興である。復興では無くて擴興である。其れの實行に純粹となり、其れの敎化に眞實となつたとき、わたくし達は現實のいかなる失敗と罪惡とをも、自我へのよそよそしい沈迷客と見ず、却て其處に自我の實行の彌激を、また深淵を自らに證識し得る、疎慵な事はわたくし達の悦ぶ落處では無い。人格の、社會の進步が敎化の積極的映發であるとすれば、人格の、社會の誤謬もまた槪ねは、正しく言へばすべては、敎化の一つの刻印である、たゞし此の場合には敎化の萎縮、敎化の殘滓が其の誤謬を僥したのであつて、敎化といふことの正しい反省は、たゞちに其の萎縮を伸達し、殘滓を熔融し得るであらう。わたくし達の社會が如上の遺憾事を含むに至つた根本の原因は、まつたくわたくし達の過去に持つた敎化の內容なり、爲方なりに、多少の誤謬を混じて居たことにあるとわたくしは信ずる。殊に其の最も大いなる誤謬は、わたくし達の社會の持つ幾つかの形式の敎化が、其れに最も肝要な其の內容と爲方との具體的聰明を缺いたことである。言葉を換へれば、わたくし達の社會を導く生活の方針が具體理想主義、もしくは象徵理想主義、もしくは表現理想主義、すなはち正しい意味に於ての現實主義となることに於て、幾分遺憾なるものがあつたからだとわたくしは考へるのである。其れ故にわたくしは此の小論の中で、わたくし達の生活樣式の具體的聰明とはいかなるものであるかを先づ考察し、次に日本が明治維新以來辿つて來た敎化の內容と及び其の方法を反省して、其れの誤謬を指摘し、併せて其れを超越する自我の、社會の實行を今後に經綸して見たいと思ふのである。

二

わたくし達は、すべて絕對的に確實なる主張をしようと希願するときに、(主張が絕對的に確實であらうとするのは、そもそも主張其のものの特質である。いかなる相對主義も、一の相對主義としての立脚地を得たときには即而に絕對主義となる。)其の根本の立脚地を、自我の、または人格の、直接自明なる活動の上に求めなければならない。或る人は、自我または人格の觀念は、個人の心意を單に槪念化したものであり自我の、または人

格の哲學は、前代の個人主義、英雄主義の、一つの變形に過ぎないといふが、(例へば其の批評を爲すものに長谷川萬次郎氏がある。氏が最近に發表せられた『所謂生活主義の教化に就て』といふ一文は、わたくしなどの教化主義を批評せられたものであるから、わたくしは此の小論の中で所在に其の批評にも答へる、といふよりは人格の哲學に對する氏の誤解に答へたいと思ふのであるが、)さうした意味の自我、または人格ならば、獨我論を克服しない以前の個人我、または個人人格、大乘唯心論に達する前の經驗唯心論の其れであつて、わたくし達の意味するものでは無い。わたくし達の考察に對象となるものは、其れが人間であらうと、社會、國家、法律、經濟、教化、其他の何であらうと、すべて意識せられた人間、社會乃至經濟其のほかであつて、絶對に意識を超越したものは、其れを信ずることも、また其れを考察することも出來ない。意識とは自我の、または人格の意識である。自我、または人格は、對象としての何物かを意識する。自我の死滅した後の世界を考へるときにも、其の世界を對象として意識する自我、または人格が背景になければならない。自我は生死一如に出入し、人格は有無同根に發動すると言へるのである。

　自我は何物かの意識として、究極には自我みづからの意識として同時覺照するが、覺照は意識みづからの自證である。自證せられて自我は絶對に在る。すなはち意識が生死一如に出入して覺照するは、自我が生死一如に來往して存在するが故であつて、在るは識るの根原であり、識るは在るの證智である。同根來往の識また在は、わたくし達の衝動、感情、意志など、すべての活動の根本形式である。識は無限に連續して唯一識であり、在は無際に自證して唯一在である。識は在を根として在を識證するものであるが、其れの純なる活動は、識の主格としての自我の自由なる活動を以て、自我の根としての在を無限に克服しようとする。自ら動いて自由に制限し、無限に克服して自らを超越するは、其れに制限して發揮すべき根據、超越して達すべき目標あるが故であり、わたくしは此の根據、または目標を規範、または價値と呼びたい。規範または價値を以ての在の制限、または克服は、すなはち生活の批判に外ならないが、其れ故にわたくし達の生活のあらゆる焦點は批判の形式を持つのである。

　わたくしは先きに、すべての存在、または思想は畢竟意識を離れ得ないと言つたが、其の意味から言へば價値は意識せられての價値であるけれども、同時に意識の根本的自己決定の根據であるから、論理の順序としては、價値を以て意識の自己決定

は制約せられるとも言へる。制限せられるものは決定の資料であり、自らに決定の原理を持たない。自我の決定は根本的決定であつて、其の決定により人間、社會、經濟其のほか一切の認識は成り立つのであるから、決定する原理は、決定せられる一切のものより望み、普遍に妥當するものとして確信せられる。純粹なる自我の活動の根本特徴は、單に形式的に普遍妥當的の制約を自我の在其のもの丶上に加へるといふことより外は無い。すなはち自我は自らに發した自由なる價値的制約を、不斷に、永遠に自我自身の上に加へて、自我自身を超越しつ丶ある。

しかし勿論、意識の焦點として現下に決定し、決定せられる部分は自我の全部では無い。自我は生死同根であるから、決定し決定せられる焦點に立たない、生の根の死、生よりもより強く生きる死の生は、其の背景に在る。焦點に立つた自我は、制限するもの、制限せられるものとして、最も抽象的、最も部分的の自我であり、制限するもの、制限せられるものは、併せて自我の大海の中に浮游し、其の自我の大海は、さらに其れを決定する自我の大洋の中に浮游し、此くして自我の客觀的對象は、すべて主觀的に自我の構成する、意味の無限の積層として確認せられるのである。批判の根本原理は、形式的に普遍妥當的であるといふより外のことは無いのであるが、生死同根の自我は批判する絶對自由の自我である許りでは無く、無限に豐富の内容を持つた決定せられつ丶生きる當體の自我であつて、兩者の合致したゞ　と支配する原理、もしくは精神は一々に、瞬々に、個別的、具體的である。わたくし達は意識の焦點が、自我の無限の内容の何れを覺照するか豫め測知することが出來ないから、生活の方針の綱領を豫め抽象的に作製することが出來ない。しかし、其れだから人格の哲學は、無内容なのでは無い。批判が行爲に、原理が實行に、連續的推移を以て表現せられ、象徴せられたときには、其の行爲、其の實行は、價値的、規範的でありながら、最も個別的、最も具體的となつて居るのである。露西亞の新經濟政策が、マルキシズムの形式(フォーミュラ)の正しい演繹であるかどうかは、其の政策と其の形式とを抽象的に比較しただけではわからない。マルキシズムの正しい發揮とは、マルキシズムの形式の根基に置かれた價値觀がいま妥當に表現せられ、象徴せられて居ることを意味しなければならないのである。

三

批判する自我と批判せられる自我との關係を、わたくしはなほ少しく詳密に考察して見よう。

批判せられる自我は、批判する自我に對しては所與となる。

カントのごとくに「外界より與へられる」といふことは、言葉として必ずしも妥當で無くとも、少くも其れが批判する自我の中に無いものでありながら、批判する自我への直接の關與者となり得る點に於て、其れは所與であると言はれるであらう。しかし批判する自我と批判せられる自我とは、有無相即し、生死同根であることを體驗し得るならば、兩者の關係は其れほどよそよそしいものでは無く、批判する自我自身が自らの根原に尋ねて、謂ふところの所與を課題として要求したものといふが、より正しいであらう。課題を解くものは批判する自我であり、批判せられる自我ではない。所與は其れ自身に何等の原理をも、また何等の價値をも持たない。だから生活の原理とは、じつは生活批判の原理であり、生活の價値とは生活の上に發揮する自我自らの價値である。（隨つて「生活主義」の敎化といふものはあり得る道理が無い。）所與としての自我、すなはち其れ自身に原理と價値とを持たない生活を、わたくし達は常に衝動と呼んで居るのである。

自らの衝動が何故、何のために自我の根原より發揮せられるかは、わたくし達の疑問を超越した問題である。其れは、日が何故東にのぼるか、樹木が何故地上に立つかを問ふと同じい、疑問としてまつたく意味を爲さない問題である。衝動の發揮は批判せられることは出來るが、發揮其のものを變更せしめたり、絕無ならしめたりすることは出來ない。しかし、其れだからと言つて衝動はまつたく無根據に、放縱に發揮せられるものでもない。衝動は自我の根原を爲す一つの潜勢が顯勢となり、インフィニテシマルが曲線となつて現はれたものではあるが、其れは外界の條件に對して生きた反應を示したのである。其の潜勢は、言はゞわたくし達の氣質、此れを民族的に見ては國民性であらう。また其れの顯勢に、機會を與へ、其れを條件づけるものは自我の環境と呼ばるべきであるが、此の如き環境にわたくし達は、地理的環境、社會的環境、文化的環境を數へることが出來る。其れ故に自我の批判に對立するものは、つねに氣質と此等の環境との融合勢力であつて、批判する自我自ら其等の勢力を作り出すことは出來ない。日本人が日本にあつて生活批判の原理を考へるときには、自づから日本人としての、わたくし達としての、わたくしとしての原理、もしくは價値なるべきである。また議會環境を無視しての政治原理、山本、清浦の超然內閣を除外しての政界革新運動は、日本の政治生活を營むものに取つてまつたく無意義なるべきである。たゞ其の融合勢力の上に、批判する自我の批判が加はり、其の結果批判せられる自我の氣質と環境とが改造せられ、今後發揮せられる自我の內容

が次第に大いなる變革を受けるは、當然の經過である。其の意味においては、批判もまた自我の衝動を作るといふことが出來るのである。或る氣質と環境との融合勢力の上に、批判する自我の焦點がぶつかつたとすれば、兩者の結合により一つの個別的、具體的なる、自我の實行を生むのであるが、其の焦點の動きは、すなはち自我の中心の動きであつて其の中心の連續的推移は、わたくし達の歴史と言はれるものである。自我の中心は自我の全部では無く、其の背景に、さらに大いなる自我の潜勢がひかへて居るけれども、歴史はたゞ其れを象徴的に表現するだけであつて、其れのすべてを顯勢とすることは無い。文化の歴史が偉人の歴史となり、民衆の其れを忘れがちとなるのは其の理由からであり、歴史の記述を見て、其の時代の民衆の意識焦點を知ることが出來るのである。

四

次に批判する自我は、價値、または規範に隨つての、其れを以ての批判を爲すのであるが、錯綜混亂したものは規範となることが出來ない。規範とは一貫した、統一した體系である。其れ故に批判する自我の動きは何れの焦點にあつても、其の焦點だけ飛び離れたものとなることが出來ず、其の焦點の批判を全體として、統一する何等かの體系の一點として全體を表現するものにならなければならない。もとより此の如き體系があらかじめ絶對的に定められて居るといふのでは無い。自我は其の焦點の意義を反省することにより、其の體系に達しようと努力し創造するのである。そして批判する自我の體系は、形式的に普遍妥當的のものでなければならない。價値の體系は立體的であつて平面的、直線的では無い。わたくし達は感情にも意志にも理解にも、其れ其れに一貫し、統一した價値體系を持ち、其等の價値體系はさらに廣汎なる價値の價値、すなはちプラトオンのイデア界、カントの目的の王國を建設しようと努力して居る。

五

わたくしは批判する自我と批判せられる自我の特質を、別々にやゝ詳しく分析することが出來た。最後に兩者の結合に就いてなほいさゝかの考察を加へて置きたい。批判する自我と批判せられる自我との結合は、其れの外より原理を以てなした統一では無い。其れは最も直接的なるわたくし達の體驗である。識る我は識られる我として直ちに在る。在るを根として識り、識るを證として在る。機境卽面に、間髮を容れない。わたくしは所與を衝動と見たが、衝動すら衝動として在るとき、すでに

照自識して居る。勿論其の機境が次第に高く構成せられゝば、構成のより進められたものは自我の內容として背景の滲勢よりより抽象的となつて居るから、在るは在り、識るは識るとして分裂を起し、例へばわたくし達が現前に對境として森羅萬象を見るごとくに、主觀客觀の別は明かになるであらう。主觀と客觀、在と識とを唯一無二に自證する體驗こそは眞實の自我である。主觀と客觀、在と識とは主觀の根本的一面であるに過ぎない。

在と識とが唯一無二に自證するときには、自我は即而に識を以て在を限定する。其處に自我の焦點を成立せしめ、背景に規範の體系を豫想する。此の如きとき自我はすでに太極を離れ、抽象的、部分的なる生活體系を創造したのである。眞に極妙貼體の自我は、此等の抽象的生活體系を相互に結合し、さらに其等の生活體系を無極の背景と結合するのであらう。其れはより高い價値體系を以ての統一では無い。寧ろ大いに流俗に墮して經驗的なる統一である。在と識との一體系的自證は先驗的自我の體驗であつた。體系的自證相互の結合を證識するものは經驗的自我の體驗である。わたくし、君、甲、乙と呼ぶ具體的個人の意義は、先驗的自我の其れよりも高い。具體的個人は、其れの無限の自我內容と自我批判を以て歩み、わたくしは君で無く、甲は乙で無い、其れに絕對の統一特色を持つ。すなはち經驗的個人に於て、在が識と相即する體驗の、經驗的に無二なる、生活の根の持つ特性である。わたくしは此れを個性と呼ばう。個性は規範を以ての活動ではないが、其れでありながら、其れの創造する途は機械的で無く、自らの根に發して自らを統一するから、アプリオリでは無いが、テイイプス(典型)であると言へるのである。

だから個性は、經驗的個人にあつて、批判する自我の中へもにじみ出せば、また批判せられる自我の中へもにじみ出すのである。批判せられる自我、すなはちわたくし達の衝動の働らく根柢に氣質を考へたのも、實は經驗的個人の根である個性を考へて居るのであつた。氣質と環境との融合勢力を動かすものは個性である。其れ故に露西亞の政治と英國の其れとの間には、形式の確然たる相違があり、獨裁政治は其れが資本主義國家なると社會主義國家なるとに關係なく、露西亞の民族的氣質に適合したものであらう。地理的環境がわたくし達の生活をいかに個性的に制限するかに就ては、わたくしは曾て別の小論で述べたことがある。唯物史觀が眞理としての正しさを發揮し得るは、社會的條件が生活の環境となつて、個性の發動に機會を與へ、其れを制限することを指示する限りに於てである。社會的機構がより複雜となり、より構成的となるに隨ひ、社會の統制すら

自我の統一力を離れ、其れ自身機械的に行はれる様になつて、例へば身體の諸機能を、神經系統とは別のホルモンが調整するにも似て居る。かうした時代にあつては、社會的環境は民衆の生活をむしろ國際的ならしめ、生活としての個性を脱化せしめる様にも見えるが、また其れは疑へない傾向であるが、なほ其れを統一する個性が全然的に失なはれることは無い。印度、支那及び西洋の哲學は、どれだけ發達して行つても、そして結論としては略ぼ同一の位相に到達して居ても、大乘哲學とプラトオニズムに體系の發展の融合が行はれ得ないといふものは、其れの文化的環境が其れ〻〻に異るからである。

　斯様にしてわたくし達は、日本の土地に生れ、日本の社會に育ち、日本の文化を享受し、なほ日本の民族的氣質を發展させて、今日まで生長して來たものであるから、わたくし達の生活の衝動は、一々に其等の融合勢力を離れることが出來ない。わたくし達の生活の問題はすべてわたくし達に特有なるものである。おのおのの科學たとへば社會學、政治學、經濟學などの學問的解決は、其れ〻〻の價位に隨つて普遍妥當的なる個々體系の中のものであるから、其れに個性的なるものを求めることは出來ないが、其等の學問的解決を綜合して、わたくし達の社會の問題に對すれば、其れに特有なる解決の個性を持たなければならず、また事實としてさうなるに相違ないのである。しかしわたくし達の社會は近代になつて其の範圍を大いに擴大したから、國際的の事件、國際的の思想が、わたくし達の生活に甚だ近い環境となつて現れるのを拒むことが出來ない。本居宣長の思想よりもレニンの思想はわたくし達の世界のものとして自我の焦點へより近い位置を占めるし英國の勞働黨の大勝利は革新倶樂部の一員が關係となつたことよりも、より強くわたくし達を悦ばすのである。此の意味に於て所謂外來思想を、日本固有の歴史の發展で無いからとして排斥する人にわたくしは贊成することが出來ない。其の社會的、文化的環境が擴大せられれば、外來思想はもはや、「外より來る」所與では無くて、「内より要求する」課題である。そしてわたくし達は、自ら個性に命名するに、「日本的」といふはもはや適當で無くなつた。自我の内容が此く十分に國際化せられたことは、取りも直さず自我の彈力性を強め、自我の確信に一層の緊張を與へたのであるから、わたくし達は其の傾向を慶賀し、其の展開に力を用ひなければならない。たゞ其等すべての場合を通じて、自我の焦點に個性が立ち、個性が要求し、統一し、且つ創造する中心となつて居ることは、いかにしても否定せられないのである。

　次に個性は批判する自我の中へもにじみ出る。わたくし達の

現實批判は、經驗的自我の過去の教養と理性とを根基としたものであるから、先驗的自我の批判と共のまゝ一致することが出來ない。すなはち經驗的自我の批判は其れの根に在る個性の色彩を十分豐かに帶んで居る。例へばブルジョア的社會に生長したものゝ判斷が、ブルジョアカルトの餘毒から離れ得ないのは、其の實例である。個性の發揮は其のまゝに規範的では無いから、個性的色彩を帶びた個人的判斷は、第一に自ら規範的となる樣に、其の個性的判斷の中の非規範的要素を除去しなければならない。すなはち經驗的主觀は先驗的主觀と一致しなければならない。其れこそは個人の、また社會の教養への第一義である。しかし此く兩者の一致を見た場合にも、其れに規範的なる個性着色の加はることは當然の經過である。例へば畫家の藝術が、藝術價値として唯一のものを具現しようとも、其れのテエマが其の畫家の個性を表現し、何枚でもの制作をなし得るは其れであらうと思ふ。

六

批判する自我と批判せられる自我との最も具體的なる結合につき、其のすべての記述を終へて、わたくしは今やうやく生活樣式を定めることに於ての具體的聰明を語るべき適當の場處に達した。生活の中心を眞に具體的に決定するものは、經驗的自我の全背景を占める個性であるから、在と識との結合する生活焦點は、在としても、また識としても、背景の個性を表現し、象徴するものである。生活の發展は此の焦點を中心として渦動的に進み、瞬時も其の展開を已めず、また其の焦點を離れない。其れ故にわたくし達の社會、もしくは文化、其のほかにすべてのものを、眞に「わたくし達」のものと呼びかける爲めには、其等を渦動の焦點に歸らし、眞に具體的なる個性我の中に吸收して、其等を個性我の表現、もしくは象徴として意義づけるのでなければならない。わたくしは此れを生活の具體的聰明と呼ぶのである。具體的聰明は、すなはち全民衆主義である。全民衆の個別的なる能力と欲求とが其れの妥當的なる、隨つて個別的なる發揮を爲し、マルクスの所謂、「能力に應じて各人から取り、要求に應じて各人に與へる」世界を達成しながら、其れの全表現としての、全象徴としての生活焦點（しかも其れは固定點では無くて常に創造しつゝある生產點である）を持つことである。其れはアナキズムの主張するすべての特徴を持つけれども、またアナキズムのごとくに中心表現の無い有機的ユウトピアニズムとならず、全生活を聰明に表現する焦點旗幟を持ち、生活の歴史的進展を凝滯せしめない、其れはまた、社會主義の

主張するすべての特徴を持つけれども、社會主義のごとくに機械的、非歴史的では無いし、のみならず生活の焦點が抽象的に全背景の上に獨裁的支配形式を取る虞れが無いのである。

わたくしは東西文明が適當に融合せられることを想像し得ない。其れが融合せられるに様に考へるのは、抽象的なる思考の世界に於てゞあつて、實行的なる自我の世界に於てゞは無い。融合はたゞ自我の焦點に於て行はれ、其の焦點を以て、其の焦點より始まらなければならない。しばらく我れを忘れて彼の上に立脚しようとしても、自我は生活の焦點樞機より瞬時も離れることが出來ないのである。わたくし達の國際主義は、其れの起點の無い抽象的國際主義では無くて、わたくし達の個性的中心に始まる實行的國際主義である。だからわたくし達は、生活のいかなる方針に對してゞも、まつたく同情を持たないといふ場合は無い、アナキズム社會主義、共産主義が自我の中に確固たる位置を占めるはいふまでも無く、帝國主義、資本主義、國粹主義、日本主義、亞細亞主義も、生活の全背景の内容として、何れかに、何ほどか、其の位置を占めて居る。其の何れかをまつたく虚無に歸せしめようとはしないで、其の何れかに凝滞しないやうに努める。言ひ換へれば其の何れかを抽象的に法則的に讃仰しようとはしないのである。わたくしが或る一つの主張をなしたとすれば、其の主張は既に死物となり、法則となり、再び用うる對境を失ふ。今此の小論を書きつゝ、其れが讀者に理解せられるとはまつたく反對の要求をも、わたくしは現に自ら内感することが出來る。そしてわたくしが其の反對の主張を公然發表したとしても、わたくしは自らへの操守を失つたとは信じない、何故なれば「能力に應じて各人から取り、要求に應じて各人に與へる」世界は常に固定したものでは無く、其等の能力と要求とが生活の焦點に對する關係は、焦點自身の創造的進展とともに不斷に變化しつゝあるから。わたくしは規範の絶對的優位を信ずることに於て、一個の絶對主義者であるけれども、規範の實現は個性我の生活焦點を離れて其實行的意義を失ふとする點に於て、一個の相對主義者である。絶對主義を含んでの相對主義者である。生活の具體的聰明とは其の立場を指したものである。

七

二等邊不等邊其のほかいろいろの形をした、大小幾つかの三角の圖形をわたくしは今眺めたとする。其れ々々の三角形自身の法則に隨つて、二等邊はたしかに二等邊、等邊はたしかに等邊に相違ないのであるが、わたくしに見える圖形は、容易のこ

とでは二等邊または等邊とならない。たゞ或る一つの位置に於てのみ、其れは二等邊または等邊に見えるであらうが、其時でさへ圖形の大いさとわたくしに見える其れの大いさとは同じものでは無い。其他の位置に於ては、いかなる二等邊、等邊も、おほむねは不等邊三角の圖形となつて見えるのである。わたくしは今平面の圖形を考へたのであるが、若し對象を立體のものにしたとすれば、もはや對象はどの位置に置かれても、直觀的には在りのまゝのものに於て認識せられることが無いのである。

然らばわたくし達の認識は、すべて相對的であり、普遍妥當的のものでは無いかといふに、必ずしもさうでは無い。對象となる圖形は、其れに固有なる普遍妥當的の法則を持つて居るし、わたくしが其れを認識する爲方もまた、透視畫で示すやうな或る普遍妥當的の法則を持つて居る。其れは正三角形であるとする眞理の體系と其の同じい圖形を不等邊三角形として認識したといふ眞理の體系とは、例へば社會主義、日本主義といふに同じい、其れの統一樣式を異らしめた別個の眞理體系である。其等はともに普遍妥當的の眞理であると同時に、其れの認識の實行的焦點を持たない。其等の眞理は、或る假想的の座標軸により統一せられた別個の隨性系となり、其儘何處へ持つて行かれても、其の體系に何等の歪みを生じない。若しわたくし達が、其等の眞理體系相互の關係を明かにしやうとするならば、いかにしても其等の體系を個性我の生活焦點に結びつけなければならない。言ひ換へれば、單なる觀念的眞理を實行的眞理に變ぜしめなければならない。其の機能の行はれる場所は、個性我の生活焦點の外には無い。實行的眞理に變へられた三角の圖形とは、現にわたくし達が認識しつゝある其儘のものである。わたくしは此事を具體的聰明と呼んだ。

生活の方針は理想主義の具體的聰明によつて求められなければならないとすれば、教化の方針は、またつねに其れを離れてならないのである。具體的聰明を離れた生活の方針、もしくは教化の其れは結局に於て勝利を占めることが出來ない。其れ故に單に抽象的に定められた生活または教化の方針が取られて居るときには、歷史の事實的推移は、つねに其れと衝突を起し、結局抽象的の方針が具體的のものに變り、所謂具體的聰明が勝利を占めるやうになるのである。わたくし達はかうした實例を大戰後の社會改造論の變遷の上に幾つと無く見て來た。其の第一には、露西亞の新經濟政策がある。其れはマルキシズムの抽象的眞理體系が、露西亞の生活の實行的焦點に齎らされたことを意味する。新經濟政策にあつては、私的資本主義と呼ぶ、マルキシズムとは全く反對の眞理體系さへ、其の同じい實行的焦

點に齎らされて、具體的聰明を持つた實行的眞理となり、マルキシズムと大いなる衝擊を起さずに其儘互ひに結びつくことが出來たのである。また近來の社會改造論が、資本と勞働との間の階級鬪爭を以前ほど高調せず、言ひ換へれば生產と分配との問題に以前ほどの關心を持たず、むしろ其の觀點を流通の問題の上に移したことも、大いなる注意の拂はる可き現象であると思ふ。資本と勞働との間の階級鬪爭を基礎概念としてすべての社會現象を統一し、且つ其の理論の上に社會改造の方策を建設することは、少しも誤謬では無く、其れ自身で立派に一個の眞理體系として成り立つことが出來る。しかし其の同じい資本主義をクレデイテイズム（信用主義）と言ひ換へ、同じい社會現象を信用の獨占といふ基礎概念によつて統一し、其の理論の上にダグラス氏のごとき社會改造方策を建設することも、亦決して誤謬では無いのである。たゞ此等の眞理の何れが生活の焦點に來る實行的眞理として妥當であるかは、具體的聰明の原理によつて定まる。大戰後日を經るに隨ひ、社會的構成は整頓せられ、階級鬪爭の最も直觀的なる表現形式である同盟罷業のごとき、此れを實行するに大いなる困難を感ずるに至れば、其處には自づから具體的聰明の原理がはたらいて、ダグラス氏の改造計畫のごときが世の注意を惹くこととなるのである。最近にラッセル氏が產業文明の前途を論じて、現實の主たる問題は資本對勞働の其れでは無く、產業主義對人間性の其れであると論じ、產業狀態の未發達なる社會主義國家は、却て同樣狀態の資本主義國家と、あらゆる點に於て類似して居ることを指摘したなども、從來の社會主義的理論が具體的聰明を一層發揮するに至つた一つの證據であると思ふのである。

八

右に述べたと同じい着眼を以て、わたくしは次に日本が維新以來辿つて來た生活並びに敎化の方針を槪觀し、隨つてわたくし達の現在立つて居る地位がいかなる性質のものであるかを幾分考察して見たい。

明治維新より世界大戰に至るまで、日本が取つて來た生活ならびに敎化の方針は、純一に統一せられ、且つ具體的聰明を相當によく發揮して居たとわたくしは考へる。ことに維新と同時に發せられた五個條の御誓文はまことに立派な創作であつて、日本の民衆の生活潜勢が、維新のときに於て類比の少ない旺盛なものであつたことのよい證示となつて居る。維新とともに日本は、產業狀態のはなはだしく未發達である國家を以て、すでに產業革命を經過し、相當に發達した產業組織を持つて居る

外國に伍することとなつた。かうした國家が第一に取る可き政策は、外に軍備を整頓して外國の侵略に備へ、內に產業を發達せしめて國民生活の內容を豐かにすることとである。革命後の露西亞が取つた政策が、まつたく其れであつた。其れ故に日本は、「富國强兵」を國民生活の標語とし、一方には軍國主義を、他方には自由商業主義を發達せしめた。言ひ換へれば、軍國主義の眞理體系と自由商業主義の其れとが、日本の個性我の生活焦點に齎らされたのである。わたくしは明治初年の政治家が此の國策を取つたことを誤謬であつたとは考へない。維新と同時に社會主義制度が實施せられたとしても、其の社會主義的政治家は、おそらくは同樣に軍國主義と自由商業主義とを國策の二大標語として取つたに相違ない。其れ故にわたくしは、日清日露の戰役は、日本が社會主義を採用して居た場合にも、彼れと同じい經過を以て起り、一旦其れが起きた以上、わたくし達はやはり其の戰役に勝利を占めなければならなかつたであらうと考へる。其れと同じい場合は革命後の露西亞に於ても見られることであつた。露西亞は社會主義的革命を遂したけれども、其れには赤衛軍の勢力の强大なることが缺くことの出來ない條件であつたし、且つ英佛の應援を受けたデニキン、コルチヤツク等と戰ひ、西比利亞では日本の强大なる陸軍と戰ひを交へなければならなかつたのである。假りに露西亞が此等の戰爭の何れかで敗北したとすれば、革命其のものも亦根柢より壞滅せられるより外は無かつた。其れ故にわたくしは、日本が過去に取つて來た軍國主義を全部的に誤謬であつたやうに言つて排斥する意見には同感することが出來ないのである。言ひ換へれば觀念的眞理としての軍國主義思想體系は普遍妥當性を持つことが出來ず、其れに多くの誤謬を含んで居たにせよ、日本の實行的眞理として生活の焦點に齎らされた其れは必しもまつたく誤謬では無かつたと信ずるのである。

世界大戰後の日本は、大戰前の其れと、社會的構成の意味に幾多の變改を加へなければならない地位に達した。其の第一の原因は、軍國主義と自由商業主義とが一先づ其の目的を達したことである。軍備としても經濟的資力としても、日本は今やまことに世界の最大强國の一つに列して、維新以來の目標の最も大いなるものは、もはやわたくし達には必要で無いことになつたのである。其の第二の原因は、大戰と同時に特に著しく興隆した世界主義、國際主義のあらゆる思想の洗禮から、日本も亦まつたく無關係に居ることは出來なくなつたからである。民衆の中の或る部分は、一括して此れを外來思想と呼び、單に偶然的に日本に輸入せられた樣に考へて居るけれども、其れは時代

の眞相を誤つて認識したものである。其等の所謂外來思想の多くは、人間の道義的良心として、わたくし達が現に生きて居る社會の前提よりもはるかに正しいものであるから、其の來る外的形式はいかにも外來的であつたが、眞理體系としての認識は必然的であり、且つ普遍妥當的であつた。此の二つの原因により、日本は今舊生活方針を棄却し、新生活方針を建設しなければならぬ重大の地位に達して居るのである。教化の樣式にもまた新らしい展望をつくることが必要となつて來た。しかし其處には當然、方針をつくる二つの中心があつて互ひに葛藤するを見る。其の一つは、明治時代を生かして來た眞理體系は、生活方針として今なほ無義になつては居ないと考へる思想であり、其の他は外來思想と稱せられる世界思想、國際思想こそは、今後の生活を生かす唯一の眞理體系であつて、日本は今やうやく舊軍國主義、舊自由商業主義の狹い見解より解放せられ、世界的に、國際的に妥當する眞理體系の中に自らの生活を處することが出來るやうになつたと考へる思想である。此等の思想の本質如何に拘らず、世界主義的、國際主義的思想が民衆を支配する勢力は次第に强められ、且つ軍國主義と自由商業主義とが其の目的の達成に一段落を劃したことは、事實的に、愈々明かに證明せられた。しかし教化運動としての此の二大體系の間には、何等の融合も計畫せられることは出來ないし、體系の統一力は反動的に却て强められ、他の小さな思想體系を自らの中へ同化したがために、思想體系としては右の二つが最も明かなる特徴を發揮し、社會形態としても其れの客觀的構成を進めることとなつた。わたくし達の社會では最近に、此の小論のはじめに書いたやうな幾つかの事件が起つたといふのも、專らいま分析した社會的狀勢の結果から來たことであると思ふのである。

歷史的時代の此の特別なる地位にのぞんだわたくし達が將來の生活方針を經綸するに何よりも肝要なる注意は、わたくし達の具體的聰明を失はないことである。現在明かなる對角を示した舊新二つの思想體系は、個性我の生活焦點を離れてたゞ抽象的に、たゞ觀念的に見られたときに、其れ々々獨立した二つの思想體系である、其の二つが眞にはたらく思想となるためには、個性我の生活焦點に齎らされて一の實行的眞理に變成せられることが何よりも必要である。然るに舊思想體系に固執するものも、新思想體系を歡迎するものも、ともに彼等の思想體系を觀念的のものと見ず、實行的中心はいつでも其處に止まり、體系形態はいつまでも其儘に保たれ得るものと考へて居る點で、大いなる過誤を侵して居る樣である。具體的聰明の原理の缺乏して居ることこそは、現在の日本の最も大いなる病原をつくりつゝある。

九

此の批評に現實的開眼を與へるため、わたくしは次に日本の教化運動の事實を解剖し、併せて其れの修正方法を講じて見たい。

明治時代を生かして來た教化運動の倫思想體系にあつては、生活方針の二つの中心に相應し、教化の方針としても一方では軍國主義的精神が取られ、他方では自由競爭主義が取られた。すべての文化生活は、國家生活の前に其の色彩を失ひ、國家内の各個人は、互ひに自由に競爭す可きやうに導かれたのである。此の教化精神は現在もなほ甚だ堅固であつて、時代の地位に作はず、至るところ大いなる破綻を暴露しつゝある。ことに國家は其の外形の發達にすべての力を注ぎ、其れの成員の發達を實質的に豐かにしようとは考へなかつたから、（現在の露西亞がやはり其の方針を取つて居る）國家に對する個人の犠牲心は極度にまで高調せられ、其の反對に國民の教育は甚だおろそかに取扱はれて居た。近來澤柳博士が公表せられたところに隨へば、政府が國民の教育の爲めに支出した費用のすべては過去五十年間に僅かに四億であり、過般の西伯利亞出兵の費用にすら及ばないといふことであるが、其れを以ても我國の教育事業が過去に於ていかに貧弱のものであつたかは察知出來るのである。極端に言へば、國家の他の費用に比較せられゝば、國家は此れまで國民の教育に就て、何等の顧慮をも拂はなかつたといつても其れほどひどい過言ではあるまい。從來の教育は、軍國主義と産業的發達といふ、國家の生存に直接の關係を持つ生活の經營の爲めに犠牲とせられ、非常時の其れになつて居たのである。此の二大精神の達成の爲めに、國民は半世紀の間みづからの教育をさへ顧みること無しに生きて來たのである。義務教育の年限があまりにも短少なるは、勿論のこととして、社會的教育のごときは、從來全く其れに着手せられてさへ居なかつた。其れ故に國民の平均的教育程度は、容易に安心の出來るものでは無く、わたくしは其の證據を幾つでも確然と擧げることが出來る。

國家的精神を其の極度にまで刺戟し、興奮せしめ、他方に於て個人の自由競爭をいさましく奬勵した結果として、其の教化運動に携はつた教育者、教育學者の殆どすべてと其れに教育せられた國民の大いなる部分は、いまなほ社會を發見し得ないで居る。例へば教育學者は現に、個人と社會との關係を研究するけれども、其の所謂社會は單に心理學的のものであり、のみならず彼等は其の社會を直ちに國家と同一視し、國家以外に幾多の

本質を持つた社會の存在すること、また存在すべきことを、其の思索の上にのぼさない。其れ故に民衆が經濟、政治等の價値を其れの指導原理とした社會の建設を計畫するときには、舊思想體系の信奉者は、此れを目して國家的統一に何等かの危險を及ぼすものゝ如くに言ふのである。例へば彼等の眼には、社會主義的思想團體などの成立するは勿論のこととして、勞働組合の組織せられることさへ、國家を破壞するものゝ如くに見られて居る。言ひ換へれば國家內に於て、現に其中に成立して居るに相違ない各種の思想體系が、其の形態を客觀的に組織化せしめ其れ〻〻の體系として相爭ふことが、すべて國家の統一に危險であると彼等には見られるのである。現在の露西亞が、根本的に世界主義的、民主主義的理想を取りながら、露西亞國家としての統一を失はないことに全力をつくし、共產黨以外の思想運動團體の成立を妨害することは、我國從來の政策とよく類似するものがある。

日本の個性我の生活焦點へ、嘗ては軍國主義と自由商業主義との思想體系が現はれた。其れは日本の個性我の生きる當然の途ではあつたが、其れには同時に幾多の過誤を作つた。過誤は歷史の生長に必然的の其れであり、其の起らなかつた以前の歷史へ此れを還元することが出來ない。わたくし達は今まさに其等を超越す可きである。軍國主義のかはりに國際主義を、自由競爭主義の代りに、社會連帶主義を取ることは、過去の教化の錯誤を救濟し、其の殘滓を熔融する第一の途であらう。そして國家と個人とのほかに、わたくし達は社會を發見し、創造しなければならない。繰り返して言ふが、軍國主義と自由商業主義とは、其れ〻〻に獨立した抽象的、觀念的思想體系であり、其れ自身には何等の價値をも持たない。其れに價値を與へるものは批判する自我であり、其れが價値を得るは自我の生活焦點に來り、具體的實行的眞理となつたときである。既に生活の焦點をはなれ、其れ自身に成立する抽象的、觀念的思想體系となつたものに固執し、其れを中心として生活を統一しようとすることは、生を死に、現在を過去にまで實行を觀念に化成せしめる誤つた途であると思ふ。

十

最後にわたくしは、新思想體系の信奉者の教化運動を批評して置きたい。此の場合にも、其の人達の教化の傾向は、抽象的に過ぎて具體的ではなかつたと考へる。言ひ換へれば其の教化の精神は、其れ自身に普遍妥當的に成立する觀念的思想體系であつて、實行的眞理では無かつたと思ふ。其の二三の缺陷と、

ならびに其れの修正方法を述べるならば、第一に、彼等の教化の方法は單に宣傳的であつて教育的では無かつた。第二に、彼等は暴力の價値を餘りに強く主張し過ぎた。第三に、彼等は舊社會的機構の破壞革命を餘りに容易なるものゝ如くに宣傳し過ぎた。第四に、彼等は哲學、宗教などの他の生活價値を無視し、專一に經濟的價値に固執した。第五に、改造の手段として現實の國家勢力を輕視し過ぎた。一言を以て蔽へば、彼等は社會主義的諸主張を、餘りにも原理通りに持ち出して、實行的眞理より遠ざかり、早くも其の主張を知識化し、觀念化して了つたのである。其れ故に以上の傾向の何れかを抽象的に信奉するものは、すべて事實的に大いなる過誤を自らの上へもまた、社會の上へも加へることとなつた。殊に彼等に惜む可きことは彼等が其の眞理體系を民衆に傳へようとするときには、ひとへに宣傳的となつて教育的では無かつたことである。觀念的眞理體系を中心とし、生活の焦點を其處へ强制的に引き寄せようと努めるときに、其の教化的の努力は宣傳となるし、自我の生活焦點を中心とし、觀念的眞理體系を其處へ引き寄せようと努めるときに、其の教化的努力は教育となる。然るにわたくし達の生活は瞬時といへども批判する自我と批判せられる自我と 個性的結合點、すなはち生活の焦點から離れることが出來ないのであるから、言ひ換へれば生に中絶は許されないのであるから、教育を外にした民衆の教化は實は教化で無い。行爲の價値の高められるは、規範を以て自我自ら自我を律する、識內在の生活中心に働らきかける教育の外には無い。社會主義運動に携はる人達の中に教育の自律的意義を考へる寛容さを持つたものゝまだ澤山になかつたことは、言ひ換へれば彼等の教化運動に於て獨裁的傾向が可成り多分に現はれて居たことは 社會主義思想の將來の發達に、一つの暗影を投ずるものでは無かつたかとわたくしは想像するのである。此く言へばわたくしは更に、わたくし達日本人の固有する民族心理の中にも、批判せられ修正せらるべき何等かの缺陷が潜んで居るのでは無いかと反省せしめられる。軍國主義と階級鬪爭と、其れの精神はまつたく違つて居るが、理性によらない獨裁的、他律的行動を悦ぶ點では互ひに共通したものを持つて居る。わたくしは過去と現在とに同様に發揮せられた運動の傾向が、日本人の民族的氣質に由來したのでは無いやうに祈つて已まないものである。

要するにわたくし達の生活の出發點は、在と識との結合する眞の實在である。自我の内容は 其の焦點の背景をなす全體であるから 無限に豐かであり其中には獨立した幾々の觀念的思想體系が成立して居る。其等の體系の意味は創つて進む生活の

焦點と關係することにより、不斷に變化するのである。方法的であるといふことは、其の着眼點が抽象的の觀念では無く、最も具體的に與へられた實在だといふことである。其の意味に於てアインスタインの相對的原理は、ニユウトンの力學の法則よりもより方法的であつた。わたくしの所謂具體的聰明の意味は、其れ故に原理としてより方法的に、したがつてより相對的に進むにある。觀念は間隙を許すが、實在は連續である。眞に實在的に進みをなす歴史は突然の飛躍を許さない。飛躍はたゞ觀念的なる想像の世界にあつてのみ可能である。わたくし達はたゞ直接的に、また現實的に、生より生に進み、其れに瞬時の死、または強殺の介在することを許さない。其れ故に漸進は個人の道德であり、また社會の愛である。實在無き眞理は空虚であり、表現無き實在は暗黒である。現代の缺乏はひとへに生活の具體的聰明にあるとわたくしは固く信ずるものである。(完)

暴力の行使と其本質的過誤

柳澤健

一

己れと主義思想を異にする者に對し暴力を用ゐてこれを壓すといふことは、何ゝの邦、何れの時代に於いても洩れなく見らるる現象であると言はねばならない。殊に、各人の間の主義思想の隔離をば大きなものにするある社會的動亂の時期に於いては、この現象はわけて著しい。近世史を探ねてその最も典形的の例をば誰しも佛蘭西革命史のなかにこれを發見しやう。極く近くでは露西亞革命史のなかにこれを發見し得る。我日本に於いても、明治維新の動亂の時期は、この好箇例の一つである。

今日の日本が、世界に蕩搖する不安なる空氣の波動を受けて一種の社會的動亂の時期に際會してゐることは疑ふべくもない。從つて我々が今日各方面に於いてこの不吉なる暴力の行使

を一端的に言へば暗殺行爲を、見せらるるといふことは、この過去の歴史の示す跡からすれば左して駭くべき現象とは云へぬのである。

然しながら、暴力行使の風潮を目して、社會的動亂に伴ふ必然的の結果であるとなし、その社會的動亂の靜止せらるる日の到達を見ざる限りは、この不吉なる風潮の瀰漫をば斷じて抑止しがたいものとのみ見ることは、現代に於けるこの暴力行使の現象には從前とは異つたある特異性が存するといふこと、並にその特異性が暴力を是認し傳播して行くに至極重要なる役割を演じてゐるといふことを見逃がしてゐるものであると言はざるを得ない。即ち、この暴力の行使の風潮を抑止する爲めには、その根本に溯つて社會的動亂それ自體を取鎭めるに努めねばならないとともに、一方こゝに言ふ、暴力行使の特異性をば明確に認識してそれに對する對策をも攻究することを計らねばならぬまいと自分には信ぜらるる

二

客年の所謂甘粕事件の當時、甘粕某を非難する者の多くは、彼が思想に對するに思想をもつてせずに暴力をもつてこれを爲したことを攻撃した。其以前赤化防止團長米村某の社會主義者射殺事件のあつた當時も、さては、原總理大臣の暗殺事件のあつた當時も、この「思想は思想をもつて戰へ」といふ言葉が何よりの恰好なる標語として幾多の論者に使用されてあつたやうに記憶する。

然しながら、この「思想は思想をもつて」といふ言葉は、極めて無批判無反省に使用せられたものであつたことを感ずる。一應尤もらしく一見妥當に、見えるだけに、多くの人々は何等それを吟味して行くことなく、漫然この言葉を便利なる合言葉として採り入れたかの觀がある。が、今更めてその言葉及びそれに盛られてゐる思想を吟味するならば、斯くも現代に於けるこの種の現象を批判しさては抑制して行く爲めには、決して妥當でもなく尤もらしくもないものであることを發見せずには措くまい。自分が呼んで現代の特異性となしたのは要するにこの種の現象が世人の考へるやうに「思想は思想をもつて」は容易に解決し得ぬ難點を有するものと認めたからに他ならない。

思ふに、「思想は思想をもつて」の思想が何れの時代に胚胎したものかはこれを明確に知り得ないけれども、基督が右の頰を打たれれば左の頰を向けよとして暴力に對するにも思想をもつてすべきことを訓へた古い時代から、思想に對するに暴力をもつてすることは、公然には決して是認されなかつたことは、想像

に苦しくない。それが、中世紀から近世紀にかけての宗教上の權力の極度に廣大だつた時代に於いて、初めて思想に對して暴力が用ゐられることが——信仰敎義等を異にする者を挾殺するといふやうなことまでが、公然と是認されるに到つたものであらう。おそらく、思想をもつて思想に對せしめやうとする考へ方は、かゝる宗教上のほしいまゝなる暴力行使に對して自然と眼覺めて來た人性の聲高に擧ぐるに到つた反抗の聲に胚胎したものではなかつたであらうか？

然しながら、當時に於いては、嚴然たる良心の叫びとも社會的正義の聲とも聽かれたこの熱い反抗の言葉も、やがて目的を達してその非道な宗教上の暴力を阻止することになつてからは、何時とはなしに格別の内容もない一の綺語としてこの世に殘された言葉に過ぎなくなつたと見なければならない。事實、近代に於いては、多くの國々に於いて信仰敎義の差違のごときは最早何等暴力の介在を求むるほどに激切なものとは考へられなくなつた。今もつて各文明國の憲法のなかに明記せられてゐる信仰自由の條項のごときも、今日の思想をもつて見れば、歷史的意味以外には他に特別の存在理由なき一の騎の緒に過ぎなくなつてしまつたことを知るのである。

過去に於いて信仰敎義の如何が、個人及び社會にとつて所謂思想問題の中核をなしてゐたごとく、今日に於いてその思想問題の中核をなすものは、言ふまでもなく社會問題であり延いて國家組織制度等の問題であると言はねばならない。今日我國並に他の世界諸國の上を襲ふてゐる社會的動亂を思想的に見て行けば、一としてその原因をこの問題のなかに萠して居らぬものはない。しかも、我々は、過去の思想問題とは著しくその内容その表現を異にする今日の思想問題に對しても、依然として「思想は思想をもつて」といふ當時の標語をそのまゝに繼承することが、果して妥當の次第であり眞に尤もので次第あるであらうか？

三

過去の思想問題であつた信仰敎義の問題が結局は天上の問題に歸するに反して、今日の思想問題が徹頭徹尾地上の問題であることは、今更こゝに言ふまでもあるまい。こゝに二つの問題の根本的な差違がある。即ち、今日の思想問題は、現實それ自身のなかにその立場を有してゐる點で、思索と行爲とを二元的に見、思想問題とは現實に於ける實行の問題とは別種の觀念であるとして物の考へ方を極めてゐた從來の解釋からは、全く相してゐるわけである。生産の分配と言ひ、資本の共有と言ひ、

會組織の變更と言ひ、國家制度の改革と言ひ、何れとして直接現實それ自身の問題ならぬはない。神の存在を論じ、悲慘の奇蹟を論じ、宇宙を論じ、生命を論ずるのが思想問題であると限定するならば、現代の所謂思想問題は、むしろ實行世界の問題であつて、思想問題の範疇には入るべからざるものと考へられる。

かくのごとく實行の世界に喰ひ入ること深き現代の所謂思想問題を、從來に於ける思想問題のごとくに、書齋の一隅にこれを押し込め置くことの到底不可能なることは、多言を要しない。寧ろそれは思想と名付けらるる多くのもののごとく書齋裡に生れ出たものではなくして、元來街上に生ひ育つたものであるからである。これを純粹の思想と見るも不可、從つてこれに對抗するに純粹の思想のみに據らざるべからざることを提議することも亦必しも妥當とは言ひ難いことは、極めて簡易なる論理ではないであらうか？

自分は、今日の思想問題が從來の思想問題と對比してかくのごとく著しき差違あること、從つてこれに伴ふて生ずる諸種の社會現象の上に直接の行爲となつて、更に暴力の行使ともなつて反映することが尠くないのを痛感する。それを名付くるに現代の特異性の名をもつてするのに特に不都合はあるまいと信ぜらるる。

然しながら、かゝる暴行の行使は言はゞ事物當然の結果として無意識裡に生み出された現象であるに過ぎない。然るにかゝる無意識裡の產物ではなく、極めて明確なる意識の下に企圖されてゐる暴力の行使がある。かゝる暴行是認の思想こそ、取りも直さず現代の最も鮮明なる特異性と言はなければなるまいと思はるる。

然し自分はこゝで現代に於ける暴行是認の思想の起源をその沿革をその特質を述べて行く暇は持たない。たゞこゝには、サンディカリスト、アナルキスト若くは近時のクラルテ結社の人達が哲學的科學的並に政治的經濟的等の立場より現代の資本主義社會を倒壞し新社會を建設する爲めに、最早暴力（廣き意味の暴力で、直接暗殺行爲を意味しはしないにしても。以外に、――簡明なる直接行動以外に、到底有効なる手段はないと見做して、一に暴力に依る社會革命を企圖してゐるといふ事實を、しかもその思想は直接間接に諸方面に廣く深き影響を及ぼしつゝあるといふ事實を、摘記し置くにとゞめやう。要するにこれ等の論者に據れば、暴力を除いては、平和主義、自由主義、人道主義、さては進步主義等の「ヴールジョア的センチメンタリズム」をもつては勿論、一般社會主義者の抱懐する諸多の社

會改造意見をもつてしても、到底その目的を達することは能きないと宣言するのである。暴力のみが唯一の合理的手段——むしろ不可避なる目的の一部であるとさへなすのである。彼等はこの暴力の行使を目するに、正義の觀念に背馳せざるものとなすはもとより、それを極度に理論化して是認すべく讃頌すべきものとなしてゐる。かくのごときは、現代以外には嘗て見ることを得なかつた新らしき現象であると言はなければなるまい。

なほ自分は、最近に於ける世界の事變が、如何に一般の人々をして暴力竝に生命等に對して抱いてゐた從來の信仰を變更せしむるに力あつたかを、指摘したければならない。二千萬にも達する人々を一擧にこの地上から屠り去つてしまつたかの五年間の慘虐なる殺戮戰、その前後の露西亞の流血革命、さては獨逸革命、それから引續いて各國の內外の絕えまなき爭鬪、——かゝる血腥さき環境のなかに釀され來つた雰圍氣は、——毒煙はあらゆる國々の上に色濃く襲ひ來ぬわけには行かなかつた、暴力を是認し讃頌まではせぬまでもそれに對して以前のやうには神經に病まぬといふやうな風潮が、また、自他の生命に對して以前ほどに尊敬は拂はぬといふやうな風潮が、何時とはなしに膨湃として世界全體のうへに瀰漫して來たのを見る。

我々の生ける時代は實にかゝる特異なる狀態にゐる。

四

單純なる思想に關する限りは、それに對して均しく單純なる思想をもつて對抗し得べきも、直接に現實行動に喰ひ入れる思想に對しては、最早單純なる思想のみをもつてこれに對抗し得ざるべきことは、極めて明白なる論理であると言ひ得ることは前に言つた。從つて、自分は、この意味に於いて現時の所謂思想問題のなかに時に暴力(廣義の)の潛入すべきことの有り得るのを認めるに憚かるものではない。

また、ジョルジュ・ソレルやアンリ・バルビュスの一派の主張するごとく、一時暴力の介在に依るにあらざれば到底舊社會の倒壞新社會の建設をば成就するを得ないとなす暴力是認の思想についても、その見方に於いて尠くとも一面の眞理の存在してゐることだけは、これを認めざるを得ないものでもある。

然しながら、この暴力の意味を擴大して、人命に對する危害の行爲をも含むものであるとなすならば、——事實それは含むものと解せられてゐる！——自分は、到底この思想の味方とはなり得ない計りではなく、その最も烈しい仇敵となることを毫も躊らはぬものであることを確言せぬわけには行かない。

勿論自分は、平素から、流血の悲慘事に對して事の如何を問

はずそれを阻止しやうとするかの所謂人道主義者若くは平和主義者の柔和なる心情に對して、深い同感を持たずにはゐられないものではある。が、それのみではない、あらゆる個人生活、あらゆる社會生活あらゆる國家生活は、要するに個性の保存と種族の維持といふ自他の生命に對する愛撫と伸長とのうへにその全重點を置いてゐるのであつて、かゝる重大なる意味を有する自他の生命に對する危害の犯すべからざることは固より言ふまでもないことである。言はゞ生命のみ眞に宇宙に於ける唯一の本質的存在として又根本的基礎として、あらゆる論議あらゆる事件を超えてその遙か以上に位置するものと信ぜざるを得ない。自分は人類の本能に萠すこの感情並にこの信條とのうへに立つて、飽までも生命の神聖を、――何人も犯すべからざる神聖（デヴィニティ）性の存するものなることを、更めて切言せざるのを得ないのを感ずる。

然しながら、自分は今こゝで生命の尊重すべきことを今更に高唱しやうとしてゐるのではしない。それは、この問題のキイ・ノートであるべきことは固よりであるが、それだけにこゝで取扱ふ題目としては餘りに普遍的であり餘りに概念的である憾みがある。自分は寧ろ極めて手近かな思辯の結果を一二摘記するにとゞめやう。

五

數年前自分は外國にあつて一夜巴里のオデオン座に沙翁の『マクベス』を見る機會を持つた。マクベスに扮したのは沙翁役者としては世界に比がないと言はれてゐる米國のジエームス・ハツケツトで、マクベス夫人は倫敦劇壇でその名の高いシビル・ソーンダイク孃であつただけに、その演技の深さ美くしさは今日もなほ眼のまへにあり／＼浮ぶ氣がする。わけて、この劇中最も深刻なるマクベス夫人がその手の血汐を拭ふ物凄き場景のごときは、言はゞ眼の裏にしつかと燒き付けられたかの感じまでする。

自分がこゝに突如として『マクベス』の演劇を持ち出したのは、實にこの場面に現はれたるマクベス夫人の手に附着したる殺人の血汐が如何に拂拭するとも遂に消すを得なかつたその煩惱に對して、たま／＼こゝに強き連想を生じたからに他ならない。そのマクベス夫人の手の血のごとく、思ふにあらゆる一切の流血行爲は、永久にその痕跡をとゞめて、絶えず人類の良心に不安懊惱の影を宿すことを止めぬであらうと、ふと想ひ及んだからに他ならない。

言ふまでもなく、暴力の行使を是認する思想は、新社會の建

設、――所謂理想社會若くは理想國家の建設を前提としてゐる、それとも、（甘粕某のごときはその一例であるが）現在の社會若くは國家を理想のものと見て、その維持のために、暴力の行使を是認せんとしてゐる。積極と消極との差違はあるものの、何れも理想社會等の存在を目的としてゐる點は彼此ともに一である。しかも、この理想社會の存在を確保して行く爲めに血汐をもつてしやうとするのである。不思議なる本能によつて、殺人の記憶はその動機の如何を問はず人を最後まで惱まし續けねば措かぬ。しかも人生を更によりよきものに爲さんとする、若くは、よりよきものに爲し置かんとする心は、取りも直さず生命に對する愛の念慮に他ならぬと見なければならないのに、却つてこの永遠に呪はるべき烙印を有する殺人の行爲をもつて――他人の生命に對する危害をもつてその心を遂げやうとすることは何といふ不思議なる論理であらう？ それは正に甲の命を助けんが爲めに乙を殺すの不合理とその間寸毫の差別もないと言はなければならぬ。かくのごとく流血によつて爲されたる仕事が、人生を些かでもよりよくすることがあらうとは、如何にしても信じられない。或はかゝる行爲に依つて新社會の外形――組織なり制度なりは、よりよく革められることがあるかも知れない。然し人類の良心は到底そこに晏如たるを得まい。その良心は絶えずその折の腥ぐさき血臭ひを嗅いでは戰くることとなき懊惱を續けずにはゐられないであらう。かくして成れる制度組織の改革が何處に眞の意味を持ち得やう？

暴力是認論者は或ひは口を『目的は手段を神聖にする』といふ古い箴言に藉りて多少の流血位は大事業の爲めに止むを得ないと抗言するかも知れない。然しながら、生命に對する危害を敢てしてもなほ且神聖であり得べき目的がこの世に存在しやうとは到底信じられない。むしろ自分は、目的の神聖ならんことよりも、遙かに手段の神聖ならんことを念とするものであることを切言しなければならないのを感ずる。

六

『眼を眼にて償ひ齒を齒にて償ふ』といふ言葉があるけれどおそらくこの世で、暴力には暴力をもつて對する心情位必然的で確實なものはあるまいと思はるる。

一の暴力は必ず反應的に他の新らしい暴力を生む。暴力は暴力を喚ぶ。この現象は、あらゆる場合に見ることが能きるのであるが、自分はその最も典型的な實例と思惟せらるるものをこゝに擧げることにしやう。

文明國の名をもつて稱ばるる數多い國のなかで、西班牙ほど

暗殺の頻繁に行はれる所はないと言はねばならぬ。政治上の理由から、經濟上の理由から、さては單純たる思想上の理由からでも、こゝの國民は容易にその敵手を暗殺によつて倒すことを心掛ける、現に自分が數年前この國を旅した際も、バロセローナ及びサラゴツサの二つの町で夫々この種の暗殺事件の勃發してゐるのに際會した經驗を持つてゐる。首相のダトー氏がマドリツトで暗殺 れたのも自分の西班牙に旅した年の出來事であつたと記臆する。西班牙のなかでもわけてカタローニア地方は暗殺の多い所である。當時自分の聽き知つた所によると、右地方に於ける激甚なる階級鬪爭の結果、サンデイカリストの手で暗殺さるるに到つた資本階級の者等の數は實に無慮三百數十名にも達してゐるといふことであつた。しかも、資本階級の者等は徒らにこの慘虐なる暴力の行使をば拱手甘受してゐるわけはない。それに對する當然の報復として、サンデイカリストに對する暗殺團を組織し、當時までに既に無慮二百數十名ほどのサンデイカリストを同樣の暗殺によつて屠つたといふ。しかも、まだその差數が百名近くにも達するので、その數だけは更にサンデイカリストに屬する者の生命を奪はねばならぬ、兎に角むかうが殺しただけ、こちらでも殺すといふことを、その暗殺團は放言してゐるといふことであつた。

自分がこの種の暴力を、假りにソレル若くはバルビユス等の口にするごとく新社會建設のために最も有効の一手段であることを認むるにしても、（さては甘粕某の口にせるごとく國家の安全を維持する爲めに止むを得ざる 法であることを認むるにしても、）斷じてこれに味方するを得ざるのは、右の實例が雄辯に語つてゐる通り、一の暴力は必ず他の暴力をば喚び出さずに措かぬことを、衷心より怖れるからに他ならない。それは假令西班牙の暗殺の場合のごとく一の暴力が他の暴力を同時に喚び起すといふことはないにしても、長い時期の間には必ずその現象を不可避に見せ付けられるのである。ツアー時代の露西亞の爲した同胞殺戮と、現勞農時代の露西亞の爲した同胞殺戮と——誰もが知るこの對照を人々は今更に心にとめて見るのを要する。

七

思ふに、暴力行使の根據につき特に理論的の説明を與へ得ると得ないとを論ぜず、この方法が最も容易に最も無雜作に自己の主義思想に反する者を芟除するを得るに最も有効なるものとして人々から認められ易いものであるとは、極めて明瞭である、然しながら、この最も容易にまた最も無雜作に敢行し得ると

いふことは、畢竟英吉利の諺の所謂「容易に來るものは容易に去る（イイジー・カムス・エンド・イイジー・ゴース）」の原則に洩るることなく、逆にまた最も容易且無雜作にその反對現象の發生を招致するに到るべきことも亦極めて明瞭なることであると言はねばならぬ。從つて、一時の暴力行使に依つてその目的を遂げんとする者は、この點について極めて洞察の足りない憐れむべき短見者流の域を脱し得ぬものであると斷定せられねばならない。

元來思想を樞軸としたる人類の諸般の進展の上を見て行けばそれが實に緩徐たる間に行はるるものであるとが感じられる。一日一日の零細微小なる經驗と反省との幾久しき集積の結果が、この人類進化の廣大なる大河の流を創り上げつゝあるのであつて、決して性急にこれを突差の間に創成することを爲し得ないとともに、性急にこれを阻止するがごときことも亦到底爲し得ぬものであることが感じられる。過去が現在のなかに生き、現在が未來のなかに生きる。その間嚴格なる意味の革新もなければ中斷もなく、常に不斷の洋々たる流動をなして遠き過去から遙かなる未來に向つて流れ行くものと信ぜざるを得ない。然るに、近代に於ける所謂科學文明の進歩發達は、人々をしてあらゆる事物の進歩發達も亦瞬忽の間に容易にこれを爲し遂げ得べしといふ觀念を與へることになつたとともに、一方またかゝる精神によつて育まれたる唯物思想は、人々をして從來兎もすれば閑却せられ氣味であつた外部的の環境の人類に對する意義の極めて重要なることに氣付かしめ、その結果これを特に高調切言するに努むるに到らしめた。即ち人々は、科學的發明の生むめざましき事物の更新と同じ原則によりあらゆる社會改革もこれを爲し得べきことを無意有意の間に誤解し、また、重要なる意義の存するのを新に氣付くに到つたその環境條件を改革することによつて、――即ち制度組織等を「理想的に」變更することによつて、即坐に己れの所期する新社會等を作り得る可得性のあることを類推し、若くは、かゝる變更の企圖を阻止することによつて永く己れの滿足する既存社會の維持保全を計り得る可能性のあることをも推斷するに到つたのである。然しかゝることが全く誤解に過ぎぬことは、すこしく人性に對して謙讓なる觀察と理解とを持つ者には容易に判明できることゝである。組織や制度やの變革が社會生活の進展のうへに重大なる關係を持つものであることは否定できないとしても、これが最も根本的の條件であり、更に唯一の方法であるかのごとく見ることは決して正鵠なる觀察とは言ひ得ないのである。佛蘭西革命が、流血に依つて王政の轉覆を計り共和國の制度を布くに到つたのちも屢々帝政を樹立するやうなことゝが續いた計りではなく、その

時から百數十年を經過してゐる今日でも、佛蘭西の社會生活なるものが未だに猶王政當時の雰圍氣から全く脱却し得ないでゐる消息を、人々は心して讀むことを要する。

若し人々が、この突差の間には到底變革することを爲し得ない「ヒューマニテイー」の緩徐なる洪流を感知することが能きるならば、急迫詭激なる人命に對する暴力の行使等の手段に依りて効を寸刻の間に收めやうとするやうな大それた野望は決してこれを抱くことを敢てせぬことは言ふまでもなく瞭かである。かゝる手段は、寧ろこの「ヒューマニテー」の洪流の進展を無理に堰き止むるの結果を齎らすに過ぎずして、唯ひとり自他の生命に對する寛恕なる愛と朗らかなる自由の精神のみが、――それに相背馳せざる方法のみが、眞にその洪流の自然の進展を助成するを得べきことを衷心より諒解するに到るであらう。

自分は、人間が病患の如何に依つて所謂外科手術を必要とするがごとく、社會と名付けらるゝ有機體も亦その生存を進め行く上に於いて均しくかゝる手術を必要とすべき機會の存すべきことは、これを認むるに吝かではないものである。從つて、時に依りては廣義に於ける暴力の行使を必要と目すべき場合のあることは、敢てこれを否定しやうとはしてゐない。然しながら、この意味で假令暴力を是認するにしても、殺人行爲を流血行爲を否認する論據は、些かの動搖をも來すものでは無い。我々の本能と理性とは、過去の歴史の重ね來つた經驗と相俟つて、流血行爲が人生及び良心のうへにたゞ荒廢を齎らす以外には何等の役割を演ずるものではないことを明かにしてゐる。我々が特異なる時代のなかに置かれてゐればゐるほど、この眞理の教へるところは深い。我々は今日この眞理を見失ふときは忽ち一の陰暗なる迷路のなかに誘い込まるべき危險なる運命に捉へらるることが必至であることを感ずる。思ふに、人々が心中に描く「ヴイジョン」が如何に眞實と美とに輝やくものであらうともそれを實現することの可能と不可能との岐路は實にこの點に存するとなすもこれを過言とは遂に言ひ得ぬであらう。

帝都復興の財源と地方農村疲弊問題

帝都復興規模の大小と地方農村盛衰問題

法學博士　堀江歸一

帝都復興の計畫は一度び復興審議會に於て縮小され、更に帝國議會に於て、再度の縮小に會ひ、當初政府の立案したものに比較すると、餘程規模の狹小と爲つたことは、爭ふ可からざる事實である。始めから帝都の復興を大規模に行へば、地方農村を壓迫すると云ふ說があり、隨つて農村に於ける勢力を根柢とする政友會の如き政黨が選擧民に阿る必要から、復興計畫に難癖を付けはしないかと云ふことは、世間の噂に上つて居つたが、果して政友會は卑劣なる政黨根性に依つて、其爲す可き所を爲した。定めし所屬議員の輩は來る可き總選擧に臨んで、地方民の爲めに、一廉の功名手柄を爲したもの丶如くに吹聽して所謂投票乞食を稼ぐことであらうが、帝都の復興に就て、帝都と地方農村との間には、斯くまで利害が正反對に衝突し、帝都の復興は直に農村の衰微を惹起すに至るものであらうか、私は此點に關して、輕々しく斷定を下すことに苦まざるを得ない。

之を概言すれば、帝都は消費地であつて、農村は生產地である。或る經濟上に於ける問題の解決に依つては、兩者の利害關係の時に衝突することは、免かれ難き所である。例へば保護關稅の主義に依つて、外國から輸入されゝ物資殊に原料品食料品の如きに課稅する場合に於ては、消費地は消費品の價格騰貴して、住民の生活を壓迫する點から、之に反對するが、生產地に於ては、生產品の價格騰貴して、從業者の利益を增進する事實を根據として、之に贊成するに相違ない。卽ち北米合衆國に於ても、獨逸に於ても、一度び保護關稅を實行するや、總ての物

品に對して、保護の及ぶ所を洽からしめるに至つたのは、斯る地方的利害の衝突を回避するの必要に出でたのであつて、事情の已むを得ざるものと解された。然しながら斯の如き兩者の利害の衝突することは、經濟上の關係に於ては、寡少なる事例であつて、寧ろ兩者の利害の一致することを多しとする。殊に第一、都會が相當の規模に發達し、其需要する物資亦多量であつて、地方經濟を潤澤ならしめる力の大なるとき、第二都鄙の交通上に於ける連絡密接であつて、地方の物資は必要に應じて、容易に都會に集中するを得るときには、都會と地方との間に於ける經濟的利害は大體に於て、一致するものと認められる。現に我國に於て、米價が騰貴すれば、都會の住民は生活難に苦しめられるようであるが、農村の人々が高價で米を賣却して得た利益金を携へて、都會に來り、都會の供へる娛樂や、奢侈品に向つて、之を撒布するに隨つて、都會を潤ほすが如く、都會に恐慌が起つて、其消費力の消耗した場合に、地方農村も亦賣らんとする物資に對する需要を失つて、疲弊を訴へるに至るが如き、如何に都會と農村との關係の離る可からざるものであるかを明にするの事實とするに足りるのである。

以上の見地から考へて、私は帝都復興の計畫が餘りに常軌を逸したものであれば兎に角、然らざる限り、帝都の利益を擧げる爲めに、地方農村の利益を枯すに至るものとは、思はなかつたのである。復興計畫が地方農村の利害を傷けるに至ると思はれ、又一部の人々に依つて、斯る考の下に擧げられた諸點は

第一、復興事業の財源として、公債の發行されるときは其應募に依つて、地方の事業に供される財源を奪ふに至ること、

第二、右公債の利拂并に元金償還に要する資金は結局租稅の收入に仰がなければならないものであつて、地方農村亦國稅として其負擔を頒たなければならないこと、

第三、政府は復興事業の爲めに發行される公債に對して、應募の餘地を作る必要から、一般并に特別會計に於て、極端なる非募債主義を取り、其結果として從來積極主義の下に、地方に資金の撒布されるを得た利益を絕つたこと、

第四、復興事業に要する一部の財源を外債募集に依つて、調達する場合には、其金額に相當するだけの外國物資は必ず內國に輸入され來つて、生産業の行はれる諸地方に對して、酷烈なる競爭を及ぼすこと、

第五、農村救濟の一策として、最も重きを置かれた地租の地方委讓も、復興事業に伴ふ財政上の關係に依つて、到底實行の望みなきに至つたこと、

に歸着するの外ないであらう。

如何にも事の個々に就て云へば、復興事業の爲めに、地方農村に不利の影響を及ぼすことは、何としても勢の免かれ難き所であるが、然らば斯る影響に掛念して、帝都の復興を閑却した場合には如何なる結果を生ずるであらうか。此際に地方農村が何等の損害を蒙らず、農村として立派に繁昌して行く成算があると云ふが如き狀態であれば、問題は自ら別樣に解決されるかも知れないが、都會と農村との關係殊に東京市の如き多年全國の中樞的地位を占めた大都會が永く荒廢の現狀に置かれて、獨り農村のみが孤立的に繁昌すると云ふ道理は何としても之を見出すを得ない。帝都の復興と共に、東京市に多額の資金が撒布されるに隨つて、一旦地方に離散した人々も自然東京に復歸して、小規模ながらも震災前の事業を開始する、而して其事業の進行するに隨つて、或る者は自己の店頭を飾る可き商品を需要するであらうし、或る者は自己の生活に於て、消費する物資を購入するであらう。然も是等の物資は今日の東京市に於ては勿論、以前の東京市であつても、到底自給するを得ないのであつて、結局諸地方に就て、供給を仰がなければならず、斯くて物資に對する代金として、復興財源の一部は地方に撒布され、地方に存立する事業を繁昌せしめ、地方の財源を涵養する結果と爲る。然らば地方は其結果として納稅力に増進を來す道理であつて、他日公債の元利金支拂に要する財源として、國稅の負擔に當るに至つたとした所で、優に之に應ずる實力を存するばかりでなく、之を負擔して、何等の不公正を生ずる道理を見ないのである。

地方農村の經濟を繁榮ならしめるか、又は疲弊せしめるかを決定する重要問題は米價并に糸價の騰落如何であつて、中央財政に依つて、幾何の經費が地方の爲めに、支出されるかと云ふことの如きは、之に比較すれば、必ずしも重要なる問題とするに値しないのである。糸價の高低は大體に於て、其需要地たる米國市場の狀況如何に依つて、定まるのであつて、固より震災とか、復興事業の規模とか云ふやうな事柄とは、關係を持たない。米價も亦本年以後の作柄を以つて、其決定の要素とするものであつて、復興事業如何と云ふことに依つて、左右されるものとは思はれない。若しも強いて兩者の間に或る關係ありとすれば、復興事業の進行と共に、都會に多數の勞働者が集中し、其嚢裡の豐なるに隨つて、多量の白米を需要する爲めに、米價の騰貴を惹起すに至るものと見ることを至當とするのである。

復興事業の進行と共に、地方が都會に向つて、物資を供給し斯くて之に對する代價を收めて、利益を得ることは、旣に述べた所であるが、復興事業に必要なる勞力の供給亦地方を潤ほす

に至るものと考へられる。固より今日の東京には多數の失業者が居つて、其れ〳〵適當の職業に就かんとして、焦慮しつゝあるやうである。復興事業の必要とする勞力は先づ第一に斯る勞働の豫備軍を以つて、充たされるであらうが、一方に民間事業の復興を促進する施設宜しきを得て、民間に於てゝ亦勞力に對する需要を增加するに至つたならば、之に對する供給は決して都會に現に居住する勞働者だけで充すことが出來ず、必ず地方在住の人々を都會に吸引して、勞働に就かしめるに至るであらう。斯くて彼等の得た勞働報酬の一部分が地方に送遣されたり、又彼等が勞働中に得た貯蓄金を携へて、歸鄕したりしたならば、其れだけ地方の經濟を潤澤ならしめることも亦想像し得られるのである。

唯巨額なる公債の募集に依つて、地方に流動する資金が都會に集中され、地方に資金の缺乏を來すことは、左なきだに金融の疏通に難色ある地方に取つて、復興事業の與へる最大の打擊である。然しながら政府が公債を發行するに當り、之に對する應募者を得るに就て、決して强制的手段を取るものでなく、任意の方便に依ることを主とするものである以上は、一方に公債の發行されるに隨つて、他の一方に國民の貯蓄を獎勵し、以つて應募の成績を良好ならしめることに努力する道理である。隨つて國民の覺悟に依つては、應募の財源は或る程度まで涵養され、募債に伴ふ壓迫を緩和するを得るものと考へられる。若し夫れ地租委讓問題の如きに至つては、本來委讓を爲すと云ふことが根本的に間違であつて、政友會が一時の人氣取りから唱道した所論に過ぎないのであるから、震災の爲めに、其れが實行不能に爲つたとした所で、地方農村の爲めに、憂ふるに値しないのである。

外債の募集、之に次いで行はれる外國物資の輸入に依つて、打擊を蒙るものは、必ずしも地方の産業のみに止まらない、東京横濱等の震災地に於て、漸く復興の緒に就かんとする産業も亦同樣の競爭を受ける次第であつて、此點に於ては都會と農村との間に、利害の衝突するものはなく寧ろ相協力して、國內自給主義を主張し以つて外國物資の輸入される勢を遮斷しようとするかも、測り知るを得ないのである

要するに帝都は國家の中樞機關である。此機關に損傷あつて國家全般の繁榮を見るを得ないことは、震災直後から今日に至るまで、東京市の消費力の減退した後を承けて、地方農村と云はず、製造業地方と云はず、或は注文の杜絕に依り、或は賣掛金の回收不能に依り、其れ〳〵相當の損害を蒙つた事實に依つて、之を立證するを得るのである。即ち此事たる、經濟上の利

害關係に於て、東京市と諸地方と如何に同一體のものであるかを示す所以であつて、斯る點から考へたならば、些少なる部分的事實は姑く措き、東京市の復興と地方との利害は經濟上に於て相反するものではない。之を相反するものゝ如くに考へ、地方農村の利害に藉口して、或は復興計畫の規模を狹小にしたり、或は復興事業の經費を削減したりしたのは、賤む可き政黨の民心收攬策に出でたものに外ならない。然も民知の發達した今日地方人士と雖も斯る見へ透いた人氣取り政策に眩惑される者はないだらうと思ふ。

社會復興の辯

澤田謙

一

第一、帝都復興は社會復興の一部である。帝都荒廢して農村の隆興すべき因縁はない。都市と農村との有機的關係は社會學原理の教ふるところであり、その生産と消費との依立的關係は經濟學原理の定論である。農村振興を目標として帝都復興に反對するは、社會科學に對する不信任決議である。

第二、帝都復興に專念するのは、地方農村の振興策を抛棄することである。國家財政には自ら限度があり、從つて大藏省は都市と農村の二君に仕ふるを得ない。十億の歳入と二十億の歳出をもつて收支豫算を編成するの妙策が發明せられざる限り、復興費の增額は農村振興費の減額を意味する。

この二つの定理は明らかに矛盾する。而して兩者とも眞實である。第二の定理によれば農村振興を名として帝都の復興に反對し得るにも拘らず、第一の定理によれば反對し得ないのである。然らばこの矛盾の根據は何れにあるか?

私見はこの矛盾の根據は日本の財政組織の不合理性にありとなす。以下その說明である。

二

いまから二十五年ばかり前、アヂケス法がプロシアの國家に上程された。アヂケス法といふのは、郊外地を市街地に改造するに際し、不規則なる道路系統と建築敷地を、整然たる市街化するために、地主をして所有土地の三割五分乃至四割を無償で道路敷地に提供せしめ、區劃整理を斷行せんとする法律案である。このとき農業代議は何と言つて反對したかといふと――

『アヂケス法案は都市生活を快美ならしむるを目的とし、惹いて農村人口を都市に掠奪するものなるをもつて、まさに悲むべき政策である。人口の都市集注は現代の惡風なるが故に、立法者はこの風潮を助長するが如き擧に出てはならぬ。都市改造のためにする法律案は、地方農民の贊するを得ざるところである。』

碎いて言へば、つとめて不便にして不衛生、危險にして不經濟なる都市をつくり、市民をしてすべて貧民街（スラム）的陋屋に生活せしむることが、農村振興の道であると言ふのである。これ等の百姓議員達は、都市を滅ぼせば農村が盛になると心得たのである。嘘のやうな話だが、眞面目に提唱されたのである。

そしてこの眞面目なる反對論を説得して、アヂケス法案を通過さすために、十二年の努力を要した。

三

日本の政友會もまた、地方農村の荒廢を名として帝都の復興に反對した。しかし流石に、農村を振興するために、帝都をスラム化せよとは言はなかつた。たゞ帝都復興のために巨額の國費を投じて、他の地方改良事業に繰延べを喰はすのは怪しからぬと言ふのである。帝都の復興も結構だしかし農村の振興も忘れてはならぬ、都市費と農村費との間には均衡がなくてはならぬ、そして帝都復興費は均衡上偏重だと言ふのである。

この言分は誠に堂々たる主張である。若も國家が地方振興のために補助金を出す限り、補助額を各地方の間に公平に分配しなくてはならぬことは理の當然である。たゞ如何なる率をもつて公平なりとするか、惜しいことに政友會はその標準原理を示さなかつたが、（しかし何人がその率を決定し得やう！）議會の多數黨が偏重だと言ふのだから、政治上偏重なのであらう。殊にお土産議員の多い政友會としては、△△港築港補助金、□□河堤防補助金、××道路建造補助金、○○鐵道速成補助金もすでに地方選擧人に約束濟であらう。しからば天下の大政黨が不渡手形を發行したとあつては、末代までの名をれである。私

は同情の念さへ禁じ得ない。

しかし要するに『補助金』の問題である。帝都復興補助金の問題である。しからば帝都復興費は幾何をもつて公平なりとするか？

四

補助金といへば、私は十數年前の米國地方財政のことを回想せずにはゐられぬ。

『中央政府は長らく地方河川港灣の修築及主要都市に於ける聯邦郵便局其の他の公共建築物を建設するのが例となつてゐた。此等の事業は中央政府之を執行し、國庫より之を支拂つた。併し其の結果は多くの場合悲しむべきものであつた。議會の議員は自己の選出區に對する支出を得る爲めに、日も尚ほ足らざるものがあつた。彼等は同樣の利害を有する他の議員と結托し、斯くして國家の利益を地方の野望の犠牲としたのである。斯くして金錢の爭奪戰と、國庫への殺到とが始まつた。代議政治は邪路に陷つた。代議士は寧ろ選出區の手先となつて、自己の選出地の爲めに、國庫からできる丈けの金を掴み出すことに熱中するに至つた。從つて最も成功せる代議士とは廣く國事を憂ふるの士にあらずして、國庫から最も多くの金を奪ひ去る精力家の義となつたのである。』（『ビーアド博士東京市政論』一〇九－一一〇頁）

この點において、日本の政界の現狀は、米國十數年前の政界と、多く異るところを見ぬ。衆議員選擧とは、何人が最も多くの補助金を掴み出し得るかを決定することであり、議會とは各議員のお土產の額を決定することであり、最も成功せる政黨とは最も多額の補助金を議決し得る政黨のことである。

玆においてか疑はざるを得ない。何故國家は地方のために、しかく補助金を支出しなければならぬのであるかと。

五

何故國家は地方のために補助金を出さねばならぬか。その理由は至つて簡單である。地方財政が窮乏してゐるからである。それではなぜ地方財政は窮乏するのか。曰く、地方に財源がないからである。

現在日本の税制においては、租税とは即ち國税のことである。地方はたゞこの國税に對して、一定率の附加税を課して、その租税收入を得てゐるにすぎぬ。道府縣にはそれでも戶數割・家屋税・道府縣營業税なる三獨立税があるけれども、市區町村なる自治體は、殆んど一の獨立税をも有たぬ。曰く附加税、曰く

附加税である。そして附加税とは體のいゝ、補助金である。

すなはち日本の地方税收入六億四千萬圓のうち國税たる地租・營業税・所得税の附加税が合計約二億圓、戸數割・家屋税とその附加税で二億六千五百萬圓、その他諸税及び附加税が一億七千八百萬圓である。

要するに日本の自治體は、その平常において、國税體系に依立し、許されたる率の附加税を貰つて、漸く生計を延てゝゐる寄生虫である。普段から定率の補助金生活である。況んや異常の際、または新事業を興すときには、異常の又は新な補助金を受けねば、動きのとれぬに不思議はない。

地方民が何かと言へば、『補助金』『補助金』といひ、議會が補助金決定所に化するのも、またこの理に基くものである。

六

帝都復興の問題も、要するに一個の大規模なる補助金問題である。補助金問題なればこそ、地方のお土産議員共は、規模過大なりとて騒ぐのである。

であるから、この八ケ間敷い『復興の規模』の問題を、一擧にして解決する方法は、一切の補助金政策を廢止することである。帝都のために『不合理』なる復興費を支出せざると共に、農村のために『合理』なる振興費を支出しないことである。これは無謀でもなんでもない。地方に適當なる財源さへ與へれば易々として成就し得る方法である。

適當なる財源とは何か。地租と營業税とがこれである。地租・營業税の地方委讓が必要なことは、すでに多くの財政學者の提唱し來つたことで、私も本誌昨年九月號の『都市の叛逆』において、永々と論じておいた。地租と營業税とは、地方事業の興敗によつて上下するものであるから、本來の性質において、原動力たる地方事業費に充つべきものなること、兩税の委讓は租税體系を改造するために最も必要なことで、進歩せる税制はみなこれを採用してゐること、窮乏せる地方財政を救濟するの道は兩税の委讓しかなく、技術上も最も適當なること、その他種々として上記論稿に述べておいた。いまさら反説する必要はなからう。

地租と營業税との委讓さへあらば、煩さい補助金問題なんか無くとも濟む。復興是非の問題も、從つて雲煙霧消し去るのである。思へば日本の財政組織は、當然地方の財源たるべき兩税を右の手で奪ひ、左の手で煩鎖なる補助金政策をとつて、徒らに議院政治を腐敗させてゐたのである。

兩税の委讓があれば、帝都は獨力で復興し得る筈である。し

かし事實復興し得るであらうか？

七

獨力の復興といふのは、國庫の補助金なしに復興事業を經營することである。從つて東京市に、自治體としての獨立の地位を認めることである。すなはち舊來の國家の寄生虫たる地位から蟬脫して、行政上も財政上も獨立なる、眞の自治體となり、獨歩の力を以つて復興事業を經營するの義である。

財政上の獨立は、地租と營業稅の委讓によつて、半は達せられる。しかしそのほかに公債政策に對する制限の徹廢がある。日本の財政制度によれば、地方團體が公債を募集せんとするに當つては、一々中央政府の認可を受けなければならぬ。しかも政府は、地方募債の認可の拒否を決定するについては、必しもその地方團體の起債能力如何を標準とせず、國債市場狀況の如何によつてこれを決定する習慣となつてゐた。しかも或る大藏大臣の如きは、大膽にも、『當分地方債の募集は許可せざる方針なり』と聲明した位である。帝都いかに巨額の租稅徵收能力ありと雖も、この荒廢せる都市を復活せしむるの大事業の遂行は、急場の場合、一時市債に賴るほかはない。兩稅委讓とともに、市債募集の制限は、徹廢されなければならぬ。

大は行政上の獨立である。從來東京市の都市事業を經營してゐたものは、東京市ではなかつた。都市經營者は東京市の外に少くとも七つある。東京府・警視廳・鐵道省・內務省・農商務省・文部省・遞信省これである。しかもこれ等の官省は、みな東京市の上級官廳として、絕大の管理權を振ひ、市が一度び都市事業を興さんとすれば、一々上級官廳の許可を要するのである。例へば市街電車賃値上げのやうな簡單なことでも、府知事と內務大臣と大藏大臣と鐵道大臣との許可を要する。そして大藏大臣は、市債の發行・その利率・電車料金・特別稅・水道料金・制限外附加稅について、監督權を有するのである。この煩瑣なる制度をもつて、東京市が「獨力」の復興をなし得る筈はない。

それよりも大切なことは、東京市に郊外地の統制權を與へることである。復興事業によつて、最も利益を蒙るものは、東京市に隣接する郊外町村である。この郊外町村が、復興事業を雲煙過眼視して可なる理はない。これは平常の都市計畫事業に當つても同樣の理で、すでに「都制案」なる形において、これまで提唱されたところである。これも前揭「都市の叛逆」中に詳述した。平常において然るところ、況んや異常に際してをやである。都制案の實施もまた獨力復興の要件である。

八

以上帝都獨力復興の條件たるべきもの、これを項擧すれば次の如し、

（一）本來の性質上都市の財源たるべき地租と營業税と交通税とを委讓すること。

（二）市債募集に關し國債見地よりする制限を廢止し、東京市の起債能力に應じて自由に募債せしむること。

（三）都市經營に關する行政權は、全部これを東京市に讓渡し、無用の干渉を廢すること。

（四）東京市の地域をいはゆる大東京の地域にまで擴張し、復興事業によつて特に利益する郊外地を、自ら統制するの權限を與ふること。

東京市の獨力復興の要件は、上の四條件だけである。これ悉く正當の要求である。この要求さへ容れられれば、東京市はその復興のために、價一文の補助金を要求しやうといふのではない。――いや、まだある。

九

（五）東京市の全面積に對する免租官有地面積の比率、すなはち二割五分の分擔額を、國家が負擔すること。

東京市は由來帝都たるの關係上、市内に非常の面積の官有地がある。統計書によるに、市内の土地の總面積は二千四百萬坪で、内官有地は八百八十五萬坪、すなはち總面積の三割七分を占めてゐる。このうちから、公園・道路・堤塘・河川・溝渠等の公用地約四百萬坪を除外しても、總面積二千萬坪のうち、官有地は五百萬坪に當り、その比率は二割五分となるのである。

この三割七分乃至二割五分の官有地は、從來官有地であるといふ唯一の理由によつて、都市事業の分擔を免れて來たのである。しかも官有地たると私有地たるとを問はず、市内にあれば必らず都市事業の利益だけは受ける。從つて將來國家が、官有地の分擔として、都市事業費の二割五分を負擔すべきは勿論、帝都復興費の二割五分をも分擔しなくてはならぬ。

一〇

さて右の要件にして容れられたとき、東京市の財政狀態はどうなるか。

現在東京市の租税收入は二千三百萬圓である。これに大東京に編入さるべき隣接町村の町村税收入約七百萬圓を併せて三千萬圓となる。このほか都制案實施の結果は、府税もまた大東京

の收入となる故、市部の府稅負擔一千四十萬圓、郊外地の府稅負擔五百五十萬圓、合計一千六百萬圓が加算される。さらに國稅について、市部と郊外地を合計すれば、地租の三百萬圓、營業稅の千三百萬圓、交通稅（電車稅）百七十萬圓、合計千七百七十萬圓も委讓され、合計して租稅收入のみで、六千三百七十萬圓の大財政となる。

右のうち地租は、現在、國稅三百萬圓、府附加稅百四十萬圓、市町村附加稅百萬圓、合計五百四十萬圓を算するにすぎないがこれは現在の稅制が、收益制臺帳制をとつてゐるからで、地價の大修正を行ひ、價格制近實制を採れば、意外の增收を生ずるは疑ない。現在土地臺帳に記載してある法定地價なるものは、悉く假構の地價で、坪千五百圓に賣買したと登記された日本橋通一町目白木屋附近の土地が、法定地價は八十七圓五十錢であり、兜町取引所附近一千圓が僅か六十五圓である。すなはち法定地價は、賣買登記地價の二分の一乃至二十分の一に附せられ、平均七八分の一にしか評價されておらぬ。しかも賣買登記地價なるものが、悉く出鱈目で、實際の價格にすれば、日本橋通の如き、地上權のみで三四千圓を唱ふるといふ話である。その法定地價が八十七圓五十錢である。さすれば實際の地價は、法定地價の十倍二十倍に上るものであり、從つて課稅標準を市場地價によるとすれば、たとへ稅率を半減しても、稅收入は五倍十倍に上るわけである。假に六倍したとすれば、五百四十萬圓の五倍、すなはち二千七百萬圓の增收を得るわけで、この增收を租稅收入六千三百七十萬圓に加算すれば、總計は九千一百萬圓となる。

表示すれば次の如し。

		市部	郡部	合計
市町村稅		二三、三六七千圓	六、九一六千圓	三〇、二八四千圓
府稅		一〇、四一六	五、四八七	一五、九〇三
國稅	地租	二、三七八	六二二	三、〇〇〇
	營業稅	一二、二三〇	六九八	一二、九二八
	交通稅	一、六九六	―	一、六九六
地租增收		一九、五八五	七、七五〇	二七、三三五
合計		六九、六七二	二一、四七七	九一、一四九

これに國家が官有地分として負擔する金額が二割五分、二千四百六十萬圓を加へるから、稅收入合計は一億五百七十萬圓となる。

一億五百七十萬圓。これが稅收入である。しかも稅外收入は稅收入の約八九割を原則とする。假に九千四百三十萬圓と推算すれば、大東京の豫算は二億圓となる。

將來二十億圓の大財政をもつてする。五億十億の復興費の如き易々として獨力經營しうるではないか。

二

次に大東京は、幾何の起債能力があるか。紐育市政調査會は右について、全市不動產價格の一割は、なほ健實なる市債限度であるとしてゐる。しかも大東京の土地建物等、有租不動產價格が、最小限五十億を下らざるべきことは、容易に推算し得るところであるから、五億の市債は、內輪に見積つても、決して過重の負擔ではない。（尤も右の一割原則は、都市が獨力の不動產課税力を有する場合の原則である）。

大東京の起債能力は最小限が五億圓である。これに例の國家の分擔率二割五分を加算すれば、合計七億七千萬圓の復興費は容易に調達し得る勘定となる。

臨時議會における衆議院の修正によつて、東京復興費は三億六千萬圓に減額された。しかも右のうち、將來東京市が道路費分擔金その他として返還すべき金額を除算すれば、結局國家が帝都復興のために支出する補助金は、二億圓見當に過ぎない。この甚だ恩惠的に與へらるゝ二億圓の金額が、二割五分の官有地に對する分擔金として、權利的に要求する二億七千萬圓より、七千萬圓だけ少額なのは、なんと天下の奇觀ではないか。

三

尤も右の五億または七億七千萬復興費といふのは、道路・橋梁・公園・廣場・運動場・下水道・築港・その他、それより生ずる事業收入によつて、收支を適合し得ざる復興事業に對する事業經費である。高速度鐵道・路面電車・電氣事業・瓦斯事業・水道事業・建築事業・運河の如き、いはゆる收益事業は、いづれも獨立の企業として、獨立に經營し得る事業にして、假に私營事業となすも、その投資は相當の利廻を生ずる。從つて投資者は上述の非收益事業に對するときとは、自ら別個の見地に立つて投資する。されば之れ等の收益事業は、これを市營となす場合には、特別經濟を立てゝ、その資本の如き、特別市債をもつて徵收すべきである。公債政策としても、いはゆるブランケツト・ローンはなるべく避けて、事業公債に賴るを原則となすべきものであるから、これ等の收益事業は、一般の復興事業とは別に、各自經營さるゝものである。

一般復興事業に加ふるに、この收益事業の經營をもつてすれば、帝都の全部的復興は、獨力をもつて、易々として就行し得るのである。

一三

帝都は獨力をもつて復興し得ること上述の如し。しかるになに故か苦しんで、百姓議員の蹂躙に、帝都の運命を委せなければならぬのか。解答は簡單である。現在の行政組織と財政組織とが、不合理に組立てゝあるからである。都市經營の行政權はつとめて都市から掠奪し、財政上は地租營業税の課税權を盜掠し自ら都市經營の大權を掌握しておきながら、都市一度び天災によつて荒廢すれば、これに應ずべき補助金さへも、出し澁るのが代議院の現狀である。

帝都の復興は社會復興の一部であり、その興隆は農村の振興を刺戟すべきことは、經濟學社會學の公理である。しかもこの政治組織の不合理の故をもつて、問題は財政的爭鬪と化し、激烈なる補助金爭奪戰を、日比谷原頭に演出せしむるに至つたのである。

矛盾の根底は行政財政組織の不合理にある。從つてその解決策も、これが合理化にあらねばならぬ。

一四

かく言へばとて、私は行政財政組織合理化を、必しも直ちに實行せよと言ふのではない。これを主張しても現下の政情をもつてしては、事實上實現不可能であらうと豫測される。復興豫算も不滿足ながら決定したことであるから、國家事業としてはその豫算に從つて着々と事業を進行させて頂きたい。たゞ國家の經營する復興事業は、あれ丈けではいかにも貧弱であり、姑息である。そこで東京市はこゝに緊褌一番して、殘餘の事業を獨力經營するに努むべきである。財源としては、特別財産税の如きが適當であらう。土地家屋の市場價格を課税標準とする財産税を獨立税として起せば、一方現在の不合理なる地租、家屋税を補完するの作用を起して、將來の租税改革に資しうるとともに、他方復興事業の有利なる財源となり、これを引當てに相當額の起債を可能とするであらうと思はれる。

積極的帝都復興案と農村問題

安部磯雄

帝都復興の爲めに地方を犧牲に供するは甚だ不當である。元來國家は都會に厚くして、地方に薄いといふ非難があつたが、之れは確かに事實である。一例を擧げれば、資本の分配が、いつも都會に集中して、地方は缺乏を感じて居る有樣であつた。早い話が、郵便貯金は全國を合すると十億以上に達して居る。それが一度は兎に角、東京に全部集つて來るのである。保險事業にしても、生命保險、火災保險の掛金は一旦皆東京に集る。私共は平常富の分配が不公平であるといふことを云ふが、都會と田舍とを比較すると其間に富の分配が甚だ不平等であつて、都會をブルジョアとすれば田舍は全部プロレタリアートの觀がある。かういふ差別が從來續いて來たが、今後も亦續くに相違ない。其結果種々の點に於て不公平が附纏ふのも止むを得ない。第一、教育方面を見ても、現在では都會にあつては教育は便利であるが、田舍はいつも其缺陷を感じて居るのである。人が相當の教育を受けるためにはわざ／＼田舍から都會に出て來なければならない。これは必しも日本だけの事ではなく、外國でもさういふ傾向が見られるのであるが、我國に於ては殊に甚しい。そして外國に比較して最も珍らしい現象は、都會中でも殊に東京に於ける教育機關の集中である。斯くの如き例は外國にも少いのであつて、或意味で都會と田舍の貧富の懸隔を語るものであるが、それは外國に於けるよりも日本に於て甚しいといふことが出來る。文化の程度も都會と田舍とでは此點に於て著るしき相違を生じ、田舍は常に文明に遲れるといふことになる。時たま田舍から出てくる人は東京を見て驚く。それは恰も貧民窟の住民が富豪の邸宅や庭園を見て驚くのと同じである。これらは皆富の分配の不平等に基く都會と田舍との相違である。田舍は常に經濟的に搾取される方で、都會は搾取する人である。都會には比較的完全な團體若くは組合があるが、田舍にはそれがない。そこで都會が田舍から物を買ふ時には出來る丈け安く値切り倒して買ふが、之れに反して都會が田舍に物を賣

る時にはなるべく高く賣りつけやうとする。斯くの如く見ると都會と田舍とは恰度金持と貧乏人の對立のやうに感ぜられるのである。

玆に於て大都會といふものが必要なものであるか何うかといふことが我々の疑問となるのである。現代の大都市は資本主義の生み出したものである。若し資本主義を倒したならば、二百萬、三百萬といふ大なる人口を擁する大都市が生れる筈がない。假りに一國が經濟的に平等となつた時には、處々に興る都會も其人口は五萬乃至十萬を以て足れりであると考へる。實は東京市のやうな尨大なる都會を持つといふことが、果して國家それ自身の爲めに幸福であるか何うかといふことも甚だ疑はしいのである。現に東京市に住ふ東京市民が東京市を持て餘して居るのである。平常でもさうであるが、市民は現代の大都會に相當すべき設備すらも爲し得ない。況んや今回の如き災害に際して、復興といふ問題に當面しては、市民は勿論、國家全體としても其力の乏しいことを感ぜざるを得ない有樣である。で、東京市民は、東京市の復興は自力では出來ないから、國家全體の力を借りることが必要であるといふ考を持つて居るし、當局者も亦それを當然とし、東京市は日本の帝都であつて、東京市民丈けの都ではないといふやうなことを云ふ。併し平常都會、殊に東京市などが或意味で地方を虐待して居ながら、今度のやうな時に東京市は帝國のものであるから地方は其復興のために盡力すべしなどゝいふのは少し蟲の好い話であると云はなければならない。私は帝都復興は出來る丈け大規模にすることは贊成であるが、その爲めに地方の負擔が重くなるといふことならば、其點丈け政友會と同意見であつて、私は帝都復興の爲めに地方を犧牲にしてはならぬと云ひたい。勿論玆にさういふのは地方が帝都復興に全然關係しないといふのではない。唯當然と思はれる程度に於ては地方も亦喜んで其負擔に應ずべきである。

さて帝都復興の財源を何處に求むべきかといふ問題が生ずるが、それを云ふ前に先づ帝都復興に就いて何が一番必要であるか、換言すれば復興に當つて全力を何處に注ぐべきかといふことを述べたい。私は最初復興院の案出した復興案ですらも十分に滿足は出來なかつたが、併し少くともあの程度まではやらなければならぬと考へた。然るに復興審議會先づ之を修正し、更に臨時議會で之れを削減されるに至つたのは甚だ遺憾である。

私は帝都復興に際して最も重要と考へるのは、他の問題は皆く之れを措き、先づ道路の問題である。殊に道路のつけ方と、道路の幅を廣くすることが肝要である。公園、築港、運河、或

は地下鐵道等は時々の財政狀態に依つて如何ともすることが出來る。併し此機會を外してはどうしても出來ないのは新道路、卽ち道路の整理である。殊に道路の幅を廣くすることは一旦地上に建物を許した後では困難であり、假令それが出來るとしても莫大な金を要するから、今一時財政的に苦しむとも、之れは出來る丈けやつて置く必要がある。然るに此點に就いて今の政治家、若くは其方面の識者と呼ばれる人々の考が割合に杜撰であるやうに思はれる。譬へば復興院が二十四間の道路をつけると議會がそれを十八間に縮めるといふが如きは寔に前途を見ない近眼的な見方であると云はなければならない。今後街がどういふ風に繁華になるかといふことを考へて見るが好い。今でも銀座通り、殊に須田町の雜踏はひどい。將來は現在の道路の幅を二倍にしなければならぬと思ふが、而も猶それ丈けでは滿足する程度とは云ひ難いのである。東京市の人口が將來どの位になるかといふことを豫想すると、所謂大東京なるものが出現した曉には、隣接町村を合せても人口三百五十萬近くになる。猶交通機關の發達に從つて田舍から東京附近に人が集つてくることを考へられるから、四五十年の中には人口七百五十萬位になると思はれる。然らば須田町は電車の交叉點で重要な場所であるから、其時には人口は現在の三倍になつて居るので、通行する人も少くとも三倍になる。其時の混雜は今からでも想像することが出來るのであつて、將來道路を擴張して置かなければ交通上非常な困難を來すことは明かである。他の道路とても其通りである。無論其頃には地下鐵道も出來て居るであらうが、人口が現在の三倍若くは四倍になり、而も交通機關の便があるといふことが、人の出歩く數を增さしめ、結局さういふ人數迄も勘定に入れることになると、地下鐵道でも之れを防ぐことが出來なくなる。最近のニューヨークなどの商業區になると、そこには地下線あり、高架線あり、地上線ありといふ風で、其他の交通機關と相俟つて完備して居るが、而もそこの混雜は名狀すべくもない。又ロンドンのロンドンブリツヂの朝晩の人出は人目を驚かすに足るものがある。さういふ場面を考へると我東京市丈けはさういふ苦しみは嘗めさせたくないとつく〴〵思ふのである。道路さへ廣ければさういふ窮屈な思をしないでも濟むのである。

然らば道路にはどの位の廣さの幅が必要であるかといふと、私の考では一番主要な道路は百間幅位あつてもいゝと思ふ。場合に依つては六十間でも五十間でも差支ないが、百間道路は決して廣すぎるといふ心配はない。東京市でも南北東西を貫く各一線丈けではなく、百間若くは五六十間の道路が三筋にも、四

筋にも街の中を通つて居た方がいゝのである。

玆に問題は將來自働車が今よりも一層用ひられるといふことである。ニューヨークに於ては現在數條の道路が縱橫に街を通つて居る。其道路の交叉點に自働車が差しかゝつたとすると、必ず一方の道路を來た自働車はそこで暫く停車させられなければならないので、行詰りの恐れがあるために急ぎの用事がある時にはニューヨークでは自働車は不便だといふことになる。寧ろ高架鐵道を利用した方が早いといふことになる。これはニューヨークだけのことではなくシカゴのやうな繁華な街になれば何處でもさうである。實際ワンブロック毎に自働車が立往生するやうでは自働車の効用がなくなるのであるから何とかして此問題を解決する方法を見出すことが必要である。今かくの如き場合を豫想して、道路を廣くすれば此問題は容易に解決することが出來るのであつて、幅を廣くした道路の東西の行き方は從前通りとし、南北に來た道路がそれを横切る時に、隧道を作つてその下を行くことにすれば、四つ角に於て互に自働車が待ち合せる必要がなくて濟む。若し交叉點に於て東西を走る道路の下に隧道を作れば南北から來た道路は其隧道のやゝ手前より緩やかな傾斜を爲す。今南北の道路を通行する自働車は此傾斜を下つて、いつでも此隧道を通つて行き過ぎることが自由である

し、假りに自働車が其まゝ隧道を通り過ぎないで、四つ角から一軒手前の家に立寄らうとする時にでも、道幅が廣く、且つ交通に支障がないから、其處に寄つて、また再び先の方に進んで行くことが出來るのである。斯くの如くして、道幅さへ廣くして置けば自働車の行詰りを一掃することは容易である。玆に於て更に問題となるのは、初から道路を百間乃至五六十間として作つて置くとすれば土地が剩るといふことである。併し此時は公園を作らずに置いて、道路の眞中を公園とし、譬へば百間道路であつたならば、其中五六十間を中央の散歩道路とする。そして人口の激增に伴つて前のやうに自働車の通行に不便を感ずるやうになつた時には、其必要に應じて先に公園とした土地を削つて其方に利用するといふやうな方法も出てくるのである。帝都復興の問題としては、道路に此位の考を貫すといふことはどうしても必要である。それには一時に莫大な金がかゝるといふ譯でもなく、場合に依つては相當の年數をかけてやつても差支ないことである。

最後に復興の財源に關して大體意見を述べて見たい。先づ復興の事業に要する費用は東京市が負擔するとして、其中でも都會に於ける土地及び家屋の所有者がそれに當らなければならない。其理由は、都會に於ける地價の騰貴は地主といふ個人の努

勞に依る結果ではなくして、年數さへ經てば自然にそれが騰貴する都會に土地があるがためであつて、此點に於て地主でも家主でも悉く都會の恩惠を被つて居ない者はない。殊に將來東京市が復興して、以前よりも立派な都會になるとすれば、地價が一層騰貴を見ることは今より明かな事實であつて、復興事業は地主や家主にとつても非常に儲かる仕事である。復興事業費を負擔することは彼等にとつて決して損にはならないのである。今大體東京市の面積二千三百六十萬坪とし、此中復興事業費を負擔せしむることの出來ない土地として、第一に宮城皇居の附屬地、皇族の所有地、其他運河、河川、公園等は除かなければならぬ。後に私有地一千三百六十餘萬坪、市有地約百萬坪（此中には小學校の敷地等がある）、官有地五百八十六萬坪がある。此中官有地は從來市に對して税を拂つて居なかつたが、帝都復興のために市が自分の持つて居る土地に對して幾分の負擔に當ることになれば、官有地も亦當然負擔に任ぜねばならぬ。官有地は東京市のものではなく、其處に建てられた建物は日本國民の政府のものである。官有地の負擔額は其上に建てられた諸官廳の建物と共に當然國庫の負擔でなければならない。今之等の土地に一年に十圓、五年間五十圓の負擔額を課するとすれば、私有地の負擔が六億八千二百萬圓、市有地九千萬圓、官有地約三億圓になる。更に家屋が復興費を負擔することになると、燒失前の東京市に於ける家屋坪數六百五十九萬坪、之れに一坪に就き毎年五圓、五年間二十五圓の割合で行けば約一億六千五百萬圓を計上することが出來る。これに前に云つた土地から上る收入を合せると約十二億の財源を得られるのである。若し之れ丈けの負擔をすることが困難であれば、其半額位でも負擔させ、後は公債に依つて補ひ、これを二三十年間に全部支拂ふやうな方法をとつても差支ない。但し之れには反對論もあつて、復興費の負擔は主として現在の人間をして之れに當らしめ、子孫に其負擔を殘すべきではないといふ者もあるが、併し彼等の子孫とても將來自分達が住ふ都會が立派になるといふことであれば或程度迄の負擔をすることは決して不合理ではない。更に他の一の方法としては、前に述べたやうな方法で財源十二億を得られないやうな場合には、其中の半分は地主、家主の負擔とし、後は土地買收の際に半分現金で支拂ひ、後の半分は公債に替へても濟む。いづれにしても此際最も地主、家主などは奮發しなければならない時機であつて、中にも東京市に居る二萬三千の地主は彼等が今迄如何にして東京市のために利益したかを考へれば、復興費の負擔位は進んでしても好い筈である。而もそれは僅かに五年間の辛棒である。私はビアード博士がニューヨー

々の市民の事に就いて云つたことを知つて居る。ニューヨーク市民の一年間の收入は一家族に就いて平均約二千圓であるが、此中一家族が市に對して拂ふ稅金約五百圓で、其他州及び中央政府に對する稅金を合するとまた五百圓になる。斯くの如く二千圓の收入ある者が千圓の租稅を拂ふ、而もニューヨーク市に對して拂ふ五百圓の稅金の九割三分は地租と家屋稅とであつて殊に其中の大部分は地租が占めて居るといふことである。併し之れは勿論一年二千圓の收入ある家族が五百圓の租稅を拂ふといふことではなく、寧ろ金持が非常な負擔をして居るといふ事實、即ち金持が殆んど其收入の半分位を負擔して居るといふ事實を示すものである。彼等が市に對して拂ふ稅金の九割三分は土地、家屋の不動產に對する租稅であることを思へば、東京市の地主や、家主が金を出し澁る理窟がない。常に餘裕のある地主や、家主は此際進んで東京市のために宜しく負擔に當るべきである。二萬三千の地主が此精神を以て其負擔に任ずるならば東京市の復興の如きは決して困難な事業ではない。東京市は自分の手で東京市を復活させることが出來る。地方の力を借りるといふやうな事は其時には最早問題ではない。

帝都復興計劃の不徹底と復興事業に對する全國民の責務

貴族院議員　上山滿之進

昨年九月一日の大地震は地震國の最たる吾國にも稀に見る激烈なもので、東京、神奈川、千葉、埼玉、靜岡、山梨、茨城、一府六縣の廣大なる地域に未前の慘害を與へた。特に地震後三日間に亙つたる彼の大火災は東京横濱を忽ちにして茫々たる焦土と化し、一見殆ど回復すべからずと思はるゝ迄に破壞し了つた。今や吾々はその善後の難關に當面してゐる。

這次の大震火災は實に死者行衞不明者十四萬、傷者十萬を出し、家屋の全潰十一萬、全燒三十五萬の被害世帶數を示した、この外に半潰半燒流失の世帶數も少くない、その中被害の最も重大なのは東京横濱で、死者行衞不明者の數、市部のみで、東

京十萬人弱、橫濱二萬七千人弱、合計十二萬六千人强で、而に一府六縣被害總數の九割に相當する多數である、而して死者行衞不明者に負傷者を加算すると約二十萬人になる、又被害世帶數中、全潰は東京九千、橫濱一萬二千で、總數の二割に足りないが、その火災の害に至つては、全燒、東京二十七萬五千、橫濱五萬九千、合計三十三萬餘に及びて一府六縣被害總數の九割五步以上の率を示してゐる、更に兩地の世帶の總數と全燒數とを比較すると、東京では五割七步、橫濱では六割が一朝にして形跡もたく烏有に歸したのである。同一被害區域中に於て家屋の潰滅が兩地に比較的少いのに、人命の損傷と燒失家屋が一府六縣全數の大部分を占めてゐるのは、地震は兩地特に東京に於て割合に弱かつたが、火災は最も暴威を逞うした結果に外ならない。

嘗て國運を賭して惡戰苦鬪した日露戰役の死傷者數は二年間に八萬四千餘であつた、これも勿論驚くべき多大の犧牲ではあつたが、それは全國四千七百萬の同胞中から普遍的に出た、この度の犧牲は死者行衞不明者だけでもその一倍半の多數を僅々二晝二夜の間に東京橫濱の小天地から出した。酸鼻の極とは即ち是れである。

大震火災に因る財產上の損害は或は八十億圓と稱へられ或は四五十億圓と呼ばれて、固より正確なる數字を知るに由なき所であるが、その莫大なることは言ふ迄もない。震災前の吾帝國の富力は八百六十億圓と算へられてゐた、これに對比すると、大震火災の損害を假りに五十億圓としても、實に全國富の百分の六が忽如として消滅したことになる。彼の悲壯なる日露戰役が吾國に負はしたる物質上の損害は僅にこの三分の一にも及ばざる十四億餘圓であつた、加ふるにこの國富の減少なるものは災害當時に現存した財產の亡失のみを計上したもので、災害のために各般の產業組織が或は破壞せられ或は傷害せられ、茲に新規なる生產も取引も阻止せられ、因つてその復舊迄の數年間に被むる損失は勿論この外であつて、しかもそれが又數十億圓の巨額に上るべきは想像に難くない。嗚呼天は何故に吾が帝國に殃することの深刻なるのであらうか。而してこの損害の殆ど全額に近き大部分を負擔たるものが東京橫濱であることは改めて考ふる迄もなく明白である。

東京橫濱がしかく震火災の大慘害を受けたのは、一は帝都にして又大阪と共に帝國の最大經濟中心であり、一は帝國第一の對外貿易港であつた爲めに、人口も事業も而して財產も茲に集中してゐた故であることは多言を須ゐざる所である。

吾々は今後東京橫濱を復舊し更にこれを復興せねばならぬ。

猶その復興計劃は果して適當に進行しつゝあるであらうか。

一、帝都復興計劃は不徹底なり

昨年末帝國議會を通過したる帝都復興計劃は頗る不徹底なものである。玆に帝都と言ふは政府の用語に從つて東京に横濱を併せたものである。

抑も復興計劃は轉禍爲福を心髓として大膽に策定せねばならぬものである。彼の震火災は如何にも空前の大災厄で洵とに悲しむべきの至りではあるが、都市計劃の爲めにはそれが却つて多大の利便を齎らした、即ち從來内務省邊りで立案せられた都市計劃は當時の現實に囚はれざるを得なかつたが、今や大震火災はこの現實を一掃し盡して自由の手腕を災後の都市計劃者に許した。この機會に於て吾々國民は畢生の勇猛心を發揮して十全なる帝都の計劃を定め不撓不屈これが完成に努力せねばならぬ。それが隆興國民の意氣である。この見地からして吾輩は第一に兩市就中東京に於て市部擴張の根本方針を定め、第二に住宅區域、商業區域、重工業區域、輕工業區域等の大様を劃定し、第三に主要街路、地下鐵道、水道、下水、地下埋設物共同溝、港灣、運河、公園等の配置を定め、第四に是等を基準として一般的土地區劃整理の計を立て、第五に玆に中央市場公設市場等公益機關の配備を考慮し、總て所謂百年の長計たる基礎的計劃を確立することが帝都復興の第一義でなくてはならなかつたと信ずる。而して是等の計劃を立つるに當つて、交通衛生は勿論特に耐震防火に深く意を用うべきは當然である。此の如くにして初めて現在の災餘の帝都を復興するのみでなく、今後或は再び襲來すべき大災厄をも見事に征服して永久に帝國の運命を磐石の上に安置し得ることになる。

この大計劃を確立するのは固より一朝茶飯事ではないが、吾輩には不能事とは思はれない。數年來政府が從事してゐた所の都市計劃調査で、今は相當なる材料も揃ひ又愼重なる研究も遂げられてゐる筈であるから、災後の現實に鑑みてこれに適宜の取捨按排を加へたならば、復興計劃の大方針を定むることは必ずや難事でないと信ずる。

或は斯る大計劃は國力の堪ふる所にあらずと難ずるものもあらう。乍併吾輩の意見はこの大事業の全部を一齊に直ちに大正十三度から着手すべしと強うるものではなく、其實行は無論財政の現狀に順應せしめねばならぬが、唯根本の計劃は永遠の將來を見越して理想的に策定したものでなくては、事業の實行が必ず偷安姑息に陷り更に未來の帝都發展に一大支障を來すべきことを虞るゝに在る。然るに遺憾ながら吾輩のこの希望は今や

水泡に歸した。當路者も後に陳ぶるが如く頗る苦しき立場に在つたのであるから、その罪を何人に歸すべきやは別論として、事の玆に至つたのは帝都の爲め、否全帝國の爲めに惜しみても尙ほ餘りあることである。

帝都復興計劃は叙上の如くその根柢に於て既に完固の要を缺いたのみでなく、その實現に於ても早く當初から不十分でありその後更に因循不徹底に終つた。

復興院當初の計劃は復興事業の國庫負擔額七億四五千萬圓であつたが、間もなく大藏省でそれが七億三百萬圓に削減せられ、更に復興審議會で削られて六億圓未滿に減じ、復た又帝國議會に祟られて結局五億圓以内に縮少せられた。何故に大帝國の帝都復興はかくも虐待せらるゝのであらう。

吾輩とても決して帝國財政の窮狀に無關心ではない、寧ろ吾輩は近年の放慢なる財政經理の餘殃に最も深甚なる憂慮を抱くものである。乍去吾が財政の現狀がこの焦眉の大事業の爲めに更に數億圓の國費を支出し得ざる程に貧弱なるものとは吾輩は考へ得ぬ。單に國庫の損益の打算から言つても、後に擧ぐる如く國庫收入の一割以上が彼の大災害の爲めに激減したことに思ひ到るときは、その減少の主要區域たる帝都の復興の爲めに思ひ切つて經費を投じ一刻も速かにその經濟機能を復活せしむるが當然である。斯く考へ來れば當初の復興院の七億四五千萬圓計劃さへ既に甚だ不十分である、然るに大藏省や審議會や帝國議會が尙ほ一步々々とこれを減縮したる態度に對して吾輩は不平なきを得ぬ。ましてその減縮の動機が大藏省のは格別として、その他のは個人的感情と政爭的機略とに出發してゐる嫌のあるのは吾輩の最も取らざる所である。その感情機略が如何なるものなりしやは說明する迄もなく、天下何人も夙に感知してゐる所であらう。

帝都復興計劃は此の如く杜撰ではあるが、今日は最早根本的にこれを改訂するの餘地がない、若しこれを敢てするならば、只さへ既に遲れた復興事業の着手が益々延滯して、角を矯めんが爲めに牛を殺すの虞があるからである。今や吾々は死兒の齡を算ふるの淚を拭ふて我慢せざるを得ぬ。唯庶幾する所は今後の當局者がその實行に際して根本の大目的を常に考慮の中に置き、事業の進捗を阻礙せざる範圍に於て計劃の不備を補正せんことに在る。

二、帝都復興は全國民の責務にして又利益なり

世上往々地方の利害に顧みて帝都復興事業に慊焉たるやに思はるゝ異議がある、衆議院が復興豫算を削減したる理由も一つ

は玆に存するやうである。吾輩の所見は全くこれと相反する。

同じく罹災區域の復興でも、帝都に關するものは獨り帝都住民のみの責任でなく、實に全國民の重大なる義務である。斯く言へば迎吾輩は決して東京横濱以外の罹災區域に冷淡なのではない、又罹災區域の爲めにのみ謀つて他の地方の利害を閑却するものでもない、唯特別に東京横濱を絶叫するのみである、これを絶叫する所以は寸毫も兩地に私するのではなく、兩地の帝國に於ける位地に鑑みて兩地の盛衰興廢が直ちに全帝國運命の岐るゝ所たることを痛感するからである。

東京横濱が帝國の樞軸たるは自明のことであるが、今この觀念を適確にする爲めに四五の數字を點検してみたい。

東京市の面積は内地全體の僅かに萬分の二たる五方里の狹いものに過ぎないが、その人口は萬分の四百に垂んとしてゐる、即ち東京市の人口密度は全國平均の四百倍である。横濱市は東京市程ではないが、それでも萬分の一弱の面積に萬分の七十强の人口を包容してゐる。これだけでも如何に兩地が帝國に重要な地位を占めてゐるかが分かるが、更に兩地の經濟關係を調べてみると尚一層その事實が明瞭になる。

政府が議會で説明した所に依ると、彼の大震火災の爲めに大正十三年度の收入が十二年度に比らべて一億四千百萬圓を減じた、即ち一割以上の減收である。この減收額は固より一府六縣全體のではあるが、その大々的部分が東京横濱兩市と接續郡部の狹い區域、即ち廣き意味の東京横濱のであることも勿論である。是で觀ても如何に東京横濱が帝國の中樞であつて從來如何に多大の國費を負擔してゐたかを知ることが出來る。

全國の大正九年末の工場數四萬六千の中で、一割一分の五千が東京府に在つて、その職工數も工業生産額も亦た自からこれに比例してゐる。

全國の會社數とその拂込資本金額とを調べてみるに、大正九年末現在三萬會社八十二億圓である。その中で東京府のは會社數は一割一分の三千二百、資本金額は三割六分の三十億圓を算してゐる。會社數の比率に較らべて資本金額の率が著しく高いのは如何に大會社が此地に集中してゐるかを適切に説明する。

大正九年末現在の郵便貯金額は全國で八億四千萬圓であつたが、その中東京府のは一億三千餘萬圓で正に一割六分に該る普通銀行の普通預金は全國五十六億餘圓の中に東京府のが二割七分の十五億餘圓ある。以て如何に東京に財産が集積してゐて又如何に東京が金融の要衝であつたかの一端を見るに足る。

今擧げた二三の統計は東京府下全體のもので固より所謂東京のみではないが、その大部分が所謂東京即ち東京市と隣接郡部

の小區域に關するものたることには何人にも異議はあるまい。本來東京府の中でも市部隣接狹小區域を除きたる郡部の事情は他府縣の普通の田舍とさしたる相違なく、加ふるにその區域も他府縣に比らべては甚だ狹隘なものである、從つて以上の數字は大體に於て所謂東京即ち市部と隣接郡部の小區域のものと看做しても甚しき誤りではない。

横濱の經濟狀態は東京に比較すべくはなくとも、帝國一般に比しては猶ほ大に優越なるは言ふ迄もない、その數字的詮索は記述の煩瑣を避くる爲めに今は省略して置く。唯一つ横濱の最大使命たる對外貿易に關する數字だけは玆に默過することが出來ぬ。大正十年に於ける吾國の貿易總額は約二十九億圓であつたが、その中で横濱港に由るものは約四割の十一億餘圓に達してゐる。これを輸出と輸入とに區別してみるに輸出に於ては全國總額の四割八分强を、輸入額に於ては三割二分强を横濱が占めてゐる。横濱は實に吾帝國の最大貿易港である。

之を要するに帝都復興は東京横濱七八方里の局部的問題ではない。東京は吾國の帝都であつて政治は勿論萬般の社會事相が輦轂を中心として此地に開展し活躍してゐる、その東京の隆替は國民全體の面目に關し從つてその責任である。又東京横濱併せて僅に十方里にも足らぬ狹小な地域に全國平均密度の數十倍數百倍の同胞が雜然蝟集して活動してゐて、終に莫大な生命財產を損傷したことに對し、吾々は徹底的同情を吝むべきでない。尙ほ平素彼等が國庫收入の一割以上を負擔してゐたことに此際報酬するのは吾々全國民當然の義務であらう。更に又以上縷陳したる如く、工場數に於て、職工數に於て、工產額に於て、會社數に於て、その拂込資本額に於て、郵便貯金に於て、銀行預金に於て、其他各般の經濟現象に於て、將た又對外貿易に於て、明かに帝國全體の一二割乃至四五割の優越なる位地に立ちて帝國經濟の大中樞を爲してゐたこととの事實に顧みるときは、東京横濱の復興一日速かなれば、郡部を問はずその利益に均霑して帝國全體の國力が一日速かに恢復し進展する道理である。結局孰れの點から考へても帝都の復興は決して東京横濱一地方のことでなく、必ずや全國民が自己の面目の爲めに、又情誼に基き且つ利益の爲めに一致協力して敢然擔當せねばならぬことである。固よりこれが爲め極度に帝都以外の利益を犧牲に供すべきではないが、地方人士たるものは假令地方關係の事業が數年間中止せられたれば迚、この帝都復興の大事業に對する自家の使命を忘却してはならぬ。斯くてこそ初めて大災厄後の帝國の將來に光明の赫灼たるものを認め得るのであると吾輩は確信する。古語に天之將下大任於斯人也必先苦其心志とあるが、是れ實に

此時此際吾々國民の朝夕三復すべき金言であらう。

（大正十三年一月十三日稿）

帝都復興と農村振興

文學博士　三宅雪嶺

帝都が震火災で大損害を被つたのは、全國に衝動を與へたは勿論、世界を駭かしたのであるが、その眞に恐るべきを感じたのは、直接に目撃した者に限り、他は駭いたものの、日を經るに伴ひ、殆ど全く忘れたやうになつたりする、身に受けた痛みは長續きしても、駭きは永續きせず、前と打つて變つた心持ちになる。初め帝都全滅の報道の傳はるや、上を下への騒ぎになり、全力を盡くさねばならぬとし、如何なる負擔にも堪へようとする勢であり、それが日ならずして帝都問題も一地方問題に過ぎぬと云ふを聞くに至つた。震災又は火災は珍らしからず、地方の事は地方で擔任すべく、東京に代つて他の地方まで負擔するに及ばぬと説く。帝都に住居して居る者から見れば、帝都の損害が全國の損害であり、全國にて復興に努めねばならぬと考へるが、他の地方はさうでなく、初めこそいくらかさう思ひたれ、氣が落着いて次第に冷たくなる。佛國又は白耳義の如く四年餘りも敵軍に土地を荒されては、全國で泌々悲慘を感じ、復舊又は復興に苦心せずに居れなくなるが、三日間の出來事なる震火災は、深く人心に沁み込む迄なく、單に吃驚し、我に還つて笑ふ氣持がある。帝都にあつて計劃する際、全國で力を添へると信じて居り、京阪では帝都を危險地帶に置くべきでなく、遷都したらばよく、京阪の方が適當でないかと云ふのがある。或は姫路邊が最も安全と稱し、甚だしきは一層飛び離れ、朝鮮に遷都してはと稱する。種々樣々の意見の出づる内、矢張り帝都は從來の儘にして復興の實を擧ぐべしとするに傾き、詔敕にも明かにされた。

復興に力を注ぐ者は帝都を理想的首都としようとするのであつて、案を立てれば相應に立ち、百年の大計として思ひ切つた

計劃に着手せねばならぬとするが、そこに横はる疑問は、金と人とである。本來震火災の損害は幾許に上るか。百億を超ゆるとするのがあり、之を超えぬとするのがあり、或は案外少いとするのがある。損害の恢復もさることながら、成るべく帝都を新興帝國の首都たるに適するやうにしたいとし、それに數十億圓の經費を見積り、内債で出來得ねば外債を起すがよく、米・英で三十億位は難しくないとした。金があれば種々の計劃を立てる事が出來る。天晴れ世界第一流の首都の仲間入りし得られさうである。然し假りに外債を起し得るとし、七朱の利子で年々數億圓に上り、たださへ困難なる財政をしていよ／＼困難ならしむるを免かれぬ。地方では隨分疲弊して居る所があり、農村が存續し得るかが疑はれる。地租委讓を必要とするかと思へば、それが實際に効用なからうと云はれる。農村の人から見れば、帝都を立派に飾り立てて畢竟何の益あるかを怪しまずに居れぬ。一方で何とかして火災保險料を支拂はしめょうとすれば、他の一方で一地方の爲めに全國に負擔を及ぼすべきでないと稱へる。殆ど問題毎にさうなつて居り、延いて復興計劃が漸次縮小し、復興院廢止と云ふ程になつた。斯かる關係は多くの事に免かれ難く、デリケートの宜しきを得る所に判斷及び處置の妙を認め得るのである。

帝都は中央政府が存在すれば足り、米國の華盛頓の如きでよいでないかと云ふが、東京は之と趣を異にし、矢張英の倫敦、佛の巴里、少くとも獨の伯林と趨勢を同じくする所がある。中央政府の所在地のみでなく、商工業地として相應の地位を占め、帝國の表看板とするに足る。看板よりも内容と云ふものの、看板を棄つべきでない。外國人が東京に來たり、成程立派であり、設備が整つて居ると思ふのが、全國の信用に關し、取引に影響する所が少くない。帝都を立派にするのが無益でなく、いくらか全國で力を添へねばならず、添へ來つて居り、添ふべきを承知して居る。

然し何を云ふにも新に年々數億圓の負擔を増すに堪へず、それ程立派にしなくてもよからうといふ事になる。その上若し得べき限りの金力を以つて帝都を立派にし、設備を整へ、職業がいくらでも見つかるといふ事になれば、地方で鍬鋤を持つ　汗水垂らすよりも、東京で仕事する方が儲けが多く、相率ゐて都を指し、荒廢する田畠がいよ／＼荒廢する恐がある。現に農産物が不足を告ぐるのに、一層不足を告げては、如何になるべきか、帝都の復興も大抵の所で思ひ切られば、恐るべき結果を齎しさうに思はれる。

然しそれならば、地方に氣兼ねして帝都の復興を復舊だけに

止めて置くべきか。英國の倫敦は東京の約三倍、全國人口の約六分一を占め、それで世界に雄飛して居る。曾て農村に重きを置き、農業を標準にして政策を建て、後に一轉して商工に重きを置いたのが、その今日ある所以であり、若し依然農業に引連られて居つたなら、到底現在の位置を占めるに堪へず、我が日本もそこに着眼せねばならぬと云ふが、英國は所謂太陽の沒しない植民地を所有し、日本で之に較ぶべきものがない。大陸に土地を得たとて、大規模の農業を行ふに難い。滿蒙で大農を施行し、南米又その他で大農を施行し、特別の運送で廉價に農産物を輸入し得るならば、狹い國土の一割五分を耕作するに骨折るを要しまいが、後れ走せに世界に乘出し、右から左といふやうに處置する事が出來ぬ。今の所未開耕地を開拓し、肥料を施し、收穫を多くするのに希望を囑して居り、それで猶ほ幾年か無事に經過し得べきも、國勢の發展に困難を感ずるは遠い將來の事でない。帝都の發展は最早や中央集權を意味せず、世界に交際し、市場を爭ふの必要ある。華盛頓は單に政府の所在地を云ふも、世界の人が遊樂するに適するのみならず、近くに紐育を初め大都市が控へて居る。日本で東京が二百數十萬人を集め、大東京として三百數十萬に上る事、廣い亞細亞大陸に例がなく、文明文化において歐米に劣るまいとする所の勢に伴つて居らぬとせぬ。

帝都問題は政府の所在地といふやうな事のみでなく、ならう事ならば陸海軍又は商工業を以つて世界に仲間入りするが如く、首都の設備及び装飾を以つて仲間入りすべきである。首都を以つて仲間入りする事は、全國人の生活に關係して居る。只、日本の領土が限られて居り、今の國際關係で之を破るに難く、現在の領土にて事を處する間、地方農村との關係に注意し、農村の荒廢を防ぐに努めねばならぬ。支那又は露國と特別の協約を以て、此の難關を切り拓き得さうで、なかなかさう行かず、狹い地球の上で、餘計な心配せねばならなくなつて居る。將來の道がないでなく、日本の國土で何を爲し、大陸の某〻地で何を爲すべきか、人類の幸福になる事がさま〴〵に有り得ながら、直ぐ手を着ける事が出來ず、機會ある毎に少しでも手を着けるやうにすべきであり、その爲めに有能の政府を作るやうにせねばならぬ。今の政治狀態で餘り望みがない。全國多數の人が早く此の邊に氣付き、如何にすれば世界に國力を伸し、且つ國民の生活を安んずべきかを考ふべきである。能はざるにあらずして爲さざるなりと悟るべき所があるでないか。

市民の一力を頼む

杉森孝次郎

東京が單に日本國の政治の中心だからといふだけの理由にもとづいて東京の復舊またはいはゆる復興として多少倍舊的再興に、日本國民全體が、したがつていはゆる東京または廣く罹災地以外の地方民までもが、すべて一律的に無制限の負擔を强制されべき正當理由は勿論成り立たない。いはゆる地方民が東京再興のために支出すべき財額は、地方民自身の私的、自發的意志にもとづく部分を除いては、すなはち政府が公徴すべき部分としては、純粹に國家的、國民的眞正利害の精慮が必要として要求する額を越えてもならず、それに達しないものであつてもならん。

たとへば政府直屬の諸官省再興費の如きは、當然地方民の負擔をも例外としない。その諸官省を再興するにあたつて、眞の能率に於いて出來るだけ高く、冗費を出來るだけ皆無にする努力の如きが、この際特に切要であることはいふまでもない。

東京は、日本に於いて、すでに產業の、また殊に金融の一大中心地として、民間及び官、公設の種々の設備と基礎を形成し來たつたのだから、その東京を盛大に再興させることが、全國民の間接及び直接の利益であること、必要であることはあきらかだ。たとへば大阪の商人にしても、關東や東北に市場を造り、擴げるためにも、東京を有用とする程度は從來甚大であつた。この關係は、日本の各地方と東京との間に、今後進化こそすれ、退化する必然をも、當然をも決して帶びない。現に、東京を中心として新設されてゐる鐵道だけでも、大なる既成の國民的努力ではないか。いはんや、京濱間に運河を開鑿し、東京自身にも直接の輸出入港を持たせることが、全國民の利益を目的とする見地から考へて、決して損でなく、得であり、しかも決して小さな得だとは考察されえない如き可能的好望の事情もあるに於いてをや。

しかしながら、この際、なに人も極說して飽くことを知らざるべき最根本の要件則は、內容としての、實質としての東京再

興は、現に東京に住み、今後東京に住む人々自身、すなはち市民自身の一力にのみ依頼すべきだといふことだ。國家としての政府は、また國會も、わたくしがこの文の最初に注意した通り、なんらの錯覺をも、幻覺をも、迷信をも、情實をも、私的利害意識をもまじえずに、純公至正に、國家的、全國民的、したがつて勿論東京市民を完全に考慮に入れ、含み意味した見地からして、眞に必要にして可能な限度の再興費を出來るだけ確算し、それを徴税したり、募債したりすることにしなくては不正だ。國家の役人や議員としては、さうしなくては無責任だ。

市民自身の一力が、東京再興のほとんど全力だ。これは、今後、いやでも應でもさう成り行くほかないが、現在に於いてすでにその兆候がある。

焦土が、眺めて見ても、歩るいて見ても、眞にはてしもなかりし漠々たる慘風悲砂のみを行人の顔に吹きあてて、つい先日までは、ゐた、あの一面の焦土が、いまでは、新壯の氣に惴夫をも涙をもつて奮起させる滿都のバラックとなつたではないか。人性の自己保存力、創造力の深絶は、このごろの焦けあとを訪ふて見れば眞に想像以上の現實としてなに人をも涙ぐませる。これだ、このたつとき一力に依らないでは東京の再興は絶望であると同時に、このたつとき一力に依る限り東京の再興は、あすも太陽が東のそらから闇をつんざいて再來することが不可疑である以上にも不可疑だ。最も確實な可能だ。

ひるがへつていはゆる役人や議員の仕事と、それの成績を見よ。それは、實に、ガス袋よりも無内容なものであつたでないか。殊に政府のそれなどは、眞にシヤボン玉同然のはかないものであつた。かれらは他人だからだ。

東京の再興を飽くまで堅實に、そして盛大に實現したく思ふ人々、その意志の人々は、たのむところは、かれら自身のほかにはないことを知り抜いてゐなくてはならん。そして、その人々は、事實上、市民のほかにはない。

外債募集もいい。しかし、そのいい外債は、確實なる償却の見込の立つ限度内のものでなくては成功しやうもないし、かりに成功しても内外に申しわけのない事だから、當分、いなこの際、巨額の外募は問題にならん。先づ市民自身が、及び國民全體が、非常絶大の自助力を顯明に天下に證示してこそ、外募も順潮に迎へられる可能を生ずる。

いはゆる入超決濟のための資金を、またそれと關聯して在外正貨の空乏に赴むくことを防ぐための資金を、外債によつて一時まにあはせ、そして、それによつて、内債募集を成るべく輕減し、地方發達、内地産業の資金を成るべく保護する方針は、

今日眞に避けがたい。要するに日本全國を、國際的社會に於いて、生産的位置を早く、すこしでも堅實に、大きく持つ國にすることが、國家的、國民的根本必要事だからだ。

バラック全街、全都の東京を見れば、そして、それとの對照意識に於いて政府の役人の行績を見れば、前者は實にオーアシスであつて、後者は實にデザートそのものだ。東京市民及び全日本國民よ、こひねがはくば、そのオーアシスの自奮をいやが上にもつちかうて、オーアシスの飛躍的成長的全延によつてデザートの東西南北涯をまでも青緑々に生え繁らせよ。今日のオーアシスが明日のデザートに完全あますなき程度にさへも取つて代はれ。

勿論、役人の行爲が文字通りに全部つまらなかつたといふわけではない。たとへば手形再割引補償の如きは有意義であつた。しかし、これの如きが、政府の全行爲のうちに於いてまた實にほとんど唯一のオーアシスを形成したかなしむべき概があつたでまいか。





涌く井のそこの皓石や
記憶は澄みてわが胸に
解けやらぬ身の憂かな
惱み深くもうつとりと。
誰かは知らむ吾ひとみ
色蒼ざめて見詰むるよ
涙ばなしの聽き手より
傷ましや物おもひげに。
燻ぶるこゝろ一つもて
人は土偶へ墮ち行けり
大悲や永遠に續けどて
記憶となりて殘るなり。

Памятъ-Анна-Ахматова

西伯利三界を迂路つく

大泉黒石

一

俺のやうな素寒貧が、金持だらけの日本にゐるのも氣のひける話だ。泥坊と乞食ばかりの共和國へでも引っ越したら、さぞ伸び〳〵することだらうと思ひながら、三河島の屠牛場で働いてゐると、合ひ棒の平田萬之助が、妙な筋から、西伯利のチタ新聞社に勸め口を見つけて來た。お前も一緒に行かないかと言ふから、早速よからうと答へ――東京を立つた顛末は、既に天下周知のことだ。ところが、朝鮮から滿洲へ入つて、汽車の中で聞い

處によると、北へ北へと行くにつれて、泥坊と乞食とが兵隊さんの頭かづより多くなるさうだ。早い話が、長春まで行くと政府免許の泥坊市場もあれば馬賊もゐるさうだ。さては行くべき處へ遂に來たなナ？有望々々と嬉しくなつた勢ひで、長春に着くとすぐ泥坊市場を見物に出かけた。市場は城外にある露店の行列だ。成るほど是は搔つぱらつたに違ひないやうなチグハグの嫁入道具から學校の教科書までチヤンと盜り揃へてある「誠心通天」といふ看板の下には主人の泥坊が正直さうに控へてゐる。「薄利多賣」といふビラの前には小僧の掏摸が陽氣となつて客を呼んでゐる。仕入れが只と來てゐるから、値段も法外に安くてよく賣れる。品物がなくなるとまた通天の誠心をもつて、どこかの倉を破りに行けばいゝのだから便利な話だが、さう無暗に人の物を景氣よく賣り飛ばされては災難だと金持はいふかも知れない。しかし、俺みたいな素寒貧にとつては有り難い福音なんだ。構ふこたアない。せい〴〵勉强したまへと贊成してやつた。この調子で北の方へ行つたら、モツと贊成して貰ひたい泥坊が、俺の到來を待つてゐるだらうと思つたら案に違はず、凄い奴が現はれた。それはかうだ。話は此處から始まる。泥坊市場の長春からハルビンを通つて俺と萬之助とは目的地のチタ驛についた。坊さんで社長のソロヴィヨフ爺さんと、萬之助の世話人の弟と迎ひに來てゐた。ハルビンから電報を打つて置いたのだ。四人はイズウオーチクに乘つて爺さんの家へ向つた。始めてお目にかゝるお爺さんが、親の代から知合つてゐるやうな碎けた日本語で、社員一同が俺と萬之助の到着を待つ甲斐があり、遠路つゝがなく風邪も引かずに來てくれて何より嬉しいとか、さぞかし疲れたらうから、今夜はゆるりとお休みなさいとか、頻りにお世辭を云ふのだ。新聞の社長なんて、こんなに物優しく丁寧なものかしらと思つて、お辭儀ばかりしてゐると、ソロヴイヨフ爺さんは例の流暢な日本語で「シヤテ。お二人シヤン。私は毎日忙がしいので、ゆつくりお話も出來ないと思ひますから、序に言ふて置きますが、あなたは廣告部長の指圖通りに明日から集金と廣告取りをやつて下シヤイ。」と萬之助に云つた。それから俺に向つて「あなたは社會部長の指圖通りに明日から探訪をやつて下シヤイ。ボリセヴイキの爲めにならぬやうな面白い記事をとつて歩けばいゝのです。いゝですか？」と云つた。冗談ではない。いゝですかも糸瓜もあるものか。まるで話が違つてゐる。東京を立つときには、萬之助が編輯長で俺が主筆だと言ふから、西伯利三界の廣告新聞でも我慢して乘り出したのだ。こゝまで釣り寄せて置いて途方もないことを言ふな。俺は癪に障るから一應きいて見た。爺

さんは口を丸くしてビックリしながら、萬之助の世話人の弟を指して、「主筆は此の山鍋さんです。編輯長は私が兼ねてやります。それは何かの間違ひでせう?」と間違ひにして了ふのだ。流石にハアと驚いた。して見ると、萬之助は矢張り廣告取りの集金屋だ。内地にゐる頃は、記事取り記者は、キジをとつて歩るくんだから「狩人」、だなんて馬鹿にした撥が當つて到頭「狩人」に成り下つた。豈圖らんやとは此の事だらう。賊だと言へば、勝手にしろと來るかも知れない。こんな處で喧嘩をすれば損だ。どうしたもんだらうと悲觀してゐると、俺をつれ出した萬之助が、氣の毒さうな眼つきで「いや。こんな筈ではない!早速東京へ掛け合ふから、すまないけれども、暫く我慢してくれたまへ。しかし、つくづく考へると、いくらスベリヤの新聞がつまらないつたつて、君や僕を主筆に迎へる道理がないよ。」と泌々と悄らしいことを言つた。馬鹿げた話だが仕方がない。「それもさうだ。心配するなよ。こんなことには馴れてらア」、と俺も言つた。的が外れて出世のやりそこないは珍らしくないのだ。月島海岸は傳兵衛の家を飛び出して、三河島屠牛場へころがり込む道中で既に一度背負ひ投げをくつたことがある。俺は金に困つて童話を書いた。萬之助には出來ない藝當だ。その童話を買つてくれた「子供の世界」といふ雜誌の發行元が、神田駿河臺下の洛文堂だ。教育本を出版するのが本業の洛文堂主人が、俺を見込んで是非お願ひしたいことがあるといふのだ。ボロ〳〵姿の俺に見込みをつけるのだ。荷造りの手傳ひか、印刷屋の使ひ走りだらう?この際、何でもやります。承知しましたと答へた。すると赤ツ鼻の主人が、エヘ、、御謙遜には痛み入りますね と云ひながら、二冊の西洋本を持ち出した。一ツは「ライプニッツの單子論」で、一ツはウイリアム・ゼームスの「宇宙多元説」だ。「實はこのうちの一冊を出したいのですが、翻譯してくれませんか?」と主人が言つた。こいつは一寸意外だつた。しかし二三頁くつて見ると、恐ろしく六ケ敷さうだから、折角のことだが僕の歯に合ひませんと斷つた。すると又洛文堂が言ふのだ「いや、そこを一ツ勉強しておやりになつては如何です?謝禮金の五十兩は兎に角、あなたの御名まへが日本中に響き渡りますよ。童話なかでウダツは上りませんぜ。」さう言はれると、成るほど、五十圓貰つた上に、俺の名まへが日本中に響き渡るんだから考へた。結局、ライプニッツをやる氣になつて引きうけたのは、我ながら勇ましかつたが、いさ仕事にとりかゝるとサア大變。「精神的の單子」とか「豫定の調和」とか、譯のわからぬ文句が、矢鱈にとび出すのだからたまらない。五里霧中でフラ〳〵しながらやつてゐると案の掟だ。

一吾が云ふところの説を了解せんには、先づ以て、デモクリートスやプラトーやアリストートルを解せざるべからず。」といふライプニツツ先生御自身の口上に行き當つた。曰くつきの雜物だ。生ひ憎デモクリートスやプラトーを知らないのだから、要領を得ない筈だ。曲りなりに仕上げた原稿を引き渡して金を貰つた。あとは只、有名になるばかりだ。有名になれば商賣繁昌だ。俺は嬉しくてたまらないから、出世の前ぶれをして歩いた。ところが、いつになつても本は出來ない。待ちきれないから洛文堂へ樣子を聞きに行くけれども、今に出ます出ますとばかりで、今に出ないから、思ひきり五月蠅く催促してやると、主人は澄したもので「さう矢ヶ間しく仰有るなら、打ちあけて言ひますが、あの原稿は、N大學にゐる宅の伜の卒業論文に頂いて置きましたよ。おかげさまで卒業が出來ましたから、いつか機會を見て、誰か著名な先生の御名まへでも借りることが出來たら出版することにしませう。」これは甚だ輕少ですが伜の卒業祝ひにと云ひながら、五圓札をたつた一枚くれる始末だから、呆れ返つた洛文堂があつたもんだ。おかげさまで伜は首尾よく卒業してよからうが俺の名まへは一體全體いつ響き渡るんだ！噓つきめっと腹の中で怒鳴りながら、五圓を頂戴して伜の卒業を目出たく祝つてやつたことがある。それから間もなく屠牛場に口を見つけてくれた人があつた。帳簿係りか會計かと思つて行くと、親方が俺を引つぱつて、牛や馬に紹介するのだ「おめえの仕事は、こいつをかうやつて」と脊だらけの鐵の棒を振り上げながら「ボカリと一打ち野郎の眉間にぶち込みアいゝんだ。わかつたか？」と牛の頭へ打ち下ろす眞似をして見せるのだ。牛と馬が恐ろしい目で俺を睨みつけたから驚いたこともある。前はかうして見ごとに外れるのだ。一度や二度ではないから諦めも早い。ソロヴィヨフ爺さんの挨拶を聞いた俺は、腹が立つやら、情けないやら、譯のわからぬ涙聲で「ともかくも、よろしうございます」と澁々ながら承知してやつた。呉服屋の番頭みたいな山鍋十作が「それで、話はきまつた！ときに、どうです東京は？」と高之助にしやべりかける。その途端だ。爺さんのおとなしいニコ〳〵顏がサツと變つて、よろしい！話がきまれば既にお前たち兩人は、俺の傭人になつたのだから、此の場に於て命令するが、兩人とも謹んで承はるがよからうと云はねばかりの物々しい權幕面になつた。早速ながら、諸君の給料は、日本金貨で月に七十五圓もあれば澤山ですから、諸君もその積りで儉約して下シャイ！」といふ高飛車な態度だ。見かけによらぬ現金な爺だと思ひながら、俺と高之助は顏を見合つて、おーや、おやと驚いた。社長が子どもなら、社員は犬だ。ボチよ

來い來いと親しさうに呼んだら氣を付けるがいゝ。うつかり行くと、いきなり尻つぽをもつて振り廻される。向ふが七十五圓で澤山ですといふから澤山だらうと思つて大きに結構ですと言つた。かうして俺と萬之助の運命がボロボロのイズウオスチクの中で決ると、プレゴロリア通りの埃つぽい社長の家について日は暮れかけた。俺と萬之助とが、遠路つゝがなく息災に到着したのは何よりの喜びだといふくらいの爺さんたちのことだから、宴會の一ツもやつて、珍客の勞をねぎらつて、くれるだらうと思つてゐたが、ついに何の沙汰もない。埃つぽい寢臺を二つ列べた埃つぽい部屋の中へ、俺と萬之助を荷物のやうに放り込んだ爺さんは、主筆の山鍋山人をつれて何處へかフラ〳〵と消え失せた。がつかりした俺と萬之助は、荷物になつた氣で寢てしまつたが、實は汽車の中に食ひものがなくて晩めしをぬいたので、翌日夜明けの十一時ごろには、天然自然と腹がへつて眼を醒ましてゐるところへ、ソロヴイヨフ爺さんがツカ〳〵踏み込んで來た。戸外から入つて來たものと見えて、耳も鼻も少し茹で過ぎたやうに眞つ赤だ。バリ〳〵凍てついた髭の兩はしには、長い氷柱がダラリとぶら下つてゐる。手に持つた細長い麥火酒の硝子瓶とコツプを、枕もとのベリラの上にドカンと置きながら「お早う。プウ！さあ〳〵もう寢るのは澤山だ。元氣よく跳ね起きて、一杯づゝ引つかけたら、すぐにも社へ行つて、神さまのお命じになることをしやう！出勤の時刻だよ！プウ！」と酒くさい息を吹つかける姿は「タラス・ブリバ」の老コサツクよろしくだ。これがつまり、おくたびれは直りましたかといふ挨拶の代りだから愈々心細い。泡喰つて飛び起きた俺と萬之助は、命令通りに一杯づつ呻つた。何しろ腹がすいてゐるので、恐ろしく沁み渡る。ひどいときには、零下三〇から四〇まで下がる此の邊の習慣として、戸外へ出るまへにかうしてお茶がわりのコツプ酒をやるのだ。でないとやり切れない。だが、ついでにめしも食ひたいと云ふと、それは社に行つてからのことにしやうと爺さんが言つた。だから、シュバにくるまつた三人は出かけた。顏も洗はなければ、口も漱がないのだ。それは平氣だが、今にも辷りさうなツル〳〵の往來を、物の十五六丁も馬のやうに歩るくのだからウンザリした。おまけに、高粱と芥子の畑を前後に控へて、雪の中に閉口頓首してゐる丸太造りの古ぼけた西伯利式ドミークが、俺の新聞社だと聞いたときは冗談だと思つたけれども、ペーチカと卓子と椅子のほかには何もない編輯室の中に、ゆうべの主筆山鍋山人を筆頭に、社會部長の伊守三左衛門といふ大男と、政治經濟實業部長の立花悟助といふ艶武者とが、物ほしさうな面つきで頻

りに屈托してゐる淺ましい光景に出會すると、腹の底から一いヤアーといふ聲がでた。この鼠の巣のやうな穴ぐらをたよつて來るまでに食ひつめた俺が恥かしくなつた。だが、しかし一面に於ては世界一だ！時計もなければ電話もない新聞社だから世界一でもよからう？すると爺さんが、俺と萬之助をそれぞれ上役に引き合せて何處かへ出て行つた。挨拶がすむと仕事の打ち合せだ。萬之助が廣告とりの秘傳を授かつてゐる間に、俺は「狩人」の術を教へて貰つた。役目は人殺しの驗分と、汽車の時間割と、ルウブル相場の調査なんだ。そのほかに面白いことあれば何でもいゝが、成るべ赤軍のためにならぬやうな出來事に目をつけてくれたまへといふことだ。呉々にも承知した。で人殺しや汽車のことは、停車場に駐屯してゐる日本軍司令部に行けばいゝ。ルウブルの方はバザル通りの角にある「貿來公司」といふ日本人の質屋へ行けば教へてくれるさうだ「質屋とは奇拔ですね。」「別に奇拔ではないサ」と社會部長の三左衛門が言つた「露貨相場の上り下りはだネイ。露貨現物賣買を業とする泥坊よりも太い猶太人と支那人がやるのだョ。行つて見ればわかるコツチヤがネイ。バザル通りの喫茶店に集る彼等の手から手へ、實に數千萬の露貨がやりとりされてゐるのだョ。彼等はたゞ一盃の火酒を傾ける間に、かゝる大金の始末をしよるヴイ。露貨はドシ〳〵落ちて行く。オムスク政府は泣きョル。黑パンと胡瓜と牛の骨をかじりながら、正直一途に稼ぐ露人はだネイ。ます〳〵食へなくなるので、この頃は只一きれのパンと一と皿の鹽のためにだネイ。大事の娘に因果を含めて、夜な夜な男を抱かせョル！その猶太人と支那人どもに、密接の關係をもつてゐるのが質屋さ。だが、質屋と云ふてもだネイ。着物を抵當に五圓十圓の金を融通しやうといふんぢやなくて、狐の皮とかピストルとか阿片の密賣をやるのだネイ。わかつたカョ？。」「そんな悪性の商人なんか、ルウブルの相場を伺ひに行くよりは、ウントコ筆誅してやつた方が、人道上大いに痛快ですから、一ツやりませうか？と申し込んだ。すると三左衛門が膽を潰して「飛んでもないことを言つちや困る！來たばかりの君にはわからぬ事情があるんだから、さう單純に行かないのだ。君は我輩の言ひつけることだけやつてくれたまへ。」と怒り出した。おかしな奴だと思ひながら二週間ばかり立つと、俺にはわからぬ事情がわかつた。俺と萬之助とは、赴任の翌日、七十五圓づつの前月給を、オムスク政府の札で、一ルウブル、三ルウブル取り混ぜ、ソロヴイヨフ爺さんに貰つたのだ。バケツに入れて提げて歩るくほどの量だから、成るほど爺さんの言ふ通り、これだけあれば、一と月でも費ひきれまいと喜んでゐる

と、十日ばかりで綺麗に消えてなくなつてオヤ〳〵と思つたが、あんまり早すぎるので爺さんにも言ひかねたから、萬之助と相談の上で、時計を質に入れることにした。日ごろの顔なじみに「寶米公司」で融通して貰ふつもりで出かけて行くと、頭のぬけ上つた亭主が、いやに親切なことを言つたもんだ。「およしなさいよ。あなたの商賣に懐中時計は八百屋の天秤棒ぢやありませんか？そんなにお困りなら、失禮かも知れないが、シヤンタンを一と晩御馳走したと思つて、二十兩だけ進呈しませう。」俺は勿論びつくりして斷つた。

財布から出した二十圓の札を押しつけながら、亭主はニヤリと笑つて「どうか御遠慮なくおとり下さい。」と言つた。さては俺を見そこなつたナ？フン！生きてゐれば生きてゐるだけ人様の邪魔になる俺だ。それを御承知で厚かましく生きのびてゐる俺だ。もはや遠慮のあるべき筈はないと言ふ奴があるなら打ん毆つてやるから前へ出ろ！かりそめにも七十五圓の「狩人」だ。から見えたつて恥はある。欲しいけれども滅多にとるものかと俺は尻ごみした。「えへゝゝゝ。おさめていたゞけませんかネ。さうですかネ。だが、私も出したものを引つ込めるのは厭だから、かうしませう。」と亭主は、變てこな手つきを變てこな眼つきにかへて言ふのだ「實は極く内々の話ですがネ。私は毎年商用で此の田舎のオノン河から満洲里を通つてハルビンへ出るのです。都合で今年も近々に出掛けることになりましたが、その筋に知れると大變困ることがあるので、私の留守の間、とき〳〵新聞に「寶米公司」(談)といふやふな形式で、相場や貿易の話を書いて貰ふことにしてゐるんです。」「つまり旅行をしてゐない態に見せかけるわけですな？」「まあ左樣です。それを一ツあなたにお願ひするとして、その印しに輕少ながら是を納めていたゞくことは出來ませんか？」と、亭主は二十圓を押しつける。して見ると賄賂だ。俺は賄賂の顔を始めて見た。

「それは部長に聞かなければ、僕の一存ではお引うけ出來ませんね。」と俺が言ふと、亭主は萬事呑み込んでゐる顔つきで「いや。伊守さんは御存じなんです。私から、直接あなたへお願ひせんでも、そのときになれば、伊守さんから話が出る筈ですよ。」と言ふのだ。新米のお前なんかに頼まなくてもいゝことなんだ。小づかひ錢がなくて困ると言ふから、親切に金をやらうとすれば餘計な心配をするので、一と通り話をするのだと言はぬばかりの口吻だ。「ぢや、部長は承知してゐるんですか？」と俺が驚いて聞くと「えゝ。夙に御承知ですとも。」と亭主は落ちついてゐる。新聞はケチでも新聞に違ひない。社會部長ともあらうものが、呆れ反つた三左衞門だ。ことによると、俺が二十圓を

から、三左衛門なんか百や二百は取り溜してゐるかも知れない。これが毎年なら、いゝ内職だと思つてゐるんだらう。だから俺に向つてあんなことを言つたんだ。成るほど、こいつは筆誅どころの騒ぎでない。あべこべの御手使ひだと思つたが、亭主の旅行が知れては困るといふ其の筋は一體どの筋だらうと聞いて見ると、それは露西亞と支那と日本の停車場司令部に、稅關の役人ださうだ。「何故ですか？」と俺は又きいた。すると亭主は「伊守さんにお聞きになればわかることですがネ」と猾るさうな笑ひを禿げぬけた額の上にのせてニヤ／＼笑ひながら「黑の買ひ出しに行くんだから、眼をつけられたら往生でさ。」と不思議なことを言つた。

「黑とは何ですか？」

「鰯のことですよ。」

「へえ！滿洲の平野にも鰯が漁れるやうになりましたか？」

「いや！その鰯ぢやない。」

「どの？です？」

「御存じないネ？」

「さつぱり！」

すると亭主はいきなり俺の手をひつたくつて、掌に指の先で「アヘン」と書いた。「へえ！阿片かね？」。「マア／＼そんなもんです。エツヘツヘ！わかりましたかネ？」と亭主は洒蛙々々してゐるから、悪いことをする奴だと肚の中で驚いてゐると、この滿洲西伯利で羽振のいゝ何とか商會も何とか洋行も、表面は何食はぬ顏をしてゐるが、蔭にかくれて盛んにこの密賣をやつてるんださうだ。こゝまで押し出して來て、やらないと云ふのは天下の嘘でサア。地みに稼いだつて此の節儲かるもんぢやありませんからネエと來た挨拶だから恐れ入る。亭主の說によると、露西亞や支那の政府が、この土地一帶の芥子畑に採れる阿片を買ひ上げる値段は、百目について七圓内外だから、裏へ廻つて一圓も餘分に出せば、百姓は喜んで秘密に賣つてくれるさうだ。これが内地や上海へ持つて行くと、百目百六七十圓になるんだから、一度旨くやつて味をしめると、やめられない商賣ださうだ。さうだらう。泥坊より儲かる。だが、そんなら十人が十人、味をしめに行きさうなものだと言ふと、亭主は「いや問題はそこですよ。大泉さん。」と言ふのだ。「どういふ風に買つてどういふ具合に賣り捌るか、その手筈も樂ではないが、もつと六ケ敷いのは、あの黑い飴みたいな阿片を、チョイとマッチの棒の先につけて火に焙りまさアネ。立ち上つてマッチの棒をピタリと中段につける。」と云ひながら、亭主は劍術つかひの眞似をするのだ「呼吸をはかつてパツと釣り上る拍子に、プウと息

を吹つかける。ブツ〳〵泡だつてゐる阿片の飴は、蜘蛛の巣よりも細い糸になつて、風を孕みながら、フワリ〳〵と宙に浮び上る。糸が細ければ細いほど、品は上等といふことになるんですがネ。この鑑定が素人には出來ないもんだから、狡い百姓に餛飩粉まじりの黑をつかまされて馬鹿を見るんでさア。だからこの黑の賣買は、誰でもといふ譯に行きませんや。」俺は感心して「その黑」の理屈をきいた。すると亭主はます〳〵得意になつて「そりやネ。精製した眞つ白いモルヒネと區別したもんでさ。」と云ふから「鰯といふのは、どうしたわけですか？」とまたきくのだ。「あつはつは！それはネ。阿片と鰯と同じ目方なんで鰯の罐詰のレッテルを貼つちや本物と一緒に送つたりとつたりしたもんだから、自然と符牒になつちやつたんでさ。鰯に見せかけて旨く行くかも知れないが、新聞の記事でその筋の眼を胡麻化すことが出來るかしらと俺が言つた。すると亭主はなか〳〵自信がある。いつも目をつけられてゐるので、旅行が知れると歸りの取調べが面倒だが、この町には新聞が一つしきやないからチヤンと讀んでゐると見えて、この計略で成功するんださうだ。だから、最近の夜陰に乘じて田舍の芥子畑へのりこむんだが、その雄嚴壯大な氣分は、實に何とも言へないネ。あなたがたのやうに、原稿用紙のハコセコの中へ、一字一字を刻明に篏めて行く新聞屋さんにや迚もわかりやせんわい。第一、男性的でさアネヘツヘ！」と額を叩いて言ふた。阿片の密賣が雄嚴壯大と來たもんだ。ソロヴィヨン爺さんの信仰によると、俺たちの仕事は何でも神さまの思召しに適つてゐると云ふことだ。この二十圓だつて神さまがおくだしになる賄賂かも知れない。有り難く頂戴しやうかと思つたが、俺のツムジは最後の一言にグツと曲つた。盜人たけだけしい。泥坊市場の親爺より人を食つた獸とは此奴のことだ。世の中の悶着は機械のせいだとウイリアム・モリス先生は言ふたやうだが、世の中の悶着は此の禿げ頭のせいだ。一切合財ます〳〵物騷になるのだと俺は言ふ。そこで三左衞門は三左衞門。俺は俺。迚もが贊成は出來ないことにした。二十圓はまた貰ひます。部長の口から話が出るまで預つといて下さい。さやうならと言ふた。亭主は呆れてゐた。態を見ろと俺は質屋をとび出した。プレゴロリヤの社長の家の、埃りつぽい部屋の中で萬之助が待つてゐるから、俺は雄嚴壯大な顏つきで舞ひ戻つた。すると萬之助が「オイ。いくら借りて來たか？」と言ふのだ。俺はいくらも借りて來ないわけを說明した。「どうだい。俺のムカツ腹にはお前も共鳴するだらう？」ところが以外にも萬之助の考へは違つてゐるのだから、人の心はわからんもんだ「フン何が共鳴だい！わざ〳〵呉れるといふものを取らずに、

餘計な見榮を張る！どこの世界に、そんな馬鹿な奴がゐるんだ！」といきなり食つてかゝるから、俺も負けずに怒鳴りかへした。「此處にゐるんだ！試みに考へて見ろ。あんな奴に見くびられるのは何よりの屈辱だぞ！貧乏はしても、小づかひ錢はなくてもだ、それほど下等な人間になつちやゐないつもりだ！」。萬之助は面くらつて、大きな目をグリ／＼動かしながら不思議さうに「ホウ！」と言つた「君はそんな上等な人間だつたのかい？いや。さういふ人を使ひに頼んだのは僕の間違ひだつた。失敬したネ。もう頼まないよ。僕が行つて取つてくらア。」と不愉快に興奮して、シュウバを引つかけながら「寶來公司」へ押しかけて行かうとするのだ。見つともないからよせと言つたが遂に聞かなかつた。そのくらいのことは構はないと言ふのだから、新聞記者の役徳ぐらいに心得てゐるのだらう。俺は寢牀にもぐり込んで考へた。東京以來。ハルビン以來。萬之助の活躍には毎度恐縮してゐるのだ。大體、萬之助の世話で來ることは來たけれども一向有り難くない。早い話が賄賂の掠奪に行くやうな男なんだ。お丁には何を仕出かさぬとも限らない。道づれになつてゐると、恥を掻き通し、閉口し通しだ。出來ることなら、この邊でポンと放り出したいもんだと一人で苦々しく思つてゐる處へ、寒い寒いと身顫ひしながら、萬之助が戻つて來た。その顔が先刻と違つて、いやに悄然としてゐるから、金は首尾よく取れたかと聞いて見ると、「ウン。取るには取つたが、またすぐ取られちまつたよ！君。勘辨してくれたまへ。」といふ拍子ぬけのした返事だ。奇妙に思つて俺は起き上つた。「それは又どうしたわけだ？」。寢臺に腰かけた萬之助は、思ひもよらぬ大事件の報告をするやうな緊張した面相で「實はかうなんだよ」と言つた。珍らしく沁々とした聲だつた。「あの質屋の亭主に會つてヨ。君がいらないと言つた二十圓の金は、實は僕が欲しいだから、すまないけれど戴きたいと云つたんだ。」「よく云つたネ。」「何。相手が相手だもの。するとアノ亭主め。矢つ張り御入用でげすかい。ヘツへ！とゲラ／＼笑つて馬鹿にしやがるんだ。成るほど／＼。君は僕をどう思つてゐるか知らんが、僕にだつて良心はあらアネ。これぢや君が怒るのは尤もだと僕も流石に赤面したが、金をふんだくるんだと思へば、これしきのことは、目をつぶつて我慢すらア。僕が二十圓札をひつたくつて、店をとび出さうとすると、あまり風采のよくない十五六歳ぐらいの、露西亞人の娘が、籐籠をさげて、ヒョロ／＼と入つて來たんだ。何の氣なしに立ち止つて見てゐると、娘は恥かしさうに顔を赤らめながら、亭主の目のまへで、籐籠の中から御茶道具を取り出して帳場にズラリと列べるんだ。いゝかネ。それが君

飾のついた急須。コーヒー茶碗。砂糖壺。洋匕。それに彫刻を施した盆がついてゐる！驚いたことには、いづれも純粋の銀で内側には十四金が部厚に張つてあらうと云ふ素張らしいものだ！潰しにしても百ではきくまい。が、これで五十圓貸して下さいと娘が言つた。なか／＼旨い日本語だ。ところが、亭主は品を見積つて、驚く勿れ三十圓につけたよ。娘はベソを搔いて、これでも買ひ値は三百圓しましたが、今と云ふ今、五十圓なければ大變困ることがありますから手放すのです。どうかモウ二十圓つけて下さいと言ふのだ。亭主は頑として應じない。到頭三十で決着した。娘は澁々金を受取つた。だが、露西亜人にお茶の道具と云へば、なくてかなはぬもんだらう？」「さうさ。日本人の鍋や釜と同じもんだ。」と俺は答へた。「そいつを賣らうといふのだから、よく／＼のことだ。餘計なお世話だとは思つたが、事情をきいて見れば、果せるかな。フラムナヤの裏通りに借りてゐる部屋代（フラアタ）が溜つてゐるので、家主に追ひ出されます。追ひ出されると行き場がありませんと、娘はボロ／＼涙を零しながら、羞かんで言つた。冗談ぢやない。この寒天に立ち退きを食つちや、凍死するばかりだ。お見受け申すところ、貴孃も以前は派手に暮して居られたに違ひない。革命か何かで、その後、面白く行かなくなつたんでせうね？お氣の毒の至りです。と、僕は同情したよ。」「フーン。君らしくないネ。」と俺は冷かし半分に言つた。すると萬之助は日頃になくムキになつて「僕らしくないつて？よせ！君はかね／＼から僕を餘つぽどの亂暴者だと思つてゐるやうだから、この機會に眞實の平口萬之助を紹介して君の誤解をとかうぢやないか。忘れもしない釜山のカフェーで、朝鮮のチゲクンに洋食をふるまつてやつた僕の態度が冷淡だと言つて君は僕を攻撃したネ。だが、あんな境遇の朝鮮人や露西亜人を可哀相だと思つた日には切りがないから、愛の涙は胸にあふれてゐるけれども、同情は控へてゐたんだ。君は無暗に人を輕蔑する癖があつていけないよ。」と言つた。「いやに改まるな。」さう開き直つて云はなくつたつてよからう。人を輕蔑する僕は同時に僕自身をも輕蔑してゐるんだから公平でいゝぢやないか？」俺は笑つて言ふたが、氣をつけろよ！愛の涙を胸に溜めながら、同情するのを見合せてゐるのはお前ばかりではない、お互さま人間といふ動物が皆さうなんだ！人生は交換によつて成立するといふ近世經濟學の述ぶるところによれば、交換價値のないものとあるものとの交換は絶對に成り立たぬ筈であるに拘はらず頗る大いに成り立つてゐる地上に於てだ、最も價値あるべき人間の正體を見ろ！その人間の最も珍重する宗教からして、お手製の色女ではない。

家つき女房だ。しかも今日では既に地理學的論材に墮落してゐる。人間の信仰はどうだ！國家傳來先祖の煮古しだ。カウツキーがレニンを捉へて「バクーニンの門徒」と云ふのも、レニンがカウツキーを指して「マルクスの賣春婦」といふのも、世界中がびつくりしてナポレオン以來の天才だと思つたのが、實際は逆つてゐるといふ證明には都合のいゝ大喧嘩だ。天才と幽靈は箱根溫泉の彼方も此方もゐやしない。ロンブロゾウの夢だらう？人間の哲學はどうだ！哲學なんて利いた風なことは言ふな！お互ひに持つて廻る警句や洒落の端くれまでが昔の先生の受け賣りではないか？ひつくるめて言ふと、人間の全存在は獨創でなくて驚くべき模倣にすぎないのだ！俺は平凡が大嫌ひなんだ。一切萬物は一列一體に輕蔑してやれ！萬之助なんか鼻の先であしらつてやれといふ勢ひだ。これが俺の人間輕蔑論梗概だ。（少し言ひ過ぎて冗くなりましたネ。讀者諸君！）だから「僕の輕蔑病は、今はじまつたことではないさ。まあいゝから、先を話したまへ。それからどうした？」と俺が云ふと、萬之助はプリ〳〵しながら續けた。「だから、同情の安賣りなんか出來ない主義の僕もだネ。娘の足元につけ込んで、ボロイ儲けをしやうといふ亭主の悪辣さ加減は見てゐられないもんだから、足りない金を持つて歸つても仕樣がないでせう。失禮ながら、これを差し上げますから、お持ちなさいと、僕は受けとつたばかりの金を出して、亭主へ面當に娘へ惠んでやつた。娘がびつくりして、知らない方にお金をいたゞくと、父に叱られますと云つて尻ごみするのを、心配することはありませんと構はず押しつけてやつた。娘はガタ〳〵震えながら喜んだよ。亭主は驚いてポカンと呆れてゐた。僕は胸がスツとして、十五圓なんか惜しくはない氣がした。」俺も一寸意外だつた。「十五圓？ぢや、みんなやつたんぢやないのか？」「一文なしでは此方も困るから、娘にお釣りをいたゞかせて下さいと言ふたさ。だから君に詫るよ。しかし、あの場合は僕として止むを得なかつたんだからネ。」と恐縮しながら五圓札を一枚蒲團の上に置くところは、やはり萬之助とも思はれぬ。やつたものはやつたものだ。俺は感心した。「さうだ。止むを得ないのが本當だ！君は偉い！ウームこいつア、君が今日までやつたことの中で一等偉いことだ！。」すると萬之助は、嬉しさうに眼をパチ〳〵しばたきながら、溜め息をついて笑つた「煽てちやいけない。話がしにくいよ。僕は兎に角、その娘の日本語に感心して、何處で覺ましたかと聞いた。その返事に、東京ですわ。と來たもんだ」「へエ。日本の東京かネ？」「大抵さうだらうよ。妾のお父さんは豫備少佐です。お父さんが東京の露西亞領

事館に勤めてゐるころ、妾は生れたのです。家の隣りに住んでゐたヌツヌツスンブン記者に日本語を教へて貰ひましたと云ふ話だから、君や僕の田舍出と違つて江戸つ子だよ。すつかり面喰つたネ。」「フーム。しかし、豫備少佐の御令嬢が、茶器の質入れとは可怪いぢやないか？」「ウン。僕もさう思つたが、立ち入つて聞くのもよくないから、詳しいことは知らないけれど、親爺の少佐がロイマチスか何かで足腰が利かないんださうだから、想像するに、革命が起ると領事は宙に迷ひ、先生は職に離れたわけだ。まご／＼してゐると食ふに困る。と云つて、日本でおかしな眞似もしたくない。そこは流石に軍人だ。妻子を携へて此の西伯利へ引き揚げはしたけれども、火事場騷だ。人生、到るところ靑山がなくて煙硝くさい枯野ばかり。生活はだん／＼思はしくなくなり、町から町へと流れ歩るくうちに、到頭、尾羽打ち枯して此のチタ市の安下宿に沈没したに違ひないよ。」なるほど。あとでわかつたが、この說は可なりたしかであつた。皇帝や大臣の末路があの通りなんだから、外交官の下ツ働なんか、大道の乞食におちぶれたつて甲の上だらう。だから俺のやうな素寒貧は西伯利に限るんだよと言ふと、萬之助が感違ひしてよろこんだ「さうだともなア。こんな娘がゐるんだから賴もしいや！娘の方でも、僕のやうな男がゐると思へば、僕の曠野も萬更すてたもんぢやないと思ふだらうよ。妾のお父さんはどんなにか貴郎の御志を感謝するでせう？機苦しいところではありますが、どうか一度來て下さい。お父さんは屹度よろこびますわ。ほんとに有り難うございます。身にしみて妾一生忘すれませんわ。お蔭さまで助かりますわ。サヨウナラ！いや。どういたしまして、サヨウナラ！といふ風に、質屋の前で右と左に別れたんだ。身にしみて一生忘れませんと娘が言ふから僕は目にしみて一生忘れませんと言ふてやつた。そなたは大層美しい。そこで私の瞳は日に照りつけられた鏡のやうに、燃えないわけには行きません！と娘の手をシカと握つてやつた。娘はニコ／＼笑つてゐたよ。」「アツハツハ。何だいその文句は？」「これは昔讀んだ小說の中に出て來る色男の獨白なんだが日常の挨拶としても下等なもんぢやないと思つて今日まで覺へてゐたのさ。」と澄してゐるから「そんなに別嬪かネ？」ときいて見ると「さうよ！背は低いけれども、あの眼玉が何しろ水色硝子のやうにクリ／＼と表的によかつたし、名まへがカーチヤンとは可愛いぢやないか。だから、僕、一度遊びに行かうよ！」と獨りで悦に入つた。カーチヤンはカーチヤの間違ひだらう。エカテリイナとでも云ふのだらう。餘つぽど氣に入つたと見えて、泥醉の中で鼾をかくまで、萬之助は娘の話をするの

だ。この調子では、明日にも押しかけて行くだらうと思つた。ところが翌日になると、ケロリと忘れたやうに、娘のことなんか噯にも出さないから不思議だつた。朝は社長の爺さんと三人で火酒をひつかけて跳び出す。日がくれるまで別々に働く。家へ戻ると草臥れて口を利くのも大儀だから、すぐ寝て了ふ。萬之助も同じことで碌々話をする暇もないが、俺はルウブル相場を調べるために、毎朝「寶來公司」へ立ち寄る。すると成るほど萬之助の云ふやうな素張らしい茶器が店の卓子に置いてある。禿頭の亭主は、それにお茶を入れて飲みすましてゐるのだ。亭主は俺を見ると二十圓を思ひ出すのか妙な顔をするが、俺はその茶器を見るたびにカーチヤのことを思ひ出す。そしてまたすぐ忘れる。といふ風に五日六日たつた夜ふけの十二時ごろ、ソロヴイヨフ爺さんが戸外から歸つて來ると、いきなり俺たちの部屋へ跳び込んだ。そして今、舊市街通りの「曙」に何かどえらい騒ぎが起つたさうだから、見に行つてくれとフウ／＼言ひながら、俺を叩き起した。「曙」といふのは、此の市屈指の、魔窟兼料理屋で女將は日本人の博奕打ちだつた。こんな時には、馬のやうな勢ひでピンと跳ねおきるのが俺の商賣だ。眠いけれども仕方がない。萬之助がスヤ／＼と寝込んでゐる枕もとのライ麥火酒をコップに一杯、引つかけるが早いか、「曙」へ向つてポンプの筒口からとび出す水のやうに眞つ直ぐ飛んだ。爺さんの言ふ通り。どえらい騒ぎに嘘はなかつた。舊市街通りの雪の上には、露西亞の巡査や日本の憲兵や支那の兵隊さんで人だかりだ。日本づくりに赤いペンキを塗りたくつた「曙」の表口を覗いて見ると、屋根は傾き、天井は突きぬけ、軒の廂は落ちてゐる。血だらけの顔は、どこが鼻だか口だかわからないほど滅茶々々に砕けた女が二人、寝まきのなりで土間の隅にひつくり返つてゐる。日本の陸軍少尉が軍刀に手をかけたまゝ、女のわきにころがつてゐる。少し離れて、額のまん中に穴のあいた赤軍の士官が打つ倒れてゐる。恐ろしい光景だから驚いた。實は此の土地へ乗り出して來る途中。駿河と御殿場の間で轢死人があつて三十分あまり汽車が止まつたのだ。窓から外を見ると、車掌や機關士や五六人の客が、線路の上で死體を探してゐるから俺も下りた。何氣なく俺の車輛の下を見ると、百姓らしい女の、蒼ざめた首が一ツ、枕木にのつかつて、チヤンと俺を見てゐた。この首が一ツ足りないので探してゐたのだ。俺はびつくりして「首は此處にいます！」と怒鳴りながら逃げた。その匂ひが鼻について閉口したことがある。しかし、これはもつとひどい。人間もかう砕けて了へば、牛肉屋の梁にブラ下つてゐるアノ赤黒いやつとチツとも變らないもんだと思ひながら、怖々

様子を聞いた。何でも、この過激派の士官が、今晩「曙」へ遊びに來るからと約束した女が、この中に一人ゐるのだ。露西亞士官は約束通りにやつて來た。ところが、女は日本の將校と巫山戯た眞似をしてゐる！　これは怪しからん心外だ！　過激派の兵士は大抵みなさうだが、シユウバのポツケツトから、夏蜜柑の砂糖漬みたいな手投彈を掴み出して、妬け投げに叩きつけたのだ。その破片が飛んで來やうとは思はぬ御當人の眉間へ彈ね返つて來たものだから、一とたまりもありやしない。轟然と往生したのだ。これが顫え上つてゐる女將さんの涙ばなしだが今一人の女は、ながねん稼ぎ溜めた金をもつて、明日は内地へ歸へることになつてゐたのが、可哀相に、捲添へくつて佛になつて了つて眞個に南無阿彌陀佛と云つた。氣の毒な話ではあるが、しかし、誰も手を下して片づけやうとする者はなかつた。

「手投げ彈なんて、そんなに恐ろしいもんでせうか？」と俺も震へながら日本の憲兵にきいた。「あれを御覽なさい。」と憲兵は天井の梁に貫通してゐる鉛の斷片を指した「この位の被害ならいゝ方です。海の中へでも投げ込むと、五丁四方は泡立ちますよ。こいつの効力と來ちや、全く的確ですからね。」と云ひながら、自分の外套のかくしから、龜甲紋のついたエナメル塗りの手投げ彈をとり出して見せた。先生いつの間にか、「赤」の士官のポツケツトにあつたやつを徴發してゐるのだ。ホウ！と俺はたまげて恐れ入つた。この事件は「赤」の仕事だから、ソロヴイヨフ爺さんがメたと云つて喜ぶだらう？　明日の三面には、この位の被害で幸福だ。手投げ彈の新顏と來たら、悪魔もはだしで逃げるほど怖いもんだ。嘘だと思ふなら、海の中へ投げ込んで見るがいゝ。五丁四方は泡だらけだと書くつもりで憲兵に禮を言つた。そして歸りの駄賃に往來へころがつてゐる壁板の碎片を一ツひろつた。鉛の塊がペシヤンコに潰れて、二寸ほど穿り込んでゐるから土産になると思ひながら雪の上を歩るき出した。その汚ない木の片かけをシユウバのポツケツトへ入れやうとすると、中から新らしい麻のハンカチフが現はれた。汚れるといけないから、別のポツケツトへ入れやうとすると、又新らしい麻のハンカチフが現はれた。おや／＼とお尻のポツケツトを見た。そこにも新らしい麻のハンカチフが入つてゐる！　いや、ポツケツトには皆麻のハンカチフが入つてゐるのだ。考へて見ると俺には一枚のハンカチフもない筈だ。昔からそんなものは買つたことがない。これは妙だ。

小さい時分にハンカチフを買つて貰ふと直ぐ失くするので、俺には持たせないことにしてあつたから、水ツ洟は袖で拭く。汚れた手はお尻になすりつける。これが癖になつて、今だに

ンカチフは持たないですむ流儀だ。外套のポッケットへ手を突つ込んで振ると好きなものが出て來るのは、三清殿の秘藏仙人で、俺ではない。だから妙だと思つて、よく〳〵見ると何のことか！慌てふためいて家をとび出す拍子に、縁臺の欄木へ釣してあつた萬之助の長外套を、間違へて引つかけて來たといふことがわかつた。東京を立つときに、苦心に苦心をして、神田柳原の古着屋で買つた北海道行きは二ツお揃ひの安物なんだ。表は茶色のスカッチで惡くはない。けれども肝腎の裏が、獺や狐や狼でない老ひぼれ果てた野良犬の皮といふのだから、一寸つまんで引つぱるとボロ〳〵毛がぬける低の代物だ。だが、實を云ふと、萬之助のぢゝむさいことには流石の俺も一目置いてゐるのだ。從つてハンカチフなんぞ持つてあるくやうな心掛けのいゝ男でないのだから、この通り、あまり安くないパリ〳〵の麻が、あとから〳〵出て來るのは近頃不思議な話だ。夜があけたら早速聞いて見るつもりで、家へ歸ると、俺は社長に事件の報告をした。爺さんは目の玉をむいてよろこんだ。これは氣に入つたナと思つて「暁」事件の原稿をつくつて翌日三左衛門に見せると「あッ！ゆふべやられたのはアノ花子か？あの女は君、吾輩も一度、その買つたことがあるよ！ヘェ。可哀相なことをしたなア。」と、嘆愁こも〴〵に、編輯室の天井を仰いで驚くのだから。この僞武者もやつぱり脊市街通りへ脂下りに行くのかしら、まづ昨夜の災難は陸軍少尉でお仕合せでしたネと弔意を表してやると、三左衛門も一と頻り今昔の冷汗を流しながら、熱心に俺の原稿をよんでゐたが、お了ひぎわでから言ふのだ

「何？何？

『かくの如き悲慘の出來事は近世武器の發達に伴ふところの、殺戮と破壞との可能性に於ける餘力にして、凡そ科學なるものが、人類幸福の建築技師たるよりは、寧ろ卓抜なる破壞の助手たることを明示する憐むべき一例なり。大泉黑石謹識。』……

コリヤいかん！……コリヤいかん！三面記に事署名をして、こんな文句を列べる奴があるかい！」。「でも、私にとつては、恐らく生涯を通じての深刻奇抜の見聞ですから、特に、文責の所在を明らかにして、椽大の筆を揮つたつもりです。」と俺は頗る不平だ。「駄目だネイ！よろしく訂正して、かういふ風に書きたまへ……哀れなるかな去日まで、曠野の花と謳はれし、大和なでしこ一二輪、吹き來る雪の小夜風に、儚なくパツと散りにしを、知るや知らずや故鄕の、さびしき家の明暮に、待つ親心パクダンに、ドンと一發うらめしや。オ、、花ちやん！オ、、雛ちやん！……これでヨイ。これなら誰でも感激するヨ。吾輩も萬更知らん女ぢやないから、一寸行つて來るから、今言ふた

やうに賴むヨ。」と三左衛門は感慨無量の顏つきをして「曙（スウイエス）」へ出かけて行つた。成るほど是は阿呆陀羅經のやうで面白い。このごろ風の吹き廻しで大阪自動車の東京支店長になり澄してゐる法學士の圭吉一派と一緒に、京都のお寺に陣を張りながらこれも修養の一ッだと念に念を入れて貧乏した時分だ。圭吉などの文章と來てはトント見られたもんぢやないが、俺のものだけは恥しくないといふ定評があつた。この定評のために飛んだ恥をかかうといふのだ。俺は短篇小説を作つて賣り捌く役目を引き受けた。折角のことなら、その道の先生に、一度見て貰ひ、然るべき裏書を頂戴して、五厘のものは八厘に賣つたらどうだい？それには學校の教師の、橋本青雨も居れば、厨川白村もゐる、伊藤さんも吉村さんもゐる。大將、あれでもテニスなんかやるところを見れば、さだめし原稿の世話ぐらい燒いてくれるだらう。さつそく持つて行つて見せろと妙な説が出た。女學生ぢやあるまいし。あんな凡骨の西洋文藝輸入商人どもに、俺の風骨がわかるものかと云ふのが俺の証だつた。今でも一向尊敬する氣にならないが、何しろナポレオンにでもなりさうな兆光があつたのだから憤然としてやめた。そして佛教新聞の「中外日報」へ持つて行つた。石丸梅外と號する男が文藝欄をやつてゐた。しかし見ごと斷られた。今度は大阪朝日の京都支社へ出かけた。主任の國太郎が俺の小説を見て、これは小説になつてゐないよ。小説といふものは君、かうなくちや駄目だネ。と丁寧に教へてくれたが、その國太郎よりもモツトすら〳〵とこんな珍句が、しかも俺の文章の文字の數だけキチンと出て來る三左衛門の放れ業には全く舌を卷いたもんだ。俺は敬服して原稿を印刷に廻した。ところが、革命以來。仰山な國際的の政治問題や、嘘か眞個かわからぬ突飛な軍事上の出來事が、花火線香のやうに光つたり消えたりする今日だ。足を踏んだと言つてピストルをぶつぱなす。往來の邪魔になると言つて自動車で轢いて走る。小づかひ錢が切れたと言つて他人の首を絞める此のチタ町の人々にとつて、二人の賣笑婦と二人の士官の姦夫は、奇抜なドラマでなかつたと見えて、三左衛門の阿呆陀羅經に喝采をする特志家は出て來なかつた。毎度のことであるが、俺の話は時々、手まへのことを忘れて先へ先へと走りたがる癖がある。順序から云へば、まだ阿呆陀羅經の出る幕ではないのだ。先刻（さつき）の原稿をまとめた俺は、纏ふてゐる萬之助の外套（シユバ）をぬいで、元の場所にかけて置いた。それから夜明けの十時までグツスリと寢た。萬之助は何も知らずに夢を見てゐる。日本の暦から言ふても露西亞の暦から言ふても、是がプログラムの順序だから、阿呆陀羅經や京都の話は忘れて貰ひたい。當面の問題は廉の八

ンカチフにある。目が醒めたら「曙」事件で萬之助を驚かして置いて、ハンカチフはどうしたんだと聞くつもりだつた。ところが目を醒すと萬之助はゐない。爺さんもゐない。さては夜なかの椿事にくたびれてゐるから、ゆつくり寝かして置けとでも爺さんが言ふたのだらう？そして二人はお先に出勤したのだらう？俺は馬のやうに氷を踏んで高粱畑の中へ向つた。部長に會つて用を足すと會計室を覗いた。ペーチカの前にゐた萬之助が「やア。ゆうべは御苦勞樣。」と俺を見て言つた。「ウン。聞いたかい？お蔭で寝すごしちやつたが、君はモウ一と廻りやつたんだらうた？」商店係りの萬之助も「狩人」の俺も、仕事はきまつてゐるのだ。社長の家を振り出しに社長の家へ戻るまでの軌道がザツト楕圓の形になつてゐるから、ケプレルの法則に從つて日に一回だけグルリと廻る太陽みたいに簡單だ。「ウン。モウひまだよ。ボツ／＼引揚げやうかと思つてゐた處さ。」と萬之助「では、君に伺ひたい事があるから此方へ來たまへ。」と俺は萬之助を引つ張つて印刷部屋の廊下に出た。そしてハンカチフの話を持ち出すと、「ああ。これかい？これはバザルの小店で買つたのさ。」と萬之助はニヤ／＼笑ひながら、シユウバのポツケツトから例の麻を一ツ摘み出して鼻を拭くのだ。「泥坊しやしまいし。當り前だ。い丶かネ？未だ常て、一本の手拭すら、敢て買はうとしない君だよ。顔でも足でもお尻でも、僕の手拭ひでなければ他人のもので拭かうといふ君の外套にだよ、一時に五枚十枚の新らしいハンカチフが捻ぢこまれてゐる！僕はそれが氣になるんだよ。ちよいと一ツ貸して見たまへ。」と俺は萬之助の手から引つたくつた「どうだい。こんなに手の切れさうな麻の上等で、しかも」と廣げて見る途端に、強い白薔薇の匂ひがプンと鼻の穴へとび込んだ。「オヤ！香水をつけてやがる！」俺は萬之助をチラと見た。顔がポツと赤くなつてゐる。「一寸い丶だらう？香水のなかで是が一等上品だネ。露西亞の紳士や淑女はこれでないといけないさうだ。かういふ殺風景なところに住んでゐると、人間の心の狀態は自然にこんなものを要求するやうになると見えるネ。」と、乙なことを言ひながら、極りの悪いのを頻りに隱さうとするのだから、呆れた萬之助になつたもんだ。俺は二の句が出なかつた。この隙を狙つて帽子をひつかぶつた萬之助は「では、お先に失禮！」と逃げるやうな恰好でソワソワしく出て行つた。おかしな奴だと思ひながら、「狩人」の俺は停車場司令部へキジ取りに出かけた。そこから「貨來公司」へ露貨相場の調査に行つた。阿片旅行の前には、いつも忙しいのですと言ふ番頭の亭主は碌々店にゐないのだ。お神さんが出て來て、今日もバザル通りの「コーロコル」へ參りましたと言ふ

から、バザル通りへ向つた。「コーロコル」は苔むした昔の寺院を其儘のレストランだ。大きな護謨の鉢を、食堂のまん中に据えてゐる露西亞人の料理店と云へば直ぐわかる。いつもこの禿頭の亭主や猶太人や支那人の思惑師が集つて悪い相談をするランデヴだ。俺は亭主に會つた。亭主は二三日のうちに愈々出發出來さうだ。相場のことは留守の間、この人に此處へ來ておきゝなさいと云ひながら、一人の裕福さうな支那人を紹介してくれた。「コーロコル」を出た俺は、軒つゞきのバザルから、社長の家へ足をはこんだ。ところがバザルの中の小さい雜貨店の前へ來ると、十五か六になる露西亞人の娘が、店の扉を押しあけていきなパツと現はれた。どつちもびつくりして立ち停つた。見ると彼女の風采が賣り子だ。ひけて歸るのだらう。娘の顏は、取りつく島もないやうに淋しいが、底冷えのするやうな澄み切つた水色の眼は、實に惚れ〴〵する魅力を湛えてゐるのだ。娘は笑ひながら行つて了つた。すると「寶來公司」の卓子の上に置いてある茶器のことが、ふと俺の頭に浮んだ。萬之助は、カーチヤがバザルの賣り子なんて云はなかつたけれども、賣り子でないとも限らない。今の女がカーチヤでないかナ？カーチヤだつたところで別に用はないし、一度訪ねて行かうと云ひながら、出かけるほどのこともないから行きもしないが、今度出會つたら一ツ貴女はカーチヤさんではありませんかと聞いて見やうかしら？と思つて、スタ〳〵歩いて行く娘の方を振り返つた。鼻から洩れる息のために、白々と凍りついてゐる眼がねの曇りをハンカチフでゴリ〳〵拭き落して、娘の後姿を見やうとしたが、どこかへ行つて了つてわからなかつた。その俺の目にたちまち映つたのは、萬之助にもらつた香水つきのハンカチフの端に縫つてある Be, Geo, ta といふ露西亞文字なんだ。ハンカチ屋の屋號だらうが、目さきにブラ下つてゐる雜貨店の看板にも、同じ文字があるのだ。俺はハツと思つた。

刹那の想像は矢車のやうに回轉する。何しろ此の邊の商人はどんなにチツポケでも、店の賣品には丁寧に屋號をつけてゐるから直ぐわかる。萬之助は此の店でハンカチフを買つたのだ。態々こゝまで足を運んで餘計な物を買ふ！おかしいナと思ふと先刻の娘の顏がポツと現はれた。俺は氣まぐれにさうでないかしらと思つたが、ことによると、あれはカーチヤかも知れない。萬之助はカーチヤの顏を見るためにセツセとやつて來るのではないか？あとで萬之助を拷問にかけると果してさうなんだ。俺の狙ひに狂ひはないと思つて、何だつてハンカチフばか買ふのかと言ふと、此店で一等安いのが、これと白粉で戰爭以來不思議に賣れないんだ、それでも僕には高い犧牲だが、女と會ふ

ためには君。仕方がないよ。察してくれたまへと吐したもんだ。萬之助の様子がどうも腑に落ちないと思つたら、この始末だ。俺に隠れてつまらない眞似をしてゐるのだ。俺の想像があたつてゐるなら、頭から水をぶつかけてやれ。油斷のならぬ奴だと思つて家へ歸ると萬之助をつかまへた。「おい萬公！今日も相變らず雜貨店のカーチヤと會ひに行つたか？」と出しぬけにお前を一本くらはせてやれば、先生たちまち狼狽するだらう？「フン！驚くこたアない！何でもかんでもちやんと御存じだ。見かけはポカンとしてゐるが俺の頭は水雷艇より素ばしつこいのだ。お前はカーチヤに惚れたナ？惚れたら惚れたでよろしい！だが、生死を共にする俺に内證で惚れるとは何事だ！西伯利くんだりまでのしかけて來る度胸があるなら、泥坊だつて色ごとだつて大びらにやれ！」といふ調子で散々背をしぼつてやらうとすると、萬之助は落ちつき拂つて「エヘ、、、。」と笑ひ出した。「思ひ出るも恥かしや。わしが情けの言の葉に、事の契りをカーチヤと、かわすも近き雜貨店。人目の關は越えかねて、あつバレましたかネ？」とてれかくしに出放題のことを云つて胡魔化さうとするから手のつけやうがない。俺の方がよつぽど恥かしいや。悶迂々々しいのも程がある。バレましたかネもないもんだ！一體全體どうしたのか？」と怒鳴りつけると漸くのことで俺の權幕に驚ろいた萬之助が「いや！サウがみ〳〵唸つてかゝられては閉口だが、實はナ、今日言はうか明日言はうかと思つてゐたんだ。そして形勢は今日一切を白状して君の贊成を求めねばならぬ始末になつて了つたんだ。」と言つた。「フン。その形勢とは何だ？俺は冗談を言つてゐるんぢやないんだから、そのつもりで返事をしてくれ。いゝかね？そこでアノ娘がカーチヤなのか？」と俺が糺問するのだ。他人の戀愛だつておろそかにはならぬ。すると萬之助は神妙にさうだと答へて、厚かましい懺悔にとりかゝるのだ。「すつかり話をするから、どうか愼重に聽いてくれたまへ。「資來公司」で一と目見たカーチヤを僕は忘れることが出來なかつた。翌日は君をつれてカーチヤの家へ遊びに行かうと思ひながら、偶然にも社用でバザル八畑つた。君に云ふのを忘れてゐたが、あの雜貨店「駱駝」にカーチヤは勤めてゐたのだ。僕は思ひ出して寄つた。彼女は僕の恩んだ十五圓に對する彼女の父の感謝を傳へてくれて、是非家へいらつしやい。お父さんが會ひたがつてゐますからと言つたよ。僕はこの時からアノ恐ろしい水色の眼玉の捕虜になつて了つた。次の日も又その次の日も「駱駝」へ行つた。何故かと云ふと、陸軍少佐の寓居を訪れるのは多少恩着がましい氣がしたからだ。しかし、彼女が僕を嫌つてゐない證據には、忙がしい

にもかゝはらず、喜んで相手になつてくれる。別れるときには戸外まで送つてくれて、しかも彼女は驚くべき熱誠をこめて僕の手を握りしめながら、あの水色の眼で凝乎と僕の顔を見つめるのだ！ああ君。ハンカチフの五枚や十枚は溜らうぢやないか！話をすれば話をするほど可愛くなる娘だ。僕は、いつの間にやら、カーチヤを手に入れやうとさへ思ふやうになつたよ。君のまへでこんなことを言つちや濟まないけれども、かうなると勢ひ、君なんかにノコ〳〵出て來られては邪魔になると思つたよ。さう怒るな！」。「まだ怒つてやしないよ。しかし毎日々々寒いのを我慢して、バザルまでお出ましになるとは驚いた根氣だ。日本人が西伯利へ來て風邪を引いたとあつては、世界の物笑ひだから、よろしく冷水浴をやるんだといふから感心してゐると三日坊主だ。どうも一つことをくり返すのは單調でいけないと云つてやめたかと思ふと冷水浴はおろか、近頃は着物をぬぐと脇の下から風が入るなんて、着たなりで靴まではいて寝る君に、そのお百度とは意外々々。」すると、萬之助はいきなり下腹にウンと力を入れた。見る〳〵顔が充血して眞つ赤になつた。「サア。論より證據だ。この顔に何が現はれてゐるか見てくれ。」と云ひながら俺の鼻先へぬいつと突き出した。「すべてこれ、カーチヤと僕の魂を結びつける熱烈熱情だ！ウヰムシヤースト放電球の火花のやうに、黒鐵の扉も何のそのと、まつしぐらにつきぬけて走る一脈の力だ。尊い愛の焔だ。これあるがために、人は此の雪の下にも喜んで住めるといふことを君は知らないのか、冗談ぢやない。」「冗談ぢやないとは俺の方で言ふことだよ。驚いたナ！だが毎日々々カーチヤと何の話をするんだい？」。すると萬之助は大きな感動に打たれたやうに、眼に涙を一ぱいためた。ハテナと思ふと、この涙の眼玉が怪しげに光り始めた。かと思ふと、あふれ來る激情に言葉もしどろもどろと叫び出すのだ。光景はいよ〳〵以て珍とするに足るだらう。「僕は或る時は、彼女に向つて高遠な理想と精神生活の崇高をとなへてきかせたよ。」「ヘエ！そんなものが君にあつたかい？」。「默つて聽きたまへ。僕は或る時彼女に向つて、隣人に對するキリストの愛や、戀愛の自由や神聖をといてきかせたよ。忙しいだらうとは思つたが、聖書の話をしたり讃美歌を唄つたりしたよ。店の誰彼は耳をすまして聽いてゐたやうに思ふ。或る時はまた「アンナ・カレニナ」や「父と子」の物語をした。アンナのために同情の溜息をついた。イリナのために反感的の罵倒を試みた。ああ。今やカーチヤの心には、僕に對する尊敬の外に何もないのだ。僕は去日彼女をつれて「コーロコル」へ行つた。安い紅茶を一杯づゝのんだ。僕は彼女に接吻をしなければならぬと思

つた。これは始めてだから酔はないと極りが悪いけれども、酒を買ふだけの金がないので嫌に酔つた。わきを見ると、金持の露西亜人と支那人の男や女どもが、飲んだりくつたりだ。護謨の葉蔭では、奴等のためにオーケストラさへ始まつた。ぼんやり眺めてゐるカーチャの顔には苦痛と侮辱があつた。僕は彼女を慰めるやうにかう言つた『ごらんなさいカーチャ。あらゆる歓楽の旅行免状は、あの金持どもの手に握られてゐるのです。あの露西亜人の妻君や娘の身のまわりに輝くものを！ああ。あなたは全くお可愛相ですナ。するとカーチャの言ふには——まあ。ほんたうに妾を可愛相に思つて？と例の燃ゆるやうな眼で僕を見た。この「碧の熱の瞬間」にたまらなく嬉しくなつた僕は叫んだよ——全くです！心の底からお氣の毒です。吾々二人は、呪はしい運命の手に、歓楽はおろか生存の權利さへも拒絶されやうとしてゐる！常に常に生存を脅やかされるといふ事の意味を御存じですか？すると彼女は實に見上げことを言つたネ——妾たちはお金ばかりで生きてやしませんもの。何よりも同情ですわ！と。憚りながらその同情にかけては負を取る僕でないから御安心なさい。だが、貴女は全く偉いなア——あらチッとも偉かありませんわ。偉いのは男よ。男は妾たちを玩具のやうに思つてゐるんですもの——オヤ。カーチャさん。それはどんな男を指して仰有るんですか？少なくとも僕は幼少の頃から、女といふものを、人間の最高表現と心得てゐるのですから、僕がもし一人の女を愛し、その女にも愛して貰へるならば、僕は彼女の奴隷となるのも厭はぬつもりです——まア。奴隷に？——さうです！これはつまり僕が女と愛に落つるときの感情の崇高さ加減を言ひ現はした言葉なんです。ああ。魂同志の同情！何より僕の心に合つてゐる！僕は貴女のやうな話相手が欲しいのです。もしも貴女に近づくことが出來るならば、貴女は生涯の話相手になつてくれませんかと僕は言ひたくなります！こんなことを言ひ出す時には、どんな男でも肚の中は左程美しくないから、怖ろしくなつて顫えるものですが、僕にはその心配がありません。僕は貴女のほかに愛すべき女を持たない！と口で云ふのが恐ろしいので、今日まで胸にしまつて置きましたが、もはや堪えられない！これが貴女の氣を損ねることなら？寛大に赦してくれるでせうネ？と云ふと、カーチャはブル〳〵と身を震はせ、狂喜して僕の手を握りながら、恐るべき例のやつで僕をじつと！エヘヽヽヽ。詳細の説明は、君の洞察に任せて略くが兎に角カーチャは興奮して——ああ！貴郎は理想的な考へを持つてゐらつしやるわ！さうして妾のやうな女に一生の友情をお求めになるとはマア何て不思議な事でせう！どうか父へも

会つて話をして頂戴な。吃度びつくりして喜ぶと思ひますわ。とから來たもんだ。勿論ですとも！お父さんとお目にかゝり、僕の身分や收入の話もしなければなりません。お互のために早い方がいゝ。明晩にしやう。といふことに決つた。酒はのまないけれども、頭がフラ〳〵と醉つ拂つたやうに夢中で接吻して別れたのだ。」と萬之助は語り了へた。どんなに小悧巧な人間でも、浮世の波にもみ碎かれると馬鹿になる。況して年端も行かない娘だ。萬之助の出鱈目に引きずり込まれたカーチヤこそいい災難だが、生ぶな彼女の虚を狙つて第二の兼職にとりかゝらうとする萬之助も亂暴な男だ。俺はこの願人坊主にそんな腕まへがあらうとは思はなかつたので感心してきいた「一生の友情つて何だい？」「神の祭壇にぬかづいて聖なる結婚をすることさ。」と彼は蒼白い微笑を浮べながら答へた。「何を云つてやがるんだ！馬鹿野郎！眞つ直ぐなことを言へ。」「あんまり馬鹿々々しい。」「これより眞つ直ぐなことはないよ！」と萬之助は呆けてゐるのだ。「フン。して見るとそれは正氣の沙汰かね」。「勿論さ。僕は今日まで、君に向つて冗談を言つたことはないよ。それは君だつて知つてゐる筈だ。僕は色々考へた結果、カーチヤと結婚をすることにしたんだ。」「よろしい。俺はまた擔がれるのかと思つた。ぢや。そのつもりで友達甲斐ひに警告してやらア。

俺は君の戀愛を粗末に扱ふ了見は毛頭ないが、結婚なんてことを聞くと、臍を潰したくなるから止してくれ。成るほど、露西亞婦人と日本男兒の結婚なんか、此の町にだつてザラにあるさ。元帝室技藝員何とか嬢に西洋洗濯職人――元伯爵何とかスキー令嬢と時計の修繕師――といふ風の取り合せでね。だから、廣告取り兼集金屋の平日萬之助と、豫備少佐の息女と一對になつたつて不思議とは思はないけれどもだ、リユウマチスの親爺に水色の眼玉の世話をやく！こいつア、一羽の雀が二羽の鳩をおんぶするより骨だ。如何して食つて行くか？故障はそこにあるさ。」と俺は言つた。是で人の色ごとの邪魔をするのは二度目だから馴れてゐる。俺が京都の寺のお坊にゐるころのことだ。或る朝。暗がりに起きて便所へ行くと、臺所の戸があいて居るから、泥坊が入つたのではないかと思つて下女を呼んだ。しかし返事がないから下女はまだ寝てゐるのだらう？危ない危ないと臺所へ叩き起しに行くと彼女の蒲團は藻ぬけの殻！オヤオヤと驚いてゐるところへ、先生、寝まきのまゝでおはちを抱へながら、戸外からコツソリとお忍びでおいでなすつた！が、俺を見るとアツといつて魂消るのだ。「この時刻に木戸をあけつ放して何處へ行つたんだ！」と俺は怒鳴りつけた。彼女はおはちを抱へたまゝ泣き出した。サア。そこで俺の成敗は始まつた。

その結果によると、彼女には色男があつた。勿論、誰も知らない。色男は近所に家を借りて自炊してゐる電車の車掌なんだ。彼女はお坊の御飯やらおかずを、誰にも悟られないやうに此の車掌の許へ運んでゐたのだ。が、それは一體どんな男だか、よく〳〵調べて見ると意外にも、立派な人物ではあるが天刑病者だつた。彼女は知らずにゐたのだ。この驚きの最中に彼女は尻に帆かけて丹波へ突つ走つた。そこに彼女の親里があつた。お蔭で彼女は助かつたらうといふ俺の考へだ。從つて俺の言ふことを聞けば萬之助も救はれる道理なんだ。萬之助は頑として應じなかつた。「君！戀愛の前に小麥の値段なんぞ考へなくてもいい！この際の君はナ。くだらない御託を列べるよりや、進んで仲人の勞をとらうといふのが至當だよ。僕が君の力を借りたいといふのも、實はそのことで豫備少佐と談判をするのに今晩同道してほしいからさ。」「眞つぴら御免だ。仲人とお產と來ちや、後が面倒だからナ。」「フン。係り合ひにでもなると思つてゐるんだね？よろしい。僕ひとり行くよ。」と萬之助は怒り出すのだから始末に困つた。（さて、この話をお讀みになる讀者諸君も、この馬鹿げた結婚には必ずや御同意なからうと思ふ。さうだ結局、問題は不成立に了つたのだ。ところが不都合な身のほど知らずの吾が平口萬之助は、事の失敗を作者大泉黑石氏に誠實と好意がない結果であると斷じたのだ。そして大泉黑石氏が、西伯利から日本へ舞ひ戻り、「中央公論」に第一回の「自叙傳」を物した時に、何處の旅空を漂ふてゐるか消息さへしらなかつた萬之助が突如として現はれ、卑怯千萬な復讐を試みたのだ。彼は或る雜誌に驚くべき一文を寄せて作者の人身攻擊を企てた。これはなか〳〵有効であつた。或る一部の人々はその記事を信じて、この尊敬すべき作者を一種の無頼漢と見た。作者はこの攻擊者が意外にも萬之助であることを發見したので打つちやつて置いたが、心中大いに穩やかであるわけがないのだ。大泉黑石氏は萬之助の根氣に打ち負けて、カーチヤの父親の家へ出かけた。するだけのことをした。而も彼は作者に對して恐ろしい恨みを抱いてゐる。といふことと一言書き添へて置けば作者の氣がすむ。）。俺は仕方がないから萬之助について行くことにした。こんなことで喧嘩してもつまらないからだ。だから、日がくれるとフラムナヤの裏通りへ出かけた。豫備少佐の住居は不景氣な仕立屋の二階にあつた。古い本と埃の臭ひで一杯の部屋の中には、腸のハミ出た大きな皮張りのソフアが三つばかり、ロマノフ帝國の滅亡を代表したやうに置いてある。リユウマチ少佐は其處にポツネンと只一人、三千世界の神や佛に忘れられたやうな顔つきでおさまつてゐた。

外交官の面影は少しもないが、馬車屋の風貌は確かにある。國は亂れて山と河。城は荒れたり草の中。舊派悲劇は「ボリス・ゴドノフ」の王樣に傭ひ手はありきせんかと云ふ鬚面だ。この鬚面のなかに取り殘されてゐる二つの古井戸が、こつちを向いて恐ろしく深刻にギロリと光つた。「小官に何か御用ですか？」と鬚面の少佐はヒヨロ〳〵と破れ椅子から立ち上つた。先方が小官だから、こつちは小生で行かう。「甚だ唐突ながら小生は、お宅のお孃さまと、寶來公司で御ちかづきになツたる平口萬之助でありまするが、思はぬ御緣でお孃さまとは以來、その、ヘエ。エヘ、、。」と頭をボリ〳〵掻きながら、小間物屋の番頭が不義のお詫びをするやうにペコ〳〵お辭儀をした。相手によつて色んな言葉の使ひわけをする萬之助だが、「え」、つゞいて小生はその合ひ棒であります。どうかよろしくお見知り置き下さい。」と俺もなか〳〵丁寧な挨拶を知つてゐる男だ。ところが、見かけは如何にも愁然として怖(おつか)ない少佐の顏が、たちまちガラリと崩れて「アツ。さうでしたか？アツハツハツ」と山彦のやうな笑ひが灰色の鬚の中からとび出した。昔の外交官だけに愛想はいゝのだ。先生、張り子の山猫みたいな首を振り振り「娘にお金を下すつたのは、あなたでしたか？これは〳〵ようこそお越しになつた！さア。活潑にヅツとこちらへお入り。そこは寒い。」

と言ふ調子で、外國の使臣をもてなす時の堂々たる物腰したから恐れ入るが、成るほど「そこは寒い」と言ふわけだ。佐野の源左衞門に賴んで西伯利に閉居して貰ふと或はこんな姿になるかも知れない。暖爐(ペーチカ)には火があるのかないのか、頗る曇(どん)よりとして、小さい栗の薪(まき)がたつた二つだけ、梅の鉢の向ふを張つて床の上にころがつてゐる。これがなくなると、椅子の足でも叩き折つて焚べるつもりだらう。それではお言葉に甘へて、ズツと活潑に入つて行くと、眞つ逆樣に窓から往來へ落ちるやうに設計してある狹い部屋なんだが「サア〳〵こちらへ」と更に臆面のない態度には、流石に歴史の匂ひがあつて奥ゆかしい親爺だと思ひながら、腸のハミでたソフアへ、ドブンと腰かけたが質屋の亭主の金だから一向差し支へないやうなものゝ、十五圓の話はそれきりでお了ひなんだから、恐ろしい高いお體だと思つてゐると、敗軍の將は語り出した。「ああ。この窮狀をお目にかけるのは、何とも恥かしいことだが、今更、仕方がありませんわい。世が世ならば、十里先へ行かうと、百里の旅をしやうと、靴の底には、泥の一ツもつくやうな身分ぢやないのですがナア。」と大袈裟な嘘をついて、洪歎するのだ。飛行船ぢやあるまいし「いや。そんな話は止しませう。お噂は聞いて居りますお互さま靴の底には泥のつかない筈なんだ。小生の父と稱するも

のも矢張り露西亞の領事で、天津・漢口あたりを麻胡ついてゐましたから、閣下のやうな將軍も父の部下に居つて、犬馬の勞をつくしたらうと思ひますが、不幸にして、この政治家の父は、袖の下を頂戴するだけの度胸がなかつたと見えて、殆んど無財産で豪然と往生しました。大きに迷惑するのは悴の小生であります。」と俺は丁寧に脅かしてやつた。「フン。貴公は領事閣下の御子息であつたか？」と露西亞の源左衛門が目を圓くして改まつた口調だから「いや、御子息には違ひないけれども、親爺には伯爵も恩給もないので、小生は閣下に尊敬される覺えがないのですよ。現在は人生の彌次馬を以て自ら任ずるほど不眞面目の堂に入つた一個の「狩人」に過ぎませんからな？彌次り倒すべき人生の材料はありませんかネ。閣下。」と茶化してやつた。不眞面目な人間を見ると「フヽン。その不眞面目は本物か？」眞面目な人間を見ると「フヽン。その眞面目は何時が締切りだい？」と思ふ。これが俺の精神なんだが、髯の少佐にわかる筈がない。「では、貴公も露西亞人だ！」と俺の顏をつくづく眺めるのだ。時々さう思ふ。これはまた實に奇妙な面相の俺もあればあるもんだ。見渡すかぎり美しく整頓してゐる俺の顏の、何處かに合點の行かぬ一點があるさうだ。西洋人が俺を日本人と間違ふのも、日本人が俺を西洋に取り違へるのも此の點にあるさうだ。試みに聽きたまへ。――文藝復興の歴史はフランスに始まりフランスに終る。共に甚だ重要の意味を持つてゐる――とウオター・ペーターは「ルネツサンス」の中に列べてゐるが離つて王市復興の歴史は、紀元前一千五百年代セクロプスのアテネ再造に始まり、大正何年かの東京に終るかどうかわからんが、共に甚だ結構な意味を持つてゐる今度の大地震を迎へて、何一つ焼け出さないに拘はらず何一つ持たない俺は、浴衣一枚で雜司ケ谷の女學校の前を消然として歩いてゐると「アラ、チョイト、あなた。異人さんが燒け出されて行くわよ！」と女子學生が叫んだ。俺は極りがわるいから駈け出した。ところが運わるく門の前で下駄の鼻緒がプツリと切れた。兵古帶の端を引き裂いて汗だく〳〵ですげるのだ。これがまた女子學生のお目にとまつて、いゝ見世物になつた。「すげて上げませうか？」と一人ぐらいは言ふかと思つたら「チョイト。〳〵！　來てごらんなさいよ！　西洋人が下駄の鼻緒なんかすげてゐるわよ！」と踊り上つてよろこぶのだ。すつかり痛み入つた。この位の日本語は大抵の西洋人にわかる。俺は赤くなつて敎へてやつた「御婦人諸君！　西洋人だつて此の節は下駄の鼻緒ぐらいすげるワヨだ！　氣をつけて物を仰有いよ。ほんたうに！」俺の日本語に驚いて皆門の中へ逃げ出した。「日本の女學生は失禮でいけませ

んね。先生。」と顔見知りの巡査が「立ち箱」の中から聲をかけた。「いやもう散々馴れてゐますから大丈夫です。」と俺は飼ひ犬が自分で挨拶するやうなことを言つた。（少し脱線しました。しかしこれが作者の話の美點といふことになつたら、一ッさういふことにお願ひします。）。「時に閣下！　お嬢さまは？」と萬之助がモジ〳〵しながら言つた。「あゝ。カーチカはまだ戻りませんが」と閣下はおつしやる「何はなくとも、せめては母が生きて居つたら、娘に憂き目を見せるでないがの。」。「ヘイ。閣下の奥さまは亡くなられましたかネ。」「あゝ。妻は病氣でしたが、オムスクまで行けば、舊政府の者共が集まつて旗あげをしてゐるといふからの。それを唯一のめどに敦賀を立つたが、ウラジウオストクへ着かぬ先に、船の中で死にましたわい。心配のあまりにナ。悪い時には悪いことばかりさ。」。「いや。閣下の胸中は小生も充分お察し申し上げる。」と寒いので水洟をすゝる光景は一寸お芝居だ。そこへカーチャがフウ〳〵息を切らして入つて來た。頬つぺたも鼻の頭も無のやうに赤くなつてゐる。俺の顔を見るとドギマギした。「先日の親切な御仁が、わざ〳〵訪ねて來られたヨ。挨拶をなさい。こちらにおいでなのは、お友達の、大ネズミと仰有る。」と俺をカーチャに紹介するから、「いや、小生は只のネズミの本家であります」と訂正したが、「いらつ

しやいまし。大ネズミさん。あなたとは、先刻、バザルでお目にかゝりましたわね。」と矢つ張りネズミだ。これでも小さい自分に喧嘩だと言へば飛びかゝつて引つ掻いてやることに決めてゐたら、いつの間にか俺のことを猫々と言ふやうになつたが、今度は鼠だ。「何て不思議でせう？」とコ〳〵笑ふと、カーチャの水色目玉が瞼の中に半隠れて、頤の下にペコンと靨が現はれる人なつこい娘だ。この目玉と靨に浮かれて萬之助は病氣に障る寒さも厭はず通つたのだ。好いた同志は俺の知らないコソ〳〵話を始めた。「ホ、ウ。お目にかゝつたこともあるのかい。フン。さうかい。」と云ひながら豫備少佐は何か思ひ出してヒヨロ〳〵立ち上つた。「どれ一ッ御馳走代りに、お客さんへ、小宮の靈魂をお目にかけやうか？」と閣下は本棚の前に蹣めいて行くのだ。靈魂をお目にかけやうかと言はれて、久しぶりに思ひ出すが、第一回の自叙傳にも書いてある通り、露西亞の伯母の家に居候だつた少年時代のことだ。伯母の猫が、俺のインキ壺をひつくり返して溢してゐるから、腹立ちまぎれに、尻つぽを摑んで床の上に叩きつけると、グウと言つて死んだ。伯母が憤慨してゐると年をとつた近所の尼さんがやつて來て、かう言ふのだ。「お前さんはひどい小僧です！　どんなに小さい生きものにも靈魂があるんだから、無暗に殺してごらん、お前さんが死

んでから、お前さんの靈魂が天國へ行かずに眞つ直ぐ地獄へ行くばかりです。それでもいゝかね』それでもいゝ。尼の癖に餘計なことをいふなと返答してやつた。この尼さんのキリスト名はマリアと言つた。しばらくしてマリアが肺炎で死んだ。お寺で告別の祈りをやつた。朝の九時を合圖に弔ひの鐘が鳴つた。尼さんの一人が祭壇に立つて鹿爪らしく言つた「ああ！　この午前九時！　主の僕なるマリアの靈魂は天國の門をくゞります！　アメン。」皆そろつて「アメン」と言つた。あんまり馬鹿にしてゐるから俺はその晩に匿名の手紙を書いた「午後七時！主の僕なるマリアの靈魂は、まだ到着しない。天國一同心配中アメン！」これをお寺へ出してやつた。だが、人間には、脳味噌や胃袋のほかに靈魂があるなんて此の尼さんのマリアに始めて聞いたものだ。あんまり珍らしいから何處にあるかきいて見た。尼さんは胸を指して此の中にあると答へた。だから露西亞人の靈魂は胸にあるのだ。豫備將軍の靈魂だつてさうだらうと思つてゐると、大將、本棚の斗抽をあけて小さい函を取り出した。「諸君！　小官の魂は凡て此の中にあります。」と言ひながら勿體さうな手つきで、敬々しく蓋をあけた。現はれ出たのが勳章だ。白い鐵の十字章もあればゲオルギーの上等もある。いよ〳〵佐野の源左衛門になつて來た。その一ツ一ツを頂くやうな

恰好で胸にひつかけた儘の少佐は、たちまちグツと反り身になつて肅然とかまへたもんだ。萬之助は威風に打たれてアツと言つた「爽壯たる御雄姿でありますな！　實にどうも！」といふ調子だ。すると少佐は如何にも滿足の體で、しばらくは只、ニコ〳〵と悦に入るのだ。俺も小さい時分には、親爺の勳章が珍らしくて、こつそり取り出しては玩具にしてゐたことがある。そのうちに皆なくなつて了つた。大切にとつて置いて質にでも入れたら、いくらか助かつたんだが惜しいことをしたと思ひながら、少佐の胸を眺めてゐると「いかに人々よ！　しばし耳を傾けて吾が言ふことを聽かれよ。されば、この勳章は去りぬる年、彼の有名なる猛將軍コルニーロフ閣下の麾下として、小官がポーランドの平野に敵の大軍を」といふ調子で、ポツ〳〵勳章の講釋が始まつたのだ。少佐閣下、魂の洗濯だナ？　時々淋しくなると本棚の斗抽から持ち出しては昔を忍ぶ語り草のおなぐさみだ。可哀相に！　仇おろそかに承はるべきでない！　しかし乍ら、戰爭の述懐は大久保彦左衛門の口から飽くほど聞かされてゐるのだからモウ澤山といひたいのだ。こりや大變な騒ぎになつて來たナ！　人生の彌次馬もこれには退却だ。內心頗る辟易してゐると、悧巧なカーチャが俺に同情して「大ネズミさんは、戰爭の話なんかおきらひだわねえ。優しい詩がお好き

ですわね。」と言つた。優しい詩もあんまりお好きな柄ではないけれども、折角の好意だ「えへゝ。まま、好き、といふわけで」と言つた。カーチヤは本棚の上から、青い表紙の本を一冊ぬきとつて持つて來た。見ると Анна. Ахматова 女史の詩集だから、聞いたこともないが、この娘がこんなものを讀むのかしらと思つて伺ふと「えゝ。わたし詩が大好きなのよ。なかでもこの歌が氣に入つたわ」とカーチヤは本のページをひろげて「記憶」といふ短かいスタンザを指しながら、讀んでどらんなさいと言ふから、一寸聲を出す氣になつた。

「湧く井のそこの白石や
　記憶は澄みてわが胸に
　解けやらぬ身の憂かな」

「すつきりして氣もちがいゝでせう？」とカーチヤが俺の膝の上に乘り出して來た。「全く！　こりやすつきりとして、底冷えがしますナ。」と俺は水洟をすゝつた。あつちの方では、ポーランドの平野に頻りと鐵砲の丸が飛んでゐる。少佐閣下奮戰の眞つ最中だ。こつちでは今や、湧く井の底の白石事件で悶着が始まつて「狩人」の大難儀だ。この分だと結婚の問題はどうなるんだかわからぬ。萬之助の了見は知らないが、俺は助からぬことと淋しいと思ひながら先をつゞけるのだ。

「惱ましくもうつとりと
　誰かは知らむ吾ひとみ」

「ちよいと！　妾の瞳をごらん！」とカーチヤが不意に言ふから見ると、水色の涙が零れさうに溜つてゐるのだ。その途端にのしかゝつて來たカーチヤの唇が俺の鼻つ先に現はれた。ハテナ？　接吻しやうといふのかしら？　その氣なら俺にも考へがあるぞ！　と思つたら矢つ張りお門違ひで、彼女の唇はスツと俺の耳へ行つて了つたからオヤ／＼と思ふと小さい聲で「平川さんは、ほんたうに妾を愛してゐるのでせうか？」と來た。だから「その點は御心配に及びません。飛び來る敵の彈丸に當つて斃れることがあつても、その彈丸を戴きましたといふ受取證を書いて敵に渡すまでは決して絕命しないほど正直で固い男です。」と答へた。そのときやつと勳章物語が終つた。髯の少佐は口が乾いたと見えて、カーチヤに言ひつけた。「閣下のお神さんにお茶を貰つて來ないか？」カーチヤは出て行つた。さあ、この隙を狙つて緣談を持ち込まうと考へた。

「あゝ。實に天晴れな御半生でありまするなア閣下。ときに、閣下の仕立屋さんとは、どういふ御關係でありますか？」と萬之助が伺つてゐる。閣下は答へてゐる。「閣下の仕立屋？　あの猶太人の亭主か？　ハツハ！　關係なんかあるもんぢやない！

先刻も言ふたやうに、出て行くつもりで、此市まで來ると、目的地は、どうやら敵軍の手に陷りさうな形勢だから、しばらく樣子を見ることにしました。が、その間の居處をきめねばならんからの、娘と二人で探した貸し間が此處ですわい。お恥かしい話ではあるが、亡妻の埋葬やら小官の病氣やらで、持ち金はあらかたウラジウオストクで失くして了ひ、此處に落ちついた時は既に早、囊中無一物、明日の兵糧にも窮する始末であつたから、階下のお神さんに事情を打ちあけ、娘には氣の毒だが、バザルの店へ世話をして貰つたのです。猶太人の亭主は因業な奴で、間代の一つも溜ると直ぐ退て行けと吐して居るがお神さんは親切な女です。カーチャを娘のやうに愛してくれ居るわい。だが、いつまでも、この儘で打ち棄て置くわけに行かん。目的は目的。娘のことは娘のことだからナ。」この機會だと思つて俺は言つた。「さうでありますとも！ 失禮ながら、この儘では、お孃さんが可哀相だ。早くお婿さんを貰つてお上げになるがよろしい。」闘迂々々しい萬之助も流石に極りがわるいと見えて默つてゐるから俺がさう切り出すと「旨くやつてくれ」と云はぬばかりにチラと俺を見ながら氣を揉んでゐるのだ。すると閣下の感想はかうだつた「勿論、小官もさう思ひます。昔は兎に角、今の境遇では、たとひ小作の百姓であらうと、どんなに貧しい男であらうと、猶太人でない限り、正直な働き者でさへあれば、將來の望みがあるから。いつでも娘に貰つてやらうと思ひます。そのうちには、露西亞も昔の國として再び榮へるであらうし、小官の芽もふき出でやうといふものです。暗黑と不幸とは長くつゞくものでないからナ。娘も承知して居りますわい。」「では婚約なんか、まだありませんね。」「無論この旅窓に小官を識る者は一人もないので、話をしたこともありません。」「適當な人物があつたらお孃さんをおやりになりますか？。」「よろこんで差し上げるつもりです。心あたりでもあると仰有るか？ ハツハ！」こいつ旨く行きさうだ。萬之助は呆けてゐるが、肚の中は有頂天で、出雲の神さまにお禮の前拂ひをしてゐるだらう。案ずるより生むが易いと思つて俺は言つた。「閣下。およろこび下さい。實はその心當りが大いにあるので、今日はお訪ね申し上げたやうな次第ですが、お近づきになる早早々、大事な緣談を持ち込むのもどうかと思ひながら差し控へてゐたのであります。しかし、よろしければお耳を煩はせたいのが山々ではありますがネ。」「ホー！ さうでしたか？ 重ね重ねの御好意は感謝の至りですナ。どうか遠慮なく言つて下さい。それは一體、どんな人物ですか？ 小官を識つてゐますか？ 小官の名聲を尊敬する男ですか？ 何よりも。」と言ひ乍

ら乗り出して來るからしめたと思つた。「言ふまでもないことです。」
「して、その男の將來は有望ですか？　收入はいくらですか？」
「いづれの點からいつても閣下の御息女を頂戴するだけの未來と人格をそなへてゐる當代稀に見るの紳士であります。職業は新聞記者。收入は九百圓。年は小生と伯仲。容貌は頗る白色光澤美麗であります。」とアート・ペーパーの廣告と結婚媒介所の觸れ込みとをつきまぜて、口から出任せの嘘をついた。九百圓の收入なんて萬之助の十二ケ月分の稼ぎ高だ。仲人の言ふことだから相手は半分も信用しないだらう？　そこでこつちは二倍以上の懸値を云つたつて惜き出される心配はないと思つたけれども、澁紙面の男を指して白色美麗は少々ひど過ぎて自分で可笑しくなつたが、「フン！　それは眞實でせうな？」と閣下に念を押されてから「ハハヽ。今のは冗談であります」と云へば張り倒されるだらう。だから澄してさうだと請け合ひながらチラと萬之助を見ると、汗を拭いてゐた。「では早速ながら、その人を小官に紹介して下さるわけに行かんかナ。會つて話をすれば人物はわかるもんだ。」と緊張した將の中から古井戸のやうな眼がピカリと光つた。「承知しました。善は急げで、只今、改めて御紹介いたします。それはつまり此の男です。オイ。こつちへ出ろ！」と萬之助を引つ張り出した。萬之助はドギマギしなが

ら、恥かしさうに只ニコ／＼と汗を流して頭を掻いた。口ほどもない男だ。ところがサテこの瞬間こそは將の少佐にとつて最も驚くべきものであつた。閣下はいきなり猿公のやうな奇聲をあげて叫びながら、リウマチスの脚をも厭はず破れかぶれのソファの上にとび上つた。「何です！　何です！　何といふ途方もないことです！　何といふ惡戯です！　何といふ侮辱です！　あゝ。小官の娘を貰ひたいと言はれるのが此の人ですか！　え？　この人ですか！　あんたは御自分が何を言ふて居るか御存じでせうな！」さうだ俺は何でもかんでも頭から馬鹿にして揶揄つてやらなくては承知の出來ない男なんだが、ほんたうを言ふと、將せても凋びても將軍は將軍、この位の見識はあるべき筈だ。俺の言ふことが、いかに呆れ反つた冗談であることは先刻御承知なんだ。驚くのに無理はない。俺は萬之助に頼まれて失禮な芝居をやらうといふのだ。見たくもない狂言だ。幕が今あいたのだ。あいた幕なら、しまる時もあるだらう。しまるまでやつゝけろと「イヤ閣下！　そんなにビックリなさることはない。お嬢さんはチャンと御承知です。閣下に御異存さへなければ、いつでも妾結婚しますわ！　心臟がコンナにドキ／＼してますわ！　まア。うれしいこと！　この通りの惚れ具合だや閣下、何とも助かりませんや！」「あゝ。閣下！　それは御に

摺つて僞りではありません。」と萬之助が泣き聲で嘆願した。少佐の深く凹んだ眼玉が俺に向つてクワツと瞬いた。「そ、それは何かの間違ひだらうて！」。「どう致しまして閣下。正直な話が何かの間違ひであればよござんすがね。何分、小生は二人の仲の濃やかなところをシカと見屆けてゐるのですから仕方がありません。茶器がとりもつ縁とあきらめて一ツお許るしを願ひたいのです。」すると閣下は憤然として「やりきれない嘘だ！」と叫び出した。そこで俺も癪に障るのだから「やりきれない眞實だ！」と怒鳴り返した。今度は少佐の番だ。「曠世にわたる大嘘だ！　小官の娘が、この男の嫁になると言つた？　あんたは小官をからかひに來たネ？　どうも先刻からそんな氣がした。小官の娘は日本人と結婚する氣づかひはないけれども、一應きいて見る！」この調子が頗る猛烈なんだ。獨逸語の Wütend でも當らない。露西亞語の [illegible] でも物足らぬ。英語の Furious なら、幾分それに近い。灰色の髯が一本づゝ鯱鋒立てをしてブルブル震へた。生きた雲丹をつゝいて怒らせるとこんな格好に棘立つものだ。露西亞人が怒ると怖いもんだ。そこへ、何も知らずにカーチャが仕立屋のニツケル盆に、茶碗だの茶瓶だのゝせて、ニコ〳〵と入つて來た。ところが意外にも部屋の中は只ならぬ空氣に殺然としてゐるのだから、流石に悧巧な彼女は、この場に於て、何かがおつぱじまつたんだが、すぐ悟つた。彼女の驚きはたちまち恐怖に變つた。その不可思議の水色の眼は凡てを語るのだ。髯の親爺に注がれた視線は、狂ひ出すやうな怯えにギラ〳〵と光り出した。「おいカーチヤ。お前がこの日本人に惚れてゐるなんて、眞個か？」と少佐は詰つた。「カーチヤ。どうか貴女の眞心を隱さず、お父さんに打ちあけて下さい。何もかも言つて了つたのです。僕の運命は貴女の言葉一つできまるのですから」と萬之助がおろ〳〵聲で愁然と訴へた。「モシ〳〵！　小官と娘の問答中は默つて居つて貰ひませう！」と少佐が萬之助を押しやつた。カーチヤの顏は蠟燭のやうに蒼ざめて、萬事絶望的だつたが、いつの間にか口のまわりに嘲笑ふやうな悲慘な笑ひが浮び出た。この笑ひが凝乎とこのお奇天烈な光景を眺めてゐた。欺さうとするやつ。欺されまいとするやつ。狐と庄屋と鐵砲の立ち廻りだ。やがて、來るべき第一の瞬間は思ひがけぬものだつた。彼女は丁度あの雉が鳴くときに頭の毛を逆立てるやうにグツと首をもたげて一と言「馬鹿！」と叫んだ「馬鹿！　馬鹿々々々々々々々々！」。狐も庄屋も鐵砲も呆氣にとられた。やがて、來るべき第二の瞬間は、更に思ひかけぬものであつた。魂消るやうな恐ろしい物音が聞えて、部屋の中は眞つ白い湯氣につゝまれた。カーチヤがお盆をひつくり返

して床の上に叩きつけたのだ。三人はびつくりしてとび上つた。やがて、來るべき第三の瞬間は、いよ〳〵思ひがけぬものであつた。あふれ出る涙も拭かずにカーチャは部屋をとびでた。「何處へ行くのか?」と少佐は驚いて叫んだ。「知りません!」「ああ。こりや何といふこつた! 神さま! 大きな娘の親になるもんぢやゴワせんわい!」。萬之助はカーチャを追つかけて行つた。

「おい〳〵何處へ行くのだ?」と俺は萬之助を追つかけた。「何處へ行くかカーチャに聞け!」と萬之助は狂氣の體だ。「これ〳〵何處へ行くのだ?」と將の小佐が俺を追つかけた。「何處へ行くか、カーチャにお聞きなさい!」と俺も言ふた。これが梯子段の下の廊下でパツタリかち合つた。仕立屋のお神さんが、びつくり顔で部屋から出て來た。「何です!騒々しい!わたしの家は競馬場ぢやありません。」「やツ。これは失禮!」と萬之助が泡くつて詫るのだ。「カーチャを知りませんか?」「いゝえ」、とお神さんは怒つた顔つきで言つた。「階下へ來ませんでしたか?」と萬之助は急き込んできいた。「いゝえ」、とお神さんは呆けてゐるのだ。「カーチヤさんが どうしたと仰有るんですか?」「今、逃げたのです!」。「へエ。何故でせうか?」、すると小佐がいら立ちながら怒鳴つた。「そ、そんなことを言ふてる場合でないわ!娘はたしかに階下へおりた筈ぢや。サ。何處へ行つたか?つれて來い。」「つれて來いとは何です。失敬な。」と膨れつ面のお神さんはお了ひに怒り出した。そこへ猶太人の亭主までやつて來た。「何でえ。何でえ。しづかにしろい!」「しづかにしろ?フン。し、し、しづかにしてゐる場合でないわい。小官の娘がゐなくなつたと言ふて居るのがわからんか?」「わからんかぢやねえやい!おめえの娘がゐなくなつたつて構やしねえ。コチトラの知つたこつちやねえんだよ。小官め。」と亭主は拳骨をこしらへて、リウマチス少佐の胸にブラ下つてゐる勲章のまへにヌツと突き出した。「あたし達は知りませんのよ。カーチヤさんの乳母ぢやあるまいし。さあ。引つ込みませう」、とお神さんは亭主をつれて部屋へ入ると、いきなりドカンと扉をしめて「やい!兵隊。娘にうつちやられたんぢやねえか?」と怒鳴つた。「では誰にきけばよからうか?」と閣下。「小生は知らんです。閣下の權幕があまり激烈なので、お孃さまは専ら恐れをなして逃げられたのです。ああ。小生と彼女の仲は自體どうなるのでありますか」、と萬之助は悲憤のやりどころがないのだ。「そ、そんなことを言ふて居る場合でないわい。娘を返してくれ。お前が教唆して追ひ出したやうなものだ」。「恐ろしく無茶だナ」だから面倒臭いと思つて「おい萬公。お孃さんはまだ遠くへ行く

まいから、追つかけて行つて探さうぢやないか。こゝに突つ立つて押し問答やつたつて始まらん」と俺は言つた。そして無理に萬之助をつれて戸外へとび出すとまた俺は言つた「君！この結婚問題は要するに下手なお茶番として終るべきものなんだよ。前趾に壯なり、勝たざるに往くは咎となす。だナ」―。「それは何だい？」。「易の文句サ。卦がわるい。おやめになつた方がよろしい。といふ解釋だよ。第一、君、いくら水色の眼玉にしろ、お嬢さん。猫ぢやないから、この暗がりに探し廻つたつて見つかりやしない。萬之助も男でムると此處で一ツ諦めるんだナ。悪いことは言はん。いさぎよく酒でものまうぢやないか」、と俺は言つた。「諦らめろと言へば、諦らめもしやうが、あ、あ、あの一と聲、馬鹿！と言つたカーチヤの了見が、僕にはわからんよ。ありや、一體誰に向かつて言つたんだらう？」ゝ萬之助は悲觀の限りだ。「サア。それは俺にもわからん」「カーチヤは實際何處へ行つたのだらう？」「サア。それもわからん」と言ひながら二人は、あてどもなく暗の中を歩るき出した。勿論そのカーチヤが、仕立屋のお神さんの部屋にかくれてゐやうとは知らないのだ。仕立屋のお神さんが白ばくれてゐやうとは思はないのだ。「馬鹿！」の意味がわかるものか。身にしみてわかつてゐるのは、どうしてかうまで、無駄骨の折り曲げに忙しい男ばかり揃つてゐるのだらうといふおきまりの自己冷笑に間違ひのないことだ。しかしながら、もうソロソロ有卦に入つてもいゝ時分だ。黒石先生。しつかりしろ！（完）

（附記）「頭から足のさきまでかく腹で、腕をとつたらまたも見きれ」。（註曰、腕は筆に通じて可也）といふ僕の拙い狂句を一笑に附して顧みざること勿れ、吾が面白き讀者諸仁ならびに吾が面白き讀者諸嬢よ！何故ならばである。元來、原稿紙百二三十枚乃至百五六十枚の見當でもつて、如上の出發點より物語を始め、厚かましい萬之助の失戀を片づける一方に於て摩訶不思議にして且つ摩訶不都合なる阿片密賣者の活躍を叙することにより、主張せんとする正義人道と宇宙輕蔑の所在を明らかにするのが僕の腹であつたのだ。嗚呼。何で想ひがけやうか！この腹にして此の尻に又々裂斬られやうとは！是れ千客の萬來し以て吾が筆の遅々として捗らざるがためによるのだ。項羽大人、敵のまへに嘆じて歌ふ。「時不利兮。騅不逝兮。騅や騅や汝を如何せん兮」黒石先生、締切日を前に應じて泣く。「時不多兮。筆不逝兮、オヤオヤこいつは困つたナア兮」然り！而して事はついに志と平行しなかつたのである。だから勿論、よろしければ、いつか一度は、この先を書いて諸仁諸嬢を思ふ存分に引きずり廻す皓

ら、この長々しき光榮ある身の上噺を、目出度く千秋樂にしやうと思ふのであるが、しかし、いつも言ふやうに、この斷り書きを實行する自信に至つては甚だ曖昧な僕のことであるから、願はくは決してお持ちになるには及ばない。そこで潔くサヨウナラと言ふことにして置きます（本附記終り）

笑の國巡禮

高須芳次郎

春の世界と笑の國

悲愁に沈んだ人の澁面を思はせるやうな冬が去つて、快活な浮々した人の歡喜を想像させる春がくると、萬物悉く笑に解けてゆかうとするやうに見える。柔かい春光、戀をさゝやくやうな東風のうちに、鳥が長閑に歌ひ、花が淡紅の雲をなびかせて居るのを見聞くと、誰れも自然に微笑まぬわけにゆかない。

さうした心持で、草原に寢ころびながら、無心の雲を見ると、雲までが笑つて居るやうに思はれる。春はどうしても、笑の季節である。そして春が生み出す笑は苦ひ笑ではない、淋しい笑でもない、皮肉な笑でもない。それは甘味な笑である、明るい淡紅色の笑である。生の歡喜、生の跳躍を象徴する笑である。すべての悲み、惱み、淋し味などを忘れさせる笑である。

若し茲に笑の國があつたとしたら、私は春風に吹かれながら、その笑の國へ旅して見たい。私は久しく笑から離れて居た、笑を忘れて居た。動搖から動搖を求めてやまぬ現代の傾向は、私を焦燥ならしめ、不安ならしめ、憂鬱ならしめ、腹立たしい氣分に陷らしめた。私は惱み過ぎた、疲れ過ぎた。笑ふよりは、悲んだ、そしてひどく氣むづかしい空氣の中へ自分を追ひやつた。が、私はいつまでも、さうした悲みの國、惱みの國

に留つて居るつもりではなかつた。それが偶ま昨年の大震災から生じた種々の悲劇に直面して、重苦しい悲痛の空氣が濃厚に私らを取卷くと、私はもう堪え切れなくなつた。私は少しでも、憂鬱から逃れたいと思つた。悲愁から解放されたいと願つた。その時、私は不圖、私を救ふであらう明るい笑の國を想像して見た。が、さうした平和と歡喜とに滿ちた世界が、何處にあらうか。今日それを求めるのは、砂漠の中に美食を求めるにひとしい。所詮、それは一つの空想に終るであらう。私はかう考へて、ひどく落膽した。

それでも、私は尙あきらめないで、その思ひを過古に馳せて見た。そしてぢつと首を傾けながら、心眼にいろいろの過古人を浮べて見た。その時、不圖、鼻が大きく、そして口も亦大きい、唇の厚い、脊丈の高い男が、微笑しつゝすつと前を通り過ぎたやうな印象を、心眼に受けた。私は覺えず「モリエエルだね。」と獨語した。すると、また一人の細長い男が、微笑を含んで居るのが心眼に映じた。その男は飄逸さうな風をして、酒に醉つたらしい、とろんとした眼をして輕く笑つた。「一九だね。」と私はまた呟いた。一九から私は三馬を思つた、京傳を思つた、黄表紙の作者を思つた。かう連想の糸を頼りに手操り出してくると、私には、笑の國の縮圖が、自然に浮んで來た。そして私は過古に於ける笑の國を巡り歩いて見ようと思つた

さうなると、笑の國の範圍は廣い。イギリスにもある。フランスにもある。ドイツ、ロシヤなどにもある。けれども私は先づ手近な日本から巡禮して歩くことにした。そこには現代を遊離した笑の國が無邪氣に展開して居る。殊に黄表紙で形造られた笑の國は、如何にも、古風で、淳朴だ。鋭い神經と重い憂鬱と病的な皮肉味と自棄的冷笑の氣分とに囚はれて居る現代人には、到底考へ出されない、のんびりした情調が、黄表紙の笑の國を取卷いて居る。それは、近代人の笑にくらべると、原始的な笑の世界だ。所詮、御伽話めいた笑から離れ得ぬかも知れぬ。が、複雜な意味の笑に味到するには、一度さうした單純な笑の國を急行列車式に少しばかり歩いて見るのも、笑の巡禮らしくて宜い。私は唯わけもなく、さうした笑の國の道化役者と握手して見たくなつた。彼等相應の機智、洒落、道化、地口、戯謔などを聞いて見たくもなつた。先づさうした低いところから巡禮してゆかう。

野暮と化物とを追ひ出した笑の國

私がぶらりと春風に吹かれて黄表紙の笑の國へゆくと、私の憂鬱な氣分は次第に紙を剝ぐやうに薄らいで來た。彼の作者ら

は、好意ある眼を私に注ぎかけて、隔意のない握手をしてくれた。一體、彼等は純一な素直な江戸の市民で、小供らしい、赤本、黒本の時代から一歩を進めて、始めて黄色な表紙の單行本にその戯謔を恣まにして、劇的趣味を背景とした黄表紙の國を作つたのである。そしてその最初に輕快な茶氣を不器用に流露して黄表紙の先驅をしたのは、戀川春町の『金々先生榮華夢』である。この時分から、漸く江戸のロオカル・カラアが文學の上に出て來た。

『金々先生榮華夢』は、支那の『枕中記』の盧生邯鄲の夢を模したものである。今日から見ると、他愛もない小供だましの作品である。昔、片田舍に居た金村屋金兵衛と云ふ貧乏人が自分の窮乏を悲んで、富豪になりたい一念から、江戸へ出た。そしてある粟餅屋へ這入つて、粟餅が出來るのを待つ間、不圖旅の疲れが出て前後も知らず眠ると、夢のうちで富豪の養子となつて、あらゆる榮華をつくした。が、餘り度が過ぎたので、彼れは養父の怒りに觸れて家を追ひ出された。と思ふとはかない夢が醒めて、現實の苦に歸つた。その時、金兵衛は俄かに横手を打つて「人間一生の樂みも、粟餅一臼の内のやうだ。」と悟つた。もう彼れは、人の富などを羨まないで、快く田舍へ歸つたと云ふのである。それは笑よりも、教訓の味が遙かに勝つて居た。が、何處かのんびりした春の氣分らしいものが流れて居る。この『金々先生』から暗示を得て出た作品には、笑の味の豐かなものが少くなかつた。

『金々先生榮華夢』は比倫を失するかも知れぬが、或意味で明治文壇に於ける『書生氣質』の位置を當時に占めたものであらう。唯それ程に纒つて居ぬだけだ。この一篇が出てから、黄表紙の形式が始めて自由になつた。現實味、寫實味がいくらか加はつて「通」と「粹」の眼に映つた世相、人事、風俗を穿つやうになつた。三馬が「當世の風儀此時に始まる。野暮と化物を箱根の先に送る」と自慢したのは其處のことである。生眞面目と野暮とを除いて、眼前當面の萬物を頭から無邪氣に笑倒しようとするのが黄表紙の特色となつた。そしてそれが物語風のものと寸珍的小話式のものとに分れて發達した。寸珍的なものには、落語その儘と云つたやうな種類がある。またフランスの諷刺家マツクス・オオレル式の穿ちを書いたのもある。無名氏の『鋤作萬八噺』は落語式を代表し、春町の『楠無益委記』喜三二の『長生見度記』などは、オオレル式に近いものを代表して居る。當時世紀末とか、世界苦とか、文明病とか云つたやうなものを知らなかつた時代だけに悠々と春の日永に見る猫の欠伸のやうな可笑味をひろげて居る。そこに現代人よりも、もつと

神經纖維の太い人の笑ひ聲が花やかに聞えてくる。どうしても、「春の海終日のたりのたりかな」の感味である。『鈍作萬八噺』を見ると、左の如き笑話が私の眼に付く。

品　川

品川へ二人壹分で遊びにゆき、歸りに百で舟に乘るとて、

ほの〴〵と品川沖の朝がへり
百がくれゆく錢をしぞおもふ

と詠んだ。女郎「これは面白い歌でござんす、それは何といふ本にあります。

客「これは百二朱にあるぞ。

朝　顔

朝とく起きて揚子つかひながら、垣のすきから隣をのぞけば、寢みだれ姿の娘、椽側に腰かけ、朝顏の花を眺めて居る。これはかわゆらしいと呼吸もせずのぞき居たるに、庭にをり來りて、咲いた一輪をちぎりて手のひらへ載せて見る風情どうも云へず。歌でも案ずるよといよ〴〵ゆかしく見て居るに、今度は葉を一つちぎり來り、何にするぞと見て居たれば、チンと洟をかんで捨てた。

桃太郎

むかし〳〵桃太郎が鬼が島へ渡り、資本いらずに多くの寶をとつて來たげな。これほど手短かな仕事はない。しかし犬と猿と雉子がともしたとある。俺もきやつらを手なづけるがよいと、かの日本一のきび團子を拵へ腰につけゆく。向うの岩はなに猿が居る。してやつたりと件の團子をぶらつかせゆく。猿呼びかけ何處へござる。「俺は鬼が島へ寶を取りにゆく。」「腰に付けたは何でござる。」「これかこれは日本一のきび團子じや。」猿うかぬ顏して「嗚呼こいつは、うまくない奴だ」

以上のうちで「品川」は餘りに拙劣であるが、後の二小話は、稍純朴な手觸からくる自然の小さな笑がある。それからオオレル式の穿ちや諷刺を思はせるところの『稍無益委記』を見ると、眼の前の風俗、行事などを無邪氣に諷じて居る。稚拙であるが、朴茂な色合を淡く浮べて居る。筆執つた時の作者の笑顏が見えるやうだ。

人王三萬三千三百三十三代に當つて、初鰹極月廿日頃より出で、價尊き事、八百八十兩ぐらゐ、五百兩につけては返事もせず。而して後、天びん棒上へ反る。

「かつを〳〵と呼ぶところばかりも百兩がものはあるのさ。

□

六月大寒に入つて、汗つるゝとなる。冷にうめんを喰ふ。

「嚊どんや今年は寒くて暑い夏だの。この素麺も大分しもげた。

「のびはしないで縮みました。

□

大通の羽織長き事三尺八寸五六分、紐は踵へとゞき、裏襟白く、刷毛先は釣竿の如く、帶は据風呂の箍の如し。

「とても事に茶屋から宿引を出して置けばよい。

□

江戸節もまだ／＼ひくしと高くとまつて、神樂、催馬樂を謳ふ。

「何だか御法事に逃ふやうでありんす。

「イヨ／＼眠いと申します。

□

息子決して夜あるきをせず、佛いぢりに朝起して、朝茶飲んで御座るは、おとなしけれど、また茶に醉はぬ御用心をと見德太子謹んで白す、穴賢。

「何ぢや子曰く、儒學の身でも迷ひ易きは色の道か。

など云つた類ひである。どうしても、一世紀以前の笑である。道學先生らしい口吻を装ひながら、内實、洒落散らして居る。兹には掲げないが、男色に對する諷刺、墮落僧に對する皮肉、妓女の墮落に向つて放つた輕い嘲笑なども書かれて居る。

勿論、それらは、マツクス・オオレルの『ジヨンブル』『スコツトランド人氣質』などの巧妙な可笑味には及ばぬ。オオレルがその短文でスコツトランド人の性質について描いた一節の如きは、單的にその特異點を活躍させて居る。

スコツトランド人は、實際上の活動家として極めて寡言だ。恐らく、彼等は最後審判の日にこの世で用ひた妄語の數數を辯明せねばならぬと感つて居るためなのであらう。而もその切りつめ方（外國人を閉口させる）は唯各語中の强勢のかかつた綴音だけを發音するにある。何といはう？綴音？往々にしてその綴音の母音だけ發音する。左に抜萃したのは、ラムセエ博士の擧げたスコツトランドの會話の見本である。

あるスコツトランド人、洋服屋の店頭に吊つてある辯慶縞の紗に手を觸れて見て、番頭にたづねる。

客「毛？」番頭「へエ毛で。」

客「皆毛？」番頭「へエ皆毛で。」

客「皆一つ毛？」番頭「へエ左樣で。」

スコツトランドの縣發、グラスゴオのとある床屋へ顔剃り

に這入つた。床屋は、ドオナルド（スコツトランド人）から鬚を買ひ、髭剃を濟ましてやつてから、鬚賃に値を問ふと「一片」とドオナルドが云つた。「いや、それは素敵に高い、一片にして置け、負からぬと鬚は買はないよ。」と床屋は逃げた。ドオナルドはかうしてその一片を懷中してから、床屋に髭剃代を問ふた。「一片」と床屋が云ふと、「いや、それはべらぼうに高い。一ボウビイ出さう。それが嫌なら、元の通り、髭を附けてくれ。」

□

ジヨンブルは、我家のほかでは決して打解けない。隣人にも冷淡な代りに、御自身も隣人の冷淡さを何とも思はぬ。人若し喫煙室で、イギリス人に向つて「卷煙草の灰が、ズボンの上に落ちますよ。」と注意すると、うるさいと言はぬばかりに「私は十分間も貴君の背後の隱囊で、マツチ箱が燃えて居るのを見て居りました。しかし餘計な御世話は燒きませんよ。」と答へるであらう。

以上で、オオレルの皮肉振が略ぼわかるが、彼が、フランス人らしい特色をよく出して居るのは、キリスト教を盲信する一老孃に對する鋭い笑謔の仕方である。

汽車中で、一番恐しいのは、私の前に座を占めて突然「貴下は上帝にお逢ひなさるだけの御用意が御出來になつて居られますか。」と尋問に及ぶ老孃だ。一名これを「キリスト教の働き手」とか呼ぶさうである、彼の女は何處へでも臆せずに顏を出して、よく働いて、道路位は物の數ともしない。これも最も注意して避けねばならぬ。と云ふのは、彼の女は中々根氣よくて困難を避けないのみか、それを甘受しようとする勢で、罪に染みたものほど、救ひ甲斐があると思ひ込んで居るのだ。

この老孃はいつも汽車が全速力で驅け出すまでは靜かに沈默して居て、愈よ驅け始めると、例のを捩纏すので、逃れん術がない。次驛へ着くまで切齒して耐忍するか、でなければ差當り、彼の女を車外へ摑み出すよりほかに仕様もない。勿論、後の方法を執ると、彼の女を有難く極樂往生させることが出來やうが、流石に斷行し得ぬのは殘念だ。この老孃が人を慰める慣用辭――殊に汽車中で――は「私らはいつでも死ぬ覺悟をして居らねばなりません。怪我は不意に起りますから。」といふのである。私がこの老孃に逢つた時、片言まじりのイギリス語で「私はイギリス人でありませぬ。」とうまく口止めをしてしまつた。すると老孃はがつかりしたやうに嘆息して「それは御氣の毒様。」と云つたばかりだ。それはこの種の女に對する適切な安全防禦法であるから、何誰にも御勸め

したい。

短い文章だが、老嬢の癖を、よく穿つて居る。

世相、風俗に見出す笑の趣味

それから喜三二の『長生見度記』を見よう。それは、春町の『無益委記』から、暗示を得て書いたものだが、その穿ちは春町よりは巧みで、當時の世相を鮮明に反映して居る。そこに江戸人の皮肉味、洒落味が低徊趣味式に柔かく流れ出て居る。それには唐辛子ほどの鋭い味がなくて、大根おろしほどの味がある。そして太平を享樂して笑の世界に彷徨した江戸市民の姿が思はれる。

ほとゝぎすを飼鳥にして時鳥舍あり。

「昔は時鳥といふよりは山にばかり居たものと見えて、古歌には兎角山ほとゝぎすと咏んで御座ります。山では食物に困つたことで御座りませう。「先づ籠の思召付がきついものだ。「てつぺんへ籠をかけたかほとゝぎす、何とどうだらうね。

□

涼のうち見番船とて大川へ大艇(やかた)をつなぎ置き、藝妓をだん〲に出してやる。

「けんばんたる後朝中流にとゞまる。何か堅い事を言出したな。「ヲーイ、古友とお直はないか。「なければお鐵にしろ〲お銀にお仲では、こそ〲咄があり過ぎてうるさい。

□

女の石尊參り男よりも多し。石尊さまのお山もだん〲木を伐りすかし、道幅廣く、家建てこみ、天狗の棲むところもなきほどにて、美なる參詣數多なれば、腥の臭きに通を失ひ、杉の梢より落ちて鼻を打折り、羽ぶしを打をり、是非なく、只の山伏となりて、きぎらかせば、山伏はわが株を天狗に渡して素人となる。

「嗚呼納太刀は重い。女がこのやうなを擔いでゆくのは奈體大無理村のなり箕細工だ。

「あれ〲向ふから吉原同者が見へる。

「おいらんいつそくたびれんした。

□

深川邊の寺に萩をうへ、萩寺と名づけ、客は座敷へ來り、障子をたて、萩のうちは風を聞いて樂む。

「あの水にさかだち、さは〲〲と云ふところか、どうも云へぬ。「此間に鹿寺を開きにまゐりませう。

喜三二の笑の世界には左程の不自然さがなかつた。自然に微

笑させるところがあつた。が、春町、喜三二のを眞似た『従夫以來記』には、もう自然さが乏しくなつて、強ゐて笑の空氣を醸し出さうと力めた厭味の多い調子が附き纏つて居た。

傾城中の町へ御所車で出る。勿論衣裳は十二單衣、禿も緋の袴、若いものは白張なり。見世にては、すがゞきの代りに琵琶琴和琴などしらぶる。仲の町の櫻、紅葉となる。

「近江屋に居なんすは赤良卿と菅江のぬしなんめり。

「今が鐘四つの時もうしにてさむらふ。

□

ぐりはま額にだほんと云ふ髪はやる。羽織の短かきこと一尺二三寸なり。坊主の通はえり立羽織に輪袈裟はやる。多くは緋縮緬、紫縮緬なり。通の事を「ピイ」と云ひ、意氣なことを「プウ」と云ひ、女郎のことを「ペケンケ」と云ふ。

□

此頃は夜、女郎買に行くものなし。依て女郎屋も朝店を張る。

兎角遊びは朝の事だ。「ぬしのペケンケはプウだよ。

「己がのより、おめへのは飛んだピイで有難てへ。

黄表紙の笑の世界も、こゝまで來ると、そこに厭味が出てくる御嗜花明の巷に笑を見出すとしたら、少くとも、京傳の『江戸生艶氣樺燒』や『早道節用守』などの心持がなくてはならぬ。前の作は、色男氣取の一青年艶次郎一流の徒を笑に托して諷じたのである。後の作は今日の飛行機にも優つて一瞬時に幾萬里をも走る韋駄天の守を中心にして佐おき、幸二郎の情事に笑の色糸をからませたものである。艶二郎は富豪仇氣屋の獨り息子で平生浮氣な事を好み、新内節の正本などを見て、玉木屋伊太八、浮世猪之助が身の上を羨しく思ひ、一生の思ひ出にこんな浮氣な浮名の立つ仕打もあらば、ゆく〳〵は命も捨てやう。」といふ心がけから、邪道に陥り始める。その徑路が『江戸生艶氣樺燒』に詳しく描かれてある。艶次郎は北利屋喜之助、輪留井思庵らに遊蕩の道を教へられて、めりやすの歌ひ方、戀文の認め方などを覺える。そして彼れは「繡刺」が浮氣の始まりだと云はれて痛い目して少しばかりの刺靑をする。また俳優の家へ美しい娘などが駈け込むのを羨ましがつて、當時流行妓の随一に數へられてたおえんと云ふ女に、五十兩與へて、艶次郎と深い關係があるやうに裝はせ、仇氣屋へ駈け込ませた。ところが、誰れもそれを信じないでおえんは意見して歸された。

「せめて隣近所で仇名を立てゝくれゝば宜いがなあ」と艶次郎は期待したが、誰れも知らぬ顔をして居る。彼れは張合が拔けて讀賣に賴んで、自分とおえんとの情事を書いて販行させ、一

人前一兩づゝで讀賣人を雇ひ入れ、無代で江戸中賣らせて歩いた。が、これも一向買ふものがなかつた。彼れはひどく落膽した。

艶次郎は心機を一轉して今度は遊蕩に身をやつした。が、獨身の彼れには、家に歸つても嫉妬を起すやうな女が居ないので張合がないと思つた。彼れは二百兩出して妾を圍ひ、頻りに嫉妬させた。彼れは尙ほ色男振るため、芝居で見た色男が大抵打擲かれるものが多いので、吉原の地廻りの勇み肌に一人前三兩づゝ與へて、人通りの多いところで、めりやすを歌はせて、故意に自分から好んで打擲かれた。そのため、彼れは一時氣絕して半死半生の身となつた。が、それにも懲りないで、七十五日間の勘當を自分から親に願ひ出て、粹な地紙賣となつたりした。その後、彼れの色男氣取が烈しくなつて千五百兩で浮名屋の浮名と云ふ名妓を身請けして、心中の眞似事などをしようと、道行の文句を作らせた。ところが、この事が不圖世間に傳はり始めたので、父から嚴しい訓戒を受け、始めて目が醒めた。と云ふのが一篇の概要である。今、彼れが心中の眞似事から幻滅へ導かれた一節を引いて見よう。

それより又いよ／＼浮氣に乘りが來て、彼是するうちに七十五日の日限が切れ、兩親よりは勘當を許されたと每日の催促なれども、未だ浮氣が爲足りねば、親類中の取成にて廿日間の日延を願ひ、やうやうに聞濟ければ、今度はぐつと登り情死をして一番命を捨る氣なれど、對方の浮名が不承知故、嘘情死の積りにて先きへ喜之助と思案をやつて置き、南無阿彌陀佛といふを相圖に留めさせる注文にて、先づ浮名を千五百兩に身受をし、情死の道具類を買集むる。

對の小袖の模樣には「行に鐵挺、裾には碇、質に置いても流れの身」といふ古歌の心を學ばれたり。是も中宿山崎の儲ものなり。

浮名はたとひ嘘情死にても、外聞がわるいと飛んだ不承知なりしが、此案じを首尾よく勸めた跡では、好いた男と添せてやらうと由良之助がいふやうな臺詞にて漸々得心をさせ、この秋狂言には艶次郎が無利足で金主をする約束にて座元を賴み、櫻田に云ひ付けて、此事を淨瑠璃につくらせ、立方は門之助、路考といふ顏にて舞臺でさせる積りは大きさうな芝居なり。二人が辭世の發句は摺り物にして仲之町へ配らせる

「花藍が書いた蓮の畫を大奉書へカラ摺とはいゝ思しめし付だ。

元より素直に身受しては、色男でないと欠落の分で、櫺子を毀し、階子を掛け、二階から身受をする。

「二階から目薬とは聞いたが、身受は是が初めてぢや。
「おあぶなう御座ります。おしづかにお逃げなされませ。
「おいらん御機嫌ようお欠落ならせませ。
主宝では身受だされた女郎故、お心任せになさるはいゝが何卒欄子の繕ひ代二百兩頂きたいと欲心をぞかわきける。最期の場は粋なぱつとした所との注文にて、三圍の堤と極め、夜が更けては氣味がわるいから宵の積りにて、艶次郎に勤めたる茶屋船、幇間、末社、藝者ども、太々講の送りのやうに袴羽織にて大川橋まで送り、爰にて皆々に別れ、艶次郎は願ひ願ひしと心嬉しく道行をしてゆき、爰こそ好き最期場と箱置の脇差をぬいて、既にかゝらうと見へ、南無阿彌陀佛といふを相圖に稲村の蔭より黒装束の盗賊二人現れ出で、艶次郎、浮名の二人を眞つ裸に剝ぎ取つたり。
「うぬらはどうで死ぬものだから、己が介錯してやらう。
「コレ／＼はやるない。我々は死ぬための心中ではない。爰へとめてが出る筈じやが、どう取違つた物か、着物は皆な上げませう。命ばかりはお助け／＼。
「此後こんな思付はせまいか／＼。
「どうでこんな事と思ひんした。
この『艶氣蒲燒』は當時非常に歡迎せられて、色男氣取のものを艶次郎と云つた。笑劇を小説で書いたやうなもので、艶次郎の痴呆を漫畫化したところに、京傳獨自の可笑味がある。それはモリエルの『ドン・ジュアン』と同巧異色のものだ。モリエエルは、稀代の遊蕩兒として価稱せられたドン・ジュアンを戯畫化して、彼れが、毛色の異つた女を次ぎから次ぎへ追ひまわして歩く有様を描いて戀に浮身をやつす青春の人々を諷じて居る。殊にドン・ジュアンがある双思の若夫婦に目を附けて、女の方に手を出さうとしてひどい目に逢つたり、田舎女に戯れて悶着を起したりするところは、フランスに於ける艶次郎の味が出て居た。それを京傳の『艶氣蒲燒』と對照すると興が深い

金錢慾を對照とした笑の世界

物語風のものは、京傳の『艶氣蒲燒』だけでも、その一班がわるが、茲に今二つばかり、漫畫風の小説をのぞいて見る。これは花柳趣味のものでなくて、人間の物質慾に對する好意ある諷刺的な笑を示したものだ。戀とか色慾とかを對照としないで金錢を對照としたものだ。それには近代文學などに見られないのんびりとした扱ひ方をして居る。この種のものを擧げると、唐來三和の『莫切自根金生木』山東京傳の『延壽反魂談』などがある。何れも、金錢にからまつた笑の世界を展開した作品で

ある。三和のは、今日で云ふと「金の湧く話」とでも題すべきものであらう。京傳のは『魂を盗まれた話』とか『守錢奴の懺悔』とでも題して宜い作である。

金錢に對する渴望は、今も昔も變りはない。いくら多く積んでも、尙ほ求めてやまぬが凡俗の情である。現代の資本主義者にはこの傾きが殊に强い。黃表紙の作者は、この人間の弱味を覗つて、それを笑の題材とした。三和の『金の湧く話』は、春町の『金々先生』に對して、富貴萬々先生と云ふ主人公を設けた。彼れは財寶が多く、自由が利き過ぎるのに飽いて三日でも宜いから、貧乏がして見たいと發心した。それで彼れは俄かに家寶の大黑天を斥けて、貧乏神の畫像を作らせて祭つたり、曆のうちの大凶日を緣日として信心したが、それでも、金が殖えてゆくばかりで困つた。彼れは金を叩つてどうしたら、直ぐに貧乏人になれようかと、硏究や工夫を重ねた末、何でも手當り次第、巨額の金を人に貸して返金を許さぬやうにしたら、貧乏になるにちがいないと思ひ付いた。で、彼れは勇み立つて家の門口に貸金接待の高札を立てた。そして金を求むるものには無證文で、續々多額の金を貸し與へた。けれども藏のうちの金の山は、未だ百分一しか減らなかつた。彼れは焦燥して「おんぼろ、おんぼろ、貧乏なりたやそわか。」と呪文を唱へたり、返金の見込あるものには、一文も貸さなかつたりした。それでも、金は中々減らぬ。矢張唸るほど殖えた。

萬々先生は、富豪零落のあとを顧みて「金持が紙子姿となるには、傾城買をするのが一番捷徑である。」と新たに思ひ付いて頻りに遊女屋へ通つた。彼れは慾の深さうな遊女を熱愛して、毎日、法外な金を振蒔いた。さうした事が長く續くと、內所では、萬々先生の素性を怪んで、「金のため、思はぬ迷惑が來るかも知れぬ。」と疑懼の念を起して、折角振蒔いた金を萬々先生に返してしまつた。彼れは非常に失望した。容易く紙子姿になれぬ自分の運命を悲んだ。

それで彼れは、夜の明けるのを待ちかねて遊女屋を飛び出した。途中から駕に乘ると、前に乘つた人が忘れたと見えて、四五百兩の金が財布の儘、置いてあつた。彼れは顏をしかめて力めてそれに觸れぬやうにして居た。約束の場所で　駕を出ると彼れは逃げるやうに急歩し去つた。ところが、間もなく以前の駕舁が追ひかけて來て「これは旦那のでせう。」と云つて、强ゐて先刻置き忘れてあつた四五百兩入の財布を萬々先生の首へ固く卷き付けて去つた。

彼れは金から離れようとすればするほど、金に附纏はれた貧乏神はどうしても彼れを愛しなかつた。彼れは又一策を案じ

て「今度は澤山な米を買入れて米價がどん底まで下落した時、一齊に賣り放つて大損をしよう。」と思つた。そして番頭、手代らに命じて、急に諸國の米を思ひきり多く買はせた。ところが一向米價が下落しないで、昂騰するばかりであつた。

彼れは行詰つた。そして一擧に金を無くしようとあせり出した。「この上は盜賊に忍び込ませて、藏のうちにある金をすつかり盜み取らせるよりほかに宜い術がない。」と考へ付いた。彼れは今度こそ直ぐに貧乏人になる幸福を味ふことが出來ようと信じた。彼れは、土藏その他を悉く開放して、暫く他へ移ることにした。そして家族一同を伴うて家を出た。「どうか盜賊が成るべく早く來て、早く金を持ち去つてくれるよう。」と貧乏神を念じ乍ら、諸方に久しく張つて置いた盜賊除けの符を剝いだ。また彼れは入口から屋内へかけて、多くの金錢を撒きちらして盜賊の注意を惹くやうにして置いた。

それから數日經つた。彼れは「今度こそ藏の金がすつかり空になつて居よう。」と信じて家に歸つて見た。豫期したやうに盜賊が來たとは來た。が、どの盜賊も大金を搬び出す荷拵へに手間取つた。そのうち夜が明けて了ふので折角寶の山に入り乍ら目的を遂げずに立去つた。彼れは盜賊の腑甲斐なさを怨んだ。

萬々先生はかうして一日片時も貧乏になれないのを非常に淋しがつた。折柄、米價がひどく昂騰して、直ぐ賣放つよう仲間のものから强ゐられた。そのため金が一時に殖えた。また彼れは多くの人夫に金を撒く積りで三保松原の松を買つて江戸へ搬ばせると、ある松の根方から石櫃が出てその中に金が溢れて居た。彼れは「四百四病よりも金ほどつらいものはない。」と嘆息した。結局彼れは「最早わが運もこれまでなりと觀念して、我家へ立歸り、ちと古けれど、金銀先生の先格の通り、藏の金銀殘らず取出し、海中へ捨てさせ、今は心にかゝる山の端もなしと喜ぶ折から、捨てたる金銀一塊りとなりて、空中へ飛びあがる。この勢に引かれて、世界中の金銀一所に集り、萬々が金藏さして飛び來るは、目も當てられぬ仕儀にて、家内のものを一同家の棟へ上つて、飛び來る金玉を防がせたり。捨てたる金銀は世間の金と一つになつて戻りければ、今は内にも立ち切れす。夫婦諸共出奔して、野山を分たず、歩行(ありき)しところへ、先に萬々に金を借りたる人々、今は金持となり、借りたる金に利をそへて持ち來り、是非受取つてくれろとたつみ上りになつて、押付るので、女房は色々と斷りを云ひけれど、一向に聞入れず。ほんに金持の女房になるほどつらひ事はないとさめ〲と泣ける。」の境涯を味はせられた。そして夫婦は元の家に歸り、山のやうな金のため立つ場所もないので困りぬきながら日を送つ

たゝ。

いかにも古風な話である。全部虚構から成つて居るとは、勿論誰れにもわかる。が、その虚構が、御伽話式で罪がない。畢竟、作者は餘りに金に執着し、金を欲求し過ぎる人々を逆に諷じたのである。「すべてを捨てるものにはすべてが得られる。」と云ふ眞理を他愛もない話に寓したのである。湧き出しにくい金が無暗に湧く。兎角窮し易く、貧乏になり易い人間のうちに途方もなく金持になり易い萬々先生が居る。と云ふところに、朴茂な可笑味に伴ふ笑が生ずる。

一體、金錢を主題とした作品は、西鶴の『胸算用』『永代藏』『町人鑑』『織留』などのやうに概して努力の悲痛、致富についての苦痛が先づ讀者の頭に强く響く。それは、モウパツサンや、チエホフが書いた金錢中心の小說に對しても亦ひとしく起る感じである。『胸算用』には、貧しい町人の多くが寒い大晦日に掛乞を避けるために惨憺たる工夫をすることが書いてある。それは生の幻滅だ。が、その中には「大晦日の入替り男」として書かれて居るやうに、互に親しい男が入替つて留守をして、借金取がくる時分になると、故意に聲を高めて「御内儀様の銀は外の買懸りとちがひます。亭主の胸をくり出しても埒をあけます。」と云つて掛乞の眞似をする。それを見た本物の掛乞がこれに容易く埒明かぬと見てあきらめて歸る。あるものは狐つきの眞似をして貸方を烟に捲いて追ひ拂ふ。それらは、せつぱ詰つた苦みの中から生れた可笑味だが、黄表紙に見る茶味、俳味がない。

魂を盗まれた話

京傳の『延壽反魂談』の可笑味は、市川屋升介と云ふ貪慾者が、不圖ある年の春、天帝から生命を召されて、死期切迫の哀感に動搖し始めたところから始つて居る。彼れは天帝の使に魂をそつと盗み出されたので、腑抜けのやうになつた。そして彼れは死の前に心機一轉して今迄貯へた金をすつかり撒きちらして冥途へゆかうと決心した。

モリエエルに描かれた貪慾者アルパゴンは金に執着して、金のためには愛情も、名譽も、體面も一切犠牲として最後迄悔ゐない老人である。ところが、京傳のは、その點に於て、至極淡泊である。それは、戯曲と小說との差異に原因して居る點もあるが、一つは國民性の相違であらう。モリエエルが描いたアルパゴンは、フランス乃至ヨオロツパ人の氣質を反映して居るが市川屋升介は、どうしても、日本人の氣質を發揮して居る。勿論、その趣向の上には、支那小說から暗示を得たところはある

が、大體の心持が日本的である。京傳の『延壽反魂談』は、その書出しが、既に飄逸である。

　死生命あり、富貴天にありといへども、富貴ばかりでもなく、天帝人の生命を司りたまひ、世界中の人を帳につけをき生命終るものには、名前へ點をかけ給ふこと、やつぱり、七つやの番頭といふ氣取なり。

と京傳は記して「ある日くれがたに天帝いそがしく帳をけし給ふとて、誤つて市川屋升介といふものゝ名前へ點をかけ給ひしが、狂言の山となり、作者、本屋のしやはせとなる。」と輕く洒落氣味を流露して居る。

　頃は初春の事なりしが、市川屋升介といふもの、春の日の長きにたいくつして、そろ／＼とまどろみしうち、升介が魂ふらり／＼と遊びに出かけしところに、いづくともなく、岩戸神樂の音聞へて、黑どんの忍び來り、かの魂を奪ひ立退く。

黑どん「どろつく／＼大願成就かたじけねへ。折ふし友達の金幸といふもの、年禮に來りしが、出會ひがしらに忍びものと金幸と魂のあかりにて顏を見合せ、此所拍子幕といふ立廻はりなり。

金幸「曲者待て。

　升介は寢言をいふ。

升介「小僧よ、誰れか呼ぶぞよ、ふう／＼。

　升介はやう／＼と目が醒めて見たところが、魂を盜まれし事ゆゑ、いつかふな代物となり、鰹節のだしがらを白湯で煮た如く、なぎた日の吹流しの鯉を見るやうに拍子拔けのした人になる。

以上が、その發端で、魂を盜まれた升介は、どうしても、翌月死なねばならぬ運命にあることを人相見から冷かに宣言された「所詮、死ぬる身の今まで儉約したのは大きな損。」と彼れは始めて悟つた。それで彼れは、所有の地面、家作、諸道具を殘らず、賣り拂つて、番頭、手代、下女などに相應の纒つた金を與へ、暇を出した。そして彼れは無暗に大きな氣になつて、一夜千兩抛つて、吉原の華魁を總あげした、また彼れは更に千兩出して、一日芝居を買ひ切つて見物した。彼れは圖に乘つて、今度は、千兩だけの花火を晝から夜にかけて、中洲で揚げさせた。が、それらに於て、彼れは豫期した滿足を味ふことが出來なかつたのを淋しく思つた。

　彼れは、金を撒く方面を變じて「後の世のことを心がけよう。」と思つて、江戸中の乞食に一兩づゝ、總花を撒いた。それから大仕掛の放生會を志して、これも江戸中の鳥魚を呼吸のあるうちに悉く川へ放たせた。最後に彼れは、辭世の刷物と紀念品と

を諸友に配つた。かうして、彼れの財産は大方なくなつた。が彼れは「少しでも金を殘して死ぬと、後へ心が引かれる。」と云つて、殘金を悉く旦那寺へ寄附して女房を尼にし彼れが赤裸の元眞に歸つた時、灰色の死が、明日に迫つて居た。京傳は、それについて「かくて升介は頭到死ぬる日になりければ、今や今やと觀念して、死を待ち居たりしが、その日も何の事もなく、あくる日になつても何の事もなく、五日經つても、半月經つても、何の事なく、一月經つても何の事もなく、一年經つても、いけしやア〳〵まじ〳〵として、一向死ぬ氣色も見へざれば、大きに勘定がちがひ、とんだ詮方なく菰かぶりとなり始め、おのれがはやまつた事を悔み、人相見の當てずつぽうを怨みても今は遲蒔き唐辛子なり。」と記した。そして升介が乞食になつたのを見て、曾て彼れに一兩づゝ惠まれた乞食の群が「これはこれは旦那樣。私共と同商賣におなんなすつたね。」と云つて總下座をして、升介に敬意を示した。が、升介は面目なくて、川へ投身しようとするところを友人金幸に助けられた。金幸は、その實、琴高仙人の化身であつたとを彼れに告げて寶を授けた、升介は仙人の力で、江戸第一の富瓮に當つて、巨萬の富を得た。升介は「これは祝ひに一つ飲むべしだらう。」と歡喜の語を發して新生活に入つた。萬事餘りに他愛がないが、死に脅かされた守錢奴の心機一轉とその金のつかひ方が變つたのが如何にも面白い。

　貪慾者の心機一轉については、ディケツンスの『クリスマス・カロル』の主人公スクルウジが幽靈と格鬪した末、すつかり根深い貪慾心を去つて、懺悔したことが思ひ出される。彼れはその時の心持を「身體が羽毛見たやうに輕く、心が天使のやうに嬉しく、氣が小供のやうに可笑しい。」と云つた。升介も亦さうした心持を味つたであらう。ある點から見ると、京傳の『延壽反魂談』は日本の『クリスマス・カロル』だとも云へよう。京傳は日本のディケツンスとして、その作中、暗に金に執着する人たちをそつと諷じたとも見られよう。

一九、三馬が盲人を題材とした二人二樣の笑

　黄表紙の世界から、更に一歩を進めると、そこに一九、三馬らによつて築かれた笑の國が開ける。一九は、いかにも好人物らしい笑ひを浮べて、彼の創作した笑ひの國へくる人々と呑氣に談笑する。ところが、三馬になると、一癖あつて、鋭く眼を睜りながら、皮肉に笑つて、意地悪さうに、彼れの笑の世界へ作れてゆく。

　一九の笑を代表するものは『東海道膝栗毛』である。三馬の

笑を代表するものは『浮世床』『浮世風呂』などである。一九が現代に生れたら必ず歐米膝栗毛、支那、印度、朝鮮などの膝栗毛を書いたであらう。三馬が今居たら、現代の風呂屋、床屋を描寫したであらう。殊に諷刺、笑謔の材料の多い現代は、三馬の鋭い眼と皮肉とを多く要することを私は感ずる。矛盾した政界の泡沫のうちに浮游する政客の生活は正に三馬の觀察を要するではないか、ペテイ・ブルジョアジイの空氣が濃厚に渦巻いて居る頽唐文壇には、三馬の痛刺を要する人と事とが餘りに多過ぎはしなからうか。享樂氣分、殺那主義に囚はれて當面の生活を糊塗して居る實業家、學者、美術家らの一團に向つて三馬の戲謔的解剖刀を煩はす必要がなからうか。私は三馬に日本現代世相を見せて、彼れをして思ふ存分に笑倒させたいやうな氣がしてならぬ。

三馬の『浮世床』と『浮世風呂』とは、餘りに世間によく知れ過ぎて居るから、爰にその可笑味を詳しく記すに及ばない。『浮世風呂』に於ける男湯で、三馬の眼に映つたのは、湯屋の番頭、隱居、醫者、三助、田舍者、生醉人、俳諧師、若旦那、幇間、盲人八百屋、贅六商人などである。それが彼等の口吻一つで、特殊な氣質を表現して居る。『浮世床』では、實世間に疎い漢學者、悪戲盛りの小僧、妙に威張りたがる食客、色男を氣取る勇み肌、多辯過ぎる上方者、老人の癖に存外物事に暗い隱居などを三馬の指先に操つて、彼等を戲畫化した。時には人物の劣惡な弱味を誇張して、醜つた缺點を擴大して見せて居る。

笑の作家が好んで材料に用ふるのは肉體的若くは精神的不具者である。モリエエルは、主として、精神的不具者に眼を着けた。『厭人家』『神經を病むもの』『タルチユウフ』などは、何れも精神的不具者に對する諷刺である。そこには、病的な文明的患者らに附纏ふ可笑味が出て居る。偏僻で、氣むづかし家で當て付けに物を云ふ性質で、自分の戀人に向つてさへも暴言、直言を吐く厭人家が失戀と絶望のどん底へ落ちてゆく有樣をモリエエルは笑つて書いて居る。

江戸時代の作家は、肉體的不具者に同感する風が少かつた上に精神的不具者を諷刺する事には割合に冷淡であつたので、好んで盲人などを好笑の材とした。三馬、一九らもこの境地を脱しなかつた。それは、一面に於て、彼等が狂言から暗示を得たり、それを模倣したにもよるであらう。狂言には『三人片輪』や『丼礑』などがある。一九は殊に、狂言から材料を得たことが多かつた。彼れが『膝栗毛』のうちに書いた盲人の可笑味は、狂言『丼礑』から想ひ付いて、いくらか換骨脫化の作用をそれに加へたのである。三馬も矢張、一九と同一作法に出た

ものと思はれる。

『井礑』の趣向は極めて單純である。二人の座頭が川を渡る時一工夫して、一人は先づ川の中へ這入り、一人は背負はれる。二人は水に濡れながら、漸く對岸へ着くとが出來た。そして事なく川を渡つた喜びに滿ちて、小竹筒から酒を注いで飲んで居ると、一人の惡戯好きな男が來た。彼は突然横から手を出してそつと彼の酒を盗んでうまさうに飲んだ。そして彼れは酒興に乘じて、一方の盲人を打つた。それを知らずに盲人が互ゐに誤解し合つて喧嘩したが、やがて惡戯者の正體が知れたので、その方へ突きかゝつたと云ふ筋である。

　ところが一九の作ではそれが多少趣を變へて居る。座頭の犬市猿市の二人が、川を渡る時、拳をやつて、負けた方が勝つたものを背負ふことに定めた。やがて犬市が拳に勝つと、猿市は「エヽいまいましい。そんならこの風呂敷を貴樣一緒に背負つせ、それよしか、さあ來い〳〵。」と背を向けた。ところが、その樣子を側で見て居た彌次郎兵衛が不圖戯れる氣になつて、犬市に代つて猿市の背に默つて負はれた。猿市は、うつかり彌次を犬市だと思ひ誤つて、對岸へ渡した。

　それと知らないで、唯ひとり岸に殘された犬市は、猿市が狡猾なことをしたとのみ思ひ誤つて、「ヤイ猿よ、どうする。早く川を渡らぬか。」と怒鳴り付けた。猿市も亦彌次のことを知らないで、犬市が僞りを云つたのだと早合點して「コリヤじやうだんな奴だ。たつた今おぶつて渡した、又そつちへいつて、俺をなぶるな。」と怒鳴り返した。が、猿市は兄弟子の犬市に讓歩して、また川を渡つて、元へ戻つて來た。そして犬市を背負はうとすると、側に居た北八が戯れに犬市の先を越して、猿市の背によりかゝつた。猿市は、それと氣付かないで、北八を負つた儘、川を渡り始めた。ところが、犬市は未だ元の儘、取り殘されて居るので、急にせき込んで「ヤイ猿市何處に居る。」と聲をかけた。それで始めて北八が惡戯を演じたとがわかつて、猿市は北八を興津川の中へ振落した。一九の趣向は以上の通りであるが、それと同じやうな趣向を「浮世風呂」のうちに應用したそれは生酔の男が、座頭栗の市、柿の市に戯れて、二人を喧嘩させる可笑味である。それは一九が描いたよりも、もつと寫實味が勝つて居た。

　座頭の坊、かんがよいといふところを自慢にて目あき同前に風呂より出てくるあり。かんの悪い盲人の暗仕合の如く、頭と頭とすれちがふて出るあり。一人の盲人は小桶に湯を汲んで、流し板の上を兩手で押し乍らゆくと、風呂から出てくる盲人と頭をかつちり「アイタヽヽ、栗の市「ヲ、痛い、盲人に鉢

合するとは明盲め、柿の市「ヤこいつが、わが方からぶつゝけておいて俺が云ふことを先へぬかしおる、おのれこそ明盲だはい栗「イヤおのれが明盲だはい。柿「イヤおのれがねぶつて居る盲だ。栗「イヤおれもねぶつてゐる盲だ。柿「又口眞似をしてをるか盲と侮つて。栗「ハテナ、そふいふ聲は聞いたやうな聲だ柿「フヽムなるほど、わしも聞いたやうだ。と小首を傾け、栗「ハヽア柿の都殿では御座らぬか。柿「いかにも貴公は栗の都殿では御座らぬか。二人「イヤコレハ／＼。柿「誠に其後は打たえました。栗「一別以來まづ／＼お達者で。柿「桃栗勾當の坊殿の所でお目にかゝつたまゝ、恰度三年になります。柚「さやうかな、扨々かやうな麁相がなくば、お互にすれ違つても、わかりませぬ。おつぶりは痛みはせぬか。柿「イエ／＼何とも御座りませぬ。貴公のあたまな。栗「イヤすべて痛くも御座らぬ併し座頭同士鉢合をして、ヲツトねぶ一てうといふ古い咄があつたてナ。二人「ヘヽヽヽハヽヽヽ。柿「コリヤ柚の都、湯をくれる筈ではないか。柚「今そこへ汲んで置いた。

といふやうなことで、傍らに生醉人が居て新たに彼等に戯れを始めたとを知らぬ。生醉の男は、柚の市が汲んだ湯桶を一々片側へのけて置く。それが四五回に及ぶと、柿の市は柚の市と言ひ爭ふた末、生醉の戯れと知らずに四邊を探し廻す。それを見て生醉は隱した湯桶を取出して「さあ／＼汲み立てだ。」と云つて與へると、柿の市は「忝う御座ります。」と自分から汲んだ湯に一禮を述べる。と云ふのが三馬の筋である。『井礎』や『膝栗毛』と異つて、浴場の混雜した世界に盲人の喜劇的動作を見出したところが三馬の工夫であらう。

東西の女房氣質に現れた可笑味

三馬が最も好んで描いたのは醉客の十人十態である。彼れ自身、酒中の趣をよく味つて居たので、その體驗や見聞などを上梓に『一盃綺言』『酩酊氣質』などを書いた。それには彼れが淋漓たる水墨で、飲酒家の醉態を感興に乘じて一抹し去つたやうな趣が見える。殊に「さわぎ上戸」などは、巧みにその癖を活寫して居る。「コレ／＼いつでも座敷が長いと云つたな。コレ醉つても耳は醉はねへ、おれが座敷の長いのと三馬、野郎が藝者買は今始つた事ぢやアねへ、何處でも通つたもんだ。そんな耳つこすりをすると、もつと座敷を引張るぞ。」と酒癖を出すところが、全部獨語で可笑味を現はして居る。

が、私が玆に思ひ浮べるのは、三馬が女房氣質を度々描いて居るとだ。『人心覗機關』のうちには「狼ものとよばるゝ下界女房の表裏」がある。『早替胸機關』のうちには『令室』がある。

『四十八癖』のうちには、「亭主を尻にしく女房の癖」がある。この山の神氣質は、ダグラス・ジエロルドの『帳中說法』のうちにも活寫せられて居る。モリエエルの『博學婦人』のうちにも、矢張同趣異曲の女が描かれてある。その中で、一番興味が多いのは『博學婦人』へ出る名士クリザアルの妻、フイラマントの女房振である。

フイラマントは、高等教育を受けたペダンチツクな女だ。彼の女は、專門的に一科の學を究めたのではなくて、唯文學や科學の皮相に醉うて、無意味に博識を氣取り、主人を輕侮した。彼の女は、眞實の詩人を解しないで、末技を衒ふ僞詩人を嘆美した。また彼の家の下女が、言葉の上で文法を誤つたと云つて冷かに解雇したことがあつた。モリエエルは、劇中で、この種の女に思ふ存分の嘲笑を浴びせかけた。

フイラマントの專恣な振舞は、主人の眼に餘つた。下女マルテインを解雇する時、クリザアルは、マルテインを憐んで、追ひ出すことに反對すると、「おや貴郞はあの女の肩をお持ちなさるのですか。」とか「私が理由なしに解雇すると思つてゐらつしやるのですか。」とか云つて、中々聞き入れぬ。クリザアルは仕方なしに「奥さんがお前を追ひ出すのは正當なことだ。やくさ女お前の罪は全く赦すわけにゆかぬ。」と心にもないことを云つて、フイラマントに屈してしまつた。

が、クリザアルも流石に氣になつて、マルテインの罪過を妻に聞き質すと、高價な陶器を破つたとか、食器を盜人に取られたとか云ふやうなことよりも、もつと重大な過失を繰返したとフイラトマンが答へる。そしてその罪は「私たちが注意したに關らず、あの女が、知識の根柢——文法を殺へさうとするので許して置けなくなつたのです。文法と云ふと、國王さへも支配して、その絕對の力を以て、その法則に從ふべきことを國王にも命ずるのです。」と云ふのである。そして「この罪は恕し難いものだとお思ひなさらない？」とつめ寄せるので、クリザアルは「勿論さう思ふ。」と答へる。「貴郞があの女を辯護しようとなさるなら、して御覽なさいまし。」と嬌瞋を發するので、「どうして、どうして辯護などのことは……」と到頭、フイラマントに征服せられる。それは三馬の「亭主を尻にしく女房の癖」のフランス化である。

ジエロルドの描いた女房氣質は、主人の遊蕩に對する手ひどい嫉妬の上に殊によく發揮せられて居る。主人コオトルが愛妓と戲れて家に歸つてくると、夫人が嬌瞋を面に現はして、徐々口說を始めて、コオドルをいため付けるのである。それは所謂「帳中說法」である。それが淀みなく、長く續く、綿々として

また樸々としてだ。
眞實(ほんと)に女ほど割の合はないものはないわ。誰れが女なんかになるのを喜ぶもんですか。その苦勞の半分でも知つたら、男と緣を取結ぶ女は一人も御座いますまい。殿方は何處へでも勝手に御出かけなさいますが、女は始終内に居て、汗水流して働かなけりやならないわね。殿方はお茶屋でお酒を飲んで、歌を唄つたりなさるのに、女房は竈の側で、お三どんをして居れば澤山だとは愛想が盡きます。貴郎は未だ唄つたことがないと仰るので御座いますか。どうして貴郎がお唄ひなさらぬとしつかり分明るもんですか。さうした口を利くのは譯のないことですが、私がまゐつて、それを聞くと、貴郎が一番、仲間の中でも、ぐうたらさんにちがひありませんわ。これから毎晩のやうに御茶屋通ひでせうね。若し貴郎がいつ迄も私が羊のやうにおとなしくして、夜遲くまで貴郎のお歸りを待つて居るとお思ひなさると、飛んだ見當ちがひで御座いませうよ。誰れがそんなことをするもんですか。また假令お歸りなすつても、戸なんか明けてあげないわ。いゝえ全くのことですよ。そして女中も起して置きません。それに貴郎に鍵を渡して置きはしません。若し夜分に戸を閉めて鍵をかけないで置いて御覽なさい。それこそ泥棒が這つて、私殺されたりなんかするのは厭で御座います。フウ。プツ〳〵、まあ何と云ふいやな煙草の匂ひでせう。堅氣の女は、この匂ひを嗅いだ丈でも、もう死にさうに思ひますわ。貴郎は私が煙草嫌ひだと知つて、わざとお困らせなさるのですね。何ですつて？ 自分は煙草をのまない？ それがどうしたんです。煙草のむ人たちと一緒に居らつしやれば、矢張わるいことは同じぢや御座いませんか。未だ男らしく喫つた方が優しですわ。外で他所(よそ)の人の煙草の烟や匂ひを着物に移されてお歸りなさるよりは、いつその事、喫つた方が宜いでは御座いませんか、ねえ。

この嬌瞋を『艶氣蒲燒』の主人公艶次郎が味つたら、喜びの餘り、氣死したかも知れない。ジエロルドの『帳中說法』と東西暗合したやうな味を出して居るのは、三馬の「亭主を尻にしく女房の癖」である。この方は、コオドル夫人よりも一段手嚴しい。傳公と呼ばれる男の女房が、思ひきり、嫉妬の口說を續けて、傳公を一擒一縱するのである。

トン〳〵〳〵、あけてくんな。女房の寢そびれた聲にて〇たれだ〇今歸つたよ〇誰だよ〇俺だはな〇俺と云つちやあ皆俺だ、名を云ふがいゝ〇コレサ〳〵俺だはな、あけてくんねへ、といふ聲にふせう〳〵起きて戸をあけ、又直ぐに夜着の

中へころり○俺は女房に向つて丁寧なる挨拶なり。そつと這入つて戸をはづし、こし障子とはめかへて上へあがり○コウお平、默つて居る。コウコウコレサお平、堪忍しねへ、ゆうべはよん所なくの○久しいよんどころなんだよ、聞きたくもねへ、よん所あつて夜泊をする奴は見たことがねへはな、勝手にしな、てんぐの世帯だから○さう云つてくれる事はねへ、全體吉ツ子がの○やかましいはな、何だといふと、友達の名ア出してからに皆おめへがわりいよ、友達のわるいことは一つもねへ、いやだと云ふものを首玉へ繩を付けて曳いてゆくものはねへはな、そして何處へいつたのだ○ヱ何よ○何處よさア○ヱ一寸あすこ迄○一寸なら泊ることはねへはな、何處だよ、云はねへぢやあ合點しねへ○何よ、なんだはな、アノあすこのソレ。何の、あつちよ○きりぐ云ひな○いゝはな、云つたつて初まらねへ理屈だ○うんにやはじまるよ○ゆうべ龜の内で呑んでゝ、それからアノ何が、アノ、何がソレの、今からちよつくりつき合つてくれといふのよ、それからソレ、俺もなんだけれど、ソレ何かどうも○なんだナ、人の氣も知らねへで、可笑しくもねへ、もういゝはな、聞かすとも知れたもんだ、隨分そりやもう働きがあるなら行くがいいのサ、女房にすごされてゐるやうな男で、夜泊りは勿體ないからうよ、マアゆるぐ云つて聞かせやせうから、火でもたきつけて、水でも汲んで來ねへ。

俺公が少さくなつて恐縮して居る樣子、女房が頭から俺公を手強く抑へ付けて憤々して居る姿が、この會話で想像せられる。下等社會に往々よく見る山の神氣質の發揮である。『博學婦人』のフイラマントなどに見る趣と共通する一脈があつて、而も非常に味がちがふところがある。

『マンチヨオゼン旅行奇譚』を中心として

私は三馬について少し語り過ぎた。私は一九の『東海道膝栗毛』について語らねばならぬ。が、それは餘りに月並に墮する嫌ひがある。寧ろ旅行、地理を中心としての笑の文學について一言した方が興味を添へよう。この方面では、京傳の『小人數國殿樓』馬琴の『夢想兵衞』遊谷子の『和莊兵衞』スヰフトの『ガリヴア旅行記』それから作者の名を忘れた『マンチヨオゼン男爵旅行奇譚』などがある。

『マンチヨオゼン旅行譚』はすべて奇想天來の作である。すべてが空想の所産で、異常の極に達した冒險が續く『膝栗毛』が平凡事の錯誤、矛盾から笑を創造してゆくのとは餘程ちがふ。

マンチヨオゼンは、セイロン島で獅子と鰐に包圍せられた。ま

た彼れは騎馬旅行の時、狼の一群に襲はれた。マルセイユ附近の海上では、大魚に呑まれた。が、彼れは幸運にも、それら災厄から免れることが出來た。それらは、すべて喜劇化せられた。鰐であり、獅子であり、狼であり、大魚があつたからだ。彼れに迫つた獅子は鰐と爭つて、猛烈にその方へ飛びかゝり、鰐の巨口へ這入つたので、その隙に彼れは危機から免れた。彼れを噛もうとした狼は、誤つて彼れの馬の腹部へ喰ひ込んで、彼れのために鞭の柄で衝かれると、狼狽して馬の屍を筒拔にして馬具の中へ頭を入れてしまつた。また彼れが大魚の口中へ呑まれた折は、勢よく咽喉の方へ飛び込んで、胃中に躍り入つてしまつた。そして大魚の腹中で舞踊して、外へ突き出ようとした。大魚は苦しさに堪えかねて、直立して水面へ頭を出したところをイタリイ商船の人々に銛で殺された。そして商船の人々がその腹部を切り割く時、「早く助け出して下さい。」とマンチヨオゼンが叫んだので人々は驚いた。彼れはそれについて「私が直立の姿勢をとつて、魚の腹の中から歩き出した時は一同、眼を廻さぬばかりであつた。要するに私は諸君に話す通、前後の始末を彼等に打開けた。彼等は呆然として默つて耳を傾けた。」と云つた。かうした彼れは、北極探檢の時に白熊に化けて、白熊を剌殺したことさへもあつた。それらは、畢竟、法螺先生を諷するための假空談である。

奇想天來の意味では、スヰフトの『ガリヴア旅行記』は、「マンチヨオゼン旅行譚」に及ばぬかも知れぬ。が、大人國、小人國などを假構して、ジヨオジ一世の時代を諷刺したところに特殊の味があつた。馬琴、遊谷子のものも、相應の意義と諧謔の趣致があるが、私は京傳の『小人國』の他愛なさに共鳴する。「方寸の都の賑ひ、蛤貝の中にのぞきからくりを仕込みたるにひとしく、市人の行きゝは芥子の實を散らせる如く、すべて家居はうどをもつて造る。うどの大木とは此國の青草とかや。他國にてはかゝるうどの材木をよごしにして喰ふそうじやと此國の人は常に恐れゐるとの事なり。」と說明したところに京傳一流の才氣が見える。「この國は他國の蚤の意氣といへり、そのほか腹の草にて舟をつくり、小楊枝を帆柱とし、耳かきを楫杓に用ふろたぐひ多し。」と云ふなど、小人國らしい氣分である。

それにしても、私らは結局、『膝栗毛』に一番深い親しみを感ずる。北八が越中褌を手拭と間違つて被つた話、それから水風呂を過つて踏みぬいた話、木賃宿で天井を踏み拔いた話、夫婦がとろゝ汁の中ですべりながら喧嘩した話、京女から梯子を買つて持て餘した話、彌次北の二人が損料借の衣裳で、大阪新町へ遊びにいつた話、古布子を着た北八が祇園を歩いて藝者らに笑

はれた話など、一九獨特の笑の繪卷をそれからそれへ展開してゆくところに頤を解かす妙味が溢れて居る。そのすべてが純日本的な笑の源泉である。

春が來た、春が來た。笑を象徴する春が來た。笑はう、腹の底から笑はう。笑つて春風に吹かれながら、モリエエルの喜劇を讀もう、漱石の『吾輩は猫』を讀もう、獨自のヒユウモアを湛へて居る紅葉の『多情多恨』の一節や『八重襷』などを讀もう。また緑雨の『覺え帳』や『控え帳』などを讀もう。鯉丈の『八笑人』、『和合人』金鵞の『七偏人』などをも讀もう。それらに飽いたら、私が最も愛する黄表紙、洒落本の笑の國に遊ばう。そこで一九が描いた假仙人と鯉丈の作中に乘り、鶴の翼に跨つて遊ぶ世界を空想したり、京傳が考へ出した韋駄天の守を胸に着けて、大鵬に乘つたやうな心持で、一時、千里を走る戀の若き男女を思つて見たりするだけでも、私は自ら微笑せずには居られない。

遊蕩生活と浮世繪

織田一磨

一

私は或る詮議の筋があつて遊廓の青樓に食客となつて住み込んで居た。こう言つても何も盜まれた主家の寶刀でも詮議する爲に我身を俏して忍び込んでゐる漂泊の畫人、實は何某とゆふような芝居氣分を多くもつて、奥の一室に花魁と一緒に世を忍び、曲者御座なれと目を皿のようにして見張つて居たのではない、最初は當世遊蕩者の遊び振り見學のつもりで好奇心と未だ知らぬ遊里の生活を實地に踏みたいとゆふ位にすぎなかつた、それが後にはやはり私も何か詮議でもしなければすまないよう

な氣になつて、差當り粋人らしく女の姿、女の生活とゆふ方面に視線を向けてみることにした、でも要するに食客の事であるし旅先の時間つぶしの仕事に他ならぬのである。

其詮議の要點とゆふのは浮世繪とそれに秘められた遊蕩的氣分の研究とゆふような至つて下賤な業にすぎなかつた。先づ試みに私の記憶に在る三枚續錦繪、香蝶樓豐國筆……三代豐國……「見立源氏花之宴」とゆふ光源氏遊蕩の圖を今更らしく擴げてみると、中央には主人公の源氏が片手に酒杯をもつて片膝を立ててゐるとその源氏に寄り添つて花魁が徳利を持ち片手を源氏の膝に置いて酌をしてゐる、すると其反對の側には黑紋付に裾模樣の花魁が天井を眺めてもの思はし氣な顔をあげてゐる。其背後からまた一名の花魁が立つてそれを見下して居る、圖の左端に近く二名の吉原藝者が今や三味線の調子を合せようとして糸卷に手を掛けてゐる、藝者の帶にはさんだ象牙の撥と三折りにした懷紙なんぞに迄作者は情味をもたせ氣分の統一を謀つてゐる。藝者の着物は花魁との對象上如何にも生粋の江戸好みにして澁い柄で揃へてゐる、江戸吉原の意氣をうかがふに足るもので總て豐國の通人らしい感じをみせてゐる、遊蕩兒源氏の前には桶に入れた「すし」や大皿に盛つた刺身、重箱に入れた玉子燒なんぞ都合よく配置して正に遊興の初まらんとする有樣を注意深く表現してゐる、其大一座を前景として、背後は廊下をへだてゝ妓樓の全景を浮繪式の特別遠近法に依つて表され、中央の中庭には櫻の老樹四五本今を盛りと咲き匂ひ、暗い紺青の夜空に如何にも美くしく眞白に浮き出して見せ、遊び疲れた客の二三が今更のように花を眺めやる有樣を加へてげ、廓の夜の哀愁の氣分らしいものを漂せてゐる

方形に建てられた妓樓の各室は既に障子を閉め切つてゐるが、まだ障子を開放してチョン髷頭に片手を上げ女に酌をしてやる男や、赤い襦袢一つになつて踊る男等を小さく描き入れ、二階も階下にも長い廊下に人影もない夜更けの妓樓の有樣を見せてゐる。全體の感じからみると非常に華かである色彩の内に、一面淋しい官能生活者の心の裡に流れる一味哀寂の感情とゆふようなものを表現して居る、尤も豐國がこうした近代的デカタン生活者の心理を表現したのでは勿論なく、不用意の内に偶然にも流露した情調にすぎない、殊に豐國の注意の程をうかがふには其色調を出來るだけ單調にした點であらう、赤と黑とゆふ配色で前景を描き、背景を紺青の空と淡黄の妓樓と純白な櫻花のマスクから成立せてゐる、此の何でもない浮世繪畫の配色もやはり豐國は芝居の舞臺面上の効果にたらつて極めて印象的に表現してゐる、然し欲を言へば源氏の主人公に芝居でみるよ

うな派出な衣裳を着せてゐるのが何となしに散漫な氣がしてならぬ、三代豐國は通常人の生活を描寫する際でも常に芝居氣分を忘れない、これが爲に時に大變構圖上に利してゐる事もあるが、多くは大體の氣分とゆふものを損じてゐる傾がある。

人も知る如く三代豐國は名を源氏の生活に借りて當時の徳川大奥の淫蕩生活を描破してゐる、徳川の官能生活、歡樂極まりなき肉慾の有様は光る源氏の圖となつて豐國の作に遺り「田舍源氏」となつて種彦の文章に其俤を止めてゐる、豐國の田舍源氏挿繪の如きは當時既に問題とされた位官能的描寫を極めたもので、現今でも風俗上面白からぬものとして其筋から挿繪の復製を禁じられてゐる、斯くの如く豐國の遊蕩圖は彼れの生前既に定評を得た實感挑發的の効果に富んでゐた、現代に至るも人心を刺戟する生氣潑剌とした魅力をもつてゐるものとみて差支ない。遊蕩批家として豐國は一方の旗頭に舉げて然る可き人であらう。然し私に言はせると彼れもまだ何分か世間態を遠慮して自己を飾つて描いてゐる容子がみられる、何故とゆふに豐國でも春畫になると一層その面目を遺憾なく表現して、作品と彼との間がいよ〳〵密接になつてゐるように思はせ、色彩の如きも良く一致して盡きる事なき歡樂の交響樂を奏してゐる、私は源氏の遊蕩生活を描寫する上に彼が斷然と遠慮と僞善とを取り去つて思ふ存分に描寫したならばそれこそ立派な遊蕩圖が出來たらうと想像する、何も人物の姿勢を自由にしろとゆふのではない、人物の表情を遊蕩的にしろとも望むのではない、勿論人體を變なポーズに直せば徳川時代に於ても發賣禁止になつて了ふ恐れがある、茲に私のゆふのは氣分を遠慮なくする事である、そうすれば更に一層遊蕩的魅力とゆふものが畫面に流露したであらうと思ふのであつて、自由の立場に歸つたならと言ひたいと思ふ、色彩の如きも春信や歌麿等にくらべると下品であることは言ふ迄もない、元來此時代の浮世繪師は下品な人格の者が多かつた、それを世間態を飾つて上品振て居たが爲に反つて作品の効果を弱めてゐると私は言ふのである。國芳のように職人をまる出しにする方が可愛らしくもあるし面白くもある、「見立源氏花之宴」の主人公も光源氏なぞにせずと並の遊野郎とてし描けば適切なばかりか何も芝居がかつた着物を描かずともすむ譯で、日常生活にも密接になつて來る、徳川の大奥を描寫するならば吉原の妓樓に將軍を置くのは餘りに不調和であるし、表題に見立とあるからはやはり平民を源氏に見立たのであらう、此邊が曖昧で豐國が大分損をしてゐると思はれる所である。

彼れが國貞時代の作に「今樣源氏紳卷若紫の君もうけの亭に移り給ふ」と題された三枚續がある、これ等は純然たる家齊將軍

のデカダン振りを充分に描破したもので、見立の圖柄でないだけに統一した調和を認めることが出來る、圖は大奥の庭園の廣々とした池に懸渡された立派なる橋上に、源氏に手を引かれながら十七八才の濃艶な紫の方が島田髷に鹿子のきれを掛け、花簪をさして友染の振袖を着て赤地錦の帶をだらりと結んで片手を口もとに當て夕暮れの空を飛び行く鳥でも眺めるのであらう天の一方を見てゐる、源氏も片手で紫の方の手を引き、片手で空を指し示してゐる、主要な二人の人物を中央に描いて、左には座蒲團を持つた腰元が座してやはり空を眺めてゐる、腰元であらうけれども髮の結ひぶりから着物の好み迄どうも御殿務めをしてゐる女とは見られない、また右方にはやはり腰元と思へる十八九位の女が兩の手に男の人形をしかと抱いて片膝立つて座つてゐる。其背後に年増の奥女中がお刀をもつて立つてゐる、この女中だけは如何にも御殿の女中らしい姿をしてゐると首肯させる、年増女中の感じは如何にも性的の惱みでも藏してゐるらしい深い容子に受取れる、腰元らしいのは或はお妾の内に屬する種類の女性で何分か紫の方に羨望と敵意の視線を向けてゐるようにも思へる、背景は廣々とした池をへだてゝ向ふに築山や中島や橋なぞを配して池に臨んで離れ座敷が遠見にある、源氏は今紫の方を連れて其處へ移らうとしてゐるのである、總て徳川大奥の庭園夕暮の體に良く描いてゐる、良くとゆふのは此の場合藝術的にとゆふ譯では決してない、誤解されないように、私の良いとゆふ意味は遊蕩的氣分が良く描けてゐると言ふことに他ならぬ、前に擧げた圖よりもこの方が餘程肉感的の氣分が遠慮なく表現し得てゐる、

やはりこれと同じような圖柄で國芳の作品があるように覺えてゐるがそれなぞは問題にならぬ散漫のものであつた、

二、

三代豐國はこれ位にして時代を逆行して初代豐國の遊蕩圖として試みに讀本の插繪を思ひ浮ばせる、山東京傳作初代豐國揷繪の「女達磨」の内に泉州堺高濱の遊女地獄大夫と浪花の男達一久の二人が地獄大夫の本部屋で火鉢を中に兩人酒くみ交してゐる圖を朧ろ氣ながら考へてみよう、此圖なぞは實に良く遊蕩氣分なるものを描破してゐて、眞に遺憾ないものと思はしめる、殊に細密の描寫は表情から始まつて道具類のデテールに至る迄寫眞の極致を發揮してゐる、一本の蠟燭の灯にまでも細心の注意を拂ひ、全般の調子を破らぬように描いてゐる、殊に背影の積み重ねられた夜具から横に寢せた三味線迄も如何にも花魁の本部屋らしく明瞭に描寫してある、然し何處をさがし求め

ても夜闇の陰影らしいものはすこしも表現してない全く平面的に描き成されて至る所細筆を振るつてゐるのに不思議にも肝心の夜るとゆふ感じは充分に現れ出てゐる、若み大抵の畫家ならばこんな描法を執れば氣分も感じも皆逃げ失せて地獄大夫も一休も白け渡る筈であるのに、豐國はこの遊蕩氣分だけは忘れずにむしろ不用意の裡に自ら流露してゐるとでもゆふように、遺憾なく浮み出してある、此處が偉い所でまたこの圖の生命のつながる所である。

色彩の無い素描だけの殊に藁本の擦繪に過ぎないこの一圖にも充分に作者の感能的な氣分が描寫されてゐることは考へなければならぬもので、浮世繪の魅力がもつ獨自の頂上である、愛慾描寫の浮世繪が得意の境地も此處に存在する、一歩間違へば下賤な畫に墮落しそうな男女遊蕩の圖を扱つて斯の如く立派に藝術味を保有して然も嚴然と存在することは容易な業とは思はれない、單に美人を描くのと違つて、男女の特殊な情景を扱ふことは難かしいうちにも更に困難な一事に屬すると思はれる、單に戀愛を語る男女の圖は今日も尙屢々見受けるもので珍とするに足りないか、遊廓とゆふ特殊な範圍に生活する職業婦人を相手とする遊蕩生活は元來目的が氣分情調に無くむしろ本能生活の露骨な表現とみて差支ない、此の世界に花魁なる性慾の對象婦人を相手とする頽廢した遊冶郎の酒盛りの一場面は想像するだに濃厚な性の匂ひが高すぎて、繪畫として取扱ふに足る題材とはなり難いものであらうと思ふ、豐國はこの難關を切ぬけて、然も寫實的の立場に在つて些しも下劣な所を見せないのは本版とゆふ特別の藝術の力も助けては居るが流石に大家たる資格に反して居ない立派さを示して呉れる。

芝居繪をもつて鳴て居る初代豐國もやはり浮世繪師たるの本質を忘れることなしに、愛慾描寫に得意の筆を振つてゐる、けれども彼れの描く人物の表情は全く舞臺面の役者の顔になり切つてゐて、この邊が何分か現代の我々に首肯し兼ねるものがないではない、

元來浮世繪の本流が男女遊蕩生活に其源を發してゐたことは彼の又兵衞作と傳ふる有名な彥根屛風の圖をみても明かなことで、つまり性慾の基調に藝術の根柢を置てゐる、民衆藝術を表面にふりかざして人間の本能深く切り込んでゐる浮世繪は男女遊蕩の圖を描くに其極地に到達した、實際我々の心の奥に祕められた愛欲の氣分に至つては各人共等しく否定し難い所で、これは勿論人間らしい當然の存在としてすこしも怪しむに足りない事實である、この國境を絕した境域に立場をもつた我浮世繪は屢々其本體を現して畫の表面に單的に描出されたものが男女

遊蕩之圖である、私は春宵千金の價ひをもつて吉原の櫻花を眺むる遊野郎の心はつまり浮世繪師その者の心であると言ひたい。

三、

三代豊國、一勇齋國芳、池田英泉の時代から逆行して喜多川歌麻呂、鈴木春信、それよりも古く勝川春章、奥村政信、いくら逆行してもやはり浮世繪師の總てが女の姿態を描くと共に多少共この遊蕩生活を扱つてゐる、有名な英一蝶の淺妻船の圖なぞは遊蕩生活のブル化されたものであらう、奥村政信の「寶船」の圖も正しく遊蕩生活圖に相違ない、一人の寢そべつてゐる男を中心に四人の女が三味線をもち、紙へ字を書き、船の棹をさす等其態度からして源氏遊蕩の圖と同じ意味のものであるが、然し圖は遊蕩の條件を備へてゐても氣分はすこしも現れて居ない、古い時代の浮世繪は政信に限らず描寫の幼稚から來る欠點？とでもゆふのか、寫實が足りない爲かとにかく感情とゆふ方面は表現されてゐない、女の脛を大根と同じ様に扱つた春信なぞも上品かも知れないが、本統に立派なのかも知れないが私から言はせると、詮議の筋が違ふのでこの場合上品ぶつたものなんぞ問題としてゐられない、それよりも錦繪衰頽期の迫られた遊蕩氣分の檢出に忙しいのである。

東北の亞歐堂田善なんぞも隅田川を背景とした、男女遊樂の圖を描いてゐる、銅板の技巧はこの有様を描破するに餘り適當とも思はれないが、彼れもまた浮世繪の例にもれずこうした時流に投じた、題材を求めて失敗をしてゐる、一勇齋國芳は得意の壇上とばかりに勇み立つて、隅田川に浮ぶ屋形船に猪牙船に、兩國橋大花火が暗の夜空に五色の星と散る時公然と然も艷ぽい美女を乘せた遊蕩船が大河の流れも澱むばかり棹さして眞夏の大江戸の廢頽味を漂はせてゐる、納涼船はつまり吉原の青樓と同じ意味をなし、倘より以上の効果を納め得てゐる、河水に酒杯を洗ふ女の手に、片膝を立てた裾のあたりの紅色に國芳は得意の情味と共に浮名を隅田の河風に吹かせてゐる、要するに浮世繪一派の畫人は好んで男女遊蕩の圖の製作に努力して居たと言へば足りる事になる、風景畫家一立齋廣重は道德的觀念の强いためか、それとも人物畫は拙劣であるのを自覺してゐた爲かあまり此方面の作品を見當らない、彼れの作「江戸土産」には吉原の妓樓並ぶ仲ノ町を描いてゐる、當時江戸生活者の樂園とされてゐた吉原遊廓を無視することは「江戸土産」とゆふ名に對しても彼れの常識的な立場が許さなかつた、如何にも義務的に仲ノ町の夜更を多くの素見客がそゞろ歩きしてゐる様を描い

て中譯をし、見返り柳衣紋坂の光景に彼得意の淋しい詩趣を現して、仲ノ町櫻樹には娼家の屋根と櫻花に淡雅化してゐる、彼れの「新選東都名所」新吉原には土手の夜景を國芳の「東都名所新吉原」の圖と氣分を似ねてゐる、けれど廣重は國芳の敵ではない、國芳の吉原土手に漂ふデカダンスの情調は、廣重に至ると全く欠けて、只硬化した道德觀が現れ出たに過ぎない、私はこの二枚の比較を甚だ興味ある作者内生活の研究資料にしたいのであるが、記憶が明瞭でないので他日のことに殘して、國芳の描く美人が濃艶に肉感的に表現をしてゐるに反して廣重の描く女は皆どれもこれも色も香も枯れ果た硬化した肉體と情味もない官能脱落した女を描いてゐるのが面白い、不思議なのは廣重も男性として當然女性に對して或る魅力を覺える筈であると思ふのに、それに時代が時代だけに如何な廣重も官能的に廢頽的に傾く筈だのに、廣重の變に僞善者振つた生活が期せずして斯くあらしめたに相違あるまい。國芳に次で英泉も亦肉感的描寫の勇將である、英泉の遊蕩之圖は思ひ出せないが彼れが好んで描いた大首物の美人や春畫の何枚かを記憶に照して私は英泉の遊蕩圖を想像するに無理をすこしも感じない。

浮世繪論者の叫ぶ所謂衰頽期の版畫になればなる程實感的の調子は高められ强められて來る、其變に派出な生な色調は一向に精練されてゐない性欲そのもののシンボルのように、觀る者に强烈な刺戟を與へずにはすまさない、赫然たる春畫よりも風に翻る裾の間から紅い湯袴のひら／＼するあたり正に春畫以上の實感が現れてゐる。國貞の門人國直なんぞも「廓」の圖其他の人情本挿繪に彼れ得意の遊蕩圖を描てゐる、デリケートで實寫性の確實な國直の筆端は娼婦の日常生活を如實に精寫してゐる、其筆力は桃色のような春風を卷き起すに遺憾ないものであらう、人心を恍惚の境に誘惑する其魅力は恐ろしくも怪しい素描の力である、性の躍動は明治になつても益々盛んに興奮して「異人遊興の圖」となつて現れ出した。新奇を好む人々の間に賑やかに受けられた、横濱岩龜樓の遊女と紅毛人の遊蕩生活は當時奇妙な對照と思はれたに相違あるまい、硝子窓や硝子器、テーブルに變なイス、藝者も娼妓も折腰掛ての散財ぶりは今見ても異國情調な香が高い、それから芳年もやはり二枚續の男女繪を描いた、芳年になるといよ／＼肉感的に成るばかりで下品は益々其極に達し色彩も其度を加へて强烈になり、其れと同時に遊蕩の氣分は消え失せて反つて怪異な神秘さを加へて來る、北齋の春畫のような慘酷なものでなしに、變な反感的の情味が出てゐる、これなぞは作者の目的に添はない思はざる結果に到達したものと言へよう。芳年に次で芳幾も筆を執つて「春色三十

六合席」なんぞの美人はちようど小林清親の版畫と共通した、明治初年の女を描いてゐる、でもこれは只情がある繪位のものである、其他にも擧げれば切りのない位に例證は在る、浮世繪全般に渡つて遊蕩之圖體諧者に擧げねばならぬ、浮世繪と遊蕩とは切つても切れない浮世繪の基本財産とも稱し得る唯一の財源である、此の世襲財産である所の男女遊蕩の圖は、又兵衛彦根屏風以來浮世繪作者が一樣に受次いで來た寶物であらう、明治初年芳年芳幾に至つて一先づ浮世繪の斷絕と共にさしもに汲めども盡きないこの源泉も放棄されて再び振り向く人もなくなつてゐる。

私はこの源泉に醉つて居た昔の浮世繪師の生活なるものは眞に正直なものであつて、實際に於て徹底したデカタンの佛を備へてゐると思ふ、廣重のような人は別として正直に自己を表現した者は幸福な生活をして居たろうと思ふ、

作品の藝術的價値批判はこの場合問題として此文を書いてはゐない、まして歐米人の定めた評價なるものに私は何處迄信頼して耳を傾けていゝのか今日も尚不安を感じてゐる、決して彼れ等の言に誤魔化されはしない、されば歌麿にしても寫樂にしても良いのは私も異論はないが、其れと同時に徳川末期浮世繪衰頽期の作家、國芳國貞英泉英山國直及び明治の作家芳年芳幾等も私は特殊の方面からして價値を認める者である、全盛時代や初期の作品には散見し得ない廢頽的の香は後期所謂衰頽期の人々に反つて深刻痛烈に表現されてゐる、これが爲に「下品」といふ評を冠せられて浮世繪觀賞者からは劣等扱ひを受けてゐる、此の分類の仕方は勿論絕對的なものでなく場合に依つては、見方に依つては位置轉倒させても一向に差支ない筈だと思つてゐる、甚だ勝手な考へであつて遠慮す可きものかもわからないが私は現代版畫作家の一人として、やはり我流の觀賞法を捨て去ることは出來ない。

四

浮世繪師が立派に遊蕩の圖一枚を描くに就てはどうしても作家たる浮世繪師の可成深い體驗を經なければ出來ない、と言ふよりも浮世繪師の徹底した遊蕩性がかうした作品を産み出したと言ふ方が更に適當である。實際彼等の生活は遊廓を家庭の如く心得て日夜それに親み、或者は遊女と寢食を共にし苦樂を共にして居たのである、極端のようだがそれ位に言つても差支ないものらしい、歌麿の「吉原十二時」を描いたものや吉原年中行事を扱つた繪なんぞは親しく遊廓の人になり切つた者でなければよく成し得られないものである、通り一片の遊客の到底うか

とふ事の出來る筈の畫材とは思はれない。

青年期を吉原の附近で暮して居た歌麿が自然遊女屋を自分の家庭の如くに心得て毎日のやうに出入してゐたとゆふ特殊の條件が備はつてこそ彼れのやうな情熱的な作が成し得たとも言へる、英泉の如きは自身根津の遊女屋を經營して青樓の主人となつた經驗をもつてゐる、國芳の如きも屢々女郎屋で原稿の筆を執つた位の人で、道德的に言ふならば墮落し切つた生活に沈湎してゐた、それが爲にあのような立派な、立派とゆふと誤解されるが、痛切な女が描けたのかも知れない。

浮世繪の作家の遊蕩は私からみれば、過去の美術史を振返つてみれば、日本唯一の名譽ある美術を産み出した、眞に價値ある遊蕩とみねばならぬ、彼れらの生存當時は普の遊野郎と同じくすこしも特色のないものだつたに違ひない遊野郎實は日本美術の代表者何々とでも言ふような人々に依つて、女の肉體美の秘密はことごとくに其寶庫から奪ひ取られて了つた觀がある、其盜まれた女は勿論、知る筈もないが奪つて來た泥棒もそれ程立派な尊い寶物とは思ひも及ばなかつた、黑裝束の大男が大刀をひらめかして忍び込ような芝居がかつた鳴物入りでなしに、意氣な浮世繪師が筆一本を矢立に仕込んで半紙の寫生帖を懐中に押込んで夕方から出掛けた泥棒樣にちがひない、其れが今日我が國の美術を代表する偉い藝術家とはだれも氣がつかずにゐた、當人も職人仕事のように心得てなる可く世間の民衆に受けるように精々俗な風俗を寫生して歸宅した、寫生なんぞは後廻しにして酒でものんで醉つて花魁や仲居を相手に端唄でもうたひ一泊して歸つた位のもので、見返り柳も衣紋坂も氣にとめずに急いで逃るように歸路についた、歌麿なぞは何日も何日も雨の夜も風の日も、吉原仲ノ町に櫻を植える春から黑塀に綿のような雪がつもり浦里のような花魁が白魚のような指で手洗の氷を割る冬頃まで毎日官能的な筆を走らせてゐたであらう、浮世繪師歌麿とゆふのは世を忍ぶ假の名で實は女の生命を奪ふ大泥棒であつたのだ、世の中の人も自分も知らぬ間に女の生命は皆一枚の浮世繪の裡に秘められてゐた、奇術師のような浮世繪師の魔力は恐ろしいような、尊敬したいような神秘さをもつてゐる、然しこの偉人達も其の生活してゐた當時はやはり自己官能の滿足者にすぎなかつたのである。

朧ろにかすむ春の月を眺め、青柳にふる銀絲の雨を見ては女から奪つた寶物を人知れずに版畫の上に描き現はしてゐた、この地味な廢頽の畫人は、現代人のように下らぬ批評に耳を借さず、只一意專心に世上の受の良好ならむ事を希ひそれを氣にしてゐた、實行の意想外に良い時は出板元と共に喜び、もし苦心の

作が受けずに賣れもせぬ時は陰氣な顔をして、吉原にやけ酒でも呑み夜更けて夜鷹そばの立食ひでもした、それが唯一の慰めであつたらしい、美術展覧會もなく、批評家とゆふ者も居なかつた時代に、藝術なんぞと難かしい言葉に縛られずに自由に勝手に女小供のおもちや位に心得て居た自巳の作品が、やがて知らぬ間に海を渡つてゴンクールだのヅツコだのとゆふ偉い異國人に見出されて立派な藝術の殿上に異人さんと一緒に何世紀と部分けして祭り上げられて了づた、今頃は定めし迷惑にも眞面目な顔をして汗をふいてゐるであらう、そうして吉原の事でも思ひ涙を流してゐるであらう、氣の毒にもなるし可哀さうにもなる。

櫻咲く我日本はこれら浮世繪師のお蔭で今日美術上も立派に文明國の仲間入りが出來てゐる譯で想へば尊重すべきものは浮世繪師の遊蕩生活であつた。

二、

私は浮世繪を好む者でそれも花鳥よりも武者繪、それよりも風景畫、風景よりも役者繪、役者よりも美人繪とゆふ順序で、美人繪のうちでも單に顔だけ描いた大首物と稱するものよりも日常の生活を描いた繪の方が面白くもあるし好きでもある、日常生活の内でも男女戀愛の詩境を描へてゐれば更に私は嬉しく思ひ、殊に遊女とお客の遊蕩生活に我れを忘れてゐるような圖は夢中に惚れ込むくせがある、何故かと眞顔になつて問はれると返答に困るが、それに自分を分解して見ないから知る由もない、人間として男性としてこうした生活から何等魅力を感じない者はあるであらうかと先づそれからして反問しなくてはならぬ。私はこうした圖柄からは絶えず生氣潑剌として我々の血を搖り動かすものを感じる、これは徳川時代の浮世繪の生命が今も猶生活を續けつゝあるとゆふ動かすことの出來ぬ立派な例證としてみてもいゝ、凡そ男性である我々には女性に對して或る懐し味、温か味、愛念を感じない者はない筈であつて、すこしも不眞面目に思ふ必要はない道理である、私が浮世繪の遊蕩之圖を讃美する心は、勿論眞價以上に評價してゐると思ふが、何しろ惚れた眼には一切が美化されて映るのであつてこれは仕方のないものと思つてもらひたい。

私は浮世繪の遊蕩圖讃美者の一人として、また現代版畫作者の一人として、柄にもなく現代遊廓生活と浮世繪の關係論議の爲に頼まれもせぬのに實地踏査と近歩を進めたのは善か惡かそんな議論の出る場合でない、前にも述たように或青樓の奥座敷に一ケ月の日を暮しそれでも足りずに毎日通ひ約半年以上も青

樓に暮した、でも詮議の筋は充分に果されずに居るのは不甲斐なくも思ふが仕方もあるまい。扨て、現代遊蕩生活はどんな調子であるかとゆふに、現實的にみれば餘りにも物質的に傾きすぎてゐる感じはあるが、勿論遊蕩の本質に至ると一貫した不變性のもので現在も過去も將來も變化す可き道理のものではない、然し表面に現れた外觀よりすれば時代と共に變遷してゐることは爭へない事實である、光源氏の遊蕩之圖と同じく酒を呑み、藝者に三味線を持たせ、娼妓に酌をさせようと思へば何のぞうさもなくやれる話しで珍とするに足らぬ、廓の常識の内に存在する事柄である、只外觀的美觀から言ふと娼妓にしても花魁のように艶麗花の如き服裝をしてゐない、遊蕩兒もまたチョン髷でなしにオールバックにロイド眼鏡とゆふスタイルで金ボタンと來ては更に驚かされる、然し彼女がもつ心そのものは昔の人情本とすこしも變らぬものを今も大切に保有してゐる、道德的觀念もやはり昔と變らない程の傳質性を備へてゐる、曲山人の人情本「小三金五郎娘節用」の中に出て來る藝者小三と戀人金五郎の話し位は今でもさらに有る事である、小三は肉體的にも精神的にも完然に金五郎一人を守りぬくがあれは德川時代の小說に通例な道德で信ずるに足りないが、現代はこうした理想的の周圍でないだけに單に精神的とゆふ戀愛感に止まつてゐる、けれども彼女等の精神的は薄ぺらな女學生なんぞの精神的とゆふのとは撰をことにして實質の上に何段も上位に在るように思はれる、藝娼妓とゆふ浮薄な世界に生活する女性にもやはり自己の生きる道は嚴然として保有されてゐる。何事にも例外は澤山ある、それは見ないようにすればそれでいゝ、一人でも人情本のような人物を發見すれば私の目的は足りることになる、私の非常識の行動が仕合にも非常に尊い寶物の片影にふれる機會にもなつた、それと同時に一方には現代遊蕩者の甚だ非藝術的な、自己中心思想や、實質主義に逢着して幻滅の悲哀を痛感させられたことも一再に止まらぬ。

浮世繪の上にはあまり現れて居ないように思ふが德川時代からある時間と金錢の制度に就て私は今更ながら實に面白い制度だと感心させられた、時間と金錢を以て男女の遊樂に或る制限を設け、愛の切賣、愛の分賣を望む法則は如何なる偉人が創始したのか協定したのか、この約束は可成面白い產出をなす原因になつてゐる、元來男女の戀愛は時間と空間を絶した所に戀愛の境地は存在す可き筈だと思ふのに、この時間と空間を許す可からざる所に、嚴然と時間の制限を設け、時間を無視する者には金錢の約束を加へて、取締るに難いものを自由に取締らうする、私はこの約束にすこしの無理もないとは思ふが、如何にせ

ん皮肉の感じは禁る事が出來ないのである、矛盾の多い幼稚なこの制度を何も新らしく論じ立てる程の野暮天でもなし、德川時代からやはり此の制度にならされてゐて、後朝の別離に涙を流し、見返り柳に哀感を深めたのは良い意味にみれば廓を詩的境地にしたのである、これあるがために幾多の優秀な詩歌は生れ、浮世絵もまたこの制度のお陰で何分か畫材を富ませることを得たのであらう、飜つて考へれば最初にこの男女愛慾の世界に冷酷にも時間と金錢の制度を設けた人は餘程の偉い人であつたのであらう、逢ふは別れの始めとゆふ言葉も偲ばれて流石に一味の同情はだれでももてる筈である、情緒纏綿とした生活は一躍哀愁懊惱の世界に接續されてゐる遊廓の制度は頗る皮肉であり且つ立派でもある、此處に悲劇も起ればこゝに藝術もまた生れる、人間の生活位面白いものは他にない。

光源氏の富をもつてしても永久に櫻を眺めてはゐられなかつた、堺の遊君も一久と夜の酒杯をあんまり長くは傾て居られない、やがて朝日の光りは總ての情緒を斷ち切つて吳れる、夢はたちまち現實の世界に打つかつて、解決されて了ふのである。此の有限の世界を無限に延して樂むことの出來るのは唯鼓に浮世絵の力を賴むより他には仕方のないものである。大正の今日になつても豐國の筆に遺された源氏の君は永遠に片手に酒杯をもつてゐる、紫の君は池畔の橋上に立つて暮れ行く空に見入つてゐる、堺の遊君は常夜の閨に一久と語り續けてゐる、此處には時間の制限もない、歡樂は永遠の世界に時間と空間を絕して續いてゐる、私は言葉に盡されない藝術の神秘を感じる、無限に生る浮世絵の世界に救はれた光源氏は、理屈はとにかく現在私達の肉眼に立派に生きた姿を映してゐる

現在の遊廓には德川時代になかつた種々の生活樣式が加へられてゐる、浮世絵に描かれてゐない生活が存在する、これ等も廓趣味として確かに面白いに相違ない、私はこの新しい生活も見逃すことなしに細かに觀察して來た、然し其多くは未だ立派に統一ある美觀を成すに至らず中途半な所に在る、現在にあつては新制度下の生活は表現の美を多くもつて居ないように思はれる、それに私の論議の要點も主として新生活に無く、浮世絵の傳統を追ふのが目的であつて見れば他の事はこの場合見逃して然る可きものである、

平素の私らしくもなく傳統讚美だと笑はれるかも知れないが役目を帶びて身を俯して忍ぶ上からは、自分の好みなぞは別問題として片付てをかねばなるまい、現時の寫眞制にならぬ前の張り店をしてゐる頃の遊廓、その頃は今よりも更に浮世絵と近い線と色とを多分にもつてゐた、殊に江戸吉原でもない或地方

の遊廓であるから益々浮世繪とは遠く離れ去つてゐるらしい。然し地方なるが故に反對に舊態を留めてゐる所もまたある、言ふ迄もなく繪畫は浮世繪に限らず表現上の美に、つまり線と色に價値の大半は認めなくてはならぬ藝術である以上は、其れを破るものはどんな新制度でも双手を擧げ得ないのも尤もであらう、

幸ひにも現代の風俗は未だ浮世繪を甚だしく遠く離れ去つては居ない。女性の衣服、髮飾、器具調度、それ等にしてもあまり變化してゐない、私達は仕合にも今日猶多くの調和した浮世繪と人情本の世界に自己の心を放養する時間と期會をもつてゐる。殊に遊廓なる特殊世界に生活する女性には一般世間の女性に欠除されてゐる浮世繪趣味、人情本草双紙趣味を保有されてゐる。彼女等は多く無敎育なるが故に傳統を放棄して新しき生活に這入ることをせず、自覺して婦人の人格を高稱する事を知らず、やはり昔のまゝの弱い女性としてはかない望みのもとに生きてゐる、そこに美しいものがある、こんな事をあんまり書いてゐると社會問題を論じるように思はれても心外であるし。傳統讃美の御役目にも矛盾を生じて來る。漂泊の畫人は何時もやはり畫人で居なければなるまい。

鏡臺の並べられた娼妓藝者達の部屋にはまだ「辰巳の園」の插畫を見るような場面がある、殊に夏の眞晝間なぞは更に淫蕩的な空氣が充滿してゐる、國貞の筆はやはり生きてゐる、彼女等が鏡臺に向つて化粧直しをする姿は國安筆の「春宵辰巳の梅」の口繪を、湯あがりの半裸體に一生懸命に髮を直して白粉をつける時なぞは國芳筆の「琴聲美人錄」を連想する、お座敷の知らせに衣裳を着更る時は歌麿の筆を目の前に觀るような感じに打たれる、娼妓の風俗が昔の花魁のようならばどんなに幸福だらうとさへも思ふのである。……尤も京都島原の遊廓には昔のまゝの風俗が保存されてゐる由だが私はまだ一覽の折りがない……とにかく私が青樓生活に於て得た實際に依れば、廓内の女性が日常生活の表現する美親はまだ浮世繪を遠く去つては居ないもので、其内面的生活に至れば德川時代の人情本と全然同一のコンポヂションのもとに生きてゐる者も珍らしくない、茲に私の甚だ遺憾とする事は當世遊野郎の態度とその心得とである、彼等は眞の遊蕩氣分とゆうものを全く知らぬ、自ら詩の世界を破壞し蹂して平氣である。これはとても浮世繪に表現されたような味はなく同情も無くなつて了ふものである、とても國芳の筆になつた「東都名所新吉原」に出て來るような隆和の世界に生存する者は一人として居ないのである、現今遊廓等へ足を踏み込む若者は、極めて現實的な實利主義の我利〱亡者

の類であつて眞の遊蕩を理解してゐる者は樂にしたくも見受られぬ、これはどうゆうものだか、私は青樓の帳場に座して來る客を心ひそかに觀察し、そが遊興の有様を見るに至つて下劣さにあきれ返つたのである、彼れ等は到底藝術を解さない、リズムを無視した眞の本能要求者に他ならぬ、德川時代の文學美術に現された遊野郎に遠く及ばない僞者であると斷定を下す、時間の制限も冷酷な制度も何等若者を苦めずに役立つてゐる、現代の男性は理智の判斷のもとに自己の進退を決してゐる、されば當然の結果として商品化された女性の存在は認めるがその他の要素は全く無視されてゐるのが普通である、遊蕩は本質的になつた譯であらう、從つて浮世繪とは大變に縁の遠い生活が展開されることになる、詩的情緒は乏しくなつたのである、この分では如何に擧國でも現代遊蕩之圖は容易に描けそうにもない。

六、

歌麻呂の青樓生活には遠く及ばないし、それほど徹底しても居ないか、私の經驗によると遊蕩生活も人によつては面白いものらしいと信ずるようになつた「遊蕩文學」とゆふものは世にあると聞いたが、まだ「遊蕩美術」とゆふ言葉を耳にしてゐない、私は浮世繪は正に遊蕩美術だと言へるように思ふ、それを逆に言へば遊蕩は浮世繪的の藝術味がある、極端に言へば遊蕩は即ち藝術だとゆふことにもなる、

尤も但しこれは遊蕩を美化して觀察し得る人に限る、と添書きを付けないと間違ふ、文學の場合でもやはり其通りかも知れない、つまり藝術化された遊蕩は價値のあるものだと言ふことになる、歌麻呂傳の著者ゴンクールは「青樓の畫家歌麻呂」とゆふ言葉を使つてゐるとゆふ話であるが青樓と冠詞を付けられる位に歌麻呂は代表的の遊蕩美術家である、德川時代の遊蕩生活がそんなにも藝術的であつたのかとゆふに、恐らく遊蕩は遊蕩であつて德川も現代も本質に於て相違する筈はなく、やはり同様の内容を備へてゐたに違ひあるまい、只これに觸れる者の感受性と一般社會の觀賞的態度に依る事で現代のように道德的制裁の嚴正な時代に在つては遊蕩美術は許されないのかも知れない、僞善者の多い現代では遊女の繪なんぞ淫靡の極として賤められるかも知れない、でも活動女優の寫眞が賣れることを思ふと案外それほど嚴格でもないのかとも思ふ。

元來日本の美術が始めて世界的の藝術として認められるようになつたは浮世繪の御蔭である、これは大變に面白いことで日本の美術は遊女と遊野郎の性的生活から生れたのであつて、この事實は何人も首肯しなければならぬ、されば現代に於ても遊

蕩美術を否定する理由はない筈である、只こまることに現代では遊蕩美術として立派な作品を舉げ得られないだけである、眞に價値ある作品を出したならば今もやはり遊蕩美術の尊重す可き理由を認めるだらうと思ふ、これは浮世繪に對する人情としても傳統を尊ぶ精神からみてもその筈のように思ふ。

玆に甚だ理解に苦むことは今の浮世繪作家が現代風俗を嫌ひ、好んで德川期の風俗を描くことだ、こんな風潮は何か爲であるか、私なぞ淺學の者には一向に理解出來ない現象である、これは世間に對する遠慮からであらうか、自己に對する道德的制裁の發露とみようか、前者とすれば下らぬ遠慮であるし、後者とすれば僞善的行爲であらう、昔の女を描けば上品で現代の女を描けば下品であるとゆふことはない、女性を扱ふ上にすこしも變つた所はない筈だ、昔の風俗の方が澤山お手本が遺されてゐるから容易に描けるとゆふのならば一應御尤もと言ふことが出來る、でも藝術家としてそうは言へないであらう、現代風俗は天才でないから描けないとゆふのならこれも肯定する、私は僞善を棄て遠慮を放棄して藝者でも娼妓でも深刻に觀察して再び遊蕩美術をこれ等浮世繪畫人の手に取返してもらひたいと希望する。活動女優や歌劇女優を讃美する現代である、何も遠慮することはすこしもない、水茶屋の女や吉原の花魁等とやはり同じ意味とみて差支ないように思ふ、女性讃美は昔も今も變ることはないと言ふのだ、つまり愛慾生活の所産でやはり遊蕩氣分の發現に過ぎない、現代も德川も變らない女性讃美、愛慾基調の生活を皆首肯すると思ふ、徹底味に乏しいのと僞善家、道德家ぶる人が割合に今多いとゆふだけだ、昔の風俗の影にかくれて仕事をするよりも公然と現代愛慾生活の描寫に苦心するのが浮世繪作家の本領であつて價値であらう。

何はともあれ浮世繪の作家たるものは先づ遊蕩の藝術的價値を解さなければいけない、何も遊蕩兒になれとゆふのではない、理解してもらひたいとゆふにある、遊蕩とゆふと變に聞へるが男女愛慾の現象を充分に理解しろとゆふ理屈である、美人畫を描くほどの者は一般にそれに偏れる可きものである、作家の資格として先づ女性に向つて相當の理解の上に立つて居る必要がある、私は現代作家に遊蕩氣分の理解とゆふことを求める、昔の風俗を描くにしても現代風俗を扱ふにしてもこれが多大の原因となつて價値の分れる所となるように思ふ。今でも遊蕩は歌麿在世の當時とあんまり變らぬ藝術的價値を備へて存在してゐる。

七、

德川時代の遊蕩兒が産んだ世界唯一の浮世繪が存在する間は、それよりも女と男がこの世に存在する間は浮世繪なる特殊の美術に生命の消ることはない、廓に遊女と藝者の居るうちは何時でも浮世繪は我々の前に笑顔をみせて呉れる、この美の力は永遠に亡ぶことなく、また其魅力の無くなる時もあるまい、遊蕩生活は即ち浮世繪である。

こんな言葉を無闇に使ふと批評家に叱られるかも知れない。然し本統の所前述のように浮世繪は遊蕩美術である、遊蕩美術なるが故に其價値に變りはない、德川時代の藝術はいつもこの遊廓中心の藝術であつて、性慾基調の藝術である、これが爲にすこしも藝術たるの尊嚴を破ることはなく、直價に關係することもない、浮世繪作者の人格を批難する人もない、西鶴が好色本を書いてもやはり立派な文學であることに間違ひはない、劣等な行爲があつたにしても作品迄劣等にはなつてゐない、とれをみても藝術と敎育とは違ふ、藝術と道德とは違ふのである。

そんな理窟はどうでもいゝ、私は現代遊蕩生活からも何か生れてもよさそうに思つてゐる、とりわけ版畫をやる者や浮世繪の人達は傳統的にも廓美術が出ないとゆふ筈はない、現代の女から何か秘密の寶物を奪採る人は居そうなものだ、風景や靜物は版畫の本流でない、やはり人間、女性中心の藝術であらねばならぬ、愛慾描寫のものでなくては面白くない、それが版畫の浮世繪の持つ最も強い最も尊重す可き根柢を成す力である、浮世繪の生命である。私に言はせれば浮世繪を再び新しく現代遊蕩生活の内から發見することが急務だと思ふ、我々はこの仕であるか否かは自然と別の問題となるが、青年時代に放棄された靈泉を再び汲み出して新たなる生命の泉としなければいけぬ、浮世繪は惡の華であつて、見る人に依つては毒だと言ふかも知れない、遊蕩生活から咲いた浮世繪の惡の華はまた非常に麗しい藝術である、惡の華は美くしい、でも見る人に依つてはこれは毒にも藥にもなる。浮世繪は遊蕩生活の賜物である、この貴重な賜物も受ける人に依つては飛んでもない惡い結果になるかも知れない、要するに見る人の人格による、作家はそんな心配はせずともいゝ、

現代の遊蕩兒が彼の靈泉を汲み出して、惡の華を咲かせれば再び浮世繪の黄金時代が日本の地に來る。德川時代の風俗を追ふようでは生命ある浮世繪は生れない、現代でもやはり作家が歌麿のように泥棒になつて青樓に忍び込み、女の生命を奪つて來るだけの勇氣と熱心があれば靈泉の水は汲めどもつきぬ泉となつて流れる、昔の作家は自分の手、自分の心、自分の身體を犧牲にして生命懸で捕つて來た寶物なのだから、現代でも同

じように身を棄てゝかゝらなくてはこの寶物は得られない、浮世繪の眞價を正當に理解するためにもやはりそれ位の犧牲は拂はないと充分に理解出來ない、まして作家となつて此の名擧ある浮世繪を再起させようとするには一通りの努力では出來ない譯である、他人の寶物を盜み竊してゐるような者は永久に駄目な可哀想な者である。

藝術は熱心に求める者にのみ本統の姿を現して呉れる、畫室に居て先人の跡を踏でゐるような人や、先人の努力を只奪ふ人は決して立派なものを描ける筈がない、僞善者が不徹底の生活を營んだのでは到底何等の價値をもなさぬ道理であらう。遊廓に公然出入した浮世繪師の生活が不眞面目か、それとも藝術を商品の如く心得て反省しない畫家が不眞面目か、作品はその解决を立派に與へて呉れる、世評なぞに耳を借す必要はないし時間もない筈である、自己を知り、自己を信ずるものは自己である、浮世繪師等の遊蕩は浮世繪を立派なものに仕上げた、要するに浮世繪は遊蕩兒の産んだ藝術だ、日本を代表する彼等浮世繪師の遊蕩は今も尚光りかゞやいてゐる、右手に酒杯をさゝげ左手に女の手を握つてゐるこの遊蕩は永遠に消ゆる事なき日本の光りである。

十五、十二、一九二三

新帝都のスタイル

福永恭助

一　ビアード博士の美觀論

◇震災當時は往來や庭先きにも臥し玄米の粥も有難く啜つた身だ、神樂坂や道玄坂の灯を見て一時は世にも美しい街だと眼に映りもしたが、時經るに從つて心にゆとりが出來てくると段々贅澤な氣分も起きてきて、今日此頃になつて帝都復興問題がやかましく論ぜられるに連れて、都市の美觀といふ事を人々が考へるやうになつたのは誠に尤もな話である。

◇あの事が起ると、世間では俗に「大風呂敷の後藤」と稱へる處の、そしてその實ハンケチ位の大きさのケチな計畫しか持ち合はせの無かつた、その後藤東京市政調査會長兼復興院總裁の招電で逸早く、遙々と燒野ケ原に馳せ參じた市政調査顧問のビアード博士は、帝都の尊嚴及美觀と云ふ事に就いて次のやうな意見を、會長ゝ經て日本國民に披瀝したと云ふことである。

◇曰く『歴史の舞臺は大西洋より太平洋に移りつゝあります、日本はこの舞臺に於て立役を務めるでありませう。而して東京は多くの印象深い場面の舞臺となるのでありませう。それ故に日本の帝都が帝都としての特異性を持たねばならぬ事は極めて重要な事柄であります。貧弱なる帝都は列強の間に伍して國家の威嚴を傷けます』

◇又別に曰く「新帝都は如何なる價を拂つても氣品を備へることが必要である。而してその氣品と、帝都としての特異性を表現する形式は、日本固有の美術と建築とに據るべきである。日本の美術家と建築家とが日本の帝都を西洋風の設計と建築とを以て非凡なる品位を與へる點に於て歐米の美術家や建築家を凌駕し得べしとは信ぜられない。日本に於ける歐米の模倣の大部分は失敗にして滑稽であり帝都の權威を下降せしめまた外國旅行家に何等の興味をも與へざる結果となるだらう。今日の丸ノ内式は米國第三流の都市程度の品位しかない」と。さうしてその具體案として博士は左の四項を擧げて居られる。

一、凡ての新公共建築物に明白なる日本趣味を加味すること

二、凡ての新紀念碑を純日本式とし、西洋式なる石又は青銅紀念碑を斷然排斥すること

三、街路及公園の設計に際しては舊東京の美觀と品位とを出來得る限り保存すること

四、上記事項實行の爲めに日本美術家及建築家を委員として任命すること

◇上品で而も堂々たる都を造ることに就てはもとより私は異論はない。而して又、都市計畫に就ても、帝都復興に際しても心から東京のため帝都のためを思つて、該博な智識と豐富な經驗とを提げて、助言者としての最善を盡して下すつたビアード博士に對しても私は厚き感謝の意を抱いて居る者である。が併し新帝都を所謂日本趣味で飾れといふ所の博士の所說に對しては今遽に贊意を表する事が出來ない。

二　西洋人の批評

◇日本の愛好者として知られて居る或米國人が持前のフラン

クネスを曝け出して云つた。

『私の可愛い日本よ！ お前は何だつて又そんなに私達の眞似――而も下手な出來損ひの眞似なんぞをしたがるのだ？ 私は小泉八雲の本でかねがねあこがれて居たミカドの國を見物に來たのに、其處には最早私の望むものは一つも見られはしなかつた。猿眞似の日本人よ！ お前達は何故又、アノ美しいキモノを捨てて、お前達のやうな足の短い胴長に少しも似合はない洋服なんぞを着けたがるのか？ 歐洲の美術に革命を起さした雪舟や北齋の國の人が巴里指して東洋風でない繪の修業に出掛ける者何十人何百人といふのは、これは又どうした事か？ 私の國でも二流三流所のビルデイングや、文化住宅といつては安つぽい洋風擬ひの建築を建てて喜んで居るお前達の氣が知れない。自分自身の持物の美しさと價値を知らぬ今の日本人の情ないことよ！ 私達はもう今日、日本へ來て見且學ぶべき何物をも見出さない！』

◇世の所謂國粹保存論者達よ、かう云ふ風の偽らざる西洋人の批評を聞いて『それ見たことか、貴樣達のやうな外國かぶれの、西洋模倣屋の、その本家本元である處の西洋人こそ却つて此のやうに日本の西洋化を嘆いて居るぢやないか。西洋でも本當に日本の爲めを思ふ人は日本の國粹を賞めて居るのだ！』などと見當違ひの結論を作り上げてはならない。暫時私達の言分に耳を傾け給へ。

◇一番先きに考へるべきことは新日本の理想は如何といふことだ。新日本人は、春の櫻と秋の紅葉とさうしてフジヤマとヨシワラとゲイシヤ・ガールとミヤコ踊りとを見物に來る處の西洋人殊にお隣りの米國への落して行く小金を目當として東洋の隅に小さく生きて行くことを國是(?)とすべきや。それが爲めには東洋趣味といはうか彼等の謂ふ所の日本式特異性なるものの極端なる發揮が極めて必要であつて、觀光客の好奇心もそれによつて滿たされ、從つて國に落ちる金高も大に增して來る理である。それとも又柄にも無い謀叛氣を起して、泰西第一流所の文明國の行ふ所を我々行ひ而も尙彼等と伍して少しもひけをとらぬやうに、手つ取り早く云へば、テニス界の熊谷や球突きの山田浩二や洋畫の藤田君の如き行き方に倣ふべきやと云ふのだ。

◇我儕敬すべきピアード博士が、たとへ日本の風物を愛好するの餘とは云へ、其意見の中に「骨董品としての日本」を除り多く見て新日本の精神を深く了解されないやうな言葉を吐かれたことは殘念の極みである。はじめから『日本の美術家と建築家とが日本の帝都を西洋風の設計と建築とを以て、非凡なる品位を與へる點に於て歐米の美術家や建築家を凌駕し得べしとは

信ぜられない』と云つて博士は日本人の腕前を否定して掛つて居られるのでは いか。

◇尤も、打眺めた處鄙實歐米殊にヤンキーの貧弱た模倣たらけな此國を見ては、日本贔屓の西洋人が右のやうに思ふのは一應も二應も無理からぬ話であるが『歐米の美術家や建築家を凌駕し得べしとは到底信ぜられないから』といふ前提から出發して居る處の意 に贊成することは、たとへそれが眞實國粹保存の意義に適つて居ても、又日本人にその能力のあるなしは別としても、吾々日本人の到底堪へられる處ではない。

◇詮じつめれば、彼等異人の眼には日本人はまだ小供なのだ。小供は小供らしくして其特異性を發揮して居れば大人に好かれるのであ 。處がだ、日本といふ其小供がどうあつても大人の眞似がして見度くて堪らないのだから彼等から見て誠に始末に了へない。親父の帽子を被つてガバガバな靴をはいた態は滑稽にして失敗だと見へるかも知れない。併し小供本人はそれで居て仲々得意なのだからどうも致し方が無い。

◇その小供は物心が付いてから色々と大人の眞似をして見た。政治に經濟に教育に司法に軍事に。そして僞計りの取除けを除いてそれ等の大部分が概ね成功をかち得たのだから決して笑ふ譯には行かない。私の專門の海軍に就ても、最初は英國から御雇ひ教師を招聘して、西洋の眞似をして作つて見た日本海軍は、物の美事に支那もロシヤも打ち破つて仕舞つたのではないか。

◇其當時はまだ、立派な軍艦は國内では造る事が出來なくて外國殊に英國の造船所に注文するのが例になつて居たのだが、それが今日では扶桑、陸奥、伊勢、日向と云ふ具合に、凡て日本の技術家の設計と建築(?)とを以て造られつゝある計りでなく、遂には三大海軍國の一に位して、海軍休日（ネーバル・ホリデー）の前の最後の大戰艦「長門」及「陸奥」は設計工事威容共世界に冠たる代物だと迄言はれたではないか！

◇最後に與々もビアード博士に御斷りして置くのは、新帝都建設に當つて、新都が外國旅行家に興味を與へるや否やと云ふ事を餘り問題にすることを謹んで頂き度いと云ふ事である。申す迄も無く今日迄外國人の觀光客が年々我國に落して行つた金額は相當の高に登つて居るであらう。併し外人の落して行く金で暮して行くために、外人の好尚に迎合するやうな都市を作れと云ふことを思はせるやうな御意見を採用するには古來日本人の面は餘りに高い。ジヤパン・トーリスト・ビユローの仕事やお寺のやうな奈良ホテルを建てて漫遊外人の意を迎へて居る鐵道省邊りの仕事を見て日本人全體の理想を曲解してはならぬ。

而して又假令日本の現狀がその理想の半ばにも到達して居なくても。

◇要するに西洋人の批評といふものは一般に、己れを一段高い處に置いて——丁度大人が子供を見るやうな態度を以てなされた處のものであつて、せいぜい善意に解釋しても、日本をただ小さな可愛らしい國、自分達の好奇心や趣味を滿足させて呉れる處の珍らしい國として殘して置き度いと思つて居るに過ぎない。それは西洋人として誠に無理からぬ希望であり、尚又この程度の日本贔屓でも日本を理解する外人の少い今日では日本にとつて誠に有難い位の人達ではあるが、既に我國及國民を一段と見下げてなされて居る所の彼等の日本趣味保存論を聞いて百萬の味方を得たやうに自惚れる所謂附いの國粹論者こそは誠に以てお芽出度い限りと云はなければならない。

三　新日本の表現が第一

◇役者が西洋人である場合は勿論の事、たとへそれが日本人である場合でも、西洋に居て日本の芝居を見せつけられた時は誰しも一種いやな感じのするものである。それの原因は彼等の所謂日本風（ジャパニーズ・スタイル）と稱する風俗から來るのであるが、西洋人の役者の場合には多く日本人の生活に對する無智から、そして又日本人の演ずる場合には同じやうに無智な觀衆の趣味に迎合するために故意（わざ）と仕向けられた結果、登場人物の風俗習慣は恐ろしく畸形的な日本の代表である。吾々日本人の今日の生活とは勿論似も付かぬ場面であるが、さりとて歌舞伎に現はれるやうなものとも違つて居て寧ろ吾々には支那の樣式の濃厚な臭味がする處は、日本贔屓の西洋人が建てる日本風茶室（ジャパニーズ・ティーハウス）と稱する建築物とよく似て居る。

◇さて、舞臺に於ける此風俗や裝置が本物の日本とは似も付かないので、吾々日本人には物事を正當に表現して居ない處から來る一種いやな感じ——腹立たしいやうな心持ちがするものであるが、それで居て觀客たる西洋人には拍手大喝采と來る程充分滿足なのだから實に世の中は面白いものだ。

◇日本人としてこの變挺な氣分を味ふ一番簡易な方法は、今は丸燒けとなつて仕舞つたから何とも取り返しの附か無いが、震災前ならば横濱の辨天町邊りの西洋人相手の店へ行つて見ることだ。Japanese silk store とか Jspanese curios といふ看板のブラ下つて居る店には、勿論廣重や歌麿やのイカサマ物も澤山並んで居るが、それよりも日本人の眼にも curious に感ぜられるのはキモノと稱する西洋寢衣の出來損ひに「ヨコハマ繪」と稱する珍妙なペンキ畫である。

◇ビアード博士の謂ふ所の「日本趣味」がこのキモノやヨコハマ縮や乃至は奈良ホテル式建築物の程度のものであるかどうかは遂に私の知るを得なかつた處であるが、帝都復興に從事する官民諸君が若し、上記のやうな日本趣味を公共建築物にとり入れるのであつたならば、それは近代の堅實なる日本人の趣味の正當な表現としては餘程懸け離れたものであることを注告しなければならない。

◇彼等の「日本趣味」の多くは日本人にとつては實は支那趣味であつて、日光の東照宮のやうなゴテゴテした裝飾は簡明直截單純淡白を尙ぶところの吾々日本人の趣味とは本質に於て相容れない所のものであつて、其點で新時代の日本人は寧ろ泰西藝術の或物に多大 共鳴を感じて居はしまいか。

◇尙又復古的藝術の採用も此際斷然と斥けるべきである。何となれば今日の日本人は最早昔の日本人とは違つて居るから、それに對してハラキリ時代以前の藝術を望むのは望む方が無理である計りでなく、强いてそれを表現しやうとすればそれは何等の誠意も認められない力の弱いものになつて仕舞ふ筈である。虛僞は常に藝術ではあり得ない。

◇復興の大業に當る諸君よ。諸君の藝術的標語は新日本の表現である。而してこれが表現に必要なるものは、たとへそれが泰西藝術の採用となつて表はれて來たとて諸君は毫も悍る處はない。その昔吾等の祖先が摸倣した支那の藝術が、今日となつて多くの日本愛好者を驚かして居るやうに、他日諸君の採用した泰西藝術が換骨奪胎して世界に誇るところのものとなつて表はれ出た時に、諸君の子孫は諸君の達識と聰明に對して感謝の辭を惜しまないであらう。本質に於て特異性を持つ國民はやがては泰西美術をも日本化しないでは置かないから。

（十二年十二月五日）

凌寒魁春の意氣を表現する 梅花の賦

梅の賦

徳田秋聲

梅が竹や蘭や菊と共に四君子と稱せられて、飄逸な東洋趣味の花であることは言ふまでもあるまい。櫻は集族的に觀賞することのできる點で――寧ろ其の方が美しいので、花にも西洋趣味の入つて來たこの頃でも、親しみがある。さうでなくとも櫻がぱつとした華やかな美しい花であることは勿論で、花らしい感じがするのに反して、梅はその幹や枝ぶりが骨ばつてをり、硬い感じがするとほりに、花も雪片のやうな冷い感じを與へるところが、どこか親しみにくい點であり、一般に持囃されない所以であらう。しかしそれが又冱寒の頃、殆んど總ての花に先んじて咲き、梅の玩賞された所以で、高士の清節とか、詩人風韻とかに比べられて、文學の徒に謳はれるのであらう。幹までも岩のやうに奇しく老いたのが尊重され、どこか仙骨を帶びたやうに思はれる。梅も集族的に見られないことはない。月ケ瀨の梅などは、芳野の櫻と同じ意味で、集族的に玩賞されるのは言ふまでもない。私は名所の梅などを探つた經驗はない。せいぜい熱海の梅林とか修善寺の梅屋敷くらゐのもので、これも花の咲く時分ちやうどに行つたことはないが、それらは總て背境や環境が既に俗腸を洗ふやうに、幽雅にできてゐるので、月ケ瀨などは殊にも環境の俗塵を絶つてゐるところに、詩人の憧憬があるのであらうと思ふ。櫻も環境を必要とするのは勿論だが梅ほどではない。淺い山があり清い水が流れ、谿が幽靜で、人俗を絶してゐれば、それに越したことはないが、餘り人蹤離れし

てゐては、それはもう櫻にふさはしい背景とはいへないであらうに反して、梅は寧ろ塵俗を離れたところに、配合の趣きが現はれるであらう。勿論薫香の清いことが、この花の生命で、その匂ひが香水に適するか否かは判らないが、御香には梅花香とかいふのもある。闇の梅が詩歌にうたはれるのは、その匂ひのためである。

けれども私は人工的な梅林なぞよりも、純日本的な趣味から言つて寧ろ早春の野梅なぞを愛する。今ではあの俗な歌を詠んだ菅原道眞だの、それを祭つた天滿宮なぞを聯想させるのが厭だけれど、少年の頃、根雪がまだいくらか笹籔のなかに殘つてゐて、漸く地肌を露はした土のうへに、下萠の草が春寒の風にちり／＼戰く時分、私は長い冬籠りの炬燵に飽いて、三月の日の暖かなをりなぞに庭へ出てみると、雪に封されてゐた私の肌の弱々しく白じやけたやうなうちに、脈々として少年の若い血が燃えたたうとしてゐるやうに、梅の蘖なぞがすい／＼と素直にのびて、その下の方に簇生した蕾が五六輪も咲きはじめてゐるのを見ると、長い冬がもう終りを告げて、物の芽の育つ春の來たことが此上ない快い感じを與へる。私は何となし蓬勃たる少年期の旺盛な發育力に目のくらむやうな氣がしたと同時に、よく其の梅の匂を鼻にかざしめたり、小枝を折つて机のうへの一輪挿しにさしたりしたものだが、しかし町の一端から登られる山に登つて、草萠えの小徑を歩いたり、荒廢した菜地を横つたりしてゐるをりなぞに、ふと谷間の雜木のなかに鄙びた梅が瘦せた枝に花を着けてゐたり、又は椿や松杉なぞの青いなかに交つて白い瓊を綴つたやうに咲いてゐるのを見ると、何となく胸がすが／＼したものである。

詩の方は分らないが、今身邊を捜してみても、梅の俳句に餘り感心したのがない。

梅が香にのつと日の出る山路哉　　芭蕉
梅が香に酒の通ひの新らしき　　蟬鼠
小豆賣小家の梅のつぼみがち　　蕪村

などは較々梅の感じが出てゐる。詩では近江の湖上詩人祝希烈延耀の松雞山房集が身邊にあるだけで、其の中から

獨木橋西水ノ一方　訪レ梅未レ見近昏黃
斜穿二竹裏一如無路　忽入鼻頭知有香
雪片帶風吹帽角　烟梢挂レ月照二洄塘一
此時毛骨沁氷影　惱損先生鐵石腸

といふのを一つ見つけたが、餘り正面から詠んでゐるので風情は鮮い。

繪では廣田さんのところで拜見した支那人の幅で、參差錯落

たる無數の枝が何ともいへない爽やかな感じを與へたことを記憶してゐる。

梅花の賦

近松秋江

麗かに晴れて暖い正月二日の好い日も靜に暮れて、夜一と時蓄音機などを戯れて、やがて、此の間中頭腦のいそがしかつた身體を休めるべく、自分はいつもより早く電燈を消して、獨り二階の八疊の書齋に臥床に横はつた。そして精神を落着けてゐると、靜かな夜の冷氣の中に幽かな清香が通ふて來るのを覺えた。初は何の好い薫かと思つたが、すぐ氣が付いたのは、それは床の間に置いた盆梅の香が夜氣の靜まるにつれて室内に漾ふてゐるのであつた。私はその時仰臥しながら、心の中でうなづいて、これこそ正に暗香浮動の辭に背かぬものであると思つた。

どんな名人の槖駝師が丹精したのか去年の十二月の中旬江戸川の草花屋から屆けさした古木の盆梅が南縁の暖日に蒸されて歳暮に五六日といふ時になると、遠から脹んでゐた蕾が、一輪曉の明星の如くにぱつと眞白い花を開いた。その優しい、長い蕊をじつと窺いて見てゐると、それが、ちやうど夢みる少女の睫毛のやうにも思はれる。それから二三日して又一輪開いた。そして間もなく正月になると、忽ち五輪七輪と、高さ尺五寸にも足らぬ槎枒たる古木に滿枝の蕾が大半花を開いた。それは、飽くまで自然の精神に深く入つていつてゐる巧みな槖駝師が植物の精と堅く契つてゐた約束を守つて日を期して開花したものであるかのやうに思はれるのであつた。

馥郁たるその清香は、私の心に、何となく早い春のおとづれて來たことを思はしめる。暖い南縁に持ち出してその盆梅を愛でながら、朗らかに照り渡る遠くの青空を眺めてゐると、何處か野梅の咲く暖い野路に出ていつて見たいやうな氣分を唆られる。梅は魁春第一の花であるとゝもに春を待つ心をそゝる花である。

許六も百花の譜に、櫻は全盛の傾城なり。天晴れ當風に打込みたる風俗。行末明日のたくはへの、一點ゝなき花なり。……

……梅の風骨たる事、水陸草木の中に似たる物はあらじ。十月一陽の氣に、燦々たる江南の玉妃、まづ笑めるより、生涯を物好きに苦しみ、幽かなる住居に、朝夕の烟を立てゝも、なほ風流の細みに實めり。これを色に譬へていはゞ、吉野高尾などいふべき遊君の、心おとなしく、名を耻ぢ、心、意氣に、相火昂ぶり、容痩ぎすに、涙脆く、昨日の我れに飽ける心より、はづんだる男の一言に、百年の富貴を代へて、やう〳〵盛りも過ぎたる頃生前の本望を遂げて、世を靜かにいとなみ、同穴のかたらひをなせる人に似たり。といつてゐる。

梅花を遊女に譬へたのは、やゝその淸高の姿韻を傷けたやうな氣持ちがせぬでもない。春風駘蕩といへば、櫻花の爛熳たる姿を聯想せしめるが、東風料峭といへば淸香馥郁たる寒梅の容を思はしめる。

梅はまだ淺春肌寒さを思はしめる花である。その點がいさゝか物足りないといへばいはれる。しかしながら櫻花の季節になると、春はもう爛熟してゐる。何となく四邊が混濁してゐる。俗な快樂はあつても、風雅な樂みはない。梅花の季節は早春の空が靑く澄んでなほ料峭たる東風は吹いても既に麗日の影は天地に溢つてゐる。百花に魁けて一陽來復を思はしめるところに樂しい希望がある。

私は梅花については他の花によつては感じられない、懷しい聯想や懷ひ出に富んでゐる。しかし、特に梅花には限らないが由來名所として人口に膾炙さるゝ處の花よりも、多く人に顧られない所に佗しく咲いてゐる花の方に風情は多いものである。許六が梅花の譜の意も亦たそれである。

熱海の梅林は自然の風致をあまり損じない程度に庭園に人工を加へてあつて好かつたが、暫く見ないから今はどうなつてゐるか、心許ない。今から二三十年も前私が東京に來てまだ間のない時分始めて江東の臥龍梅を見にいつたことがあつた。龜戸の天神に詣で、その東門から出るとすぐ濶い田圃になつてゐて、もうそろ〳〵靑草の萠え出た畦徑を傳ひながら臥龍梅にいつたものであつたが、桑田碧海の譬に洩れず、今は不穏な殺生事の起る場末の陋巷と化してしまつた。思へば淺間しくもあり悲しくもなる。

芭蕉の句に、

梅が香にのつと日の出る山路かな

といふのがある。何といふ平淡な　風韻に富んだ句であらう。

同じ七部集の中に誰れの句であつたか、

梅が香や屋根に干したる酒袋

いふのがある。あまり名句とも思はれないが、私にはそれが自分の遠い背景の思ひ出であるのが懐しい。子供の頃、酒造家であつた自分の家の酒倉の屋敷まはりに澁色の酒袋が毎時よく乾してあつた。もう、ぼつ／＼酒の仕込みも忙しい盛りを過ぎて、深い冬の間中詰つてゐた日も大分伸びて、青く晴れた空に麗々と暖い日が照り輝く頃になると、麹室の草家の軒に一本の梅の古木が立つてゐるのが、三輪五輪と次第に花を開いた。それは年中忘れられたやうに、知らぬ頃からそこに立つてゐる梅の木であつたが、いつの年も長く寒香結不開であつたが、勝手な人間は、その堅い蕾がやうやく開く時分になると、

「おう、梅が咲いた。」といつて、はじめて一顧せられるのであつた。私は殆ど四十年の昔と過ぎたその頃の事をじつと聯想してゐると、ちやうど今、床の間から送つて來る清冷なる幽香と鼻管の作用とによつて其等の懐しい、過ぎし日のことどもがまざ／＼と思ひ出され、強烈なる酒袋の匂ひがしてくるやうである。その梅の古木にはよく鶺鴒が來て留まつてゐた。雀よりもずつと小いその小鳥は片時も落着いて居らず、忙しさうに枝から枝に拔け、すぐにも捕へられさうで、姿さへ碌々見せず、梅の木から草屋の軒端を渡り、隣家の石塀の小孔に隠れなどして、後には行えも知れず、ゐなくなつてしまふのであつた。

名所の梅の期待したほど興趣を催さしめぬに反し、野道の藪の垣根などを歩いてゐて、幽かな香に、ふと氣が付くと思ひがけもないところに野梅が枝を翳して、點々たる蕾まじりに白い花を開いてゐるのを見たりするのは何ともいへず好い。

いつであつたか、嘗て私は、私の最も好める風景の一つである南山城の笠置山の麓を流れる木津川の溪に沿ふて汽車に乘つてゐたことがあつた。木津の溪谷のことは私は屢々書いてゐるが、その邊一帶南畫めいた氣分に富んだ處である。懸崖に據つて家屋を架したり、雛段のやうな畑に青い麥が萠えたり、山の鐘樓が遠く望まれたりする。高い溪谷の岸に沿ふて藪がつゞいてゐる。私は餘念もなく其等の風景を眺めながら、ひたすら汽車の進みの速いことを惜んでゐると、すぐ眼の前に迫つた眞竹の藪の中から、そちらにも此方にも、南日に向つて梅花が白く蕾を開いてゐるのを見たではないか。私はひとり心に欣然として喜んだ。その木津川の上流は即ち大和の月ケ瀬の溪になつてゐるのである。芭蕉の生國もそこから、もう程遠くはない 私は其等の風景を見るにつけ、ます／＼月ケ瀬に往つて見たく思つた。けれども、それは、それから尚ほ何年かの後にならなければ果たされなかつた。

數年前京都に滯留してゐる頃は極めて落着いた氣持ちになつてよく梅のことを思つてゐた。長い冬籠に虐げられたやうなその古い都の薄暗い家の內にも、二月の中ばを過ぎる頃になると屢々麗らかな日影が射し込んで來る。すると、まるで日の目を見ずにゐたかと思ふやうな京の女の眞白い顏もそろ〳〵戶の外に見られるやうになつてくるのである。私は、殆ど耐えがたい氣持ちで、長い京の一冬を、薄暗い家の中で過してゐた、一刻も早く春の來復するのを待ち佗びてゐた。やがて二月の中ばになつた。せめて早咲きの梅でも見て春を待つ心を引き立てようと思つた。この日頃の暖かさに、何處か京の田舍の方へ出ていつたならば野梅の咲いてゐるところがありはせぬかと思つた。「何處へいつたら、それを發見するであらう。」と考へた末、いつぞや紫野の大德寺の境內をぶらついてゐた時、彼處の舊い寺跡の雜木林の中に梅の木が多くあつたのを見たことがある。その時、「あゝこんな處にある梅が咲いたら、さぞ好いだらう。」と思つたことのあつたのを思ひ起した。「さうだ、今日は天氣も暖いし、これから彼處へ出て往つてみよう。」

さう思ふと、私はすぐ出掛けていつた。京の街は廣いやうでも、さすがに東京などゝちがひ、郊外へ出るにも譯はない。四條祇園町といつたら、京の中でも最も繁華な處であるが、そこから電車に乘つて今出川大宮まで往くと、もう紫野の郊外に出られる。大德寺の境內はなか〳〵廣くつて、まるで山の中の廣場にでも出たやうに、樹木が欝蒼としてゐて、藪があつたり雜木の叢林があつたりする。古い土塀で取り圍んだ末寺の院々は奇麗に掃き清められた敷石のゐまはりに青苔が蒸して、四邊に人の氣配もなく、閑寂を極めてゐる。廣い境內を寺から寺へ敷きつめた小石の步道を踏んでゆくと、冷く輝いた樫の葉などが暗欝として土塀に沿ふて茂つてゐる、その茂みの裡に、姿は見えぬが、鶯か、それとも名も知らぬ小鳥でも餌を漁つてゐると思はれて、かさこそと、深い茂葉の蔭をわたつてゐる音が、四邊が閑靜なだけ、一層よく聞える。古色蒼然たる山門から經堂や金堂の大きな伽藍の脇を通り過ぎて、此等の飽くまでクラシツクな冷灰な建物の處から稍々奧へ進んで、比較的安易な氣持ちのする念佛堂か何かの新しい堂宇の處まで來ると、其日は何かの法忌にでも當ると見えて、その堂宇の中から盛に衆僧の讀經する聲が靜かな山內に響いてゐる。私はその傍をも通り拔け、まるで獨り山中を往くが如き、次第登りになつた細徑を何處までも深く入つていつてみると、本山の大方丈からまたずつと背後の方に奧まつたやうな場處に有數の小石を敷いた道がつゞいてゐて、その行きつまりは、瓦を以て疊み上げた

土塀が取り圍んであつて、氣持よく清掃された、老僧の隱棲めいた門には白梅院といふ太い黑文字の標札が懸つてゐる。そして何人か貴人の來訪者でもあるのか、美しい溜塗りの腕車が四五臺も門前に待つてゐる、その車の上には、ふか／＼とした紫緞子か何かの背蒲團が置いてある。土塀の中の書院の方から高らかな話聲が洩れてゐる。私は思はず、そんな處に行き當つたので、暫くそのまゝ敷石の上に突立つて物の樣子に眺め入つてゐたが、やがてふと見ると、その低い土塀の外には一叢の梅林が槎枒たる枝を騁して立つてゐるのであつた。「白梅院とは、なるほど」と心に肯きながら、寒尙ほ堅く結んだ樹枝の間に、殊に南に面して日當りの好い枝にわづかに三點五點の白蕾が半ば綻びかけてゐるのが眼についた。私は、出獵して好い獲物でもした時のやうな悦びを感じて、「あゝもう春がおとづれて來たのだ。もう大丈夫だ。」と、いふやうな何かしら希望に滿ちたやうになつて境內を出て來た。

そして、今度は、いつしか見て置いた、その日の探梅の最初の目的であつた、紫野の舊い寺屋敷の跡に來て見ると、そこ等は今まで一面の雜木林になつてゐたが、それでも誰れかが梅林を作らうとした形跡は明かに見えて、畔を沒する枯木をわけてだん／＼奥へ入つていつて見ると、深く荊棘に鎖された叢林には苔の蒸した斷礎が埋まつてゐたり、泉池のあつたと思はれる跡地があつたり築山の跡の小高くなつてゐる處などあつたり、そのまはりには眞青な色をした眞竹の藪が亂生し　ゐるのであつた。奥へ入つてゆくほど梅の木は意外に數が多く、木はいづれも若いが、先つきの白梅院の梅よりも此方の方が日當りが好いせいか、もう花の數も多く綻びてゐた。こんな廢址の竹藪の中に世を忍びやかに咲いてゐる梅があるのに、北野や紙屋川の梅信は、もう、ちら／＼新聞の上で見られるが、誰れもこゝに氣のつく者はないのであらうかと思ひながら、荊棘に袂を捉へられて、ほそ／＼梅畑の叢林の中を歩いてゐると、誰れか不風流な男が忍び込んだあとゝ思はれて、高いところに、最も多く蕾の綻びた枝を太い處から折り取らうとして、半分生木の枝を剝きかけたのがあつた。

それから一週か十日も經つた頃になると、大阪の新聞の京都附錄には京洛の梅信が頻りに傳へられた。北野天神の梅、紙屋川の梅の滿開したことなどが報ぜられた。中にも紙屋川の梅は新しい名所の發見であつて、新聞は、京洛近郊の新月ヶ瀨だなどゝ仰山に報導した。もう三月の上旬にもなると、高い山々を以て圍まれ、長い冬季の間陰濕た雪模樣、密雲に鎖されてゐた此の舊い都にも、附近の山々の姿が、青空の下に淡蒼い霞を帶

びてゐるのが眺められ、日に〳〵何處か知ら近郊に遠歩きをしてみたいやうな心が唆られるのである。

北野天神の梅には、古木があり名梅があることは、かねて知つてゐるのであつたが、紙屋川の新月ヶ瀬とは、いづれ遊覧の客を呼ぶ爲めの廣告的誇張であらうとは思はれたが、何となく紙屋川を聞いたゞけでもそゞろに遊意が動いて止まない。紙屋川は京都に西陣の名とゝもに隨分古い名であると思はれ、西鶴の「櫻陰秘事」の中にも、その邊の西陣屋のことを書き、紙屋川の名が記されてゐる。西鶴の草紙に表はれてゐることを背景として考へると、紙屋川といふ、些やかなる郊外の小溝さへ、私には何となく藝術的な聯想が生じてくるのであつた。

紙屋川は北野の天神の裏門を出て、衣笠道を平野神社の方へ往かうとするところに土橋が架つてゐて、その下に深い溪川が流れてゐる。昔は清流であつたのだらうが、今は染織工場の剩り水などが溢れ落ちてゐるので水の色は清淨ではないが、その高い橋の上に立つて上流の方を見ると、深い竹藪の被ひかぶさつた、兩岸のそゝり立つた溪谷が暗いところから流れて來てゐる。春闌の頃になると、その邊の橋の袂には黄色い菜の花が亂れ咲いて蝶蛾が御室の花ざかりの唄のとほりの蝶々が道行く人の袂に戯れたりするのである。そして藪陰の暗い深みには眞紅た椿の花がのべつに咲いては落ち、藪鶯が姿も見せずにさゝ啼きしてゐる。

私は、その春の景色を思ひ起して、早速に紙屋川の梅を探ねていつた。そこは北野の天神の境内から、昔し太閤殿下が、天下の大小名を參集して所謂北野の大茶會を開催したといふ遺跡のある邊を通り越して、西側の土手の上にあがると、高い土手の下には紙屋川の深い溪底が一帶に見渡されて、なるほど、痩せ細つた潺湲たる細流に沿ふて、雜木まじりに幽かに白い花が春を魁けて、もう此處ばかりには都の春が訪れたかと思はれるやうに葭簾張りの水茶屋などが架つて、春めかしい緋毛氈を掛けつらね、花模樣の染の幕などを張り、襷がけに薄化粧を施したる若い女中が頻りに客を呼んでゐる樣子である。私は、その天神裏の高土手に沿ふて九十九折りに切り開かれた小徑を傳ふて、水茶屋の架つてゐる紙屋川の溪底まで下りていつた。ろで卵、するめ、卷き鯣し、などの、一寸した酒肴の用意も出來て、正宗の瓶など置き並べ上戸に不自由もない、觀梅の支度である。そして梅の數も可なりあつて、なか〳〵馬鹿に出來ぬ一つの梅溪であつた。

そんな處でも多くの人が餘り顧みないでゐるならば却つて好いのだが、もう、そんな水茶屋などが出來てゐては可惜清境を

俗了してしまつてゐる。やがて私はその溪をもとの道へ上つて、今度は、紙屋川の向岸に沿ふて、叢林(くさむら)の中に人の踏み馴らした形ばかりの細徑を傳ひ、川の土手を下へ〳〵と歩いて來ると、日は麗らかに背を温め、歩きながら微睡を催うすやうである。小徑の右手につゞいた一帶の田畑や藪林には、そちらにも此方にも金槌や鉋の音が高く響いて木の色新しい普請をしてゐるのが眼につく。篠竹の叢林と點綴して處々に立つてゐる道傍の茅屋の中から、長閑かさうな梭の音が、かたん〳〵と洩れて來た。

何時の頃からそのまゝであるやら分らないやうな、古びた、その機を織る家に、私は、何となく懷しい興味を覺えて、軒下に立ち寄つて、こち等は、洛外の何といふ處であらうと思つて表札を窺いて見ると、それには白梅村としてあつた。なるほどゝ背づきながら又段々下へ〳〵と歩いて、二たび、とある家の軒を窺いて見ると、そこには紅梅村としてあつた。

（一月六日誌す）

梅の俳趣

田中貢太郎

梅一輪一輪づつの暖さ、氷のやうな風に苦しめられ、雪に閉ぢ籠められてゐる者は、梅の花の一輪づつに乘つて來る春を待ちどほしがる。梅は潔白なその色から推して、寒い佗しい感じを與へるものであるが、又その一方には、暖なほつかりした陽の光を聯想さす。それは枇杷の花が散り、燕麥の花が黑くなつて、一望蕭條とした天地に景物を點するものであつて、やがてそれが冬と春との世界を維ぐなかだちとなるのである。

從つて梅は、氷姿玉骨、雪の中に點じても趣があるが、暖な海岸の南風氣(はえみけ)を含んだ波の音の中に點じても、やはり趣がある。

昨年の十二月の初旬、それは風の無いとろりとした日のことであつた。私は東海道の蒲原驛に先輩を訪ねて、その山莊に半日遊んでゐたが、丘陵に倚せてしつらへた其所の亭榭の間には、

ところどころに梅があつて、それがもう蕾を見せてゐた。眼の前には清見灣のお納戸色をした波があつた。右の方油井驛の向ふには、人家と磯際との間に薄紅い一幅の色彩のつらなりがあつた。それはその土地の特產物になつてゐる櫻海老を干したものであつた。私はその海老と波とを梅の花に織りまぜた。

梅の樹の下の溫い陽の光の中には、咲き殘りの龍膽の花の紫が細細と見えてゐた。橙の實もあつた。その翌日、私は三保の松原の松を眼の前に見る鐵舟寺の庭で、やはり梅の蕾のふくらみかけたのを見て、その時も梅の滿開の日の海岸の風趣を想像して見た。

杉田の梅を觀に行つたのは、もう五六年も前のことであるがその時はちやうど退潮で、干潟には海苔しびが干あがり、潮干の人が散らばつてゐた。それには若い女が交つてゐて、赤い帶の端などが見えてゐた。干潟の先には薄濁りのした波が光つて沖の方は霞がかかつたやうになつてゐた。路の右側には切り崩した黄色ろな山　肌があつた。海苔しびの垣根をした路ぶちの人家の黒いじめじめした庭には、散りこぼれた梅の花が螺鈿を置いてゐる所があつた。おき釣の鉢の傍には、鷄が時刻をつくつてゐた。

杉田は後に山を負ひ海に臨んだ小さな寺を中心にして、大木の梅が麥畑の中などに花をつけてゐた。

干潟にはさざら波　梅の村に入る

生海苔に吾れ醉はん君は梅を見よ

熱海の梅林の梅は、紅葉の金色夜叉で知られてゐる。それは樹は稚いが一條の淺い溪の流れがあつて、その中を貫いてゐるところに趣があつた。私の行つたのは、ある年の正月二日であつたが、もう八分の花を見せてゐた。私はその時、園内の茶店で菊海苔の酢にしたのを肴にして酒を飲んだ。

梅咲いて風無き村の一日かな

賓頭廬に梅散りかかる小寺かな

支那の西湖に遊んで湖の中の孤山の梅嶼へ行つた時は、五月で、もう梅は實になつてゐたが、それでも四邊の梅の樹によつて、疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黄昏の詩境を想像することができた。それは雨あがりの陽の光のぎらぎらする日であつた。放鶴亭の手前の梅の林の近くへ行つたところで、年とつた男の罵る聲が聞こえて來た。何事だらうと思つて見ると、梅の樹の下に痩せた老人が立つて、その前にゐる二人の若い男の眼の前に右の手を突き出して何かきめつけるやうにしてゐた。若い男は不快な顏をしてゐたが、それでも惡いことをしてゐるので抗辯ができないと云ふふうであつた。傍へ行つて聞くと、それは

若い男が實の梅を取つたのを叱つてゐるところであつた。老人のあとはすつこけてゐた。私は梅二百株を植ゑ、鶴を飼うて神仙の如き一生を了つたと云はれてゐる林和靖にも、かうした日の一齣があつたらうと思つて、杖を持つて梅の實を盜んでゐる惡太郎をとぼとぼと追つかけて行くその姿を想像してみた。

其所は孤山の西北の一角で、水を隔てて葛嶺の翠が眉を壓してゐた。私は放鶴亭へ入つて茶を喫つた。朱塗の柱に碧瓦を葺いたそり棟の亭は、林逋の和靖先生が廬を結んでゐた跡で、後の方のすこし西寄りになつた小高い所にその墓があつた。それは雉堞をめぐらした内にある大きな饅頭形の石で、墓石に宋林處士墓と刻してあつた。その墓も梅の樹に圍まれゐた。雪後園林纔半樹、水邊籬落忽横枝、私は雪を點じて的皪として咲いた湖のほとりの梅の花を思ふてみた。

その翌朝、私は葛嶺の麓の旅館で、暗い内から杜鵑のやうな聲で騷がしくしつきりなしに啼く鳥の聲を聞いた。それはいはゆる綿蠻と啼く黄鳥の聲であつた。茶房の説明によると、それは形も大きくて、日本の鶯とは比べものにならないものであつた。私はこの鶯では梅の景物にならないと思つた。

傘干せば犬ひた啼いて梅の散る

梅は梅林の簇つて咲く花も佳いが、打ち捨てられたやうに畑の隅や藪の中に一本咲いてゐるのも佳い。私の家の裏庭の藪の中にも一本の小さな梅があつて、蕾のふくだみかける頃から鶯が來て笹鳴をしたものであつたが、人が曳いて行つたのか枯れたのか、この頃氣を注けてみると無くなつてゐる。

桂月翁の住居の庭には三本の梅の老木があるが、いつか翁が酒を病んだ時活花の法を應用して、古奇な枝ぶりをこしらへると云つて、その幹の近くへ行つて、ぐいと右の手を延べて指をやり、三度大きく頭を振つて考へるやうにした後に、ちよと睨み、それからその枝を切れ、この枝を切れと云つて、私達に切らして大半その枝を無くしたので、今でも淋しい枝ぶりをしてゐる。

桂月翁と多摩川緣の久地の梅を觀に行つた時は、寒い風の吹く日の夕方であつた。双子の渡を渡つて右に折れて隄の上を行くと、農家があつてぽつぽつ梅が咲いてゐるのが見える。そして右の側に農家が無くなつたところで、一二町の向ふに梅の花に包まれた藁葺の一構が眼に注く。それが川邊と云ふ農家で、梅はその構への内外にあつて、林をしてゐる所もあれば、麥畑の中になり、松林や雜木林と入交つてゐる所もあつた。一人の老婆が掛茶屋を出して、店には赤毛布を敷いてあつた。其所には捨てがたい野趣があつた。私達はその後の雜木林の傍を延つ

て、多摩川の分水の通つてゐる丘の麓へと出た。その時であつたかちよと忘れたが、私と桂月翁とは、隄の上へ枯草を集めて焚火をしながら、持つてゐた正宗の四合壜を温めて飲んだ。そして歸る時になつて火を消す方法がないので、二人でじやあじやあとやつて消したが、これも忘れることのできない桂月翁に從遊した思ひ出の一つである。

多摩川の奥の吉野村の梅を觀に行つた時は、桂月翁はじめ十餘人の一團であつた。青梅の在になつた多摩川の左岸には、畑の中にも人家の庭にも、一めんに大木の梅の樹があつて花をつけてゐた。前には多摩川の流れがあつて、川縁に生へた竹の葉に川風が動いてゐた。その川縁には山葵を作つた畑があつて、小石を敷いた畑の溝ごとに澄きつた水をかけてあつた。梅の下には福壽草があぎて黄ろな花を持つてゐた。その福壽草は正月用に東京へと送る土地の產物の一つであつた。

機を織る杼の音が彼方此方に聞えてゐた。これも土地の產物の一つを織るのであつた。その機の音は多摩川の左右の山に輕く反魂をかへしてゐた。私達は山の麓の公園のやうな所で、土地の有志から蕎麥とか芋とかの野趣の多い晝飯を饗せられた。それは靜な歩くと汗ばむやうな暖な日であつた。

梅白し川風竹の葉に動く

杉田の梅を觀に行つたのも、熱海の梅を觀に行つたのも、久地の梅 觀に行つたのも、吉野村の梅の觀に行つたのも、皆桂月翁に隨從してからであつた。大森の八景園の梅も、蒲田の梅屋敷の梅も、池上の曙樓の梅も、やはり桂月翁とであつた。その曙樓の梅には、一度和田垣博士のぽつりぽつりと考へ考へしていふやうな諧謔の交つてゐたことがあつた。

江東では龜戶の臥龍梅、龜戶天神の梅林、向島の花屋敷、四木の吉野園、江東梅園、木下川梅園の梅を觀た。龜戶天神の梅に行つた日は日曜で風の暖な日であつた。神樂堂の前には猿の藝をやつてゐてゐたが人が簇つてゐるので猿は見えなかつた。本堂の左手には三人一座の手品師がゐた。その内の蛙のやうな老人が臺の前に立つて、鷄卵を五つ六つ續けさまに口に入れ、眼をしろくろして苦しむふりをした後に、口をぱつくりと開けて中を見せ、それから笛を取つて、それを吹き吹き一つ一つ取りだしたが、それには仲間の老婆が三味線を彈き、他の一人の老人が、鼓を打つて調子を取つた。

しかし、その龜戶天神の梅も臥龍梅も、江東梅園も木下川梅園も無くなつてゐる。明治四十二年か三年かの洪水の後で、臥龍梅へ行つてみると、水で枯れた老木に添 て稚木の梅を植えそれを枯木の幹の間から出して、さも枯木の一部分が生きてゐ

て枝を出したと云ふやうに見せてあつたので、興の醒めたことを覺えてゐる。其所では細かつぎとするめを肴にして冷たい酒を飲んだ。

梅園にもかなり興廢があつた。成島柳北によつて有名な小向の梅もとうに跡かたも無くなつてゐる。角筈の銀世界もさうである。大森の八景園、蒲田の梅屋敷もどうなつたことであらう。横濱本牧の三溪園の梅は、山と海とに趣を添へてゐたが、これも鶴見の花月園の梅と共に、大地震後の運命は判らない。

市內では日比谷公園、芝公園、湯島天神、深川公園になどにも梅があつて、初春の風の麗な日には探梅の客を呼んでゐたがこれも深川公園の梅をはじめ、大地震のためにどうなつたかも判らない。

東京に近い所では越ヶ谷の梅、越生在の津久根の梅、仙臺の梅も遠くはないが、私は不幸にしてまだどの梅も觀てゐない。しかし、わざわざ梅を見に行くなら月ヶ瀬の梅に行きたいと思つてゐる。

東京では正月になつて室咲の盆栽の梅を裝飾の一つにする。應接室、待合室、飾窓、バーのテーブルの上にも、それぞれ半ば開きかけたなりに萎れてゐるその花の鉢を見ることができる。

私の机の引抽の中には、梅の花の一めんに咲いた枝を背景にして二三の知人と撮つた自分の小照があるが、それは高知公園の梅林で寫したもので、それを見るたびに、凧をあげてそれを隣の梅の枝にひつかけた少年の日を思ひだすのである。

吾れ貧窶にして梅に何を思ふ

梅花賦

長田秀雄

一

嚴冬の寒氣凝つて深かく地中に隱れたるものが、一陽來復して、梅花の精となるか——ともかくも、世に數多き花の姿態の内、白梅の花ほど氣品たかきものは、まづ、あるまい。

春とは云へ、まだ、陰寒の氣白く空に流るゝ昨日今日、惨ましや、枝寒く天を刺す雜木の間に、點々として蕾を破る白梅の花の姿には、云ふべからざる力の感がある——即ちこれ、わが心をわれと洗つて洗つて洗ひぬいた詩人の仄かなる微笑の如きものか。

二

白梅の花は東洋文化の精魂である。

靜かに、窓裡に、この花一輪二輪ほころびそめた姿をながむれば、街上に喧騷する生活の叫びもきこえず、幽深なる大寂靜裡にくれてはあけゆく天地の姿が、わが魂に徹する念がある！——情慾を絕した涙が、しとゞその清香をかぐときに、自から胸をうるほす。

三

まづ、誠に一枝の梅花を摘んで仔細に見玉へ。白い花びらは仄かな黄色を含んで、沈んだ高貴な色調に匂ふ。恰も大理石の膚に似た柔らかさと冷たさである。かくて、五つの花びらは、中央に黄色の色も冴えた蕊を抱いてゐる。白と金との調和が、何となく氣高い氣品を以つて、わが瞳に迫つてくるのである。古來、畫かれた繪をみるに、櫻はその艶冶な花びらだけしきや畫かれてゐないのが多いが、梅花を畫いて蕊の形を省いたものは一つもないやうである。古人もこの蕊が放つ清冷な香氣とともに、花びらと蕊との美くしい調和に、まづ心を打たれたのであらう。冷艶素香、匂ふがまゝにその天然の肌を露はした洗髮のやゝ年たけた美女の無造作につかねた黑髮の内に光る金簪の形が、自づと、閉眼冥想した心裡に浮んでくるのである。

臥龍の姿こいしく幾十年の寒氣にきたへられて、鐵のやうに堅くなつた古木の膚をやぶつて、清冷、百花に絕する小花を開く——その力が、黄金の蕊にこもつて、天人の呼吸のやうに仄かなれども強い芳香を吐くか。

四

梅花を詠じた詩歌は、古來、その數が決して少くはないが、古今よりも萬葉の歌に秀什が多く、萬葉よりも古代支那の詩に

よく梅花馥郁の面影をうつし出して、その生命に徹したものが多いやうである。

鐵筆をふるつて、石壁に描いたやうな簡古な章句を以つて、この可憐の小花を描いて、しかも、その神に徹した古人の心の氣高さは私たちの仰いで學ばんと欲する處である。

五

私はかつて、少年の折、爲永春水著はすところの小說「梅ごよみ」を讀んだ事がある。「梅ごよみ」は男女交歡の姿を描いて艶冶、人を魅する書である。その内の一節に、美くしい藝者が男と交會する時、床の間に生けた梅の枝から、一輪の花をもぎ取つて、これを口に含んだ記事がある——讀んで此處に到つたとき、焦燥鈍悶の肉に一味徹底する清淨無雙の官感を得た事があつた。

六

紅梅は艶なれども姿いやしと古人も喝破してゐるが、全たく白梅の氣品に比べて、かくまで、劣るは不思議である。たゞ、加はつたものは、紅い色調だけである。而かも、白梅にみる言外の趣を悉とく說明しつくして、座談平語に墮した形である。

七

淸高魂に徹するやうな白梅の花を凝視するたびに、私が不思議に思ふのは、蘂の交會を終つて幻のやうに、その氣品の高い花の姿の消え去つた後の事である。晩春五月、すべての物が爛熟の香を放つ候となれば、かつては點々として、白と金との調和の美くしさをあらはしてゐた梅花のあとに、累々として、情慾のかたまりのやうに、青い梅の實がなるのである。

取つて嚙めば、酸に酸であるが、そのかみの花にやどつた精氣は、少しも香はない。

たゞ、徒らに、舌根口裡を刺して唾を催さしむるのみである。世帶に老いた世話女房の悍氣にふるゝ思がある。

中央公論社より、梅花賦を徵せらる——余によつて苦吟數日遂に梅花の氣品を寫し能はさるを恨むのみ。たゞ心を殘なふ事古人に及ばざるを、觀念するのみである。

梅花の氣品

豊島與志雄

梅花の感じは、氣品の感じである。

氣品は一の芳香である。眼にも見えず、耳にも聞えない、或る風格から發する香である。甘くも酸くも辛くもなく、それらのあらゆる刺戟を超越した、得も云へぬ香である。人をして思はず鼻孔をふくらませる、無味無臭の香である。それと明かに捉へ得ないが、それと明かに感じ識らるゝ、一種獨特の香である。何處からともなく、何故にともなく、何處へともなく、自らに擴散して漂つてゐる、浮遊の香である。

それはまた、梅花の香である。薄らと霧こめた未明の微光に或は淋しい冬日の明るみに、或は佗びしい夕の靄に、或は冷々とした夜氣に、仄かに織り込まれて、捉へ難く觸れ難く、たゞ脈々と漂つてる、一種獨特の梅花の香は、俗塵を絶した氣品の香である。その香を感じてその花を求むるは、俗であり愚である。花の在處を求めずに、漂ひ來る芳香に心を澄す時、人は氣品の本體を識るであらう。

氣品はまた、一の凛乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れず、已の力によつて自ら立ち、驕らず卑下せず、霜雪の寒にも自若として、己自身に微笑みかくる、揺ぎなき氣魄である。肥大ならず、矮小ならず、膨脹せず、萎縮せず、賑かならず、淋しからず、たゞあるがまゝに滿ち足つて、空疎を知らず、濫溢を知らず、恐るゝことなく、蔑むことなき、清爽たる氣魄である。

それはまた、梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁けして微笑み、而も、驕ることなく、卑下することなく、爛熳たる賑かさもなく、荒涼たる淋しさもなく、たゞ靜に已の分を守つて、寒空に芳香を漂はしてる姿は、まさに氣品そのものゝ氣魄である。しみじみと梅花に見入る時恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、凡て心を亂すが如き情は靜まつて、たゞ氣高き氣品の氣魄に、人は自ら打たるゝであらう。

氣品はそれ自身の性質からして、清淨なる白色たべきであ

る。赤や青や黄など、何等かの色に染められた氣品は、世に存しない。固より、赤や青や黄や紫など、さういふ色彩が持ち得る氣品はあるけれども、氣品そのもの丶色はどこまでも白色である。然し單に白色のみでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮かなる一點の色彩を包んだ純白、それが氣品の色である。

この氣品の色はまた、梅花の色に見らるゝ。黎明や薄暮の微光の中に浮出す、ほの赤きまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮出す、ほの蒼きまでの白色、または月光に輝らし出さるゝ、薄紫にまがうまでの白色、その白色の花瓣の中に、花粉の黄を小さく點出した色彩は、氣品そのもの丶色彩である。それに瞳を凝らす時、人は自ら心すがすがしくなつて、氣品の妙趣を悟るであらう。

氣品には一の諧味があり、而も同時に一の新鮮味がある。氣品は舊守でもなく、また新奇でもない。純粹の氣品は、骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とをよせ集めて、而もその何れでもなく、老と舊との諧味を取り、若と新との新鮮味を取り來つた、一種恒久的なものである。古さから來る拮屈傲峨と、新しさから來る自由暢達と、兩者を具有してしつくりと落付いたものである。

この種の落付きはまた、梅花の樹に見らるゝ。鋭角度をなしてぐいぐいと曲つた古木から、すいすいと若芽を伸し、若きを育つる力を内に藏した老幹と、老いを生かす力で伸び上る若枝とが、しつくりと一つの氣分にまとまつて、苔生した古い樹皮と、艶々しい新たな樹皮とが、一樣に花を開かせてゐるのは、まさに氣品そのもの丶姿である。老いたる枝と若き枝とを擇ばずに、一樣に咲き匂つてる梅花を眺むる時、輕佻と鈍重とを超越した氣品の沈靜に、人は自ら味到するであらう。

氣品はこの世に稀である。それは地上のものといふよりも、寧ろ多く天上のものである。この地上に在つては、その本來の面目を汚されるといふのではないが、在るには餘りに清らかすぎる。然しながら、それを地上に引下して、己が所有とした所に、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂がかけ渡した、多くの橋梁のうちの一つが、其處にあるとも云ひ得らるゝ。それ故に、氣品は一の抽象であつて、一の具象ではない。隨つて氣品は、如何なる人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じである。けれども梅花は、一の抽象ではなくて具象である。それ故に人に親しまれ難い。餘りに芳ばしい香を漂はせ、餘りに凛乎たる氣魄を示し、餘りに清らかな色彩に成り、餘りに妙味ある樹に咲くが故に、人間臭れのし

た感じを以て人を卻けがちである。然しながら、梅花に瞻を定めその香に心を澄すことは、必ずしも詩人にとつてばかりではなく、普通の吾々にとつてもよい。なぜならばそれは、地上の息吹きに天上の息吹きを交へることだからである。新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、梅花に人間味が少いが故に益々、梅花が天上的であるが故に益々、人間にとつてよいのである。この意味に於て、眞に梅花を觀るには、雜樹の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜、などに於てよりも寧ろ、自由な々晴とした境地に於てがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の寄せられてゐない、のびやかな環境の中に、一本の老木が、自然のまゝの枝振に、ぽつりぽつりと花をつけ、仄かな香を漂はしてるのを少し冷かな二月の夜明け、薄霧の晴れやらぬ頃、爽かな空氣を吸ひ、小さな霜柱を踏みしだいて、ふと氣付いたまゝ、何氣なく足を止めてしみじみと見入り嗅ぎ入る心持、それこそ眞に梅花を觀るの境地である。その一本の老樹のたゝずまゐと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣とは、たゞ一つ梅花の氣品となつて、人の心にしみ通るであらう。それをも卑俗と云ふ者は、卑俗のみを知つて高潔を知らぬ徒輩である。

其の雄勁とさびしさ

小川未明

いつであつたか、私は、支那の雜貨を商ふ店に立寄つた。鉢を一つ求めようと思つたからだ。そこに居合はせた、痩せた客があつて、いろ／＼盆栽についての話をしてゐた。

「先生は、何がお好きですか？」と、雜貨舖の主人が、その客にたづねた。

「何といつても、まあ、一莖一花に、野梅だらうな」と、その客は、答へた。

私には、いつまでも、その言葉が、忘れられずに、頭に殘つ

てゐた。

蘭亭の蘭の風姿のいかなるものかは、別に語るとして、野梅のあの針のやうな鋭い、雅趣に富んでゐることは、たしかに心を動かさずには置かない。

箒を倒まに立てたやうな、枝の細かさだ。大抵の梅は、根許で繼いである。盆栽にしてその花を眺めようとするには、どうしても繼いたのでなければ、花が早く咲かない。花の咲くのに古木のやうな、半分朽ちかゝつて、青苔や、白苔の附いたのがある。そんなのは、惡くはないが、眞の野梅でない限りは枝が太い。そして、枝數が疎らである。野梅は、前に言つたやうにちやうと針のやうな鋭い枝を持つてゐる。しかも、それが、網の目を透かして見るやうに密生してゐる。

盆栽になつた、野梅の一鉢を前にすると、野趣が自から湧くのを覺える。たとへ、花は容易に付かないとしても、たゞ、その影を見たゞけで、充分である。恐らく、これ程、野趣の富かなものはないであらう。

ある、植木屋が、私に語つたことであるが、眞僞は、分らないとして、

「甲州の石塊の澤山な川原を、山奥深く入つて行くのださうです。山に、梅があつて、實が、岩と岩の間に落ちて、そこから芽を生いて、風に吹かれ、雪に壓されして、曲がりくねつたのが、ほんとうの野梅といふのです。」

この言葉は、いづれにしても、面白い。そして、この樹に對する、一種のなつかしみを惹かずには措かない。

また、圃や、野にある、梅の樹の趣きは、盆栽にしたのと、別種の趣きがある。そこには、ほんたうのこの樹が有する獨特の野趣が見られるのだ。

伊豆に行くと、一月すでに、白梅の散るのを見るのであるが、寒い、北國では、三月の末になつて、漸く、蕾の頭が、白むのである。

一時は、あの武骨な枝も、荒れた幹も、みんな雪の下になつてしまふ。そして、人間は木の上を歩るくことができる。しかし、季節が來ると、雪は、次第に薄くなつて、足許から、木々の枝が現はれて來る。私は、北國の子供の時分に過した、この時分の記憶を永久に忘れることができない。

町の湯屋へ、母につれられて、藁靴を穿いて、五六尺も積つてゐる雪道を日暮方歩るいて行くと、あちらから、村へ歸つて來る人に出逢つたり、また、荷を橇に積んで、他の村へ行く群に出遇つたりする。しかし、それ等が、行き過ぎてしまつた後は、あたりは、たゞ一面に白い雪の野原だつた。

「お母さん、もう、柳の芽が、こんなに赤くなつたのね」と、私は、道端にやつと雪の下から頭を出した。柳の枝に、目を止めて言つたものだ。

「もうぢきだよ、暖かになるのも」と、母は、答へた。

頭を上げて、遠くの空を見渡すと、いまにも泣き出しさうにうす暗く曇つてゐた。そして、そこには、何の晴々しい影も射さなかつたが、母の言葉は、どんなに、冬の間、楽しみの少ない私の心を勇気付けたか、分らなかつた。

私は、湯屋へはいつた。昔風の極めて陰気な、穴の中に、もぐり込むやうな風呂だつた。カンテラの火が、湯気の濛々として、立ち籠める裡に、ぼんやりと點つてゐた。そのカンテラの火の傍に、梅の枝が二三本、縄で結んで、湯気のよくかゝるところに、吊されてあつた。

もう、その梅の蕾は、白くなつてゐた。

私は、どんなに、この早咲きの梅の枝が、一本ほしかつたか。しかし、これは、ある持主があつて、湯屋に頼んであるので、妄りに手折ることができなかつた。

私は、歸りに、あの柳の赤い芽のついた枝を欲しいと思つたが、それも目先に、見えるものゝ、そこまで雪を冒かして、はいつて行くことは、母にも、私にも、できなかつたのだ。なんでもないことまでが、子供時分には、自分の力では、及び難い、憧憬であつたのだ。また、それだけ、この自然は、限く、美しく見られた。

東京へ来てから、却つて、私は、梅の花をしみ〴〵と見る機會がなかつた。田舎にゐた時分「東京は、もう梅が咲く」と、いふ話に、少年雑誌の口繪で見た、臥龍梅などを詩句にいれたり、歌に詠んだりしたこともあつた。しかし、東京に来てから、私は、いまだに、臥龍梅を知らない。たゞ、學生時代に、新宿の先にあつた「銀世界」へ一度行つたことがあつたばかりだ。

常に、慌しい、雑踏した客には、白雪のやうな梅の花も汚れてゐる。よく、電車の窓から、溝端などに咲いてゐる梅を見たことはあるが、街頭から捲き起る沙塵に、その色が染まつてゐるのであつた。

また、月夜に、山の手の高臺などを歩るいて、垣根の内側に薫つてゐる梅の花に、思はず、心を惹かれて、佇立することはあつても、これを故郷にゐた頃、野に咲いたり、圃に咲いたりした、野花の長閑さを偲ぶに、比すべくもなかつた。

私は、先年、京阪を旅行した時分に、關西線に依つて、月ケ瀬の麓を通つた。近畿の山々は、ちやうど雨の降る日の車窓に迫つてゐた。私は、見もしなかつた。また、知りもしなかつた

梅花の名所を空想して、それを詩に作つたり、歌に詠んだりした少年時代のことを思ひ出さゞるを得なかつた。

詩語粹金や、詩韻群玉などといふ書物に縋つては、詩を作つた時分は、たとへば、梅花に對しては、春寒とか凌屑とか、花如雪とか、いふ語句が、限りない詩情をそゝつたのであつた。

香雲十里掉梅溪　山秀水淸魂欲迷
知是洞天咫非遠　綿蠻聽得一鶯啼

この絶句は、その當時の自作で、「中學世界」に投稿したものである。

ある朝鮮の亡命客が、たま〳〵故郷の町にやつて來て、揮毫に應じた時に、私は物好きにも、自作の詩稿を携へて行つて、批評を乞ふたことがあつた。

其の男は、この詩に對して、「山秀水淸なれば魂迷はざるべし」とか、「洞天は、神仙の居所にして、黄鳥の棲む處にあらず」とか、言つたことを覺えてゐる。要するに、たいした、詩人では、この男はなかつたのだ。朝鮮人や、支那人は、みな、詩がうまいと思つたのも、やはり、不知に對する、少年のロマンチシズムに外ならなかつた。

私の知る限りでは、寒中雪を破つて咲くものに、寒木爪、寒蘭、福壽草、支那水仙、其他であるが、中に、梅が一番、最も雄勁の感じを與へると共に、その哀れも深い氣がする。

黄昏西空のうち紅く、茜さす時、青み渡つた空の下で、白梅の薫るのは、憐れ深いものである。

まだ、蝶も出なければ、蜻蛉も出ない。鶯に梅といふけれど、鶯が啼くのは、春が近づいてからであらう。人知らぬ間に、寒空の下で咲き、寒い風に、薫りながら散るところに梅の強さとさびしさとがある。即ち、何ものにも讓らない詩趣があるのだ。「一莖一花と野梅」と、言つた、客の言葉に、私も同感する。

——二四、一——

梅花の賦

村松梢風

賦とあつては大に閉口した、範を左思相如にとらんことは以の外の業なり、せめて支考也有の筆に倣つて「梅こそ奇しき花なれ、師雄は羅浮の夢に浮かされ、和靖は孤山の春にあこがる」とやうに書きこなしたら、少しは賦とか辭とかいふものに似つかはしけれど、これとても私の筆ではたどく／＼しく、已むを得ず「である」調を以て書き流すことにした。これでも賦といへるかと咎める人があつたら、これは大正自由賦だと抗辯するつもりで居る。

梅の季節は一體何月である乎、陰暦十二月を梅の初月と稱へてある、然らば梅は冬の花である。又同じ陰暦二月を梅見月と云へは、梅は仲春の花らしくもある。しかるに月令や歳事記を繙けば正月の景物としてちやんと記載されてある。して見ると梅は正しく春季の花であつて、月は陰暦正月に屬するものと承知せねばならぬ譯である。それにも拘はらず梅の花といふと私は何時も寒風や霜雪を聯想する癖があるから、春の花といふ感じはどうしても起らぬのである。現に角梅はどこまでも寒い花である。

桃李は妍なれども親みやすし、牡丹海棠は花の艶麗妖冶なるものなれど、根引して翠帳紅閨の伴侶たらしむるに難からず。獨り梅花に對しては簡様な卿々しい態度はとれぬやうな氣のするのが不思議である。先づ妄想を去り邪念を除き、水を飲で火食を絶ち、精進潔齋してのち始めて相近づくを得べけん乎。

お前の名はウメといふ、ウメとは如何にもしほらしい名である如何にも優しい呼聲である。しかしそのしほらしい優しい名も文字に表はして「梅」とかき、それを漢音とかにてバイと讀み、梅花と書いてウメの花と呼ばずにバイクワといふ時は、何となくいかめしい岩丈な名となつて、お前のやさしい姿やしほらしい素質までもしたゝか傷付けられるやうな氣がしてならぬ。併しそれはお前の罪ではない呼ぶ人の誤である。お前の名はバ

イクソではない。メイフワーである。メイはそのまゝウメである、ウメはこちらの名であると共に又あちらの聲であるのだ。

名は實の賓といふ如く、お前は名のやさしくてしほらしいが如く、お前の姿も共の通りである。やさしくしほらしいことは頓て寂しく清らかに健氣なことであらねばならぬ。お前は寒い時に生れて來たもんだ、寂しい世界に育つたもんだ。朔風凛烈冰點下の冱寒、血も肉も凍る程な此の冷酷寒酸な時に於て、あたりにはまだ青い草も赤い花もない索寞不毛の地に於て、錆び朽ちたる頑鐵の如き幹より、碧色の琅玕もて作れる鞭の如き杪を伸ばして、無數の寒蕋氷葩を綴るもの、お前を外にして此の世界に誰があらうぞ。お前はまことに寂しい花である、同時にまことにしほらしい健氣な花である。

しかしお前は孤獨ではない、いろ／＼な身内があり親族がある。江邊にあるを江梅と曰ひ、嶺上にあるを嶺梅と曰ひ、野にあるを野梅と曰ひ、官中に種ゆる所を官梅と曰ふと趙氏が杜詩を註する時に申されて居る。それればかりではない寒梅あり、春梅あり、緗梅あり、綺梅あり、又石湖梅、綠蕚梅、九英梅などもありといふ。こちらでも冬至梅といふがあり、綸旨梅、鶯宿梅、行幸梅、臥龍梅、とめこかしの梅、さては萬歳樂といふ梅さへありと聞く。

紅梅も無論お前の身内であらうけれど、些し異つた血道をうけて、お前の純白なすが／＼しい素質には似ず常に臙脂を傅け紅粉を粧つて居るところから、俳人蕪村は

『紅梅や見ぬ戀つくる玉簾（？）』とかいふ俳句を物して大分戀愛情緒をその上に表現した位であるから、單に梅花といふ時は那の紅姐々は關はらぬのである。

轗軻不遇と言つて、轗軻に不遇は附物であるやうに謂はれてゐる、がお前は轗軻であつても不遇ではない。それだけはお前の持つて生れた德である。索寞荒涼の地に於て寒飈に吹曝され冰雪に閉込められながら春をおとづるべく吹き出るお前の勞苦は、げに轗軻の境涯にあるもので、私も知己として一滴同情の泪を禁じ得ぬのである。しかしながら乞ふ自ら慰めよ、お前は曠野に立つ不援の獨ボッチではない。お前は此の人間世界に多くの友をもつて居る。日本では歌人俳人は更にもいはず縉紳武辨より學士文人に至るまで、昔よりお前を讃仰嘆美して、筆に載せ辭を聯ねて後世に遺したもの、その數枚擧に遑あらず、本場の支那に比して敢て遜色は無いと思ふ。支那には廣平の梅花の賦といふがあるさうだが、私は見たことはない。『君がために筆を援いて梅花を賦す、礙げす廣平の心、鐵に似たるを』といふ蘇軾の詩から想像する位なものである。或は本物は傳はつて

居らぬかも知れぬ。併し唐以下に於て長短賦詩に詠むだものは無數である。こちらの和歌や俳句も無論一種の短詩であつて、賦も亦詩の一體であるとすれば、お前を詠むだ和歌や俳句も或る意味に於て、短い賦であると言へぬこともあるまい。

三十一音の歌として日本に最初に現はれた梅花の吟詠は、萬葉に太宰帥大伴卿宅宴梅花歌として出てゐる三十二首であらう。「むつき立ち春の來たらばかくしこそ梅を折りつゝ樂きをへめ」が初めの歌で、以下三十一首いづれも同格の歌で、名吟佳作とは曰はれぬまでも、お前を愛好する眞心を往古の素樸な言葉にて率直に詠み出たものであることは十分に首肯さゝねばならぬ。その三十二首に次で出てゐる中に

「雪の色をうばひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがな」

これなどは僅な技巧を用ゐてお前の心根までも作者が代つて詠まれてゐる。作者は誰とも分らぬが多分憶良あたりであらう。降つて代々の選集や家々の集を初めとして近世から現代までの歌集をあさつたら、それは〳〵澤山な知己の吟詠に出遭ふであらう。

正史に傳はらぬまでも、お前の徳は鶯梅宿の故事にあらはれ、栖み慣れた故郷を飛び去つて筑紫の配所を訪づれたのは知己に酬ゆるお前の意氣を示したものだ。矢の竭きし箙に挿されて敵陣に乘込みし荒くれ武士に一點風雅の色を添へたのもお前の手柄と曰はねばならぬ。

連歌俳諧の穿鑿は暫く置き、俳句界に在つてお前は甚麼に吟まれてゐるか、此れも見逃し難き事の一つである。元祿は俳句最盛の時代である。その代表詩人達はお前を恁ういふ風に詠じて居る。

「梅が香にのつと日の出る山路かな」

「梅一りん一りんほどのあたゝかさ」

「春もやゝ景色ととなふ月と梅」

和歌に比して幾分梅の境地を擴張した處を注目せねばならぬ。それから天明の蕪村を經て、天保前後の廢頽時代に流れ去り、終に明治大正となつて句界は更に寫生といふ一生面を開いたといはれてゐるから、梅花についても新しい吟詠が出てゐることは言ふまでもあるまいが、門外漢である私には其の間の消息が傳はらぬのである。

方面をかへて支那の文獻を拾つて見る。最初に梅の文字の出てゐるは詩經の『摽有梅』書經の『和羹鹽梅』などが古い處であらう。けれども此れは花のことではない梅子のことである。此の時代の人には梅の實は口に用があつても、花はまだ眼に用が無かつたのである。降つて賦として眞先に發表された文學は

楚の屈原が離騷であらう、天下のあらゆる嘉卉香草をとつて題材とし、依稀隱約の文字中に渠自身の不遇的幽憤を漏らしたもので、誠に立派な美しい大文字であつた。誦むだに幽牙の馨しきを覺ゆる程の此の南方文學中に、淸香馥郁たる梅花が闕けこゐるのは如何に考へても不思議であつた。後世の學者は之に向つて大分不平を詩に文に鳴らしたものだ。お前は楚人に閑却されたが爲に却て後世の人に多くの同情を惹いた譯である。決して悲觀するには足らぬ。春秋戰國より秦の統一までは不風流の代であつた。漢魏六朝となつて詩賦は始めて蔚然として勃興したが、お前は未ださまで詩人の眷顧を受けなかつた。たゞ三國の陸凱が范曄に寄せた詩に

「梅を折て驛使に逢ふ、寄與す隴頭の人。江南有る所なし、聊か贈る一枝の春。」

これは萬人に膾炙した古い所の有名な詩である。此の中の『驛使』『隴頭』『江南』『一枝春』などの言は皆後世の典故となつて居る。

唐は文學最盛の黃金時代で、李杜を始め一代の文豪詩雄簇々と輩出し、嘯歌吟誦の聲天下を風靡した。それでも當時翰墨の間にお前はさまで重要視さるゝに至らなかつた。たゞ少陵が、

『東閣の官梅詩興を動かす、かへつて何遜が揚州に在るが如し』

と歌つたのが一寸人の注意を引く位のものだ。此の何遜といふは梁の人で字は仲言と稱し東海郯縣の生れである。揚州の法曹、水部員外郎となつて赴任した時、その官舍の傍に一株の梅花があつて、恰も盛開であつた。遜は其の花下に在つて終日吟詠するのであつた。のちに洛陽に居ても、其の花のことが忘れがたく、再び乞ふて其任に赴き州廳に往つて見ると丁度花は盛に開いて、遜の來たるを待つて居るやうであつた。遜はなつかしさに堪へず、大に東閣を開いて友を招き、花下に莚を設け詠吟笑傲して日を暮した、此れも文壇の一佳話となつて傳はつて居る。

宋代に入つて始めて梅花に得意の春が回つた。錢塘の人林逋字は子仁、和靖先生と稱せり。資性恬淡にして無慾、西湖の小孤山に廬を結び、四方に遶らして梅を植え、其間に紙帳を吊つて起臥し、終世娶らず、梅を以て妻子眷族とせり。時の天子その高風を欽慕し常に粟帛を賜はつて孤獨を賑はした。彼はその一半を分つて鶴の糧とせり、彼はまた梅を詩謌に寫して共に神に入り古今に獨步したのである。其の有名な一律を示さんか

「衆芳搖落獨嬋娟。占二斷芳情一向二小園一。疎影橫斜水淸淺。暗香浮動月黃昏。霜禽欲レ下先偸レ眼。粉蝶如知合レ斷レ魂。幸有三微吟可二相狎一。不レ須三檀板共二金樽一。」

前聯の疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏はまことに天下の絕

唱にして梅花の半姿精神二つながら活躍生動す、後世幾多の梅詠あるもついに此の一聯に如くものが無い、彼は名實共にお前の眞知己であつたのである。

梅はどうしてゝ凡桃李の伴侶ではない、戯蝶遊蜂も曾て粉を偸まぬ塵外の花である。權門勢家は尤も嫌ふ所で、金屋玉樓も願はしき栖家ではない。殊に人烟を離れた山隈水涯、乃至溪邊籬頭はお前にふさはしき隱栖の地である。片田舎の茅屋竹門の邊に在るも亦別樣の趣がないではない。たとへ不幸にして厠の前、小便桶の後にあらうともお前は一點の汚を受けぬのである。莊周曰く、藐姑射の山に神人あり焉に居る。肌膚は氷雪の若く淖約として處子の如しと。是れ梅花を神人化して曰へるには非る乎。お前はどこまでも潔き花である、寂しき花である、そして全く塵外の花である。詩人が神僊的の花とし、宏籟的な詠物として取扱ふのは眞に妥當な見方である。あゝお前は早晩かの江城の夜、三弄笛裏の聲となつて飛び、聞く人をして爲に暗涙を催さしむ。想へばお前の臨終も亦詩的である。

私はこの花を實は嫌ひではない

宇　野　浩　二

梅花の文章などと言ふと、私は小學校時代によく悩まされた作文の課題を思出す。「梅は百花に先立つて花開く」といふのが、當時教師が悩んでゐる私たちに、その作文の資料として授ける唯一の文句だつた。今日は最早や小學校でもさういふ題目は餘りはやらないだらう。はやりすたりと言へば、それは何事にも附纏ふもので、無心の花とてもそれを免れることは出來ないだらう。もつとも、昔からこの花は主に隱者とか、高士とかに愛された傾向で、それ程俗人向きのものではなかつたらしいから、いつの時代でも流行兒といふ種類には這入らなかつたかも知れない。殊にその隱者とか高士とかいふものが少なくなり、

又ずつと冷淡に扱はれてゐる現代に於いては、一層この花がかへり見られないのは當然のことであらう。若しかすると、今にこの花も彼等と共に次第にこの世界から少なくなつて行つて、やがて一部の人々から骨董のやうに好まれる時が來るかも知れない。そして子供は、梅の木といふものは唯正月の盆栽で見る玩具のやうな小さなもので、それが山野に花咲く一人前の木であつたことを知らないやうな時世が來るかも知れない。

　つい先達てのことであるが、私は東京から二十里ばかり離れた田舍町の、商人宿のやうなところで二三日滯在したことがあつたが、さういふ田舍旅館のことであるから、私の當てがはれた部屋といふのは、誰にも想像がつくやうに、床の間には石版刷の山水の掛物がかゝり、安物の瀨戸の手焙りにはたち消えのする堅炭がいけてあり、そして隣座敷とは粗末な唐紙一重で接してゐるといつた風な、よくある體裁のものであつた。そこで私は隙間の風を防ぐ爲と、書き物をするのに氣が散らないやうにとの用心から、女中に賴んで、何か屛風のやうなものでも貸してくれないかと注文したところが、持運ばれたのは何の奇もない、古びた、粗末な衝立であつた。ところで、その面に貼りつけられてある、數枚の半紙半枚位の大きさの木版畫に就いてであるが、それは昔の雜誌の口繪のやうでもあるがさうでもなく、或は引札の類かとも見えるがさうでもなく、その元が何であつたか私には判斷がつかなかつたが、兎に角、明治三十年以前のものには違ひなかつた。今記憶にあるそれの繪柄を二三擧げると、その一枚は鳥の毛のついた禮帽を被つた、文官らしい様子の人間が人力車に乘つて走つてゐる前を、消防夫の服の型に見るやうな、古風な軍服の禮服を着た兵隊が二三人歩いてゐる、と、遙か彼方では二人の娘が羽根をついてゐる、正に正月の町の景色を現した繪らしいものである、又別のには、蘆の間に一艘の舟があつて、舟の上に一人の古風な恰好をした漁夫が乘つてゐて、その漁夫が此方向きに海の底から壺のやうなものを拾ひ上げてゐる圖がある、これは何物を現したものか分らなかつた、更に別の一枚では、俳諧師らしい二人の老人が、向う前に火鉢を挾んで坐つてゐて、頻りに首をひねつてゐる圖の肩に「日の春や流石に鶴の歩行哉　其角」並べて「元日やされば野川の水の音　來山」と書いてある、卽ち其角と來山とがさういふ句を詠んでゐる恰好なのであらう、かと思ふと、梅の一枚を丹念に彩色畫で現したやうなものもあつた、等、等。

　さて、私は何の爲にこんな田舍宿屋で見た、衝立の面の版畫の話などをそこに持出したのだらう？　私は知らない。何でも私はそこでひどく書き物の思案に餘つて、火鉢の火をほじくつ

たり、煙草の煙を無暗に吹いたりしては、その衝立と睨めつこをしながら、「日の春や流石に鶴の歩行哉」「元日やされば野川の水の音」といふ句を何度繰返し讀んだか知れなかつた。そして、なる程、昔の人は昔の人らしい考へ方で、上手なことを言ふものだなと感心したり、或はその下の二人の宗匠姿の男がさし向ひになつて居る畫の方を見ては、如何にも、時代が違ふと、同じ人間でも斯うも趣きの違ふものかな、と當然のことに感歎したりしては日を暮したのである。唯それだけのことである。だから、梅の木とは何の關係もない。が、今ふと考へついたのであるが、さし當りあの宿屋の庭などには恐らく梅の木が一本位あつたかも知れない。

兎に角、これは人々から次第に忘れられて行く花に違ひない。自然、文學や美術の上からもだんだん疎まれて行くやうに見える。と言つて、彼女が全然新しい文學から姿を消したと言ひ切る譯には行かない、何故と言つて、私は芥川龍之介が「或日の大石内藏之助」といふ新小説の中で、この花を用つて居ることを今思ひ出した。それは梅の花が障子に影をさして居る座敷の中で、折から首尾よく主家の讐を復して、細川家に預けられてゐる内藏之助が、さういふ梅日和らしい滿足した氣持で書見して居ると、傍に同志の人たちも明るい氣持で四方山の話をして居る、そのうちに、今彼等が無二の忠臣として江戸中に評判されて居ることとか、その爲に總大將である内藏之助はひどく人間放れのした人物に見立てられてゐるとか、いふやうな事に話が移つて行く、内藏之助はそれを聞いて居ると次第に一種の憂欝とうしろめたさを感じるといふ筋であるが、その最後のところで、今私もよく覺えないが、内藏之助が到頭座に堪へられなくなつて、厠に立つやうに裝つて緣側に出ると、ふと寒梅の老木が青空に象嵌したやうな、堅い冷い花を咲かして居る、それをぢつと仰ぐといふところがある。この古風な花と景色とを持つて來て、それを潑溂とした新技巧で生かして居ることで、如何に當時世を動かしたかといふことは、今も私がそれを覺えて居る程である。蓋し「青空に象嵌したやうな、堅い冷い花」といふのは、梅の文章の新文範であらう。

だが、それにしても少しこぢ附けて言ふと、最早やこの花はわが芥川君を煩はしても、内藏之助のやうな昔の人物の伴奏に用ひられて花を咲かして居るに過ぎないので、たとへば現代の洋裝した男女が、日の下で手を取り合つて戀を語る場面などには、甚だ不適當ではないだらうか、さういふ場面にある爲には、これは少し古風で、そして變屈な木であり過ぎる。(と言つても、私は泰西の新文學に悉く目を通して居る譯ではないか

ら、梅の花入りのどんな新小說があるとも限らない、保證の限ではない。)が、兎に角、我國でもこの花は昔から靑年の友ではなくて、一般に老人の好みであつたことは確である、そして、その點では「百花に先立つて花開く」といふ颯爽たる氣持とは反對の感じを起させる。

　だが、反對に、昔聞いた私たちの小學教師の言葉を裏書するやうな例を思出したから、それを附加へておくと、今から四五年前の冬、私は駿河の國の三保松原で一月から三月迄の日を暮したことがあつた。その一月末のことに、或日ふと思ひついて、そこから二里近くあるところの、久能山へ參詣かたがた散歩に出かけたことがあつた。あの邊は諸君も知らるゝ如く、暖流の關係で非常に溫暖な地方で、私は夜の十一時に江尻を通る汽車に郵便を托する爲に、淸水灣の海沿ひの道を、そこまで二里の往復をするのを少しも厭はなかつたし、又東京を夜の十一時に立つて、翌朝の五時近くに江尻に着く汽車で、屢々反對の道を三保の宿屋まで歩いて歸つたことがあるが、その間に往來の水溜りが凍つて居たことを一度も覺えない。東京の人は避寒地と言ふと湘南地方を唯一のものゝやうに心得て居るが、その暖さはとてもあの邊の比ではない。だから、そんな寒い一月の末のことであるが、久能山への道を歩いて居るのに、まるで春の野を散歩して居るやうな感じだつた。現に畑からは雲雀の唄さへ起るのである。が、流石に季節は季節として、見渡したところ、綠色なのは常磐木だけで、滿目は蕭々たる冬の姿であつた、まして何の花も見られなかつた。

　と、或所でふと道が曲つて、突然目の前に眞靑な海が開けたところで、路の傍に、海に面した南向の土手のやうな傾斜を持つた畑があつて、それは荒い石垣のやうな造りになつて居て、それ等い石と石との間に、一面に、苺が大きな眞赤な實をつけて居るのに、私は驚かされた、それは全く大きな苺であつた。そして！　その石垣の上に一本の梅の木が白い花を咲かして居るのを見出した時、私は思はず「おゝ、もう梅が咲いて居る！」と心の中で叫んだ。まつたく、その時程、少年の頃から隨分陳腐な言葉として輕蔑して居た文句ではあるが、この花を見て、百花に先立つて花咲くといふ氣持を實感したことはなかつた。そして、今でも目の前にあるやうに思出すが、苺畑と、梅の木と、海とが、何と見事に調和して見えたことであらう！　斯ういふ景色で見ると、この花も一概に古風と言つて見捨てる譯には行かないかも知れない。

　いづれにしても、私自身はこの花を實は嫌ひではないのである。（一・十一）

梅花の賦

上司小劍

人はいざ心もしらずふるさとは
花ぞむかしの香ににほひける

血眼になつて歌ガルタの輪贏を爭ふ百人一首の、土佐日記の作者がこの歌に現はした花は、梅である。櫻でない。日本上代の國花としては、梅が其の位置を占めたものであらう。紀貫之といふ男は、私の家の先祖の一人といふことに、系圖といふ反古紙の上ではなつてゐる。瓜の蔓を手繰るやうな先祖の詮議なんぞしたくもないし、いづれは猿が高祖であらうと思つてゐれば、多分間ちがひはなさゝうだ。間ちがつたところで、猿から苦情も來ないだらうし、人間に不平もあるまいから、まアどうでもいゝ。しかし私はこの貫之といふ歌人を、あまり好まない。親類だけに二段聽き、といふやうな贔負心も起らない。同じ紀姓の歌人では友則の方が貫之よりも好きだ。其の友則の名は系圖の上にない。

久方の光りのどけき春の日に
しづ心なく花の散るらん

友則のこの歌は、貫之の『人はいさ』よりもズツトすぐれてゐて、理窟ツぽいところもなく、百人一首のうちの大部分を占めてゐるかけ言葉や洒落のやうな、卑俗な技巧のないだけでも、はるかに氣持ちがよい。貫之の歌の花は梅だが、友則の歌の花は、櫻だ。して見ると、梅も櫻も共に日本の代表花として、古くから並び稱せられたものであらう。梅の方が少し年代は古いだらうけれど。

貫之、道眞なんぞ、古い歌人には梅の花に心醉した人が多かつた。梅は貴族的隱遁的で、個人主義の花のやうな氣がする。櫻の社交的開放的民衆的なのにくらべて、いゝ對照だ。梅は蕾がいゝし、櫻は滿開に風情がある。咲きかけたところまでが生命と見るべき梅と、散りかゝる頃に、最大の美を發揮する櫻と。

梅は塵埃を厭ふ。櫻はむしろ市塵に襲はれてゐた方に趣があ

る。深山に咲く櫻は氣の毒なやうだ。花よりほかに知る人もない山櫻の哀はれなる。梅は花なくとも、幹や枝が四季折々に賞でられるが、花のない櫻は鼻のない人間のやうだ。畫にもならない。畫になるといふ上では、梅が遙かに櫻を凌いでゐる。櫻の畫は道成寺の狂女でもあしらひたくなつて、嚴肅な床の間の裝飾には向かないやうに、昔しから思はれて來てゐる。梅に鶯と言へば月並みの骨頂だが、應擧なんぞ、生涯にそれを幾幅描いたか知れない。

昔しの歌人貫之は、梅が好きで、觀音を信心した。彼れは觀音の申し子といふことだ。梅の花のにほふ頃、彼れは每年長谷の觀音に詣でたが、其の宿坊には梅の老木が一本あつて、綻びかけた花がいつも嬉しさうに彼を迎へた。ところが貫之は土佐守に任ぜられたりして、暫らく都を離れたので、觀音にも詣でることが出來なければ、宿坊の梅の花も、三つばかりの春を見ずに過した。漸く京に歸つた翌年の春、久しぶりに長谷へ詣で、梅の花をも見た時に詠んだのが、『人はいさ』の歌であつた。宿坊の主が貫之に向つて『ひどいお見かぎりですね。』といふやうな意味のことを、其の頃の大和言葉で言つたのに對し、この歌が其の答へとして主の前に現はれたのだといふ。主もさるもの、すぐに返歌をした。

花だにも同じこゝろに咲くものを
植ゑけん人の心しられん

歌で議論をしてゐるのも面白い。梅の花を中心として。

貫之の娘は、鶯宿梅で名をあげた。父子ともに、梅の好きな詩人であつたと思はれる。天暦年間清涼殿の前の梅の木が枯れたので、代りの木がどこかにあるまいかと、方々に枝ぶりのよい梅の木を探しまはつた。ところが、勘解由小路の北富小路から東の角のある屋敷に、丁度頃合の梅の木があつて、八重の花しろく、花瓣に赤い斑文があつた、禁裏の御用とあらば、一も二もなく踏み込んで、掘りおこして持つて行つても、苦情を言ふものゝなかつた其の頃のことであるから、屋敷に住むものも、默つて見てゐた。仕丁が四人と、其の頭の風折烏帽子の老人とで、梅の木は夥しく根かたに土を付けたまゝで、運び去られやうとした。その時一人の女が小走りに驅け出でて、小さな紙片を梅の枝へ結び附けると、すぐ家の內へ驅け込んでしまつた。

其の梅が、清涼殿の前庭に植ゑられてから、帝の御覽になつた時、あの紙片は何か、といふやうなことで側近の人が取つて奉ると、歌が書いてあつた。

勅なればいともかしこし鶯の

宿はと問はばいかに答へん。

この梅は何者の家から持つて來たか、といふことになつて、係りの者が調べてみると、後世三十六歌仙の右の第一に据ゑられた紀貫之の邸と分り、歌を詠んで梅の枝に結び付けたものは、貫之の娘と知れたので、早速其の梅の木に、敕命によつてまた元のところに返された。のんきな話ではあるが、面白いではないか。一幕二場のいゝ脚本になつてゐるやうな氣がする。

菅原道眞もまた梅花の好きな詩人であつた。この人は政治に野心を持つたがために、一身の破滅を招くこと、あだかも今時の田舍大盡が、國會議員の候補者になつて、財產を蕩盡し、悲慘な末路を遂げるに似てゐるけれど、それがために後世天神さまとして、方々に祀られたと言へば、本人は死んだ後の知らぬことながら、政治道樂の俗物どもの名譽慾をそゝることであらう。しかし私は菅家が、ドオデエのやうに、政治は悪疫なり……と白眼に睨んで、大臣なんぞにならないで、詩人として文學者として終始したならば、彼れの生活は梅花の如く淸らかに、もつともつといゝ匂ひを放つたであらうと、其の政治道樂を惜しむものである。時の文章博士三善淸行もまた道眞の政治道樂を痛ましく思つて、それを諫止したといふ。

月輝如晴雪。　梅花似照星。
可憐金鏡轉。　庭上玉房馨。

これが道眞、十一歲の時の詩である。彼れが詩人として學者としての生活は、五十歲を過ぐる頃までつゞいた。殆んどもう晚年といふ頃になつて政治道樂は始まつたのである。下野權掾とか何んとかいふやうな小官吏は、其の頃の紳士閥として勤めなければならなかつたことであらうが、專ら詩人として、傍ら類聚國史二百卷を選ぶくらゐの仕事をして、世を終つたならば、と返すがへすも惜しまれる。渤海の使者裴文籍といふものが日本へ來て、道眞の詩に白樂天の風骨があると言つたのは、大臣以上の名譽ではあるまいか。寬平六年道眞五十歲の賀筵が門人たちの發企で吉祥院といふ寺に催された時、一人の老翁が藁沓を穿いてつか〳〵やつて來た。手には小さな嚢を持つてゐる。『日本の白樂天の五十の賀をお祝ひ申す』と言つて其の嚢を机の上に置くなり、逃げるやうに立ち去つた後で、道眞自ら其の嚢を開いて見ると、中には砂金がいつぱい入つてゐる。さうして書付が一本附いてゐた。『菅家の門人たち五十の賀をせらるゝよしを聞けり、よりてこの砂金を贈る。黃金は思ふ心の輕からぬを表し、砂はことぶきのかぎりなからんことを祈るしるし也』としてあつて、名が書いてないので、誰れの業ともわからなかつたが、後でだん〳〵調べて見ると、當今の御所爲であること

が知れた。私は先年秋聲花袋兩氏五十年の祝賀會に列席してゐて、ふとこのことを思ひ出し、今に雲の上とやらから、金貨の霙でも來やしないかと考へたことがある。道眞はどうしても詩人として終らせたかつた。五十を過ぎて内閣に列し、藤原氏と權力爭(あらそ)ひをして失敗したなぞは、どうしても梅花の詩人の名を汚したものである。

東海(こち)ふかばにほひをこせよ梅の花
　あるじなしとて春な忘れぞ

この一首ばかりが、彼れの政治道樂の產物である。

梅花に對する感情

このジャアナリズムの一篇を謹嚴なる西川英次郎君に献ず

芥川龍之介

予等は藝術の士なるが故に、如實に萬象を觀ざる可らず。少くとも萬人の眼光を借らず、予等の眼光を以て見ざる可らず。古來偉大なる藝術の士は皆この獨自の眼光を有し、をのづから獨自の表現を成せり。ゴツホの向日葵の寫眞版の今日もなほ愛翫せらるる、豈偶然の結果ならんや。(幸ひにGOGHをゴツホと呼ぶ發音の誤りを咎むること勿れ。予はANDERSENをアナアセンと呼ばず、アンデルゼンと呼ぶを恥ぢざるものなり。)これは藝術を使命とするものには白日よりも明らかなる事實なり。然れども獨自の眼を以てするは必しも容易の業にあらず。(否、絕對に獨自の眼を以てするは不可能と云ふも遮げざる可し。)殊に萬人の詩に入ること、屢なりし景物を見るに獨自の眼光を以てするは予等の最も難しとする所なり。試みに「暮春」の句を成すを思へ。蕪村の「暮春」を詠ぜし後、誰か又獨自の眼光を以て「暮春」を詠じ得るの確信あらんや。梅花の如きもその一のみ。否、正にその最たるものなり。

梅花は予に伊勢物語の歌より春信の畫に至る柔媚の情を想起

せしむることなきあらず。然れども梅花を見る毎に、まづ予の心を捉ふるものは支那に生じたる文人趣味なり。こは啻に予のみにあらず、大方の君子も亦然るが如し。(是に於て乎、中央公論記者も「梅花の賦」なる語を用ふるならん。)梅花を唯愛すべきチエヌス・プルヌスの花と做すは紅毛碧眼の詩人のことのみ。予等は梅花の一瓣にも、鶴を想ひ、初月を想ひ、空山を想ひ、野水を想ひ、斷角を想ひ、書燈を想ひ、修竹を想ひ、清霜を想ひ、羅浮を想ひ、仙妃を想ひ、林處士の風流を想はざる能はず。既に斯くの如しとせば、予等獨自の眼光を以て萬象を觀んとする藝術の士の、梅花に好意を感ぜざるは必しも怪しむを要せざるべし。(こは夙に永井荷風氏の「日本の庭」の一章たる「梅」の中に道破せる眞理なり。文壇は詩人も心臟以外に腦髓を有するの事實を認めず。是予に今日この眞理を盜用せしむる所以なり。)

予の梅花を見る毎に、文人趣味を呼び起さるるは既に述べし所の如し。然れども妄に予を以て所謂文人と做すこと勿れ。予を以て詐僞師と做すは可なり。謀殺犯人と做すは可なり。やむを得ずんば大學教授の適任者と做すも忍ばざるにあらず。唯幸ひに予を以て所謂文人と做すこと勿れ。十便十宜帖あるが故に、大雅と蕪村とを並稱するは所謂文人の僞す所なり。予はたとへ宮せらるると雖も、この種の狂人と伍することを願はず。

ひとり是のみに止らず、予は文人趣味を輕蔑するものなり。殊に化政度に風行せる文人趣味を輕蔑するものなり。文人趣味は道樂のみ。道樂に終始すと云はば即ち已まん。然れどももし道樂以上の貼り札を貼らんとするものあらば、山陽の畫を觀せしむるに若かず。日本外史は兎も角も一部の歴史小說なり。畫に至つては呉か越か、畢につくね芋の山水のみ。更に又竹田の百活矣は如何。これをしも藝術と云ふ可くんば、安來節も藝術たらざらんや。予は勿論彼等の道樂を排斥せんとするものにあらず。予をして當時に生まれしめば、戲れに河寬晩歸の圖を作り、山紫水明樓上の一粲を博せしやも亦知る可からず。且又彼等も聰明の人なり。豈彼等の道樂を彼等の藝術と混同せんや。予は常に確信す、大正の流俗、藝術を知らず、無邪氣なる彼等の常談を大眞面目に隨喜し渴仰するの時、まづ噴飯に堪へざるものは彼等兩人に外ならざるを。

梅花は予の輕蔑する文人趣味を強いんとするものなり。下劣詩魔に魅せしめんとするものなり。予は孑然たる征旅の客の深山大澤を恐るるが如く、この梅花を恐れざる可からず。然れども思へ、征旅の客の踏破の快を想見するものも常に亦深山大澤

なることを。予は梅花を見る毎に、峨眉の雪を望める徐霞客の如く、南極の星を仰げるシヤツクルトンの如く、欝勃たる雄心をも禁ずることと能はず。「灰捨てて白梅うるむ垣根かな」加ふるに凡兆の予等の爲に夙に津頭を敎ふるものあり。予の渡江に急ならんとする、何ぞ少年の客氣のみならんや。

予は獨自の眼光を以て容易に梅花を觀難きが故に、愈獨自の眼光を以て梅花を觀んと欲するものなり。聊かパラドツクスを弄すれば、梅花に冷淡なること甚しきが故に、梅花に熱中すること甚しきものなり。高靑邱の詩に云ふ。「瓊姿只合在瑤臺　誰向江邊處處栽。」又云ふ。「自去何郎無好詠　東風愁寂幾回開。」眞に梅花は仙人の令孃か、金持ちの隱居の圍ひものに似たり。（後者は永井荷風氏の比喩なり。必しも前者と矛盾するものにあらず。）予の文にして至らずとせば、斯る美人に對する感慨を想へ。實に又汝の感慨にして唯ほれぼれとするのみなりとせば、已んぬるかな、汝も流俗のみ。濟度す可からざる乾屎橛のみ。



想華

大阪の思出

─五代氏と贋札事件─

廣津柳浪

『廣津君〳〵、覺きて下さい。廣津君〳〵。』

突如として私の枕頭近く、私の眠を呼覺ます聲が起つた。私が其聲に驚いて眼を覺ますと、私の枕頭には緒方重三郎氏が危坐して、私の掛布團の肩に手を掛けて居た。

『こんなに朝早く覺こして濟みませんが、君、大變な事が發こつたんですよ。中野さんを拘引すると云ふんですよ。』

『なに、中野さんを拘引する。』

私は撥ね起きた。

『何だつて中野さんを拘引するんです?』

『それが分らないのです。中野さんの家には、今警部や巡査が來て居るんですよ。義兄が大層心配しましてね、五代さ

んは或は其譯を御存じかも知れない、行つて伺つて來いと云ふから來たんですが、君から五代さんに伺つて下さらないか。』

『もう起きて居られるでせうから、訊ねて見ませう。』

私が寢衣を着替へて居ると、緒方氏は重ねて云つた。

『藤田さんにも、警部や巡査が來てるさうですよ。』

『藤田さんへもですか。それでは待つて居たまへ、直ぐ訊いて來るから。』

私は五代家の奧深くは入つて行つた。

こゝに五代さんと云つたのは、五代友厚氏の事で、中野さんは中野梧一氏、藤田さんは藤田傳三郎氏を指したのである。五代氏は薩藩出身で、明治維新の始めには、大久保木戸等の諸公と參與職に列し、大阪府の知事になつたこともある。早く實業界に投じ、朝陽館と弘成館とを起して、製藍と鑛業とに從事し、大阪商法會議所――當時は商業の事を商法と云ひならはし、士族の商法で云々なぞと云つたものだ――を設立して其會頭に撰ばれて居た。明治十四五年までの大阪に於ける氏の勢力は素張らしいものであつた。中野氏は旗下であつたか御家人であつたか知らないが、兎に角幕臣で、榎本釜次郎が函館に走つたのに從ひ、共に五稜廓に立籠つて薩長の兵に抗したのであつた。氏は當時齋藤辰吉と稱して居た。維新後山口縣令になり、辭して大阪に來て、藤田傳三郎氏の藤田組の客分と云ふ資格で居たものらしかつた。そして、住友家の廣瀨宰平氏と列んで商法會議所の副會頭になつて居た。藤田氏は長州の人で、一時は無賴の遊蕩兒に墮落して居たさうだが、中野縣令の好意的侮辱の激勵に會ひ、ここに大いに悔悟發奮して、大阪に藤田組なるものを設けるに到つたので、此亦同地に於ける大なる一勢力であつた。氏もまた商法會議所議員であつたが、役員に列して

は居なかつた。

當時私がどうして五代家に起臥して居たかと云ふに、私の父が五代氏と懇意であつたからである。私の父の經歴、五代氏との關係を玆に述べるとよいのだが、今はそれを略することにしたい。

其前年明治十一年——私は十八歲だつた——の夏、どうした事か私の喀痰に血が交つた。それもほんの三四回そんな痰が出たと云ふまでの事で、其時既に私が不治の難病に喰入られて居たと云ふ譯では無論なかつたのだが、父や母は私の前途に就いて、いろ〳〵心配し始めたらしかつた。確とは覺えて居ないが、其年の十二月に入つてからだつたと思ふ、或日母から私に相談があつた。それは、父が五代氏へ、私が病弱である爲めに學業の前途が懸念される事を話して、其意見を求めると、五代氏は病弱の身に學術の研究は無理であらう。私に托されるなら、商人に仕立て見たい。當人に異存がなければ、今度の歸阪に同伴いたさうと云つたさうである。そこで、父は母に命じて、私の意向を問はせたのであつた。

『お前の生涯の大事ですから、ようく考へた上で、返事をしなさるがよい。』

私は言下に大阪行を承諾した。母にはそれが意外らしかつた。私は其時東京大學醫學部の豫備門——中學程度——に居て、來年は豫科へ進むのであつた。だが、私は元來醫師になる事が厭であつた。父の命に止むを得ず、外國語學校から醫學部の豫備校に轉じて、赤門の內に病院と相對して建てられてあつた醫學部の寄宿舍に入つて居たのだ。それに實際病弱でもあつた。

『尤も、神戶に商業學校があるさうでね、五代さんは當分お前を森岡縣令——時の兵庫縣令——に預けて、其家から學校へ通はせるとお云ひださうですがね。』と、母は附加へた。

私はそれで充分であつた。學校へは直ぐ退學の屆を出して、其月の二十九日か三十日かに五代氏に伴はれて大阪へ來たのであつた。一月は早々神戸へ行くはずであつたが、それが止めになつて、私は大阪商法會議所へまア書記見習と云ふやうな名目で、五代家から通勤する事になつた。そして、其儘勤め續いて居るのであつた。

緒方重三郎は大阪の學醫として有名だつた緒方洪庵先生――福澤先生も其塾に在つて勉學されたと云ふことだ――の末子で、十三人目の子であるが故に名を重三郎と命じたのだと云ふやうに聞いて居た。重三郎氏の兄には、當時陸軍軍醫總監だつた緒方惟準氏があつたが、此人は東京に居て、大阪の緒方家は重三郎氏が義兄と呼んで居た拙哉氏が繼いで居たらしい。緒方家は北濱通の南側、中野家は今橋通の北側にあり、その裏と裏とが相接して居て、互に往來が出來るのだと聞いて居た。で、中野家へ警官が踏込んだ事が、緒方家で逸早く知りもしたし、また驚愕を吃したことも酷どかつたらしかつた。重三郎も病弱であつたところから私同樣、書記見習格で商法會議所へ來て居たのだ。氏も亦文學好きであつたし、年輩も似寄つて居たし、私は親しく交つて居たが、間もなく東京で病死したやうに聞いて居る。

私が奥へ入つて行くと、五代氏は寢衣のまま座敷の緣側に坐つて、手紙を認めて居た。これは此朝に限つた事ではない、氏は每朝斯うして幾通かの手紙を認めるのが日課の一つであつた、氏は家に在つても外に在つても隨分多忙だつた。斯うして早朝手紙を書いてる中にも、書き了つて朝餐の膳に對つてる中にも、面會を乞ふ來客があとから〳〵押寄せるのであつた。親しき者は飯を喫べながらも面談した。座敷に乞ひ入れて逢ふ人、應接所へ出向いて逢ふ人、それらは客の種類によつていろ〳〵であつた。此面會人との應接が十時頃までは續く、或は十二時を過ることもあつた。そこで始めて、來客のうるさい群から脫れた氏は、俥を田簑橋の北詰にあつた朝陽館、高麗橋通に在つた大阪商法會議所其他へ趣るのであつた。氏の歸宅は多く夜に入つた、それも一時二時の深更になることも珍らしくなかつた。此一時二時と云

ふ深更に、氏は留守中に配達された郵書や其他の來狀に目を通さねばならなかつた。そして、一睡の後目を覺ますと、多くの返書の執筆が待つて居るのだ、それから來客の應接だ、俥で諸會社を驅廻るのだ、深更の歸宅だ、來狀の披見だ……之を毎日繰返して居るのだから、よし心身ともに頑健で、精力絶倫の人であらうとも、よく耐え得るところではあるまい。二時間も充分安眠が出來さへしたらと、氏は能く云つて居たくらゐであつた。

私は緣側に坐つて手紙を書いて居る氏を見ると、もう多少の威壓を感じないでは居られなかつた。私はいろ／＼の人に面會したが、曾つて其人から威壓の感じを受けたことはなかつた。父は私に第一に畏ろしい人だつたが、父を除いては五代氏ほど私に威壓の感を與へたものはなかつた。氏は其時――明治十二年――四十四歲か五歲で、脊も高かつたし、骨格も逞しかつた。苦黑かつた顏は、顴骨が秀いで、顎骨も張つて居り、大きな口――大隈型の賤しい厚い唇ではない――がきつと結ばれ、眼は大きくはないが、犯しがたい威嚴があつた。所謂容貌魁偉と云ふのであらう。そして、談話を為す時の氏の聲音は、靜かで優しいものであつた。高聲に人を叱るやうなことは餘りなかつたやうだ。それにも拘はらず、氏の夫人など、恐れてちり／＼して居たやうである。

私が五代氏の傍近く膝を突くと、五代氏は筆を止めて私を見返つた。

『何か。』

『中野さんを拘引するとまをして、警部や巡査が來て居りますさうで。』

五代氏は眉根を寄せて私を見た。

『藤田さんも拘引しに來て居るさうです。』

『藤田を……うん。』と、氏は頭を仰けた。

『五代さんにはお分りになつて居るかも知れないからと、兄がまをしますからとまをして、緒方さんの弟がまゐつて居ります。』

『別に心當りはない。』氏は暫く間をおいてから、『西南戰爭の人夫のことかも知れんが……。』

『人夫の賃錢のことでございますか。』

『ちよいと心當りがないと云ふがよい。』と、氏はもう筆を動しながら、『お前は中野の模樣を見て來るがよい。』

私は居室に歸つて來て、五代氏には心當りがないさうであると云ふことゝ、人夫云々の事とを併せて緒方氏に話した。

『人夫の賃錢ですつて。ありさうなことですね。』と、緒方氏は色の白い長めの顔に、團十郎型の太い眼を輝しながら云つた。

『しかし、五代さんがさう云はれたやうに、他の人へ話して下さつては困るですよ。』

『他へなぞ云やしません。どうも有り難う。兄が待つてるでせうから、僕は失敬します。』

私も中野家の樣子を探りに行くのだから同行しやうと云つたけれども、緒方氏は私が服裝を改める間も待ち得ないで、急いで辭し去つた。私は出來て來たばかりの新調の脊廣服に著替へた。私は此時始めて洋服と云ふものを著たのであつた。得意と云ふのではないが、何となく體が引締つたやうな氣持で、多少のきまり惡るさを感じながら、私は靱北通一丁目の五代家を出て、先づ商法會議所へ急いだ。

大阪商法會議所は高麗橋通四丁目の、心齋橋筋と丼池(ドブイケ)筋との間の、ちやうど中程の南側に在つた。私がは入つて行つた時は未だ小使が來て居たゞけであつた。中野家の樣子が多少でも分つて居はせぬかと問うて見たが、藤田家と中野家に多くの警官が來て居るさうだと云ふことの他には、何も知れて居なかつた。

『中川君を呼に遣つたら出て來られるだらうか』と、私は小使に相談して見た。
『おいでがでけまへんやろな』と、年老いた長身の小使は首を振つた。
中川は中野家に寄食して商法會議所へ來て居る書記だ。いつも髮を綺麗に分けて、着物をきちんと氣取つて着てる男だつた。中川が出て來れば、中野家の様子が分明するのは云ふまでもないが、今の場合それは望めない事であつた。
『中川君はやはり會計の鍵――商法會議所のである――を持つてるだらうか』
『持つて居やはります』
『では、私が行つて見やう』
『中野はんお宅へだすか、ほう、えらいこツちや』
私は中野氏に關する何等かの消息を攫まないでは、五代氏へ復命するとして餘りに不甲斐ないと思つた。で、自身中野家を訪ふ氣になつたのだ。或は徒勞に屬するかも知れないが、多少は得るところもあらうかと、商法會議所を出て中野家へいつた。
『いづれ巡査が番をしてるだらうが、おれを門内へ入れるだらうか』
私にはこれが差當つた面倒な問題らしく思へた。それはぶつかつて見た上の事で、徒に取越苦勞するがものはないのだ。私はまツしぐらに中野邸へ向つた。
中野邸は今橋通の三丁目の井池筋から東へは入つた北側にあつた。大道に面した幅一間ほどの露地があり、其露地一杯の屋根つきの門――扉を閉めれば耳門(クヾリ)から出入の出來る――をは入ると、門内は石を敷いた露地が長く十間ばかり伸びて、其突當に玄關があつた。

門を衛つて居た巡査は果して私を誰何した。私は自分が商法會議所から來た旨を告げた。巡査は暫時私の樣子を見て居たが、面倒な問答なしに私を門内に入れてくれた。私は今日偶ま洋裝して居た此成効が愉快だつた。双子の布子に角帶を締めて、縞の羽織を著て居るいつもの自分だつたら、巡査の一喝の下に撃退されたかも知れないのだ。併し、私の此洋裝は五代氏に好感を與へなかつたと云ふことを後に聞いたから、私は此の一回體に著けたゞけで打捨つて了つた。

私は徐ろに敷石の上を歩んで玄關の前に立つた、玄關の障子は開放されてあつて、沓脱には駒下駄などの履物もなく、靴さへも見えないで淋しかつた。警部や巡査が中野氏を拘引すべく出張してると云ふのだから、私は邸内はごツた返して居るものと思つて、多少の好奇心さへそゝられて居たのだが、其期待は裏切られて、家内はシンと靜まり返つて、話聲一つ聞こえなかつた。

『何だか變だぞ』

私は覺えず呟いた。そして、玄關から案内乞はうと思つたが、家内の異樣な靜寂は私をいくらか氣怯れさして、覺えず躊躇せしめた。

玄關の右に沿うて二間ほど千本格子のはまつた窓があつた。窓の内には白く、閉められた障子が見えて居た。其窓のまた右に一間ほどの土間には入る入口があつた。私は徐かに歩を窓の前に移した。窓の内からも物音一つ聞こえなかつた。私はまた歩を移して土間の入口に近寄つた。そして、私は上半身を斜めに傾け伸ばして、土間から其左に見える上り框へ、上り框から疊の上へと眼を覗かせて行た。と、一個の人を認めた。それは十六七の丸顏の男だつた。いづれ中野家の使用人であらうが、私の求める其人ではなかつた。私の眼はまた左へと辿つて、また一個の顏を見た。それは四十年輩の男で、また私の求める人ではなかつた。二人とも寢衣かと思はれる粗末な單衣に細帶を締めて、畏つたやうに

きちんと坐つて居た。私が此人達を見た時、此人達も亦私の顏を見たのは云ふまでもないことで、而も異樣な緊張を以つて私を見詰めたのであつた。私は一入深く眼を左りへ逸らすと、そこに始めて私の求めて居る中川の顏を見出した。と同時に、私は內から巡査の眼が私を見て居るのを見た。巡査は俄かに緊張した二人の男の表情に、早くも私の覘つて居るのを覺つて、警戒の眼を私へ投げたのであつた。私ははツとしながら、些の躊躇もなく土間へ入つて行つた。其處には二人の巡査が嚴然と疊の上に突立つて、中川等三人を監視して居るのを見た。一人の巡査は目鞘をはづして私を見下し、直ぐさま誰何した。

『君は。』

『僕は大阪商法會議所の者ですが、當家に用事があつて來たのです。』と、私は些の淀みもなく答へて、『其處に坐つて居られる中川君に……。』

『待つた。』と、巡査は手を擧げて私を制した。そして、急いで奥へ入つて行つた。

日ごろ氣取家の中川氏だけに、寢衣一枚で坐つてる姿が一入哀れであつた。ぴツたりとブラシを掛けられてるはずの髮は亂れ、顏色は蒼黑く汚れて居た。私は眼を見合せるさへ氣の毒であつた。私も中川も、互ひに問ひたくもあり聞きたくもあるのだけれども、巡査の監視の前ではどうすることも出來なかつた。

今中野氏は何處に居るのであらう、いづれ奥に居るのであらうが、どう云ふことになつて居るのであらう。人夫の賃銀に就いての不正、そんな破廉耻な事件で、中野氏が拘引されるなぞと云ふ事は、考へるだけでさへ氣の毒だとも失禮だとも思はれるのであつた。いかさま旗下出でありさうな賤しからざる風貌を有つた、すらりとした體に、お召か何かの小袖を著流しにして、黑羽二重の紋付の羽織を著、精巧な縫取を施した土耳其型の帽子の頂きから、フツさり紺糸の房を垂下

されたのをかぶつて居たのは、當時大阪の一異彩であつた。江戸人に特有な座談の巧みさ、それに含んだ上品な滑稽味は、日頃私達を喜ばせて居た。私は斯うした中野氏を思浮べたりしながら、土間の三四歩の間を往たつり來たりして、巡査が奥から歸つて來るのを待つて居た。何時が私の歩んでる範圍が擴められて、圖らず土間の奥へ伸びると、其處は寢所で、其板の間に三四の人の坐つて居るのを見た。私は其人達を見ると覺えずはツとした。中野氏の夫人や令孃達が、無情にも寢衣姿で板の間に坐らされて居たからだ。中野氏夫人は元と南地で相應に名を賣つた小六と云ふ美妓だツたと聞いて居た。未だ天窓が閉めてあつたのか薄暗かつたので、私は夫人達の顏をはきと認めたのではない、ぼんやり白い顏が浮いてるのを見たのであつた。私は失禮したと思つたので、急いで目禮するなり歩を返して入口の方へ來た時恰好奥から、前の巡査を從へた一個の警官が出て來た。服裝が平巡査でない、警部以上らしく見受けられた。四十近い年輩で、顴骨の高い、顎骨の張つた、そして其顎尖がちよいと細つた、鼻下の髭の濃い、これが隼人型とでも云ふのでもあらう?

『用があるさうぢやが……。』と、警官は私を見下しながら問うた。

『貴官は。』と、私は態と落付いて問返した。

『わしは警視廳から出張した藤崎……。』――確かに藤崎と云つたやうに思ふ。

『私は大阪商法會議所の書記ですが。』と、私は姓名を名乘つて、『其處に坐つて居られる中川君に用があつてまゐつたのです。』

『此處に居る中川……。』と云ひながら藤崎警部は中川等三人を見返つた。

私は中川も亦自分同樣大阪商法會議所の書記であること、而も會計の下僚で、會計の鍵を預つて居ると云ふこと、今其鍵が會議所で必要なので、自分は其鍵を受取るために來たのだと云ふことを告げた。

『會計の鍵……。』と、警部はちよいと頭を傾けたが、『其鍵は。』

『はい、こちらにございます。』

中川は窓に對つて置いてあつた机の抽匣から鍵を取出して來て、警部の手に渡した。鍵は在來りの極めて普通なので、指で持つ處が丸い輪になつて居て、其輪に「大阪商法會議所會計」と書いた小ひさな木の札が麻の紐で結び附けてあつた。警部は其木札を打返し〱見て居た。

『商法會議所は何處に在るかね。』と警部が問うた。

『高麗橋通四丁目に在ります。』と、私は答えた。

『所長は。』

『會頭は五代友厚。』

『うむ。』と、警部は點頭いた。

『副會頭は當家の主人中野梧一です。』と、傍から中川が云つた。

『よろしい。』

警部は暫時考へてから鍵を私に渡してくれた。警部の面構からして一理窟こねさうに見えたので、もしかこねたら、斯う云はうあゝ云はうと、私は胸中に作戰計畫をめぐらして居たのだが、意外にも容易く鍵が渡されたので、聊か拍子拔がした。私の不滿はそればかりではなかつた。これだけ骨を折つて、差當つて必要でもない鍵を手に入れたゞけで、中野氏拘引事件については何の得るところもなかつたではないか。

『何だ滿らない。』と、私は中野家の門を出ると呟いた。『中野の奥さん達が臺所の板の間に坐らされて居た、それを巡査

が監視して居た――それが珍らしいくらゐのもんか。はゝは。』

私は唯これだけの材料で、五代氏へ復命しなければならないかと思ふと、歩も進まないやうな氣がした。とにかく商法會議所まで引上げて來た。會議所には書記長格の久松定憲氏が出勤して居た。久松氏は溫厚篤實の君子人で、漢學の造詣が深く、其時分既に澹江漁夫の名で、寺門靜軒の江戶繁昌記の文體に倣ひ神戶繁昌記を書いて居た。氏も私や緒方氏同樣稗史小說の愛好者で、三人申合せ、毎土曜日の夜久松氏宅に會し、一夜は經濟學一夜は稗史を研究する事にして居た。久松氏は後大阪朝日新聞社に入り、元老株に列して居たが、近年死去されたやうに聞いて居る。

私は中野家へ行つて來たが、何の得るところもなかつたことを久松氏に話し、同氏に何か聞き得たことがありはしまいかと問うて見た。

『五代さんが御存じないと云ふのでは、ちよいと他では分りますまいな。』と、久松氏は匙を投げて居た。

『中川君を呼びに遣つて見てはどうでせう、會議所の名でゝすよ。』

『さア、あなたが唯つた今行つて來たばかりですからね。』と、久松氏は首を振つた。『せめて二三時間經つてからだと可いのだが……。』

そこで、私は午後になつたら中川氏を呼びに遣つてもらうことに久松氏と相談して、例の鍵を同氏に托しておいて、兎に角復命する爲めに五代家へ歸つた。五代家には例の如く幾人かの來客があつた。私は中野家へ行き幹部にまであつたのだが、何の得るところもなかつたことを五代氏に復命した。五代氏は唯首肯れたばかりであつた。私は一層張合がなかつた。午後になつて、私は商法會議所へ行つて見た。

『おいでが遲うおしたわ、先刻中川はんが見えはりましたに。』

小使が私の顔を見ると斯う云つた。

『それは惜しい事をした。それで、中野さんの事は分つたかね。』

『朝早う連れてかれはツた云ひますがな、あんたはんがおいでやしたのは、ずうとあとになつてからやと云ふてやはりました。』

私は中川から聞いたと云ふ小使の話しを此に書くことにしやう。

早曉に中野邸の表門を叩く者があつたので、中川は中野氏が歸宅されたのだと思つて——中野氏は前夜外泊したのだつた——門の内から「どなたですか。」と聲を掛けた。門外からは「御用だ、門を開けい。」と怒鳴つた。中川が吃驚して門を開けると、警官がどや〳〵とは入つて來た。

『中野梧一に御用があつて來たのぢや。中野は在宿して居るだらうな。』と警官が嚴かな語調で問うた。

『主人は留守でございます。』

中川が中野氏の不在であることを答へると、警官は尠からず氣色を損じた。

『留守と云ふことはない。昨夜在宅の事を突留めて來たのぢや。直ぐ案内せい。』

『いえ、いつはりはまうしませぬ、留守でございます。』

『家探いたすぞ。』

『御隨意に願ひます。』

警部と中川と押問答をして居たところへ、中野氏が門前から歸つて來た。

『中川、どうしたのかね。』

中野氏が斯う云つた時には、もう其面前に警官が迫つて居た。

『あなたが中野氏か。』

『左樣、私は中野梧一ぢやが……。』

『取調べることがあつて出張した、同行されたい。』

中野氏は警官から受取つた「警視廳警部藤崎某」とある名刺を凝乎と見た。

『承知いたしました。しかし、私は位を有つて居るが、御承知であらうか。』

中野氏は山口縣令だつた時、正五位かに叙せられて居た。

『無論承知いたして居る。』

警部は令狀を示した。中野氏は令狀を讀み了ると、終に云つた。

『衣服を更めて、食事をいたす間、御猶豫にあづかりたい。』

『承知いたした。ゆる〳〵濟まされるやうに。』

中野氏は食事を濟し、袴を著けた上で、自分を警官に渡した。斯うして早曉に、中野氏は泉州堺の大宗寺（？）へ護送されたのであつた。中野氏邸から警官が引上げたのは午前の中で、出入ともに勝手たるべしと云ひおいたと、中川が云つたさうである。

私は直ぐさま中野氏拘引の實狀を五代氏へ報告した。中野氏拘引のありさまこそ知ることが出來たけれども同氏及び藤田氏が何等の嫌疑の下に引致されたのであるか、その何等なるものに對しては依然として何の得るところもなかつた。

『贋札や云ふこツちやぜ、蜻蛉の脚が一本足らんやら云ふとる。』

其夜からだつたか其翌日からだつたか、斯う云ひ囃す聲が、大阪市民の間に漸次々々に大きく廣がつて行つた。藤田中野の拘引は紙幣贋造の嫌疑だ。贋造された紙幣は貳圓札で、而も三百萬圓の巨額に達して居る。其贋造は極めて精巧で、肉眼では到底眞贋を辨ずることが出來ない、四百倍の檢微鏡下におかれた時、始めて蜻蛉の脚の一本足りないことが發見される。そして、此怖るべき貳圓札が、別けて京阪神の間に多額に流通して居ると云ふのであつた。肉眼では眞贋の辨別が不可能で三百萬圓と云ふ莫大な額が京阪神間に流通してると云ふ、大阪市民たる者驚かざらんと欲するも得んやで、何と怖ろしい贋札やないか、うかと受取つたらどもならんがな——二圓札の通用がはたと止つて了つた。私などは記憶して居るが、頃日發行されて不評判の新製郵便爲替を、今一とまはり小さくした位の大きさで、縱に貳圓と書いてあつて——此頃の兌換券はどれも横だが地の色は普通だつた。壹圓紙幣と二圓紙幣と何位の割合で發行されてしまつたものか知らないが、此貳圓札は私達も能く手にしたほど、大分多く流通して居たのである。貳圓札の通用が止つたのは、商業取引上に一方ならぬ打撃で、よるとさはると此話で、人氣が何となく不穩であつた。

中野氏拘引の翌々日であつたか、また其翌日であつたか、大阪商法會議所は臨時會議を開くことにして、議員の招集を行つた。開會は例に依つて午後一時と云ふことであつた。其當日の午前、五代氏は會議所議員大三輪長兵衞粟谷品三兩氏及び會議所理事加藤某氏を自宅に招致し、奥の座敷で協議に耽つて居た。大三輪氏は當時第五十八銀行の頭取で五十左右の年輩の、剛腹らしい所の見える大柄の男だつた。粟谷氏は銃砲商で、大三輪氏と同年輩の、何處か剛腹らしい所のある人で、後年衆議院議員に撰ばれると、赤いチョッキを被て登院して、異彩を放つたものであつた。加藤氏は舊幕臣だつたが、どんな商業に從事して居たか、會議所の理事と云ふ外には私は何も知らなかつた。

私は十時頃でもあつたらう、何か用事があつて玄關脇の一室へ行くと、其處に柳行李の蓋らしい物が置いてあつた。

私は其室の窓に對して机を控へて居た用人兼取次役の吉田老人――幸運なる此老人は後年五十八銀行の頭取に出世したやうに聞いて居る――と用談を濟して、自分の室へ戻らうとすると、老人は私を呼止めて其柳行李を指しながら云つた。

『その中に、仰山お札かは入つて居ますのやぜ。』

『札が。』

私はちよいと其行李を見返つただけで、その時は何の氣もつかなかつた。そして、間もなく私は會議所へ出勤したのであつた。

私が會議所へ行つたのは、まだ午時前だつたが、理事の芝川氏と木雅氏が出勤して居た。久松氏や中川氏等も出勤して居た。午後一時の開會だと云ふのに、もう議場には入つて居る氣早な議員さへあつた。

私は今こゝに當時の會議所役員及び議員の中、私の記憶に殘つて居る人々について、簡單に述べておきたいと思ふ。

五代氏と中野氏に就いては、今更めて述べる必要はない。先づ擧げたいのは住友家の大番頭だつた廣瀨宰平氏である。氏は中野氏と竝んで會議所の副會頭に撰ばれて居た。當時既に五十を越え、色の黒い田舍兒のやうな顏をして居たが、談話をして居る時の態度などには上品な所が見え、人物がいかにも手堅さうで、漢詩を作るほどの修養も積んで居た。氏は一時衰運に傾いた住友家を再興した人で、住友家では使用人が主人へ新春の祝詞を述べる時『今年も相變りませず…………』とは云はず、『相變りをして…………。』と述べる慣例ださうで、此慣例は廣瀨氏に依つて作られたものだと聞いて居た。理事に芝川又右衛門氏が居た。此人は稀にしか會議所へ來なかつたから深く知るところはないが、心齋橋筋の道修町北へ入る東側に廣い間口の店があつて、貿易商であつたやうにも記憶する。長身の色の白い丸顏の人で、黒の紋付

の羽織を著て居る様子など、大家の主人らしい風格を具へて居た。

『芝川は金魚のやうな男で、飯粒が目の前に落ちて來ないと動かない。』

五代氏が或時芝川氏に就いて、こんな事を云つたのを私は記憶して居る。本莊一行氏も亦理事の一人であつた。氏は幽蘭女史の父で、私と同鄕の久留米藩士であつた。當時代言人――今の辯護士――を職として中の島か堂島かに住み、五代家に最も親しく出入りして居た。氏は亦文學の愛好者で、其方面の書など大分廣く讀んで居たやうである。

『廣津さん、あなたが是非讀まなければならない本が來た。』

一日本莊氏は斯う云つて私へ貸してくれたのは、氏が新たに東京から取寄せた新評戲曲十種の第一編だツた。此新評戲曲十種は後年私と友人關係を結んだ二宮氏が出版したので、第一編は「一谷嫩軍記」の熊谷陣屋と石屋の巻とを、依田學海氏が金聖歎もどきの細評を加へたので、第二編は小永井小舟氏が「忠臣講釋」の喜内住家の一齣を評したものであつたが、惜しいかな第二編を出したまゝ廢刊して了つた。二宮氏は醫家に生れ、横山町の書肆泉掛――和泉屋市右衛門、太田氏――の養子になつたが、新評戲曲十種を出版した頃養家を去つた。後小野梓氏經營の書肆東洋館の支配人になつた事もあるが、そこも間もなく去つて、晩年は一向振はないで死んだ。私の「今戸心中」に西宮とある人物は、此二宮氏をモデルにしたのである。二宮氏が東洋館に居た頃、其店員に榮吉々々と呼捨にされて、客に茶など進めて居た青年があつた。其青年が今の富山房主人阪本嘉治馬氏である。人の運命と云ふものは、いろ〳〵であると思ふまゝ、餘事ながら記しておく。

故福田琴月氏の父君福田喜八氏――琴月氏も喜八と云ふ父の名を襲うて居た――は、議員中錚々たるものであつた。琴月氏は蒲柳の質であつたが、喜八氏は短軀ではあつたけれど、體も顏もまる〳〵と肥滿して居た。多辯ではなかつた

が、云ふべきことは必らず云ふと云ふ質で、年はもう五十を越えて居た。道修町の藥種商であつた。杉村正太郎氏と云ふ議員があつた。此人は砂糖問屋で、數百萬圓の大身代の主人であつたが、餘りに丁寧なるので、私など何時も弱らされたものだ。まだ十九歳だツた書記見習の私が椅子に掛けて卓に向つて居ると、杉村氏は私の椅子の傍に來て、先づ床板に膝を突き、片手をそつと卓の縁に掛けて、丁寧に時儀をしてから始めて物を云ふのであつた。まだ四十になるならずで、誠實其もの丶やうな人であつた。

其他田中市兵衛氏兼松房次郎氏、原嘉助氏、外山修造氏、扇谷五兵衛氏、鹿田靜七氏など云ふ人々の名が私の記憶に殘つて居る。今の大阪朝日新聞社長村山龍平氏の名も、當時の商法會議所議員として私の記憶を去らざる一人である。氏は些と頬骨が高かつたが、色の白い、唇の美しく赤い、身材の高い美丈夫で、まだ若かつたので所謂ヒレなるものが附いて居なかつたが、議員中有數の辯論家だツた。氏は五代家へ來る時など、芝川氏の使用人だツた下河邊貫四郎氏——やはり會議所議員だツた——と能く一緒であツた。五代家の侍女等は私かに氏等を二人侍と呼んで居た。東京の五代家に出入した二人侍に、雨宮敬次郎氏と間宮作太郎、谷元道之氏と種田誠一氏とがあつた。氏等を併せて二人侍の三幅對と呼ぶべきであつたらう。氏は當時京町堀一丁目の南側に、間口が三間まではないくらゐの唐物店の主人だつた。氏の住家の裏は京町堀に枕んで居たので、若くて美しかつた氏の夫人が縁側に立つて、長い紐を附けた角形の小ひさな釣瓶で、川水を汲上げて居たのを、私達は弘成館——故の五代氏の住宅の眞向に在つた鑛業事務所——の川に枕んだ縁側から折々瞥見したものであつた。

午時頃には廣瀬氏芝川氏などの役員が會議所に顏を見せた。議場は議員で滿されて居た。久松氏や私達は議事筆記の準備を備へて居た。一時近くになると、杏葉の紋の付いた黒の羽織を着た五代氏の偉軀が役員室に見出された。氏は春

夏秋冬、家に在つても外にあつても、必らず紋付の黒の羽織を被て居た。冬は黒縮緬で、夏は黒絽であつた。着物は糸織樣の物で、何時も着流しであつた。私は一度も袴を穿いた氏を見た事がなかつた。商人が平生袴を穿くは不相應な事とされて居たので、氏は當時の習慣に調和しようと勉めて居たらしかつた。

定刻が來たので會議は開かれた。議員達は議席に、役員達は役員席に着いた。軈て五代氏は議長席に上つて行つた。いつものやうに椅子に倚らないで、先づ肅然として議員達へ會釋した。暫くは正面をきツたまゝ深く物思ふ體で、凝然として立つて居たが、數分時の後始めて口を開いた。私はこゝに氏が演說の大主意を、記憶を辿つて記しておく。

今日諸君の御來會を乞うたのは、至急に御相談を遂げたい事が起つたからである。諸君も御承知の通り、當商法會議所の副會頭中野梧一、議員藤田傳三郎兩氏が、突然警官の爲めに拘引されたのである。兩氏が何等の嫌疑に觸れて拘引されたのか、未だ判明しない。然るに世上傳ふるところを聞けば、兩氏の嫌疑は紙幣贋造の罪に依るのであると云ふ。贋造されたのは二圓紙幣で、其額は三百萬圓であり、此多額の贋造紙幣が、京阪神の間に流通されて居ると云ふのである。甚しきに至つては、四百倍の檢微鏡に照して見ると、紙幣面の口冂の脚が一本不足して居るなぞと傳へて居る。このやうな浮說の爲めに、貳圓札の通用が臨張止つて了つた。これは諸君に於いても無論御承知の事で、而も御互に商賣取引の上に、非常な不便を感じて居る。私が諸君に御相談を願ひたいと云つたは此事である。私は中野氏が紙幣贋造などする男でないと信じて居る。藤田氏は私は深く知らないが、中野氏は當會議所の副會頭でもあり、私は深く交つても居るが、氏がそのやうな男でないことは、固く信じて疑はない。私は今日午前中、今此議場に出席して居られる大三輪長兵衞君、栗谷品三君、それに當會議所の理事加藤君、此三氏に私の宅へ來臨を乞ひ、第一銀行支店と五十八銀行とから取寄せた、貳圓札拾萬圓を調べて見た。四百倍なぞと云ふ莫迦々々しい檢微鏡こそ用ひなかつたが、紙幣の事に造詣の深

い栗谷君大三輪君等の努力の下に、一枚々々調べて見たのである。然るに一枚の贋造紙幣も見出し得なかつた。京阪神の間に、三百萬圓と云ふ巨額の贋造紙幣が流通して居ることが事實であるならば、拾萬圓と云ふ尠からざる二圓札の中から、贋造紙幣の一枚でさへも見出し得ないと云ふ事はないはずである。然るに一枚も見出し得なかつたのである。そこで私は、贋造の貳圓札なるものは、我大阪は勿論、京都にも神戸にも流通して居ないと斷言する。こゝが諸君へ御相談である。贋造の貳圓紙幣と云ふものは無い。疑念なく交換されたいと云ふ事を、京阪神間の市民諸君に、當會議所の名を以つて勸告することにしたいのである。萬一贋造紙幣が發見された場合には、當會議所に於いて引替へる、決して市民諸君に損失を掛けないと云ふことを、今此議場に於いて議決していたゞきたい。萬が一にも贋造紙幣たるものが發見され、當會議所へ引替を乞ふ人が續出した場合には、私は決して諸君に御迷惑は掛けない。その損害は私一人で負擔して、誓つて議員諸賢に御迷惑は掛けない。諸君が五代友厚を信じて下さるならば、滿場一致を以て、私の此提案を議決していたゞきたい。併し、諸君に於いて他に御名案があるならば、私は決して私の意見を固執する者ではない。何か御名案があるならば、御腹藏なく述べていたゞきたいものである。

五代氏は自分の意見を述べ了ると、徐ろに其偉軀を椅子に倚せて、凝乎と議場を見渡した。當時の五代氏の勢力は素張らしいものであつた。唯一人異議を唱へるものはなかつた。贊成々々の聲が湧き起つて、滿場一致五代氏の提案が議決された。そこで、本莊氏であつたか久松氏であつたかに、直ぐ其文案を作らせ、一應議場に議つた上で、其頃既に設けられてあつた附屬の印刷部に於いて、其決議文を印刷に附した。そして、直ちに大阪の梅田ステーション、京都の七條ステーション——當時は京都ステーションとは云はなかつた——神戸の三の宮ステーション——神戸には三の宮以外に驛はなかつた——の三要地に人を派して、其印刷物を撒布させた。今日の所謂宣傳を行つた譯である。而も、其宣

傳は小氣味よいものであつた。即日貳圓札の通用は恢復された。商法會議所は偉らいもんぢや、五代はんは偉らいもんぢやと云ふ、市民賞讃の聲が到る所に聞かれた。これでこそ商法會議所だ、これでこそ五代さんだと、私も自身が廣いやうに思つて嬉しかつた。

五代氏は明治十八年に五十一歳か二歳で逝去された。有爲の身を以つて早く易簀されたのは、不幸なる人と云はなければならない。今まで居られたら九十歳であらう。それほどまではかなはないまでも、今二十年長命されて居たならばと、惜しむべき人であつたゞけに、私は時々思出しては殘念に思ふのである。今思ひ出のまゝを此に記しておくことにした。

（完）

西片町の頃

―宇野浩二と僕―

廣津和郎

大正十二年はたうとう出版の事で暮してしまつた。出版と云つても例の武者小路實篤全集だけしか出さないのだが、併しそれの準備に正月からかかり、やれ内容見本、やれ新聞廣告などと云つてゐる中に半年過ぎ、出來上る本の製本などを氣にしてゐる中に、又月日が經ち、そこに持つて來て、總ての事を任せて置いた男が大分出鱈目を仕出來したので

それの善後策を講じてゐると、今度は例の大地震。——何から何までが最初からの建直しなので、商賣に馴れない自分には隨分急がしかつた。大正十三年の正月號の諸雜誌の目次を見て、創作に怠けてゐるのは葛西善藏と自分位のものだと思つて、今更ながら一寸自分が省みられるやうた氣がした。今年は少しおちつきを作つて、書いて見ようと思ふが。

だが出版もなかなか面白い。一つの計劃を立てて、それの準備をしてゐる間の愉快と云つたらなかなかない。創作を考へると、何處まで行つても無限だ。何處まで行つても道の極まるところがない。ところが、出版は一つ一つに目標がある。向うの町角を眼當にして、それだけを目蒐けて進んで行けばいい。うまく行きつけたら成功だし、行きつけなかつたら失敗である。……だが、今此處で自分は自分の出版についての考と、自分の創作についての考とを比較しようと思つて筆を執つたのではない。それが別種のものであつて、創作から受ける喜びや悲しみが、出版と云ふ事業から受ける喜びや悲しみとまるで趣を異にしてゐると云ふ事は、云ふまでもない事である。

唯自分は出版と云ふ事についての一つの思ひ出が書いて見たい。宇野浩二と二人で計劃した出版、たうとう物にならなかつた一ト昔前の出版の思ひ出が書いて見たい。——過去つた事はみななつかしいが、その時分宇野浩二と二人で過した貧しい生活も、今思へばなつかしい微笑の種である。

▽

宇野浩二と自分とが、いつ頃から知合になつたかを語ると長くなるが、同じ早稻田に學んでゐても、宇野が僕より一級下だつたので、互に顏だけは見知り合つてゐたが、つきあひはしなかつた。僕が學校を出た翌年、丁度今から十年前の大正三年の秋、宇野が初めてその當時麻布の本村町にあつた僕の家をたづねて來たので、それから友人になり、その

翌年の春は一緒に三保の松原に行つて、或小說の飜譯を分擔してやり、その秋には宇野の本鄕西片町の家に僕が同居するやうになつた。

その時分の事を詳細に語つてゐたら、一册の本が出來さうな程いろいろな思ひ出がある。兎に角、宇野のその家と云ふのは、或魚屋の露次を這入つた奥にあつて、小さいけれども、併し靜な家だつた。そこに宇野と宇野のおッ母さんと僕と、それから本村町にゐる頃僕の家で飼つてゐたルビイと云ふテリアを宇野に貰つて貰つたのと、此三人一犬が住んでゐた。——本村町の家が解散して、兩親が名古屋に行つた時、此犬は一度兩親に從つて名古屋に行つたのだけれども病氣の父が知多半島の病院に入院する事になり、母がそれに附添ふ事になつたので、養つて吳れる者がないものだから、再び東京に送り返されて、たうとう宇野の家に厄介になる事になつたのである。僕は此犬の話を『本村町の家』と云ふ短篇の中に書いた事がある。宇野もたしか『人心』の中に書いてゐたと思ふ。

その後僕が麴町に移り、宇野が『苦の世界』に書いてゐるやうな生活が始まりかけて西片町の家を去る時分になつて、此犬はたうとう行方不明になつてしまつた。宇野との話には今でも此犬の事が時々出る。——今まで生きてゐるか、もう十年も經つてゐるのだから、到底生きてゐる筈はないが、若し萬が一生きてゐたとしたら、何處に生きてゐるか、などと云ふ事を時々思ひ出す。貧乏でもあつたし、何か日の當らないやうな憂鬱な氣持に苦しんでゐた宇野浩二が、ひとりでぼんやり机の前に坐つて考へ込んでゐると、此ルビイは宇野の樣子にひどく心配して、宇野のまはりをくるくる廻つては、宇野の膝を片足でぽんと叩いて、悲しげにぢつと宇野の眼に見入つたものだ。『どうなさいました、そんなに暗つぽい顏をなさつて？』とでも云つたやうに。ああ見えてなかなかセンチメンタリストである宇野は、犬に慰められながら、ほろりほろりと淚など流してゐたものだ。

『利口な犬だつたねえ』と宇野は今でもその犬の話が出ると、しんみりしながら云ふ。

何しろその時分は、宇野も僕も極度の貧乏だつた。貧乏の話なんか書いたつて面白くないが、實際毎日毎日をどうして暮してゐたか、今考へると不思議な氣もする。僕が翻譯などをその前からして來た關係上、方々の本屋から翻譯の約束をして來て、それを宇野と二人で分擔してこつこつとやつたものだ。併しそれも始終あるわけではない。その中僕は評論見たやうなものをぽつぽつ書くやうになつたし、宇野は『少女の友』などに少女小說を書くやうになつた。けれども、そんな位で生活が立つて行くものではない。

『一層おでんやでもやらうかと思ふんだよ』宇野はこんな事を云つたりした事もあつた。無論冗談半分ではあるが、併し誰かがその資金を調達して吳れたら、やつて見ないものでもなかつかも知れない。『何でも、聞くと郊外の方に宗教大學が出來るんだよ。その前あたりに行つて、おでん屋を出したら、屹度當るに違ひないのだがなあ』

それから少し前に、宇野は陶器を燒く窯を据えつけて、それで飯を食はうとして見た事もあつたさうだ。無論そんな商賣がおいそれと成功するわけのものではなかつたが、併しその窯は、臺所の前のところに、僕が彼の家に寄寓した頃にも、ちやんと殘つてゐた。

けれども、ほんの少しの金、實際五十錢か一圓の金でもあれば、二人は大いに愉快になつてしまつて、銀座あたりにぶらぶら出かけて行つたものだ。好い鹽梅に二人とも酒が飲めない。それだから、パウリスタに入つて珈琲を飲んで、袖つこいドーナツツでも食べれば、それですつかり滿足してしまふ。今でこそパウリスタの珈琲とドーナツツなどは、十七八の給仕諸君でも振向きはしないが、その頃は靑年達の人氣の集點だと云つても好かつた。——南鍋町の通を見下し、時事新報社の灰色の汚らしい建物を直ぐ前に見る窓べりの椅子に腰を下しながら、一時間も二時間も、二人は無駄

口を叩いてゐる。文學と女と生活……そんな話だ。いつでも盡きない物語だ。二人ともとても元氣で、時の大家なんか屁とも思つてはゐない。鼻息の荒い事と云つたら此上ない。——つまりいつの時代にもある文學青年の典型、二人ともそれだつたに違ひない

　そんな風にして生活してゐる中に、たうとう二人はやり切れなくなつて、何かして生活の安定を作らなければならないと云ふ相談をした。宇野浩二はなかなかいろいろの計劃家で、前に云つた陶器やおでん屋のほかにも、豚を飼ふことなどにも、大分意見を持つてゐたし、又何かを讀んで研究もしてゐた。何でも大阪にゐた時分、ほんとうに豚を飼つた事か、飼はうとした事かがあるさうだ。僕は山羊を飼ふ事なんかを考へた。それから自分の兩親の行つてゐる知多半島の師崎では、鯛が非常に安くて手に入る。その鯛をたまり漬けと云ふのにして、母が送つて寄越した事があつた。その鯛のたまり漬を大仕掛にやつて、三越あたりの食料部に賣込んだら、一寸うまい儲になりさうだ、とこんな事を考へもし、語りもした。この鯛のたまり漬と云ふのは、實際美味なものだ。母から送つて來たのを、人々に分けると、誰でもうまいと云つた。畫家の九里四郎君が大いに乘氣になつて、資金を出すから、本氣で一つやらないかと云つたが、さう云はれて見ると、又一寸尻込みして、師崎に引つ込んで漁夫の仲間入りするのも惜しいやうな氣がして來て止めた。

　未だいろいろあつた。その中に宇野が云ひ出したのだつたか、僕が云ひ出したのだつたか忘れたか、二人の間に起つたのが、出版の話——モオパツサンの全集を譯して出版しようと云ふ話だつた。

▽

　これはその少し前、僕が『女の一生』を、やつぱり生活の苦し紛れに譯して、或本屋から出した。それがその時分と

してはかなり賣れた。それから思ひついたわけなのだ。

こいつは豚や山羊を飼ふことよりも、おでん屋や陶器をやる事よりも、文鯛の干物を作る事よりも、我々の柄に合つてゐる。それだから二人はすつかり熱心になつて、乘氣になつて、朝から晩までその事ばかりを云ひ暮し、それの細かい計算を原稿用紙の上に何度も何度も書き散らした。

その當時は未だトルストイ全集とかドストエフスキイ全集とか云ふものも、世の中には出來てゐなかつた。西洋の文學者の全集なんて云ふものは、思ひも寄らなかつたものに相違ない。――若しそこで我々のモオパツサン全集がほんとうに實現したら、さう云ふ全集の魁をしたわけだつたのだが。

出版の方法は豫約でやることが一番好いと云ふことになつた。それはその二三年前、國民文庫が豫約出版で成功したのから思ひついたのだ。――何しろ會費をなるたけ安くしたい。安くしてそしてハイカラな、氣の利いた本が作りたい。菊版では無論大き過ぎるが、四六版のあの型も、何だか間が拔けてゐて面白くない。そこで僕は一生懸命に本の型を考へた。そして考へたのが、普通四六版一枚の紙を六十四頁に取るのを、七十二頁に折り取る方だ。さうすると、四六版より少し小型で大變氣の利いた型が出來上る。そして一枚の紙で八頁の餘分が出來る。一枚八頁だとすると一連五百枚で約四千頁の餘分が出來る、四百頁の本とすれば、一連で十冊も餘計に取れるわけだ。――かうすれば、それだけ讀者に安くで本が分けられるわけだ。

この型はその後になつて、何かの時に新潮社の佐藤義亮氏に話した事があつた。無論僕の話によつてやつて見たのではあるまいが、近頃新潮社の本に盛んに用ゐられる新四六判――例へば『ナナ』とか『マダム・ボヴリイ』とかの型――は、つまり此四六判七十二取りの型なのだ。多分今では新潮社は四六判を七十二に取折つてゐるのではなく、ああ云

ふ型を製紙場に注文して漉かせてゐるのだらうとは思ふが。

未だその外いろいろな細かい事を計算した。宇野も僕もさういふ細かい計算には性來趣味を持つてゐるので、今から思つても、さう無鐵砲な、世間知らずの計算ではなかつた筈だと云ふ自信がある。

そこで飜譯者だが、これは友人達だけでやりたい。宇野と僕と、此計劃者二人は無論譯者となり、それに谷崎精二を加へる。谷崎はその當時新進作家として既に評判なもので、豐島與志雄と併び稱せられてゐた。——今の所謂文壇の流行作家達の名が、未だ世の中に出ない時分の事だ。——けれども、新進作家なんて云つたつて、その時分は今のやうにそれで飯が食へるわけのものではない。飜譯でもやらなければ、生活の安定がとても得られない。そこで谷崎も一寸乘氣になつた。

そこにその時分未だ大學にゐた江口喚——これは萬年大學生と云ふ評判を得た程の長い大學生だつた。いつ頃から大學生で、いつ頃大學生を止めたのか、つい詳かにせずにしまつたが、その時分は彼は未だ十分に大學生で、大學と一高との間の横丁を、あひぞめ橋の方へ行く左側の下宿屋の二階に彼はゐた。彼は『新小説』に一二篇短篇を發表してなどゐた。——その江口渙が、俺も仲間に加へて見れと云つた。『學校を出るとなると、今度は自活しなければならなくなりさうだ。それだから、さう云ふ仲間に加へて貰へると、非常に都合が好い』そんな風な事を端書に書いて來た。

飜譯者都合四人、四人なら十五册や十六册の飜譯の出來ない事はない。(その外に増田篤夫にも一二册手傳つて貰ふつもりだつた)——これで飜譯者は十分揃つた。

併し世の中は看板だ。看板に擔ぎ出す監修者が一人ゐなければならない。そしてその當時はその看板となるべき、頗る都合の好い人物が一人ゐた。それは故森鷗外先生だ。鷗外さんの名は、顧問とか監修者とかとして、到るところで擔

き出されてゐる。まるで監修者、顧問の一手販賣の觀があつた。——今はかういふ種類の人物がだんだん減つて來る傾向があるが、その中に又誰か現れるだらう。

『それぢや森さんところには僕が行つて來よう』から云つて、我々空想家の中では、割合に實際家の性格を持つてゐる谷崎精二が、或時、鷗外さんをたづねて行つた。

『モオパッサン全集！　モオパッサンと云ふ小説家は自分は好きでもないし、えらいとも思つてゐないが、併し監修者に名を貸す事は承知した』と鷗外さんは答へたさうだ。

その返答を聞いた谷崎は喜んで歸つて來た。そしてにやにや笑ひながら

『それで飜譯者は誰々だと云はれたので、みんなの名を云ふと、「一向知らん名ばかりだな」と森さんは云つたよ』と云つた。そこで我々は一寸苦笑した。

だが、これで看板も出來上つた。飜譯者も揃つた。原書だつてあるし、原稿用紙だつてある。——ところが、一番重要なもの、一番無くてならないものが未だない。それは資本だ。

この資本と云ふ奴は、發起者である宇野と僕とが何處からか探して來なければならない。今でこそ豫約全集をやるのには、かなり莫大な資本が要る。けれども、その頃は、世の中が今のやうにせち辛くはなかつたから、それ程のものは要らない。——でもそれ程のものは要らないと云ひながら、それ程のものが集まらない。

これには弱つてしまつた。宇野も僕も悲觀してしまつた。大體『出版』なんて云ふものは、世間のお金持には、その意味がなかなか解らないものらしい。意味はどうでも、その計算が解らないものらしい。何處々々で薩摩芋を仕入れて、それを東京に持つて來て賣ると、幾らく儲かると云ふやうな話になると、お金持には直ぐ解るらしいが、何人の

會員を集めてどういふ豫算で本が出來ると云つたつて、そんな茫た事に大事な〱金が出せるもんかと云ふ顏をしてゐる。

何しろ困つたものだ。看板に擔ぎ出した森鷗外さんにも濟まない。鷗外さんは『承知した』とは云ひながら、他に用事の澤山ある人だから、一々そんな事は念頭に置いてはゐまいが、使者に行つた律義者谷崎精二に對しても面目ない。

『どうしようかね?』

『どうしようかね?』

二人はこんな事を云つては、思案投首で毎日顏を見合せてゐるが、別に良案も浮ばない。その中に、宇野が『好い考がある、好い考がある』と云ひ出した。

それは宇野が『耕右エ門の工房』と云ふ小説に書いた、あの主人公の耕右エ門君だ。彫刻家で、お金持で、善良で、田端の方にその有名なアトリエを持つてゐる。

『あの男にさう云つて、仲間に加はつて貰はう。翻譯者の中に加へるわけには行かないから、モオパツサンの石膏の像を作らせよう。さうして、會員に分ける事にしよう。さうすればあの男も喜ぶし、仲間にも入るし、資金も出すだらう』

なかなか暢氣な蟲の好い考だ。けれども、その時、思案に餘つてゐた僕が、それを此上ない良案と思つたのは云ふまでもない。

『それは好い。うまく行けば素敵だがな』

その晩、宇野と僕とは、田端のその若い彫刻家のところに訪ねて行つた。それは冬だつた。西片町から田端まで、二人はとぼとぼと歩いて行つたが、その話がうまく行くかどうかと云ふ希望と不安とで、胸がわくわくしてゐた。――動坂下あたりは、今でこそ電車が通つてゐるし、場末と云ふ感じはあつても、なかなか賑かだが、その時分は實に場末中の場末と云ふ感じ丸出しの町だつた。田端に近づくと、へんな曖昧屋などが軒を並べてゐて、白粉臭い女がチウッチウッと方々で鼠啼をしてゐる。それから淋しい、細い坂を通つて、（その坂の中途などにも、こんな處にと思はれるやうな門構の家の玄關に、やはり白粉臭い女が火鉢に手をかざしながら、往來に足音が聞えると、透見するやうな恰好をして、チウチウと唇を鳴らしてゐた。それが何とも云はれず哀れげでもあり、又東京のその當時の郊外の冬の夜にふさはしい、うそ寒いやうな、へんなロオカル、カラアを示してゐた。）よくは覺えてゐないが、暗い横丁を幾つか折れて、畫家や彫刻家のアトリエが幾つか並んでゐる前を少し行くと、ところどころに畑などがあつた。

『これが誰々のアトリエだよ。この邊は美術家村で、髮の毛の長い、美術家然としてゐる人間ばかりが住んでゐるんだよ。東京の眞ん中に出て行くと、美術家と云ふものは化物見たやうに見えるが、この邊では、普通の人間の方が、却つて化物扱ひされるんだよ』

『さうかい、それぢや二つ目小僧と一つ目小僧の話見たいだね。二つ目の當りまへの人間が、一つ目小僧を見つけたので、ふん掴まへて見世物にしようと思つてゐると、一つ目小僧が澤山出て來て「おや、二つ目の人間がゐるぜ。これはめづらしいな。一つふん掴まへて見世物にしてやらう」と、却つてあべこべに生捕られたといふあの話に……』

二人は、こんな冗談を云ひながら歩いて行くと、一つの、屋根の勾配が非常に急なアトリエの前に出た。此アトリエは宇野の『耕右工門の工房』の中に詳しく説明してある。何でも最初、大變平べつたい屋根を作つてしまつたら、誰だ

かそれを見て、『をかしいな』と云つたので、神經質な耕右工門君はそれが氣になつて、出來上つたばかりの屋根を直ぐこはしてしまつて、今度は急勾配のものに作り直したのださうだ。さういふ事を説明させると、宇野浩二は實にうまい。だから詳しくは『耕右工門の工房』によつて知つて頂きたい。——唯耕右工門君が、此アトリエを全部自分で設計して、その設計通りに建てさせたところが、建つてしまつてから氣がつくと、便所がなかつたと云ふ話は、非常に面白く、僕を喜ばせた話なので、その事だけを此處に特筆するから、これから僕等が伺ふ耕右工門君と云ふ人物についての豫備知識として頂きたい。

低い生垣の木戸を開けて、ドアの前に立つて宇野が、『△△君』と聲をかけると、(今まで耕右工門君と呼んでゐたのは、宇野の小説の主人公の名をそつくり借用してゐたのだが、實は耕右工門などと云ふ宇野好みの本名ではないのである。併し此處では本名よりも宇野の命名を借用した方が、寧ろ禮儀にかなつてゐると思ふから、さうして置く事にする。)

『はい』と優しい聲がして、小柄の青年が戸を開けた。

『どうぞ』

『H君も一緒に來たんです』

『それはそれは……どうぞお入り下さい、むさいところですけれども』と宇野の後に立つてゐた僕の方へ向つて、耕右工門君は丁寧に云つた。

我々はアトリエの内に這入つた。

それは十坪か十二三坪もあらうかと思はれるアトリエで、アトリエの外には別に部屋はついてゐない。かなり薄暗くて、隅の方に寢臺などが置いてあり、その側に一人の若い女が、我々が入つて行つたのを迎へるでもなく、默々とし

こ坐つてゐた。それはおづおづした女性で、何かに脅えてでもゐるやうに、しよんぼりとして肩をすくめながらうづくまつてゐる恰好が、先づ僕に不思議な陰氣な感じを與へた。

初對面なので、宇野に紹介されて頭を下げると、僕は云ふ事がないので默つてゐた。

宇野は何かしきりと喋つてゐた。耕右工門君はその宇野の言葉に何か答へながら、その神經は絶えず僕の方へ配られてゐた。非常に神經質な、人の心持を氣にする人物に違ひない。――僕が部屋の一隅にゐる女性は何だらう、と云ふやうな事を考へると、直ぐにそれがもう耕右工門君の神經に響いてしまふものらしい。

『××さん、お茶でも入れて下さい』と彼は女性の方へ向いて云つた。すると、その女性は何の返事もなく、もぞもぞと立上つて、火を起し始めた。耕右工門君はその火を起してゐる有樣を始終氣にして、神經質な眼でチラリチラリとそつちを見てゐる『やあ、そんな火の起し方では……』といきなり云つて、そつちに立つて行きはしまいかと思はれるやうな、イライラした顏をしながら、チラリチラリと見てゐる。――これは後から宇野に聞いたのだが、耕右工門君は、その女が或有名な料理屋の女中だつたのを、好きになつて、たうとう自分のアトリヱにつれて來てしまつたのださうだ。併し非常に溫厚である一面、非常に嫉妬深い耕右工門君は、その女を猫可愛がりに可愛がる一方、又へんな殘虐性を持つてゐて、その女をアトリヱの中に閉籠めてしまつて、なかなか外に出さず、若し何かの用で外出して手間取るやうな事があると、いろいろにいびつたり叩いたりするのださうである。その話を聞いて見ると、彼女の脅えた樣子が解せない事もない。

自分の生活の秘密を人に覗かれたくない、と云ふ氣持は誰にでもある。殊に耕右工門君のやうな神經質な人だつたらさう云ふ氣持が一層深いに違ひない。僕はさう思ふと、その陰氣な女性の事で、何かを探られたくないと思つてゐる耕

右エ門君の神經が、ぴりぴりと來て、何だか見てゐられないやうな氣の毒な氣がした。

僕は眼を轉じて、アトリエの中に幾つもある彫刻の方を見た。すると、耕右エ門君の神經は、直ぐに又僕の眼を追つて來た。

『いや、それは駄目なんです。失敗したのです。……一寸氣に入つたモデルがあつたのでやりかけて見たのですが、どうもうまく行きませんで……』

『……』

僕は何とか云はうとしたが、何も云ふ事がないので、唯不得要領にうなづいて、他の彫刻に眼を轉じた。

『それは學校時代に作つたんですが、やつぱり思つた感じが出ませんので……』耕右エ門君の言葉は、一々冷汗でも搔いてゐるやうに顫へてゐた。

『……』

僕は再び不得要領にうなづいたが、これはやり切れないと思つた。僕は眼の置き所に困つてしまつた。何も見る事が出來ない。うつかり何かを見れば、耕右エ門の神經は、一々その後を追つかけて來る。天井を見れば、天井の事で何か辯解するだらう。窓を見れば窓の事で何か辯解するだらう。床を見れば床の事で何か辯解するだらう。――そして若し耕右エ門君その人を見つめたら、彼は彼自身について何か辯解しないとは限らない。

僕はへんに息苦しいやうな氣がして、仕方がなしに、何も見ず、眼を落して、默つて火鉢の中を見つめてゐた。――この弱い男に、どうして資金の相談などが出來るだらう。

宇野は尙も何か喋つてゐた。がその中に、一寸言葉を切つて、それから改まつた樣子をして、

『時に、△△君、今日はあなたに一つ御相談があつて來たのです』

『はあ』と耕右エ門君も何事かと云ふ顔をして耳を傾けた。

『實は今度僕は此處にゐるH君などと一緒にモオパツサンの全集を出版しようと思ふんです』

『はあ、モオパツサンの全集！　それは結構なお企ですね』

『それで』と宇野は僕の方を一寸見たが、宇野自身も僕と同じやうな感じが胸にいつぱいだつたらしく、西片町の家を出た時分の元氣が何處かへ行つてしまつた氣の乗らない調子になつて、云ひつづけた。『君に彫刻を……モオパツサンの石膏像をこしらへて頂きたいのです。つまり、會員の希望者にそれを配るわけなのです』

『はあ、それでは何ですか、此僕にモオパツサンの石膏像を作れと被仰るんですか。態々僕如きものをお撰び下さつたのですか』と耕右エ門君は急に輝いた顔をして、昂奮しながら云つた。『ありがたうございます。僕はまだ極未熟で、なつてゐませんが、さういふ意義ある仕事に、此僕をお撰び下さつたのは、何ともお禮の云ひやうがありません。感謝します、感謝します。僕は出來るだけの事をして、好いものを作つて見ます。一生懸命勉強して見ます』

『……』

宇野は僕の顔を見た。僕は宇野の顔を見た。二人ともそつと嘆息して、そして默つてゐた。

耕右エ門君は益々昂奮して、有頂天になつて、女のやうに優しい甲高い聲で、ひとりで喋つてゐた。

『モオパツサンの好い寫眞がありませうか。どうしても二三枚欲しいものですね。僕も探して見ます。眞正面のと横のがあれば尚結構です。――大きさはどの位のものが好いでせう？』

『大きさは？……そんなに大きくなくつても好いのです。机や本箱の上に載せて置く程度のものなら澤山ですから……』

…』と宇野は困つた顔をして云つた。

『さうしますと……』と耕右エ門君は云ひながら、部屋の中を見まはしてゐたが、隅の方の棚にシエエクスピアだかゲエテだか、或はそんな文豪のものではなく、何か全然別な人間のものであつたか忘れたが、一つの小さい胸像を見つけて、『それではあの位のものが好いでせうか？』

『結構でせう』

耕右エ門君がひとりで快活になればなる程、宇野と僕とは悄氣切つて、陰氣になつて、時々顔を見合はせてゐた。――どうしてこの男に資金の事など云ひ出せるものか、二人の眼はこんな事を互に云ひ合つてゐた。

『それぢや、いづれ又まゐります』さう云つて、僕等二人は立上つた。

『それではモオパツサンの好い寫眞を！』と耕右エ門君も僕等を見送るために立上りながら、念を押すやうに云つた。

『僕も探して見ますが、若しありましたら、御送り下さい』

『……』

二人はうなづいて、それからそのアトリエを辭し去らうとすると、例の陰氣な、脅えた女性は、我々が入つて來た時と同じく、我々を送り出さうともせず、ベツドの側にうづくまつてゐた。何か愚鈍な、でも、とてつもなく善良な動物のやうな恰好で。

外に出ると、莫迦に寒かつた。田端の夜は森閑としてゐた。地面がカサ〳〵に凍りかけてゐた。

五六間二人は默つて歩いて行つた。へんに二人は憂鬱になつてゐた。

『宇野、とてもあんな人に金を出して貰ふ事は出來ないよ。――俺はもうすつかり變な氣持になつちやつた』

『ああ、ほんたうだよ。…僕もとても堪らなくなつてしまつたよ。何だかへんな悪事でも謀らんだやうな氣がして…』

その最後の言葉は、一層僕等を陰氣に、憂鬱にしてしまつた。あの善良で、神經質で、人の心ばかりを氣にしてゐて、弱々しくて、正直丸出し見たやうな耕右エ門君、それにモオパツサンの彫刻を作つてくれとは！　そして喜ばせて資金を出させようとは！

『吐きつぽい！』そんなやうな不愉快が胸に込み上げて來た。

同じ思ひの宇野も、肩をすぼめて、消氣切つて歩いてゐた。此寒空にマント一つ着てゐない宇野の姿が淋しかつた。さういふ僕だつてマントを著てゐなかつたのだけれども。

澤山のアトリエの前を通つても、來た時のやうな冗談が二人の口から出なかつた。白粉臭い女達のチウチウと云ふ鼠啼き聲を聞いても、二人は振返る氣が出なかつた。

たうとう二人は動坂下あたりに來るまで、一言も口を利く氣も出ずに、しほしほと歩いてゐた。

▽

これで我々のモオパツサン全集の計劃もたうとう實現せずにしまつた。

『折角承知して貰つた森さんに濟まない』と谷崎精二はそればかりを云つて、暫くの間我々を悩ました。

森鷗外さんには、その事について一度挨拶しなければならないと思つてゐたが、たうとう森さんの死ぬまでそのまに打捨ててしまつた。

時論

山本内閣の倒壊から清浦内閣の出現まで

○

山本内閣の倒壊から清浦内閣の出現に至るまで約十日ばかりの間に、僕はいろ〳〵面白い現象を見た。中には政治思想の發達といふ見地から等閑に附し得ないものもある。玆にその最も主要なるもの二三點を論評して置かう。

○

第一に注意すべきは、後繼内閣が實際何人に依て作らるゝかの點である。政黨者流は所謂憲政常道論を振り翳して下院に於ける多數黨（最大多數黨又は其の失脚せる場合には次位の多數黨）に當然組閣の大命の降るべきを說くも、之は理論上にも實際上にも未だ確乎たる原則となつて居ない。僕一己の意見としては、理論上所謂憲政常道論に贊するも、我國の政黨が其の當然の發達を爲して居ない所から、今日遽かにこの理想論を文字通りに行はねばならぬとするの說を執らざるは、既に屢々述べた。孰れにしても、今日我國の組閣責任は政黨者流に認められず、所謂大權内閣の專制的理論を背景として仍然として元老閥族の裁斷する所となつて居る。從つて今度の清浦内閣にした所が、結局に之を産んだものは、上は松方西園寺より下は平田牧野の數輩ではないか。

只此間に僕は内閣組織に對する所謂元老の役目に漸次多少の變更あるを看逃すことは出來ない。數年前ならば輦轂の下に元老會議を開くところだが、今日は彼等の多くは凋落し、僅に殘るもの亦高年の故を以て帝都に留るに堪へず、而して東京に在る所の後進政客はいまだ先輩と相并んで元老の名を僣し得るの威望を有たず、詰り元老なるものゝ影は政界に於て著しく薄くなつた。成る程最後の決定に就ては今なほ矢張り西松二公の制を仰ぐが如きも、二公は最早内閣構成に付ての積極的首動者ではない。事實上の發言者たる役目は内大臣としての平田や宮相

としての牧野邊に移つたと謂はねばならぬ。清浦は結局組閣の大命を蒙るべき運命となつたから直接之に與らざるも、若しさうでなかつたら彼をも加へた平田牧野邊が元老に代つて內閣構成と云ふ仕事の事實上の擔任者となるといふのが昨今の大勢と觀てよからう。尤も之等の人々が西松二公と何等の連絡なくして尙ほ這の大任を引受くるか又之を世間が許すかは問題だが、所謂元老とても之等の人々の活動に相待つでなければ昔通りの勢力を振へ得ない樣になつたことは疑を容れない。

斯く考へて更に西松二公百年の後は一體どうなるだらうかを思ひめぐらして見ると聊心細くもなる。西松二公の干入に對してすら世間には既に多少の文句がある。更により威望に乏しき平田牧野邊の人々に組閣の運命が全然左右されるとなると、政界は果して之に安んずるだらうか。但し、之を可とすると否とに拘らず、內大臣宮內大臣等の今後も此等問題に與かるべきは疑あるまい。そこで彼等は從來西松二公に倚て附けた箔を何處か他に求めて世論に對抗するといふ態度に出づるのではあるまいか。僕の推測では、之が爲に誘はるゝ者は樞相の外差當つては上院議長であらう。上院議長を加へても收りが六かしいとなると下院議長が招かるゝのは自然の順序だが、之はしかし餘程問題だと思ふ。元來ならば上下兩院議長の如きは、內大臣や宮相以上に（之等少數の人々が專ら組閣の談合をするといふ慣例が差支ないと假定して）相談を受くべき權利がある筈と思ふけれども、辭職して往く前首相にさへ後任奏薦の權利を斷じて阻む程の政界今日の情實では、恐らく下院議長にまで組閣談合に於ける發言權は容易に認められぬだらう。併しこの點も勢ひ推進する所何時までも舊態を續けることは許されまい。段々世論に壓倒されて下院議長をも加へるといふことに遠からずなると信ずるが、其の時は實に組閣に關する實際の責任が既に下院に移つた時でなければならぬ。僕は今日の狀勢に對しては固より全然不滿であるけれども、之を永い發展の一階段として觀るとき、必しも悲觀すべき狀態とも思はないのはこの爲めである。さればと云つて、正しい將來を出現さすべく常に大なる努力を必要とするは云ふまでもない。

○

第二に注意すべきは推薦の基礎となる標準如何の點である。換言すれば推薦さるべき人に對して求めらるゝ資格要件である。之を逆に云へば何の點で清浦子爵が時局多難の今日內閣を組織すべき最適任者と認められたかの點である。新聞の報道等を綜合して考へて見ると、之には二つある。一つは來るべき總選擧を公平に行ふを期待し得ることで、他は今期議會を無事切

り拔ける見込のあることである。下院に於て政友會は絕對多數を擁するも之に政權を托するわけには往かない、さればとて憲政會に天下を渡してはまた來るべき選擧に紛雜な且つ不正な黨爭を避け難い。斯くて政黨以外に組閣の材能を求めたのであるが、所謂綱紀肅正の叫びの强い今日右の顧慮は至當の要求だと思ふ。併し乍ら吳々も忘れてならぬことは、此點を貫かうとする以上、議會を無事切り拔けるといふ要件は實は到底充さるゝものでないことである。不正の黨弊を矯めるとは一體何の謂か。具體的に云へば政友會の横恣を抑へることではないか。政友會に對して斷乎たる挑戰を決行せずして今日如何にして政界の綱紀をたゞすことが出來ると思ふか。而して議會を無事に切り拔けよと求むる。無事に切り拔けるとは政友會と妥協せよといふことではないか。豫め政友會の要求を聽容するの前提を以てして綱紀肅正の實を擧げんとするは、正に木に椽て魚を求むるの類ではあるまいか。

孰れにしても淸浦內閣は右の如き相容れざる二つの要求に促されて出來た。こゝに此の內閣の難關がある。事なきを好む側の要求を充せば、忌むべき政弊は依然として絕へず心ある者の顰蹙を避け難かるべく、又政界刷新の方向に一步でも進めん乎、政友會との戰鬪は到底免るべからざるを以てである。併し僕は淸浦內閣に前者をすてゝ後者の態度に出でんことを望んでやまない。斯くして勇敢に政弊と鬪ふことに依て淸浦內閣はせめてもの存在理由を主張し得べきを思ふからである。

○

第三に注目すべきは淸浦內閣の事實上の構成は全然硏究會の手に成つたといふ點である。從來の例に依れば、淸浦子爵が主動者となつて組閣の仕事を爲し遂ぐべきであつた。硏究會の如きは多くの場合に於て大命拜受者より顧慮せられ又その顧慮せらるゝ程度も年と共に加はり來るは疑ないが、未だ曾て彼が自ら組閣の首倡者となつたことはない。而して淸浦子爵は其地位から云つても其經歷から云つても單獨に組閣の仕事を爲し遂げ得るの力がある筈だのに、わざ〳〵硏究會に全權を托して自ら木偶漢に甘んじたのは一體どう云ふわけか。

傳ふる所に依れば、淸浦內閣ははじめ有松英義氏を拔いて內相たらしめんとしたとか。若し第一步をこゝから踏み出したものなら、淸浦內閣は確かに名實ともに淸浦子爵の內閣であつたらう。さすれば淸浦內閣は或る意味に於て山本內閣の延長であり、而して不本意ながら山本內閣を許した世論は同じ立場で淸浦內閣をも許したであらうと思ふ。然るに淸浦子爵は山本伯だけの勇氣がなかつた爲めか又は山本內閣が上下兩院の大政閣の

反抗に苦んだ經驗に懲りた爲めか、初めからこの種大政團と紛めて爭はざらんとするの用意に沒頭し過ぎた。其結果はどうかと云ふに、上院だけは無事に制し得やうが、下院の操縦すらが夫れ程樂に往けるかどうか怪しい。若し夫れ研究會に組閣を一任せるの結果世論の反感を無用に挑發せるの愚に至つては私かに子爵の聰明をさへ疑はずには居れぬ。

研究會に組閣の仕事を一任せるの結果、更にも一つ注目せねばならぬことは陸海軍大臣の選定である。清浦にしても山本にしても、彼れ程の經歷と威望とを以てしたなら、自分を主動的地位において某の大將某の中將を招くに格別の差支がなかつたらう(二三巨頭の了解を得るの例は已むを得ぬとしても)研究會の靑木水野邊の粒の小さい所ではさうは往かないものと見へ、乃ち陸軍なり海軍なりに推擧を賴むといふことになつた。現に今度は陸軍は陸軍、海軍は海軍で非公式的な巨頭會議を開き、其の相談の結果で夫れ〳〵の大臣がきまつたではないか。斯うして出て來た大臣に我々は如何にして內閣大臣としての連帶責任を要求し得やうか。選任の方法に於て陸海軍大臣は全然他の大臣と別世界の人である。而かも閣議に於て彼等はやはり全然同一の發言權を有つのである。憲政運用の機關として實に奇々妙々の話と云はねばならぬではないか。

この外にも論ずべきことは澤山あるが、そは今後政界の進運に連れてまたつぎ〳〵に論じやう。とにかく以上述べた點は清浦內閣そのものを理解するに必要であると共に、之から先きの政界の運命を考ふるにも相當の關係ありと信ずるものである。

（古川學人）

松岡讓新著　廿五版

満五ヶ年間の努力にて漸く完成したる千五百枚の大長篇

未だ世界の文壇に比類なき此題材！哲學的深遠と宗教的情熱に滿ちた大作！

これ日本に於ける宗教改革の導火線に非ずして何ぞ、實に此長篇こそ現代日本が生んだ唯一の世界的作品である。

篇中に取扱はれてゐる問題は其範圍頗る廣大である。

先づ親子の問題、宗及び職業の問題、人は如何にして生くべきやの問題、個人主義の問題、他愛主義の問題、思想問題、農村問題、友情の問題、更らに信仰問題、寺院批覈問題、本山對末寺の問題、末寺對信徒の問題、廢寺合寺、布施生活、宗學教權の問題、本山改革の問題等其他、悉く生きた我々の問題として涙ぐましい迄、我等の胸を打つ。

これ正に宗教界思想界讀書界を驚倒すべき不朽の傑作であり本書房が處女出版としての一大收穫である

法城を護る人々

批評界の權威土田杏村氏は本書を激賞して

「法城を護る人々」は一の宗教文學であるが、恐らくは同時に**明治大正が持つた最大の宗教文學だ**と呼ぶとして、必ずしもそれは私の判斷の偏狹ではあるまい。私は實はもつとそれ以上に高くさへ此作を評價してゐる。全篇を讀み終つた、私に觸に獨語した。「法城を護る人々」こそは、親鸞の流れを汲む人達に取り、**實に蓮如以來の大文章**として味はれると、私はそれほど此作に傾注して彼の表現力の偉大さに敬服し、且つ其自重を祈つて已まないものである。（中略）

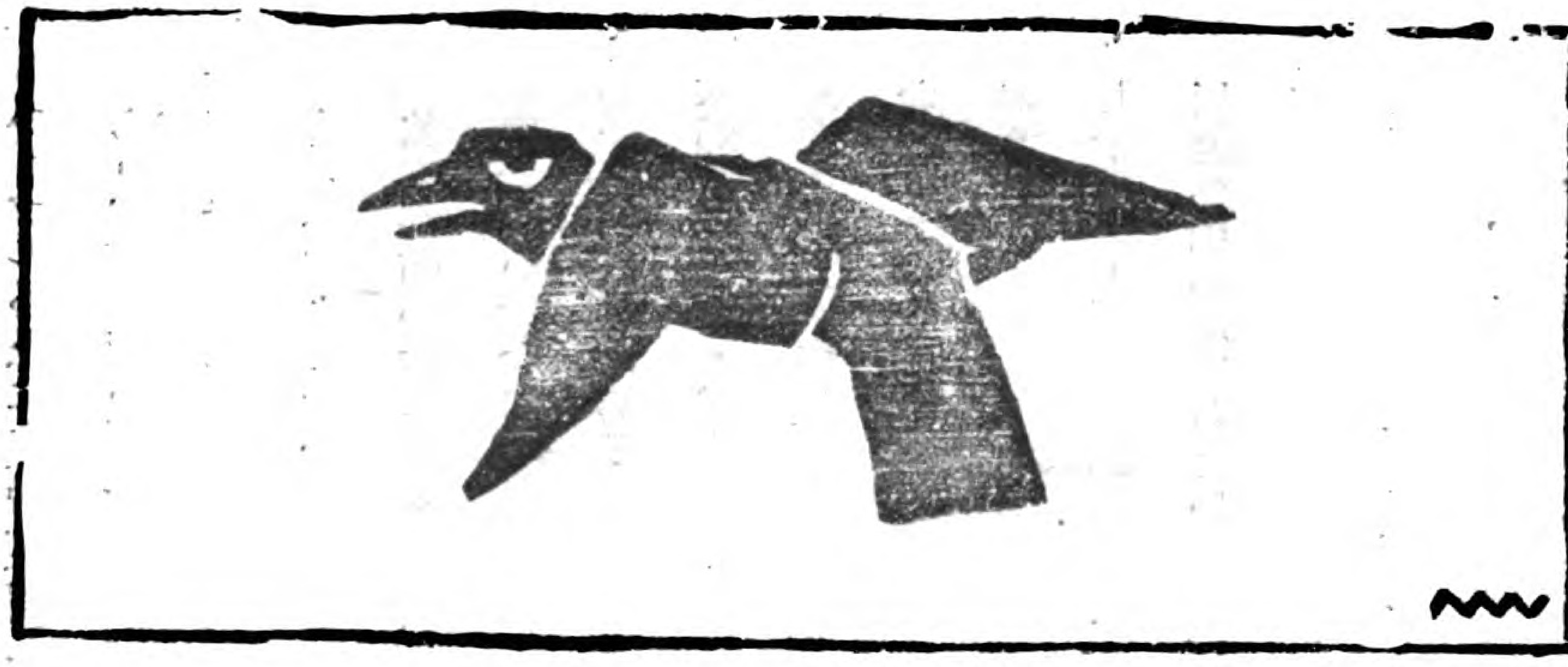
彼は實に其悲痛なる體驗を赤裸に投出して、佛教者全體に挑戰し、宗教革命の赤旗を高々と揭げた。法王も挑戰せられた。侍從長も挑戰せられた。大學教授も說教者もすべて彼により挑戰せられた。**革命の鐘は高く鳴つてゐる。**

私は彼の作品の宗教的特色を餘りに高調し過ぎた。それ故に此作品の藝術的價值が割引かれるとしたら、彼に取つて寧ろそれは大なる不本意であらう。彼のタッチは男性的である。そして少しの生硬さも持たず、古典としての完成を見せて居る。（「詩と哲學」震災號）

なほ批評の全文と作者の感想を印刷した卅二頁の小冊が出來て居りますから、葉書で御申越次第謹呈いたします。

四六版五百八十頁
表紙布全面金模様
天金函入特製本
定價貳圓六拾錢
送料拾八錢

東京高輪南町六
第一書房
振替東京六四一二三
電話高輪一一九四



影法師

正宗白鳥

人物

戸田保　五十くらゐ
順原清太郎　五十くらゐ
妻よし子　四十あまり
娘くに子　二十一二
とみ子　四十あまり
ある青年　二十七八

十二月初旬

（一）

安つぽい洋風まがひの書齋。清太郎は褞袍を着て片隅のテーブルに向つてゐる。

テーブルの上には萬年筆インキ壺原稿紙などが備へられてゐる。側には石油ストーブが燃えてゐる。一方に書棚があり、來客用の圓形のテーブルなどあり、ガラス窓がついてゐる。

清太郎（封筒を取上げて見詰めながら）不思議な男がやつて來たものだなあ（と獨言を云つて感慨に耽つてゐる。）

そこへ、よし子が丸髷のやゝ崩れた、衣服も古ぼけた榮えない風體をして、しかし顏には微笑を浮べて入つて來る。

彼女が何か云はうとしてゐるのに先んじて、

清太郎　おい。今に不思議な男がやつて來るよ。

よし子　不思議な男？　誰れでせう？

清太郎　ハヽヽヽ、もう心配になるんだな。お前はこの頃は馬鹿に神經過敏になつた。今日訪ねて來る男は何でもないんだよ。二十年近くも音信不通だつた人間で、そいつが今日突然おれを訪問するつていふ手紙を寄越したのだから、おれはさつきから不思議に思つてゐたのだ。お前もよく知つてる戶田のことなんだがね。あいつまだ生きてたのかねえ。

よし子（テーブルの側に立つて、封筒に目をつけて）戶田さん？（と、記憶を呼起しながら）奥さんを離緣して相模の田舍へ引込んでるといふその人のこと？

清太郎　さうだ。二十年も會はなかつたのだからスッカリ樣子が變つてゐるだらう。田舍爺いになつてるだらうな。…原稿の締切が切迫して忙しくつてならないところへ訪ねて來られて、面白くもない話を聞かされて長つ尻をされても困るが、しかし出來るだけ優待しなければなるまい。午餐の御馳走はするやうに準備しといてくれ。

よし子　今日はお客樣にゆつくりされちや困るわ。私早くお午御飯を片付けて金崎さんのお宅へ行つて來たいと思つて

るんです。

清太郎　さうたび／＼金崎へ行かなくつてもいゝぢやないか。一通り極ることが極つたら餘計なお喋舌はしない方がいゝだらう。

よし子　だつて大事な場合ですもの。間違ひのないやうにしなければいけませんよ。いくら簡單な結婚だつて、くにが一生に一度の重大な事件なんですから、いゝ加減に、存在に、やりつ放しにしといちや、親としての義務が濟まないんです。私だちは婚禮といふやうな世間的の儀式にはまるで經驗がないんですから、その道の事に明るい人に、聞いた上にもよく聞いて置かなければ、どんな間違ひをして世間の物笑ひになるかも知れませんよ。

清太郎　何を聞くのか知らんが、聞きたいことがあるのなら聞いて置くさ。しかし、今日に限つたことはあるまい。今日は戸田を持成して、この珍らしい客の話をお前も聞いて御覽な。長い間細君に苦められた揚句に姦通までされたので、世の中に絶望して田舎へすつ込んで、以前の友人には一切顏を合はさなくなつたといふ、一風異つた男なんだから、お前もよく話を聞いて見たらいゝだらう。お前も戸田には、三度や五度會つたことがある筈だ。あの男の妻君にも多分會つてる筈だ。

よし子　えゝ。それはどちらにも會つてますわ。さつきちよつと思出したんです（興味のなさゝうに）去年の暮れだつたか、今年の春だつたか、寒い時分に、神樂坂の通りで、戸田さんの昔の奥さんにちがひない人に擦違つたんですよ。……あなたにはその時お話しなかつたかも知れないけれど。……年齢はわたしと同じくらゐでせうのに、とても四十以上とは思はれないやうな派手な服裝をして、十歳くらゐな女の子を連れて歩いてゐました。あの人今はどうしてるのか知らと思つて、振向いて見てると、先方でも此方に氣がついたやうだつたから、わたし、知らん顏して通過

ぎたのです。あの人、戸田さんをあんなに苦しめても、まだ天罰が當らないで、面白さうに暮らしてるでんすかね。戸田さんもお氣の毒な人だけれど、わたしさういふ人に訪問されたかありませんよ。くにの婚禮が近づいてる時分に、さういふ人に來られるのは緣起でもない。いやぢやありませんか。

清太郎　ホウ、お前も戸田の元の妻君に會つたことがあるのかい。おれもこの春、花の咲いてる時分に上野で妻君に會つたのだ。あの時はお前が御機嫌が惡くつて、おれも打解けた世間話なんぞし向ける氣にならなかつたせいだか、その話をしかけないでゐるうちに、忘れてそれきりになつたのだが、今、戸田が來るといふことから、ふつと思出したよ。お前の見た通りに、四十を越してゐようとは思へないやうに、若々しい服裝をしてゐた。服裝ばかりぢやない、顏も艶つぽくつて若かつたよ。先方から聲を掛けたのでね。おれも立留つて、遠慮しないでいろんなことを訊いたのだが、あの女は、自分は昔戸田に誤解されて惡名を背負はされてから、二十代にも三十代にも、さんざんに世の中の辛い鹽を嘗めさせられて來たけれど、今に戸田が自分の所へ戻つて來るといふ考へを忘れたことはない。それを力にどんな苦勞にも堪へてゐると、眞面目くさつて云つてるから不思議ぢやないか。妻君はいくら氣が若くつて身體も勢ひがいゝと云つたつても、四十を過ぎてゐるし、戸田はもう五十にもなつてる譯だ。二十年も別れてゐて、老爺老婆になつて、再び元のやうに夫婦になるなんて、そんなお伽噺見たいなことが實際にあるものぢやない。それに、あとで宮川に訊くと、あの女は二度目だか三度目だかに、久本なにがしといふある會社の重役の後妻になつて、子供まで生んで豐かに暮してるんださうだ。田舍にくすんで一生を泥に埋めてしまつてる戸田のことなんか、あの女の頭の中ぢや、昔壞した瀨戸物の破片くらゐにしか價ひしてゐないだらうのに、おれに久振に會つたものだから、あんな氣取つた臺詞を云つて、一時の慰めにしたんだね。あの女は男一人の一生を叩潰したゞけあつて曲物だよ。

よし子　づう／＼しいんですよ。あなたがそんな人にかまふのがいけないの。女のちやらつぽこを眞顔で聞いてるあなたが馬鹿なんですよ。(多少興奮して云ふ)

清太郎　(ニヤ／＼笑ひを浮べて)誰れに限らず、年齢を取ると、眞面目でちやらつぽこを云ふやうになるんだよ。筆の上でも、お互ひに眞面目らしくちやらつぽこを書くやうにもなるんだしさ。

よし子　それは世間を渡るのには、ちやらつぽこも必要でせうけれど、家庭の中へはちやらつぽこを入れちやいけないんです。あなたは家庭では決してちやらつぽこを云はなかつた人だつたぢやありませんか。

清太郎　それがこの頃は云ふやうになつたと云ふのかい。おれは昔も今も變りやしないよ。お前の神經がさう感じるやうになつたゞけなんだ。

よし子　どうかすると、わたしの神經の所爲にするのね(足がだるいと云つた風で椅子に腰を掛ける。しかし窮屈さうに)わたしの神經がそんなに調子が外れてる譯はないんですよ。あなたが時々難癖をつけなさるから、私は、くにが藤島さんに診て頂いた次手に、わたしの身體もよく診斷して貰つたんですけれど、お醫者さんはどこにも異狀はない、健全だつて保證をして呉れたのです。お醫者さんがいゝと云ふのに、あなたが勝手にわたしを神經病みに極めてしまふのは酷いぢやありませんか。

清太郎　(宥めるやうに)おれの言ふことを一々氣にしなくてもいゝよ。おれも平氣な顔はしても今度は隨分頭を痛めたのだから。………筆でこそ婦人の解放だの、婦人の自由だのと書立てゝ、放縱な女を讃美したやうな創作も書いてるのだが、自分の家庭は平凡無事でありたいよ。くにも危い所で無事に收まつたからいゝやうなものゝあの時大村との縁組が成立つてゐたなら、おれたちの一生の幸福は破壊されてゐたのだよ。その事を思つたなら、お互ひに下らな

い不平なんぞ起さないで、喜んでゐていゝんだ。

よし子　大村さんの事は一切口に出さないことになつてるのぢやありませんか。あなたはくにの前でも、どうかした機勢(はずみ)にあの人の話をするからいけないの。くには感じが强い子だから、大村といふ名を聞いてもビク〳〵して胸をいためるらしいんです。本當にこれから氣をつけて下さいよ。

淸太郎　大村は無邪氣らしい顏してるのに、あんな僧惡を持つてゐるのかな。分らんものだ。

よし子　あの人の事は今日から忘れておしまひなさいよ。

淸太郎　さうだなあ。

原稿紙の上に目を落して眉を顰めて、それから椅子を離れて、ガラス窓越しに外を眺める。

よし子（振向いて詰らなさゝうに）ぢや、わたしはお客様のお持成(もてな)しの用意に取掛るんですかねえ。

淸太郎　有合せのものでいゝんだよ。十時から十一時までの間に來ると云ふんだから、もうやつて來るだらう。………今朝はよく晴れてゐたのに、いつの間にか曇つたやうだな。外は寒さうだ。お前は金崎へ行くにしても、溫い日にしたらいゝだらう。………これは不思議だ。オイ、ちよつと此處へ來て見ろ。早く。

よし子　どうしたんですよ。

よし子が慌だしく側へ寄つて行くと、淸太郎は向うを指差しゝて、

淸太郎　くにが誰れかと一しよに歸つて來てるだらう。話をしながら。

よし子　わたしには顏がよく見えないけれど、あの人を戸田さんだと思つてゐらつしやるの。

淸太郎　うん。あれは戸田にちがひないよ。遠方から見てると、昔の戸田とさう違つてもゐないね。しかし、くにに會

つて一しよに來るのは不思議だ。………くには懷つこさうな顏して話してるぢやないか。

よし子　眞實に戸田さんですのね。いやになつちまふよ、くにはあの人と何處で會つたのでせう。戸田さんもニコ〳〵して何か話してるぢやありませんか。さういふ變な人に變な話を聞かされるのは、くにのためによくないでせうのに。

淸太郎　おれの家へ來る道を偶然くにに訊ねてから知合ひになつたのかも知れないね。………窓を開けて聲を掛けて見ようか。

よし子　およしなさい。

淸太郎　まあよく見ろ。くにはお前の心配してるやうに身體が弱つてもゐないし、精神も陰欝になつてゐやしないんだよ。戸田は寒さに慄えてるやうな顏をしてるのに、くには元氣がよさゝうぢやないか。幸福があの子の胸に漲つてるやうぢやないか。あの子も、この頃は親の前では少し極りが惡い氣がして萬事控え目にしてるので、陰欝らしく見えるんだらう。外を歩いてゐる時なんかは、誰れに遠慮も入らないので、あんなに元氣がいゝんだらう。

よし子　さうでせうか。………さうかも知れませんね。わたしはこの頃は何事にでも思過ごしをしていけない。

淸太郎　何しろ今日は不思議な男がやつて來たものだ。

よし子　どんなお客樣でも冷遇していゝ報ゐが來よう筈はないから、出來るだけのお持成しをしませうよ。

淸太郎　それがいゝ。………戸田の奴、何か感じてるやうな顏して此方を見上げてるよ。おれが玄關へ迎へに出てやらう。お前は此處を片附けといてくれ。

淸太郎が襖を開けて出て行くと、よし子は、隅つこに置いた書物や雜誌を載せてあつた來客用の安つぽい圓形の卓子を眞中へ持出して、邪魔物を片附けて、埃を拭つた。そして、玄關の方の聲に耳を傾けながら、椅子を並べなど

してたが、やがて、窓掛を直しながら何氣なく外を見下して、ふと不安に捉はれた表情をして、何時までも外を見詰めてゐる。そこへ、清太郎と戸田とが入つて來る。戸田は田舍者らしい服裝をしてゐる。

清太郎　二十年も田舍で孤獨で暮してゐたやうな非凡な人間だから、眼力までも非凡なんだね。

彼れはさう云つて、よし子を戸田に紹介して、

清太郎（よし子に向つて）戸田君は電車を下りると、くにに會つたのださうだ。それで一目見ると直ぐに、この子は須原の娘に違ひないといふことを見破つたのださうだ。くにがそんなにおれに似てゐるとは思はれないが、戸田君の眼力がえらいんだね（悅しさうに云ふ）

よし子（さつき窓外を見てから落着かない樣子をしてゐて、珍客に對してはさしたる注意を向けないで）さうで御座いますかね。それはくにがお出迎へに出たやうでよろしう御座いました。どうぞ此方へお掛けなすつて下さいまし。

戸田　有難う。………僕はすぐお暇いたしますからおかまひ下さらないやうに。

戸田は部屋の中を見廻して椅子に腰を掛ける。よし子は襖の外へ出て行く。

戸田　僕は十七年目に出て來た譯だが、東京の市街の樣子はまるで變つてるから、方角も分らないよ。昨日來て今日此處へお訪ねした譯で、まだ何處もよく見てゐやしないんだが。

清太郎　田舍でどういふ風にして暮してゐたのだい？　それで何か用事があつて東京へ來たのかい？

戸田　僕は昔の友人に會ふと、まづさういふ質問を受けなければならないんだね。僕の事も聞いて貰つてもいゝが、君がかういふ家で妻子をもつて暮してゐることが珍らしいことのやうに僕には思はれるよ。さつきお孃さんに會つていろんなことをお訊ねして、こゝで久振りに奥さんにもお目に掛つて、それからこの書齋の中を見てゐると、君の二十

年來の生活が一度期に僕の頭の中に動いて來るやうだ。君の創作も時々拜見して感心してゐたのだが、今お訪ねしたばかりで、本當の君の生活がはじめて分つたやうな氣がするよ。……君は都會で働いてゐても肥つてゐる。僕は田舍でなまけてゐても痩せてゐる。空氣のよしあしにはかゝはらない、人間は人情を食つてゐなければ肥らないものらしいね。

淸太郎　僕のやうに都會で生活に追はれて齷齪しとつちや、精神が疲れつちまふよ。それに年齡が年齡だからね。今度娘を緣付けたら、何處か溫かい田舍へ行つて靜養したいと思つてるんだ。君の故鄕の方は山の方へ寄つてゐても東京よりはずつと溫いんだらうね。

戶田　僕は東京の氣候は忘れてゐるから、僕の故鄕と比べてどちらが溫いか、よく分らないよ（そんなことはどうでもいゝと云つたやうに無愛想に答へたが、調子を改めて熱心に）君のお孃さんは結婚するのかい。もう結婚期に達してゐると、さつきから思つてゐたのだ。

淸太郎　年內に式を擧げることになつてるんだよ。僕もいよ〳〵お爺さんになるんだね。都會に住んでゐたつても大した面白いことに會はないで老朽ちてしまふのだから、君のやうに田舍に引込んでゐる方が却つてよかつたかも知れない。

戶田　さうとは知らなかつたから、さつきお孃さんに間の拔けたお話をしたよ。

淸太郎　緣談といふものは面倒なものでね。

戶田　お孃さんのお名前は何と云ふのだね。

淸太郎　くに子といふのだよ。

戸田　さうだな。昔聞いたことがあつた。くに子さんは容貌がチヤーフルでいゝが、云ふこともキビ〳〵してゐる。當世の若い女は昔の女のやうに因循でも陰險でもなくなつたのだね。

そこへよし子が茶を入れて來たが、不機嫌な顏をしてゐる。

淸太郎　あとでくにに此方へ來るやうに云つてお吳れ。お客樣のお相手をしろつて

よし子　くにはひとりで何だか忙しさうにしてゐますよ。

よし子は愛想なく云つて、窓の外を氣にしながら退く。

淸太郎　君の消息は誰れから聞いたともなく聞いたことがあつたが、本當に孤獨で暮してゐたのだらうね。家庭や社交には附きもののゴタ〳〵した俗惡なことは一切經驗しないで、仙人か聖人のやうに潔白に生きて來たのだらう。君の風采はこちらにゐる我々の友人とはちがつて仙骨を帶びてゐるよ。

戸田　さう見えるかね（苦笑して）僕は二十年を一日の如くに生きて來たとも云へるし、二十年に千年の日を生きて來たとも云へるよ。それで、今度はこの世の生命を終る前に、本當の安心を得たいと思つて、わざ〳〵やつて來たのだよ。それについて君の力を借りたいと思つてゐる。

淸太郎　へえ（不思議さうに）それはどういふことなのだい。僕に出來ることなら君のために盡して見よう。

戸田　大した六ケ敷ことぢやないんだよ。………僕は田舍にいくらかの動産や不動産があつたのだが、さういふ者を運轉して何をしようといふ興味はなかつたので、讀書の外には自分だけで勝手な夢ばかり見て暮して來たのだがね。僕はどうしても、元のとみ子に會はないかぎりは、安んじて目が瞑れないやうな氣がするんだ。僕のために掘られてゐる暗い穴の中へ追込まれる前に、とみ子に會はなければ、僕の來世は無限に眞暗な時が續くやうに思はれるんだ。二十年間の

讀書も、僕に、お前はとみ子に會へ、すべての事を棄てゝとみ子に會へ。その外にお前の魂を救ふ道はないと教へてくれたゞけなのだ。實際の世間と遠ざかつてゐた僕は、普通の日本人の習慣を知らないし、君だちのやうな時代の風潮を代表してる人々の考へも知らないのだが、僕は、自分の生きる道も死ぬる道も、自分の身體のどこかに宿つてゐる魂を永遠に救ふ道も、とみ子と面と向つて會ふ外はないと、この頃は確信しだしたのだ。それで、外には何の興味もない、空虚な音としてのみ僕の耳に響いてゐたトウキヤウといふ都會へ、わざ／＼やつて來たのだ。………君は僕のために平和な順序を踏んで會はしてくれるだらうか。君に斷はられゝば、僕は自分で外の工夫をして目的を達ようと思つてゐる。………僕も晝の空想や夜の夢の中では、絶えずとみ子に會つてゐたのだから、生身のとみ子に會ふのも出し拔けに會ふやうには思はれないんだよ。

清太郎（呆氣に取られてゐる態）昔の妻君に會うと云ふのかい。君の話を聞いてゐると、外國の近代のドラマの臺詞か小說の文句を聞くやうだが、長い間田舍にばかりすつ込んでた君から、さういふ話を聞されるのは意外だ。

戸田（平然として）あゝいふ事情で離別した女に十幾年目で會はうといふのは、君には意外に思はれるかも知れないね。しかし、君があれから十幾年の間、奥さんと平和な生活を續けて、美しいお孃さんを育てゝ來たのも、僕には意外に思はれるよ。かうして世の中はあちらでもこちらでも時が經つて行くんだね。人間の幸福はその外にはないのだらうから、それでいゝのかも知れないね。僕も、あの時、………（ふと、昔の幻影をあり／＼と思浮べたやうに）とみ子の身持を疑つて落膽して、狂人見たいになつて山籠りの決心をしたりなんかしないで、たとへあれが陰でどんなことをしてゐようとも、そんなことに拘泥しないで、何時までも同棲を續けてゐりやよかつたと思ふこともあるよ。僕に取つちや、とみ子がたゞ一人の女で、外の女は小說の中の女と同樣でみんな影見たいなものと云つていゝか、あ

るひは、肉體だけであつて魂のない動物見たいなものと云つていゝので、僕は長い間その影見たいな小說の中の女と書齋の中で親しんで來たし、魂のない動物見たいな女にも觸れて來たのだが、僕を安心して目をつぶらせてあの世へ送つて與れる者は、天にも地にもとみ子の外にはないやうに思はれる。……君に僕の心の中が理解されなければされないで構はないが、たゞ僕をとみ子に會せるように道をつけちや與れないだらうか。

滑太郎（當惑して）それは手易いことのやうだがね。……しかし、とみ子さんはあの後外の人に再婚して子供まで出來てるのだらうから、君が會つたつて詰らないぢやないか。君がそれほどに思ひを殘してるのなら、何時までも心の中でだけ昔の思出を樂んでゐる方がいゝのぢやあるまいか。十何年の間にや、女の容色は衰えてゐるだらうからね。會つたら君が今まで長い間描いてゐたイルージョンが破れるだけだよ。

戸田　それが世間の人の云ひさうなことなんだらうね。……いや、僕もさう思つたらばこそ、五年も十年も前から、昔の決心も誓ひも破つてとみ子の所へ驅けつけようとたび〳〵思立つたのを堪え〳〵して來たのだ。しかし、もう堪えきれなくなつたのだ。一刻躊躇してるうちに僕の生涯も終るかも知れないのだから。僕は殘つてゐる僅かな生命を樂むためにとみ子に會ひたいといふよりも、死ぬる用意のために、死の苦しみを和らげるために、とみ子に會はなきやならないのだ。（次第に調子を强めてからかう云つたが、ふと惰氣たやうに）君にも外の世間の人にも、僕の云ふことなんどは馬鹿げた詰らないことに思へるんだらうね。死ぬる苦しみを和らげて貰ひたさに女に會ふ。しかも、燒殺しても八つ裂に裂殺しても飽足りないほどに憎んでゐた女に、五十にもなつて、頭の毛が白くなりかゝつてから、その女の前に跪いて情けを乞はふとするのだから、君だちのやうに長い年月妻子と共に平和に暮して來た人には馬鹿げて見えるかも知れないね。

清太郎　僕等だつて何で平和と幸福の日ばかりが續いてゐるものか。あゝ獨身でゐたらと、つくぐ思つたことが幾度あつたか知りやしないよ。

戸田　さう思ひながら君はくに子さんを結婚さすんだね（皮肉らしい笑ひを洩らして）

清太郎　これも世間並に親の義務を果たすだけなのさ（據ろなく笑つて）先きはどうなることか分りやしない。

戸田　それで、くに子さんは、將來の夫（をつと）と極められた人に滿足してゐなさるんだらうね。

清太郎　滿足してゐるのかゐないのか、親の目でもよく分らないが、僕の娘はまだ世間に擦れてゐないから、兩親が撰んだ事に素直に信頼してゐるらしいよ。

戸田　さうかねえ（得心の行かぬ風で）僕はさつき途中でお會ひした時に、西洋の何とかいふ小說に出てゐた女を連想した。僕は都會で育つた當世の若い女については丸つきり實際的知識がないのだから、何でもないことにでも西洋の小說なんぞを連想したりしたのだらうがね。……僕なぞの若い時分の女と今日の女とは男子に對する考へ方や態度が違つてゐるのだらうし、從つて結婚の樣式も僕なぞの時分とは違つてゐるのだらう。それで、さつき此方へ來る途中でも考へたことだが、昔のとみ子を當世の女として見たら、さほどに非難すべきものぢやあるまいよ。（これは獨言のやうに云つて、ふと相手の顏を見詰めて）くに子さんと結婚する相手の人はどういふ人なんだね。

清太郎　去年帝大の法科を出た男だがね。別段秀才とか何とか云ふのぢやないのだが、人間が着實らしいので、僕も今度の縁談に乘出す氣になつたのだよ。どうせ僕等の娘がさうえらい所と縁組みの出來よう筈はない。極めて平凡な結婚なのさ。

戸田　着實なのは何よりも結構だが、その青年はどんな風采をしてゐるんだね。背が高くつて色が白くつて顋（あご）が少し尖

つてゐる人ぢやないだらうか。

清太郎　いや、そんな男ぢやないよ。君はなぜそんなことを訊くのか。（不快さうに）

戸田　不斷金緣の眼鏡を掛けてやしないか。

清太郎　いや眼鏡なんぞ掛けてやしないよ（顏を曇らせる）

戸田　はてな。………ぢや、僕が思ひちがひをしたのか。

清太郎　君はさういふ青年にどこかで會つたのかね。僕の腑に落ちるやうによく話して吳れたまへ。

戸田（淡白に）別に深い譯があるのぢやないよ。東京驛から此方へ來る電車の中で、君のお孃さんが、背の高い色の白い顋の少し尖つた金緣の眼鏡を掛けた青年と口を利いてゐたのを見たので、僕の空想でいゝ加減なことが拵らえられたのさ。

清太郎　その青年はどこで電車を下りたか、君は氣がつかなかつたかね。ひとりで下りて行つたらうか。

戸田　僕はそつちばかり見てゐやしなかつたから氣がつかなかつたが、中野で僕が下りた時にや、その青年の姿は見つからなかつた。僕等の學生時代とはちがつて、この頃は西洋の小說にでも出て來さうな青年が、東京の街上にもウヂヤウヂヤするほどゐるんだね。

そこへ、くに子が盆にのせた菓子鉢を持つて來る。質素な服裝をしてゐる。

くに子　先ほどは失禮いたしました。

戸田　私こそ。しかし奇遇でしたね（快げにくに子を見る）

清太郎　まあここにゐてお話をしろ。今日は河井先生のお宅へお見舞に行つたゞけなんだらうね。先生の御病氣はどん

なだつた。

くに子　御病氣は大變よくおなりなすつたの。それで、退屈だからもつと話して行けつて、容易に歸して下さらなかつたのです。病室が溫か過ぎるほど溫かいものだから、わたし坐つてゐると眠くなつて、ほんとに困りましたわ。先生のお話はいつものやうにお說法見たいで面白かないんですもの。

清太郎　（やゝ安心して）たまにはお說法を聞くのもいゝだらう。……この方はおれの古いお友だちで、田舍に二十年も籠つてゐなすつた仙人とでも云つたやうな方なんだよ。

くに子　さう？……わたし、この方を家へ御案內する途中で、過去の御生活のことをお聞きしました。わたしには世の中のことはまだなんにも分らないんですけど、身に染みて承りましたの。河井先生のお說法なんかとはちがつて、わたしの胸に響くやうに感じたのです。

清太郎　ホウ、それは不思議だ。何をそんなに感じたのだね。

戶田　くに子さんのやうな純潔な若い方に、僕の過去の事件なんかを露骨に話したのはよくなかつたかも知れないな（淸太郎に向つて）僕は、くに子さんが君のお孃さんだといふことが分ると、急に懷かしくなつて、無遠慮に一切のことをお話しゝたのだよ。無論要點だけを掻摘んでちよつと口外しただけなのだが、僕の身の上の事なんかを、結婚前のくに子さんの耳に入れたのはいけなかつたらうね。

清太郎　なに構はないさ。……しかし、くには何をそんなに感じたのだらう？

くに子　わたし、この方の前では何事を打明けてもいゝやうに思はれますのよ。衛生軒の前でだし拔けに聲をお掛けになつて、それから御一しよに步いてゐると、だし拔けに珍らしいことを聞かせて下すつたので、その時わたしには、

天啓のやうに思はれました。どんな目に會つても、最初に眞心から愛してゐた男を棄てゝはいけない。はじめに愛した女を棄ててはいけない。自分は最初に愛したゐた女を、些細なことから疑つたり憎んだりして、人生と一しよに棄てゝ山の中へ入つて、十何年も拗ねたつもりで暮してゐたのだけれど、それで自分の滿足が得られはしないし、自分の身に少しの價値もついた譯ぢやなかつた。いくら棄てたつもりで逃げても〳〵人生のにほひは自分の心から消えりやしないし、最初の女は自分の心にこびりついてゐて離れやしない。それだから、相手の女や男に、たとへ虐げられようとも、どういふ葛藤が起らうとも、周圍からの壓迫があらうとも、どうしても、最初の相手を離れちやいけない。自分は十何年の孤獨の生活を續けた果てに、最初の女をたづねてトボ〳〵とやつて來た。たとへその女に蹴られても打たれてもいゝから、その女に會ふつもりだ。世界のうちで自分に光を見せて呉れる所はその外にはないのだ。杖を突かなければならぬやうな年齡になりかゝつて、こんな考へを起すほどなら、なぜ、あの時に、十何年の前に、打たれやうと蹴られようと、最初の女の側を離れないでゐなかつたのかと、自分は後悔してゐる、と、かういふ風に仰有つたのでした。

戸田　どうもあなたの記憶のいゝのには驚いた。あなたは學校の成績はよかつたにちがひない。

清太郎　會ふ匆々そんなお說法を聞かされたのか。河井先生の所でお說法を聞かされた歸りに、また戸田君に聞かされたのだから、くにも今日は大變に精神修養したわけだね。

くに子　でも、この方から承はつたことは、聞いてゐて眠くなるやうな河井先生のお說法とはまるで違つてゐるんですわ。この不思議なお客樣が聞かせて下すつたことこそ、眞理といふものぢやないかと、わたし思はれてなりませんの。お父さんは、よく誠實な人間は昔から一生眞理を捜してゐる。人間はこれが眞理だと確信したなら、苦しみにも悲しみにも耐へてその眞理に從つて行かなければならないと、何かの雜誌にも書いてゐらしつたし、わたしにもよく云つて

ゐらしつたわね。

清太郎　それがどうしたと云ふのだね。

くに子　だから、わたし、どんな苦しみをしても眞理を守らなければならないと思はれますの。………お父さんは許して下すつて？

玄關でベルが鳴る。くに子テーブルを離れる。

清太郎　お母さんが取次に出るだらうから、お前はもつと此處にゐろ。

くに子　お母さんはさつき買物に行くと云つて外へ出たのです。

くに子が退くのを二人は目送して沈默。

戸田　僕はもうお暇しなければならないが、お頼みしたことは聞いて貰へるだらうか。

清太郎（外のことを考へてゐて）まあゆつくりしてゐたまへ。午餐を上げることにしてゐるんだから。一しよに飯を食ひながらゆつくり話をしようぢやないか。

戸田　いや、長居をしてお邪魔をしちやいけない。君も何やかやと用事が多いやうだから。………頼みが聞いて貰へないやうなら僕は外の方法を取るまでだ。

清太郎（外のことを考へながら）まあ待ちたまへ。事情によつたら、君の望みを先方へ通知するくらゐなことは僕がしてもいゝよ。……實は、一年ばかり前に君の昔の妻君に途中で行會つたことがあるんだがね。

戸田（氣色ばんで）何處で會つた？　とみ子は僕のことを何とか云つてゐやしなかつたか。

清太郎　ちよつと立話をしたゞけだつたが、君のことも話に出たよ。よく覺えちやゐないが、君と同じやうなことを云

つてゐたやうだつた。

戸田　さうだらう。とみ子も僕を離れて幸福なことはあるまいからな。

くに子が入つて來て、淸太郎に名刺を出す。

くに子　玄關でちよつとお目に掛りたいんですつて。

淸太郎　さうか。面倒なお客でなくつてよかつた。……ぢやちよつと失敬するよ。

淸太郎とくに子と出て行く。戸田は椅子を離れて、部屋の中を見廻しながら、あちらこちらを歩く。書棚の前に立つて背皮の署名を讀んで、そのうちの二三冊の洋書を引出して開けて見たりしたが、ふと、片隅の主人用のテーブルの方へ行つて腰を掛けて、袂から手紙を出して封を切つて讀みながら、淸太郎の萬年筆を執つてところ〳〵書直しをする。くに子がそつと入つて來たのにも氣がつかない。くに子は窓際へ寄つて不安らしく外を眺めてゐる。戸田は何か獨言を言ひ〳〵、筆を持つたまゝ左右を顧みてゐるうち、くに子に目をつけて、驚いて、立上つて、くに子の側へ寄る。

戸田　くに子さんでしたか。

くに子　えツ。

戸田　何を吃驚するんです？（ニヤリと笑つて）僕は今、出拔けにあなたがそこに立つてゐるのを見て、僕の昔のワイフがそこに立つてゐるのぢやないかと思つたのです。（くに子に見惚れた態度をして）僕が結婚した時にはワイフは丁度あなたくらいの年齡でした。さういへば、顏や形も何となくあなたに似てゐた。派手好きでいゝ衣服を着たがつて芝居だの淺草だのと、頻りに人ごみの中へ行きたがつてゐたつけが、あなたもさうぢやないんですか。電車の中であ

なたと話してゐた人はどういふ人なんです。僕には何か曰くがありさうに思はれてならないのだが……

くに子（薄氣味の惡い思ひをして相手を見て）あの人、わたしの知つてゐる方なんです。

戸田　なか〳〵美しい靑年だ。それで、なか〳〵油斷のならない人間らしい。……………あゝ今思ひ出した。僕の昔のワイフが、僕にないしよで芝居だの淺草だのへ連れて行つて遊んでゐた靑年があの男によく似てゐた。僕が偶然通りかゝつてそいつを見つけて、あとでワイフに詰問すると、途中で會つたから同じ道を一しよに步いてゐただけで、はじめから打合せをして遊びに出た譯ぢやないと剛情に言張つたつけ。見え透いた分りきつたことにも白ばくれて、剛情を張るのがあれの癖でしたが、女といふものは誰れしもさうしたものかな。あの時分の僕は普通人以上に嫉妬深かつたから、少しでも疑ひだすと、ワイフをつかまへてぐづら〳〵と苦情を云つたものだ。女の方でも、それだから反抗的に、外の男と遊び步くやうになつて本心にもない間違ひをやるやうになつたのかも知れない。して見ると、どちらを責めていゝか分らなくなる。一方ばかり非難すべきものではあるまい。僕は自分の惡いことは今になつてあやまりますよ（首を屈して罪を詫びる眞似をする）

くに子は呆氣に取られて、そつと部屋の外へ出ようとする。

戸田　まあ、もつとこゝにゐて下さい。まだ話したいことがあるのだから。（と言葉の調子を强く引留めると、くに子は當惑しながらも出て行きかねる）あなたは僕の話をよく聞いてよく記憶してゐて下さるから、僕は非常に悅しいんです。二十年以來僕の話を身に染みて聞いてくれる人が世の中にあらうとは僕は思つてゐなかつたのでした。僕にでも急に希望の光が見えるやうに思はれだしたのです。

くに子　わたし何だか怖いやうですわ。

戸田　怖い！　僕が怖くなつたと云ふのですか。……昔のワイフに別れる少し前に、ワイフがさう云つてゐたつけ。あなたは執念深いから怖いつて、僕が嫉妬を起してどんな殘酷な復讐をするかも知れないと恐れてゐたやうでした。しかしそれは誤解だ。復讐心に燃えてゐたならば、僕は、あの時、世界が破滅したやうに絶望して、暗い氣持になつて、しを〳〵と田舍へ逃げて行きやしなかつた。二十年近くも夢ばかり見てゐやしなかつたらう。僕は女に對しても人生に對しても、牙齒も爪も持つてゐなかつたのだ。復讐の爪も征服の爪も持つてゐやしなかつた。……（ふと我れに返つて、顏をも聲をも和らげて）くに子さんも僕を怖がらないで、こゝへ腰を掛けてお話しなさい。お父さんのお話によると、あなたは年內に結婚をなさるさうだが、當世の若い人だちは結婚に對してどんな氣持でゐるんだらうね。あなたは樂んでお輿入れの日を待つてゐるんですか。

くに子は默つてゐる。そして、窓の外へ心を注いでゐる。

戸田　あなたにはお父さんの知らない惱みがあるんぢやないかね。……僕の昔のワイフも、今どういふ家でどんな生活をしてゐるか知らないが、いくら身を飾つてゐても、心の惱みを隱し了せることは出來まい。二十年の間、ワイフは次第に華美な風をして、たび〳〵僕の目の前に、影を映してゐたのだが、あの惱みをくらますことは出來なかつた。お互ひに背き合つたゝめに、お互ひに惱んで一生を過して、惱みをもつて死なゝければならない。

くに子はふとその言葉に動かされて、戸田の顏を見詰める。

戸田　僕がワイフの前で跪いて詫びたなら、ワイフも僕の前で跪いて詫びるにちがひない。その時にこそ、二人の目にはじめて僞りのない淨い淚が浮ぶだらう。それで、お互ひの一生の惱みが拭はれるのだ。僕は安んじて死なれる氣持になるに違ひないのだ（くに子に見惚れる）

そこへ、清太郎入つて來る。訝しげに二人を見て、

清太郎　どんな話をしてゐた？

戸田（ふと夢から醒めたやうに）僕は獨言を云つてゐたのさ。しかし、くに子さんが側にゐなかつたら、獨言も云へなかつたかも知れないよ。

清太郎　くには紅茶でも入れておいで。

くに子　えゝ（氣のない返事をして）お母さんはまだお歸りにならない？

清太郎　あゝ。どこまで買物に行つたのだらう。ここへ入ると温かいが、風が出て外は朝よりも却つて寒くなつたやうだ。

くに子　わたし、お母さんを見て來ませう。

清太郎　まあいゝ。今に歸つて來るだらう（不安らしく）

くに子　でもあんまり遲いから。……先日のやうなことがあると困るでせう。

くに子出て行く。清太郎外を氣にして伸上つて窓越しに外を見る。

戸田（何氣なく）温くつても此處にぢつと落着いちやゐられないのか。君だちはさつきからみんな窓の外を氣にしてゐるやうだね。年中さうなのかい。

清太郎（極り惡げに）なにさうでもないよ。

戸田　君があちらへ行つてる間に、書棚を覗いて見たが、君の持つてゐるやうな書物は僕も大抵は持つてゐるよ。して見ると二十年の間、お互ひに同じやうな書物を讀んでゐた譯だね。同じ書物の感化を受けてゐても、僕と君とは考へ

方も生活方も違ふのだらうか。

清太郎　實際違つてゐるぢやないか。

戸田　さう云はれりや一言もない譯だが、本當に心底から違つてゐるのだらうか。君の考へが健全で、僕の考へてゐることは不健全なのだらうか。たとへば……

清太郎（手で壓える眞似をして相手の言葉を遮つて）面倒な議論は少し見合はせて呉れたまへ。僕の頭は今混亂してゐるんだから、悠長な議論など聞いちやゐられないのだ。

戸田　僕が突然やつて來たゝめに、君の頭が混亂したのなら、僕はいく重にもお詫びをする。

清太郎　なに君の所爲ぢやないよ。だけど、君が來て呉れた時から、僕の家庭にも一事件が起りかゝつてゐるらしいのだ。君には隱す必要はないがね。

そこへ、よし子が慌たゞしく、キヨト〱して入つて來る。

よし子　くにはどうしました？　あなた御存じないんですか。

清太郎　何をそんなに慌てゝゐるのだ。くにはつい今まで此處にゐたのだよ。お前の歸りが遲いから迎へに行くと云つてゐた。お前こそ何處まで行つたのだ。午餐の仕度は出來たのかい。

よし子（客のゐるのも顧慮しないで）大村がこの近所をうろついてゐるんですよ。こゝの窓から外を見た時に、此方を見てゐる男がどうも大村によく似てゐると思つたのですけど、くにに心配させまいと思つて、默つてゐたのです。それで買物に出た女手に行つて見ると、元立つてゐた所にはゐませんでしたから、あたり近所を搜したのです。先方でもわたしに氣がついたのか、スタ〱と向うへ行ちやつたんですが、その男は、たしかに大村に違ひありません。

清太郎　それが大村だつたにしても、さう騷がなくつてもいゝよ。

よし子　今は大事な時です。それに、今くにが外へ出たとすると、大村に會はないとも限りません。わたし、も一度行つてくにを連れて歸りますわ。（慌たゞしく出て行く）

清太郎（苦澁な顏して低い聲で）少し性質のよくない青年が、くに子に付纒つて困つたことがあつたのだ。ある知人の手を經て、その青年から結婚の申込みも受けたのだが、斷然拒絶したのだよ。……年頃の娘を持つと心配なものでね。（椅子を離れて窓の側へ行く）

戸田（平然として）しかし、その青年は風采は立派な男らしいぢやないか。僕が電車の中で見た男がその人なら立派なものだ。若い女の目には幸福を授けてくれさうな男に見えるだらうが、本當はあんな奴が油斷がならないんだらうね。とみ子を誘惑した男が丁度あゝいふ青年だつたよ。

清太郎（窓の下を覗いて）何處へ驅出すのだ。家にゐろ、家に（チエツと舌打ちして、客に構はないで、慌たゞしく出て行く）

戸田　おれを置いてけ堀りにして、みんな行つちやつた。

戸田は思出したやうに、再び片隅の主人用のテーブルの側へ行つて、悠然と腰を下ろして、そこへ置つ放しにしてゐた手紙を讀直しながら、次第に睡氣さした態で、やがて手紙の上で肱を枕にして假寢をする。

（二）

前と同じ部屋。時間の經過も僅かである。

ある青年が窓から顏を突出して部屋の中を覗いて、戸田の寢姿を見て冷笑して引込む。そのあとから、とみ子が同じやうに窓から顏を出して、寢姿を見たが、窓から部屋の中へ飛込む。戸田はその音に目を醒まして驚く。とみ子は四十女としては不似合ひなケバ〳〵しい服裝をしてゐる。

戸田（睡つたさうな目を見開いて）とみ子か。（その方へ近づいて）お前はおれのとみ子に違ひない。……須原君が知らせて吳れたので、おれに會ひに來て吳れたのか。まあ、そこへ腰を掛けなさい。（とみ子の手を執るやうにして椅子に腰を掛けさせて、自分も寄添つて腰を下ろして）おれは昨夕夜おそく東京へやつて來たのだが、馴れない宿屋で眠づらくつて疲れてゐるところへ、この部屋が馬鹿に溫いものだから、いゝ氣持で眠入つてゐた。幸ひに家の者が誰れもゐないのだから、遠慮は入らない。おれの書齋へ訪ねて來てゐる氣で氣儘にしてゐなさい。（とみ子の身體のにほひを嗅ぐやうな態度で顏を側へ寄せて）十七年もあれから經つてゐるのにお前は元の通りのとみ子のやうにおれには思はれるよ。長い月日の間におれは一日もお前を忘れたことはなかつたが、お前も時々はおれのことを思出してゐたらうな。

とみ子　えゝ〳〵。それは思出してゐましたとも。いつかわたしの行衞を搜しにいらつしやるだらうと思つてゐたのですわ。でも、こんなに遲く、二十年近くも經つてから訪ねていらつしやらうとは思ひませんでしたよ。あなたは思ひの外に辛抱づよい方でしたわね。

戸田　つまらない辛抱をしたものさ。そのためにおれは長い間、どんなに苦しい、生きてる甲斐のない日を送つてゐた

か分りやしない。おれの顏を見ても大抵は察しがつくだらう。

とみ子　あなたがどんな思ひをして生きてゐらつしやるか、わたしは遠方に離れてゐても、あなたのお腹の中へ入つて見てゐるやうによく分つてゐたのです。でも、こんなに遲くお目にかかるくらゐなら、いつそ死ぬるまでお會ひしなかつた方がよかつたのぢやないかと思はれますわ。だつて、わたしはこんなにお婆さんになつちやつたんですもの。

(自分の顏を隱すやうなしなをする)

戸田　いや、お前がお婆さんになつたよりも、おれがお爺さんになり過ぎたよ。おれの頭を見て呉れ(首を垂れて頭を見せる)大分白毛が出てるだらう……額にも皺が寄つてる。あたりまへなら、子供の嫁取りや婿撰びで屈托をしなければならない年齢になつてゐるのに、おれは昔の自分の不所存から、一人ぼつちになつて、この年齢になつて我慢の角を折つて、お前の所へ憐れみを乞ひに來るやうになつたのだ。……おれは老爺になつてゐるが、お前は昔のやうに美しい。おれがこの世へ生れて來たのはお前に會ふためだつたのだ。お前を離れてはこの世に百年生きてゐるとして、その百年は無意義なのだ。(熱情を含んでかう云つたが、ふと氣づいたやうに)お前は今はどうして暮してゐる？お前がどこでどういふ風に幸福な生活をしてゐようとも、おれは決してお前の幸福を咀ひはしないつもりだ。だから隱立てしないで詳しく話して聞かせて呉れ。おれには西洋の名高い小說のなかの話も世間の話も興味がなくなつてゐるのだが、お前のこれまでの經歷話だけは、耶蘇の傳記よりも、世界の名人の音樂よりも、もつと價値のあるものに思つて、おれの耳がまだ役に立つ間に聞いて置きたいと思つてゐる。

とみ子　詰らないぢやありませんか、わたしの身の上話なんぞ。……自分でも自分のしたことに愛想がつきてゐるんですもの。

戸田　今はお前は資産のある家の主婦になつてゐるのだらう。いつだつたか、誰れからともなくさういふ噂を聞いたことがあるよ。(平穏だつた顏がふと苦痛の相を帯びる)その前に聞きたいのは、あの男のことだが、あの男はあれからどうした。あの男は？

窓からある青年の顏が現はれてとみ子に目くばせをする。とみ子はそれに氣づくと、戸田を押退けるやうにして椅子から立上つたが、戸田はよろめきながら、とみ子の手を強く捉へて、側へ腰掛けさせる。ある青年は顏を引込める。

戸田　あの男のことを聞いたのだが、お前の氣に入らないのか。……だけど、おれの身にもなつて見て呉れ。あの男がおれとお前との仲へ入つて來たゝめに、おれは二十年を、いやおれの今までの生涯の五十年を眞暗闇にするやうになつたのぢやないか。

とみ子　あなたはまだあの事を根に持つてゐらつしやる。あの人はあなたが思つてゐらつしやるやうな惡人ぢやないのよ。あなたが勝手に邪推して、わたしだちを泥足で踏躙るやうなひどいことをなすつたのです。

戸田　ぢや、おれの目で見たことを根も葉もなかつたことだと否定するのか。おれは十七年後の今でも、あの時の事を今見てゐるやうにあり／＼と覺えてゐるよ。おれが九州の旅行から出拔けに歸つて來た時に、おれの書齋の窓から飛出した男は誰れだつたのか。(憤りを現して)……おれの書齋はこんな安つぽい西洋まがひの部屋ぢやなかつたが、窓の位置なんぞはこの部屋によく似てゐたぢやないか(窓の方を見る)

とみ子　わたし、そんな話を聞かされに來たのぢやありません。

戸田　おれもいやな話をするためにお前に會ひに來たのぢやなかつた。お前と仲直りをして、お前の外には、誰れもおれに對して云つて呉れない柔しい言葉を、お前の口から聞かうと思つてやつて來たのだが、かうしてお前に會つてゐ

ると、忘れかけてゐたいろ〳〵な邪魔者が憎い面をしてそこへ出て來て、お前との仲直りの妨げをしようとするから、おれは苦しいよ。

とみ子　みんなあなたの迷ひぢやありませんか。久振りでお目に掛つたのだから、お互ひにあとでいやな思ひの殘らないやうに、機嫌よくお別れしませうね（手巾で戸田の涙を拭つて）あなたはこれからも、わたしなぞのやうな世間の女のすることにはかゝり合はないで奇麗におくらしなさいまし。さうすれば、あの時わたしだちを泥足で蹂躙つたあなたの罪も消えて、尊い方として晩年をお送りになれるんです。

戸田　久振りで會つたのに、お前がおれに云つて呉れることはそれだけのことなのかい。……全體、泥足だの蹂躙つたのと云つて、罪はおれにばかりあつて、お前やあの男の方には何の罪もなかつたと云ふのか。

とみ子　（もどかしさうに）あの人は疾つくの昔に死んでゐるんですよ。

戸田　あいつは死んだつて？　それは夢にも知らなかつた。いつ頃死んだ？　何の病氣で死んだのだ？

とみ子　それもあなたの所爲なの。

戸田　なぜおれの所爲なのだらう？

とみ子　あなたのために世間に顔出しのならないやうにされたのを苦にして、それが元で、脳を患つて死んぢやつたのぢありませんか。

戸田　それは氣の毒だね。しかし自業自得見たいなものだ。（快げに）

とみ子　あなたは相變らず邪慳な心を持つてゐるんですね。一人の青年を夭死させた罪をなぜ懺悔なさらないんです？　わたしはあの人が氣の毒な死に方をしたのが悲しくつて、幾日も幾夜も泣通しに泣いてゐたのぢやありませんか。

あなたはそれをいゝ氣味だと思つてゐらつしやるのね。

戸田　それに似寄つた考へ方がおれの胸に起つて來るのを、おれはどうすることも出來ないよ。お前はおれを追拋出したむくゐで、その青年の死骸の側で、寂しいお通夜をしなければならなかつたのだな。お前は人一倍、病氣や死骸や葬式なんぞ陰氣なことを嫌つてた女だつたが。……しかし、お前の涙はいく日か立つと、すつかり乾いてしまつたのだらうな。お前の今着てゐる衣服は喪服ぢやない。お前の身體には死骸の側でお通夜したことのありさうなにほひは持つてゐない。死人のうつり香は持つてゐない。お前はあの男に死なれてから、どういふ男と世を過して來た？　今お前の夫になつてるとかいふ資産家はどんな男だ？

とみ子　それほど穿鑿なさるのなら、敎へて上げてもよ御座んすわ。今わたしの夫と名のついてる人は、あなたのやうな方なの。昔のあなたよりもお金持で、昔のあなたよりも世間が廣くつて、昔のあなたよりも俗物なんでせうけれど、あなたによく似てゐるんです。此處であなたにお目に掛つた時に、目鼻立までもどうしてかうもよく似てゐるのかと不思議に思つたくらゐですわ。

戸田　それで、お前はその人を愛してゐるのか。

とみ子　どう御返事したらいゝのでせう。

戸田　お前はやがてその人の死骸の側でお通夜をするやうになるんだね。でも、死んだあとでお通夜をしてくれる者のあるのはまだ幸福だ。おれのやうに、死んでもお通夜してくれる者のない人間は、死骸を犬か鬼かに喰はれるだらう

とみ子　わたしがまた死骸の側で泣明かす日が來るのを、あなたはいゝ氣味だと思つて待つてゐらつしやるんでせうけれど、お生憎樣なの。わたしのためにもお生憎樣なの（歎息して）……わたしがかうしてあなたと佇つてゐるのを喫

ぎつけて、勝手な因縁をつけて、わたしを小突廻さうとして待つてゐる人は、この世に執念が強くて、容易に死にさうぢやないんです。

戸田　それはお前の主人のことだな。……お前は若い時におれに仕向けたと同じやうに今の主人にも仕向けてゐるのか。夫の愛情を袖にして、自分の美貌を餌に他所の男を釣つてゐるのか。(咎めるやうに)

とみ子　(冷笑を含んで) それが今あなたに何の關はりがあるんです? あなたは、御自分で昔なすつたことをわたしに會つて詫びをしたい、詫びをし濟まさなければ後生の障りになつて安心して死ねないから、會つてくれと、わたしに宛てた手紙に書いてゐらしつたぢやありませんか。それだから、わたしは危險を冒してお目に掛つたのです。御自分でお書きになつた手紙がそこのテーブルの上にあるから、よく讀んで御覽なさい。

戸田　(テーブルの方を見て) なるほどおれの手紙があしこにある。いつかお前に渡さうと思つて、いく度も／＼書直した手紙だ。……おれの眞心を知らうと思ふなら、も一度あれを讀んで見れ。(テーブルの上の手紙を持つて來て) 二人で一しよに讀まう。

洋紙の手紙が二人の目の前に開かれる。それと同時にある青年の顏が窓から現はれて、手紙の方を注視する。とみ子が目くばせしても、青年は今度は隱れない。とみ子の目くばせは頻繁になる。戸田もそれに氣づいて愕然とする。

戸田　(思はず立上つて) 誰れだ? 窓から人の家庭を覗く奴は。(窓の方へ寄つて行く)

とみ子は手眞似である青年を退かせようとしたが、青年は退かないで、窓から飛込んで來る。

ある青年　(傲然として) 此處が君の家庭のつもりでゐるのか。巫山戯たことを云ふものぢやないよ。

戸田　(側で相手の顏を注視して) 君は二十年前のあの男だな。

ある青年　それがどうしたのだ。僕は窓から飛込んで來ても、以前のやうに窓から逃出すやうなことはしないよ。(とみ子に向つて)奥さん、僕がいつも云ふ通り、この人が二人の邪魔者なのです。あなたがいくらわたしを可愛がつてくれても、かういふ人があつちや、わたしは一刻も安心してゐられないんです。あなたの心がどつちへ向いてゐようとも、あなたがストーブの前で、この人と並んで、手紙の讀合ひなんぞをするのを平氣で見ちやゐられないんです。

とみ子　人違ひをしちやいけません。この人は昔の影法師ですよ。

戸田　(ガッカリして)おれが影法師だ?……おれはお前の影法師ばかり見とつたのだ。……須原の書棚やおれの文庫に並んでる書物も空なことを云つてゐる……とみ子、おれの當てにした救ひは、お前からも得られないのだ。

ある青年　昔の影法師でも、今のわれ〳〵の邪魔になるものを、僕はどうしても打やつとけないんです。

戸田　ぢや、おれをどうしようといふのだ?。

ある青年　(反向ふ態度を見せる)若い者の力を見ろ。おれはおれの幸福をおれ一人の力でおれのものにするのだ。

青年はさう云ふや否や、柔道の手で戸田を締倒す。戸田は雜作なく倒れる。ピク〳〵体を震はせながら絕命する。

とみ子　あなたは何だつてこんなひどいことをしたんですよ。この人は昔の人ぢやありませんか。わたしだちに大した關はりはないのに、なぜ生命までも取つたのです。……も一度、せめて一分間でも息を吹返させて下さいよ。わたし、一言でも柔しい口を利いて上げたいんですから。わたしの柔しい言葉一つで、この人は安心して往生が出來るかも知れないんです。(跪いて、憐みを含んだ目で戸田の死顔を見詰める)

ある青年　もう駄目です。……昔の影法師でも何でも、僕だち二人の邪魔になるものは一切取拂つて、完全な幸福を樂みたいと僕は決心してゐるんです。それは一日でもいゝ、せめて一分間でもいゝ、完全な幸福を樂みたいんです。…

「…しかし、影法師なんぞ、僕のいき〳〵した戀の力に比べると脆いものですね。……死骸を見てるのも氣持が惡いから、どつかに早く追拋出してしまひませう。

幕

（三）

同じ部屋。たゞ破れた手紙が部屋の中ほどに落ちてゐて、書棚の洋書が五六冊亂雜に落ちてゐるだけが異つてゐる。時間の經過も僅かである。

清太郎、褞袍の上に古ぼけた外套を着て、疲勞した態で入つて來る。戸田のゐないのを怪みながら、ぐつたり椅子に腰を掛ける。よし子もやがて疲れた態で入つて來る。

よし子　お客樣はお歸りになつたのですか。

清太郎　いや、おれが出掛ける時にはまだ此處にゐたのだよ。あゝいふ風變りな男だから、無斷で歸つたのかも知れないね。

よし子　昔のお友だちが折角訪ねて下すつたのに、打やらかしといて、御飯も差上げないで、お氣の毒なことをしましたね。

清太郎　戸田のやうな不思議な男のやつて來たのが、不吉な事の起るしるしだつたのかも知れないよ。おれは今度の縁談は、一先づ中止するやうに、早く話を運んだ方がいゝと思ふ。お前は行きづらいだらうから、おれが今夜にでも仲人を訪ねて、話をつけて來よう。

よし子　（驚いて）どうしてですよ。今になつてそんなことが出來るものですか。式の日取りまで極りかけてから打壞す

なんて、そんなことをしたら、くにの一生は滅茶苦茶になつて、先日から夜も眠れなかつたわたしの苦勞も水の泡になるんです。あなたは大村さんの事を氣にしてゐらつしやるんでせうけれど、あの人のことがあるから、なほ更早く結婚を濟ませた方がいゝんですよ。わたしが氣が弱いつて非難してゐらつしつたけれど、わたしよりもあなたの方が却つて氣が弱いぢやありませんか。(突掛かるやうに云ふ)

清太郎　お前は大村をばかり惡く云つてるけれど、おれはさうは云ひ切れなくなつた(元氣なく云つて)兎に角、くに子を此處へ呼んで來て與れ。そして、お前は暫くあちらへ行つとつて與れ。

よし子　でも、くににひどいことは仰有らないやうにして下さい。

清太郎　それは分つてるよ。おれだつて氣をつけるさ。

　よし子は出て行きかけて、ふと、破れた手紙に目をつける。

よし子　こんなものが落ちてゐますよ(拾つて清太郎へ渡す)

清太郎　これはおれのぢやない。戸田が落して行つたのだらう。(ふと手紙の文句に目をくれて)妙なことが書いてあるよ。

よし子　あの方は本當にお歸りになつたのでせうか。(訝しげに左右を顧る)

清太郎　こんなことが書いてあるよ。「御身が他の何人と結婚し居らるゝとも、御身の眞の夫は小生の外には斷じてこれあるまじく存ぜられ候。御身の肉體は幾人の男子の獸慾によつて汚さるゝとも、女子としての御身の靈魂は、小生の外には、眞に尊重いたし居る者これあるまじく候。御身と小生との靈魂は、現在にも未來にも離るゝこと能はざるものにて、世俗的の障礙や時日の隔りによつて相背くべきものとは存ぜられず候。一つの靈魂は他の靈魂の助に依ら

されば、今生の苦患を免かれ來世の光明を仰ぐべき望みはこれなく候。人の世に生を受けて以來、小生のはじめて感じ覺えし至愛の情念を、むざ〳〵と亡ぼすことは小生の堪へ得ざるところにて、小生の靈魂は日々夜々、御身の靈魂を求めて號泣いたし居り候」……あいつ、よつぽどどうかしてゐる。五十面を下げてこんな手紙を書いて、昔別れた女に送るつてことがあるものか。

よし子　何だか六ケ敷ことばかり書いてあるのね。わたしにはよく分りませんわ。

清太郎　相手の女にだつて分りやしないよ。靈魂が號泣するなんて、おれには一生そんな經驗はなかつた。

よし子　この手紙はほんとうに戸田さんがお書きになつたのでせうか。

清太郎　さうだらうよ。おれの所へこんな手紙を寄越すものがあらう筈はないさ。……それともおれがどこかの女にやるためにこんな手紙を書いたとでも思つてるのか（微笑しながら云ふ）

よし子　まさか……。（考へながら）大村さんがこの手紙をくに子に寄越したんぢやないでせうね。

清太郎　そんなことはあるまい。（ふと不安になつたらしく）手紙の切れはこの外には落ちてゐないのかい。

よし子部屋の中を搜す。外にはズタ〳〵の破片が落ちてゐるばかりである。

よし子　字の分るのはそれつきりなんです。………あなた、ちよつと來て御覽なさいな。此處に足跡がついてますよ。……二つも三つも……男の足跡らしいです。

清太郎　足跡が？　泥棒が入つたらしくはないが、……（ふと氣を焦立たせて）兎に角早くくにを呼んで來い、くにを。

よし子、急いで出て行く。清太郎、足跡を檢査したり、窓を見たり、落ちた書物を見たりして不審を抱く。

くに子入つて來る。

清太郎（努めて靜かに）まあ此處へ腰を掛けろ。

くに子氣の進まぬ態度でとみ子の腰掛けてゐた椅子に腰を掛ける。

清太郎　今日は隱立てしないで、お父さんの訊くことに快く返事をして吳れないか。お母さんは氣が狹いから、些細な事にも心配していけないが、おれは大抵な事には驚かないつもりだ。お前の心の底で思つてることを一圖に壓潰したり、過去つたことに無用な咎め立てをしたりなんぞ斷じてしないよ。これまでは、機嫌の惡い時にはお前に對して、隨分ひどい小言も云つたが、今日は誓つてお前を叱らないから、何でも隱立てをしないで話して聞かして吳れ。

くに子　えゝ。……わたしの結婚に關係したお話？

清太郎　無論結婚に關係した事なのだが。（焦立つ心を努めて鎭めながら）……まづ訊きたいのは、お前はこの手紙に見覺えはないのかい。

清太郎の出した破れ手紙を、くに子は、訝しげに讀下しながら、やゝ驚いた顏をする。その顏を注視してゐた清太郎は、苦澁な相を現はす。

清太郎　それはお前が誰れかから貰つた手紙なんだらうね。

くに子、心の動揺を現はしながら沈默。

清太郎　大村から寄越したのだらう。隱さないでさうだと云つてお覽。

くに子　この手紙はわたし今はじめて讀みましたの。（詰問的口調で）お父さんはわたしに來た手紙を無斷で封を切つてお讀みになつたのですか。

清太郎　なにを馬鹿なことを云ふ！　さつきそこに落ちてゐたのをお母さんが拾つたのだ。お前の袂からでも落したの

だらう。

くに子　いゝえ、わたし今はじめてこの手紙を見たのです。

清太郎　それつだけの切つ端を見たゞけで、前後も分らないし、宛名も出人も分らないのだが、かういふ手紙を寄越すものは大村の外にはなさゝうだ。お前は、今この手紙を見て驚いてゐたぢやないか。

くに子　えゝ、それは驚きました。でも、お父さんにこの手紙を見つかつたので驚いたのぢやないのよ。手跡が違つてゐるから驚いたんです。もつと元氣のいゝいき〳〵した文字を書いてゐた人が、なぜこんな力の抜けた上べばかり上品らしい字を書いたのかと思つて驚いたのです。わたしを揶揄ふために誰れかに代筆して貰つたのぢやないかと思つて驚いたのです。

清太郎　ぢや、この手紙はお前が落したのぢやないとして、お前はかういふ手紙を大村か誰れかゝら貰ふ筈になつてゐるんだね。貰つて喜んでゐるんだね。

二人とも少しの間沈默。

清太郎　電車の中でお前と大村らしい男とが乘つてゐたのを見たといふ戸田の話を聞いた時に、おれはハツと思つたのだが、さつきお前やお母さんのことを案じて後を追つて出た時に、おれは偶然大村に出會つて、やうやく氣がついたことがあるのだ。おれは大村と口は利かなかつたが、あの男は勝利者のやうな顏をしてゐた。おれなぞに向つてビクともしない態度をしてゐた。お前たちが何と云はうと、お前の娘はおれのものだと云ふ心持を見せてゐた。……おれたちが外へ出てゐる暇をねらつて、あの男自身で、このおれの書齋に、手紙を抛込んで行つたのかも知れないよ。それだけぢやない……（足跡を指差して）見ろ、この足跡を。お前はこれを誰れの足跡だと思ふ。……おれが思想を

燒つてゐる大切な書齋を足跡にして、大切な娘の靈魂を浚つて行つた足跡ぢやないか。

くに子　お父さんはそんなに獨極めに極めてゐらつしやるけれど、わたし、この手紙くらゐにさう慌てなくつてもいゝと思つてゐますの。そんなにお父さんの氣に掛る手紙なら燃してしまひませう。足跡が氣になるのなら雑巾でども拭きますわ。

くに子　石油ストーブで手紙に火を點けて燃す。

清太郎（燒屑を見ながら、やゝ安心して）お前の方から大村に約束してゐることはないんだらうね。おれたちの知らない秘密がお前にあるのなら、迂濶に結婚式を擧げる譯には行かないぢやないか。

くに子　でも、結婚の事はお父さんが獨合點で極めておしまひになつたのぢやないの。儀式の衣服なんぞ、お母さんが御自分の樂しみに新調してゐらつしやるやうに思はれるんです。……誰れが結婚するのか知らと不思議に思つて、わたし今日までうかうかしてゐたのですけど、今日は、もう一刻もうかうかしちやゐられなくなりましたの。お老人のお客樣はわたしの胸のうちの迷ひを晴らして下すつたのです。あの方はわたしのために何處からか來て下すつたのね神樣にしちや少しいやらしいところのあるお爺さんだけれど、人間に、行く先の道を明かしてくれる豫言者は大抵あゝいふ人ぢやないんでせうか。

清太郎　ぢや、お前はおれたちのこの頃の心盡しを無にしても、今度の結婚は中止しようと思つてるんだね（失望して）お前にその意志のないのを强いることは出來ないが、こゝまで進んだ緣談を打壞すのは、小さな事件ぢやないといふことが、お前には分つてゐないのか。

くに子　……でも、わたし、自分の事よりも、ある男がある女と緣を結ぶのは、小さな事件ぢやないつてことが、今日

あのお爺さんの影を見てはじめてよく分つたんですもの（無邪氣らしく）わたし、お父さんが空な心配をしてゐらつしやるやうに、誰れとも約束をしてゐやしないんですけど、……

清太郎　あんな頭の狂つた爺さんのお說法なぞ眞に受けて聞くつてことがあるものか。お前のために着實に考へてゐる者は、おれの外にはないんだよ、大村といふ男の人物や、これまでの所業は、おれも詳しく調べて、こんな男には自分の娘の一生を托する譯には行かないと思つたから、斷然拒絕することにしたのだ。お前も得心してゐたのぢやないか。

くに子　では、お父さんは、なぜ頭の狂つたお爺さんの云つたことを眞に受けて、わたしが大村さんと一しよに電車に乘つてゐたと思つてゐらつしやるの？。可笑いわね。わたしそんな覺えないんです。

清太郎　それは本當か。……でも、戶田の來た時分から、大村はこの近所をうろついてゐたぢやないか。お母さんはこの窓から早く大村を見つけた。おれは外で大村に行會つたのだ。しかも勝利を得てゐるやうな、自分の思つてゐる女を完全に自分の者にしてるつていふやうな面付をしてゐたよ。

くに子　（ふと何かに憧憬してゐるやうな目をして）あの人は勝利者のやうな元氣のいゝ晴々した顏をしてゐましたの？

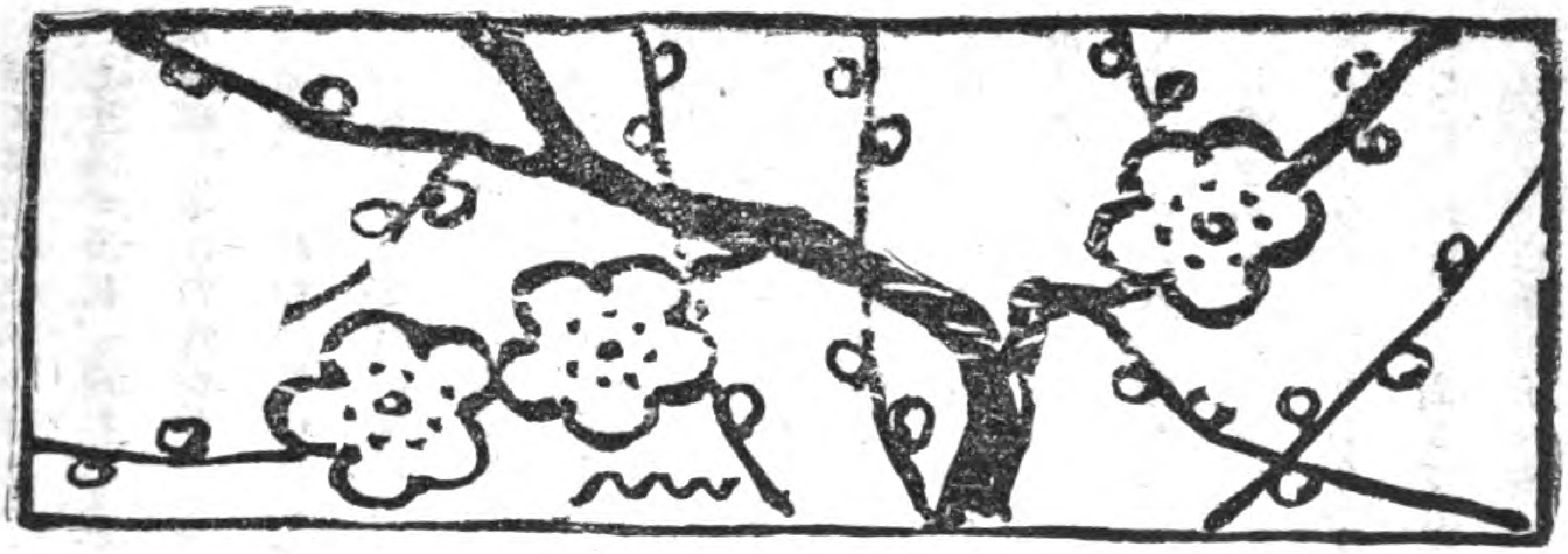
清太郎　うん。

くに子　その人が勝利者だつたら、あんな哀れつぽいやうな手紙を書く譯はないぢやありませんか。……これはあのお爺さんが落して行つたのですわ。屹度さうよ。

清太郎　うん、さうかも知れない。……ぢや、も一度よく見るんだつたのに（手紙の灰を見入る）

くに子　お爺さんは可哀相に。（手紙の灰を見て

父子が灰屑の方へ同じやうに目を注いでゐるところへ、けたゝましくベルの音が聞える。（幕）



田舎暮し

室生犀星

一

何はともあれ話の中途でわたしはこれは退屈さましになると思つた。甥の宋一の言葉ではないが鳥渡一目見たときにこの女なら來てくれるだらうと直覺するのと、何となく最初から或るむづかしさを感じる顏とがあるものだ。この話はわたしには始めから肩身を入れて聞けるやうな氣がした。

「しかしたばこやのむすめでは餘り有觸れた話ぢやないか、何もそんなものを選らなくともよささうだのに、？――。」

「べつに選つたわけぢやないんだ。通りがかりにふいにたばこを一つ買つたのだが、これまで毎日通つてゐながらよく氣がつかなかつたと思つたほどだ。なかなかあの邊では珍らしい美人だよ。」

「あの邊にそんな美人がゐるか知ら？――どんな型かね、たとへば下町づくりとか女學生風とか。」

「ひと口に言ふと下町風だと言つた方がいゝかも知れない、――とにかく君に一度

見て貰つて君がいけないと言ふふうな女だと考へものだが、あれなら僕としては氣は充分あるんだ。ただ缺點としては娘のお母さんがどこかのおめかけさんらしいんだよ、貰つてからあとで扶助したりなんかすることで面倒ではないかと思ふんだがね。」

「つまり看板むすめぢやないか？——。」

「まアそれに近いね、ひよつとすると呉れないかも知れないかな。」

「娘が暮しの中心になつてゐると離しはしないだらうよ。」

「とにかく見るだけは見てくれないか。」

甥の宋一と連れ立つて出るときにも、うすい霙まじりの雨脚が傘の柄を打つて冷たかつた——庭の隅でしびれを切らした退屈も霙の上で背延びをしてわたしどものあとに尾いた。永い間捜してゐたがこんどはどうやら大丈夫らしいと云ふのは、君も知つてゐる東京新聞の支局長からも口を切つて小當りに當つて見たが、何分娘の父親が地方へ旅行してゐるので、その方面への照會せがあるので二三日待つて戴ければはつきりした返事ができるんだと宋一は歩きながら話した。併しわたしはその話に取りつきやうもないあやふやな感じにとらはれた。いくら田舍でもちよつと見て美しかつたと言つて女が貰へるものだらうか、（田舍ではよく有り勝ちなことだ。）

「では何日かのオルガンをひいてゐた娘の話はどうなつたのだ、たいへん熱心だつたぢやないか。」

「あれか、あれなら今でも貰ふ氣はあるんだが、君のこの前歸つたころに一度話をしたが美ごとにハネられた。がこのごろになつて向ふでも貰つてほしいやうな口振りを近所の人に漏らしたさうだよ、つまりたばこやの方にも乘り氣があるし、森の娘の方にもあるし、が森の方は一度斷はられたから今更此方から申込んで行くのも業腹だからでき

るならたばこやの方にしときたいんだよ。こんなふうに一どきに話が付き出すとむしやくしやして、一そどちらかが斷つてくれればいいと考へるくらゐなんだ。」

「肝腎の君の心が定まつてゐなくては爲方がないぢやないか、森の方なら森の方にした方がいゝぜ、たばこやの方ならたばこやの方に定めてしまふ方がいい。」

「いや、たばこやの方にいまのところ決めてゐるんだよ。」

かれはふと宋一の何處か西洋人めいた年のわりあひに若い艶のある顏を見て、そのむしやくしやしたいりいりした表情に、かれ自身の眼さきが突きもどされたやうな鋭どさと一生懸命さに吃驚りした。あゝいふ顏容をわたしは全く忘れてゐたと言つていゝ、あれは獨りものが身悶えをやつてゐる眼付ではないか?――宋一の心算ではたばこやの娘を斷はられたら、又た森の娘の方へ口を切らすつもりだらう、それゆゑ森の方へはあやふやな返辭をして釣つて置きながら、たばこやの方を急いでゐるに違ひない。これまでどれだけ女の口をかけても不思議に斷はられて了つた。全く今ぢやどんな女だつて關はないんだよ、來てくれさへすりやと言つて置きながら、父親の宋義が切角捜して來たのを何時も斷つて了つた。「わしの前で承諾したと言ひながら既うその晩に斷はるんだから困る。それもぢかには來なくて晩にそつと格子先きへ自分で書いた手紙を投げ込んで行くんだから始末が惡い。」左う言つて又た「寫眞を見せて呉れといふから先方へさう言つてやつて取り寄せて見せると、着物の柄柄まで氣に入らないとか言ふんだから坡ふ宋一の話はこりこりですよ。」さう何日か會つたときに宋義が話してゐた。あゝして一人で家まで借りて永い間獨りでゐるんだから早く身を定めてやりたいのだが、まアあんたが來られたのを幸ひ一つよろしくたのみますとも言つた。わたしと腹ちがひの義兄にあたる宋義はもう六十を出てゐた。同じ父親の種でもこんなに年がちがふものかと少し可笑しい氣がしてゐた。

「角から二軒目の家だよ、朝日か何かを一つ買つてちよつと見て來てくれんか。」

「うむ、だが店にゐるのかい？。」

「大丈夫ゐるよ。」

「こりや何んだ。」

「朝日を買ふのだらう。」

わたしは何時の間に宋一がふところから用意して出したか分らない五十錢銀貨を受取つた。これで朝日が幾つ買へるのか？　四個か？　わたしはたばこやの店さきに立ち、硝子戸の棚越しにうすあかいものの、ちらりと動くを見たきりだつたが、朝日を四つくださいと言つてまんまるい顏と、もすりんの前垂れが膝から折れて畏るのを見た。お剩錢を取つてふところへ朝日を捩ぢ込み何氣なく娘を見たとき、娘はもう奥の方へ行かうと足袋の爪さきの向きを變えたときだつた。二重瞼にかかはらずはしかい何か烈いやうな眼色を感じた。よく人に馴れてゐるために却つて他人に馴れない氣性を所つた眼付だつた。

「どうもありがたう！」

宋一はわたしの顏色をさぐることをせずに直ぐあいさつの言葉の下から「どうだつた？」と性急に言つた。

「君のいふほどの美人ぢやないよ、氣性もよくないやうな氣がする。」

「さうか、しかし君はあの女のどんなところがよくないと思ふ？」

「感じがピンと來た。——。」

感じはしんなりとこなければ、それが女のいちばん匂やかなところだと言はうとしたが、投書家じみて默つて了た。

さうして娘はまだ十八か九くらゐにしか見えなかつた。三十三の男にしては若過ぎるとも思つた。しかし宋一は何か言ひたさうにしてゐたが、むんずりと默り込んでゐるわたしに氣を兼ねてゐたが、「是非はとにかく話をつけてあるのだから一つ君の妻君に行つて貰ふといゝんだが………女だと先方でも話しよいと思ふんだ。」と言つた。

「家内をやるのなら譯はない、――しかしあんな女は止したらどうだ。それにあの樣子だと呉れはしないよ。」

「止すにしても、最う一度話して見るのもいいやうな氣がするから。」

宋一の、そのしつこさをわたしは割合平氣に感じやうとした。二人は大通から松の多い士族町へ折れたときに、宋一は星ぞらを仰向いて言つた。

「あの音が聞えるかね。」

「あの音とは？」

わたしは耳を立てたが何物の音もきこえなかつた。宋一のつぶらな眼はやはり空の方に向いて、闇の中を駛つてゐた。

「あれは渡り鳥の羽音だよ。」

「へえ。」

しばらくして夜鳥の啼きごえが寒國らしく立ち騒いできこえた。――宋一は鳥刺しが上手かつた。鳥黐をつけた刺し竿で、いつも榛の木立のあるあぜ道に佇ち、ねらつて手もとの竿をつういと一と突き辷らせると、ぢぢぢと鶸やひたきを刺した。ひどい近眼のくせにどういふ葉と枝との隙間に泛える小鳥の迅い尾をさへ逃さなかつた。警察で禁鳥の標本をつくるために銀行員である宋一に、禁鳥を捕つてもよい鑑札を下ろしたくらゐだつた。

「とにかく明日にでも家内をたばこやまで遣つて見やう。呉れるかどうかは當つて見ないと分らないから。」

「何分たのむ。何んだかこんどの話はうまくゆきさうな氣がしてならないんだ。直覺的に最初見たときからそんな氣がしたんだ」

「明日夕方にでも來て呉れ、大體の話は分るだらうから。」

「きつと行く。」

「ぢや又會はう。」

町角で宋一に別れると、人間も貰ひそこなふと些つと來てくれる女のないものらしく思はれ、宋一の急いでゐる氣もちが分つた。それに宋一は別に戀愛關係のない女と結婚することを寧ろ當り前なやうにまで考へてゐるのが、何よりわたしの心持ちを柔らげたといふのは、さういふ戀愛なんかをさつぱりと思ひ諦らめてゐる獨身者の極北に住んでゐることだつた。戀愛なんてものは小島宋一に取つてはありさうもないことで、そんな事を考へてゐるより一目見てよいと思つた女を何より早く自分のものにするといふことが、三十三まで獨身でゐた男の取る道らしかつた。それが極めて自然に宋一を共處まで追ひ詰めた。その氣持ちが人間らしくてわたしは賛成した。いつも戀愛結婚などといふものが存外結果に於て飽きるのは、結婚前に結婚後のことがらまですつかり仕盡して了ふからではないか？何となく女の旨味をあぢはひ盡したあとをていねいに自分のものにまでするのは、まるで先々のさびしい氣もちをこさへて置いて故意とその寂しい氣もちに打つかるやうなものだ。それよりも昨日まで見知らなかつた女をちよつと見て、ちよつと見たかんじでそれが類のないいい感じだつたら、一緒になるのがすこし野蠻だが本統のやうな氣がするぢやないか？　あんな舶來の戀愛結婚といふものが日本人の人情の中にはあるが、もう一皮剝けたら日本人にはおたがひ知らない同士のなかに最つと温厚な人情があるやうな氣がする。一しよになつて初めてふたりのなかに何か可愛らしい氣もちが生れあふ。哀憐？

そんなしとやかなものが古い結婚の形からよく男女の仲に持ち合ふものだ。小島宋一はそんなところをねらつてゐるかどうかは分らないが、何よりめんどうな心の上の手數をはぶいて川合ものらしくこくめいに自分のものを見當てて歩くことが、わたしには生眞面目で愉快だつた。

「おれ自身だつてあの男と一しよにあの男の嫁でもさがしてゐたら、そんなにひどく退屈をしなくともよからう。」

翌日家内は俥でたばこやへ出かけたが、間もなく歸つて來てわたしの顏をみると微笑つて、「だめ、だめ。」と手をふつて見せた。どうして？　と尋ねたが、てんでお話しになりませんと言つた。

「まだあのとほりのこどもでもございますし、お裁縫さへ中途のやうなわけですから又たのご縁におすがりするにいたしまして――それに此間から入らしつて下すつた方にも大たいおことはりしときましたやうなわけですからと言つて話のしやうがないんですもの。」

「ふむ、ぢや宋一は仲に入つた男にちよつと釣られた形だな。」

「選りにも選つてたばこやの娘なんて人聞が惡い、それにあの邊でも名代の通り娘らしいんです。」

二

冬の波が泡立つて渦卷いてゐるのを見るとわたしは眼舞ひをかんじた。松の葉を揉く風がひゆひゆ鳴つてゐる。――そりやわたしにしたつてなるべく止めさせやうとしてはゐるものの、すぐ火箸だとか烟管だとか手當り次第に投げつける人なんだもの、しまひに默つて控え目にさせることも思ひ止まつて打つちやつて置いたら、しまひにあんなになつてしまつたんです。――久し振りと言つても五年振りで會つた姉はかう言ふと又た「それでもこのごろでは本性になつて

溫良しくなつたんですけれど、

「ひとしきりなんぞ看護婦を二人つけて置いても叶はなくて、家ぢゆうのものが寄つて押へたりしたことがあるんですよ、ほんとにお酒は恐ろしい。」

少し肥り過ぎた姉は離れの低い屋根を海とは反對の庭つづきに指さし、あそこに寢させてあるのだと言つた。酒精中毒ですつかり氣が變になつた夫は、去年の春から金澤病院から通ひづめの醫者を傭ふたきり、動かしたらいけないと言ふのでそれきり臥させて置いたが、一年半ばかりでやつと意識だけは取り止めることができた。

「ちや會はない方がいいかも知れませんね。變なことを言はれたりすると困るから。」

「その方はもう大丈夫なんですよ。會つたら喜ぶかも知れない、――。」

わたしは姉の福々しく肥えたのを快よく眺めたが、子供のない女といふものは、取り止めのないさびしいところがあるものだと考へた。微笑ふと急に年齡取つた表情になる、――女はそんなものか知らと思つた。

「姉さんもすつかり年寄つたね。たつた五年くらゐ會はない間に、――。」

「ええ、もうおばあさんになつたよ、からだばかり肥つていやになつてしまふ。」

「なぜ子供がないんだらう。」

「なぜだか？」

わたしはそりやきつとお酒のせいですよと言つたら、え丶そのことはお醫者さまもさう言つてゐらしつた、お酒もすこしくらゐなら關はないんだけれど、こちらの御主人のやうぢやとうていいけないしだと何時も言つてゐらしつた、あの人もその氣になつて子供はほしいと言つては居るものの、これの方が廢められないし……姉は先刻からの顏をきふ

に粧ふた。こんどは微笑つたよりもつと年取つて見えた。

「でもお前の子供がうまく育つてゐるから結構ね。こんどお前の奥さんを連れて來ない？」

「もうすこし温かくなつたら此方へよこしますよ、さうだな、まだ一度も逢はないんですね、もうばばあになつてゐるから見たつて仕様がないだらうが、――。」

「まあ、ばばあなんて言つて？　こんど入らしつたら言ひつけてあげる、だつて女は何時までそんなに若くなつてゐられはしないぢやないの、お前だつてそんなに寒さうに猫脊になつてゐるぢやないか。」

「この猫脊か？　こりやむかしからなんだ。いまさらぢやない、――。」

何時の間にか元どほりの言葉使ひになり、隔てのない慣れた心になつた。「こんど宗一も嫁をとらうとして焦々してゐる。」と言つたら、宗ちやんもいい加減の年なんだが、お前ともだいぶ違つてゐたかねと尋ねた。

二つ下。」

「まあ三十三？」

「それでゐて十九か二十のをほしいと言つてゐるんだ。しかしあの男の身になりや無理もないね。あの年になるまで碌に女ができたわけぢやないし、淡々として暮して來たんだから。」

「十くらゐちがつた方がいゝんだが、しかしあんまり年とると寄越すほうでどうして今まで一人でゐたんだらうと疑ぐりをかけるだらうしね。さう、さう、宋ちやんぢやなかつたかしら？　夏、庭の蟬がぢいぢい煩らく啼くと言つて片つ端から鳥黐で蟬を竿の尖端で刺して歩いたつて言ふのは？」

「あの男ですよ。妙なところにかんしやくを起すんでね、今ぢや別に一軒持つてあゝして獨りで自炊みたいなことを

やつてゐるんだが、池田町の自家にゐるときなぞ、家のものと一緒に食卓で食べないで自分一人だけ部屋でお膳で食べてゐたもんだよ、そのころは月給は家へ入れてゐたしお母さんがまだ生きてゐたから我儘ができたんだがね、ことにあの男は勝手に小鳥などを自分で料理してよく炙いてゐたりしたものですよ、それを弟たちがぼんやり襖からよく羨ましさうに眺めてゐたが、宋一はそんなことに頓着しないで食べ荒すとそれを襖の外へついと押し出して知らん顏をしたものだ。」

「全くね、だからみんな宋ちやんのことを變屈者だといふんですよ。ほら第四高學校の試驗をしくじつたときに近江の琵琶湖の何とかいふお寺へ行つて坊主になつたと言ふぢやないの、だいぶ古いことね。あの時分だつて宋ちやんは何時でも自分で刺して來た小鳥をよく剝製して松原町の標本屋へ持つて行つたわね、あんなころから彼の人は妙にませませして妙に又た子供らしいところがあつたやうに覺えてゐるわ、そとを歩いたつて何時でもお大人みたいな顏をしてゐたし、會つたら二言三言しか言はないといふゝうよ。そりやさうとして宋ちやんのお父さんの家は女手がないのね、まだ弟さんが三人もあつた筈ね。」

「だからみんなで自炊してゐるやうなものです、宋義さんも中くらゐなばばあがほしいんぢやないかな、それで宋一の嫁をさがして來ては宋一に斷はられて怒つてゐるところが、ちよつと變な氣もする！」

「まさかあんないゝ年をしてゐらつしやるんだもの。」

「年とはべつですよ、どうも不自由で困るとこぼしてゐたから、それぢや兄さんも手元の用事をさせるものを一人置いたらどうかとかまをかけたら、まんまとかゝつて、わしもそのつもりで居るけれど宋一の方からかたをつけてしまはないとな、さう言つてゐるところを見ると滿更でもないらしく思はれるんだ。」

「さういへば金澤でも越中でもお年寄りが身の廻りのことをさせるために能くばあやさんを雇ひますね。それがしまひには奥さんになるんだから可笑しい。」

どちらかと言へば快活な姉はさう言つて笑つたが、笑つてしまふとまたぽかんと手を火桶の上に翳した。姉がかたづいてから大きな料理屋を背負ひきれなくて、絶えず大勢の女中や藝者だちに莫迦にされてゐたむかしのことを鳥渡思ひ浮べたが、かうして話してゐると落着いた淋しい女のやうな氣になり、姉にも古う家の中の掛きをつけることがすつかり呑み込めてゐるらしい餘裕を嗅ぎつけた。それでゐてわたしに逢つてゐると妙におどけないところを折々匂はせるのはあながち姉弟だからではないらしかつた。

「お母さんはお前のところへときどきゐらつしやる？」

「一週間に一遍くらゐ――だいぶ頑固でなくなつたが此間ちよつと病氣して醫者にかけたところがその醫者がチブスの疑ひがあると言つたので、すつかり怒つて醫者が歸へるとすぐ來診を斷つたんです。そんなお婆さんなんてすくないね。」

「へえ、まだそんな事をなさるの。」

「その醫者へわざわざ謝まりにでかけたりしたよ、不向見だからこまる。」

「それでもよくお前と一しよになると言はないわね。」

「結局一人でくらしてゐる方がいゝらしいんだね。」

波の音が障子にどどどと響いてゐる。寒さは夕方近くなつたせいか切傷のやうにちくちくと背中に觸つて來た。――暫らく默つて向ひ合つてゐたが、わたしは言ひ出しにくいことを口の端まで撒ばせ、じりじりと、すぐ言へさうもな

かつた。あれから五年も經つからお久はことしは二十くらゐだらう、昨日も母屋へ行つて妓（おんな）だちの鏡臺の並んだ茶の間もその次の間も覗いて見たが、あぶら濃いやうなお久の姿はなく、どの妓もみな見知らぬ顔ばかりだつた。こんなところにゐる女といふものは五年も經つたら一と處にゐないものらしく、使走りのおばあさんだけがわたしに見覺えがあるきりだつた。そのお久のことがわたしには氣になつた。

「何んとか言つたな、ほら！　眼の大きい奴！」

「この前來たときにゐた妓、?――。」

「何とか言つたがちよつと思ひ出せない……。」

「お久ぢやない?」

「さう、お久とか言つた、……あれは見えないやうだが。」

「去年松任へかはつたの、きのふお前何か茶の間で話してゐて泣き出した子が、お久の子供なんですよ。」

三つにしては肥りすぎてゐると思つたが、くりくりと可愛らしい顔をしてゐると思つた。あれがお久の子供か？　どうして一しよに母親に添はして遣らなかつたのだと言ふと、あの子がゐてはしようばいができないからだといふので、こちらに引取つたのだと姉は答へた。

「お久はそれで平氣で置いて行つたのかね。あんなに可愛くなつてゐては、ちよつと置いて行けさうもないぢやないか?」

「そりやさうだらうけれど、あの子の言ふとほりにもならない事情もあるし……。」

「事情はともかく子供は母親につけて置くものぢやないか。」

姉の顏の曇るのを見ながら、きつとお久が前借でも踏んだゝめに子供をおさへてあるのだらうと、こんな界隈にあるしちくどい風俗を忌々しく思ふた。それにこんな女を置いてある家に限つて代言人のやうなものが、家族のやうに愀然と家のなかに出入りしてゐるのを思ひうかべ、この姉までがそんな仲間の一人かと厭はしげな氣さへ起つた。子供を一しよにしないのはよくない、子供を持つて見たらそのこゝろもちが分るのだとわたしは考へた。姉はお久のことに觸れたくないやうな口振りで言つた。

「そんなことはどうでもいゝぢやないの。」

「どうでもよくない！」

「姉さんを困らせるつもりあんたは？」

「困らせるとも。」

わたしの苦々しげな笑みにもかゝはらず、姉は目のさきをにじませた。お前はなんにも知らないからさういふんだけれど、――「そんなことを言ひ出さないでください。」と眞劍にその話に觸れることが厭さうな調子だつた。それなら言はない、だから先刻も姉さんに早く子供でもこさへて育てゝ見たらどうかと言つたのさ、そしたら今まで分らなかつたことも解るだらうとわたしは硬くなつた姉の顏を見た。

灯が點いてからわたしは一人で冬の海を二階から眺めた。泡立つた片濁りを覗かせる大きな波のうねりの、その次に脹ら膨れあがつた大きな蒼いうねり、さういふ動くものに脅やかされた神經がすぐ眩舞ひを感じた。かうして久し振りで訪ねてくるとわたしはいろいろな事を考へた。晩食後、お膳を下げに來た下婢の前垂れのかげに、ちよろちよろ歩きをしてゐる子供をその袖のかげに呼んだ。が羞かんで下婢の顏とわたしのと半分づゝ眺め、きふには膝の上に來なかつ

た。なるほど似てゐる――その頬にも瞳にも瞭然とした覺えがあつた。おぢさんがゐらつしやいつて言つてゐらつしやるから、いゝ子だから行つてお出、きつといゝものをくださるからと下婢はその子をそつと背後から押すやうにした。

「ちよつとゐらつしやい。」

かれはその女の子の脇腹に兩手をあてて、うんとこしよと膝の上におろした。すぐ自分の子より重いと思つた。抱かれてから平氣になり寧ろわたしの顏をぼんやりと見入つてゐた。置いて行つたつていいよ、ひとりで歩けるんだらうといふと、え、もう外へだつて出られるんでございますと下婢は言つて、ではちよつとの間おねがひいたしますと出て行つた。

「何ていふ?」

「たあちやん、――」

「ふう、たあちやんて言ふのかね、おぢさんの顏は怖いか?」

「こはい。」

「重いからこちらへお座り。」

わたしは子供をよこに座らせ、火桶に手をあぶらせた。ふしぎなほどようも肖たものだ、これぢやお久のかほをそつくりその儘縮めたやうなものだ、だがこれも世の姿の一つでよくある間柄で、そしてわたしには何といふ珍らしい間柄だらう、お手をずつと伸して? さう言つてわたしはがらにもなく、その柔らかい髮の毛をなでた。

翌朝わたしは姉に主人にやはり會はないから、わたしが來たことをまだ話してないやうだつたら默つて置いてくれるやうに言ひ、家の方も留守にして置けないからと出掛ける用意をした。姉はあまり早過ぎると言つたがわたしは默つて

ゐた。

「これをどうするの、こんなに澤山買つて來たりして、お前の家のおみやげ？」

「さうぢやないたあちやんにやつといてほしいんだ。」

「たあちやんに？」

姉は不意打ちをくらつたやうな顏をしたが、弟の表情をこまかに讀みながら指さきで赤い小さい手袋足袋帽子などを弄くつた。そして不思議さうに言つた。

「いつの間にこんなものを買ひに出掛けたの。」

「昨夜、――。」

伸が來てから姉はそつと耳もとで「お前松任へ行きはしないだらうね」と氣づかひながら言つた。風の荒い田甫の中にある田舍の驛が蕭條としてかれの眼にうかんだ。行きはしないとわたしは苦笑して答へたが多分逢へるだらうといふ氣もちがしつかりと心にあつた。

三

宋一は些つとの間默つてゐたが、唇を結んでわたしの顏を見るといくらか氣まり惡げにしたが、思ひ切つて言つた。

「ぢや森の方をかけ合つて見ようか？　あんまり斷はられるので今更らおやぢに會ふのも氣まりがわるいが、しかし森の方の話はおやぢの方から最初話の口を切つたのだから、おやぢに話さないと惡いだらうからね。」

「それが順序だね、しかしたばこやの方は何かい思ひ切れるかい。」

「思ひ切らねばならんやうになつたのだから仕方がない、あれだけは話の模様ではうまく行くと思つた。」

「さうは行かないさ、一番困難な奴に打つかつたやうなものだよ、選りにも選つてだよ。」

「さうかな。」

しかし栄一自身にもたばこやのあてが外れたのでがつかりしたところが見えた。わたしの前では大丈夫だとは言つてゐたものの、栄一自身では矢張り危ない思ひがしてゐたらしかつた。一方を断はられたら一方へ辷らうといふ氣もちが獨りもののどうにもならない縋り方のやうな氣がして、ああも用心するやうになるだらうと別に氣には咎めなかつた。

「おやぢに今さらたばこやを断はられたといふのも厭だな、君一つ一しよに行つて呉れないか？一人ではどうも工合が悪いやうな氣がする。」

「行つてもいいよ、断はられたつてさう正直に言つたつていいぢやないか、おやぢだもの、他人ぢやないから恥かしがることもなからう。」

「ところがおやぢと云ふものはなほきまりが悪いものさ。」

二人は川向ひの栄義の家へ行つたが、廣い前庭に燈籠だの栗石だのがところきらはずに並べてあつたが、これはみんな石屋のあづかりものなんだよと栄一が言つた。此前行つたときに家の前庭ももう暫らくしたら錺屋の庭のやうにすると言つたのが、こんな預かりものの事かと思つた。さういふ栄義は料理屋で一流である錺屋の庭を見たこともないらしく、錺屋には庭などなかつた。とするとおれの腹ちがひの兄貴である栄義も六十を越して面白い戯談をいふ男だと思つた。

「鶏を置いてゐた時分に僕が少しも世話をしないくせに、たまごばかり吸ふと言つて怒つたから、吸はないと腐るぢ

やないかと言つたらこんどは本統に怒り出して、刀を持ち出して本氣で斬るらしい樣子をしたので些つと參つたよ。」

「癇癖はあるらしいね。」

「まだ郡部で教員をしてゐたころに、酒の上で郡視學と組み打ちをやつて二階の段梯子から落つこちたことがあるよ、それでとうたう學校も首になつたのさ。」

宗一は急に思ひ出したやうに、此間洗濯したりするばあやを一人置かうかと言ひ出したからいいでせうと言つて置いたが、あとで聞くと父の妹の、ほら、すぐ家の裏にゐる奥村のおばさんから苦情が出たので止めになつた。

「奥村と言へばあのひとも君の腹ちがひの姉さんだから、向ふでも會ひたいつて言つてゐるから一度會つてくれないか?」

「奥村のおばさんか?——さうね、會つてもいいね、ご亭主はなくなつたと言ふぢやないか。」

「だいぶ前の話だよ、あのおばさんも此度の森の娘の仲に入つて口を切つてくれてゐるんだ。」

わたしが子供の時分から奥村のおばさんといふものの名前は頭に殘つてゐたが、腹ちがひの姉であることを知つたのは、ずつとあとからだつた。脊丈の高いところは兄の宗義に似てゐたが顏容は似てゐなかつた。竹を割つたやうなといふのはあんな人のことだらう、さう宗一があとで附け加えた。

暫らくしてから宗義が出て來ると、すぐ先方の話はどうだつたと言つた。宗一は癖のやうにしてゐる膝のさきをぴりごり動かしながらきまり惡さうに言つた。

「何だ彼だとめんどうなものですから……いつそ森さんの方にしやうかと思つて、お父さんの方から斯う一度話をして貰はうかと思つてやつて來たんです。一度斷はられたのをぶり返すのは變ですけれど。」

「うむ、此間も宋一にならやつてもいいと言つてゐたさうだよ、——此春話のあつたときに貰れればいいのに今ごろになつてな、——だがあそこもいい口が今までになかつたらしいんで、負けた氣もちになつたらしいんだな。つまり斷はられた同士だから却つていいかも知れない、——。」

宋義は左ういふと齒のない顎さきでおかしさうに笑つた。宋一もわたしも仕方なしに笑つた。「しかしだな、ただ先方がさう言つただけで貰れるかどうかは當つて見ないと分らないから。」と何か考へながら言つた。——五年前の初夏に歸省したときに宋一は庭へ出たわたしに垣隣りの植込みの深い家から漏れるオルガンの音を聞かせ、ちよつと此のあたりには居ない美人だよと言つた。緑の木々の奥から漏れるオルガンの品のよい音色は、少し陰氣くさかつたが何かほつそりした彈き手の、うしろ向きの姿態をさへ思ひ浮ばせたほどだつた。「ぢや君は何かい庭ばかりへ出てゐるわけだね、あれが鳴り出したらそれを合圖にね。」わたしはかう言つて笑つたが、あんまりあたりの緑が美しいものだからまだ田舍に戀はあると草深いあたりを眺めたりした。

「ところが僕が庭へ出ると今まで開けて置いた障子をぴつしやりとつら當てらしく閉めるんだよ。ちよつと頰打ちを食つたかたちだね。」

「なるほど、」

わたしはそのときの宋一が眼に見えるやうでおかしかつた。處女の持つてゐる意識しない活潑な野蠻さがをりをり小氣味よく發せられるものだが、その娘にも多分にそれがあるらしいと思つた。かれは間もなくおやぢに話して申込んで見たがまんまと斷はられた。あまり年がちがひ過ぎると言ふ先方の言ひ分だつた。そしてこんどで二度目の申込みだ。

「まだ僕は本人を見ないんだが美人らしいですね。」

わたしは宋義にさういふと、年寄りらしく仔細に考へるやうにして
「あれで背は高い方ぢやが、すこし肺病美人の方だな、當節はわれも人も銘仙美人を珍重するやうぢやが、——。
「銘仙美人、——これは新らしい。」
わたしは笑ひ出したが、宋一はおやぢの言葉に氣をつかつて少し不安らしくぶつぶつ言ひ出した。
「さう言へば顏いろがすこし靑かつたやうな氣がしますね。なりはすうつとしてゐた方だが。」
「わしよりお前の方がよく知つてゐる筈ぢやないか、そろそろ苦情が出はじめましたな。」
宋義はわざと皮肉つて、「でもしばらく見なかつたから、どんな顏だつたか忘れてしまつた。」と言ふ息子の顏を靜かにながめた。しかしその忘れてしまつたと言ふ宗一の言葉づかひには何處か實感が出てゐた。おそらくずつと古い覺えを辿つてゐるものに違ひない、——わけても女の顏といふものは曇つたり晴れたりしてもその艷にくるひがでてくるものだ。そんな忘れかけたやうな顏をいま急に思ひ出して自分のものにしやうとする、それは焦りすぎてゐるとわたしは考へた。無理にも以前に見たものを自分だけできれいだとか美しいとかいうふうに決めてしまふのは考へものだ。或ひはすつかり顏付がちがつてゐるかも知れないのに、——。
「君は忘れたと言ふがそれは本當かい、本當ならもう一度見る必用があるぜ。」
「うむ、うろ覺えなんだ。」
宋一はきふに酷く惑ふてゐるらしかつた。一體この男はどこまで本氣でゐるのか、それともどこまで焦々してゐるのか、分りかねるやうな氣がした。この男は眞實といふものを自分だけで持ち合せておて對手を見付けたら無理にでも會得させやうとするふうの男か？ それとも對手がたとへ見付かつても自分は自分だけで生涯その眞實を持ち溜め、さう

じて腐らしてしまふのではなからうか、これはよほど念の入つた孤獨者だとも思つた。

「いまさらそんな事を言つては困るぢやないか、今の今ならいいが、若し口をかけてからだとなほ困る。」

「いや話はすすめてください。」

宋一はくるしさうな顏をした。來年は三十四だ、そしたらちよつと初婚の人は田舍ぢや貰ひにくい、田舍でも東京でもそんな年まで獨りでゐるといふことは、その人に何かがあつたとしなければならない、――宋一はそんな言葉を父親や奥村のおばさんからも聞いたりした。うつかり暮してきて氣がついて見た宋一はばかか何かのやうに自分の年に喫驚りて慌ててゐる、――わたしはさう考へると全くこの男は暢氣でもなかつたくせにうかうかと日を送つてきたものだと思つた。だがこの男はあまり女を選りすぎたやうにも思はれた。

「宋一が此處を出て今の家を借りたときなんぞでも、たつた松一本のことからぢや、ほら門の内の松を宋一があのままにして置いて呉れと言つて聞かない、あのままにして置いたら道路取廣めのために家を毀さなければならん、それも大した松ぢやなし……そんな費用倒れな風流は御免ぢやと言つたら、その夕方銀行の小使を連れて來てさつさと越して行つたのです。我儘だと言はうかどう言はうか本當に方圖の知れん男ぢや、それもあんた此町が戰のやうに道路開拓の忙しい最中のことぢやもの。」

「でも松の木はちやんと殘つてゐるぢやありませんか。」

「そこですよ。」と宋義はすこしやつきになつて、「わしもあの松は君もここで生れたから覺えがあらうが、古い松で、もう二百年は經つてゐるだらう、だから植えかえは枯らすに決まつてゐる、――それで口ではああ言つたものの内々家の方は左から右へ振つて少しの缺損を見ても、松を生かすつもりでゐたのぢや、それだのにぷんぷん怒つて引越し

てゆくなんて親の心を知らぬにも程があると思つてな。」さう言つて、「古い木は枯らさぬものだ。」とも言つた。
「お父さんの言ふことに間違ひはないのかい？」
わたしは笑つて宋一にさういふと、宋一はただ苦笑してゐた。――あとで宋一は辭して前庭へ出ると、師走の風に皓々と鳴つてゐる松を見上げながら言つた。
「おやぢはあんなうまいことを言つてゐるが、はじめは矢張り伐る氣でゐたらしいんだ。僕があゝ言つたのが預つて力あるわけさ。」
「さうかね、なるほど此燈籠や石の一件から察しると、ちよつと嘘の名人かな？」
わたしはいはゆる預りものの青い石と、古い亭々たる老松とを瞻上げた。さういへばこの松もだいぶ子供のときから見ると大きくなつた。松の膚と同じい褐色してゐる油蟬が一疋、啼かないで今も止まつてゐるやうな遠い覺えが、ところどころ雪で白くなつてゐる梢の上にあつた。その皮を剝いてただ何かなしに遊んでゐた子供はどうしたらう、――わたしは微笑んで宋一に言つた。
「これを伐らなかつたのは何よりだ。」
「これだけのものは些つと伐れないよ。」
俳人である宋一はかなり得意らしく、自分の我をおやぢの前に通したことをわたしにこまごまと話した。――歸りに宋一は道の近くだつたので、わたしの家に寄ることになつたが玄關に見馴れない新しい娘さんのはく高下駄が一人分脫がれてあつた。紅い天鵞絨のと、一つはうすい紫色のとあつた。
「お客さまらしいね。」

「うむ、誰だか知ら、こんな派手な履き物の客はない筈だが。」

二人が玄關の間にあがると、家のものがすぐ出て來て、「東さんの妹さんが入らしつてゐるんです。」と言つた。――「東さんて誰だらう?」わたしはちよつと思ひ出せなかつた。

「わたしの姉さんのところへお花を習ひに來てゐた、ほら、瀧の川の尾久にゐらした人で、いつか來てご飯をたべて行つた人です。」

「あゝわかつた、妹さんがあるとは聞いてゐたが、あの東さんか?」

わたしは茶の間へ這入ると、その東さんにちよつとあいさつをした。姉とはもつと別ぴんだと思つたが、恐ろしく茶つぽい西洋人みたいな瞳だと思つた。

「これは甥で小島といふのです。」

「はあ。」

東さんはさういふと赧くなつてきふに男が二人も眼の前にあらはれたので、少し居ずまひをなほし今さら容氣の新鮮さにどぎまぎしてゐた。この方は東さんのおともだちで平岡さんと家のものが紹介した。すぐ人の奥さんだと思へた或ゐるものをもつてゐた。

「女子職業學校の紀念日なんでわさわさ海岸から出てきたんですて。」

家のものが左ういふと、口の中で、さうなんですとうなづいて見せた。それが子供子供してゐてあつさりした感じをさせた。宋一は銀行の仕事でその海岸へ行つたことがあるので、まだ海べりのとつつきの旅館が此間行つたときに普請中だつたが、もう建ち上つたかどうか、あそこは夏なら涼しいところだと言つた。

「まだまだ何時建ちあがるかわかりません。」

東さんはただ答へるだけのことを答へたきり、にこにこ微笑つて家の赤ちやんをあやしてゐた。ひるすぎから射した珍らしい日光のかげんか、東さんの頬は赤ん坊のによく似た赧さでふくれてゐた。ごゆつくりなさいと言つて二階の室へ上つた。宋一は默つて次の間で雜誌をひつくり返してゐたが、だいぶ經つてから

「なかなか美人だね。」と言つた。

「にこにこしてゐるところが好いぢやないか、あんな女といふものは腹のそこに何も考へてゐなくてぼんやりさんでいいよ、女はぼんやりさんが一等いいよ。」

「さうだな、全く、ぼんやりさんが一番いいね。」

宋一は何か考へこんで、同じいことを言つてぼんやりした顔をした。わたしは女の中にも一見その顔かたちでお中のなかまで洗つて見せる類があるものだといふことを、けふ東さんを見て左うかんじた。そのうち表の方で挨拶を交してゐるらしい女らの聲が、庭のそらを通つて二階の障子窓から聞えた。歸つたのだなと思つた。わたしは默つて考りに考へ込んでゐる宋一をこれは飛んでもない正直者だと思つた。

「東さんを君は好きになれるかい?」

「美人だね。」

「いや好きになれるかいと言ふんだ。」

が、宋一はれいの膝のかしらを二三度動かしたが、きつぱりした調子で諦らめたやうに言つた。

「あれは貰へまい――。」

わたしはふと又たあれは貰へまいと口のなかで言つて見て可笑しいやうな、吐息のやうなその言葉をしばらく頭の中に置いた。

「僕の頑固な母親はよく僕が癇癪を起すと、癇にも幾通りもあるよ、お前のは莫迦癇だとよく言つた、が此間又た面白いことを言つたのだ。緣のあるものは世の中に一人しかないと左う言つてゐたよ。」

宋一はわたしの顏を見つめると悲しさうな顏をして、貰へさうもないな、とやはりがつかりした調子で言つた。この男はこれまで一番ほしい女にけふ出會つたのだなと左う思つた。

「とにかく僕の方からこんどは當つて見やう」

が、宋一は手をふつてむしろ好意に甘えすぎ、そのために駄々をこねるやうに頭を振つて言つた。

「あれは駄目に決つてゐる、僕はやはり森の方も斷つて一人でゐやうと思ふんだ。その方が氣樂でいい。」

「何も森の方もいまの今決めて來たのに斷はらなくともいいぢやないか？」

宋一は立ち上ると、僕は失敬すると帽子を取つた。ぢや歸りたまへ、しかし僕にまかしときたまへと言ふと、こちら向きにならずに梯子段を下りながらたのむと言つて外へ出て行つた。家のものが、わたしのそばで話しかけた。

「東さんは宋ちやんのに恰度ようございますね。わたしあの人がけふあして珍らしく逆つてゐらしつたのが、何んだかお母さんのれいの、緣のあるものは一人だとお仰有るのによく當るやうな氣がしてならないんでございます。」

「妙なものだな、これがうまく話が纏まつたら世の中にや色んなおきまりがあるやうな氣がする。だがどうなるか明日の事が分るもんか？――。」

「でもあれだけの子をよその人のおよめさんにあげるのが殘念ですね。」

「女でもそんな氣を起すことがあるものかね。」

「そりや起しますとも、せつかあくあゝしてまるで見合ひをしに來たやうなものぢやありませんか。そして宋ちやんの方は及弟だし、東さんさへうんと言つて貰へばいいんですもの、――ですけれど宋ちやんて人はありや奥さんを中途でかへるやうな人ぢやないか知ら？ そんなことはないでせうけれど何んだかわたしそんな氣がしてならないんです。」

「さうも言へるやうなところもある！ さう、あんな男かな、妻君をかへるのは？ しかしどうだか分らない、――。」

わたしは些つと宋一にはそんなところもあるが、しかし妙な熱情かあるからそんなことはなからうと言つた。

「宋一の方が定つたら宋一のお父さんにもばあやが要るやうぢやないか、欲しさうな顏をしてゐる、――。」

「まあ、欲しさうな顏ですて。」

けれども不自由は不自由でせうねと言つた。男はどんなに老年になつても、やはり女がいるものだよ、それは若いものと異つたまるであどけない友達ちのやうなものだ。――しかし女の老年期には全然男がいらないものらしいと思つた。

四

あまりかけつけないのでへどもどして、すぐ腹にあることが言ひ現はされなかつた。それに長距離だつたので聲が遠くて些つとわからなかつた。

「越中の……あなたのもと居た、ほら住吉やのお内儀さんの近づきのものなんだが、なに、分らない？」

困つたとわたしは對手にもつと早やわかりする爲めに、何か手近いことが言へないものかと、あれかこれかと考へあぐんだが、やはり思ひ出せなかつた。電話といふものは何といふ間だるつこいものだらうと思つた。それで又た始めか

らかけなほした。

「あなたはお久さんですね、もと越中にゐたことのある……。」

「ええ、わたくしお久でございますが、どなたでゐらつしやいますか？。」

「ほら住吉やのお内儀さんの弟なんだ。東京にゐた、——こんど歸つて來て此間住吉やへ行つたので、君のところが分つたのでかけてゐるんですよ、分つたかね、四五年前に越中で會つたことのある。……」

「としますと、小松村の兄さんの、あの弟さんでございますか？」

「それ、それです。」

「まあ、やつといま分りましたわ、おひさしうございます、わたくし先刻から何だかさつぱり分らなかつたものでございますから若しかしたら小松村の兄さんぢやないかと思つてゐたんです。ようこそ！　東京はたいへんなことになつたさうですて陰ながら案じてゐたんでございますが、ご無事で何よりでしたわね、ほんとによくお尋ねくださいましたのね。」

わたしはお久の聲がやつと今古い記憶のなかから感じられ、ひとところとは落着いた調子になつたと思つた。それに人間の聲なんてものは、こんな遠距離の電話の中にも瞭乎と誰々だといふことが判るものだと、別にふしぎでもないことに或る不思議さをかんじた。

「でね、この間あちらへ行つて來て、やつとところが分つたんですよ、それからたあちやんと言つたね、あの子もすつかり達者になつてゐましたよ。」

「まあ、あれを見なすつたんですか？　あちらでは皆様お變りもなかつたんですか、こちらへ參つてから一度おうか

がひしやうと毎日思はない日がないんですけれど、田舍のことでもあるしついまだ一度も參らないんですよ、よろしくお仰有つてくださいまし。——そしてこんどはお國にしばらくゐらつしやるおつもりですか？ それとも……。」

「しばらく居やうと思つてゐるのだ、やつと少し落着いたくらゐだから、けふあたり君の方がひまなら行つてもいいと思ふんだが、都合はどうかね、こちらから出掛けて若しかしたら居なかつたりすると遠方ではあるし……。」

が、すぐ返辭がなくて、五秒ばかり經つたあとで、すこし聲が變化つてゐるやうに思はれるやうな調子で、「實はわたくし此あひだから風邪氣で臥てゐるんでございますよ、だいぶいいんですけれど、まだ床の中にゐるんです。」と言つた。わたしはそれが作りごとではないと思つたが、なぜか頭へピンと感じられた。

「ちよつとの時間くらゐ會つてくれませんか？」

「まだお坐敷へは出ないんですの、だもんですから……。」

「そのままでいいんだが。」

「ですけれど……。」

わたしはこんどははつきり胸に應へた。或ひは會ふのをいやがつてゐるのかも知れない。さうでなかつたら久潤りだしそのままで會つてくれさうなものだ。かう思ふとれいのたあちやんの姿と、姉のあのときの曇つた顏つきと、そして住吉やへ出入りしてゐる代言人の顏つきとを同時に思ひ出した。住吉や一家に好意をかんじてゐないお久が、しぜんわたしにまで好意を持つてゐない譯だ、わたしは何だかがつかりした氣もちになつて、早く電話口を隔れたかつた。

「何日ころならいいだらうか、醫者はどう言つてゐるんです。」

「何日ころ起きられるかわかりませんの、いいにはだいぶいいんですけれど……。」

「ぢや明日は?」

「え、明日はだめですの。」

「明後日は?」

「それもはつきり言へませんの。」

向ふの心持ちが見えて來たので、わたしは甲斐のないことを繰返すのに耐らなくなり、「それぢや又たあらためて電話をかけることにしやう。」と言つた。「どうぞさうなすつて下さいまし、そんなに永い間ねてゐることもできませんから!」と言つた。わたしは電話を切つた。なぜかぢかに會つてゐるより悲しい氣がした。

「まあたよりのないお電話ですね。」

料理屋の女中のさういふ言葉に身が引け一さう腹立たしかつた。蕭條たる寒驛のありさまは目にうかんで來たが、枯草に手を觸れるやうなよそよそしい氣が起つた。やはり子供のことから作吉や一家の、そのはしくれのわたしにまで會はぬ先方の氣もちが、險しくはないがわたしには腹にも頭腦にもひびいてくる何物かがあつた。

「そんなふうだとなほ逢ひたいものらしうございますね。」

「ふむ。」

わたしは途中で買つた新潮を膝の上に置いて、自分の書いた小説をすこしづつ讀みはじめ、このごろ廢めた酒のかはりの冷たいサイダーと何かの洗ひとを交る交る一箸づつ手をつけ、早や寒い風を切るペエジをめくつたりした。女中は一人で來て、一人で默つて夕飯を食ひに來たこのあたりには珍らしい客を折々じろりと見てゐた。「こんなところで自分の書いたものを讀むなんて、とぼけてゐるぢやないか。」さう思つて雜誌を伏せ、サイダーを飲んだが矢張り所在なく雜

詰をひろげた。女中は詰らなささうにしてゐたが何時の間にか座を立つて行つてしまつた。――障子硝子から寂寥たる北國の風色が、袖垣を隔てた蒼緑の松の吊繩の、その帆のやうな三角形のてつぺんに震へる空の色にあつた。

「しやんしやん、とてしやん！　もつと足を擧げて、――もつとだよ、こまるねお前のやうだと、しやんしやん、とてしやん！　で左の足を扇のさきを目あてに擧げるんです、困るね」

踊りのお師匠さんは朝から同じことを繰り返したが、お久はそのたびに苦しさうな目つきをして、足を擧げかねた。しまひに十六のお久の大きい瞳には涙さへ浮んで、呼吸づかひがはあはあして何かよ程苦しさうに見えた。嚴丈な稽古扇のさきが震えてゐる――。

「しやんしやん、――始めからですよ、とてしやんで……。」

が、お久の顔は見るうちに蒼ざめ、いまにも倒れさうだつた。そのときお師匠さんはふしぎさうにお久の顔と足つきとをじつくりと見つめ、何か思ひ當るやうなふりをして靜かに言つた。

「お前病氣ぢやないかね。」

お久はしばらくしてから、べつに自分でも左う思つてゐないらしく

「いいえ。」

と言つたが、お師匠さんはこちらへ居らつしやいと言ひ、誰も來ない離れの障子の外をちよつと隙見したが、秋口の庭さきに茈啼く蟲の外には、人のけはひも物音もなかつた。「お前正直に言つてごらん、いいやうにして上げるから、病氣ならそのままにして置いたら大變だから。」と言つたが、こんどはお久はいいえとも言はないで只默つて啼きじやくつた。

「泣いてばかり居たつて分りはしないんだから、これこれの譯だからとしやうじきに言つてごらん。」

お師匠さんが詰ひつめると、やつとお久は顏を擧げたが言はなかつた。そこで內密に醫者に診て貰ふことにしたが、やつと半玉に出たばかりのお久は、はじめの內はどうしても醫者へ通ふとしなかつたが、無理に診察して貰ひ、そしてかなり永い間病院に通ふてゐた、——蒼白い顏をしたそんなお久の姿をわたしは海岸通りの裏町でよく見かけた、家にゐても鬱いでばかりゐた。わたしは不圖したことから料理番の子息にかかはつて、病みついたお久が何かなし氣になつた。あれから五年經つてゐる、——そして今わたしが何の氣なしに只逢つて見やうとする氣を挫かれたのである。

料理屋を出て寺町にゐる母のところへ寄つて見た。寄つては見るが二十分とはゐないのだが、やはり寄つて見たい氣もちになつた。わたしのために座布團を敷いたり茶を淹れたりして騷ぐのが氣詰りだつたが、しかし隱居してゐる母親といふものが、折柄そぼつ雨氣まじりの雪模様と一しよに、何か沁沁した氣もちになつた。

「松原町の、あの子がお前のとこへ訪ねて行くと言つてぢや、知らん顏しての。」

「お婉がか？」

「おいの、こちらへ來ても訪ねてくれんと言つて、一そ知らん顏して行くと言つてぢや。」

「いまになつて何ぢや、あんときだつて先方でいやだと言つたくせに——。」

母と話すときわたしは國言葉をつかつた。さうでないと母の方でわかり兼ねたからである。

「それもさうぢやが、寺の方ででも一度逢ふてあげたらどうぢや、そんなにいやかいの。」

「いやだとも、月給三十圓とらねばよめにやらんと、お婉のお母さんが言ふたぢやないか？ お婉めもその氣になつて三十圓月給取れと言つたが、あのころどうしてわしが三十圓月給取れるもんか考へてみたとて分るだらう。」

「それもさうぢやが、あの子もお前と遊んだばかりに今どきうたを書いては、新聞に出しとろさうぢやと言ふことぢや、うた友だちだから逢ふても可笑しいことはなからうがい——あの子にしたところで先生みたいなものになつたお前に逢へば心樂しみだらうから。」

「三十づらのうた書く女はきらひさ！」

「さう言はつしやるな、お前も氣ちがひみたいになつた事を覺えとらうがの。人間はそんな薄情なことではあかん！出世したら出世したで人なみにしんせつものになるのがいいのぢや、あの子はお前のことを自分のだんなさんのやうに喜んでゐるのにお前ときたら、かいもく生意氣ぢや、そんな氣ではあかん、あかんぞ！」

「今になつてあくもあかんもあるもんか。ぢや又來ますよ。」

「さうか、こんどきでに考へてをいて置かつし。又來てくたい。それからねえさんによろしう言ふとくれ。何ぢや又た雪がふるかいの、今年はあつたかぢやが、ひよつとすると大雪かも知れんぞ。用心せにやならん。」

「ぢや又た、——」

「うん又た來てくたい、時々左うやつて來てくたい！」

五

宋一の父親の來義が來ると、先づお茶を飲んでから自分のことのやうにきまり惡さうな顔貌をして、れいの話のことぢやがねと言つた。わたしは皆聞かないうちから、森の娘も斷はられたなと思つた。

「やはり年が違ひ過ぎると言ふんで、今朝斷つて來た、——わしもこの話ばかりは厭になつた。二度も貰ひに行つて？

──いやはや、面目ないと云ふことはこんな事だらう。」

「宋一君に話したんですか？──。」

「まだなんぢや、君から一つこの話をして貰はうと思つてね、あんまり宋一とぢかにこんなことを言ひたくないんでね、宋一も斷はられてばかりだから、どんないい口だつて半分は何時でもあきらめて話の口をかけるらしいんだから、左う大した失望はせんだらうが、こんどばかりは大丈夫ぢやとわしも思つた。」

わたしは結局これは恰度都合がよい、東さんへかけた口がうまく行くらしいので、宋一も一そこちらから森の方は斷はりたいくらゐに考へてゐた矢先きだつたから、却つてうまく緣のある方へ傾くのが當り前だと思つた。「實は海岸の方に一人くちを切つてある娘さんがあるんでしてね、それは本人同士がこないだ此處で會つて知つてゐるんですから、そんなわけならこちらの話をすすめませう」とわたしは言つた。

「その娘さんはわたしの見たところで、ごく採點をコワクしても七點は出せるほどの女ですがね。」

「いくつです。」

「二十です、見たところもう一つくらゐ下にも見えるんです。」

「それぢや又た年がちがひ過ぎるとか何とか言ひはせんか知ら？　十三ちがひの宋一が四十のときには、何んぢや二十七くらゐだね、五十のときは三十八か？　少し若過ぎるなあ。」

「しかし宋一君はあんなに若々しいから、三つくらゐ嘘を言つて貰ふんですね、正直に言つてはむづかしくなるから」

「貰へれば結構だが、君の前だが宋一の嫁ではわしもいい加減いやになつた、話がうまく搬べば宋一がいけないと言

ふし、宋一がいいと言へば、こんだのやうに断はられるし、もう氣勞れだけでも一と通りぢやない！」

なるほど氣勞れでも一と通りではなからう、さういふ宋義のからだつきは痩せてゐるが何處かかちかちした固まつた老人らしい健康さを見せてゐる、——何だか鹿のやうなからだつきだと思つた。後足の構へまでしやんとしてゐるではないか？　これでは藥服なんかすることは無いだらうと思つた。——しばらくしてから、十三違ひだつたねと言ひ、また、

「五十のときにやつと三十七はちよつこり若過ぎるぢやないか？」

さう思ひ出したやうに言つた。ええ、そりや左うだらうが併し年なんかどうでもいいぢやありませんかとわたしは言つた。

「年なんか關はんけれどね。」

宋義はかう言ふと、三番目の弟を來春早々東京へ出して何か仕事をさせやうと言つた。すると宋義の外に中學へ行つてゐるのと二人きりになる、——それで女氣なしでは家もひろいから都合がわるからうとわたしは考へた。

「どこかにばあやのやうなものでも居てくれると、お宅のこまごましたことをさせるといいんですがね。」

わたしは當らず觸らずに左う言つたが、宋義老人はべつにわたしの思わくにこだはらずにむしろ平氣な顔つきで言つた。

「わしも宋一にさへよめが來たら、何とか洗濯くらゐさせるものを一人置かうかと思つてゐるのぢや、年寄り一人だと不自由で叶はん！」

「そりや不自由でせうとも！」

さういふとわたしは何か心で笑ふやうな氣になつた。やはり鹿かな！　いやその他の何者でもなからう、わたしはそれも結句七年間も獨りでゐた年寄りの、國風にいへば當り前のことだとも思つた。

宋一にこの話をすると、宋一は苦笑しながら、おやぢにも一人貰つた方がいいかも知れない、まだあの通りに達者なんだからねと言つた。――しばらくしてから、れいの森の方から斷つて來たことを言つたが、宋一はべつにがつかりもしなかつた。そんなことはとツくに諦らめてゐるやうな心持ちをも覗かせた。

「そこでだ。」わたしは言つた。「東さんへいま掛け合つてゐる最中だ。若しこんどの分に緣がなかつたら僕も當分君の緣談に口を切ることは止めにするし、君もいままでにないものと思つてまア獨りで從來通りに暮すんだな、いつまでも色乞食か何かのやうに「君のおやぢの口調で言ふなら」氣勞れでも一通りぢやないからね。」

「うむ、僕もそのつもりでゐるんだよ、東さんの口だつて十ちうの九まで駄目なやうな氣がして、一そまつつぐに斷はられた方がいいやうな氣がするんだ。先方の返事を俟つてゐるだけでも瘠せるやうな氣がしてならないんだ。全くこれは神經衰弱でもなければ氣鬱病でもない、直接に瘠せる病氣みたいなもんだよ。」

「なるほど神經衰弱でもない直接に瘠せる病氣だ。」

洋服を着たやさしい色乞食、――わたしはそつと心でつぶやいて見て、なるほど、直接に瘠せてゆくのが分るやうな氣がした。それに宋一は少々憂鬱病の氣味かなともわたしは思つた。

「よめの口があると又かと言ふ氣がして、第一番にこれも斷はられるかと思ふと氣がすすまないんだ。東さんの方も

既う僕には分つてゐるやうな氣がするから、向ふから斷はられる前に一そ止めてをきたいと思ふんだ。切角君に口を切つて貰つたけれど、僕には分り切つてゐるやうな氣がしてならないんだ。」

「ぢや何かい、もう斷はられる氣でゐるのかい。」

「うむ、その他のことは考へられないぢやないか。これまでのことを考へて見ても僕には左う思へる！」

「ところが僕には左う思へないんだ。何だかこんどは生きたものがつながつてゐるやうな氣がするんだ。生きたもの！なんて變な言草だがこれまでの話と違つてネバリ氣があるんだ。」

宋一と東さんとが何んでもないときにひよつこりとわたしの家に出會つて、そしてあのとき蓮根の糸みたいものが不思議に繋がり合つたやうな氣がした。たはいない全く詰らない短かい間向ひ合つただけで、宋一の、くたくたに勞れてしまつたあんな心持ちが、東さんには解らなかつたがそれがぴつたり食ついたやうな氣がした。運命？――などと野暮なことをわたしは言はないが、それが緣とやら言ふものの形をもつてゐたではなからうか。緣のあるものは一人だといふ說、全くどんなときに人間はお互ひに一しよにならなければならないかも知れない、――あの時、わたしは宋一と東さんとがほんの一言か二言かを話したときに、この人達ちを夫婦にして見たら！と言ふいたづら氣を起したが、それが左う考へてゐるうちに或ひはこんなに偶然に出會した二人だから、ひよつとしたら話が纏まるかも知れないと只何となく左う感じた氣もち、――その氣もちはやはり續いて宋一と東さんとがうまく纏まるやうな氣がした。わたしは宋一の顏を見ながら言つた。

「男と女とはほんの一と呼吸だよ、その一と呼吸でできるものはできるし、できない奴はできない、――。」

「さう言へば左うだが…………。」

「つまり一時間だつて好きな男ならできるし、一年通つてもできない奴は頭からできないわけだ。───君の場合は異ふが併しあのとき些つと一しよになれるやうな氣がした。」

「僕はさう思はなかつたよ、てんでそんな事は考へもしなかつた。」

「それは東さんがちよつと綺麗すぎて見えたからではないか。女のきれいなのと言ふものは最初の次の次の感じまでも男には陰氣な氣もちを誘ふものだよ、君の最初もやはりその感じではなかつたかい！ だが男といふ奴はそんなきれいな代物でも恐らく例令へば半日か一日くらゐ見てゐたら、さつきの陰氣さをすつかり拋げ出してこんどはばかに快活になれるんだよ。」

「君はうまいことを言ふよ、なかなかうがつてゐる！」

「穿つてゐるかどうかは知らないが……、とにかくあのときは何か緣があつたやうな氣がする。」

しばらくして戯談ではなく、宋一は不圖こんなことを言つた。

「緣があればいいがなあ───。」

わたしは可笑しくなつて腹の中で口眞似をして見た。緣があればいいがなあ、───と。だが人生のことはみんな緣のないことだらけではないか？ そして又た或る意味で緣のない事と言つたら一つもなささうだ。ただどうかに緣がどう向いて來るかが考へものだ。───わたしの例のお久でもやはり緣無き衆生のひとりではないか？ あんなお久のことがわたしの頭に殘り、ときどき何か考へさせてくるのだもの、宋一はきつと東さんをほしがつてゐるのだらう、神佛などといふものに縋つて經驗が覿面に人間に顯はれるものだつたら、宋一でなくとも此のわたしにしても、その神佛にすがりたいことだらけではないか？ 全く縋りたいことだらけだ。

「とにかく君もその生涯の半分をしめくくるときが來たやうなものだ。」――

わたしはかう言つたものの、決して結婚したあとの、どうかすると結婚地獄へこの男を突き落したくなかつた。ひとりで落ちてゆくなら仕方がないが、いや、おそかれ早かれ人間は一度妻帶地獄へ陷ちてゆかねばならないが、それの仲人になつてこの男を嗤ひたい氣は起らなかつた。わたしのやうにさまざまな結婚によつて惱まされたりお互ひに呪いたりしたものは、何が何んでも祭りあげた仲のよい夫婦の少しくらゐ甘過ぎるやうな生活が見たかつた。自分だちの仲間へ引き摺り込んで、續てそれ見たことかなどと云ふ意地惡い眼附でこんな人生を見たくなかつた。――何となく地球の暮しまでが悒憫されるやうな荒涼としたこのごろのわれわれの暮しに、この男だちだけでも手近にゐてくれ、そして一點の艶を注いで呉れたら？　全くそれほどに考へるのも色々な暮しをして來た三十男の、そんなにまで輕卒な言葉ではなからうぢやないか？――つまり此の男がまんまと人生の缺員だつた空の椅子に坐り込むだけのことだ、何とさまざまな事を今はわたしに考へさせることだらう。

六

東さんと同じい町にゐる石崎孝次といふわたしのところへ遊びにくる男に、何氣なく東さんのことを訊ねると、東さんは內氣な人ですと言つて御存じですかと言つた。別に知つてゐるわけではないが、わたしの甥の小島宋一の嫁に貰ひたいと思つてゐるんだ。君はあの町では名望家に生れてもゐるから、一つ口を切つて貰ひたいんだが、最もわたしの家內の姉からも話してあるんですと言つた。すると石崎はしばらく考へてゐたが、

「東さんなら僕がさう言つて貰つて上げませう。知合ひでもあるし小島さんと顏を合してゐるならな話しよいので

す。たしかに貰つて上げます。何なら結納を持つて行つてもいいくらゐです。」

「君一人で受け合つてくれても困るが、そんな簡單に話が運ぶものか知ら？」

「普通の結婚の形式でなく……つまり小島さんを間接に私も知つてゐるから恰度いい鹽梅です。大丈夫貰つて上げませう。」

石崎はわたしとは十くらゐ下ではあるが、とツくに結婚もしてゐるし詩や小說にも理解を持つてゐる關係からわたしに對する好意からでもこの話を押し進めるらしい口振りだつた。仲に入れる人として若過ぎないか知らと思つたが、石崎は午後過ぎにすつかり手順を聞いて十里もある海岸の町へかへつて行つた。

翌朝、わたしがやつと洗面を濟ましたころ、一番汽車で石崎はわたしの家をたづねた。顏を見ると、直ぐこれは話がうまく搬んだらしいと思つた。それにしても何といふ早い話だらうと思つた。

「どうでした？」

わたしがかういふと石崎は待ち受けたやうに、

「貰つて來ました！」と言つた。

わたしはあまり話が簡單過ぎるので面喰つて、ちよつと聞きなほした。

「貰つて來ましたよ、たしかに！」

「どうしてそんなにうまく手ツ取り早く行つたんです。」

「あれから歸へるとすぐ東さんへ行つてお父さんに談判したんです。あんな大きな呉服屋ですから、わたしも引受けたものの半分はあやぶんでゐたんですが、短刀直入にですね」

「短刀直入はいいですね。」

「その短刀直入で何も彼も言つて呉れるかどうかと言つたのです。僕はこの通り百姓と書生半分みたいなものですが、仲人商賣ぢやないからと斷つてをいて直ぐ返辭をして呉れと言つたのです、――ところが東さんのお父さんといふのは、變りもので、じつとわたしの顏を見てゐて、本人がいいつて言ふならあげませうと來たんです。」

「小島の身の上なぞ聞かないでね。」

「一つも聞かないんです、――そこで僕は咲子さんにぢかに會つてあなたさへ聞いて下さればまとまるんですがと、ときどき町で顏を合す關係から一も二もなく談判したんです。するとお父さんさへよければと、あんなぼんやりした人だけにふとさう言つてくれたんです。何のことはないこれで話がまとまつたのです。最もあなたの名前も奥さんも仲へ入つてゐることが役立つてゐたことは重大ですが……。」

「へえ、それで最う話は決つたやうなものですね。」

わたしは茫然と石崎の頑固な、こんな話には向見ずに進むらしい顏を見たまま、うまく行つたと思つた。が何んだか欺して人の娘を掠つさらへるやうなものではないかとも思つた。手先きをつかつて何んにも知らない田舍の人だちの大切な娘をまんまと貰つてしまふ、これを先方の親も人生の約束事のやうな氣もちで、その約を交んで、昨日まで知らない人だちの手に渡して了ふ、それも考へに考へ込んでからならまだしも、思ひ切りよくそれが何百年前からのしきたりであるやうに呉れてやつて了ふ、何時までも自分の手元に置くわけにゆかないと云ふ古い宿世を父親自身も思ひ廻して呉れて了ふ、――わたしは斯う考へると變に寂しくなつた。

「何だか呆氣ない、――あんまり話が早くまとまり過ぎてしまつてね、しかし大概この話はこのくらゐの速度で進む

べきものだらうが、——。」

「こんな話といふものは途中で考へ込むものらしいから、なるべく早く！　一切合齋遣つてしまふんですね。」

夕方、宋一にわたしはこの話をして、やはり緣のあるものは結局一人だといふ說が、どうも當つたらしいと言つた。宋一は最初には喫驚りして話のまとまつたことを聞いたが、しかし何時もより少し渝つた或る陰氣くさい默つた顏つきをした。そして別に大して喜んでもゐなければ又取り立てて沈んでゐるわけでもない、——只一種の落ち着き方が、ふしぎにこの話をした瞬間から宋一にあらはれた。わたしはそれを珍らしく眺めた。或ひは人間はあんまり喜び過ぎたときかに些つと陰氣くさい顏をしてみることがあるものだ、宋一はいまその氣もちでゐるのではないか？——、

「いろいろありがたう！」

宋一はかういふと、「こんなにうまく行かうとは思はなかつた。」と言つた。

「つまりくちを引き損つてばかりゐたものが、一番あとにひよいと抓んだ奴が大當りだといふことだね。」

「いや、僕はくちが弱い方なんだよ、けれども！」

「こんどは當てたと言ふのかい。」

「まア然うさ！」

わたしは始めて宋一が微笑つたのが嬉しさうだつたのを見た。その拍子に今まで氣のつかなかつたが、宋一の前の上齒が拔けてゐるのに氣づいた。そのために二つくらゐふけて見えた。年齢の方も三十だと言つてあるんだからそのつも

りでゐたまへと言ふと、さうかと答へた。しばらくしてから宋一自身でも氣がついてゐたと見え、

「前齒も入れやうと思つてゐるんだ。どうも前齒がないといけない。」と言つた。

「入れた方がいい。」

「宋義の方へ知らして置かなければならないが。今夜にでも君のところへ來るやうに言つて置かう。」

「ではなるべく急いだ方がいいんだが、君の考へは？」

「僕もすぐにでも式はあげたいんだ。また中途で話がこはれてしまつたりすると、目もあてられなくなるから――」

「全くそんなこともよくあることだが、こんどは大丈夫だよ。」

「けれども……」宋一はあやふやな表情をして言つた。「何だかあんまり話がうまく行つたので些つと不安な氣がしてならないんだ。」

「そりや僕にしても何だか變だよ、人をだましてゐる最中のやうな氣がするぢやないか？ あの人だちは君や僕たちとは善人だよ。」

「まつたくだましてゐるやうなものだ。」

しかし結局はだましたりだまされたりするうちに眞實のところが、ちよつとばかりお互ひに出てくるやうなものだとも思つた。人間は生涯だまし合へるものではない、――。

次の日の晩、宋一は明るい大通りを歩るきながら、あちこちの飾窓を覗いてゐたが、幾度もわたしに遠慮するやうな顔つきで、たうたう思ひ切つたやうに言つた。

「君が咲子を迎へに行つてくれるときに、ちよつと言傳けたいものがあるんだが……。」

「何かね。」

「實は指輪を一つ買つてやりたいと思ふんだ、べつに約婚指輪といふわけではないんだが、――。」

わたしは思はず笑つた。

「いい思ひつきだよ、持つて行つて遣らう、今夜買ふのか。」

「うむ、あそこへ行つて見やう。」

宋一は時計屋の店さきに佇ち、あかいのや、綠色のや、白い蛋白の色をしたのや、さういふさまざまの色合ひの指輪をながめた。ふしぎにどの指輪も値段が低く、手ごろのが無かつた。店へ這入つて見ても、やはり同じいものばかりだつた。

「割合ひに安いものぢやないか？　こんなに安いものか知ら。」と宋一は指輪を一つ一つ手に取つて眺めた。

「おいくつくらいの方ですか。」

「さあ、――。」

わたしは笑つたが宋一はなるほど指の太さも分らなくては、切角買つて行つても何んにもならないと呟いた。「おあとでお取換えをしてもようございます。」と番頭が氣を利かして言つた。

「どんな色がいいか知ら？」

「綠色かな。」

「ところが綠色はこれきりしかない、――これぢや全で硝子の方が餘程よささうぢやないか。」

「いつそ紅いのにしたらどうだい、そこにあるさくろの實のやうな奴！」

宋一はその角に削り取つたかなり大きい指輪を電燈に透し、美しい液體の凝つたやうな色をながめた。その紅い玉の

中にもう一つ紅い玉が電燈の光を胎んでたらりと光つて見えた。宋一は或る白い指さきまで眼に見えるやうな呟しい口付でわたしをかへり見た。

「これはどうだらう。」

「あとで小さかつたら取り換えるとしてそれにしときたまへ。」

宋一は青いサックに入れたのを外へ出るとわたしに手渡し、よろしくと言つた。たしかに預かつて置くとわたしは外套の隠しに入れた。風はないが綿雪といふ大きい輕いのが温かさうに降り出し、兩側の灯がうつくしく榮えて見えた。こりや大ぶ幸福さうになつて來たぞ、――わたしは隠しにあるサックに指さきがふれると、大したことになつたと思つた。

宋一にわかれるとわたしは家の茶の間にゐる女の前に、青いサックを置いた。女はおかしなことをすると直ぐ手に取らうとしなかつた。

「これはどうだい。」

「指輪?」

「うむ、宋一からの頼まれものさ! 咲子にわたして呉れと言ふんだ。」

「まあ、しかしいい色でございますね。でも宋ちやんはしんせつものですね。」

「だが、これを持つて行く役目はちよつと辛い。」

「さう、そんなにつらいか知ら?」

「つらいやうな氣がするよ、しかし反對の意味では何んでもない!」

「やきもちぢやない事?」

「さあ、やきもちは屹つとあとに來るなら來るだらう、只これはちよつとわけもなく悲しげな代ものさ！」

退屈な人生の或る閑暇な一日にはこんなたはいないことからも、人間は少しくらい悲しくなるものかも知れない、自分から折角築き上げたやうな始めはいたづら氣の、それがとうたういたづらでなくなつた證據には、だいぶわたし自身の考へが少しづつつらくなつて來たらしい、――そしてこんな電燈の前で魔法使ひのやうな指輪の青いサツクを目の前に置いて、しきりに煙草を喫んで、扨て何も言ふことすらない、

「退屈な人生の或る閑暇な一日にはか？――。」

わたしは默つて二階へ上ると室に坐つてゐたが、不圖手紙を書きはじめた。――田舍にかへり候ひしよりふとしたることより人の嫁の世話をし始めて已れ田舍に朽ち果てんなどとがらにもなく脅やかされ申し候も可笑しき限りにこれあり候と書いたが、それをすぐ揉み棄てこんどは又た別にかれらしい韻文のやうな半分詩のやうな文句をならべ立て初めた。人々出世したらんごとく言ひ觸らし申候へば、何氣なき態よそほい圖に乘りて只うかうかと毎日を暮し居り候。人々出世したらんごとき噂し合ふころ本人既に落ち目に向ひ、何かと心打沈み申し候を何とすべきよすがもなく、それこそ全く浮か浮かとその日その日を暮し居り候。君のごとき萬年處女の心すでに失せはてて今はただそれ死灰槁木のごとき暮しを致し候と申候ふべきか？――紀州の温い父祖の山麓にゐる友へ斯う書いて見たが、これは餘りさびし過ぎるやうに考へ筆を止めて室内をひとまはり眺めた。壺に水仙が活けられてある。……先日一老俳友の訪ね來りこのごろ雜誌の廣告に君の名前を見ざるはさびし、なるべく書きて見せたまへと申し候ときも、何と返事してよきかたたそこそこに胡魔化し候ひしが、何となく已が若輩の友を引立てるがごときその言葉の、身に沁みてうそ寒くむしろ心悲しく存ぜられ候。かれは又かう書き加えてからそれを封じた。そして外へ出やうとしたが霙まじりの寒む寒むとした雪が、消炎い

ろの屋根にびしやついてゐるのを眺めると、しかたなしに二階の障子を閉めた。

「ただうかうかとその日を暮し候か？――」あんまり人間が退屈すると退屈すら死んでしまふものだ。グルモンの詩に雪は妹、そと庭に睡つてゐるといふのがあるが、わたしの田舍でわたしを縛け廻した退屈も、吹き寄せられた雪の白い藪地のくぼみに寢てゐはしないか？――そしてわたしが火桶へ手をかざしながら何やら考へ出さうとすると、むつくりと藪地の陰の方でも起きあがるらしい、そしてとうとうわたしを人生の仲人にしてしまつたではないか？全くわたしは田舍ものらしい風俗に馴染んで扨てあらうことか人並みの分別顏をして宋一の仲人にならうとは？――わたしを尾け廻してゐる退屈はどす黝いからだをとぐろに卷いて、わたしが寢んでゐる間は雪のある藪地の陰でさむざむと今夜ものら犬のやうに寢ころんでゐることだらう、――。

七

「この間越中から手紙が參りましてそしていろいろなおみやを買つていただいたことなんかも分つたんでございます。何とおれいを言つていいかわかりません、――それにお電話のかかつて來たときにどうしても頭が重かつたものですから、ついあんな失禮なことを申したりして濟みません。でもこんなに雪のふるのによく入らしつてくださいましたね。」

「何んだかふいに來たくなつて遣つて來たんだが、あのころとはそんなに顏なんぞ變化らないやうだね、あのころの顏が少しくらゐ膨れたくらゐですね。」

「いいえ、もうすつかりおばあさんになりましたの、まだあの時はまるつきり子供でしたわね、けれどもあなたはす

つとかはつてゐらつしやる、——途中で會つてもわからないかも知れません。」

わたしはお久がもう二十二にもなり、こんなに落着き拂つてていねいな言葉なんぞつかふのが、別人のやうな氣もしたが明らかにねえさん株になつてゐるだけのものがあるやうな氣がした。しやうばい人の二十二、——まるで花から實になりかかつてゐる小さい青い形のやうなものではないか？——それに物を言つても一つ一つ考へてから言ふやうな調子がやはり年とつてゐるせいだと思つた。

「わたし何時までもこんなしやうばいをしてゐるのが氣まりが惡いやうな氣がしますの、わざわざ來て下すつたのに。」

「同じことぢやないか、しかし子供にはときどき會ひたいと思ふだらうね、ずいぶん大きい子だ。」

「ええ、そりや手もとに置きたいんですけれど、こんなしやうばいをして居ればさうもなりませんしね、よその子なんぞ雪の中で紅い足袋なんぞはいたりして遊んでゐるのを見ると、その子がきふに憎らしくなるほど、あちらにゐる子のことを考へてなりませんの、けれどももうすつかり諦らめてゐるんです。」

「何んとかして此方で一しよに暮すやうに話をして見やうか知ら？君さへその氣になるなら！」

「いえ、もう今になつてはなほ一しよにならない方がいいと考へて居りますの。一しよになつたらそりやつらいこと許りあるでせうし、それより一そ矢張り離れてゐる方がいいんですわ。」

「それぢや左うしたまへ、けれどもあんなによく似てゐる子なんて少ないものだね、まるでそつくり！」

「え、みんなが左う言つてくださるんだけれど……。」

寒驛の古風な奥深い料亭の、窓硝子のそとは燈籠も松の木も水の涸せた池も雪に埋れて、藥圍ひの菜の撥いたところ

に寒椿が赤い――まるで誂へ向きの畫趣が折々の微風に松からずり落ちる雪に、輕い音を立てた。そして丹塗りの天井や柱の風俗が古めかしく寂然と、人ごゑすら立たなかつた。あんまり誂へ向きの風景だつたのでわたしはお久がこれまたあんまり一人前になり過ぎてゐるのが、物足りなかつたが澁さは充分だと思つた。

「今年の夏あちらへまゐりましたときに、朝のことなんです、あの子が浴衣の白地のふところを紅く染めてゐるんでどうしたんですと言ふと、朝顔の花をどこから千斬つてきたものか一杯詰め込んでゐるんです、あとでその浴衣を洗つてやつたんですけれど、それからといふもの能くその浴衣ににじんだ赤紫の色が眼についてならないんでございました。妙なことが頭に殘るものですね。」

「なるほどね、そんな感じはちよつと忘られないものだ。」

わたしはお久が母親らしく、――全く母親以外の何ものでもないのに心を惹かれた。「こんな寒い寂しい田舍にゐてわたしは矢張り何時までもしやうばいしてゐる方がいいと考へるやうになりましたよ、どう言つたつて女ですもの、どうしやうもないんですから!」とも言つた。

「それは贊成だよ、好きなことをして暮らすのが一番いいかも知れない、お坐なりでも何んでもかまはないから、どうやらかうやら一日づつ暮してゆくのが、そんなに厭でなかつたらその方がいいね、やけくそでないかぎり――。」

「わたしもその氣になつてゐますの、もう人さまが何と言つたつて啣を仕合つたつて平氣でゐるやうな氣になりましたの、ずるくなつたんでせうかね。」

「そこまで誰でも行きつくものだよ、當り前なことだらうね。だが先刻の話のあの子はだれだかわかつてゐるの。」

わたしは何氣なく言つたのだが、お久はきふに赧くなつた。こんなことにまだ赧くなるのか知らと、思ひがけないと

ころにお久を可哀しく眺めた。

「わかつてゐるやうなわかつてゐないやうな……。」

お久は戯談のやうに笑つて、

「ほんとうはわたしにも分らないんぢやないんですけれど、そんな事は言つたつて通つたためしがないんですしね。」

「でも女のほうでは、あれはたしかに分るものだと言ふぢやないか、何となく左う感じるだけで……。」

「え、分りますわ、けれども男つてものはそんなことを眞實にして呉れはしないんですもの、自分で左うぢやないかと思つてゐたつてはつきり口へ出して言つてくれないんですもの、だからわたしやけになつて自分ひとりでできたんだつて左うおもつてゐますの。」

お久は可笑しさうに笑つたが、笑つてしまふと默つて火鉢の上に伏目になり、間もなく眼を上げただわけもなく嫣然とした。それがいかにも見窄らしく寂しい女の微笑だつた。「だつて左う思つてゐる方が一番助かるやうな氣がするんですもの、いつまでも同じことをくよくよ考へたつてどうにもなりませんし……。」と言つた。

「全くどうにか自分で人生のしめくくりをしなければ駄目だ。」とわたしは心で考へた。かういふわたしは一體人生のしめくくりができてゐるのか、左う思ふと何か心細い頼りない氣がした。自分自身でさへまだ何もしめくくりができてゐなくて、ときどきおれは幽靈のやうに迷ひ出してゐるぢやないか？――

「だからわたしはけふはけふで生れ變つたやうに暮らすのが一番いいんぢやないかと思ひますの。しやうばいをしてゐる間は何時だつて半玉時分の子供のやうな氣がしますからね。」

「それが一等かも知れないな、いやな事は自分で勝手に流してしまつて、――いいことばかりを考へる――」それが一番利巧な暮しかも知れない。」

よくお友だちが人氣のない山の中へ行きたいとか、どこか人間のゐないところがないかなどと言ふが、わたしはそんなところより矢張りこんな廓にでもゐて、へいぜい人と交際はないで勝手な暮しをした方がどれだけいいか知れない、だからわたしはお坐敷へ行つてゐても何時もぼかんとして餘慮事ばかり考へてゐる、――そんなときお客さまから話しかけられても唯返辭してゐるだけで何を言つてゐるのか自分でも分らないことがあるとも言つた。それにこんなしやうばいをしてゐると大概の人がみんな何時でも寢不足をしてゐるので妙に夜中の二時か三時でないと睡れない、――わたしなんか夜明けごろでないと何時の間にか寢つかれなくなりましたと言つて、

「そのくせたまに溫泉へなぞ行つてゆつくり睡りたいと思つても、夜中に聞きなれない川の瀨の音などが耳に騷立つてしまひには頭にひびいて痛くてなほ寢つかれないんです。」

これは酷い神經衰弱のせいだらうとわたしは思つた。さう言へばこの前に會つたときよりか、どこか鋭どい皮膚からの感じがヒステリツクにも見えた。

「けれども父親のあてのない子といふ風に考へると、いやでございますね、あの子が女ですからいいものの、男だつたりして今に問ひ詰められでもしたら、ちよつと困りますわ。」

「それもさうだね。」

わたしは何か暗憺たる感じに打たれ、どの人をさして父親と言つていいか分らない、そしてそれが知つてゐても瞭然と言へないやうな變なしやうばい、――そのためにこの女はよく沈んだり鬱いだりするらしいと思つたが、この女だつ

てけろりと忘れてしまつてゐるやうなこともあるだらうと思つた。人間などといふものは一つの形式を外れてしまつたら、却つて人間らしくなくなつて、夕方の泥雪を嗅る風來犬とどれだけも變らないと思ふと、この世の中に尊敬することがあつても一つ桁が外れたら今のお久と同じいものが澤山できるだらうと思つた。お久だつてもつと五年も六年も經つたら或ひは今のこどもの事など考へなくなるかも知れない、――そのころに次ぎのこどもでも出來たらなほ忘れがちになつてしまふだらう、左う思ふとそれも人間らしく淺猿しくていいぢやないか？　自體人間は淺猿しくできあがりながらそんな事を考へてゐる閑暇さへないものだから、――かれはかう考へると眼前にゐるお久も世の中に着飾つてゐる貴夫人などもみんな一しよくたになつて見えて來た。それゆえ特別にお久を可哀しく感じたことは自分が少しばかり此女を好ましく感じてゐる以外に、べつに取り立ててお久のこの世の境遇に同情したわけでないことが、これまた淺薄な自分の心をさし覗かれたやうで、自分自身ではかない氣がしてならなかつた。

八

なるべく向ふの親だちに知れないやうに汽車の中か、それとも先方の家かで手渡してくれと言はれて手渡しされた指輪をわたしは懐中に氣にしながら、海岸の大通りの呉服屋の店さきに着いたのは、朝の内で綿雪が際間もなく降つてゐた。――能登地方の風俗としては嫁を貰ふ方でお迎えに出かけなければならない、その役目でわたしは何の事はない分別顔をしながら大勢の人に迎えられ、そして坐敷に通つた。發車まで一時間ある、――その間にわたしは咲子の父親や母親にあいさつをした。

「親も知らず子も知らぬあなたまかせでございますから、あなたが親さまになつていただきまして、――。

母親がさう挨拶をしたが、親もしらず子も知らないあなたまかせといふ言葉が、通常仲人が誰からでも浴びる言葉だらうかと思ひ、ちよつとわたしには任せすぎられた或る重さをかんじた。こんなお坐なりの言葉が矢張りこの世に嚴粛な絆を着けてなほ存在してゐるかと思ふと空恐ろしい感じがした。――新婦は入らつしやいましと言ふと、胡粉はしてゐるらしいが變色はなかつたらしく荷物のことを一々小聲でさしずをしてゐた。あんなに短かい日取りの間に女は女らしく何も彼も今までのことを投げ出し、そして選んだわけでもない男のところへ行くのかと思ふと、わたしは今更らしく田舎の風色をかんじた。さういふ古來の日本人らしい人情がどうして何時の世になつてもちやんと殘つてゐる、しかも生きたなまなましい娘さんの心にそれがまだまだ根をもつてゐる、――さう思ふと舶來の新しい思想や行爲や戀愛などといふものは東京地方にしかないやうに思はれた。わたしは西洋草花などにないなよなよした日本の花をそつとその匂ひをかいだやうな氣がして快よかつた。

「からだは大きいんですけれど、まるつきり子供ですからよろしくおたのみします。」

汽車のなかへ這入ると父親が左う言ひ、隣席の吹子の兄と一しよに、わたしに今更らしく挨拶をした。吹子はをかしさうに微笑つてゐた。わたしは宋一のことを一つ二つ話をしたりしたが、三人の内二人まで嫁に遣り、最後の吹子をも今奪られる父親としては何も彼も分つてゐるらしく、その巨軀をしつかりと腕組みをして時々何か考へ込んでゐる有さまに、わたしは何となく心惹れた。着飾つた吹子はただをりをり窓外を眺めるだけでこれもやはり何か考へ込んでゐた。わたしは指輪を出すひまがなかつたので、先方の父親に知れたつて關ふものか却つてそれがいいだらうと思ひ、そつと指輪を取り出すと、

「宋一からです。」と言つて微笑つて手渡しした。が吹子は突然だつたせいか、鳥渡手に取るのを逡巡つた。が當然取る

ものやうに今度は手のひらにのせ、「どうも濟みません。」と言ひ、父親の顔を見ながら少しばかり赧くなつた顔をこんどは兄の方へ移した。

「嵌めて見たらいいぢやないか？　せつかく下すつたのだから。」

「でもわたしの指はこんなに大きいんですもの。」

父親も笑つたが、「ぢや小指なら嵌まるだらう。」と言つた。小指には恰度はまり、ざくろの實が一つ赤く食ついた。間もなくみんなは默り込んだ。汽車は市街の方へ馳つてゐる。わたしは心で「とうたうだました。」といふ氣もちになつた。が誰も知らない。見ると咲子の高下駄の赤い爪掛けに田舍らしく兎の毛が温かさうに縁取られ、積雪が融けたと見え、露のたまがつづつてゐた。

家へ着くと階下では夕方に間に合はすために、髪結ひや着附の直しやらでごつた返してゐたがその最中に仲が一家、ごつとりと門前に着いた。どこから聞いて來たものか、寺町に隱居してゐるわたしの母親が、車夫に扶けられて降りた。

「お母さんか？——。」

「宋一のよめ取りはたしか今日ぢやと思つての。」

さう言ふと、よめさんは何處ぢや、二階かとたづねた。

「二階ぢや。」

「さうか、いづれ階下へ降りてぢやらう、そんとき見たいもんぢや。」

こんな忙しいときに來なくともいいのにわたしは左う思ひながら眉根を寄せたが、いまそんなことを言つたら又た小言が出るから默つてゐらつしやいと家のものが言つた。それもさうだ、默つて好きにさせて置かうと思つたが、——母

親は例のくせであちこち覗いて廻つてゐる、――。

「落着いて坐つてゐたらどうぢや、あちこちなぞ歩かないで？」

「お母さんかて見たい、見たいから來たのぢや。」

「さうやかて邪魔ぢやないか、家ぢゆうごつた返してゐるところだから。」

「邪魔なことがあるもんか、お前らはお前らで好きにしてゐたらいい、わしは此つとよめさんを見ればいいのぢや。」

「見たつて何んにもならんぢやないか、よぼよぼのくせに。」

「よぼよぼだから見たいのぢや。」

家のものが眼で合圖をしたので、わたしは默つてさし控えたが飛んでもない者が來たと思つた。それにも拘はらず母親は二階へあいさつをするのだと言つて上つて行つた。「見たいんですよ、見せてをいたらいいぢやありませんか。」と女は言つた。あんな年をしてゐてもやはり女はどこまでも女かな、見たい氣もちも分らないではないが……と言つてむかしの自分のことを考へるわけでもなかろう、これも退屈さましにやつて來たのかも知れない、全く寺の一間にゐてふと考へ出して來たものだらう、左う思ふとわたしはべつに小言もいへなかつた。

「なかなか美いよめさんぢや。」母親は階下で言つた。「むかしは十五か六でよめに行つたものだが、當節はだんだん遲れて來た、――暦でも日の廻りが遲くなつたぢやないか？」

が、暦でも日の廻りが遲そくなつたと云ふ意味は分らないが、感じは何か當つてゐるやうな氣がした。却つて反對に日の廻りが早くなつてゐるかも知れない、――。

その翌朝、咲子の父親がわたしのところへ禮を言ひに來た。今朝宋一のところへ寄つて來たが、もう二人は起きてゐてお茶をご馳走になつたと言つた。

「何か手廻りのものを買はうかといふと、今夜にでも二人で出掛けるからいいと言つてゐました。何より仲よくさへして呉れれば結構です。」

寢不足したせいか父親の顏がすこし腫れたやうに見えた。もう咲子(あれ)だけ殘つてゐたので咲子(あれ)も片づいたので、何だか肩の荷が下りたやうな氣がすると言つた。

「何彼とお世話になりまして、——ああして家も持つてゐらつしやるんで安心してかへられます。」

「いえ、行きとどきませんで……。」

こんなときの挨拶が分らないのでわたしはいい加減なことを言つた。

「これからはあなたが親さまになつて何分一つめんどうを見てやつて下さい。」

玄關へ送り出てからも、咲子の父親は同じことを繰り返して、雪のちらついた外へ出て行つた。が、何か寂しくそはそはして一刻も早く海岸の町へかへりたいありさまが、わたしには娘もつ父親の娘をとられたときの氣もちが分り過ぎるため、なほ寂しく感じた。とうとうまるで欺すやうにして娘を取り上げてしまつたと思ふた。世にこんな形式でどれだけの人がいろいろなことを考へて、人間から人間の手に移つて行つてゐることだらう、——。

宋一の父親のところへ行くと、宋義は雪明りの炬燵にまるまると寢そべつて、ようお出でと國言葉で迎えたが、男世帶の座敷は荒れてゐたが、こんどの嫁取りで求めたらしい二疊敷のさかえ緞通が、座敷にれいれいしく敷かれてあつた。

「すつかり草臥れてしまつてな、――つい炬燵へはいるとうとうとして了つたのぢや。」

宋義はいかにも疲れてゐたらしい顔つきだつた。長兄であるから宋一のこんどの費用は一切父親が出したのだが、その方の心配と、自分自身の荒涼たる氣もちとに、ただ一人居殘されて寂しく寒さうだつた。

「おかげでこれまで見たよめさんの、どれよりも一等ぢや、わしも安心した、金なんで少し貰つても平氣ぢや。」

さう言ふほど、切角貰つた息子のよめさんは手もとにゐなくて別居してゐるし、殘るものはこの老人だけだと思ふと、氣の毒げな氣もちになつた。五十代には五十代の人生があらう、そして六十代には六十代の空想があるにちがひない、――この老人は何か空想にでも縋りついてゐるだらうか、さうならそれで救はれるが、何もなしに、つまり煙草を喫まない人間がそれを用ゐずにゐるのを愛煙家が何となく淋しく眺めるやうに、或ひは的が外れてゐるかも知れないが、わたしは宋義にばあやの話でも持ち出さうかとも思つた。が、いまそんな話はわざとらしくて不可ないとも思つた。

「かうみんな決つてしまふと、由種を東京のどこか地みちな仕事の方へでも廻さうかと思ふのぢや、ああして遊ばしてをくのも困りものだから。」

「本人はどう言つてゐるんです。」

「本人はやはり音樂學校へ行きたいと言ふんだけれど、そりや駄目ぢやと言ふのだ、一年ばかり出して見てもその方に才がないから、――この間も毎日午后から決つて外出するが一體どこへ行くのだらうと思ふと、石浦町のカフエ、ブラジルへ行つて、コオヒイを一杯飲んでピアノの稽古をしてゐると言ふのぢや、恥さらしなと思ふけれど、そんなにまでしてもピアノが彈きたいかと思ふと可哀さうだし……。」

「さう言へばあのカフエでどうも由種らしいと思へる男が、がらす窓の方を向いて彈いてゐたことがありますよ、

矢張り由種だつたかな。」

硝子窓の方が明るかつたが衝立のかげで分らなかつたけれど、白い斑點のある鼠色のソフトのあたまが、わたしの下ろした倚子の方から見えた。珍らしい正確なタイムだつたのでわたしは聞くともなしに「故郷の廢歌」に或る氣もちを與ろ雪が降ると人間は感情的になるものだと云ふ風に聞いてゐた。どうも由種に似てゐると、勘定をしてかへりに左う思つたのだつた。――が、今それが本物の由種だつたので些つと可哀しい氣がした。震災さへなかつたならこの少年もピアノでも彈いて暮らせたのだらう、――。

「あいつもその氣になつてこんど上京したら、どんな仕事でもするらしいんぢや、音樂なんてものは何より風采が肝じんだ。第一あいつには少しも音樂家らしいところがない、――。」

「風采なんぞどうでもいいんでせうが……しかしカフェでピアノを彈いて見やうと云ふ氣もちは些つと同情しさすね。」

「いちいち同情してゐたら、親の身が立たん。」

それも左うだらう、だがばあやの話はどうしたらいいのだらうとわたしは半分可笑しがりながら、人生の途暮れてなほ明りを要する氣もちを感じた。老人といふものは自分の寂莫を我慢をして押し潰してしまうものだ、或ひは左う考へてゐても何時の間にか枯れ切つてしまふものだと思つた。宋義が今何も考へることもなくうつらうつらと炬燵に寢てゐるのは何となく日全く暮れてゐる姿ではないか?――ちやうど咲子の父親が目出度い目出度いと言ひながら娘をあかの他人に與れてしまつた氣もち、一人ですごすごと海べりの雪の荒い家へ引きあげて行つた氣もち。それらが一切この世の最も正統だといふ美しい形式にさへ纒められてゐるといふ事實、わたしはその一つ一つの珍らしくもない事どもが、かなりに心に

深く溜り込んでゐることを知つた。そしてそれらのものの總てがかなり眞實な氣もちのもとで動き且つ營まれてゐるのを見ると、この世は賴りないものであるが、しかし賴らうと思へば賴られるものだといふことを瞭乎と考へさせられた。

「だがおれ自身はもうその賴らうといふことさへ、うやむやのうちに過ごしてしまつたではないか?――。」

物音一つ立たない晩がひつそりと明けると大雪の朝になつた。さういふ時に限つて朝の間碧い空と日かげとが漏れた。町ぢゆうが雪搔く音と話し聲とに充たされ、眩しくて町を步けないくらゐだつた。――宋一はわたしの姿を見るなり、雪明りのする勝手へ連れて行つて言つた。

「今朝珍らしい小鳥が一羽立ち込んで來てね、――どうも水鳥らしいんだよ。」

新しい盥に水を張り、そこにせきれいくらゐの大きさの水鳥が、おどおどしながら泳いでゐた。何かの目籠をいくつもその上から冠せてあつた。咲子はあいさつをすると嫣乎した。すこし瘦せて見えた。きまり惡さうだつた。

「ほら、足のところに水搔きがあるだらう、雪があまり降つたので迷つて立ち込んだものらしい、――羽根なんぞずいぶん傷んでゐるぢやないか。」

「うむ、水鳥が飛び込むなんて田舍らしい話だ。」

「こんな鳥は見たことがないよ、鴫でもなし、かいつむりではないし……。」

うす赤い水搔きが可哀らしかつた。それに頭にはココア色の斑點が白い毛と雜つて見えた。

「先刻ちよつと手をやつて見ると、喙かれたんで吃驚りしましたの。」

咲子はさう言つて右の手を心もち動かした。氣がつくとれいのざくろ色の指輪がちらりと冴えて見えた。わたしは何氣なく宋一の顏を見たが、いつもよりずつと何か遠慮げな樣子がわたしに注がれてゐることに氣がついた。

「水鳥はばかに緣起がいいぢやないか、いい眼をしてゐるね。」

「かうして飼つたつて餌づかないからだめだらうな、どこか公園の池へでも行つて放してくるといい。」

「ええ、わたしあとで參りませうか知ら？」

「さうした方がいいね。」

藍いろでもないし青い色でもない、斑猫色の眼をしてゐる水鳥はときどき羽搔きをやると、そのたびに水があたりの板の間に散つた。——いつの間にか朝日が勝手の障子に當つて來た。

「君の水鳥はどうだい。」

咲子が外へ行つたときわたしはかう言つて宋一の顏を見た。何か熱が上皮にあるやうな顏をしてゐた。

「うちの水鳥はだいぶ馴れて晩になると寂しいからこつち向いて寢てくれと左う言ふよ。」

「なるほど。」

わたしは微笑つたが默つてゐた。宋一はすぐ「實は入齒がなかなか渉取らないんで困つてしまつた」左う言つて前齒の二本ない齒ぐきを出して見せた。齒を入れたら二つくらゐ若く見えるだらう。早く入れるといい、わたしはまじめな顏つきで左う言つた。

「うちの水鳥はね、君が來たらちよつと顏を合すのがきまりが惡いつて左う言つてゐた。」

「なるほど。」

「女といふものはふしぎな哀憐を感じさせるものだね、なにも彼も覺悟してゐるところが偉いよ、全く親が言つて聞かすわけではなし……それだのにすつかり諦らめてゐるところが偉いよ。」

「うむ、そりや僕も敬服してゐるところなんだ、だが我我はそりや女を買ひかぶつてゐる時代にさう言つて偉いつて言ふが、いまにだんだん偉くなくなるよ、しかし子供ができると女はもう一遍えらくなつて來るよ、しかし子供が五つくらゐになると又偉くなくなるんだ。」

「それぢやそのあとは死ぬまで偉くなれないのかな。」

「いや、亭主が死んでしまつたらもう一遍偉くなる女がゐるかも知れない、――しかしそれは些つと稀しい方かも知れない、たいがいその最後の偉さはないやうだね。」

「さうなると男の偉さは？」

「十人に一人くらゐかな、性的に男のえらさなんてものはないらしい、そこへ行くと女は何と言つたつて異つてゐる生きものだよ、學問なんぞで女はそんなに偉くなれないものだよ、學問なんて女の附味ぢやないか？　持つて生れて來たものにはとても勝てない。」

「うちの水鳥なぞは式をあげた翌くる日から最う一年も前からゐるやうに働いてゐるのには驚いた。あんなになれなれしくなれるものか知ら？」

「そこが女のいいところぢやないか、慣れるかはりそむくのも早いのが女だが、しかし咲子さんは少々ぼんやりさんだからなほいいよ、ぼんやりさんは内に何を考へたつて比斯的里にはならないんだから。」

水鳥は鹽のふちへ行つては羽根をひろげて立たうとする、――そのたびに飛沫が立つて移つてきた日かげに虹をかも

すのだが、こんな光景はこれを幸福と言つていいものだらう、若しわたしが最う十年も若かつたらこれをどんなに文章の枠をつくして書くかも知れない、人の事でありながらもわたし自身をそのなかに加え、そしてこの世のありさまを讃めたたへるのだ。しかし今はこんな光景をちよつと見てほめたたえるより、もつと純粋な氣もちでじつくり考へてから投て、これはこの世の一人づつが見る夢ではあるが、あんまり夢が短かすぎはしないか、こんな夢を人間はどうかして永い間心に持ち合ふことができまいかと、全くできもしないことを考へ疲れるのである。

「一そ温泉へでも行つたらどうだ、いまのうちにせいぜい出歩いた方がいいぜ。」

「うむ、入歯ができたら行かうと思つてゐるんだ。──この間もうとうと睡てゐると何か左の手がくすぐつたいのだ。氣をつけて見ると吹子が手の指をいぢくつてゐるんだ。なんだか悲しい氣がした。」

「なるほど。」

「あんまり感傷的になるやうな氣がしたから、その手をそつと引つ込めたら、それきりうとうとと睡てしまつた。あとであんなに引つ込めたりなんかしなければよかつたと思つた。」

「なるほどね。」

わたしは火鉢の灰をみつめながら、まだこの世にはかなりな夢が見残してあると思ひ、鳥渡あやぶく胸がせまるやうな氣がした。何んでもないことではあるが、こんなことにはわたしはちよいちよい泣かされるのだからと思つた。



死者の満足

小川未明

冬の薄日の下に、町は、浮き出されてゐた。ちやうど、ものゝ面にかゝつた埃が、白く、黄色な日の光りの裡に、浮いて見えるやうなものである。

道を挾んで、この町には、両側に、いろ／＼な商店が、軒を並べてゐた。そして、道の上を、人間の群が往来してゐる。殊に、日暮方になると、それが、忙しく、慌しげに見えたのであつた。

家具屋の主人は、つくねんと火鉢の前で、通りの方を向いて、何といふことなく考へ込んでゐた。やがて、彼は、思ひ出したやうに傍の臺の上に載せてあつた、一鉢の盆栽に眼を注いだのである。二三日前の夜、外に出し忘れて置いたので、細かな葉に霜がかゝつて、その葉が、花よりも、もつと真紅に、冷たく色づいてゐた。

彼は、細い枝の先きに至るまで、生命の宿つてゐる、そして、折つたら、青々として水を吹きさうな、蘖を潜めた、自然の活々とした姿を見ると、かうして、自分も、生きてゐて、それを楽しむことのできる悦びを、真に感ぜずにはゐられなかつた。

彼は、煙草の煙をゆるやかに、意識しながら吹いては、その煙の影が、かすかに消えて行くのを眺めてゐた。

「もうぢきに、春になる。そして、暖かになるだらう。さうするといろ／＼な樂しいことが湧いて來るのだ。どんな樂しいこと？ それは、いまはつきりと分らないが、なんでも町の遠くから、いろ／＼な物音が起る、その中から知らない幸福が産れて來るやうな氣もする……なんにしても、そこには強い喜びが感じられる。俺は、決して、死んではならない。死んでしまへば、もう、何もないのだ。あゝ、俺が病氣だといふのか、それは、いつも俺の心を暗くするのだ。明るく氣持をしようと思つても、病氣のことを考へると、たちまち、滅入つてしまふ。しかし、もう幾年もかうして、無事に生きてゐる。病氣といつても、それは、誰にもはつきりしたことが分るものでない。恐らく、たいして、惡るいのであるまい。

それにしても、かうして生きてゐる――俺は、何といふ仕合者であらう。あの强健な撲つても死にさうでなかつた、荒物屋の主人が、去年の秋チブスで死んだ。この春は、また角の豆腐屋の主人が、朝までぴん／＼してゐたものが晩には、腦溢血で死んだ。そして、俺は、まだこのやうに生きてゐる。どうして、死んだのが俺でなくて、あの人達だつたのだらう。なにか、そこに理由でもあるのだらうか。俺にだけはさういふことのないといふ、特別の理由があるのだらうか？」

彼は、このことを誰に向つてたづね、また、感謝していいか分らなかつた。彼は、これまで、毎日のやうに朝晩、佛壇に燈火を捧げて先祖の靈を拜んでゐるのであるが、そのお陰であらうかと思つた。たしかに、それも一つであらう。目に見えない、靈魂の加護を否定するだけの理由を彼は、別に持たなかつた。彼は、また、別に日頃から親切に診察して、藥をくれる醫者のSに對する恩義を忘れてはならないと知つたのである。

この時、家の前を、高聲で話をしながら、三四人の者が、ぞろ〱とかたまつて歩るいて行つた。

彼は、その人達を見た。町内の床屋の主人と、古着屋の主人に、後から行つたのが、藥屋の主人で、その他の人々等であつた。

また、衆議院の選擧日が間近くなつたので、彼等は、Ａ派の高山候補のために、運動員になつて働いてゐるのであつた。

床屋の主人は、そのために、自分は仕事を幾日も休んでゐた。藥屋の主人は、眼付のぎよろりとした大男であるが、この頃は、誰を相手にしても、一たび話が、選擧のことになると、更らに眼球を大きくして、兩方の腕をまくつて、悲憤慷慨の口調で滔々と政事を論じた。そして、相手を飽迄、自分の説に贊成せしめずには置かなかつた。また、古着屋の主人は、どこへでもゆつくりと上り込んで、腰にさした煙草入を拔いて、いつまでも話込むといふ風であつた。

床屋と古着屋は、いはゞ物好きから、こんなことをして騷ぐのが好きだといふのにとゞまつてゐたが、藥屋の主人は、それ以上に眞劍であり、熱度が高かつた。

「いつまでも、俺は、運動員になつて働いてゐるのでない。時節が至れば、俺自から候補に立つて出るだらう。いまは、その將來の地盤を作るためだ」

彼は、こんなことを傲語したこともあつた。しかし、町の人々は、候補者に立つのには、澤山な金と、人望とがなければならぬと信じてゐたので、誰も、この藥屋の主人の言ふことを眞に受けて聞いてゐる者はなかつた。

内氣で、あまり町内の人達とも付き合はない家具屋の主人は、心の中で、藥屋が嫌いでならなかつた。そして、かう思つた――

「いくら、いまの政治家に缺點が多く、批難される點はあつても、まだ、あの男よりは、いくらかましだらう。よくは、知らないが、あの男のやうに、理屈つぽく、こせ〳〵はしてゐまい。どこか金持だけに、太つ腹なところはあるものだ。もし、あの男のやうな者が、政治家になつたら、どうなるだらうか。俺が、かうして、一鉢の盆栽を眺めてゐるのにも、きつと有閑税などといふやうなものを課するだらう……」

ある時、藥屋は、近所の人達のゐる前で言つた。

「いよ〳〵普通選擧が實施になる――もう、金がなくともいゝ。たゞ實力のある人間が打つて出られる。さうなると、いまゝで隱れてゐた人物が現はれる譯だ。いつ、俺達が、どこから、どう打つて出ないものでもあるまい」

なかには、これを聞いて、たゞ理由なしに、さういふ時代の實現するのを怖れた者があつた。また、なかには、なんといつても金だ。金力がすべてを支配する間は、なんで金のない者が威張られるものか、そんなに考へるのは、空想に過ぎないと思つたものもあつた。また、なかには、いよ〳〵暴力の時代がやつて來さうな氣がする。さうなつたら、いつたい、いまゝでの秩序といふものは、何うなるのだらうと、徒らに疑心に囚へられる者もあつた。

家具屋の主人は、やはり、藥屋の言ふことに、理由なく、脅かされる一人だつた。彼は、藥屋を怖れるがために、反對の政黨の候補者に、投票をしようかとも考へた。

しかし、B派は、營業税や、所得税を、却つて重くした黨派である。そのことを思ふと彼は、どちらにも心からの好意が持てなかつた。

「結局、俺は、何うしたらいゝだらうか」

彼は、それが分らなかつた。

彼の心を重い憂愁が捕へた。自分の生活が他人の手によつて、何うにでも左右されるといふことに思ひ至つたからだ。たとへば、いつ市區改正や、道路擴張がなされないものでもない。自分は、いつまでもこゝにゐたいと思つても、その時は、どうすることもできない。さういふ風に考へると、何一つ、生活の安心を保證するものがない。自分で、自分の將來の生活を、きめることができないばかりでなく、自分の死んだ後、家族のものがどうなるかといふやうなことは、まるで闇の中を覗くやうなものであつた。

彼は、この時、頭をあげて、見るともなく往來を見た。すると、澤山な人間が、道を歩いてゐる。何も、昨日と變つたことでないが、町には、いろ〳〵な商店が、軒を並べてゐる。これを見た時に、彼は、不思議にも、慰められるやうな氣がしたのであつた。

「さうだ。どちらにしても、俺一人だけの問題ではないのだ。俺一人が、どう氣を揉んだつて、仕方のないことだ。また、この世の中を、誰の力でも、さう容易に、右に向け變へたり、左に向け變へたりされるものではないだらう。だが、他の人は、俺みたいに、くよ〳〵思つてゐるだらうか。どの顏を見ても、愉快さうに、何も、思つてゐさうでない……」

彼は、日光の陰つた、窓際に行つて、そこに、春の來るのを待つてゐる、ヒヤシンスの鉢を手に取り上げて、殆んど眼球に觸れるばかりにして、そのまだ短かい圓やかな葉先に宿つた、蕾のうす紫に見入つたのである。そして、指頭で、根許の土を輕く突いて、乾き加減をはかつて見た。彼は、かうして、自然に對して限りない愛を感じたのである。そして、そのことを、決して、自身は無意義であるとも思はなかつた。

夕日は、町の西空に沈んだ。ちやうど、赤いインキを、水面に滴らしたやうに、一點を中心にして、赤い色は、四方に、にじんだのであつた。彼は、その時刻になると、體中があつく、苦るしくなるのを覺えた。

「寒いからだらう」

彼は、檢温器を腋にはさんで、はかつて見た。電燈の光りで、水銀をすかして見ると、彼は、びつくりした。

その夜、醫者のSは、いつもの、しかめ面をして、家具屋へ鞄を下げてやつて來た。

「どんな具合ですか？　また、無理なことをなさつたのでせう」

醫者は、先達の樣子では、そんなに、急に熱の高くなる筈がないといふやうな顏付をした。この醫者は、愛想を言はなかつた。そのかはり、率直なところがあつて、患者は、却つて、好い感情を持つ場合の方が多かつた。

「いゝえ、この頃の寒さが應へたのです。で、先生、どこか、湘南か、房州へでも、冬の間だけ行つて見ようと思ひますが、どうでせうか」と、彼は、言つた。

「さう、あちらは、暖かにちがひありませんね」と、醫者は、顏に、微笑も浮べずに、眞面目に答へた。そして、頭を傾けてよく考へて見るような顏付をした。

「どこですか！　お行きなさるところは」と、醫者は、注意深い眼で主人を見ながら、たづねた。

「いゝえ、まだ、行くところをきめた譯ではないのです」

彼は、漠然として、たゞさう思つたゞけなことを告げた。

醫者は、靜かな口調で言つた。

「熱のある時分に、體を動かすことは、よくありませんね。まあ、お行きなさるにしても、熱が下つてからです。みんなは、たゞ暖かな處へ行きさへすればいゝやうに思ひますが、行つてからの生活が、遽かに變つたり、また、神經をいらだたせるやうなことがあつては、なんにもなりません。それに、醫者ですね、餘程、信用の置ける醫者が、附近にな

い限りは、あなたの體では、見合せなければなりません。こちらにゐらしても、安靜になさつてゐれば、いまのところ、決して、悪いといふ方ではなく、だん／＼落着いて來てゐるのですから……」

主人は、醫者の話に、耳を傾けてゐるうちに、いつしか、暖かな地方へ行つて見たいといふやうな考へは、うすれてしまつた。そして、波打際に、白梅が咲いて散つてゐたり、また岩鼻に、紅い椿の花が咲いてゐる光景を、この二三日來空想したことが、畢竟空しくなつてしまつたと知つても、この醫者の言葉を信頼して、それを惜しまなかつた程であつた。

「先生、この熱は、ぢきに下るでせうか？」

彼は、不意に、不安を感じたのであつた。自分ながら、體の中に起つた、變化は分らなかつたからだ。

醫者は、ちよつと、眉のあたりを曇らせた。しかし、言葉の調子は、いつもの如く、落付いてゐた。

「エルボンを上げて見ませう。たいしたことはないと思ひます」

「それは、お藥ですか？」

「スキツルから來た、解熱の新藥です」

醫者は、明日、また來るといつて、歸つて行つた。

熱は、つゞいて降らなかつた。そして、湯に入られるやうになるのは、またいつのことであるか分らなかつた。醫者に許されて、一週間ばかり前であつたが、湯に入つた、その時の記憶が、二たび取返しのつかない、得難い經驗であつたやうに感じられた。ちやうど午後の寂時頃で、自分の他には入つてゐる客も少なく、冬の日とは思はれない程の、暖かな、長閑な日の光りが、高窓から射し込んで、湯のよどんだ、湯ぶねの中にまで落ちて來てゐた。

明るい光線は、血の氣の乏しくなつた、白い體を、心持ち圓味をつけてふわ〳〵と浮かして見せたのである。彼は、足先から、手の指さきまで上から水量を透して、しばらく見入つてゐた。

「せめて、これ程に肥つてゐたら」と、自分ながら錯覺をば羨やんでゐた。

湯から出ると、一時のやうな健康さが、もはや、腕にも、足にも、宿つてゐないのを知つた。しかし、それでも、血が勢よくめぐると見えて、皮膚の色が、雨に褪せた、櫻の花瓣ほどに、色づいてゐた。彼は、何となく、もう一度、昔のやうな體になれるやうな氣がした。

彼は、炬燵に當りながら、その時の喜びを思ひ出してゐた。家の外は、日が蔭つて、店頭は暗く、寒い風が、吹いてゐる。

午後になると、S醫者は、いつもの如くやつて來た。そして、昨日と同じやうに、鞄を坐の傍に置いて話をはじめた。

「あなたは、どちらに、ご投票をなさいますか」と、醫者は、決して、自分は、それを口外するものでないといふやうな、謹みのある、態度で言つた。

「さあ、私は、たとへ、どちらになつても、私達の生活に、あまり變りがないと思ひますから、棄權するつもりでゐます」と、彼は、青白い指頭で、火鉢の縁を撫でながら答へた。

醫者は、さう聞くと、ちよつと反身になつた。

「それは、いけません。さういふ考への人が多いからこそ、世の中が、いつになつても進歩しないのです。A派にせよ、B派にせよ、それ〳〵立派な主義がある上は、どちらかに味方しなければなりません。しかし、まあ、さうはいひますものゝ、その主義が、實現される曉といふのは、遠い未來です。いまのところ、人格の高い人物を、どちらにせよ、議

會へ一人でも餘計に送るといふことが肝心です」

「人物からいつて、野田さんと、高山さんと――どちらでせうか」

「どちらも立派な人物でせう。薬屋さんや、床屋さんは、高山派で、大車輪の運動をなさつてゐますが、私と野田は、もう多年の圍碁友達でして、何かにつけて、よくあの人の人物を知つてゐます。まことに、温厚な、潔白な、謙遜な人格です。醫者の私が、患家へまゐつて、かた〴〵誘説をするやうに、世間へ聞えては、まことに穏當でありませんが、友達としてゞす。どうか、あなたが一票をいれてくだされば嬉しいのです」

醫者は、診察にかゝる前に、鞄から聴診器を取り出して、手で、そのしなやかな黒い蛇のやうな革紐を解いたり、また、からめたりしながら言つた。

主人は、この時、野田候補について、それ以上に深く知りたいとも思はなかつた。なぜなら、その人格に對する敬慕の念よりは、薬屋や、床屋が、彼に與へた、暴慢な感じに對する反抗心の方が強かつたからだ。それがために、たとへ野田といふ人でなくても、彼等と反對派の候補に立つた人ならば、誰でもよかつたのだ。一時は、棄權しようかと思つたのが、醫者に、かう頼まれると、彼は、營業税や、所得税を重くした政黨と知るにかゝはらず、B派に、一票を入れる氣になつた。しかし、彼は、すぐに、それを肯はなかつた。醫者に向つて、考へて見ようと答へたのみだ。

選擧日が、いよ〳〵近づいたのであつた。ある日のこと、黒い手革の襟巻をして、金縁の眼鏡をかけた、野田夫人が、家具屋の店さきへはいつたのである。ちやうど、主人が、そこに居合せた。すると、夫人は、恭しく、丁寧過ぎる程、頭を低く下げて、挨拶をした。

「最初、もつと人格の高いお方があるのだからといつて、野田は、ご辭退申したのですけれど、つひ皆様から推薦され

ましていよ〳〵候補に立ちましたのでございますが、何分にも、あちらには、お金も澤山おありなされば、また、人望もおありなさる高山さんですから、こちらには、勝味は、少しもないのでございます。しかし、もう、今となつては、どうにもなりませんので、たゞ皆様のお力によつて、最後まで戰つて見るより途がないのでございます。それに、噂では、高山さんのうしろには、鐵士の方が、澤山ついておゐでなさるとかで、選戰は、十分に行き渡つてゐますさうで、いくら戰つても、十のものは、八分まで、こちらに勝味はないとおつしやる方もありますが、こちらは、輿論に訴へて、正面から、できるだけ戰つて見るつもりでゐます。野田は、もしか負けたら、皆様に對して面目がないと言つて、この頃は、それに毎日徹夜がつゞきますので、神經衰弱にかゝつてゐますので、晝間になるとぼんやりしてしまふのです、妾が、代はつてお願に上りました譯でございますが、何分にもよろしく、お力添へ下さるよう折入つて、お願いたします」

曾て、夫人は、しば〳〵この家の前を通つたことがあつた。その時分は、無關係だつたので、見向きさへもしなかつた。しかし、それは、冷淡であつたといふより、必要がなかつたのだ。主人は、たゞ、默つて、挨拶をするより仕方がなかつた。彼は、世間が、そのまゝ芝居であるやうに思はれたのであつた。夫人の歸つた後で、

「俺は、まだ、あの醫者に、承諾をした覺えはなかつたのだがなあ……」と、自分に、言つて、訝かしく感じた。

彼女は、店を出る時分に、端書大の紙に「野田義正（ノダヨシマサ）」と、赤色に、活字で刷つた、名刺を一束ほど置いて行つた。

彼は、その名刺を手に取りあげて、何のために、こんなに、澤山置いて行つたかと考へたのである。彼は、これを見てゐるうちに、命令に近い、一種の強請を感じた。

「どうか、これを配つてくれるように……」

彼は、さう言つてゐるやうに聞えた。それは、不快だつた。寧ろ憎々しかつた。

「馬鹿にしてゐる。ほんたうに、馬鹿にしやがる！」

彼は、あの女の圖々しさに呆れた。「俺が、ほんたうに、尊敬をしてゐるとでも思つてゐるのか？」から、思つて、皮肉を感じた。寧ろ憤りから、その名刺を寸々に引裂いて、屑籠の中に捨ててしまつた。

選擧日の前夜であつた。

「いよ／＼明日になりましたが、お願いたします。何なら、俥をよこしませうか？」と、醫者が、來て言つた。

「承知いたしました。近いのですから、歩いてまゐります」と、家具屋の主人は、答へた。

その夜から、天氣模樣は、變りかけてゐたが、いよ／＼翌日の朝になると、雪になつた。當日は、近來にない寒さで、北風が荒んで、雪を捲いて、往來を掠めてゐた。すべての建物は、眞白であつた。電柱も、白かつた。

「寒いから、體にさはるといけない。よしたらどう？」と、老母が、言つた。

「およしなさいまし」と、彼の細君が言つた。

彼は、醫者との約束があつた。もう一つには、藥屋や、床屋に對して、自分は、意志の自由から、飽迄、反對の行動を取り得るものだといふ、自負心から、彼は、襟卷で、顏を深く包んで、俥にも乘らず、雪を冒かして出かけた。

選擧場の前は、人の群で混雜してゐた。しかも、雪混りの風が、烈しく吹きつけてゐたので、人々は洋傘で顏を隱くしたり、外套の襟を立て、顏を埋めてゐたりしたので、彼は、內心顏を合はせることを怖れた、藥屋にも、床屋にも、遇はずに選擧場に入ることができた。そして、彼の素志であつた、彼等と反對に立つた候補者に、一票をいれて急いで、家に歸つた。

彼は、途中、惡寒を覺えたので、家に歸ると、すぐに、炬燵にはいつて床についた。けれど、その日の午後に、ぐつと熱が高かつた。

熱は、夜中になつても、下らなかつた。これまで、夜中には、熱が大抵降るのであつたが、……そして、いまゝでにない、胸の苦るしさを感じたのである。

老母と、細君とは、口々に、S醫者を惡るく言つた。

「病人であるから、行く〱といつても、止めるのがほんたうだのに、醫者の分際でありながら、知つてゐる者のためだからといつて、この寒い日に病人に行つてくれいと頼むものがあらうか」

彼は、耳に何を聞いても、これについて、口をきかなかつた。老母と、細君は、二人の意見で、彼に相談をせずに、この日限りS醫者の來診を斷つた。そして、他の醫者を呼んだのである。けれど、熱は、翌日になつても下らなかつた。

「まだ、選擧の結果は、分らないか？」と、彼は、臥ながら、かすかな聲で、たづねた。

「選擧どころの話ぢやないでありませんか。あんな近頃にない、寒い日に外へ出て行かなけれや、こんなにならなかつたのです。いまになつては、とりかへしがつかないぢやありませんか」と、まだ年の若い、細君は、さも怨めしさうに言つた。結婚してから、二三年になるけれど、彼女には、まだ子供がなかつた。

やつと、三日目の朝、選擧の結果は、分つたのである。彼の味方した、野田は、强敵の高山を倒して當選したのであつた。

「野田さんが、當選したか？――」

彼は、床の中に臥ながら、かう言つて、感慨に打たれた。それには、一生のうちに、曾て知らなかつた喜びが感じら

れた。動機はいかやうであらうとも、公衆のために投げられた自分の力が、はじめて役立つたといふことを、偶然の機會は、彼に、かく知らしたのである。彼は、心のうちで憎んだ者を負かすことができた。彼にとつては、大きな仕事でなければならなかつた。自分一人の力では、到底できないことを多くの人といつしよであつたために、なされたのだ。そして、その大きな力の一部分に、やはり自分の力が加はつてゐるといふ一種の感激に他ならなかつたのだ。歡喜も、憂愁も、いまゝでのすべての鍵がそこにあるやうな……。彼は、いまゝでに悟らなかつたものを悟つた。病氣は、そのために重くなつたけれど、誰をも怨む氣になれなかつた。たゞ、彼の心には、滿足とかすかな希望さへあつた。また、彼は、感傷的となつて、流れ出る涙の枕を濕らすのに委かせてゐた。

それから、數日の後であつた。黑い毛革の襟卷をした、金緣の眼鏡をかけた、野田夫人は、きらびやかに、着飾つた姿を、二たびこの家の店さきに現はした。そして、彼女は、鄭重に、當選の禮を述べたのである。けれど、その態度は、どこにも、しんみりしたところはなく、前の如く謙遜には見受けられなかつた。

取次に出た、家具屋の細君は、これに對して、先方で頭を下げれば、こちらでも頭を下げるだけの、挨拶はしたが、夫人が出て行く時に、冷かな、蔑すむやうな眼付で、後姿を見送つてゐた。

主人は、ついにそれ以後、床から起き上らずに、ヒヤシンスの花の咲く季節前に、この世をば去つてしまつた。

——一九二四、一作——

十年間貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ

煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸へぬ、ゞふ明かなる事實に聞け…

實業之日本代理部と榮川主人

震災前は東京日比谷でしたが一時表記の處に假營業始め候間御用命の程願上候

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日は私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主事は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて吳れました其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつか他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞贊下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて兩び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。何うか誰方も御使用の上**ニコチン**の中毒の害からのがれて下さいまし。

特徴

外見少も煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人參の精氣を含有するを以て朝鮮人參が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼たる甘快味とは輕き刺戟と快感とを與へ口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」の毒を完治すべし

カロット金貳圓 百日分

パイプ（水牛製 銀）金五十錢　送料（内地十八錢 外朝樺四十五錢）
同（模様入）金七十錢
同（ベークライト）（象牙サック入）金壹圓五十錢　代金引替（内地卅錢 朝樺五十五錢）

◎パイプは右三種の内御希望の品御書添願候◎

東京府下大森不入斗四五一

榮川堂

東京振替五一一九一一

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候（滿州支部は代金引替御斷り）



歡喜の象徵

燈火を明くするは歡喜の象徵であります。
我々國民渴仰の的であります　攝政宮殿下の御慶事は已に目睫の間に迫つて居ります。この千載一遇の御慶事も大震火災の爲め殿下の御仁慈の大御心から出來得る限り質素に執り行はせらるゝとの趣を洩れ承つて居ります。
然しながら實に溢れんとして居る我々國民の歡喜は、何らかの形式に於て表現せられねばならぬのであります。
その表現、その象徵は最も進步的にして實質的なる

マツダ瓦斯入電球

の使用にある事と痛感するのであります、重ねて申しますが、燈火を明るくするは歡喜の象徵であります。
我々はせめて大いに燈火だけでも明くして、この盛事を迎へる事を我々國民にお薦めしたいものであります。

東京電氣株式會社

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區通神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　新町通七條南入　大盛社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◎定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期の臨時增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
帝國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　信録社　一星社

送金注意

一　誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一　振替貯金　口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり
一　郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一　代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一　集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但し
・集金郵便の申込を受くるも拂金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一　金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料）
一　金拾圓迄　金八錢（及送料共）
一　中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一　受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十三年一月十五日印刷納本
大正十三年二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
發行所　中央公論社
電話　長丸ノ内三〇二（當分不通）　牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.